

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第10集

深沢遺跡
前田原遺跡

(縄文時代後期配石遺構の調査)

1987

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

深沢遺跡・前田原遺跡 正誤表

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
序	15	鉄	鉄
例言	8	鉄	鉄
15	25	大型配石4基	中型配石4基・大型配石2基
15	27	飾 鐘具	垂
46	13	角召	刃
46	25	撥形	撥
62	23	一郭	一面
79	35	撥形	撥
92	23	3cm	3m
93	4	大型配石遺構	大型配石
254	26	36基	37基

資料	群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-310
		14
No. 98-4887	平成10年 5月13日	(7)

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第10集

深沢遺跡 前田原遺跡

(縄文時代後期配石遺構の調査)

1987

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社



1 深沢遺跡配石遺構全景（東より）



2 配石遺構東端に位置する大型配石（20号配石、北より）



1 配石遺構と周辺土坑より出土した縄文土器



2 配石遺構と周辺土坑より出土した特殊遺物

序

上越新幹線の建設によって、群馬県と首都東京は1時間以内で結ばれるようになり、大きな影響を及ぼしつつあります。路線は群馬県南部では高架橋で、北部ではほとんどがトンネルとなります。北部の月夜野町に上毛高原駅が建設され付帯設備を含めて種々の建設工事がなされました。

本地区は縄文時代から近代にいたる遺跡地でありますので、工事に先行して埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。調査によって縄文中期の竪穴住居及び後期の配石遺構が検出されました。隣接地域との広い交流の存在が想定される資料であります。配石遺構の一部は移築して保存されることになり、駅の広場近くに移されました。現代の粋を集めた建造物の中に縄文時代が蘇りました。

発掘調査は昭和54年に群馬県教育委員会が実施し、整理事業は昭和62年に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行いました。

発掘調査並びに整理事業実施にあたりご尽力を賜りました日本鉄道建設公団、東日本旅客鉄道株式会社をはじめとする関係各位に感謝申し上げます。また、調査、整理にあたり厳寒酷暑を克服して報告書完成に至りました皆様の労をねぎらうと共に本書が原始社会究明の資料として広く活用されるよう望んで序と致します。

昭和62年12月1日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

- 1 本書は上越新幹線建設事業に伴う事前調査として行なわれた、^{ふかさわ}深沢遺跡と^{まえたばら}前田原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 深沢遺跡は利根郡月夜野町大字月夜野字深沢に所在し、前田原遺跡は同字前田原に所在している。
- 3 深沢遺跡の発掘調査は予備調査を昭和51年10～12月に実施し、本調査を昭和54年4月～11月に実施した。前田原遺跡の発掘調査は予備調査から本調査を昭和53年4月～5月に実施した。
- 4 両遺跡の整理事業は昭和61年1月～12月に実施した。
- 5 両遺跡の発掘調査は日本鉄道建設公団の委託を受けて群馬県教育委員会（文化財保護課）が実施し、整理事業は群馬県教育委員会を通じ東日本旅客鉄道株式会社の委託を受けて（財団法人）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 6 発掘調査担当職員は以下の通りである。
深沢遺跡 予備調査 文化財保護主事 佐藤耕志 調査員 横山 巧
本調査 文化財保護主事 下城 正 西田健彦 調査員 新井順二
前田原遺跡 予備調査・本調査 文化財保護主事 下城 正 佐藤耕志 調査員 原 雅信
- 7 整理事業担当職員は以下の通りである。
事務担当職員 常務理事 白石保三郎 事務局長 井上唯雄 管理部長 田口紀雄 調査研究部長 上原啓巳 庶務課長 定方隆史 調査研究部第2課長 桜場一寿 庶務課主事 国定 均 主事 笠原秀樹 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏
整理担当職員 主任調査研究員 下城 正 調査研究員 女屋和志雄 嘱託員 坂庭常盤 補助員 山田キミ子 平野照美 小林幸枝 渡辺フサ枝 光安文子 阿部幸恵 杉本万里子
- 8 本書の執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ章 神保侑史（群馬県教育委員会文化財保護課第2係長）第Ⅱ章 3 西田健彦（群馬県教育委員会文化財保護課主任）第Ⅳ 3—1—③ 山口逸弘（当事業団 調査研究員）3—1—④、3—2—④、3—4—⑨ 中東耕志（当事業団 主任調査研究員）3—2—④・⑤、3—3—③・④、3—4—④～⑥ 丸山公夫（当事業団 調査研究員）他は下城と女屋が協議して分担執筆した。
- 9 本書の作成において石器の石質鑑定を飯島静男（群馬県立歴史博物館 嘱託員）氏に依頼し、配石遺構出土人骨の鑑定を宮崎重雄（群馬県立前橋第二高等学校 教諭）氏に依頼した。
- 10 本書の作成において日本大学 鈴木保彦氏、玉川大学考古学研究所 戸田哲也氏、神奈川県教育委員会 山本暉久氏の各氏に御指導を賜った。記して感謝の意を表わす次第である。
- 11 発掘調査においては地元月夜野町教育委員会関係者ならびに小林雅男・原沢新平・原沢貞二・樋口大二・樋口秀治・山本ハナの各氏に多大なる御協力を賜った。また、発掘調査に参加願った地元の人達にも多大なる御協力をいただいた。記して感謝の意を表わす次第である。
- 12 両遺跡の資料については群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本書は、深沢・前田原の2遺跡をまとめており、各遺跡の調査に至るまでの経過を第I章にまとめたほかは、深沢遺跡を第II章～第IV章に、前田原遺跡を第V章にまとめた。
- 2 遺構番号については、調査時の番号を使用することを原則としたが、整理の都合上で本書作成段階において一部修正、改変した遺構がある。A区～D区までの石器観察表中には、この整理途上で修正、改変された遺構名称・遺構番号が遺物の台帳記載の関係でそのまま使用されている。
- 3 C区配石遺構の配石番号にアルファベットの大文字が付されているものがあるが、これは調査段階で石棺状配石に付したもので、他の配石に付した算用数字と同様の意味である。また、算用数字の後にアルファベットの小文字を付した配石があるが、同一番号であっても前後関係等を表わすものではない。
- 4 本報告で「山石」とは大峰山麓に産する「溶結凝灰岩」のことであり、ローム層中や現地表に多く露頭している。また、「板石」とは安山岩の板状節理したものであり、配石の一部に用いられている。
- 5 遺構および遺構図の方位は磁北を基準としており、月夜野町周辺の磁針方位は西偏約7°00′（国土地理院発行2万5千分の1 猿ヶ京による。）である。
- 6 遺構図の縮小率は、全体図を1/500（付図）、各区の全体図を1/200、住居跡、土坑、配石を1/60、掘立柱建物跡を1/80、溝を1/80、多孔石を1/40とした。また、縮小率については図中にスケールをもとに記載した。
- 7 遺構図に用いたスクリーントーンは以下の内容を示す。



山 石



焼 土

- 8 遺物図に用いたスクリーントーンは赤色塗彩を示す（第78・131図）
- 9 掘立柱建物遺構図中の表記と数値は以下の内容を表わす。
例 (0.30) () は柱穴の径を表わす。数値の単位はm。
-0.35 - は柱穴の深さを表わす。数値の単位はm。
[3.60] [] は柱穴の心芯間の柱間を表わす。数値の単位はm。
- 10 遺物の観察については、縄文時代の土器がA区 山口逸弘、B区、C区、D区 丸山公夫、石器が下城 正、平安時代の遺物が下城、中・近世陶磁器を大江正行が行なった。
- 11 深沢遺跡からはコンテナバットに約120箱の遺物が出土したが、図示した遺物量は縄文時代の遺物 1,461点（土器・土製品 704点 石器・石製品 757点）、平安時代の遺物 14点、中・近世の遺物 32点があり、ほかに弥生時代の遺物 4点、古墳時代の遺物 1点がある。
- 12 本書における遺物番号は、縄文時代の土器・土製品、石器・石製品で各々通番とし、挿図の番号と同一であり、石器・石製品は観察表にも付した。挿図の中で石鏃については、番号に○を付けて遺構番号を示した。観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重量がg、例外をkgとした。

13 遺物の縮小率は、縄文時代の石鏃、石錐、石匙、飾垂具等が $\frac{1}{3}$ 、石錘等が $\frac{1}{2}$ 、石斧、剥片石器、磨石、石核等が $\frac{1}{3}$ 、多孔石、丸石、石皿等の大型のものが $\frac{1}{3}$ を原則とし、特に大型のものについては例外として $\frac{1}{2}$ とした。図中にスケールと縮小率を記載した。




平安時代の遺物は $\frac{1}{3}$ 、中世・近世の陶磁器、石製品が $\frac{1}{3}$ 、金属製品は煙管、銭貨が $\frac{1}{2}$ を原則とし、図中にスケールと縮小率を記載した。

14 縄文時代の石器の図表現は、縦位の直線について「使用による擦痕」、横位の鎖線を「柄の装着による磨耗痕」として示した。

15 平安時代の土器の図表現は、破線--は器面の稜線を表わし、一点鎖線--は回転性のナデ。ロクロ痕跡を表わし、細線-はヘラ削りおよびヘラナデの稜線を表わしている。

16 陶磁器の図表現としては、スクリーンのあるものは「鉄釉」の施釉を表わす。釉境については、二点鎖線、ロクロ痕については一点鎖線で表わした。

17 羽口の図表現として使用したスクリーントーンは、以下の内容を表わす。

 炎のかかった部分  コークス状の部分  ガラス質の部分

18 前田原遺跡からはコンテナバットに3箱の量の遺物が出土したが、図示した遺物は縄文時代の遺物 23点（土器 15点、石器 8点）、平安時代の遺物 15点がある。

遺物番号は、土器、石器で各々を通番としている。

19 遺構、遺物の縮小率は深沢遺跡と同様である。

20 縄文時代の土器型式に用られる数字については、原文のままとし、あえて統一をしなかった。

目 次

序

例 言

凡 例

第 I 章	深沢・前田原遺跡の調査に至る経過	1
第 II 章	深沢遺跡の調査の方法と経過	3
1.	調査の方法	3
2.	調査の経過	4
3.	深沢遺跡の配石遺構の移築について	5
第 III 章	深沢・前田原遺跡の立地と歴史的環境	7
第 IV 章	深 沢 遺 跡	13
1.	遺跡の概要	15
2.	基本土層	16
3.	縄文時代の遺構と遺物	18
1	A 区	18
①	概 要	18
②	住 居 跡	18
③	グリット出土の土器	24
④	グリット出土の石器	46
2	B 区	62
①	概 要	62
②	土 坑	62
③	土坑出土の土器	64
④	グリット出土の土器	73

⑤ 土坑出土の土器	73
⑥ 多孔石	87
3 C 区	92
① 概要	92
② 配石遺構	93
③ 配石出土の土器	124
④ グリット出土の土器	134
⑤ 配石遺構出土の石器	137
⑥ グリット出土の石器	158
4 D 区	179
① 概要	179
② 溝状遺構	179
③ 土坑	183
④ 土坑出土の土器	191
⑤ ピット出土の土器	195
⑥ グリット出土の土器	195
⑦ 土坑出土の石器	211
⑧ ピット出土の石器	211
⑨ グリット出土の石器	211
4. 平安時代の遺構と遺物	225
① 概要	225
② 住居跡	225
5. 近世の遺構と遺物	229
① 概要	229
② 掘立柱建物跡・柱列	229
③ 井戸	242
④ A～E区のグリット出土の弥生時代～近世の遺物	243
6. まとめ	247
① 深沢遺跡周辺の縄文時代の動向	247
② 深沢遺跡出土の遺物について	248
③ 各区の遺構について	254

④ C区配石遺構について……………	256
⑤ 近世の掘立柱建物跡について……………	262

C区20号配石出土の人骨について……………	263
-----------------------	-----

第 V 章 前 田 原 遺 跡

1. 調査の方法と経過……………	1
① 調査の方法……………	1
② 調査の経過……………	1
2. 遺跡の概要……………	2
3. 基本土層……………	2
4. 縄文時代の遺構と遺物……………	5
5. 平安時代の遺構と遺物……………	7
6. 近世の遺構	
① 掘立柱建物跡……………	10
② 土坑……………	16
③ 溝……………	17
7. 小 結	

図 版 目 次

巻頭図版	1-1	深沢遺跡配石遺構全景（東より）	図 版	22-2	A区グリット出土石器（4）
	2	配石遺構東端に位置する大型配石（20号配石、北より）	図 版	23-1	A区グリット出土石器（5）
巻頭図版	2-1	配石遺構と周辺土坑より出土した縄文土器	図 版	2	A区グリット出土石器（6）
	2	配石遺構と周辺土坑より出土した特殊遺物	図 版	24-1	A区グリット出土石器（7）
			図 版	2	A区グリット出土石器（8）
			図 版	25-1	B区全景（南より）
			図 版	2	B区全景（北より）
			図 版	26-1	B区遺構確認状態とB区北面傾斜面の山石の転石（南より）
			図 版	2	B区北面傾斜面にある多孔石（北東より）
			図 版	27-1	B区4号土坑（東より）
			図 版	2	B区5号土坑（東より）
			図 版	3	B区10号土坑（東より）
			図 版	28-1	B区13号土坑（南より）
			図 版	2	B区14号土坑（南より）
			図 版	3	B区16・17号土坑（北より）
			図 版	29-1	B区18号土坑（西より）
			図 版	2	B区19号土坑（南より）
			図 版	3	B区20号土坑（南より）
			図 版	30-1	B区22号土坑（南より）
			図 版	2	B区23号土坑（南より）
			図 版	3	B区27号土坑（西より）
			図 版	31-1	B区32号土坑（北より）
			図 版	2	B区35号土坑（北より）
			図 版	3	B区43号土坑（東より）
			図 版	32-1	B区土坑出土土器
			図 版	2	B区土坑出土石器（1）
			図 版	33-1	B区土坑出土石器（2）
			図 版	2	B区土坑出土石器（3）
			図 版	34-1	B区土坑出土石器（4）
			図 版	2	B区柱穴出土土器
			図 版	35-1	B区グリット出土土器（1）
			図 版	2	B区グリット出土土器（2）
			図 版	36-1	B区グリット出土石器（1）
			図 版	2	B区グリット出土石器（2）
			図 版	37	C区配石遺構全景（東より）
			図 版	38-1	C区配石遺構（南より）
			図 版	2	C区配石遺構（南西より）
			図 版	39-1	C区配石遺構東縁部の大型配石（東より）
			図 版	2	C区配石遺構南縁部（南東より）
			図 版	40-1	C区配石遺構確認面（南より）
			図 版	2	C区配石遺構確認面（東より）
			図 版	41-1	C区配石遺構（南西より）
			図 版	2	C区配石遺構中央部と中央土坑（西より）
			図 版	42-1	C区配石遺構中央土坑の土器出土状態（東より）
			図 版	2	C区配石遺構下部より出土した1号の埋甕（南より）
			図 版	43-1	C区20号の配石（南東より）
			図 版	2	C区8b号配石（北西より）
			図 版	44-1	C区18号配石（南東より）
			図 版	2	C区19号配石（南より）
			図 版	45-1	C区21号配石（南より）
			図 版	2	C区22号配石確認面（南より）
			図 版	46-1	C区21・22号配石（南西より）
			図 版	2	C区22号配石の蓋石の状態（南西より）
<h2>深沢遺跡</h2>					
図 版	1	深沢・前田原遺跡の調査の航空写真（昭和49年撮影、約1/4000）	図 版	27-1	B区4号土坑（東より）
図 版	2	深沢遺跡の地形（航空写真、約1/2000）	図 版	2	B区5号土坑（東より）
図 版	3-1	予備調査時の状況（D区、北西より）	図 版	3	B区10号土坑（東より）
	2	本調査開始時の状況（C区、南西より）	図 版	28-1	B区13号土坑（南より）
図 版	4-1	発掘作業風景（1）（B区、北より）	図 版	2	B区14号土坑（南より）
	2	発掘作業風景（2）（C区、南西より）	図 版	3	B区16・17号土坑（北より）
図 版	5-1	発掘作業風景（3）（C区、南より）	図 版	29-1	B区18号土坑（西より）
	2	発掘作業風景（4）（C区、西より）	図 版	2	B区19号土坑（南より）
図 版	6-1	A区全景（北より）	図 版	3	B区20号土坑（南より）
	2	A区グリット設定状況（北東より）	図 版	30-1	B区22号土坑（南より）
図 版	7-1	A区グリット土層断面（1）（I区0-16グリット西壁、東より）	図 版	2	B区23号土坑（南より）
	2	A区グリット土層断面（2）（I区0-12グリット西壁、東より）	図 版	3	B区27号土坑（西より）
図 版	8-1	A区1号住居跡全景（東より）	図 版	31-1	B区32号土坑（北より）
	2	A区1号住居跡の炉の検出状態（上部に丸石が載る。南より）	図 版	2	B区35号土坑（北より）
図 版	9-1	A区1号住居跡遺物出土状態（1）（東より）	図 版	3	B区43号土坑（東より）
	2	A区1号住居跡遺物出土状態（2）（北東より）	図 版	32-1	B区土坑出土土器
図 版	10-1	A区1号住居跡出土土器（1）	図 版	2	B区土坑出土石器（1）
	2	A区1号住居跡出土土器（2）	図 版	33-1	B区土坑出土石器（2）
図 版	11-1	A区1号住居跡出土石器（1）	図 版	2	B区土坑出土石器（3）
	2	A区1号住居跡出土石器（2）	図 版	34-1	B区土坑出土石器（4）
図 版	12-1	A区グリット出土土器（1）	図 版	2	B区柱穴出土土器
	2	A区グリット出土土器（2）	図 版	35-1	B区グリット出土土器（1）
図 版	13-1	A区グリット出土土器（3）	図 版	2	B区グリット出土土器（2）
	2	A区グリット出土土器（4）	図 版	36-1	B区グリット出土石器（1）
図 版	14-1	A区グリット出土土器（5）	図 版	2	B区グリット出土石器（2）
	2	A区グリット出土土器（6）	図 版	37	C区配石遺構全景（東より）
図 版	15-1	A区グリット出土土器（7）	図 版	38-1	C区配石遺構（南より）
	2	A区グリット出土土器（8）	図 版	2	C区配石遺構（南西より）
図 版	16-1	A区グリット出土土器（9）	図 版	39-1	C区配石遺構東縁部の大型配石（東より）
	2	A区グリット出土土器（10）	図 版	2	C区配石遺構南縁部（南東より）
図 版	17-1	A区グリット出土土器（11）	図 版	40-1	C区配石遺構確認面（南より）
	2	A区グリット出土土器（12）	図 版	2	C区配石遺構確認面（東より）
図 版	18-1	A区グリット出土土器（13）	図 版	41-1	C区配石遺構（南西より）
	2	A区グリット出土土器（14）	図 版	2	C区配石遺構中央部と中央土坑（西より）
図 版	19-1	A区グリット出土土器（15）	図 版	42-1	C区配石遺構中央土坑の土器出土状態（東より）
	2	A区グリット出土土器製品	図 版	2	C区配石遺構下部より出土した1号の埋甕（南より）
図 版	20-1	A区グリット出土土器と土製品	図 版	43-1	C区20号の配石（南東より）
	2	A区グリット出土土器（16）	図 版	2	C区8b号配石（北西より）
図 版	21-1	A区グリット出土石器（1）	図 版	44-1	C区18号配石（南東より）
	2	A区グリット出土石器（2）	図 版	2	C区19号配石（南より）
図 版	22-1	A区グリット出土石器（3）	図 版	45-1	C区21号配石（南より）
			図 版	2	C区22号配石確認面（南より）
			図 版	46-1	C区21・22号配石（南西より）
			図 版	2	C区22号配石の蓋石の状態（南西より）

図版	47-1	C区26号配石 (南西より)	2	C区配石遺構出土石器 (11)	
	2	C区27号配石 (北東より)			
図版	48-1	C区28号配石 (北より)	図版	76-1	C区配石遺構出土石器 (12)
	2	C区30号配石 (南東より)	2	C区配石遺構出土石器 (13)	
図版	49-1	C区31号配石 (東より)	図版	77-1	C区配石遺構出土石器 (14)
	2	C区20号配石に切られた33号配石 (南東より)	2	C区配石遺構出土石器 (15)	
図版	50-1	C区35号配石 (南東より)	図版	78-1	C区配石遺構出土石器 (16)
	2	C区A(左)・C(右)号配石 (南東より)	2	C区配石遺構出土石器 (17)	
図版	51-1	C区D号配石 (南東より)	図版	79	C区配石遺構出土石器 (18)
	2	C区E号配石 (南東より)	図版	80	C区配石遺構出土石器 (19)
図版	52-1	C区G号配石 (北東より)	図版	81	C区配石遺構出土石器 (20)
	2	C区H号配石 (南西より)	図版	82-1	C区配石遺構出土石器 (21)
図版	53-1	C区10号配石 (南西より)	2	C区配石遺構出土石器 (22)	
	2	C区10号配石確認状態 (北東より)	図版	83-1	C区グリット出土石器 (1)
図版	54-1	C区16a号配石 (北東より)	2	C区グリット出土石器 (2)	
	2	C区16a号配石確認状態 (北東より)	図版	84-1	C区グリット出土石器 (3)
図版	55-1	C区11号配石 (南より)	2	C区グリット出土石器 (1)	
	2	C区11号配石確認状態 (北東より)	85-1	C区グリット出土石器 (2)	
図版	56-1	C区20a号配石 (北より)	2	C区グリット出土石器 (3)	
	2	C区20a号配石 (西より)	図版	86-1	C区グリット出土石器 (4)
図版	57-1	C区20a号配石上面確認状態 (南より)	2	C区グリット出土石器 (5)	
	2	C区20a号配石棒出土状態 (東より)	図版	87-1	D区全景 (南より)
図版	58-1	C区20a・b号配石床面の再構築状態 (北より)	2	D区全景 (西より)	
	2	C区20a・b号配石周壁の再構築状態 (東より)	図版	88-1	D区溝状遺構 (東より)
図版	59-1	C区1a号配石 (南より)	2	D区溝状遺構 (西より)	
	2	列石 (北東より)	図版	89-1	D区溝状遺構遺物出土状態 (1) (東より)
60-1	C区3号配石 (東より)	2	D区溝状遺構遺物出土状態 (2) (西より)		
	2	C区5号集石下遺物出土状態 (北東より)	図版	90-1	D区溝状遺構遺物出土状態 (3) (南より)
図版	61-1	C区6・7号配石 (南より)	2	D区溝状遺構遺物出土状態 (4) (南より)	
	2	C区8a号配石 (北西より)	図版	91-1	D区1号配石土坑 (東より)
図版	62-1	C区9号配石 (西より)	2	D区2号土坑 (東より)	
	2	C区12号配石 (南より)	図版	92-1	D区1号土坑 (東より)
図版	63-1	C区13号配石 (東より)	2	D区4・11号土坑 (北より)	
	2	C区15・16b・17号配石 (東より)	3	D区5号土坑 (南西より)	
図版	64-1	C区23号配石 (南より)	図版	93-1	D区6号土坑 (北より)
	2	C区34号配石 (南西より)	2	D区7号土坑 (北より)	
図版	65	C区配石遺構中央土坑出土土器	3	D区8号土坑 (南西より)	
図版	66-1	C区配石遺構出土土器 (1)	図版	94-1	D区9・10号土坑 (南より)
	2	C区配石遺構出土土器 (2)	2	D区12号土坑土層断面 (南東より)	
図版	67-1	C区配石遺構出土土器 (3)	3	D区13号土坑 (北東より)	
	2	C区配石遺構出土土器 (4)	図版	95-1	D区15号土坑 (南より)
図版	68-1	C区配石遺構出土土器 (5)	2	D区16号土坑 (南より)	
	2	C区配石遺構出土土器 (6)	3	D区16号土坑注口付双口土器出土状態 (北西より)	
図版	69-1	C区配石遺構出土土器 (7)	図版	96-1	D区18号土坑 (南西より)
	2	C区配石遺構出土土製品	2	D区19号土坑 (西より)	
図版	70-1	C区配石遺構出土石器 (1)	3	D区25号土坑 (南西より)	
	2	C区配石遺構出土石器 (2)	図版	97-1	D区土坑出土土器 (1)
図版	71-1	C区配石遺構出土石器 (3)	2	D区土坑出土土器 (2)	
	2	C区8号配石に使用された石英質岩	図版	98	D区16号土坑出土の注口の付双口土器
図版	72-1	C区配石遺構出土石器 (4)	図版	99-1	D区土坑出土石器 (1)
	2	C区配石遺構出土石器 (5)	2	D区1号配石土坑出土石器	
図版	73-1	C区配石遺構出土石器 (6)	図版	100-1	D区柱穴出土石器
	2	C区配石遺構出土石器 (7)	2	D区柱穴出土石器	
図版	74-1	C区配石遺構出土石器 (8)	図版	101-1	D区グリット出土土器 (1)
	2	C区配石遺構出土石器 (9)	2	D区グリット出土土器 (2)	
図版	75-1	C区配石遺構出土石器 (10)	図版	102-1	D区グリット出土土器 (3)
			2	D区グリット出土土器 (4)	
			図版	103-1	D区グリット出土土器 (5)
			2	D区グリット出土土器 (6)	

図 版	104-1	D区グリット出土土器 (7)	図 版	112-1	E区全景 (西より)
	2	D区グリット出土土器 (8)		2	E区全景 (南東より)
図 版	105-1	D区グリット出土土器 (9)	図 版	113-1	E区1号住居跡 (東より)
	2	D区グリット出土土器 (10)		2	E区1号住居跡 (北より)
図 版	106-1	D区グリット出土土器 (11)	図 版	114-2	E区2号住居跡 (北より)
	2	D区グリット出土土器製品 (1)		2	E区2号住居跡床面下落ち込み遺物出土状態 (北より)
図 版	107-1	D区グリット出土土器製品 (2)	図 版	115-1	E区2号住居出土土器 (1)
	2	D区グリット出土土器 (12)		2	E区2号住居出土土器 (2)
図 版	108	D区グリット出土土器 (13)	図 版	116-1	深沢遺跡グリット出土の弥生~平安時代の遺物 (1)
図 版	109-1	D区グリット出土土器 (1)		2	深沢遺跡グリット出土の弥生~平安時代の遺物 (2)
	2	D区グリット出土土器 (2)	図 版	117-1	深沢遺跡グリット出土の陶磁器 (1)
図 版	110-1	D区グリット出土土器 (3)		2	深沢遺跡グリット出土の各種の遺物
	2	D区グリット出土土器 (4)	図 版	118	深沢遺跡グリット出土の陶磁器 (2)
図 版	111-1	D区グリット出土土器 (5)			
	2	D区グリット出土土器 (6)			

前田原遺跡

図 版	1	前田原遺跡の地形(航空写真、約1/2000)	図 版	6-1	1・2号掘立柱建物 (東より)
図 版	2-1	予備調査時の前田原遺跡 (東より)		2	3・4号掘立柱建物 (東より)
	2	前田原遺跡全景 (北より)	図 版	7-1	1 (右)・2 (左)号溝 (北より)
図 版	3-1	予備調査風景 (北西より)		2	1号土坑 (東より)
	2	発掘作業風景 (南東より)	図 版	8-1	グリット出土の縄文土器
図 版	4-1	1号住居跡 (西より)		2	グリット出土の石器
	2	1号住居跡土層断面 (西より)	図 版	9	1号住居跡出土土器 (1)
図 版	5-1	1号住居跡遺物出土状態 (西より)	図 版	10-1	1号住居跡出土土器 (2)
	2	1号住居跡カマドと排水溝 (西より)		2	調査中の前田原遺跡

目 次

深沢遺跡

第1表	周辺遺跡一覧表	10
表2表	深沢遺跡A区石器観察表	56
第3表	深沢遺跡B区土坑一覧表	72
第4表	深沢遺跡B区石器観察表	88
第5表	深沢遺跡C区配石一覧表	121
第6表	深沢遺跡C区集石一覧表	123
第7表	深沢遺跡C区石器観察表	165
第8表	深沢遺跡D区土坑一覧表	190
第9表	深沢遺跡D区石器観察表	220
第10表	深沢遺跡B区・D区掘立柱建物跡一覧表	236
第11表	深沢遺跡E区掘立柱建物跡一覧表	241
第12表	深沢遺跡石器集計表	250
第13表	深沢遺跡石質表 (1)・(2)	251

前田原遺跡

第1表	前田原遺跡石器観察表	6
第2表	前田原遺跡掘立柱建物跡一覧表	10

挿 図 目 次

深沢遺跡

第 1 図	深沢・前田原遺跡位置図	2	第 53 図	C 区 1 号埋甕・中央土坑	96
第 2 図	深沢・前田原遺跡調査区位置図	6	第 54 図	C 区中央土坑	97
第 3 図	周辺遺跡位置図	9	第 55 図	C 区 1 b・2 b・8 b 号配石	100
第 4 図	深沢遺跡基本土層	17	第 56 図	C 区 18・19 号配石	101
第 5 図	A 区全体図 (1)	19	第 57 図	C 区 21・27 号配石	102
第 6 図	A 区全体図 (2)	20	第 58 図	C 区 22 号配石	103
第 7 図	A 区 1 号住居跡	21	第 59 図	C 区 26・28・30・31・33・35 号配石	104
第 8 図	A 区 1 号住居跡遺物散布図	22	第 60 図	C 区 A・C・D・G・E・H 号配石	105
第 9 図	A 区 1 号住居跡遺物図	23	第 61 図	C 区 10 号配石	107
第 10 図	A 区グリット出土石器 (1)	24	第 62 図	C 区 16 a・20 b・34 号配石	108
第 11 図	A 区グリット出土石器 (2)	26	第 63 図	C 区 11 号配石	110
第 12 図	A 区グリット出土石器 (3)	27	第 64 図	C 区 20 a 号配石 (1)	111
第 13 図	A 区グリット出土石器 (4)	29	第 65 図	C 区 20 a・b 号配石 (2)	112
第 14 図	A 区グリット出土石器 (5)	31	第 66 図	C 区 20 a 号配石 (3)	113
第 15 図	A 区グリット出土石器 (6)	33	第 67 図	C 区列石	115
第 16 図	A 区グリット出土石器 (7)	35	第 68 図	C 区 1 a・2 a・3・5・23 号配石	117
第 17 図	A 区グリット出土石器 (8)	36	第 69 図	C 区 6・7・8 a・9・12・13 号配石	118
第 18 図	A 区グリット出土石器 (9)	37	第 70 図	C 区 14・15・16 b・17・24・25・29・32 号配石	119
第 19 図	A 区グリット出土石器 (10)	39	第 71 図	C 区 1～6 号集石	120
第 20 図	A 区グリット出土石器 (11)	40	第 72 図	C 区配石出土石器 (1)	125
第 21 図	A 区グリット出土石器 (12)	41	第 73 図	C 区配石出土石器 (2)	126
第 22 図	A 区グリット出土石器 (13)	42	第 74 図	C 区配石出土石器 (3)	127
第 23 図	A 区グリット出土石器 (14)	43	第 75 図	C 区配石出土石器 (4)	128
第 24 図	A 区グリット出土石器 (15)	44	第 76 図	C 区配石出土石器 (5)	129
第 25 図	A 区グリット出土石器 (16)	45	第 77 図	C 区配石出土石器 (6)	130
第 26 図	A 区グリット出土石器 (1)	48	第 78 図	C 区配石出土石器 (7)	131
第 27 図	A 区グリット出土石器 (2)	49	第 79 図	C 区配石出土石器 (8)	132
第 28 図	A 区グリット出土石器 (3)	50	第 80 図	C 区配石出土石器 (9)	133
第 29 図	A 区グリット出土石器 (4)	51	第 81 図	C 区グリット出土石器 (1)	134
第 30 図	A 区グリット出土石器 (5)	52	第 82 図	C 区グリット出土石器 (2)	135
第 31 図	A 区グリット出土石器 (6)	53	第 83 図	C 区グリット出土石器 (3)	136
第 32 図	A 区グリット出土石器 (7)	54	第 84 図	C 区 1 a・1 b・2 a・3 号配石	138
第 33 図	A 区グリット出土石器 (8)	55	第 85 図	C 区 4・5 号配石	139
第 34 図	B 区全体図	63	第 86 図	C 区 6・22 号配石	140
第 35 図	B 区土坑 (1)	69	第 87 図	C 区 7 号配石	141
第 36 図	B 区土坑 (2)	70	第 88 図	C 区 8 a・9・12 号配石	142
第 37 図	B 区土坑 (3)	71	第 89 図	C 区 10 号配石	143
第 38 図	B 区土坑出土石器	74	第 90 図	C 区 11 号配石 (1)	144
第 39 図	B 区土坑出土石器	75	第 91 図	C 区 11 号配石 (2)	145
第 40 図	B 区グリット出土石器 (1)	76	第 92 図	C 区 13～16 a 号配石	146
第 41 図	B 区グリット出土石器 (2)	77	第 93 図	C 区 17～19・21～23 号配石	147
第 42 図	B 区グリット出土石器 (3)	78	第 94 図	C 区 20 号配石 (1)	148
第 43 図	B 区 2・4・5・7・12 号土坑出土石器 (1)	80	第 95 図	C 区 20 号配石 (2)	149
第 44 図	B 区 17・19・22・23・27・31・36 号土坑 出土石器 (2)	81	第 96 図	C 区 20 号配石 (3)	150
第 45 図	B 区出土石鏃集成	82	第 97 図	C 区 20 号配石 (4)	151
第 46 図	B 区グリット出土石器 (1)	83	第 98 図	C 区 26・27・28 号配石	152
第 47 図	B 区グリット出土石器 (2)	84	第 99 図	C 区 29 号配石	153
第 48 図	B 区 4 号土坑・グリット出土石器 (3)	85	第 100 図	C 区 4・25・G・H 号配石, 4 号集石	154
第 49 図	B 区ピット出土石器	86	第 101 図	C 区 1・3～9・12～16・18・19・21・ 22・24・26 号配石	155
第 50 図	B 区多孔石	87	第 102 図	C 区 27・29・31・33・35 号配石	156
第 51 図	C 区全体図確認面	93	第 103 図	C 区 2 a・23 号配石	157
第 52 図	C 区全体図 (下面)	94	第 104 図	C 区グリット出土石器 (1)	160
			第 105 図	C 区グリット出土石器 (2)	161
			第 106 図	C 区グリット出土石器 (3)	162

第107図	C区グリット出土石器(4)	163
第108図	C区グリット出土石器(5)	164
第109図	D区全体図	180
第110図	D区溝状遺構(1)	181
第111図	D区溝状遺構(2)	182
第112図	D区土坑(1)	187
第113図	D区土坑(2)	188
第114図	D区土坑(3) 1号配石土坑・1号井戸	189
第115図	D区土坑出土土器(1)	192
第116図	D区土坑出土土器(2)	193
第117図	D区ピット出土土器	194
第118図	D区グリット出土土器(1)	196
第119図	D区グリット出土土器(2)	197
第120図	D区グリット出土土器(3)	198
第121図	D区グリット出土土器(4)	199
第122図	D区グリット出土土器(5)	200
第123図	D区グリット出土土器(6)	201
第124図	D区グリット出土土器(7)	202
第125図	D区グリット出土土器(8)	203
第126図	D区グリット出土土器(9)	204
第127図	D区グリット出土土器(10)	205
第128図	D区グリット出土土器(11)	206
第129図	D区グリット出土土器(12)	207
第130図	D区グリット出土土器(13)	208
第131図	D区グリット出土土器(14)	209
第132図	D区グリット出土土器(15)・2号土坑 出土土器	210
第133図	D区土坑・集石・2号溝出土石器	212
第134図	D区ピット出土石器	213
第135図	D区グリット出土石器(1)	215
第136図	D区グリット出土石器(2)	216

第137図	D区グリット出土石器(3)	217
第138図	D区グリット出土石器(4)	218
第139図	D区グリット出土石器(5)	219
第140図	E区全体図	226
第141図	E区1号住居跡	227
第142図	E区2号住居跡遺構・出土遺物	228
第143図	B区中・近世掘立柱建物跡	230
第144図	B区1・2号掘立柱建物跡	231
第145図	B区3・4号掘立柱建物跡	232
第146図	B区5号掘立柱建物跡	233
第147図	B区6号掘立柱建物跡	234
第148図	B区7・8号掘立柱建物跡	235
第149図	D区中・近世全体図	237
第150図	D区1・2号掘立柱建物跡	238
第151図	D区1～4号柱列	239
第152図	E区1号掘立柱建物跡	241
第153図	E区1～5号柱列	242
第154図	弥生～平安グリット出土遺物	244
第155図	グリット出土陶磁器	245
第156図	グリット出土金属・石製品	246
第157図	各区の時期別土器量比と器種別石器量比	249
第158図	石質グラフ	253
第159図	B区土坑	255
第160図	D区土坑	256
第161図	C区石棺状配石及び中型配石全体図	257
第162図	C区大型配石・列石・立石・集石全体図	258
第163図	C区棺状配石及び中型配石全体図	259
第164図	C区大型配石・列石・集石全体図	260
第165図	C区配石(石棺状・大型配石)規模と方向	261

前田原遺跡

第1図	前田原遺跡全体図	3
第2図	基本土層	4
第3図	グリット出土土器	5
第4図	グリット出土石器	6
第5図	1号住居跡	8
第6図	1号住居跡遺物図	9
第1表	前田原遺跡石器観察表	6

第7図	1号掘立柱建物跡	11
第8図	2号掘立柱建物跡	12
第9図	3号掘立柱建物跡	13
第10図	4号掘立柱建物跡	14
第11図	1・2号溝遺構図	15
第12図	1～4号土坑	16
第2表	前田原遺跡掘立柱建物一覧表	10

付 図

- 付図1 深沢遺跡全体図(1/500)
- 付図2 前田原遺跡全体図(1/500)
- 付図3 深沢遺跡C区配石遺構全体図(1/100)
- 付図4 深沢遺跡C区配石遺構特殊遺物分布図(1/100)

第Ⅰ章 深沢・前田原遺跡の調査に至る経過

上越新幹線が通過する市町村において、最初に埋蔵文化財の発掘調査が行なわれたのは利根郡月夜野町である。即ち昭和48年4月1日付けで締結された「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」及び昭和48年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書」にもとつき、月夜野町上津所在の十二原遺跡（No 69）地区）の発掘調査を同年5月より行なった。以後昭和55年11月まで次の遺跡の調査が、月夜野町においては行なわれた。

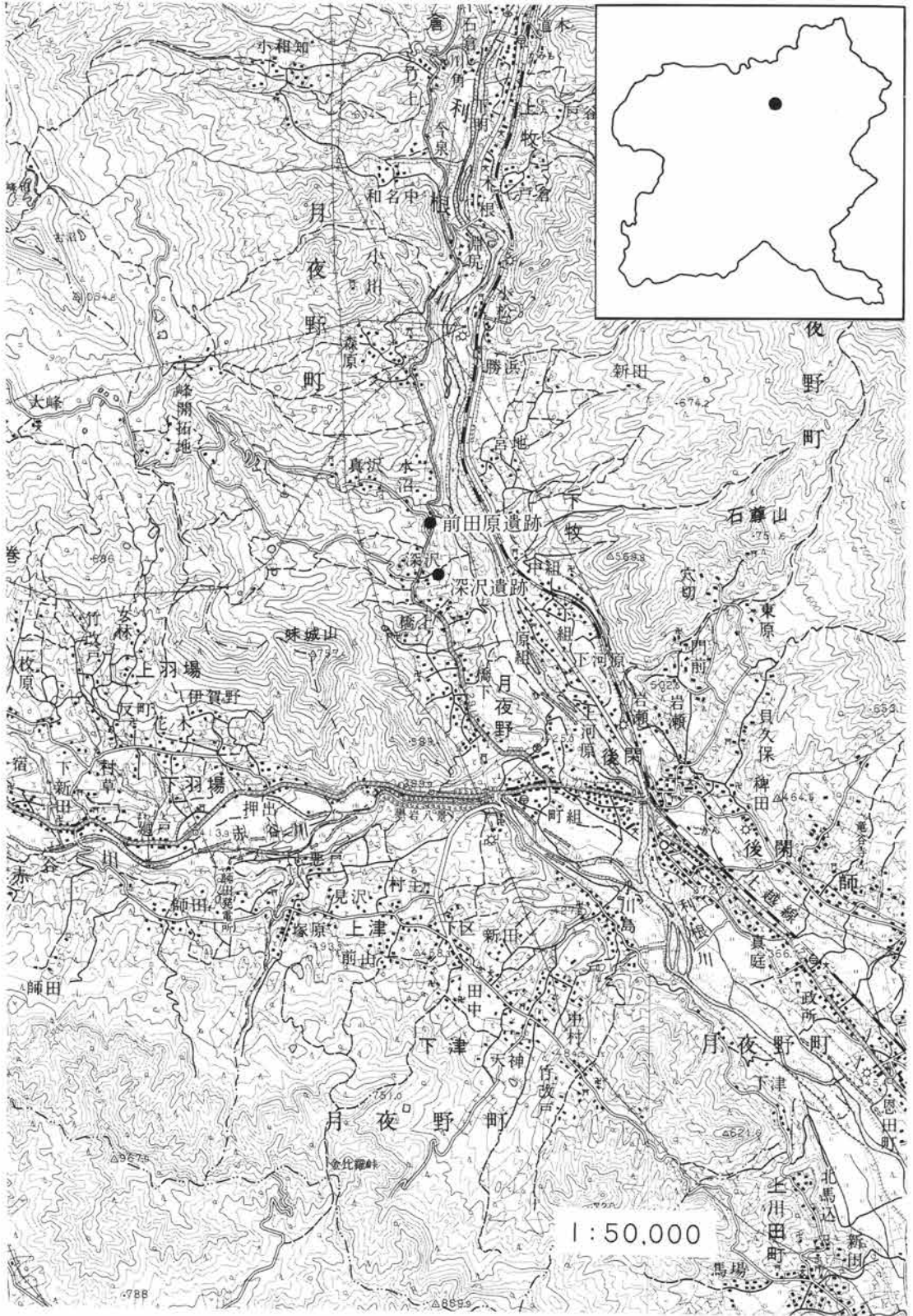
- | | | |
|-------------------|--------------|------------------|
| 1. 十二原遺跡（No 69地区） | 月夜野町上津字十二原所在 | （上越新幹線関係埋文報告第1集） |
| 2. 大原遺跡（No 70地区） | 〃 〃 〃 字大原所在 | （ 〃 〃 〃 ） |
| 3. 洞Ⅰ遺跡（No 76地区） | 〃 〃 月夜野字洞所在 | （ 〃 〃 〃 第7集） |
| 4. 洞Ⅱ遺跡（No 76地区） | 〃 〃 〃 〃 | （ 〃 〃 〃 ） |
| 5. 洞Ⅲ遺跡（No 77地区） | 〃 〃 〃 〃 | （ 〃 〃 〃 ） |
| 6. 藪田遺跡（No 78地区） | 〃 〃 月夜野字藪田所在 | （ 〃 〃 〃 第4集） |
| 7. 深沢遺跡（No 79地区） | 〃 〃 月夜野字深沢 | |
| 8. 前田原遺跡 | 〃 〃 月夜野字前田原 | |
| 9. 前中原遺跡（No 80地区） | 〃 〃 小川字前中原所在 | （上越新幹線関係埋文報告第1集） |

上記の遺跡調査は用地買収が完了するまでは、地権者より新幹線の通過等が予定されている用地を借地して発掘調査する方法がとられた。本報告書に報告するところの深沢遺跡も当初はこの方法で調査がなされた。前田原遺跡は用地買収後に調査を行なった。

深沢遺跡は仮称上毛高原駅周辺の調査が本格的に始まった昭和51年10月～12月に、まずは試掘調査を行なった。その結果、縄文時代・平安時代の遺構の存在が認められたので、昭和55年4月より本調査を行ない、同年11月に終了した。深沢遺跡の調査においては、特色ある遺構として縄文時代後期の配石遺構が検出された。この遺構は資料的価値が非常に高いものと判断され、関係者がその存在について協議したが、新幹線の性格上現地に保存が不可能なため、これを月夜野町が建設した歴史民俗資料館の敷地内に移築・復元する保存方法がとられた。記録保存が多い新幹線の調査の中で、遺構の保存がとられた遺跡として、特筆しておきたい。

一方、前田原遺跡は当初遺跡地がトンネル案であったため調査対象から除外されていたが、その後設計変更がありオープンカットとなったため、その取扱いについて協議を行ない、急拠調査対象地として取り上げた。調査は昭和54年4月より同年5月まで行なった。

深沢・前田原両遺跡の報告書を作成するための整理作業は、昭和62年度に行なわれ、以下に報告するところのものをまとめることができた。両遺跡の報告をもって月夜野町において調査した新幹線の埋蔵文化財発掘調査の報告書は完了した。昭和48年に調査を行なって以来14年の歳月を要したのであるが、これも関係者の努力によるものと考ええる。特に発掘調査の段階で得た地元地権者会、新幹線対策協議会、地元区長、月夜野町教育委員会等の調査に対する理解・協力は忘れ得ないものがある。ここに明記しておきたい。



第1図 深沢・前田原遺跡位置図

第Ⅱ章 深沢遺跡の調査の方法と経過

1 調査の方法

深沢遺跡は利根郡月夜野町大字月夜野字深沢2111番地を中心に所在し、南流する利根川の右岸上位段丘面に立地している。上位段丘面は概ね3面の小段丘面に分かれ、調査範囲は中位の小段丘面をほぼ南北に横断している。また、遺跡地の南端は東流する深沢によって切られ、北端は西の大峰山から延びる尾根状の丘陵によって切られている。また、遺跡地には東西に走る埋没谷が3条あり南北に波状をなす微地形を構成している。

調査範囲は東西幅が25m（一部45m）、南北が250mで、面積は6,750²mである。調査方法は上越新幹線関係の基本方針に従い、一部、遺跡の特性を考慮して変更を加え決定した。調査方法の基本は以下の通りである。

- ① 100mを1調査区とし、3m×3mをグリットの基本単位とした。なお、調査区の末端は1m×3mを1グリットとした。
- ② 調査区は南より1区・2区・3区の順序で設定したが、本調査において遺跡地の微地形や遺構のまとまりから調査区を南より北へA～E区の名称に改称した。

A区は調査区の南端に位置し、距離は65mである。A区は東西に走る埋没谷とこの埋没谷によって切られた瘦尾根状の台地とに分かれている。B区は距離60mで、A区の埋没谷とC区との間に湾入する埋没谷とによって切られた東西に走る台地部分である。B区を載せる台地は東西にさらに伸び濃厚な縄文時代の遺物散布が見られる。C区は距離30mで、北のD区と同一の台地上にあるが、台地頂部を東流する水路により区分し、C区は台地が東南へ緩く傾斜する面に位置している。D区は距離45mで、台地の北半部分に位置し北端には東流する埋没谷がある。D区とE区の間30mは予備調査において出土遺物も少なく深い谷となっており、本調査では除外した。E区は距離20mで、D区との間の埋没谷から立ち上がり北の丘陵へいたる南面する傾斜地となっている。

- ③ グリットの基軸線設定に際しては上越新幹線建設用センター杭（工事用距離程119km400mを原点とした。）を使用した。基軸線の方位はN-2°35'10"-Wである。
- ④ グリットの表示は基軸線に平行する方向を算用数字（01～34）で表わし、直行する方向をアルファベット（調査区の中軸線をOとした。）で表わした。グリットの基点は南西隅とし、この組み合わせの頭に調査区名称を加えてグリット名称とした。
- ⑤ 遺構番号はA～E区のそれぞれの区で種類ごとに通し番号を付した。遺構より出土した遺物はそれぞれの遺構だけで通し番号を付し、グリットより出土した遺物は1～3区の調査区名称にグリット名称を加えて取り上げた。
- ⑥ 遺構図面は平・断面とも1/20作図を原則とし、実測には平板を使用した。遺構の写真撮影は6×9版プロニーサイズと35mm版を使用し、モノクロとカラースライドの撮影を行なった。

2 調査の経過

深沢遺跡は上越新幹線関係埋蔵文化財包蔵地 No 79の遺跡であり、前田原や前中原遺跡とともに上越新幹線関係の最北端の遺跡である。また、「群馬県遺跡台帳」に記載の遺跡でもある。

予備調査は南1 kmにある洞Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査と平行して行なわれ、昭和51年10月8日～12月11日の間に群馬県教育委員会文化財保護課によって実施された。

予備調査は宅地であったB区以外の他の区に、2グリットに1本の単位で1.5m×2.5mの試掘坑が入れられた。この結果、A・C・D調査区で縄文時代中期～後期の遺構と遺物を確認し、E区においては平安時代の住居跡と近世の掘立柱建物を確認し本調査の資料とした。

本調査は上越新幹線関係の月夜野地区最後の遺跡として群馬県教育委員会文化財保護課が実施した。調査期間は昭和54年4月12日～11月20日である。調査経過は以下の通りである。

4月頭初は調査の準備と周辺の調整を行ない、中旬より人力によるC区の拡張作業と重機によるD区の表土掘削作業を実施した。

5月はC区の拡張作業を終了、配石遺構の上面での全容を検出し、確認面での実測と写真撮影を行なった。また、平行してD区の遺構確認作業を実施した。

6月はC区配石遺構の精査に入り、各配石遺構のまとまりを検出しつつ序々に掘り下げて行った。各配石の覆土は水洗いを行ない細かい遺物の検出も行なった。また、D区の溝状遺構に包含された遺物の検出や土坑・掘立柱建物の調査も平行して実施した。

7月は初旬にD区の調査を終了し、A区の調査に入った。A区では瘦尾根状台地にある1号住居跡の調査と埋没谷にグリットを設定し、遺物の包含状態を調査した。C区配石遺構は引き続き、各配石の精査と水洗い作業を継続した。

8月は初旬にA区の調査を終了し、B区の重機による表土掘削を開始し遺構の確認や調査に入り、8月末に調査を終了した。C区配石遺構は引き続き精査作業を続けた。

9月はC区配石遺構の精査作業をほぼ終了し、9月16日に遺跡見学会を実施した。見学会には400人以上の参加者があり、熱のこもった見学会となった。

また、配石遺構の保存についても精査段階から各方面との協議が繰り返し行なわれ、非破壊の各種の工法や対策が講じられたが現地での保存は困難な状況となり、移築による保存案が決定された。

10月はC区配石遺構の実測を行ない、移築のための準備を行なった。また、調査区北端のE区の調査に入り、平安時代の2軒の住居跡や近世の掘立柱建物や柱列の調査を行なった。

11月はE区の調査を終了し、C区配石遺構の移築作業を実施した。移築する配石には20cm方眼のメッシュを設定し、石組の状態を原形通りに復元できるようにして解体した。また、移築までの間は遺跡近くに仮置所を設定した。

12月は移築作業を終了し、調査事務所の解体や借地箇所の整備、遺物や器財の搬出を行ない、深沢遺跡の調査を終了した。

深沢遺跡の配石遺構は現在、遺跡の南西1 kmにある月夜野町歴史民俗資料館の西に接して移築されており、近接して縄文時代中期末の県指定「梨の木平敷石住居跡」もある。

3 深沢遺跡配石遺構の移築について

報告文にあるとおり深沢遺跡の配石遺構は保存状態も比較的良好で、しかもせまい範囲の中に群として残っていた。各配石遺構は形体的には四周を石で囲っただけのもの、四周だけでなく床面にも石を敷きつめたものがあり、遺物の点では石鏃、耳飾、玉類等を多量に出土する配石が存在する一方で、何も出土しないものもある。このように、多種多様な内容を持つ配石遺構が一部において重複している深沢遺跡の例は、縄文時代後期の墓制、祭祀を研究し、理解する上で貴重なものであった。

群馬県教育委員会では、昭和54年10月の時点で、工事主体である日本鉄道建設公団に対して、発掘調査開始にあたっては記録保存を前提としていたが、重要な遺構であることが判明したために深沢遺跡の配石遺構を現状のまま保存したいという申入れを行った。工事計画図によれば、深沢遺跡の区域はトンネル部分にあたっており、現状保存も可能ではないかと思われたからである。しかし、実際の工法は一旦地盤を掘り下げた後にトンネル構造物を建設するものであったため現状保存は不可能ということになった。仮に地表面を掘削せずにトンネル工事を行うとするならば、新幹線が通る標高位置をかなり下げなければならないが、すでに全線の工事計画が決定されており、深沢遺跡の一部分だけを設計変更することは事実上無理な時期だったのである。

次善の策として、配石遺構をウレタン樹脂で固め、一時他の場所に保管しておき、トンネル工事完了後に元の位置に再び戻すことを考えた。奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センターの指導を受けながら検討した方法は概ね次の通りである。

- ① 配石遺構の石垣の外側に30cmの余裕をみて幅1m、深さ1mほどの溝を掘る。
- ② 周囲を掘られた結果中央に方台状に残った配石遺構の表面をウレタン樹脂で覆う。
- ③ 配石遺構の床面よりもさらに60cm下の位置に50cm間隔で径40cmの穴を貫通させる。
- ④ ③の穴に4寸角の材木を通し、両端に突出した材木の下にそれぞれ一本の鉄材をあて固定する。
- ⑤ 鉄材をクレーンでつり上げ、地盤の土と共に配石遺構を取り上げる。

それに要する費用は、当時の金額で大型のものが1基あたり130万円、小型が30万円程度という見積りであった。

経費も確保でき、作業に取りかかったが、この方法でも配石遺構を保存することができなかった。というのは、深沢遺跡の地山には大きな岩石が混入しており、角材を通すべき穴を貫通させることができなかったからである。

以上のような経過の中で最後の策として、配石遺構の石に20cm方眼の割り付けを施し、一度石組を解体した後に、方眼線を頼りに復原する方法を採用した。この方法で復原した配石遺構は石棺状配石を中心に中型と大型の配石の計20基である。復原作業は昭和55年12月に行った。深沢遺跡の原位置を当初は考えていたが、新幹線開通後は列車通過時に生じる微震動のために復原した石組が崩れるであろうという日本鉄道建設公団側の意見を受け入れ、地元月夜野町教育委員会とも相談の結果、上毛高原駅東側の地に移築することとした。

復原後、隣接して町立月夜野町歴史民俗資料館が建設された。深沢遺跡の出土遺物等も展示されているので、移築された配石遺構は十分その役割を果たしているといえるだろう。



第2図 深沢・前田原遺跡調査区位置図

第Ⅲ章 深沢・前田原遺跡の立地と歴史的環境

深沢^{ふかさわ}、前田原^{まへたばら}の両遺跡は、県北山間部のほぼ中央、奥利根への入口にあたる利根郡月夜野町^{つきよの}に所在する。月夜野町は、東を三峰山^{みつみね}（標高1.122m）、北西を大峰山^{おおみね}（標高1.254m）、南西を名胡桃山^{なぐるみ}（標高862m）に囲まれ、ほぼ中央を利根川が南流し、西方より赤谷川^{あかや}が合流している。2遺跡はこの合流点より北西へ約2.5kmの位置にあり、利根川右岸段丘上で大峰山東南麓の裾部と接している。

調査時においては、畑地と水田との間に民家が点在する山間農村であったが、現在は上越新幹線上毛高原駅のある県北の交通の要衝として発展している。

遺跡のある利根川右岸は、高さ約30mの段丘崖を境に洪積面と沖積面を形成しており、洪積面はさらに高さ約6mの小段丘崖を境に上位と下位とに分かれている^{注1}。2遺跡は、ともに洪積面の上位に立地している。また、遺跡がある一帯の地質は、緑色凝灰岩を基盤とし、西南にある味城山^{あじぎ}一帯は流紋岩質（軽石）結晶凝灰岩地帯であり、遺跡の南約100mの位置を東流する「深沢」以北は溶結凝灰岩地帯となっている^{注2}。味城山の裾近い洞山や寺山の周辺では、良質の粘土が採取できる。

2遺跡は、大峰山東南麓の裾部と接する段丘上にある。この段丘面は、遺跡の南にある「深沢」と北約600mにある「真沢」とで南北を大きく仕切られ、南の深沢遺跡A区で東西幅約500m、「真沢」に近い前田原遺跡付近で東西幅約100mの台形を呈している。さらに、この段丘面は遺跡がある上位面と下位面とに分けられ、東西方向には利根川にむかって数十m間隔で埋没谷がある。深沢遺跡付近には、沢地や埋没谷が多く起伏に富んだ地形となっているが、A～E区まではこの自然地形によって仕切られている。深沢遺跡での遺構占地は、時期別に異なると推定されるが、主に沢や埋没谷に面した屋根筋に限られ、この傾向は近世まで続いている。配石や土坑からなる墓域は、調査区付近にあるが、集落は中期がA区付近から西の上位段丘面にかけて、後期が東の下位面に推定される。

前田原遺跡は、山裾の狭い平坦地に一時的に占地したものと思われる。

月夜野町における調査・報告例としては昭和5年の「利根郡誌」^{注6}に上津塚原出土の弥生中期筒形土器があり、昭和13年の「上毛古墳綜覧」^{注7}では塚原古墳群で61基、古馬牧古墳群で97基が報告されている。昭和16年には洞^{さなざわ}と真沢^{注8}の窯址が調査・報告され古窯址の所在地として知られるようになった。昭和28年には塚原古墳群の測量調査が行われ、同時に上津天神遺跡^{注10}で古墳時代前期の住居跡の調査も行っている。昭和30年には八東脛洞窟遺跡^{注11}が報告され縄文晩期～弥生中期を中心とする墓址であることが明らかとなった。昭和36年には「桃野村誌」^{注1}が刊行され塚原古墳群測量調査の結果の一端が紹介された。昭和45・46年には洞窯址^{注12}の本格的な調査が行われ登窯3基を検出、奈良時代末～平安時代にいたる窯址であることが判明した。昭和47年には「古馬牧村誌」^{注13}が刊行され古馬牧古墳群の分析が行われた。

昭和48年以降は利根川右岸を通る上越新幹線や利根川左岸を通る関越自動車道および名胡桃^{なぐるみだいら}平を横断する月夜野バイパス等の建設事業の事前調査として昭和58年まで次々に大規模な発掘調査が行われ、この成果は次第に報告される状況にあり、当地域の歴史がより具体的に明らかになりつつある。

月夜野町における遺跡は段丘上や山麓裾部に広く分布し、縄文時代～平安時代にいたる多くの集落

址や古墳群・窯址群があり、中世から近世にかけては城址や館跡・建物跡等がある。

旧石器時代の遺跡は現在のところ利根川左岸だけに確認されている。^{注14}後田・^{注15}善上・^{注16}大竹・^{注16}小竹Aの遺跡があり、特に後田遺跡はナイフ形石器を中心に4,500点以上の石器と20ヶ所以上のユニットが確認され、その広さは13,000㎡に及ぶ大遺跡である。

縄文時代の遺跡としては草創期から早期にかけては利根川左岸では大竹・小竹A・^{注17}宮地の各遺跡があり、利根川右岸では^{注17}三後沢・^{注18}都・^{注19}前中原等の遺跡がある。都遺跡からは時期は明確ではないが有舌尖頭器2点が出土している。前期～中期の遺跡としては利根川左岸に後田・善上・大竹・小竹A・小竹B・宮地等があり、利根川右岸では^{注20}城平・^{注21}諏訪・^{注21}三後沢・^{注21}十二原・^{注21}十二原Ⅱ・^{注22}梨の木平・^{注23}深沢・^{注23}前中原遺跡等多くの遺跡があり住居跡も数多く確認されている。前期の遺跡では大木式や有尾式の土器が併出する例がある。また、梨の木平遺跡で中期末の敷石住居跡が確認されている。後期～晩期の遺跡は少なく現在のところ深沢と八束脛洞窟遺跡だけである。深沢遺跡では後期中葉の石棺状配石が50基近く確認された。

弥生時代の遺跡は利根川左岸では八束脛洞窟と大竹遺跡だけで右岸では^{注24}諏訪・^{注24}三後沢・^{注24}十二原・^{注24}十二原Ⅱ・^{注24}大原・^{注24}大原Ⅱ・^{注24}上津塚原・^{注24}梨の木平・^{注24}藪田等多くの遺跡があり、特に利根川と赤谷川の合流点の南西に広がる通称「名胡桃平」の段丘上に多い。

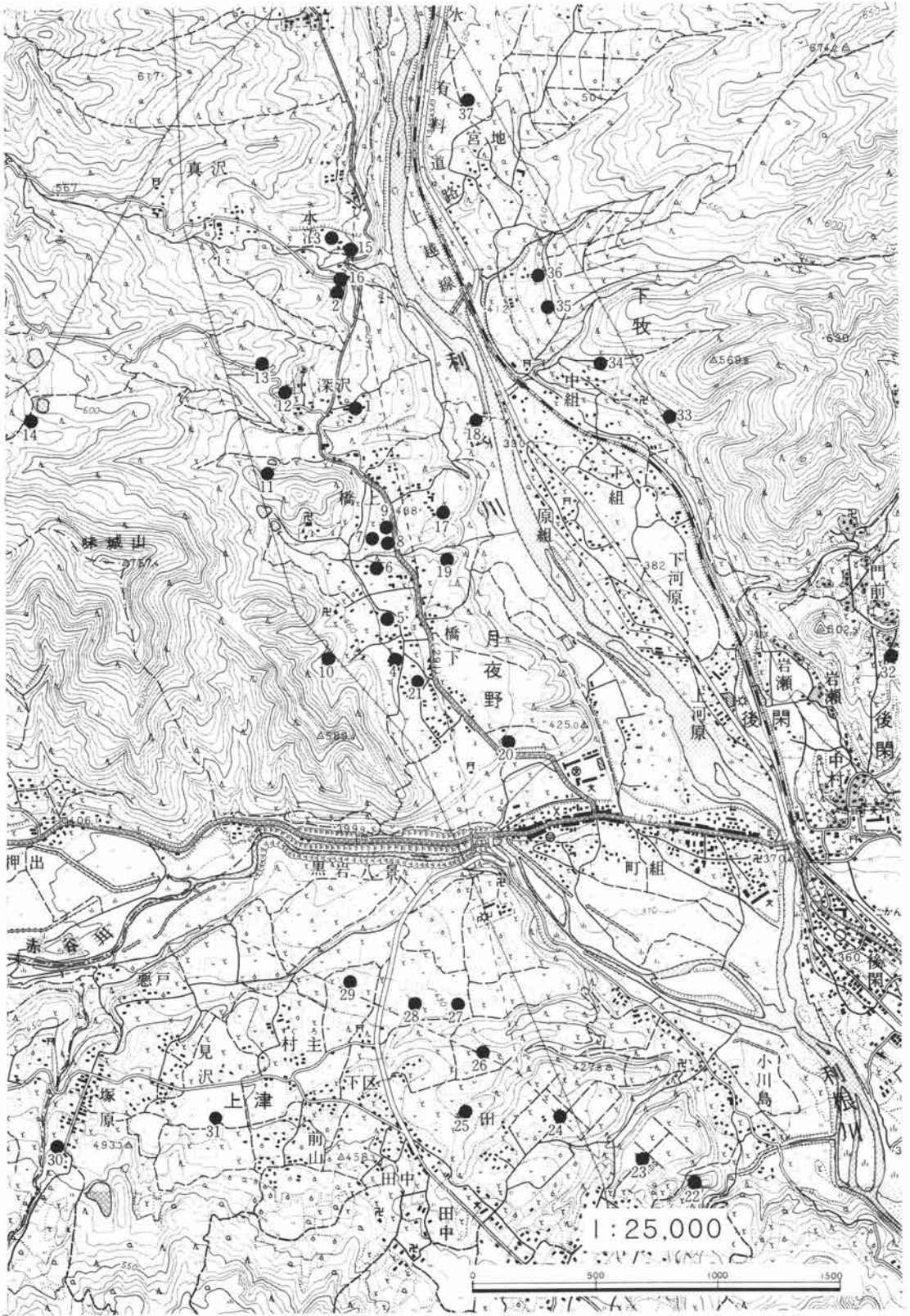
古墳時代の遺跡は古馬牧古墳群のある利根川左岸南半と塚原古墳群のある名胡桃平に多く合流点より北西に広がる本遺跡のある段丘上には遺跡は確認されていない。利根川左岸では後田・^{注24}師B・^{注24}門前等があり、名胡桃平では^{注24}諏訪・^{注24}十二原・^{注24}上津天神等の遺跡がある。後田遺跡では約270軒の後期の住居跡があり県北最大の集落址である。また、古馬牧・塚原両古墳群とも6世紀末～7世紀の古墳群である。

奈良～平安時代の遺跡は利根川兩岸の段丘状に16遺跡が確認されており、住居跡も240軒以上確認されている。特に合流点より北西の本遺跡周辺の山麓裾部には洞・沢入・深沢・真沢・水沼・^{注25}須磨野の各窯址があり月夜野窯址群と称されている。月夜野窯址群は8世紀～10世紀にかけての時期で県北一帯に須恵器を供給しており、本遺跡も含め^{注4}藪田・^{注5}藪田東・^{注5}梨の木平・^{注5}前中原の各遺跡は須恵器生産工人の集落址である。また、倭名類聚鈔によれば利根郡には4郷が見られ、当地域は「呉桃(嶺)」の郷と推定されており前述のごとく広く通称として「名胡桃」の名が残っている。また、名胡桃地内には朝鮮系渡来人に関連すると言われている「^{注6}村主神社」が鎮座している。なお、利根川左岸一帯は古馬牧と呼ばれ、延喜式に見られる久野牧の地と推定されており牧に由来する地名が多く残っている。

中世の当地域の歴史は明らかではないが、当地方の大部分は利根庄に包括され、鎌倉初期からは地頭として大友氏が補任され、南北朝以降は万里小路家の領有となったとされる。なお、昭和57年に大友館と称されている居館址が古馬牧地区で調査された。

戦国期には利根川を挟んで段丘崖上に^{注26}名徳寺城・^{注26}名胡桃城・^{注26}石倉城の各城が築かれ、越後から関東への交通の要衝でもある当地域は沼田氏から上杉・北条・武田と目まぐるしく領有が移り変って行き、戦国末は真田氏の領有となる。なお、名胡桃城と小川^{注3}城は一部が近年調査されている。

中世～近世にかけての遺跡は本遺跡も含め15の遺跡で掘立柱建物や井戸・溝等が確認されており、舶載陶磁器や常滑・伊万里・唐津等の陶磁器が多く出土している。



第3図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
1	深沢遺跡	月夜野町大字月夜野字深沢2111	S 54	縄文時代中期住居跡1軒、後期配石遺構約50基。平安時代住居跡2軒。	
2	前田原遺跡	月夜野町大字月夜野字前田2397	S 53	平安時代住居跡1軒。近世掘立柱建物4軒。	
3	前中原遺跡	月夜野町大字小川字前中原18	S 50・S 51	縄文時代早期炉穴4基、前期住居跡4軒、土坑22基、平安時代住居跡1軒。	19
4	洞Ⅰ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1369	S 51・S 53	平安時代住居跡1軒・落ち込み1基。中・近世柱穴群・溝1条・井戸3基・土坑19基。	29
5	洞Ⅱ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1442	S 51・S 53	近世鍛冶屋敷跡1軒、掘立柱建物19軒・柱列8列、溝3条、井戸5基、土坑19基。	29
6	洞Ⅲ遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1506	S 52・S 53	平安時代住居跡5軒・土坑6軒、中・近世掘立柱建物94軒、柱列16列、溝3条、井戸2基、土坑40基。	29
7	藪田遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1757	S 52・S 53	弥生時代住居跡1軒。粘土探掘坑を伴う平安時代集落、住居跡10軒。中・近世掘立柱建物28軒。	4
8	藪田東遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1756	S 54	藪田遺跡と同一の遺跡である。平安時代住居跡8軒と粘土探掘坑群。中・近世掘立柱建物6軒。	5
9	観光センター用地遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1743	S 54	調査地点2ヶ所。遺跡名は仮称。中・近世掘立柱建物20数基検出。	27
10	月夜野窯址群洞A支群	月夜野町大字月夜野字洞	S 12・S 45 S 46	8C末～10Cの登窯4基を確認。須恵器・瓦併用。	8、12、 25
11	月夜野窯址群沢入A支群	月夜野町大字月夜野字藪田1691	S 54	窯体の一部と灰原を確認、須恵器・瓦併用。窯址群内で確認されている最古の窯址。8C後半。	25
12	月夜野窯址群深沢C支群	月夜野町大字月夜野字深沢2307		複数の窯址が予想される。10C代。杯・碗・羽釜を焼成。	25
13	月夜野窯址群深沢B支群	月夜野町大字月夜野字深沢2324		4基の窯体を確認。杯・碗・甕・羽釜を焼成。	25
14	月夜野窯址群須磨野A支群	月夜野町大字月夜野字須磨野2082	S 56	窯体未確認。10C代。杯・碗・鉢・脚付羽釜を焼成。	25
15	月夜野窯址群水沼A支群	月夜野町大字小川字真沢2761		窯体の一部を確認。10C代。杯・碗・羽釜・瓦を焼成。	25
16	月夜野窯址群真沢A支群	月夜野町大字小川字前田2424	S 16	窯体の一部を確認。10C代。杯・碗・脚付羽釜・甕を焼成。	25
17	梨の水平遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田	S 51	縄文時代中期末敷石住居跡1軒。弥生時代中期包含層。平安時代住居跡1軒。	22
18	矢瀬遺跡	月夜野町大字月夜野字矢瀬		縄文時代後期末～晩期初頭の遺物を採集。	

第Ⅲ章 深沢・前田原遺跡の立地と歴史的環境

No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
19	小川城址	月夜野町大字月夜野字古城1132	S 55	明応7年(1498)築城。二の丸の一部を調査。掘立柱建物7軒と道路配石遺構を確認。	3
20	菩提木遺跡	月夜野町大字月夜野	S 56	経塚1基を確認。一字一切経多数出土。	24
21	都遺跡	月夜野町大字月夜野	S 50	有舌尖頭器2点が出土。	
22	名胡桃城址 (城平遺跡)	月夜野町大字下津字城平3491	S 56	天正年間築城。馬出部を調査。昭和24年県指定史跡。	20、26
23	諏訪遺跡	月夜野町大字下津字諏訪3376	S 56	縄文時代土坑46基。弥生時代後期住居跡1軒。古墳時代後期住居跡6軒。	20
24	三後沢遺跡	月夜野町大字下津字三後沢	S 57	縄文時代前期～中期住居後7軒。弥生時代後期住居跡7軒。	17
25	十二原遺跡	月夜野町大字上津字十二原2255	S 48	縄文時代中期包含層。弥生時代後期住居跡1軒。古墳時代中期住居跡1軒。平安時代住居跡1軒。	19
26	十二原Ⅱ遺跡	月夜野町大字上津字十二原	S 58	縄文時代前期～中期住居跡11軒、土坑8基。弥生時代後期住居跡6軒。	17
27	大原遺跡	月夜野町大字上津字大原929	S 48・S 49	縄文時代土坑6基。弥生時代後期住居跡2軒。平安時代住居跡1軒。	19
28	大原Ⅱ遺跡	月夜野町大字上津字大原	S 58	縄文時代陥穴22基、貯蔵穴4基、土坑9基。弥生時代後期住居跡3軒。	21
29	村主遺跡	月夜野町大字上津字大原	S 58	奈良時代住居跡14軒。平安時代住居跡17軒。	21
30	塚原古墳群	月夜野町大字上津字塚原	S 28	「上毛古墳総覧」では49基の古墳を確認。昭和28年。	7
31	上津天神遺跡	月夜野町大字上津字不動天神 2609	S 28	古墳時代中期住居跡2軒。	10
32	門前A遺跡	月夜野町大字後閑字門前	S 57	縄文時代前期～中期の遺物。古墳時代後期住居跡7軒。奈良・平安時代住居跡9軒。	16
33	高平遺跡	月夜野町大字下牧字高平2293	S 58	縄文時代土坑2基、前期～中期の遺物。平安時代住居跡5軒。	16
34	大竹遺跡	月夜野町大字下牧字大竹	S 58	旧石器時代ユニット25。縄文時代住居跡2軒、土坑33基。平安時代住居跡11軒。	16
35	小竹A遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S 58	旧石器時代ユニット2。縄文時代早期・中期の遺物。近世溝2条、畑状遺溝、炭焼窯。	16
36	小竹B遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S 57・S 58	縄文時代土坑1基。近世掘立柱建物7軒、畑状遺構、暗渠。	16
7	宮地遺跡	月夜野町大字下牧字宮地	S 58	縄文時代住居跡2軒、土坑15基、草創期の土器。近世掘立柱建物1軒。	

注及び参考文献

- 1 『桃野村誌』月夜野町誌編集委員会 1971
- 2 磯貝基一「藪田東遺跡周辺の地質」『藪田東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 3 中東耕志・相京建史「小川城址」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 4 下城 正・関 晴彦『藪田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 5 相京建史・中沢 悟・原 雅信『藪田東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 6 『利根郡誌』群馬県利根教育会 1930
- 7 『群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第五輯 上毛古墳綜覧』群馬県 1938
- 8 山崎義男「上野国利根郡月夜野二窯址について」『古代文化第12巻第4号』日本古代学会 1941
- 9 群馬大学尾崎喜左雄研究室を中心に実施。
- 10 『群馬県遺跡地図』群馬県教育委員会 1973
- 11 山崎義男「群馬県利根郡八東脛遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会 1955
- 12 井上唯雄『群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告』月夜野町教育委員会 1973
- 13 『古馬牧村誌』月夜野町誌編集委員会 1961
- 14 『群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報2』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 15 昭和57・58年関越道新潟線建設事業の事前調査として月夜野町教育委員会が調査を実施。
- 16 大賀 健『関越自動車道（新潟線）月夜野町埋蔵文化財発掘調査報告書』月夜野町遺跡調査会 1985
- 17 相京建史・中沢 悟・菊地 実「三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 18 昭和50年月夜野町教育委員会調査。
- 19 能登 建・下城 正『十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡』群馬県教育委員会 1982
- 20 相京建史・中沢 悟・菊地 実『城平遺跡・諏訪遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 21 相京建史・中沢 悟・菊地 実『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 22 能登 建・下城 正『梨の木平遺跡』群馬県教育委員会 1977
- 23 下城 正・西田健彦「群馬県深沢配石遺構」『日本考古学年報32』日本考古学協会 1982
- 24 『群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報1』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 25 中沢 悟『月夜野窯址群』月夜野町教育委員会 1985
- 26 山崎 一『群馬県古城皇址の研究 上・下巻』群馬県文化事業振興会 1972
- 27 昭和54年月夜野町教育委員会調査。
- 28 中東耕志・須田 茂「上越新幹線地域文化財発掘調査概報」群馬県教育委員会 1980
- 29 下城 正『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

第Ⅳ章 深沢遺跡

1 遺跡の概要

深沢遺跡は^{ふかさわ}県北山間部中央の利根郡月夜野町にあり、上越新幹線「上毛高原駅」の北1km、南流する利根川と東流する赤谷川の合流点の北西約2.5kmに位置している。周辺には^{なし}梨の^{きだいら}木平・^や矢瀬・^{まよなか}前中原といった縄文時代の遺跡があり、8世紀～10世紀の月夜野古窯址群も西の大峰山麓裾部に展開している。また、戦国期の^{おがわ}小川城が南1kmの段丘崖上にあり周辺に関連する中・近世集落が広がっている。

遺跡は利根川右岸の上位段丘面にあり、段丘面は南を東流する深沢によって北を同じく東流する^{みな}真沢によって切られており、幅500～150m、長さ600mの台形上の平面をなしている。また、西は大峰^{おのみね}山東麓に接し東は比高差約30mの段丘崖下に下位段丘面が広がる。

上位段丘面は概ね3段の小段丘面からなり、さらに東西に走る埋没谷によって南北に波状をなす微地形が構成されている。調査範囲は上位段丘面の中位面に位置し、幅25m、距離250mの範囲をほぼ南北に調査した。調査は調査範囲を微地形の構成や遺構のまとまりから南よりA～E区の5区に区分して実施した。各区の概要は以下の通りである。

A区 調査区の南端に位置し南に比高差約15mをもって深沢が東流している。範囲は幅25～45m、距離65mで、深沢から北西方向へ延びる幅約30mの深い埋没谷とこの谷によって切られた痩せ尾根状台地の先端部からなっている。台地上では縄文中期後半の竪穴住居が1軒確認され、埋没谷部分には縄文中期全般にわたる土器や石器が多量に流れ込んでいた。

B区 幅約50mの東西に走る平坦な台地で範囲は幅25m、距離60mである。南端はA区埋没谷への傾斜面が始まり、北のC区との間には浅い埋没谷が湾入し北端は山石が露頭する緩傾斜面となっている。B区では縄文後期の土坑37基と近世掘立柱建物8棟が確認され、グリットからは縄文中～後期の遺物が出土した。また、調査区北端の北面緩傾斜地には露頭する山石の一石が多孔石（径約2m）として使用されていた。周辺の遺物出土状態から縄文後期の所産と考えられる。

C区 C区とD区は同一の平坦な台地上にあるが遺構のまとまりにより、台地の南緩傾斜面をC区とした。範囲は幅25m、距離30mである。C区では17×20mの環状をなす配石遺構が確認された。中央部は配石のない空間となっており中央の土坑には3個体の土器が伏せられていた。配石遺構は石棺状配石20基、大型配石4基、集石状配石24基から構成されており、若干の時期差とまとまりが認められた。土器は多く出土していないが、石器は丸石・多孔石・石棒・石皿等が目立ち、石鏃が多量に出土している。また、硬玉製小玉等の飾錘具や耳栓・土偶等も少量出土した。配石遺構は縄文後期中葉の時期でB・D区に広がる土坑群と一体なものと考えられる。

D区 東へ緩やかに下る台地の頂部からE区との間にある埋没谷への移行緩傾斜面に位置し、北端には溝状遺構が東流している。範囲は幅25m、距離45mである。縄文後期の土坑27基・配石土坑1基と近世の掘立柱建物2棟・柱列4本・井戸2基が確認された。溝状遺構には縄文後期を主体とする多量の遺物が流れ込んでいた。

E区 調査範囲の北端に位置し、大峰山東麓末端の尾根状の丘陵へ立ち上がる傾斜面に位置し、範囲は幅25m、距離20mである。E区は他区と様相を異にし、平安時代の竪穴住居2軒と近世の掘立柱建物1棟、柱列5本が確認された。

2 基本土層 (第4図)

深沢遺跡は、利根川が形成した右岸段丘上にあり、すぐ西には大峰山系から八ツ手状に発達した山裾が迫り、接する位置でもある。段丘面は、比高差約30mの段丘崖を境にして沖積面と洪積面とに分かれ、洪積面はさらに上位と下位に分かれている。遺跡は、洪積面の上位にあり、標高453～456mである。A～E区は、現況の道路敷、水路等を境界にして設定したものだが、調査の結果、その下面には埋没谷や沢地が存在し、遺構分布にも対応する自然地形による境界とも合致することが判明した。

大峰山系をめぐる地質は、A区の南にある「深沢」を境にして、北が溶結凝灰岩地帯、南が緑色凝灰岩地帯と流紋岩質（軽石）結晶凝灰岩地帯に属し、地形を形成する要因としてだけでなく、平安時代の洞、深沢、真沢等の窯跡、それに供給した藪田東遺跡での粘土採掘坑といった、遺跡の立地とも深く結びついている。

A～E区の基本土層は、第4図に集成し、名称を統一した。地山は黄褐色粘土層で各区同じである。

A区. 標高453～454.50m、現況は畑地と水田で東南方向に開口する埋没谷が確認された。

I層 暗褐色土 現耕作土、FP、山石の破片が多くボソボソしている。平均30cm。

II層 黒色土 細粒、粘性がありしまっている。FP、山石、礫を少し含む。平均40cm。

III層 褐色土 粗粒、多量の山石、礫を含み、埋没谷では60cmの厚さ。遺物も含む。

IV層 暗褐色土 III層よりも細粒、山石、礫が多い。遺物を含む。平均40cm。

V層 黒褐色土 細粒、粘性があり山石を少量含む。遺物はない。平均50cm。

VI層 茶褐色土 細粒、全体に山石とローム粒を含み、強い粘性をおびる。平均15cm。

このうち、IV層～VI層は埋没谷にのみ分布する。II層～III層が遺物包含層であるが、谷にむかって北、西、東の三方向から流入、堆積している。

B～D区. C区とD区とは同一の屋根筋にあり、B区のうちC区を望む北西斜面には溶結凝灰岩の転石が露頭する。

I層 暗褐色土 現耕作土、性状はA区に同じ。C区ではローム層直上に一部がある。

II層 黒色土 C区では配石群を覆い、山石、礫、遺物が多い。

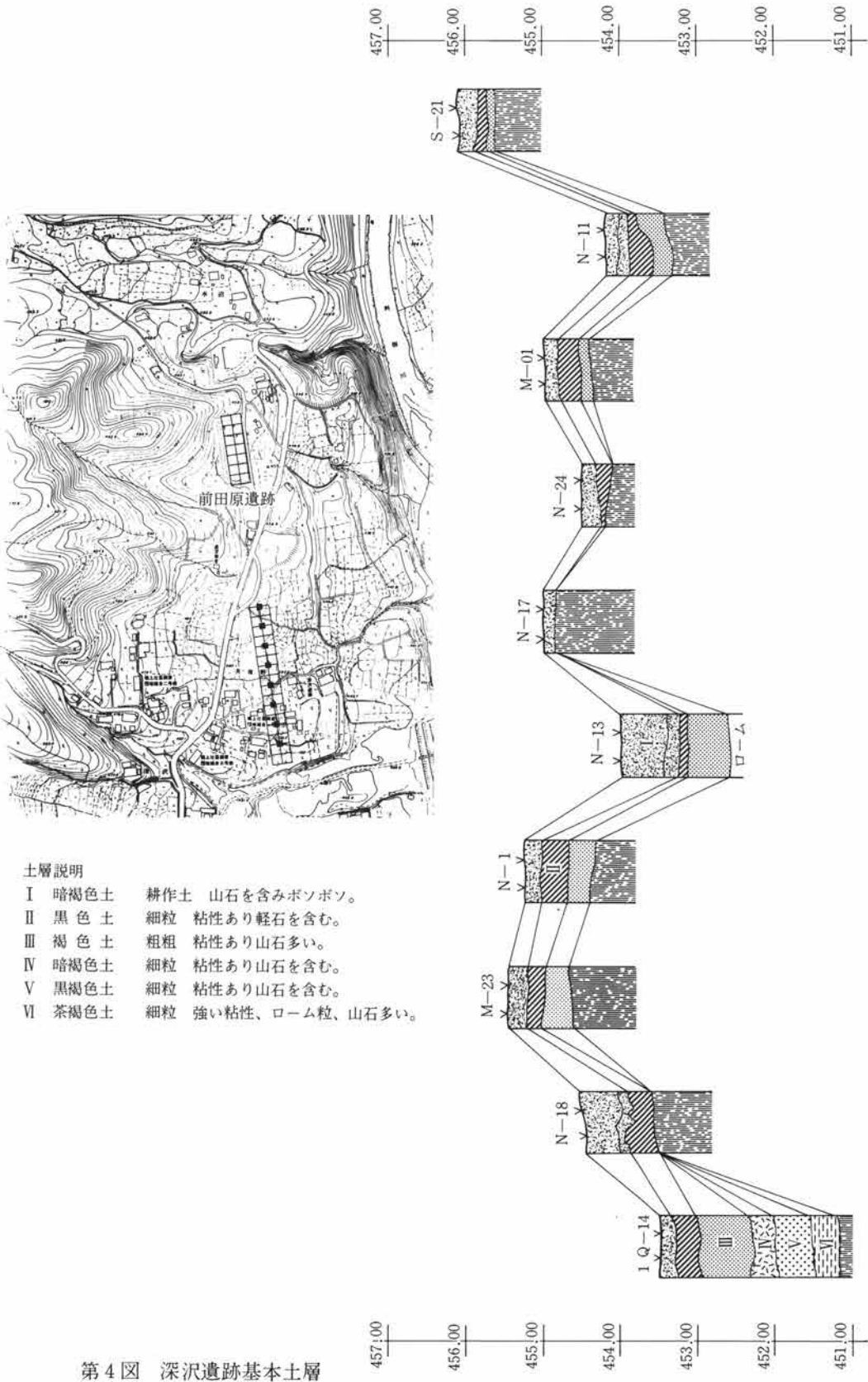
III層 褐色土 強い粘性を持ち、山石を含む。

E区. 標高454.50～456mとD区より一段高くなる。

I層 茶褐色土 現耕作土、軟質でボソボソしている。平均20cm。

II層 黒褐色土 軟質、I層よりしまりがあり、山石等を含む。平均15cm。

III層 茶褐色土 ロームブロック、風化した山石を含む。ローム漸移土層。平均20cm。



第4図 深沢遺跡基本土層

3 縄文時代の遺構と遺物

1 A 区

① 概 要 (第5・6図、図版6・7)

A区は調査区南端に位置し、東西25～45m、南北65mの範囲である。南端は急峻な崖となっており、比高差約15mをもって幅約80mの深沢が東流している。

A区北半は深沢より延びる幅30mの埋没谷が湾入しており調査区を斜めに横断している。この谷は深沢との合流点より北西方向へ約140m延び、上位段丘上位面の小段丘崖で止まっている。調査区内の谷底面の標高は449～453mで緩やかなU字状の断面をなしている。この埋没谷には中期を主体とする多量の遺物が包含されていた。これらの遺物は第Ⅲ層の褐色土中より山石とともに流れ込んだ状態で出土した。報告ではグリット出土遺物として掲載した。

A区南半は前述の埋没谷によりB区の台地より分割された幅20～40mの痩せ尾根状台地の先端部となっており、標高はB区と同じ455mである。この台地先端部で中期後半の楕円形をなす6.0×7.0mの竪穴住居が1軒確認された。A区の調査はグリット単位による人力で行なった。

A区全体の総土器量は11,020点で早・前期10点、中期10,975点、後期35点とほとんど中期の土器で占めている。これは埋没谷上方に中期の集落が連綿と存続していた可能性を窺わせるものである。

総石器量は2,830点で剥片が2,416点と約85%を占める。製品は打製石斧160点、磨製石斧2点、剥片石器121点、石鏃12点、ドリル8点、石匙6点、石皿5点、磨石56点、凹石10点、石錘3点、敲石3点、石核11点、石棒4点、その他飾錘具・丸石等10点である。これらの石器は土器の出土傾向から中期の所産と考えられる。

② 住居跡

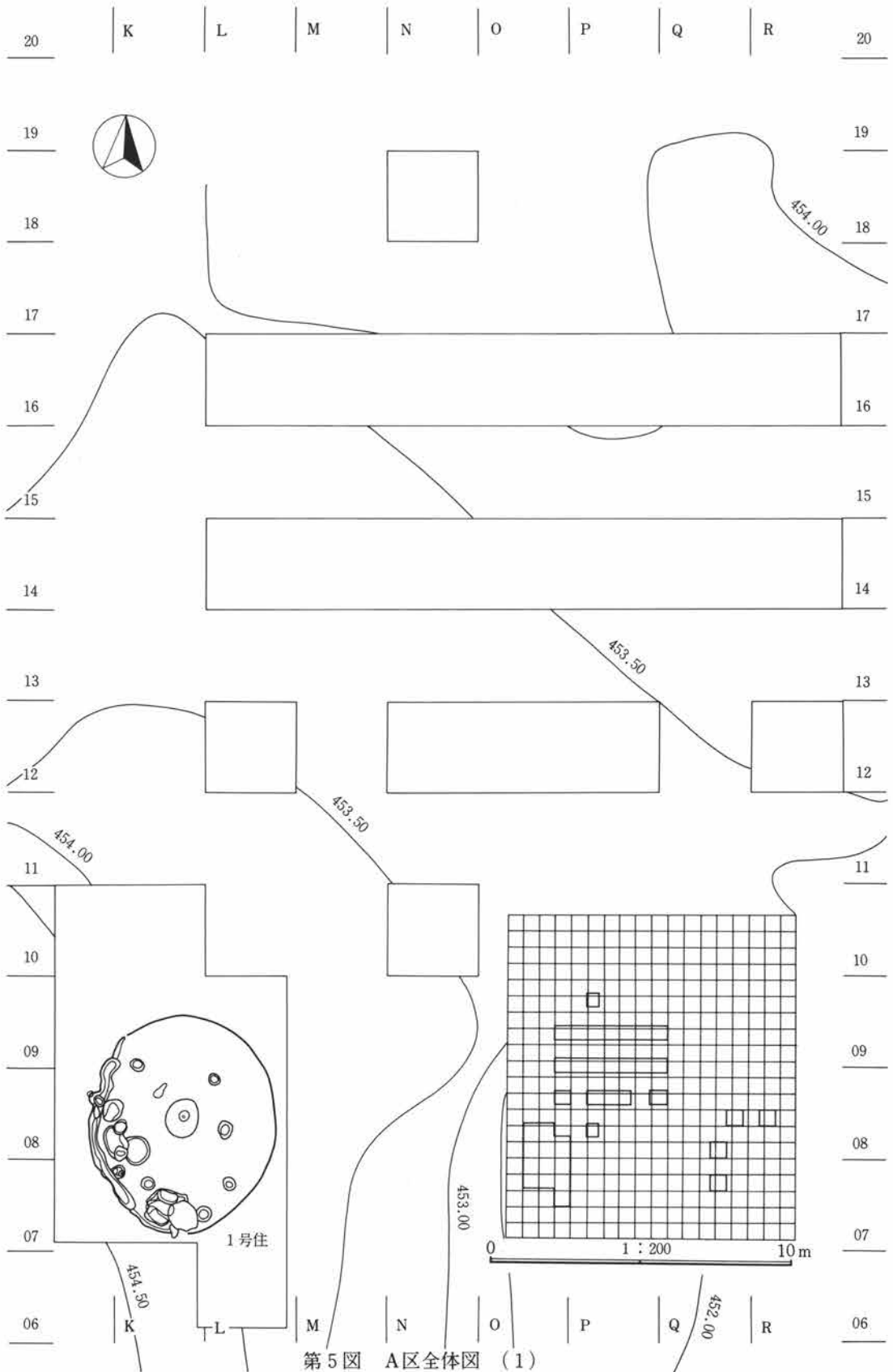
1号住居跡 (第7～9図、図版8-1～11-2)

1区L-18グリットに位置し、幅20mの舌状台地先端にある。住居周辺は表土から約20cmでローム層となり、東半から北半は攪乱を受けており立ち上がりは不明である。

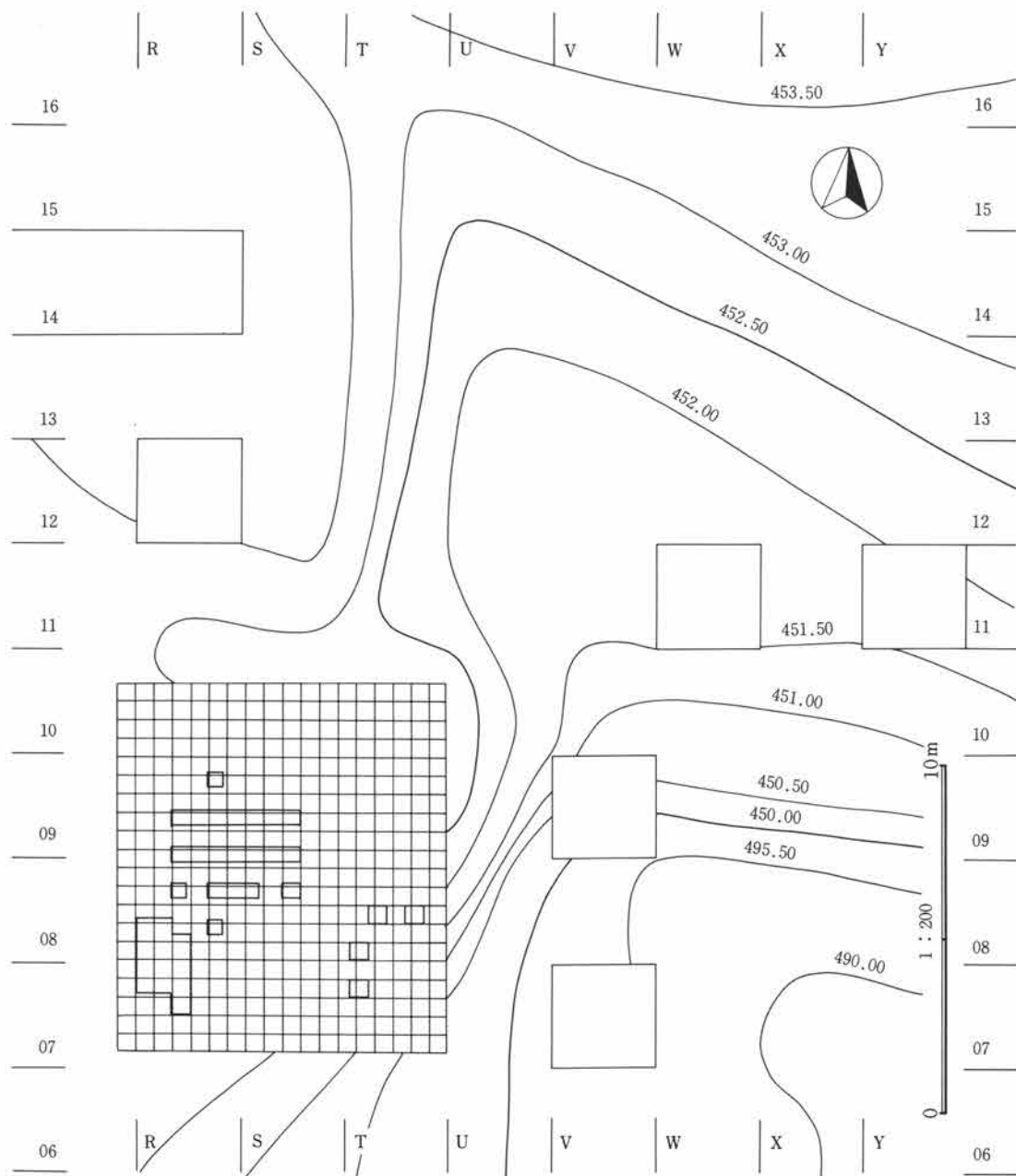
平面形はやや楕円形をなすと考えられ、規模は長軸7.0m、短軸6.05mと推定される。長軸方位はN-3°-Wでほぼ南北を示している。覆土は少量の炭化物を含み、自然に埋没した様相を示す。

周壁は西半で35cmの高さが確認され、やや屈曲を持ち直に掘り込まれている。床面はローム層中に構築しており、緩やかに東方に傾斜し中央部に向ってわずかに窪んでいる。周溝は西半のみ確認され、幅24～37cm、深さ8～15cmでU字状に掘り込まれている。10本の柱穴が確認されたが建て替えが行なわれており、Pit 1～6の6本主柱穴の時期とPit 7～10の時期とに分けられる。炉はほぼ中央に位置し楕円形をなし径1.23～1.30mの規模で、断面は皿状をなし22cm掘り込まれている。炉の中央やや北寄りに深鉢の胴部を用いた炉体土器があり周辺が良く焼けていた。また、炉の北西約1mの床面も50×30cmの範囲が焼けていた。住居の西壁寄りには2基の楕円形をなす浅い落ち込みが重複しており、周辺には遺物が多く散布していた。また、住居の出入口部に相当する南壁中央には山石が露出し、脇に125

3. 縄文時代の遺構と遺物



第5図 A区全体図 (1)

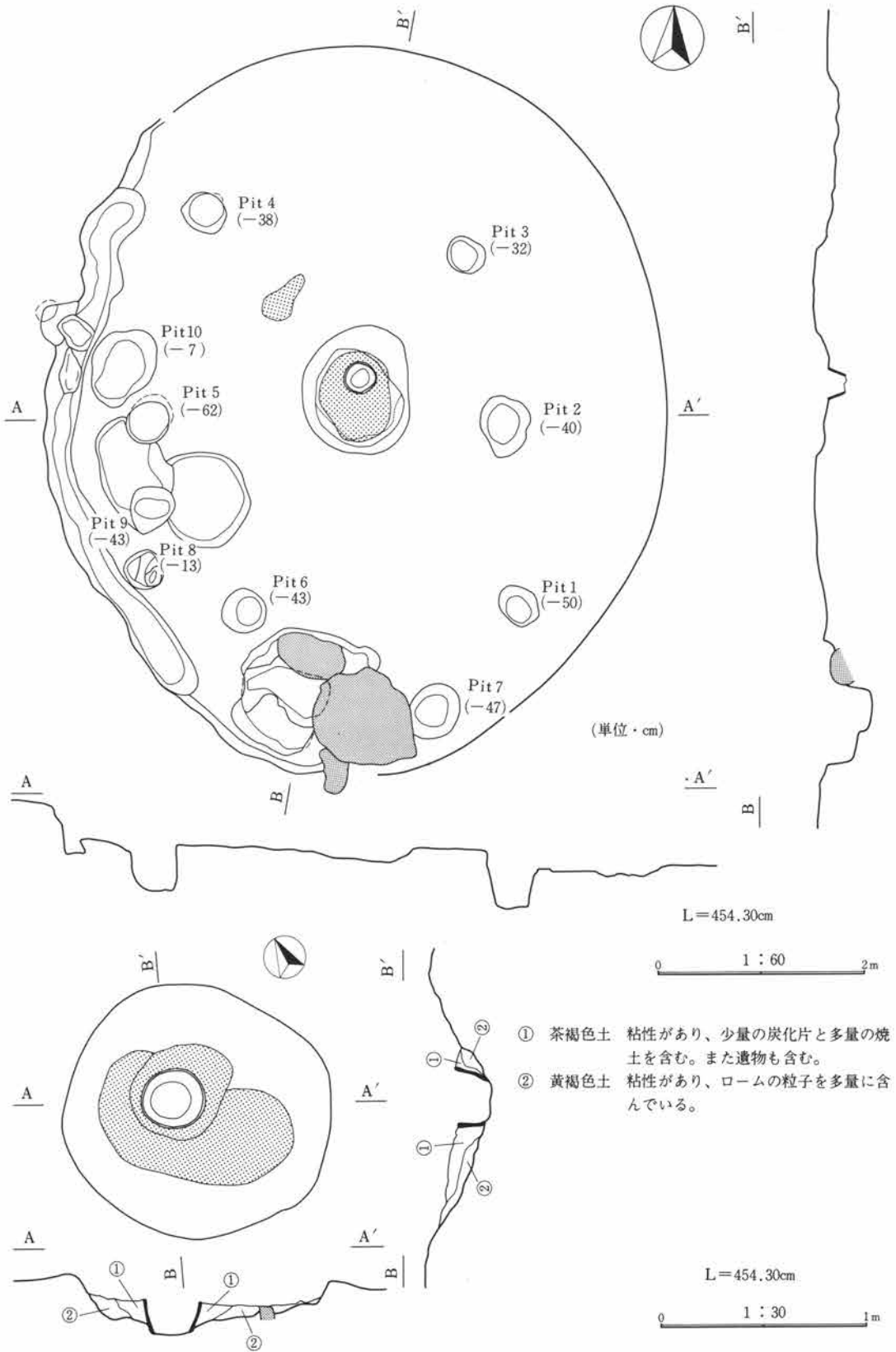


第 6 図 A区全体図 (2)

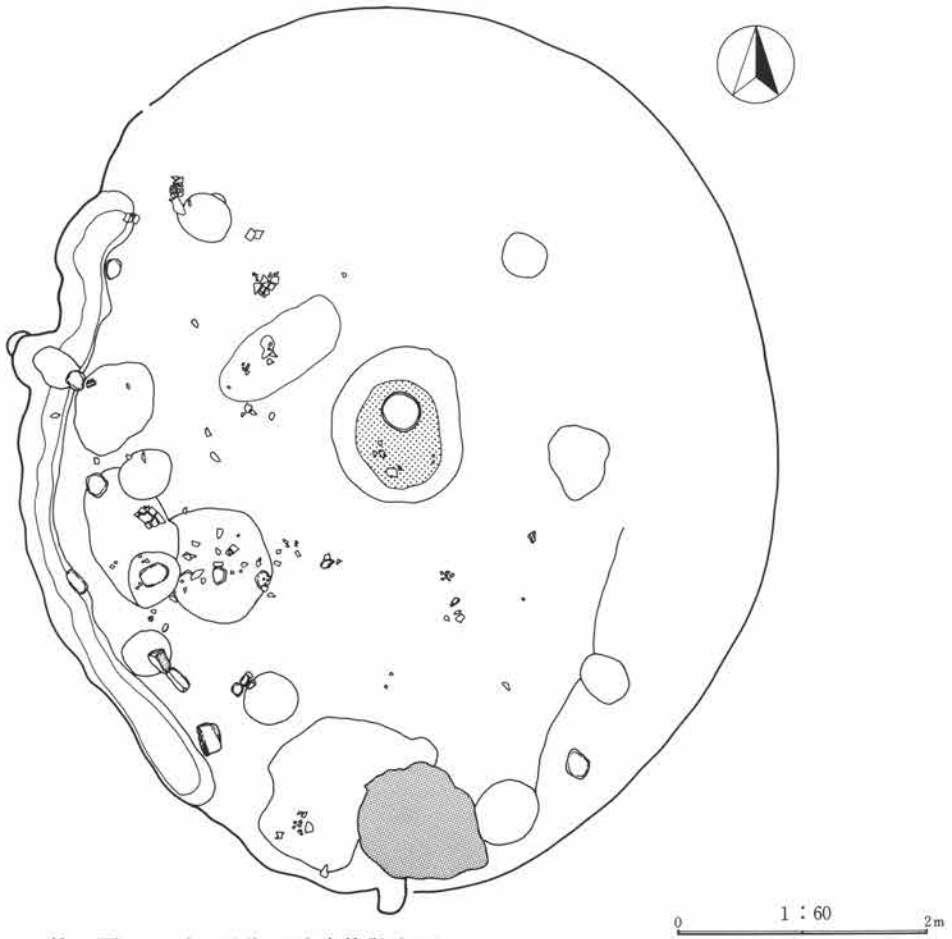
×90cm、深さ48cmの2段に掘り込まれた不整形の落ち込み1基が確認されたが性格は不明である。

出土遺物は土器片23点、石器および剥片94点で住居のプラン確認を反映して西半から南半に集中して出土した。

第9図の土器1は炉体土器で口縁部と底部を打ち欠いている。残存高15cm、最大径31cmでキャリパー形をなす深鉢の胴部である。上端には頸部の無文帯が残存し、下部に3条の平行沈線を巡らしている。胴部はRL縄文を地文とし、3本の平行沈線を2条垂下させ区画をなし、同じく3本の平行沈線をU字状に対に配している。2は西壁寄りの楕円形の落ち込み底面より出土したもので深鉢の胴部破片である。RL縄文を浅く施文し平行沈線を垂下させている。3は北西寄りの床面より出土した鉢形土器



第7図 A区1号住居跡

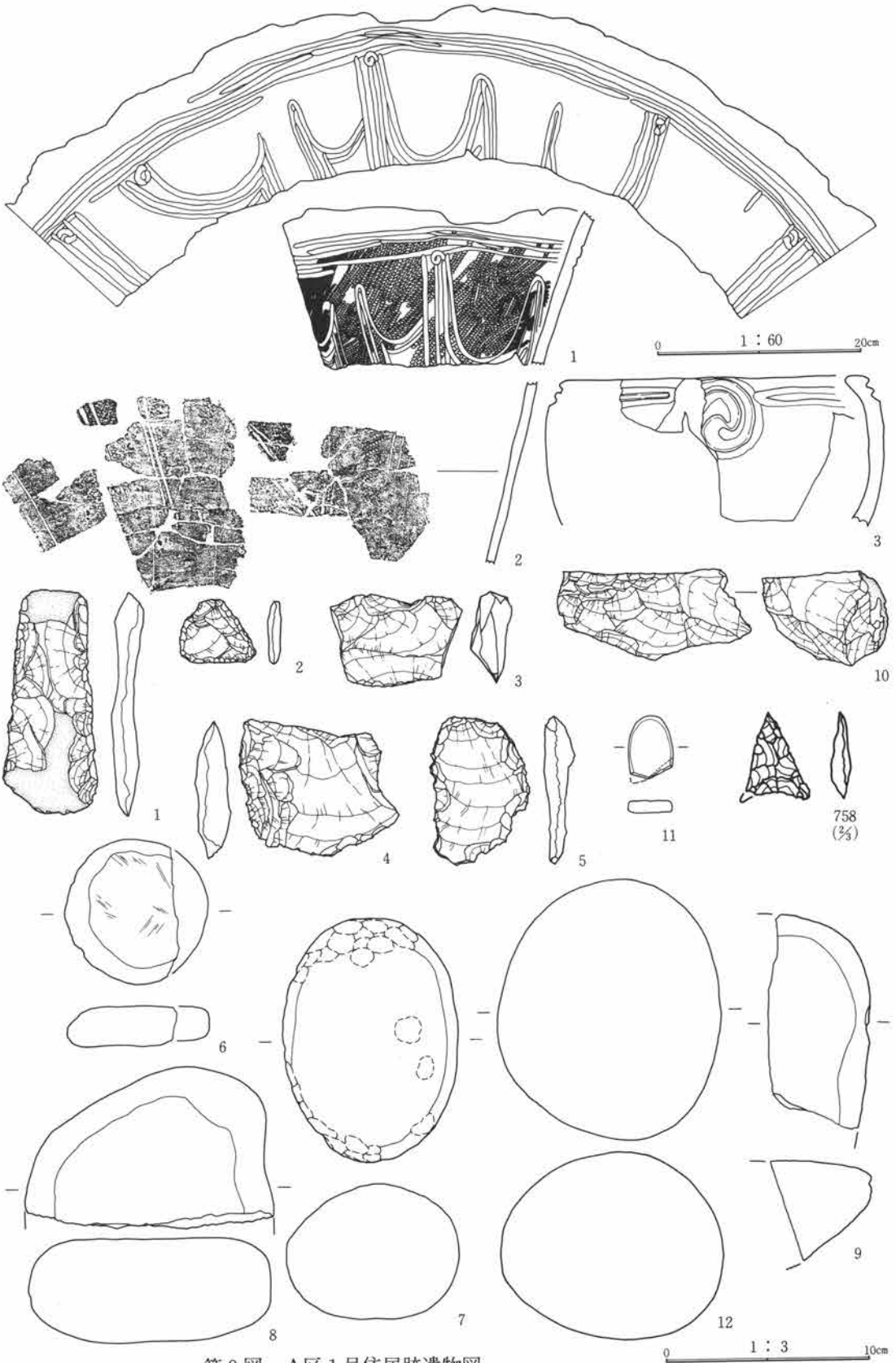


第8図 A区1号住居跡遺物散布図

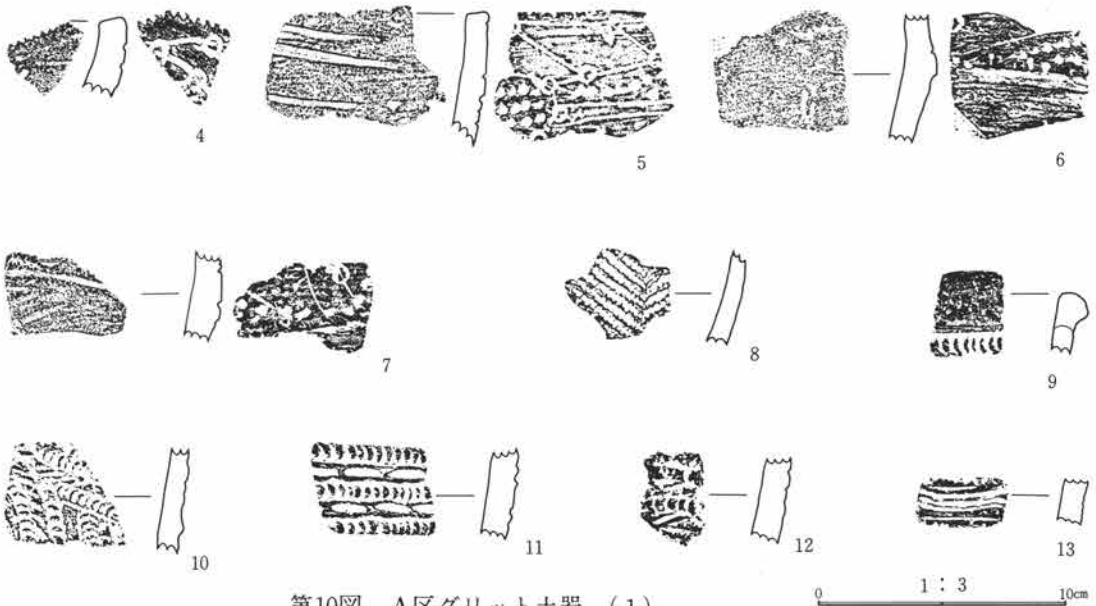
の口縁部片で、口縁直下に2条の平行沈線を巡らし隆線による渦巻文を配している。

第9図石器1は南東寄り床面より出土した短冊形打製石斧で表面に自然面を残している。2は1と同様の位置から出土した台形をした小型の剥片石器で周縁3面に刃部が作り出されている。3は西壁寄りの覆土より出土した楔状の剥片石器で先端部に直線的な刃部を作出し基部は潰している。また、両側は直線的に打ち欠いている。4は1・2と同様の位置から出土した剥片石器でL字状に刃部を作出している。5は西壁寄りの床面より出土した剥片石器で縦長剥片を用い3面に刃部を作出し基部は潰している。6は覆土より出土した偏平な磨石で不整方向の擦痕が見られる。7は西壁寄り覆土より出土した楕円形の磨石で両端部に複数の打痕が見られる。8・9はともに南東寄りの覆土より出土した偏平な河原石を用いた石皿の破片である。10は南壁寄り床面より出土した石核で上面に平坦面を設けているが打撃は多方向から加えられている。11は半円形をなし偏平に磨られている。グリーンタフの軟質な部分を用いており緑色を呈している。覆土より出土した。758は無茎の石鏃で三角形をなし、基部が浅く湾入している。

A区1号住居跡は出土遺物により加曾利EⅡ式の新しい時期に比定され、舌状台地上に同時期の小集落が予想される。



第9図 A区1号住居跡遺物図



第10図 A区グリット土器 (1)

③ グリット出土の土器 (第10～25図、図版12～20)

A区からは、中期後半加曾利EⅡ期の住居跡が1軒だけ確認されたにすぎないが、グリットからは多量の土器、石器が出土しており、隣接する所に遺構の存在する可能性が高いことを示している。

グリットは、A区の中でも結果的に遺物出土量が多かったためであるが、A区を北西から南東方向に貫く埋没谷に多く設けられた。そこから出土した遺物には、土器破片だけで11020点があり、この中には第24図に集成した土偶や手づくね土器等の土製品も含まれている。時代別の内訳は以下である。

1. 早期 4点 (茅山下層式)
2. 前期 6点 (黒浜・有尾式)
3. 中期 10975点 (a. 中期初頭～中葉 五領ケ台式、勝坂式、阿玉台式、焼町土器、北陸系)
(b. 中期中葉 大木8a式、加曾利EⅠ、EⅡ式併行)
(c. 中期後半 加曾利EⅢ式、EⅣ式、EⅢ～EⅣ式併行)
(d. 中期末葉～後期初頭 曾利式、ほか)
4. 後期 35点 (称名寺～堀之内1式併行、堀之内2式、加曾利B1式、曾谷式)

この土器型式の幅からは、遺構の時期と対応する様に中期後半に主体量が見られるが、B区～D区の後期後半の配石墓・土坑群の前段階と併行する時期の遺跡の動きを窺うことができよう。

層別別の出土状態では、基本土層の項でのべた第Ⅲ層と第Ⅳ層に限定され、その堆積方向は谷頭を背にした北側と東・西の三つがある。全体が、B区～D区の配石墓・土坑群を覆う第Ⅱ層黒色土下にあることからすると、谷の埋没が進行していく中で住居に示される様に、A区寄りにあった集落の場をより上位かC区寄りに移動させていったものと推定される。グリットから出土した土器は、遺存状態が良好で、器形復元に至らないが接合する例が多いことからすると、使用の場を近接した位置に求めることができ、集落の場を移動するに際して意図的に投棄したものとも考えられる。

早期末葉の土器 (第10図4～7)

4は小波状口縁。口唇部内外に刻みを施す。5～7は同一個体であろう。5は平縁を呈す口縁部破片。4～7とも内面に条痕が施され、円形刺突文と沈線および小型の爪形刺突文で口縁部文様帯を構成する。6は頸部の屈曲部位で、頸部以下は無文である。すべて含繊維で、茅山下層式であろう。

前期の土器 (第10図8～13)

8は単節LR・RLの羽状縄文。繊維を含み黒浜・有尾式であろう。焼成は良好である。9～13は繊維を含まず諸磯b式である。9は肥厚する口縁部破片。10～12は浮線文を施す胴部破片。いずれも浮線間を半截竹管による爪形文で充填する。11は浮線上に節の長い刺突を施し、鎖状に連続する。やや砂質で、色調も淡黄褐色を呈す。13は波状沈線文で、3・4本単位の櫛歯状工具で描かれる。

中期初頭～中葉の土器 (第11～14図)

第2図 五領ケ台式～勝坂式を集めた。

102、14は五領ケ台式。102は外傾する口唇端部に刻みを施し、平行する結節沈線に交互刺突を刻ませる。14は三角沈刻の交互刺突が見られる。

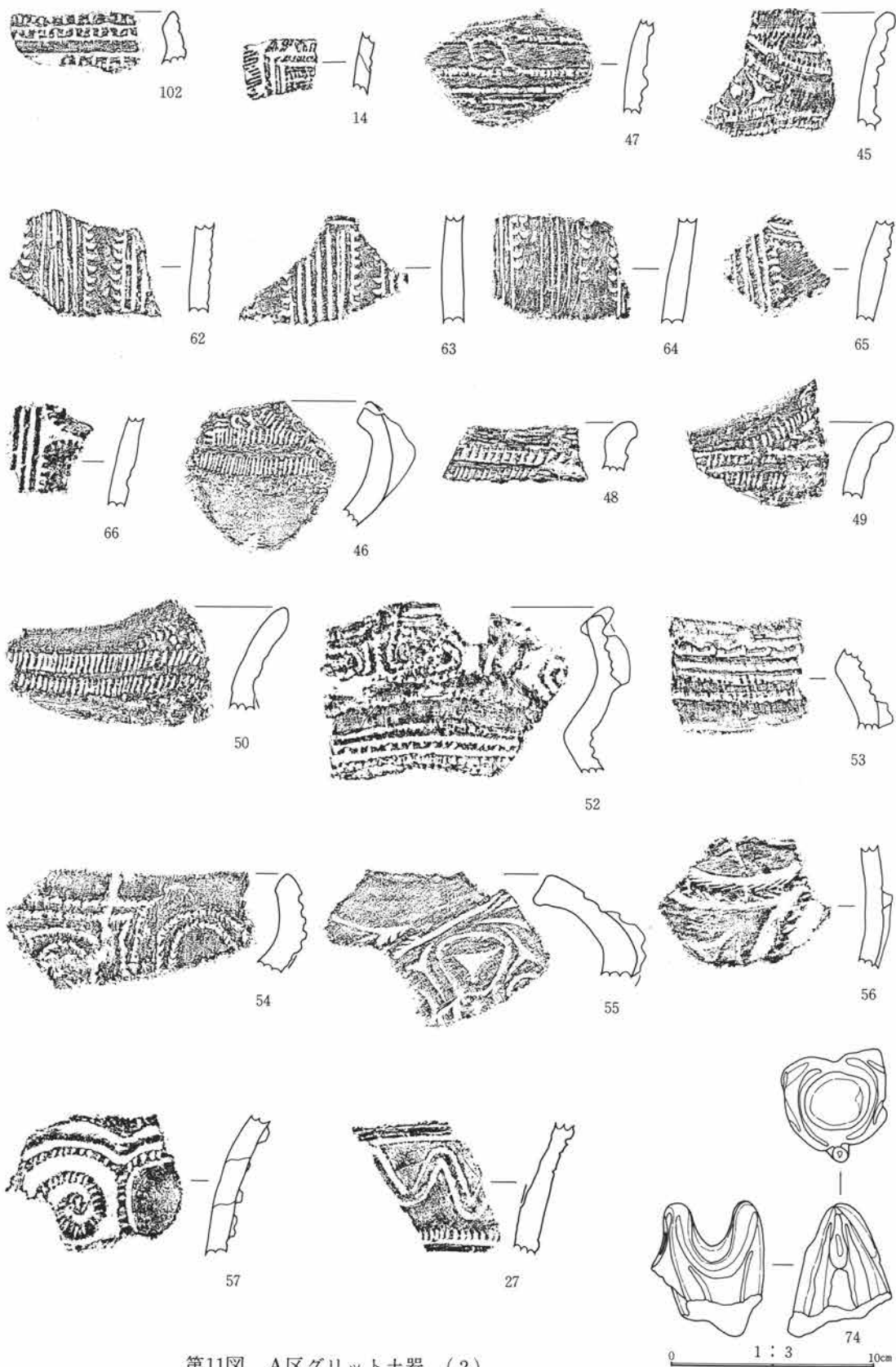
47・45は、ペン先状刺突文が密に連続し、玉抱き三叉文を沈刻するいわゆる新道式土器。45は、口縁部破片で、おそらく細隆線で三角枠の交互配列がなされるのでであろう。三角の下端には剥落しているが小突起が付される。またペン先状刺突文には小型の截痕列が沿う。47は砂質で器面は荒れている。細隆線で横帯文区画され、隆線にペン先状刺突文が沿う。

62～66は半截竹管による平行沈線が主な分割線となり、縦方向の区画を主体とする。沈線に沿って截痕列を施す土器群である。県内の中期前半の遺跡で多く見受けられ、今後、空間・時間的位置付けが注目されよう。

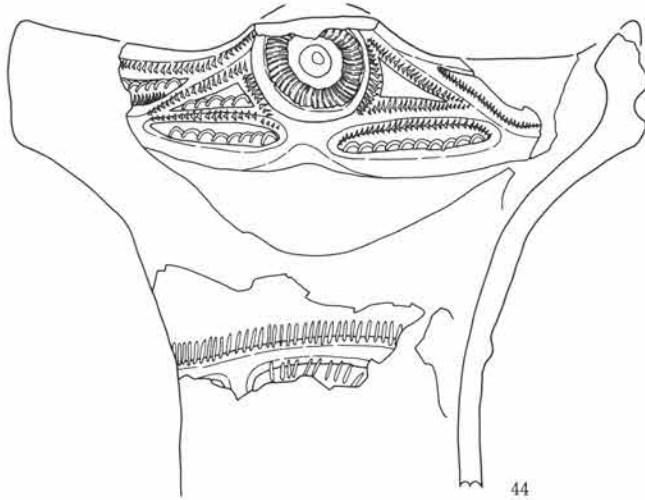
46、48～50はやや大き目の半截竹管による押し引き。いわゆるキャタピラ文。46は三角枠の交互配列であろうか。枠内には円形の刺突文を施す。48～50は同一個体。波状縁を呈する。

52の口唇部端部は1条の沈線が施され、凹状となる。口縁部は内彎し、頸部で屈曲する。胴部は膨らむ兆しを見せる。口縁部文様帯は、隆線で画され、欠損する突起で分割されるであろう。また、口唇部上に小渦巻状の小突起が付され、そこから派生する細隆線が口唇部に平行する。文様帯内は、先端の丸いペン先状刺突文2列で楕円状のモチーフを描く。無文帯を挟み、頸部の屈曲部位には数条の太めの沈線が廻る。沈線には、交互に刻みが施され、その下位には、ペン先状刺突文が連続する。口縁部内面、口唇部の外面1部には煤が付着する。

53は頸部破片。隆帯が廻り、ペン先状刺突による刻みが隆帯上に施される。平行沈線と交互刺突文。52と同様な文様要素である。



第11図 A区グリット土器 (2)



第12図 A区グリッド土器 (3)

0 1 : 3 10cm

54、平縁を呈する浅鉢か？ 口唇部には赤色塗彩がされ、外面は丁寧に撫でられている。内面はやや荒れている。口縁部は内彎し、ペン先状刺突文、三叉文によって、半肉浮彫の効果を出す。

55、著しく内傾する口縁部破片。口唇部下に無文部を持ち、隆線、三角の貼付文などが付せられ、その脇を沈線が沿い、三叉文が沈刻される。内外面とも丁寧に撫でられている。また、口唇部端部が徐々に広がるため、突起・把手が付せられるのかもしれない。

56、隆帯上に矢羽状の刻みを施し、両脇をやや太めの沈線が沿う。隆帯で囲まれた区画内には三叉文が沈刻される。

57、刻みが施された隆帯が渦巻状のモチーフを描き、浅い沈線が沿う。無文部は丁寧に撫でられている。

27は、半截竹管による平行沈線で横帯文区画され、区画内は同様の波状沈線が施される。

74は突起。おそらく口縁部上に付されるのであろう。鎌首を持ち上げる蛇を模したのであろうか、沈線で縁どられ、頭上には鎖状の隆線が付せられる。

第12図 勝坂1式である。

44はIU 10グリッド第Ⅱ層より出土した深鉢である。比較的纏まって出土し、A区における中期前半の土器で推定復元ができた唯一の資料である。口縁部～頸部1/2、胴部下半を欠損する。波状口縁を呈し、口縁部は内彎、頸部は著しく開く。胴部は円筒状を呈す。口縁部には、大小2対の円環状のモチーフを突起とし、隆線で結び三角枠を配列する。欠損しているため突起の全容は判然としないが、2A + 2aの構成を取るのであろう。枠内はペン先状刺突文、突起内はキャタピラ文が施される。頸部は幅の広い無文帯を設け、胴部上半を廻る隆帯で画される。胴部は頸部隆帯より垂下した隆線で矩形に区画されるのであろう。区画内は、キャタピラ文、平行沈線が沿う。

第13図 阿玉台式を一括した。ほとんどが雲母末を含む。

15~17、口縁部破片。口縁部文様帯に1列の結節沈線を施し、楕円区画を構成するのであろう。15は口唇部、隆帯に刻みを施し、おそらく、扇状・耳状の把手が付されるのであろう。16は微量ながら赤色塗彩されている。17、胴部にも1列の結節沈線が施される。

42は胴部破片。隆帯に沿って1条の結節沈線が施される。

18~22、口唇部に2本1組の結節沈線が施される口縁部破片。扇状・山形の把手を作り出すのであろう。21、22は波底部。18、19はやや太めで節の長い結節沈線。19の左方の結節沈線は下から上の逆位施文である。20の隆線に沿う結節沈線は1列である。21は2本1組で4列の結節沈線を施し、口縁部区画中位には波状沈線を施す。22は斜位の結節沈線が区画内に施される。

23、24は突起、把手直下の破片。細身の結節沈線が施される。

29、32は口縁部下位の破片で同様に頸部隆線と2列の結節沈線が施される。32は半截竹管によるもので、同一工具で斜位の結節沈線が口縁部区画内に充填されるのであろう。

34、35は幅広の結節沈線が横位施文される胴部破片。やや節が長く、半截竹管状工具によるものであろう小口の凹凸が看取される。

36~38、41、43、は波状沈線が横位施文される。36、41は波状沈線がヒダ状圧痕を切る。38、波状沈線に平行する隆線下に1条の結節沈線が沿う。

30、31、垂下隆線とヒダ状圧痕。

26、28、39、40は胴部刻み目列。26、波状に垂下する隆線と両脇に沿う2本1組の結節沈線。刻み目列は幅広で、左方と右方では工具が違うようである。28は胴部上半のV字状の貼り付けより隆線が垂下する。隆線にはおそらく指頭押圧が施されるのであろう。

25はカーブしながら平行する2本の隆線に2本1組の結節沈線が沿い、横位、縦位の波状沈線および小型の爪形文が横位施文される。

33は沈線で逆U字状のモチーフを描く。雲母末を含まず、他の土器片とは異質な感を与える。



第13図 A区グリット土器 (4)

0 1 : 3 10cm

第14図 いわゆる焼町土器、および北陸系の土器を集めた。

焼町土器については、野村氏の論考^註で詳しいが、群馬県北域に濃密に分布する土器群である。しかし、群馬県内における焼町土器の時間的な位置づけ、また北陸系の土器の影響などは未確定であり、第14図は、器形部位を中心とした羅列をした。

67～73は口縁部破片。67は、口唇部上に突起を付す。幅狭の口縁部文様帯を持ち、突起より垂下した隆帯が分割線となる。隆帯は橋状把手状であるが、貫孔していない。区画内は、小型の半截竹管文が施される。胴部も同様に隆線で区画され、太目の沈線が施される。68、口唇部上に尖鋭な突起を付す。突起より垂下した隆線は円環状の小突起となる。円環に沿って太めの沈線が弧状に施される。70も円環状突起を付し、隆帯で繋ぐ。口縁部文様帯は細隆線が貼り付けられ、半截竹管による平行沈線が縦位に充填される。71、山形突起から派生する隆帯がやはり円環状突起と結ばれる。口唇部は凹状で、口縁部文様帯は平行沈線と小型の刻みが施される。72、口唇部に接するように小型の円環状突起が付される。突起より細隆線が巴状に派生し、太めの沈線が隆線に沿う。73、細隆線が弧を描き、平行沈線が充填される。隆線には、粘土粒の貼付が2ヶ付される。69、柱状の突起を中核として、木葉状のモチーフを描く隆線と半截竹管による平行沈線を充填する。

75～76、80は沈線を充填する胴部破片。75、77は68と同一個体で、双環状の突起を中核とし、隆線が派生する厚手の土器である。76は隆線で木葉状のモチーフを描き、深く切り込んだ沈線に沿う。矢羽状の刻み、棒状工具の刺突文も施される。80は隆線で円のモチーフを区画し、区画内を半截竹管による沈線に沿い中位には刺突文が施される。区画上位の隆線には3ヶの刻みが施される。

59～61は垂下する沈線と、三叉状の交互刺突文を施した胴部破片。59は垂下隆線と、横位施文された3条の沈線が施され、方形区画が想起される。60の器面は淡黄褐色を呈す。沈線は半截竹管によるもの。61は底部破片。

58、78、79は平行沈線と細隆線を主体とする胴部破片。58は垂下する隆線とそれに沿う平行沈線で器面の分割がされるのであろうか。区画内は、逆U字状のモチーフを沈線で描き、また三叉文が円形刺突文の三方を囲む。78は刻みを施す隆線で二重円のモチーフを描く。隆線に沿って細身の沈線に沿う。また横位施文された平行沈線も看取される。79は隆線に沿って細身の平行沈線が施される。隆線は、円状のモチーフを描くのであろうか、上端に4ヶの刻みも施される。モチーフの中位には、棒状工具による刺突文が刻まれ、69、76と同様の文様要素である。

88～89、85はおそらく北陸系の土器であろう。色調、胎土とも他の土器と異なる。87は内傾する口唇部。波状縁か。波頂部直下に突起が付すのであろうか、剥落しており判然としない。88、89は同一個体。貼り付けた隆線がU、逆U字状のモチーフを区画し、沈線に沿う。区画内は、垂下する沈線と三叉文が対象的に配される。85は、細い粘土紐で結ばれた橋状把手を持つ口縁部破片。細隆線と沈線で充填される。突起内面も著しく施文されるが剥落している。外面は撫でられている。

註 野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例の位置付け」

中部高地の考古学Ⅲ 八幡一郎先生頌寿記念論文集 長野県考古学会



第14図 A区グリット土器 (5)

中期中葉の土器

第15図 大木8 a式、加曽利E I、Ⅱ式併行の土器を図示した。

82~84、86は大木8 a式の突起。立体的で、加飾性に富む。82の外表面は剥落。中空の突起である。内面は、双環状の突起を付し、頂部にも円環状突起を配する。双環状突起および頂部の円環状突起の間には小穴が穿たれるが、貫通はしていない。83、粘土紐を橋状に渡し、中空にした突起。中位には小渦巻を貼り付ける。3方の孔の縁辺は丁寧に整形され、小型の角押文が施される。内面は逆「の」字状の形態を呈する。中位の孔は外表面の中空突起に貫通する。84、やはり中空の突起で、小渦巻状のモチーフが三方から組合うように配される。2ケの孔が穿たれ内面に貫通する。86、双環状の突起であろうか。太い隆帯で縁取る。渦巻状のモチーフを内外面に多用する。胴部は、細隆線を格子目状に貼り付ける。

103、口唇部下に沈線が1条廻り、細隆線による剣先状のモチーフにも沿う。地文は横位 RL 縄文。

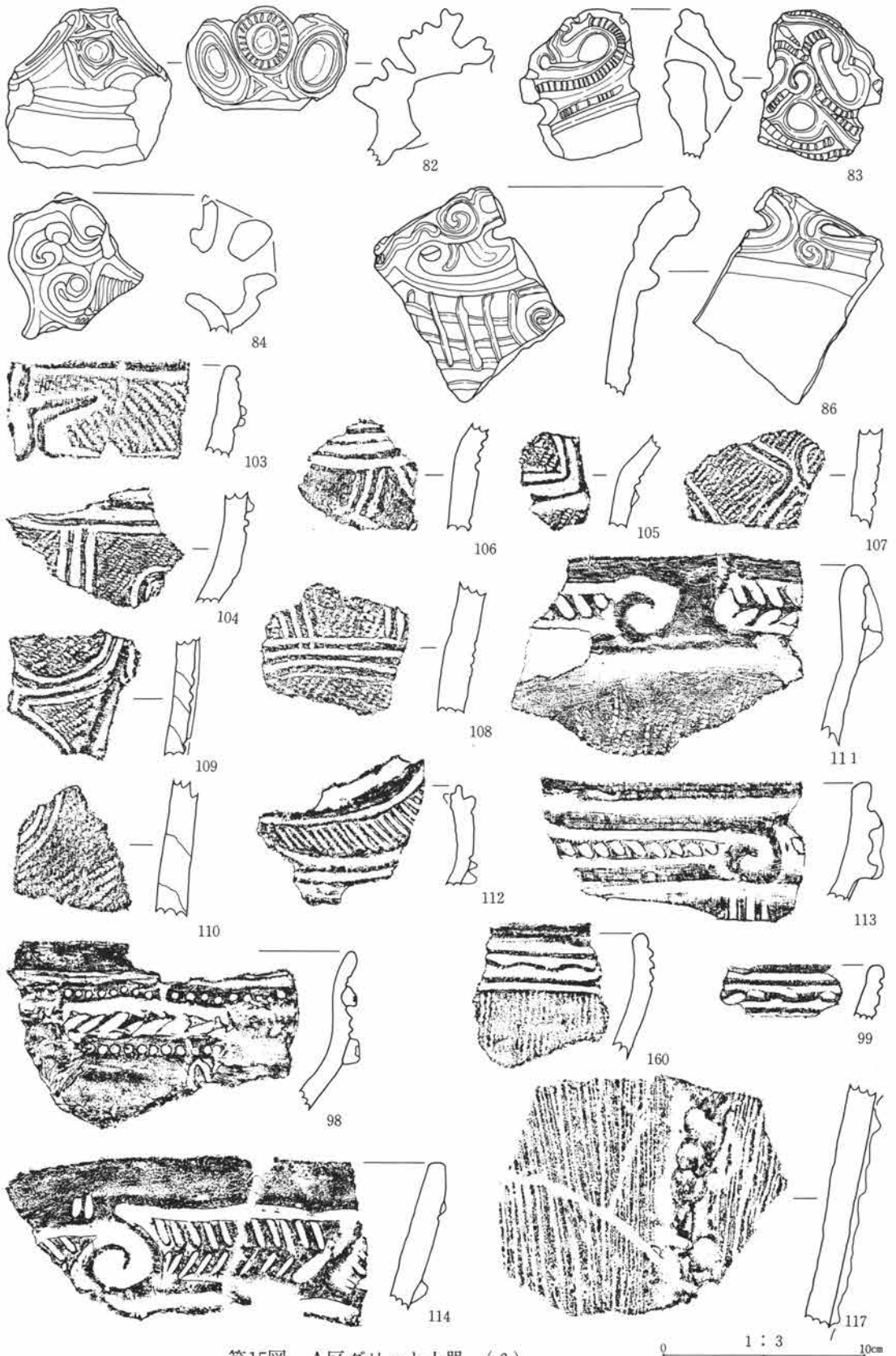
104~110は地文縄文で、半截竹管による平行沈線を施す、胴部破片。104は縦位 RL 縄文を地文とし、隆線を廻らし、平行沈線が沿う。また、3条の垂下沈線も施される。105、縦位 RL 縄文。隆線で方形に区画し、区画内を沈線が沿う。106は数条の平行沈線を廻らし、3条の沈線でU字状のモチーフを描く。沈線施文後、撫でて地文を消している。107、LR 縄文を地文とし、平行沈線で菱形などのモチーフを描く。108、4条の平行沈線を廻らし、3条の沈線で垂直分割する。器面は荒れている。LR 縄文か。109、垂下隆線より、沈線が派生し、U、逆Uのモチーフを描く。縦位 RL 縄文。110、縦位 RL 縄文を施し、2条の沈線が弧を描く。

111、113、114は口縁部文様帯を頸部隆帯で画し、渦巻状のモチーフを持つ。111は隆帯によって口縁部文様帯を画し、小渦巻状のモチーフを配す。文様帯内は矢羽状の刻みと斜位の刺突文を施す。頸部は隆帯の横撫でによって胴部の縄文を消している。地文は斜位の LR 縄文であろう。113も、2本の隆帯で口縁部文様帯を画し、隆帯に沿って沈線が沿う。列点状の刻みを口縁部文様帯内に施し、渦巻状のモチーフは粘土紐貼り付けである。頸部隆線直下より3条の沈線が垂下する。114は、口縁部文様帯内に矢羽状の刻みを施す。渦巻文の上位に2ケの刺突を刻む。

112は波状口縁破片。口唇部は切り込みによって、凸状となり、口縁部文様帯は2条の隆線で画され、口唇部、隆線に沿って沈線が施される。文様帯内は斜位の短沈線が充填される。

98、99、160は口縁部に交互刺突文を施す。98は、口唇部は外傾し、2条の隆帯を廻らす。隆帯上には、円形の刺突文が連続する。隆帯間に交互刺突が施されるが、上位のものは沈線によって崩されている。160、刺突の方向が沈線と平行である。胴部の地文は撚糸 ℓ 。

117、縦位条線を地文とし、幅広の隆帯を垂下する。隆帯は指頭押圧が施される。



第15図 A区グリット土器 (6)

中期後半の土器 加曾利EⅢ～Ⅳ式併行 (第16～21図)

第16図加曾利EⅠ。加曾利EⅡ～Ⅲ式併行

115は大型の胴部破片。緩やかな膨らみを持たせる。地文に撚糸rを施し、3条の横走沈線と垂下沈線を施す。垂下沈線は器面を等分割する区画線であろう。その他1条の沈線が弧を描き垂下する。

124、125、119は口縁部文様帯を沈線、隆帯で画し、渦巻文が隆帯と一体化する土器。124、突起を持ち、直下に渦巻文を配す。口縁部文様帯は1条の横走沈線で画される。胴部は2条の沈線が垂下し、沈線間は磨り消されている。地文は、口縁部横位RL、胴部は縦位RL縄文を施す。125、119の口縁部文様帯は頸部隆線によって画される。125の磨り消し部は幅が広く、棒状工具による磨り消しである。地文は縦位RL縄文。119は横位RLで丁寧な施文。器肉は厚く、大型の深鉢である。

122、120とも口縁部破片で、124等と同様な文様構成か。横位RL縄文。

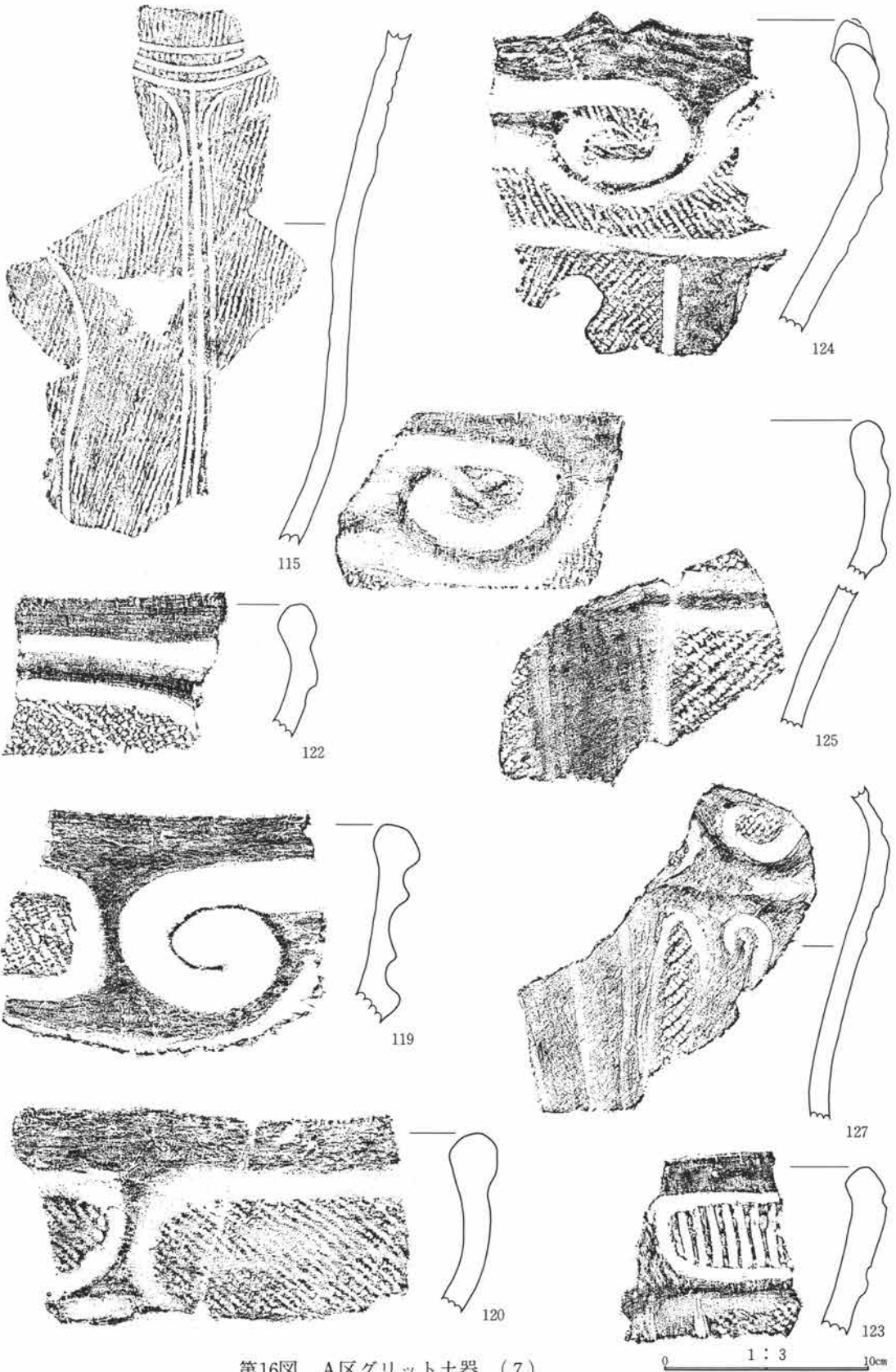
123は口縁部文様帯を隆帯で画し、楕円枠内は、縦位沈線を充填後沈線で枠取りする。胴部の沈線間は磨り消され、地文は横位RL縄文か。

127は頸部～胴部上半の破片。口縁部文様帯と胴部文様帯は分帯されるが、明瞭な分割線は無い。口縁部文様帯に隆帯と一体化した渦巻文を配し、胴部は垂下沈線、蕨手状の懸垂文を施す。地文は口縁部横位RL、胴部は縦位RL縄文で、沈線施文後、研磨している。

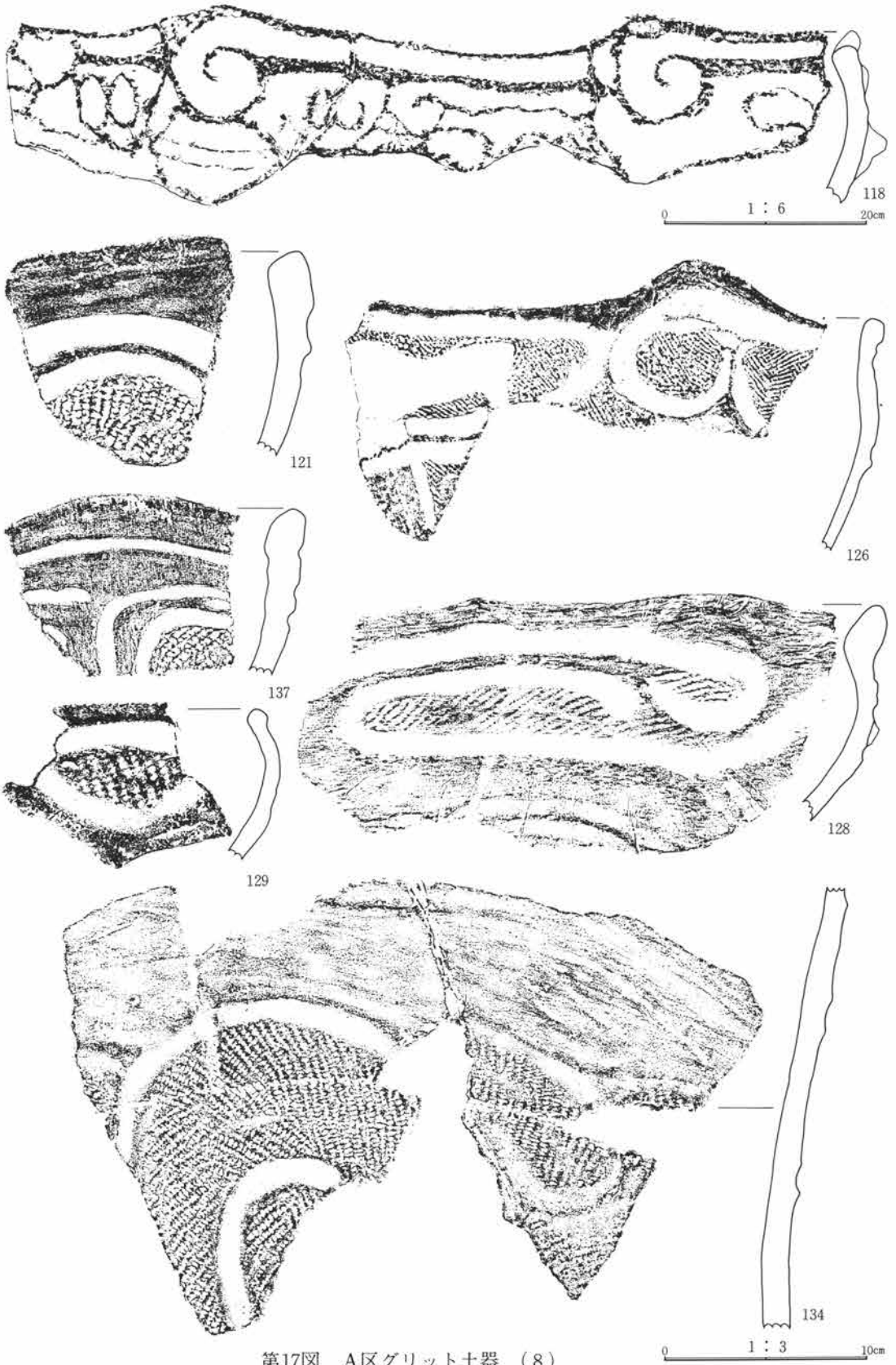
第17図 加曾利EⅢ式

118は単位の波状口縁であろう。径23cmを測る。波頂部に隆帯による渦巻文を配し、口唇部下の凹線と繋がる。口縁部文様帯は楕円文。小渦巻文を沈線、細隆線で描出するが磨滅が著しいため判然としない。

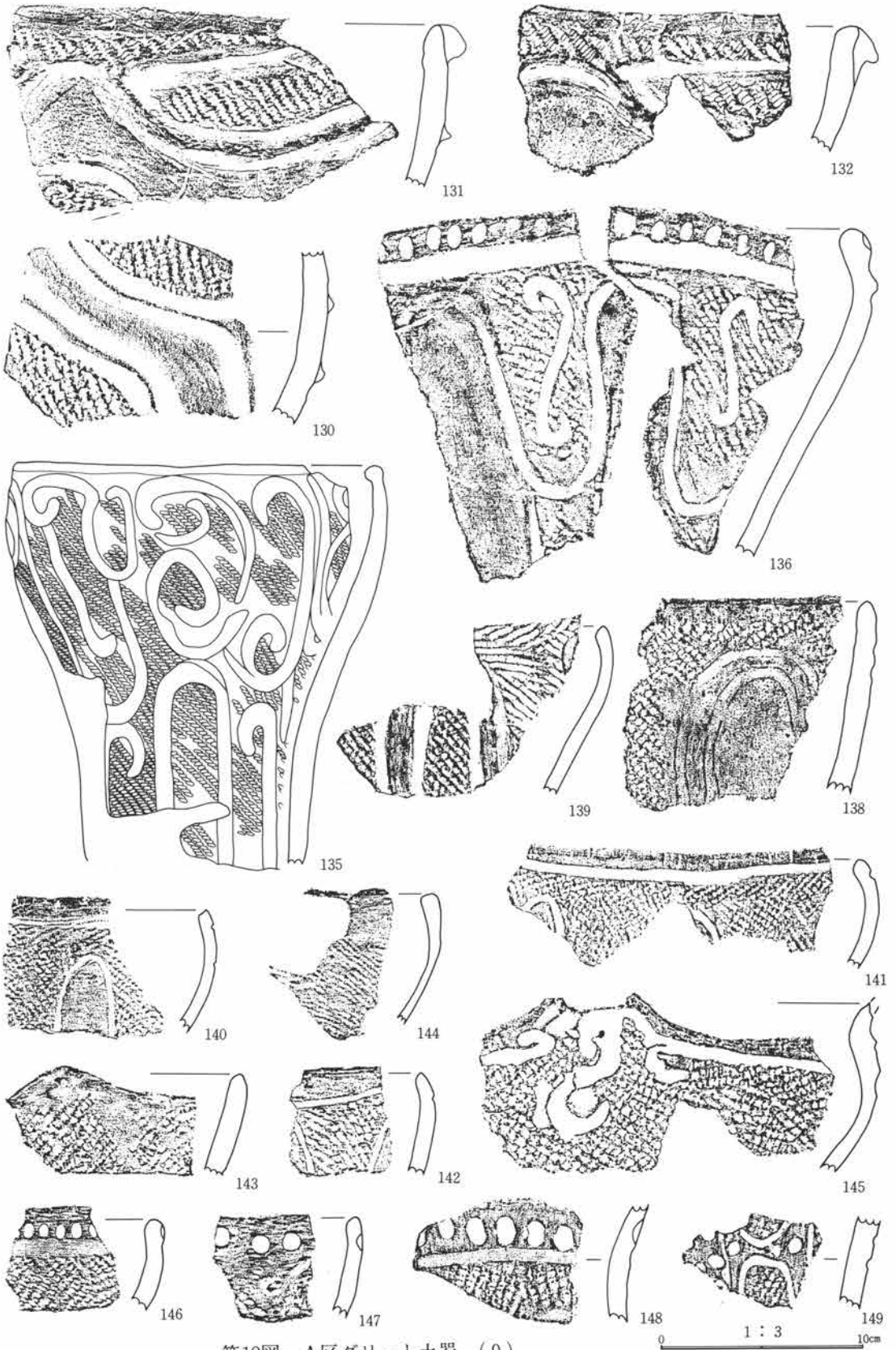
121、126、137、129、128は口縁部破片。121は口唇部下に無文部を設け、隆線と凹線で楕円区画を配するのであろう。地文は横位RL縄文。126、波状の突起を持ち、薄手でしっかりした作り。隆線で口縁部文様帯を画するが、横走するものではなく、楕円、円を区画する。胴部は沈線が垂下し、磨り消し部を持つ。地文は細身のRL縄文を横位、縦位に施す。137は緩やかな波状口縁を呈す。口唇部下に沈線を横走させ、口縁部は2条の沈線による区画文を配する。縄文は横位のLRか。129、器面は荒れている。楕円区画を配する。地文はLRか。128、波状の突起を持ち、ややだれた渦巻文を直下に配す。口縁部文様帯は渦巻文、楕円文の配列で画されるのであろう。頸部には狭い無文帯を設け、胴部には、2条の凹線が看取される。134は大型の深鉢胴部破片。口縁下の無文帯であろうか。幅広である。胴部は細隆線と凹線でモチーフを描く。縄文RLを縦位、横位、斜位に施す。



第16図 A区グリット土器 (7)



第17図 A区グリット土器 (8)



第18図 A区グリット土器 (9)

第18図 加曾利 EⅢ～Ⅳ式併行

131、132は同一個体。口唇部は肥厚し、縄文が施される。口縁部文様帯は細隆線が波状に貼り付けられ、半楕円の区画文を構成する。区画の接続部は間隔を持たせ、山形の無文部を設ける。その下位には凹線によって円形? の区画文を配するようである。縄文は横位 RL。

130は胴部破片。隆線によって画され、隆線間は磨り消される。区画の内側を凹線が沿い、縄文は横位 RL である。

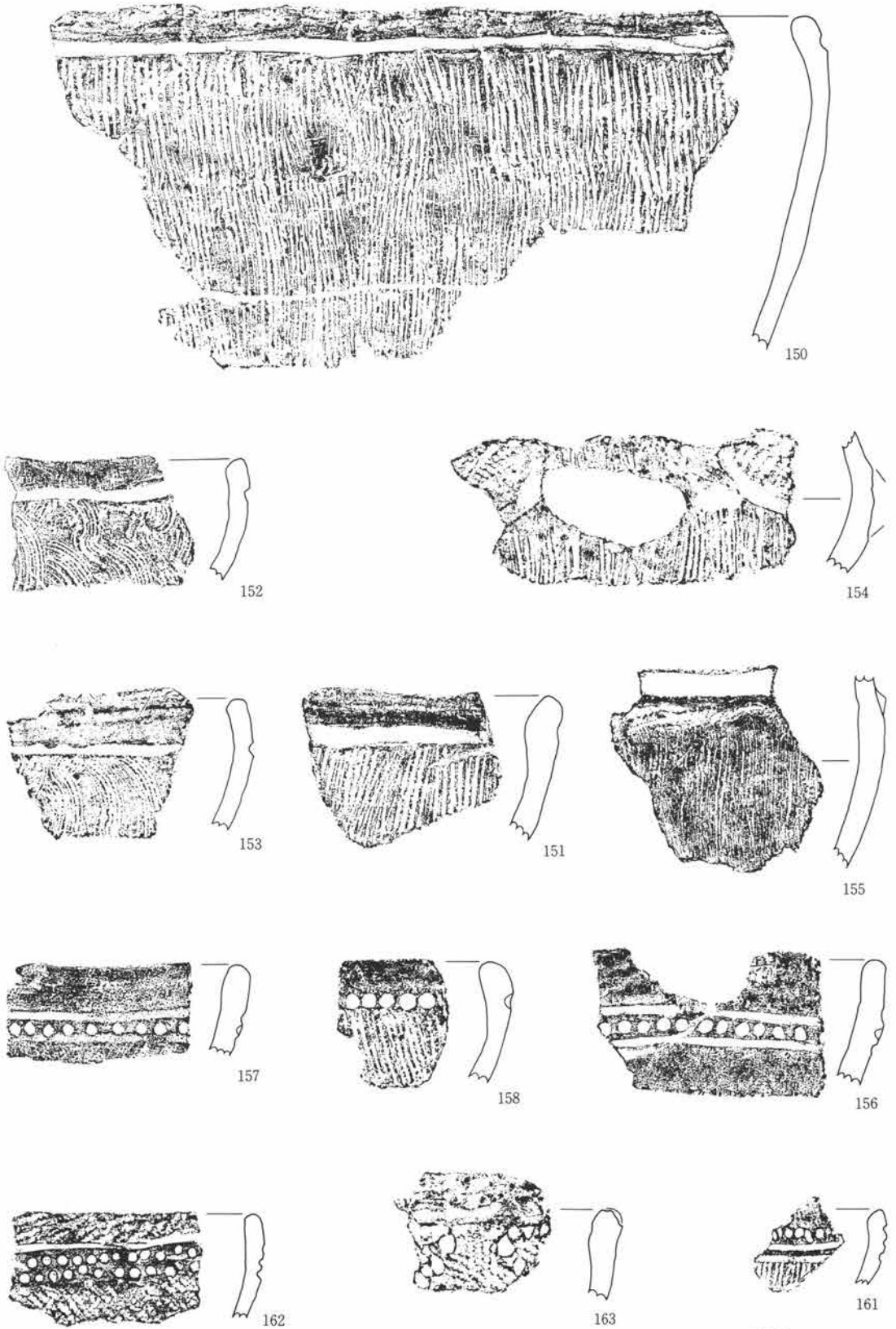
135～145は細身の縄文と沈線を主な施文手法にした口縁部破片。136、137は口縁部が緩やかに内彎するキャリパー形の深鉢。136、口唇部に刺突文を連続し、凹線を廻らす。凹線下は、沈線が波状文を描き、波底下より2条の沈線が垂下する。垂下沈線間には縄文が残され、波状沈線下は磨り消される。沈線でS・逆S字状のモチーフが描かれる。RL 縄文を施す。135は口唇部直下より蕨手状の沈線が垂下する。また渦巻、逆U字状のモチーフを沈線で描く。文様帯は上下2分帯に分割されるが、明瞭な分帯線は設けられてない。RL 縄文。内面研磨。138、139は2本1組の沈線が垂下し、逆U字状のモチーフを描く。沈線間は磨り消される。口唇部は横位、胴部は縦位 LR 縄文である。140、141、も逆U字状のモチーフの連続であろう、1条の細い沈線で描く。同一個体か。口唇部に1条の沈線を廻らせる。口縁部は横位、胴部は縦位 LR 縄文を施す。144は口唇部下に幅狭の無文部を設け、胴部はRL 縄文を施す。143、波状縁を呈し、口縁部下に1条の横走沈線を廻らせる。地文の縄文は縦位 RL。142は横走沈線と斜位の沈線が看取され、磨り消し部を持つ。縄文は横位 RL。145、波状縁を呈し、波頂部を突起とする。突起直下にS字状のモチーフを沈線で施す。口唇部下には沈線が横走し、突起下の小渦巻で止る。地文の原体は0段3条 LR。突起周辺、胴部は縦位。口縁部下は横位施文である。

146～149は刺突文を施す。146、147は口唇部下に、148は胴部を横走する沈線上、149はU、逆U字上の区画の接点の両脇に付され、垂下沈線に沿って縦位に刺突される。

第19図 加曾利 EⅢ～Ⅳ式併行

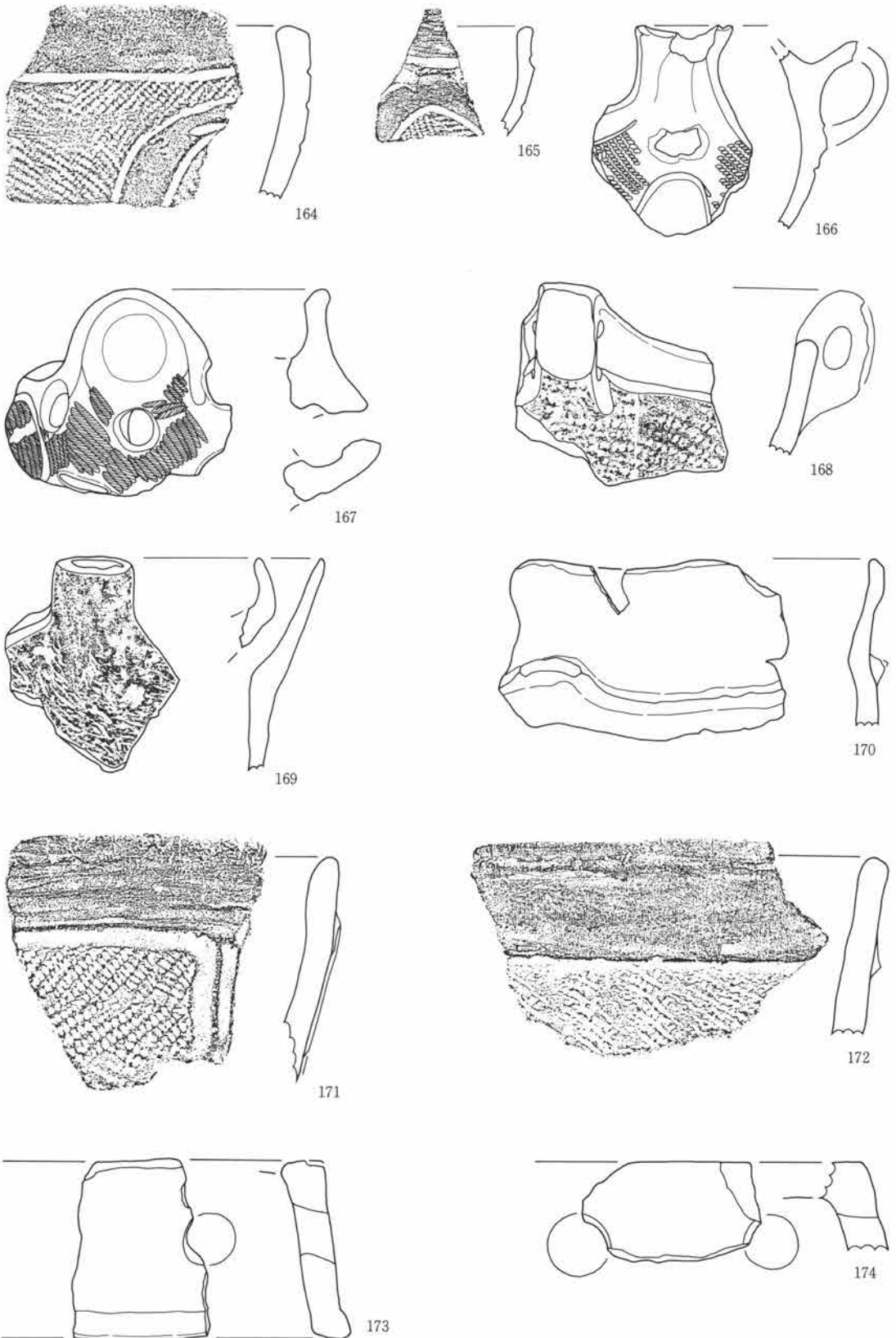
150～155は櫛歯状工具による縦位の条線を充填する土器。150～153は口縁部に1条の沈線が廻る。150は大型の深鉢。口径約28cmを測る。条線は5～8cmの長さで纏まりを持って施文される。151の条線も同様に直線的に垂下する。152、153は6、7本単位の波状沈線が雑に施される。154は口縁部に凹線による杵状文が配され、直線的な条線が施される。杵内の縄文は横位 RL か。剥落部は隆帯が付されたと思われる。155は胴部破片。横走する隆帯は盛り上がり、カーブするためおそらく頸部の隆帯であろう。条線は浅い。

156～157、161～163は口縁部に刺突列点文を施す。156、157は2条の平行沈線の間刺突文を連続する。胴部は無文か。158は地文に条線を施す。162は口唇部の横走沈線下に2列の刺突文を施す。口唇部はLR、胴部はRLでいずれも横位施文。161、163、口唇部に幅の狭い無文部を設ける。



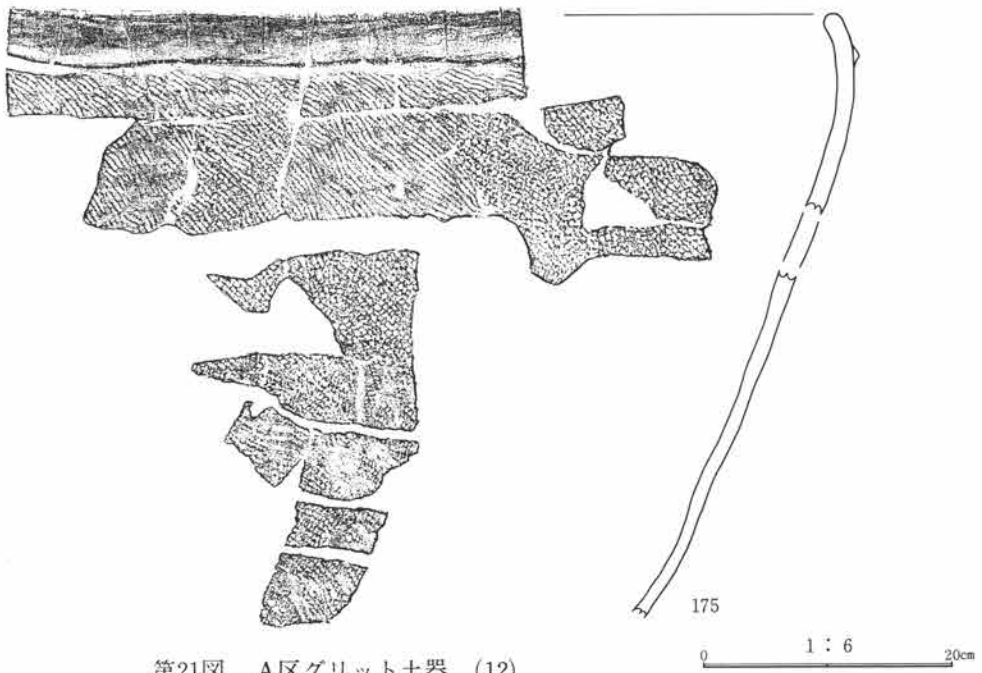
第19図 A区グリット土器 (10)

0 1 : 3 10cm



第20図 A区グリット土器 (11)

0 1 : 3 10cm



第21図 A区グリット土器 (12)

第20図 加曾利EⅣ式、器台

164、165細沈線を施す口縁部破片。164は口唇部下に1条の細沈線を横走させ、胴部は2条の沈線を平行させ、その間を磨り消す。地文の縄文は横位LRを上位に、縦位LRを下位に施す。165は口縁部に1条の細隆線を廻らし、胴部は細沈線で区画を囲む。磨り消し部など内外面とも丁寧に研磨する。

166～169は突起、把手。166、橋状把手を付すのであろう。口唇部に細沈線が沿い、突起下に同様の沈線で逆U字状のモチーフを描く。縄文は横位RL。167は中空の把手。半円形の突起を付す。中空部には5ヶの孔が確認できる。無節の縄文Lを施す。168は橋状把手。口縁部に1条の細沈線を横走させるが把手内面では離れる。縄文は横位RL。169、注口土器の注口部。無節縄文Lを施し、突起部は雑に撫でられる。

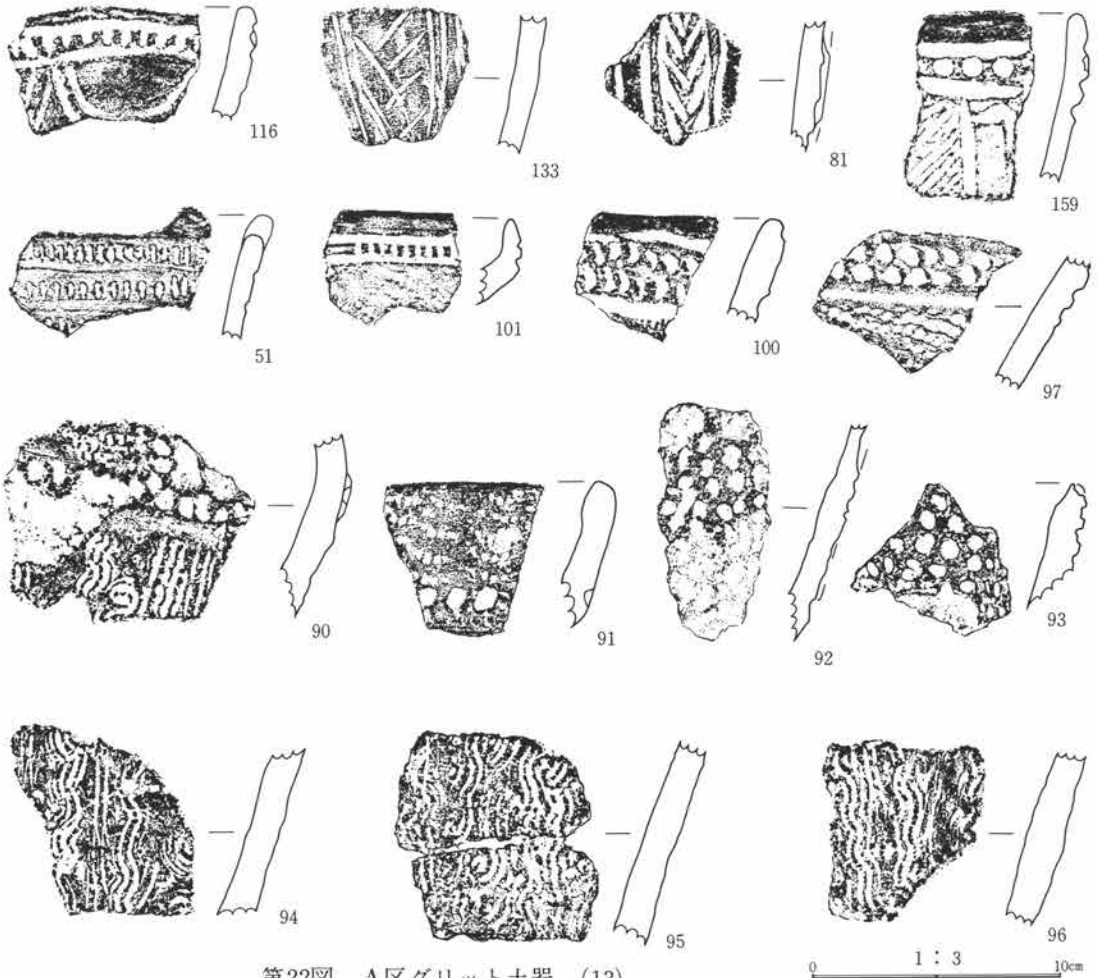
170は両耳壺か。緩やかな波状縁を呈し、口縁部は僅かに内彎しながらも直立する。頸部に1条の細隆線が廻り、1部山形を呈す。

171、172は口縁下に細隆線を廻らせる。口縁部は無文である。171は垂下隆線で区画文を配するのであろう。縄文は横位、下位は縦位LRが施される。172、口縁部の無文帯はやや幅広で、鋭角に撫でられた隆線が廻る。縦位LRを施す。

173、174は器台である。173は1ヶ、174は2ヶの孔が看取できる。174の上面は丁寧に撫でられ、平滑である。

第21図 加曾利EⅣ式

175、大型の深鉢。口径約48cmを測る。細隆線を廻らし、口縁部は無文である。隆線以下は細縄文を横位RLに施文する。



第22図 A区グリット土器 (13)

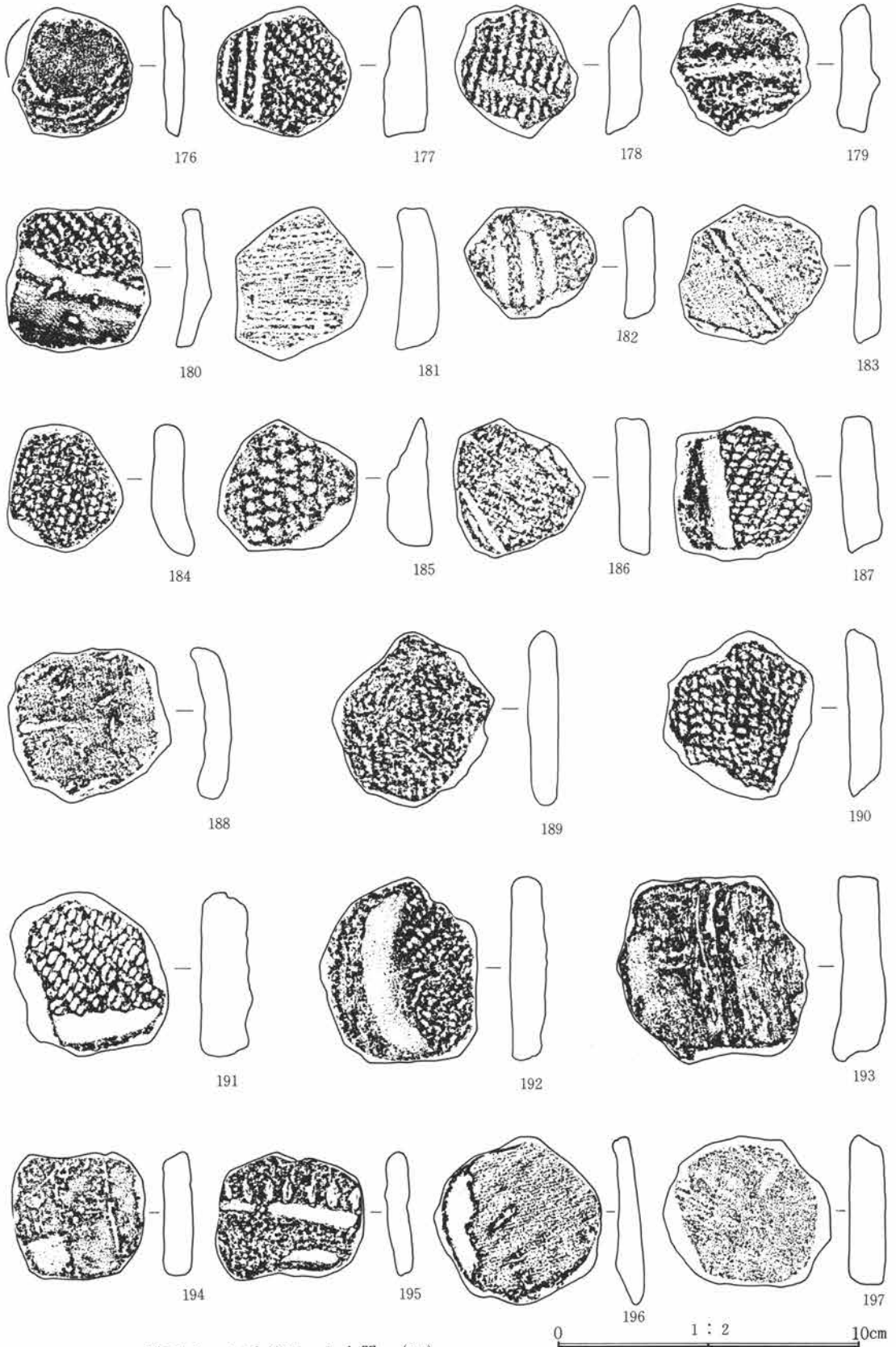
中期末葉～後期初頭の土器

第22図 116は口縁部に2条の平行沈線を横走させ、その間に刻みを施す。沈線下位には、2条1組の沈線が弧を描く。連弧文系の土器か。133は垂下沈線と綾杉文を施す。曾利式であろう。81も同様に綾杉文が看取できるが垂下隆線による分割であり、133とは系統が異なる。159は口縁下の平行沈線間に円形の刺突文を刻む。胴部には垂下沈線と綾杉文が施される。曾利式。

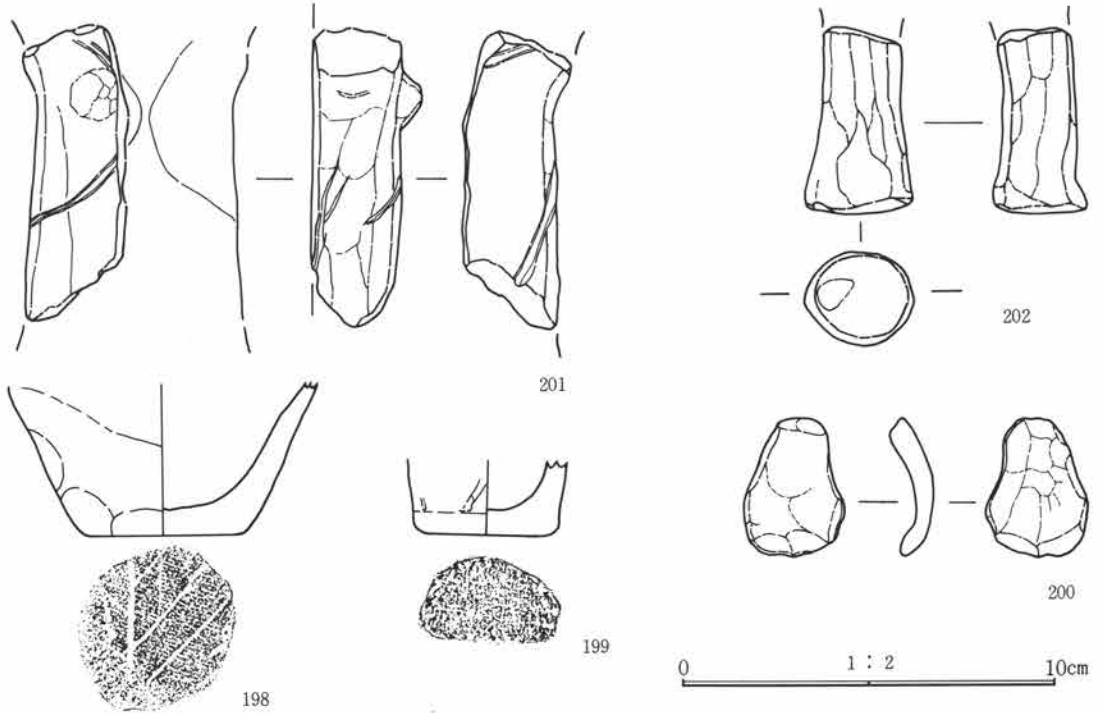
51は後期の土器であろう。小突起を口縁部上に持つ。ヘラ状の刻み目列が3条横走する。弧線入り組文がクランク状に施されるのであろうか。安行1式に併行すると思われる。101も後期の土器であろう。口縁部に深い平行沈線を横走させ、刻み目列をその間に施す。

100は2条の幅を持たせた平行沈線間に爪形状の刻み目列を2列施す。中期末葉と思われる。97は2列の円形刺突文を連続し、横走沈線下は複節縄文RLRを施す。

90～96は軟質な胎土で同様な文様要素を持つ。口縁部(91)は楕歯状の刺突文を施し、隆帯状には鎖状の刺突を刻む(90)。胴部は刺突文を充填するもの(92、93)と、楕歯の条線を縦位波状に施すもの(94～96)がある。これらの土器片に対しては妥当な型式名が見当たらず、とりあえず中期末葉～後期初頭に編年の位置を求めたい。



第23図 A区グリット土器 (14)



第24図 A区グリット土器 (15)

土製品等

第23図 土製円盤を集めた。

土製円盤は総計22点を図示した。ほとんどが中期後半の土器の胴部破片を利用している。文様の内訳は、縄文12、無文5、沈線2、条線1、細隆線1、刻み目列（阿玉台式）1を数える。

第24図 土製品他

201は土偶胴部。胸部～臀部にかけて比較的直線的な胴形態である。202は土偶脚部。つま先がやや広がり、丸みを帯びる。

198は木葉痕が底部に残る小型の深鉢底部。

199はミニチュア土器。底部端部に垂下隆線による区画が看取できる。

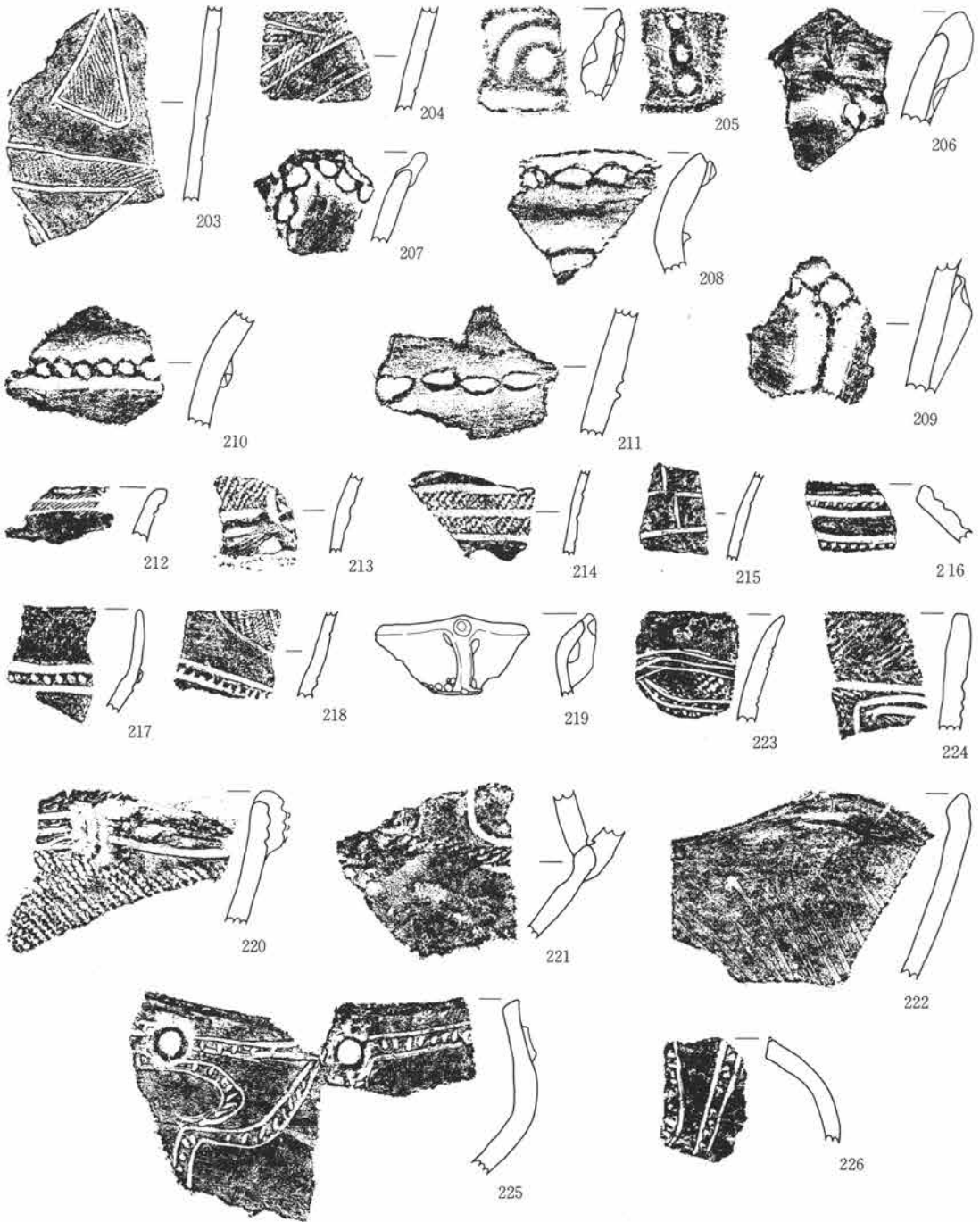
200は匙状の土製品。図上方が柄部である。

第25図 後期以降の土器を集めた。

203～205堀ノ内式2式。203は沈線による区画内をLR縄文を充填する。205の外表面は鎖状の隆帯を垂下させ、内面は同心円状の文様を描く。

206～209は称名寺～堀ノ内1式併行。206、波状の小突起と鎖状隆帯。207、小突起から分岐する鎖状の隆帯。内面には円形の刺突が施される。208は口唇部に、指頭押圧による波状紐線文を施す。209、円形の刺突文の中核として、細隆線が垂下し、鎖状の隆帯が横走するのであろう。

210、211は刺突による鎖状隆帯を横走させる。後期初頭と思われる。



第25図 A区グリット土器 (16)

0 1 : 3 10cm

212、216、223は加曾利B 1式に比定されよう。214は横走る縄文帯の弧線化が看取できる。216は注口土器の口縁部破片であろうか。223は懸架文に近い。

217、218、222は加曾利B 2式。平行沈線間に刺突文を連続し、217は口縁部に対弧文の一端が施される。222は波状口縁を呈し、内稜を持つ。羽状沈線を施すのであろう。加曾利B 2・3式。

219は堀ノ内2式。小型の橋状把手を刺突文下に付す。

224は細縄文を施し、口縁部下に沈線を横走させる。胴部は1・2条の沈線で区画を構成する。弥生中期か？

220は3条の沈線で、幅の狭い口縁部文様帯を構成する。帯状縄文を構成していないことから広義の曾谷式であろう。

221は注口土器の注口部破片。堀ノ内2式。

225は縁下に円形の貼付文を付し、平行沈線間に刻み列を施す。称名寺式末葉～堀ノ内1式に比定される。

226も平行沈線間にまばらな刺突文を施す。称名寺式の終末の様相か。

② グリッド出土の石器

13～51は打製石斧である。13～25は短冊形の石斧である。13は刃縁がやや丸みをもつ。15の刃縁はやや右上りとなっている。16の刃縁も丸みをおびている。17も同様な形態を呈しているが、刃部の先端は欠損している。18は刃縁が右上りとなった斜刃である。19の刃縁は山形に突出した角刃となっている。20と21は正面に礫表皮を残している。刃縁はやや丸みをもった小形の石斧である。23は器中央部に着柄によると思われる磨耗痕が認められる。25は側縁部に入念な調整加工を施した、薄身の小形石斧である。26は板状の礫から剝離した薄い剝片を素材としている。小形のノミ型をした石斧である。27は正面に礫表皮を残す薄身の石斧である。28も27と同様に薄身の石斧である。29も薄身の石斧であるが、表面は自然面をそのまま使用している。刃縁はやや丸みをもっている。30は掬形の石斧である。基部の両側縁から調整を施し、三角形状に作出している。31は正面の右側部分に調整剝離を施し、掬形の石斧としている。主要剝離面はそのまま残されている。32は短冊形の石斧であり、正面の両側縁はやや挟り込まれたような作りとなっている。基部は方形を呈し、刃縁はやや右上りとなり、使用による磨耗痕が認められる。33は短冊形の石斧であり、刃縁はやや右上りで、丸みをもっている。また、器体は彎曲している。

34～36は短冊形の石斧である。刃部は方形を呈している。厚い作りのものである。35の刃縁は左上りとなっている。36の刃縁は丸みをもち、使用による磨耗痕が認められる。37～39は大形で掬形を呈する石斧である。基部には入念な調整加工が施されている。38の基部下端には自然面が残っている。39は正面に礫表皮を残している。裏面は主要剝離面をそのまま残し、刃部のみ調整加工が施されている。また、基部には着柄による磨耗痕が認められる。40～44は小形で掬形の石斧である。正面右下端部は使用により破損している。41は使用により両端ともに破損している。また、刃部左下端部には磨耗痕が認められる。43は刃部先端に磨耕痕が認められる。片刃状の作りとなっている。44は薄身の作りで、両側縁部にはこまかな調整加工を施している。45と46は大形で分銅形を呈する石斧である。正面には大きく自然面を残している。刃縁は左上りとなり磨耗痕が認められる。46は刃部と挟り部に顕著な磨耗痕が認められる。また、刃縁は丸みをもっている。さらに、基部にも磨耗痕が認められ、両端が刃部として使用されたと考えられる。48も46と同様に挟り部に磨耗痕が顕著に認められる。49と50は広楕に類する大形の石斧である。裏面から刃部加工を施し、刃縁は丸みをもっている。50の刃縁

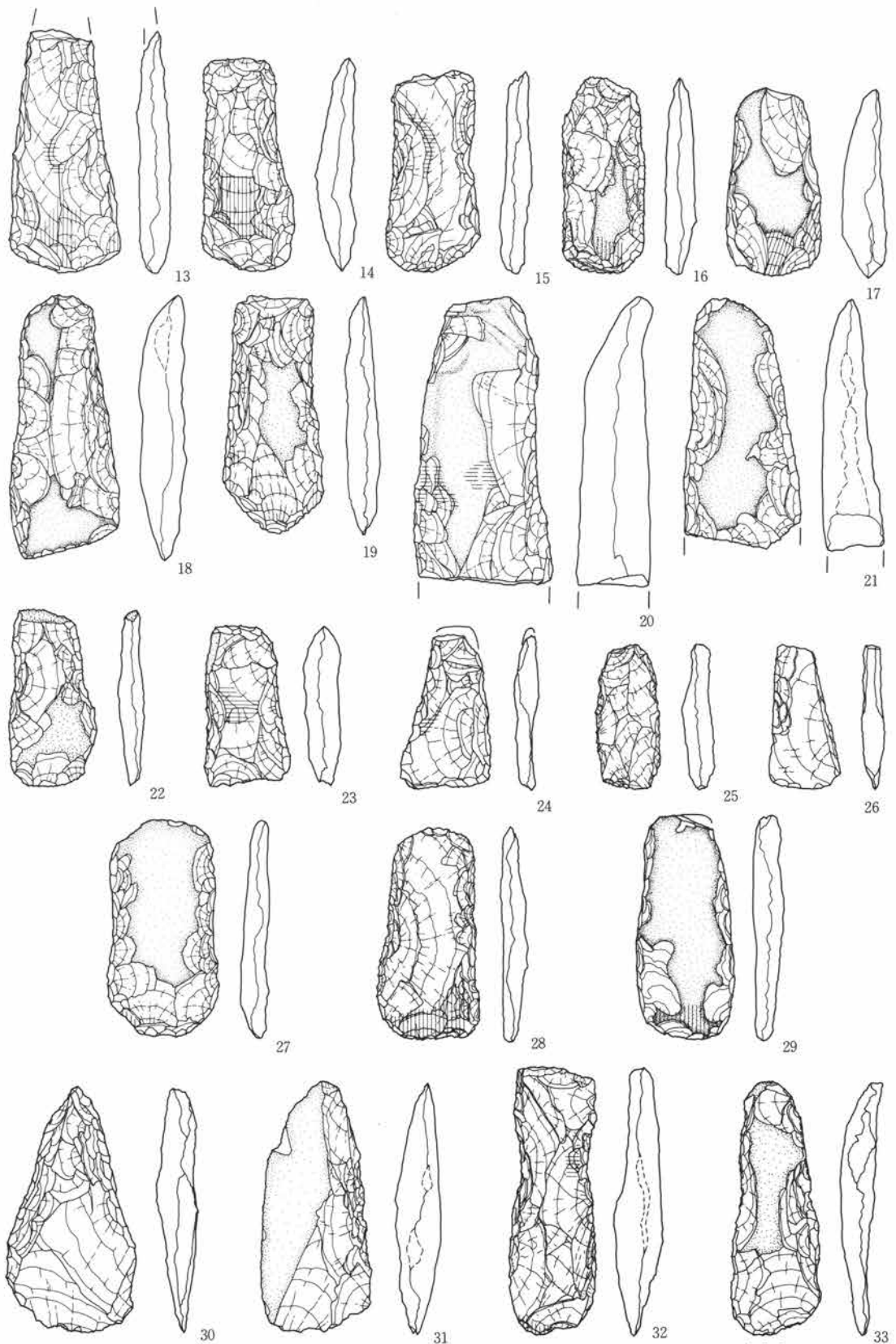
も製作時においては、丸みをもっていたものと思われる。器体中央部には着柄による磨耗痕が認められる。51の基部は使用により破損している。

52～93は不定形の剥片を素材とする剥片石器である。52と53は下端部のみ直刃をつけたものである。52は凸凹半刃となっている。53の裏面は自然面を残している。54と55は丸刃となっている。56の両側縁は自然面を残している。下端部のみ刃部とし、刃縁は内彎している。57も同様に内彎した刃部をもつ剥片石器である。58と59は縦長で断面三角形を呈する剥片を素材としている。正面左側縁のみ刃部として使用している。60～63は台形を呈する剥片を素材とし、下端部のみ刃部としている。62の刃部は直角に近い角度で加工している。64～67は下端部に丸みをもつ刃部を作出している。65は厚みをもつ剥片を素材としている。67は打面と表面下半部に自然面を残し、貝殻状の剥片を素材としている。68～71は平行する2側縁を刃部としている。68は正面から主要剥離面側に刃部加工を施した、厚手の剥片石器である。69と70は両側縁の刃部加工が錯交する状態で施されている。71は珪質頁岩製の剥片石器で、両側縁は使用により刃こぼれをおこしている。72から76は下端部の尖る形態のものである。72は縦長の剥片を素材としている。74の先端部は使用により欠損しているが、両面に刃部加工が施されている。石錐として使用された可能性もあろう。76は両側縁の刃部加工が錯交する位置で施されている。

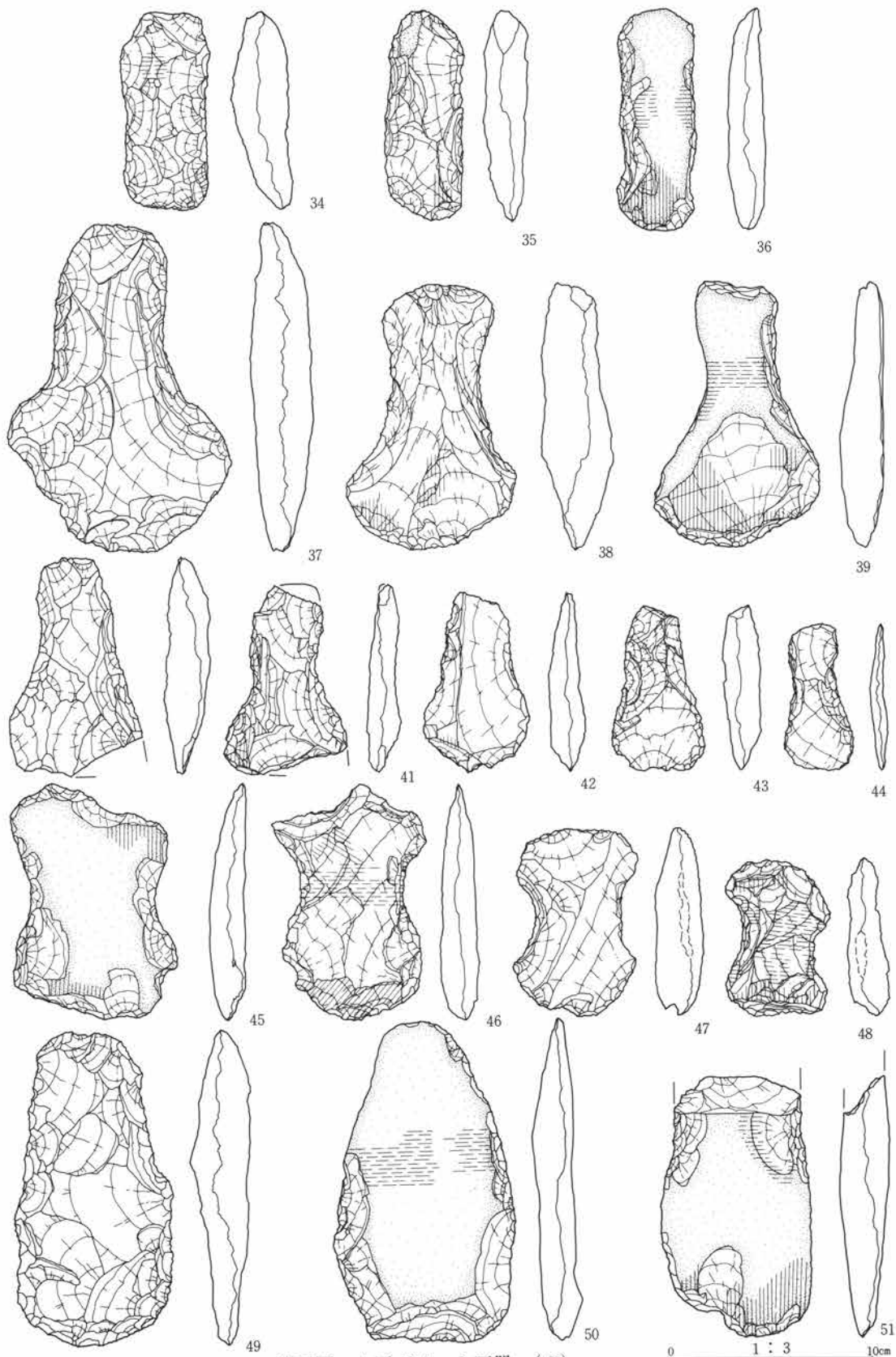
77と78は下端部と両側縁の3辺を使用している。79と80も3辺を使用しているが、下端部の刃縁が丸みをおびている。81と82は縦長の剥片を素材とし、3辺を刃部として使用している。81は打製石斧の可能性もあろう。82は両側縁の加工が錯交する状態で施されている。83～85は小形で3辺に刃部を作出したものである。85は打面を残している。主要剥離面から槌状剥離を施している。搔器に類する製作方法の石器である。86～89は下端部と両側縁に刃部を作出している。側縁部は角張るため、4面に刃部をもつ形態のものである。87の刃部縁辺は破損している。88の下端部刃縁は直線的である。90から93は縁辺部の全体に調整加工を施している。92は縁辺部の両面から剥離を加えている。石核の可能性もあろう。94は両刃形態の礫器である。95は片刃の剥片石器である。小形の礫器かも知れない。96は大形で肉厚の剥片を素材とした剥片石器である。

97～100は石匙である。97は縦形の石匙であり、右側縁に規則的な調整加工を施している。98と99は上端部がややくびれているので石匙としたが、確定はできない。100は横形の石匙で、つまみ部が欠損している。101～108は石錐である。101～104はつまみ部が丸みもち、錐部の短い形態のものである。104の正面右側縁部は新しい破損である。105は長い錐部となっている。106は刃部が欠損しているが、三角形に近い形態のものと思われる。108は細長い剥片の先端部のみ加工している。109～118は石鏃である。109～113は平基無茎鏃である。114～118は凹基無茎鏃である。119は大形の敲石であり、裏面にも敲打痕が認められる。120と121は細長い河原石を使用した敲石と思われるが検討を要する。122と123は石核である。122は裏面の中央部に自然面を残している。また、礫を半截した剥離の打点が認められる。次に、礫表皮を剥離し、正面側の剥片素材剥離をおこなっていると推測される。123は左側縁部に自然面を残している。正面には打面転移させながら、剥片素材剥離をおこなっている。

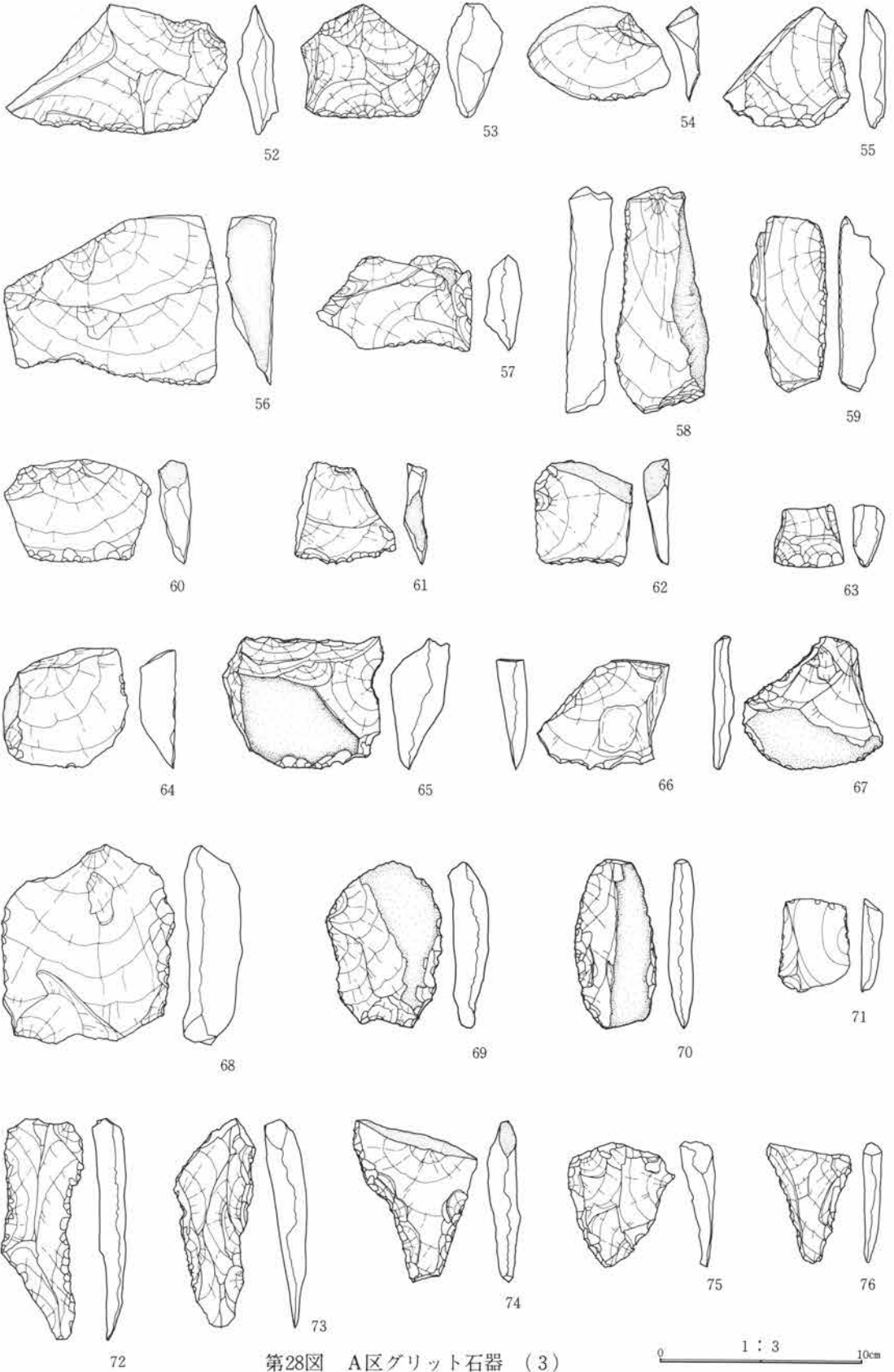
124～127・129～131・135～137は磨石である。124～126は楕円形を呈し、124は断面が方形に近い。127は円形に近い形状を呈している。129～131は長楕円形の磨石である。131は断面が三角形に近い形



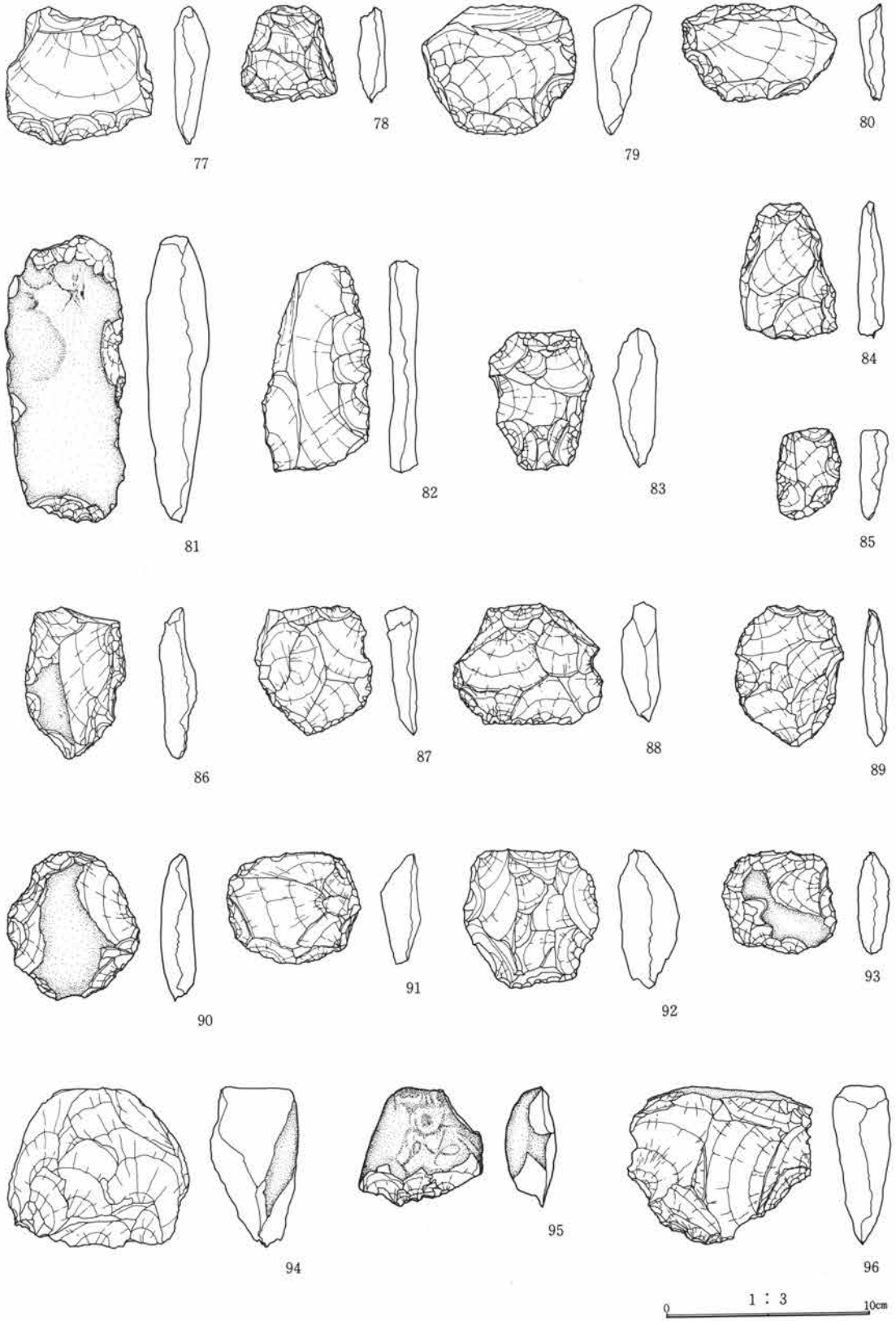
第26図 A区グリット石器 (1)



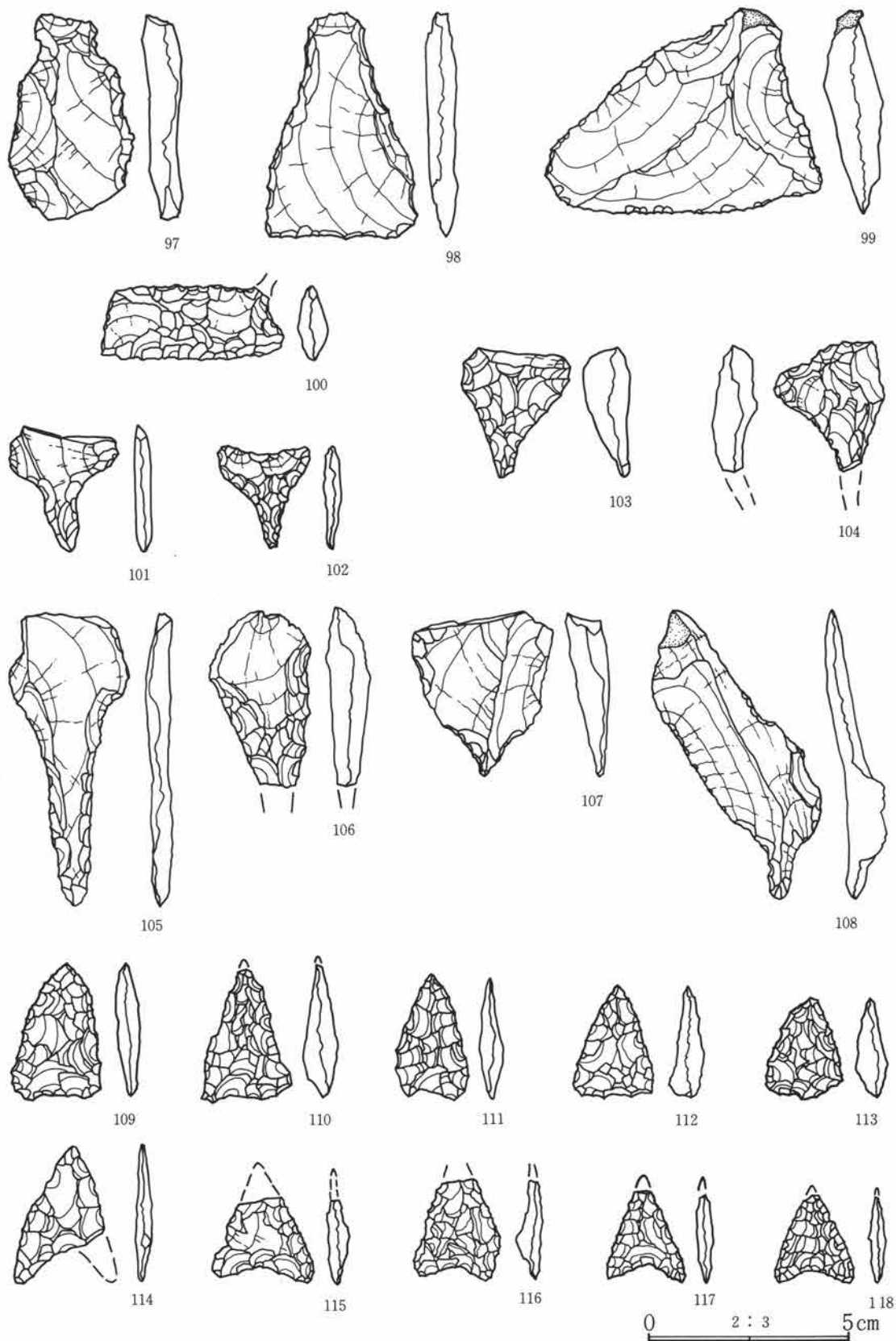
第27図 A区グリット石器 (2)



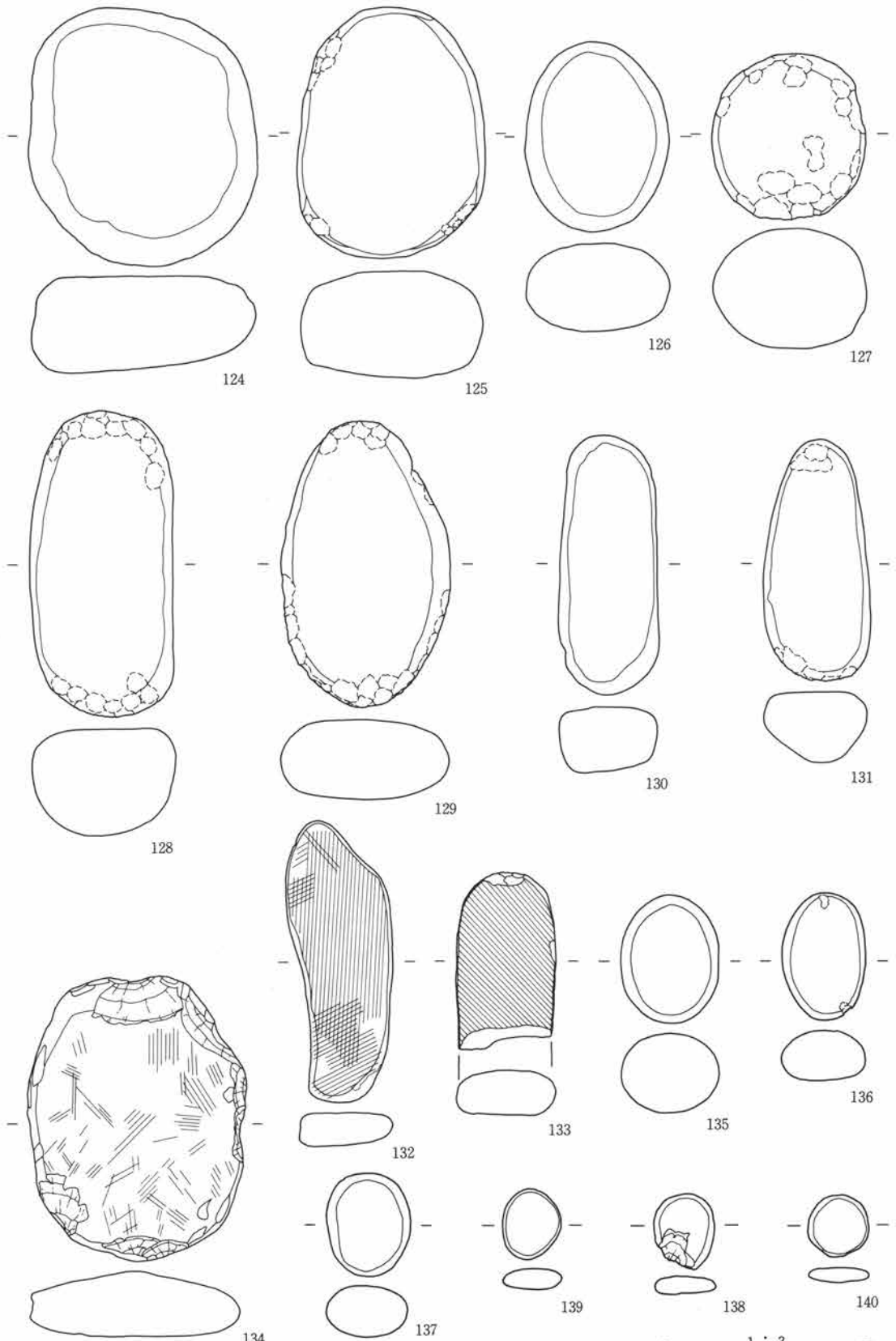
第28図 A区グリット石器 (3)



第29図 A区グリット石器 (4)

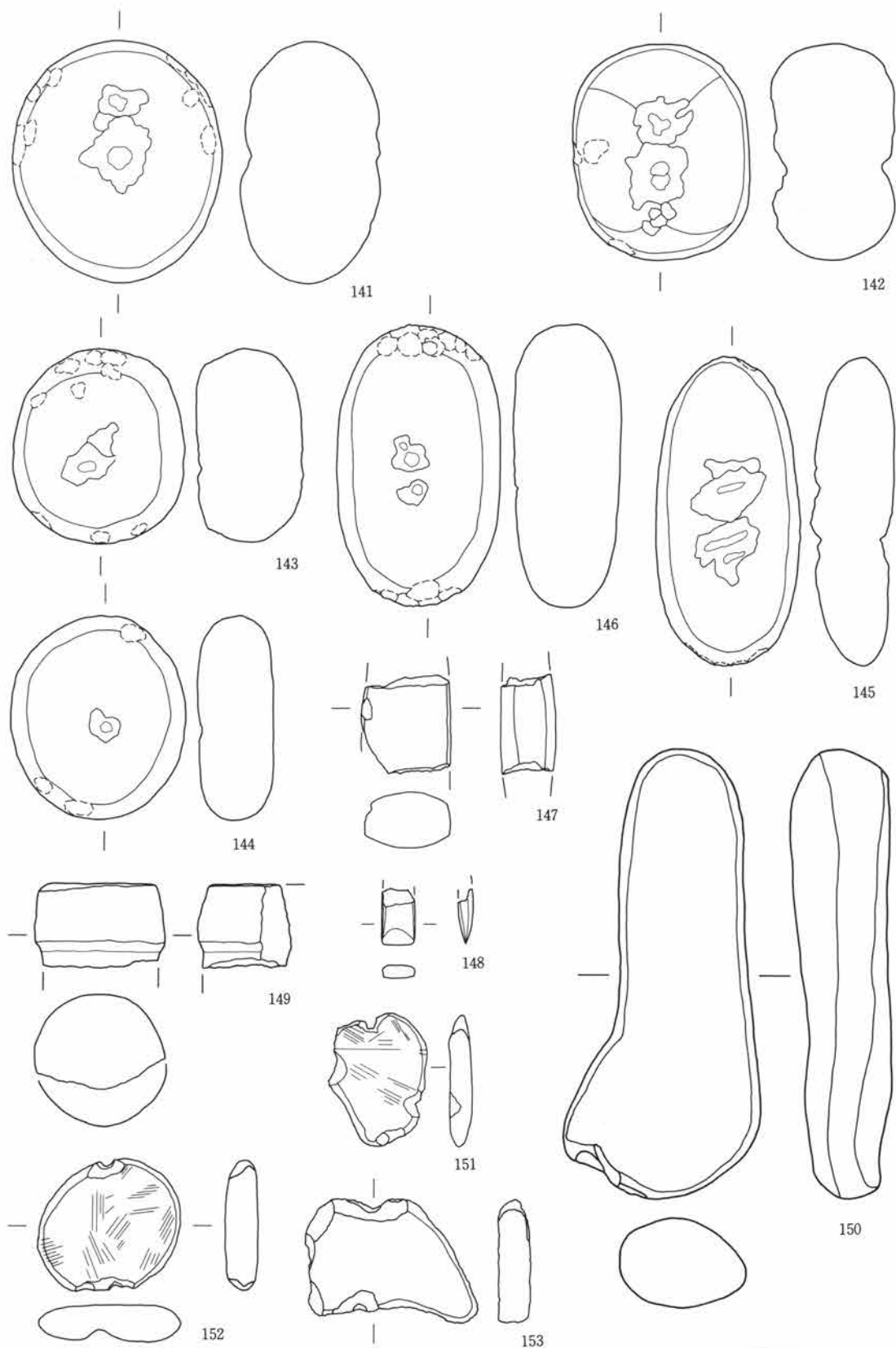


第30図 A区グリット石器 (5)

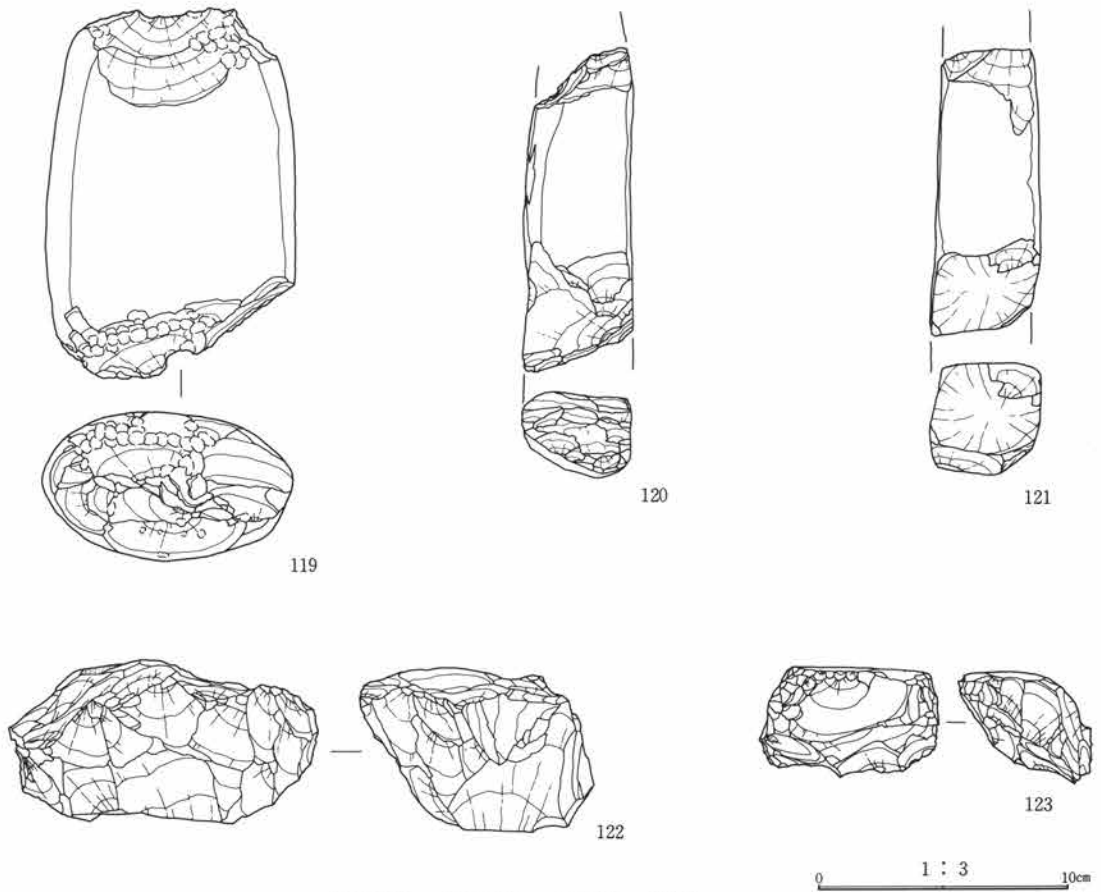


第31図 A区グリット石器 (6)

0 1 : 3 10cm



第32図 A区グリット石器 (7)



第33図 A区グリット石器 (8)

状を呈している。135～137は小形で、円形ないしは楕円形に近いものである。128は長楕円形の敲石である。132と133は砥石である。132は扁平な作りである。134は両面ともに擦痕と打痕があり、台石として使用されていた可能性があろう。139～140は小形・扁平で、円形に近い形状を呈した小円礫である。用途は不明である。

141～144は凹石である。141は両面に凹痕があり、円形を呈している。142～144は楕円形を呈する凹石である。143は火を受け、表面が灰色に変わっている。145と146は長楕円形を呈する凹石である。145は両面ともに凹痕がある。147と148は磨製石斧である。147は両端部が欠損しているが、定角式磨製石斧の破片であろう。148は小形の磨製石斧で、使用により基部が欠損している。149は有頭の石棒破片であり、火を受け表面の一部は灰色に変化している。破損面の変色は認められず、破損以前の加熱による変色であることがうかがわれる。頭部平面形は方形状を呈し、頸部のくびれ部はしっかりと研磨されている。150は河原石を使用した砥石と思われる。151は砥石として使用していたものを、十字方向に剝離を施し、石錘にしたものと思われる。152は扁平な円礫の両端に剝離を施し、石錘にしたものである。153は火を受け赤褐色に変色している。また、周縁部は欠損してしまったものと思われるが、凝灰岩質砂岩の砥石であろう。

第IV章 深 沢 遺 跡

第2表 深沢遺跡A区石器観察表(第9・26~33図)

番号	種 類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
1	打製石斧(短冊形)	A区1号住 No10	完形	9.9	4.6	1.5	90.0	黑色頁岩
2	剝片石器	◇ No20		3.1	3.7	0.7	7.8	◇
3	◇	◇ No16		4.4	6.4	1.7	50.5	◇
4	◇	◇ No22		6.6	8.0	1.7	71.4	◇
5	◇	◇ No13		7.2	5.2	15.5	43.2	◇
6	磨石	◇ 1号住内Ⅲ	1/3欠損	7.1	5.6	2.0	132.8	◇
7	◇	◇ 1号住 No29	完形	11.9	8.5	6.5	980.0	かこう岩
8	石皿	◇ No33	1/2残	15.8	24.3	10.1	592.0	石英閃緑岩
9	◇	◇ No32	破片	20.7	9.8	10.0	262.0	◇
10	石核	◇ No 1		4.6	9.5	6.2	240.0	黑色安山岩
11	石製品(飾垂具)	◇	完形	3.0	2.2	0.6	5.6	
12	丸石	◇	◇	25.3	21.9	18.0	1400.0	石英閃緑岩
13	打製石斧(短冊形)	◇ 1 O 10(Ⅱ中)	基部欠損	11.9	5.5	17.5	117.4	黑色頁岩
14	◇ (◇)	◇ 1 M 16(Ⅲ下)	完形	10.4	4.5	1.8	92.4	◇
15	◇ (◇)	◇ 1 U 10(Ⅱ中)	略完形	9.8	4.7	1.6	72.3	◇
16	◇ (◇)	◇ (◇)	完形	9.5	4.0	1.5	71.8	◇
17	◇ (◇)	◇ (◇)	2/3残	9.2	4.8	2.2	11.1	◇
18	◇ (◇)	◇ 1 M 16(Ⅲ下)	完形	12.8	5.5	2.3	170.1	◇
19	◇ (◇)	◇ 1 U 10(Ⅱ上層)	基部欠損	11.7	4.9	1.8	106.6	◇
20	◇ (◇)	◇ 1 O 14(Ⅲ下)	刃部欠損	14.1	6.6	3.7	430.0	◇
21	◇ (◇)	◇ 1 M 16(◇)	◇	12.2	5.8	3.0	240.0	粗粒安山岩
22	◇ (◇)	◇ 1 O 14(◇)	完形	8.6	4.3	1.3	51.8	黑色頁岩
23	◇ (◇)	◇ 1 M 16(Ⅲ下層)	◇	7.9	4.3	1.8	69.0	◇
24	◇ (◇)	◇ 1 U 10(Ⅲ下)	略完形	7.5	4.4	1.2	44.0	◇
25	◇ (撓形)	◇ 1 M R 4	◇	7.1	3.1	1.4	37.5	◇
26	◇ (◇)	◇ 1 M 16(Ⅰ下)	完形	7.0	3.5	1.1	32.6	◇
27	◇ (短冊形)	◇ 1 O 14(Ⅲ下)	◇	10.6	5.5	1.4	103.3	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種 類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
28	打製石斧(短冊形)	A区1O14(Ⅲ層)	完形	10.4	5.1	1.3	97.7	黒色頁岩
29	◇ (◇)	◇ 1N(Ⅰ2)	基部欠損	11.0	4.8	1.6	120.0	安山岩質凝灰岩
30	◇ (撓形)	◇ 1P14(Ⅲ層)	完形	12.0	6.4	2.0	135.2	黒色頁岩
31	◇ (◇)	◇ 2	◇	12.3	5.4	1.8	144.6	◇
32	◇ (短冊形)	◇ 1M16(Ⅲ下)	◇	13.1	4.2	2.3	131.4	◇
33	◇ (◇)	◇ 1M12(◇)	◇	12.4	4.4	1.8	102.3	◇
34	◇ (◇)	◇ 1U10(Ⅱ中層)	◇	9.8	4.5	2.9	133.6	◇
35	◇ (◇)	◇ 1R14(Ⅲ層)	◇	10.3	3.9	2.2	112.2	◇
36	◇ (◇)	◇ 1U10(Ⅱ中)	◇	10.8	3.8	1.9	104.6	◇
37	◇ (撓形)	◇ 1K14(Ⅲ層)	◇	16.0	11.0	3.1	418.0	◇
38	◇ (◇)	◇ 1O14(Ⅲ)	◇	13.0	8.4	3.6	210.0	◇
39	◇ (◇)	◇ 1M14(Ⅲ層)	◇	13.0	8.2	2.1	178.5	◇
40	◇ (◇)	◇ 1P16(Ⅰ)	◇	10.7	9.5	2.3	132.4	◇
41	◇ (◇)	◇ 1K14(Ⅲ層)	基部、刃部欠	9.2	6.1	1.7	75.8	◇
42	◇ (◇)	◇ 1M16(Ⅲ下層)	完形	8.8	5.2	1.7	62.2	◇
43	◇ (◇)	◇ 1P14(Ⅱ)	◇	8.0	4.6	1.8	61.3	黒色安山岩
44	◇ (◇)	◇ 1M16(Ⅲ層)	◇	7.1	3.4	0.8	18.4	黒色頁岩
45	◇ (分銅形)	◇ 1N19(Ⅱ)	◇	11.6	8.0	1.8	188.2	◇
46	◇ (◇)	◇ 1N14(Ⅱ)	◇	11.5	7.7	1.9	154.2	◇
47	◇ (◇)	◇ 2C	◇	9.2	6.1	2.4	122.5	◇
48	◇ (◇)	◇ 1K14(Ⅲ層)	略完形	7.7	5.0	1.9	82.4	◇
49	◇ (広鋏形)	◇ (Ⅲ層)	完形	15.4	7.8	30.	330.0	◇
50	◇ (◇)	◇ 1L9(Ⅰ)	◇	15.8	9.0	2.3	370.0	◇
51	◇ (短冊形)	◇ 1O10(◇)	刃部欠損	12.7	7.4	1.9	270.0	◇
52	剥片石器	◇ 1U10		6.4	10.9	2.0	111.8	細粒安山岩
53	◇	◇ (Ⅱ層上)		5.5	6.8	2.8	84.9	黒色頁岩
54	◇	◇ 1O14(Ⅲ下)		4.6	6.8	1.6	37.1	黒色安山岩
55	◇	◇ 1M16(Ⅱ)		5.9	6.2	1.2	40.4	黒色頁岩

第四章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
56	剥片石器	A区1 N18 12		8.3	10.5	2.3	240.0	黒色頁岩
57	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)		4.6	7.7	1.7	56.8	◇
58	◇	◇ 1 N18 (Ⅱ)		11.1	4.6	2.2	99.4	◇
59	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)		8.6	3.8	2.3	61.5	◇
60	◇	◇ 1 R12 (Ⅴ)		5.0	7.2	1.6	58.5	◇
61	◇	◇ 1 P14 (Ⅱ)		5.0	5.0	1.0	28.4	黒色安山岩
62	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)		5.2	4.8	1.2	38.9	黒色頁岩
63	◇	◇ 1 R14 (Ⅰ)		3.1	3.5	1.5	20.1	細粒安山岩
64	◇	◇ 1 N18 (Ⅲ)		5.8	6.2	1.8	63.2	黒色頁岩
65	◇	◇ 1 M16(Ⅲ層下)		6.5	8.0	3.0	128.7	◇
66	◇	◇		5.4	6.5	1.5	44.4	◇
67	◇	◇ 1 O14 (Ⅲ下)		6.3	6.4	1.0	46.7	◇
68	◇	◇ 1 R12 (Ⅲ)		9.7	8.5	2.9	230.0	◇
69	◇	◇ (Ⅱ)		8.1	5.7	1.7	87.8	◇
70	◇	◇ 1 U10 (Ⅱ中)		8.3	4.0	1.2	45.1	◇
71	◇	◇ 1 P14 (Ⅱ)		4.5	3.5	1.1	16.6	珪質頁岩
72	◇	◇ 1 N18 I-2		10.8	4.1	1.6	49.0	黒色頁岩
73	◇	◇ 1 R16 IⅡ		10.2	3.9	1.7	58.8	◇
74	◇	◇ 1 O14 (Ⅲ)		7.9	6.1	1.6	57.7	◇
75	◇	◇ 1 W10 (◇)		6.1	5.2	1.5	39.4	黒色安山岩
76	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)		5.8	4.2	0.9	17.6	黒色頁岩
77	◇	◇ 1 O10(Ⅱ中層)		6.8	7.2	1.8	77.5	◇
78	◇	◇ 1 M14 (Ⅲ下)		4.7	4.7	1.4	34.1	◇
79	◇	◇ 1 M16(Ⅲ下層)		6.4	7.6	2.9	141.3	◇
80	◇	◇ 1 U10 (Ⅱ中)		4.8	7.5	1.2	51.5	◇
81	◇	◇ 1 R12 (Ⅰ)		14.0	5.9	3.1	290.0	◇
82	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)		10.3	5.3	1.5	100.0	◇
83	◇	◇ (Ⅱ)		6.8	5.1	2.2	74.9	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
84	剥片石器	A区1L16(Ⅱ)		6.7	4.7	1.3	39.4	黒色頁岩
85	◇	◇ 1W10(Ⅱ)		4.5	3.1	1.4	18.5	珪質凝灰岩
86	◇	◇ 1U10(Ⅱ中)		7.4	4.9	1.6	54.6	黒色頁岩
87	◇	◇ 1M16(Ⅲ層)		6.3	5.7	1.6	46.6	◇
88	◇	◇ ◇ (Ⅲ)		5.9	7.3	1.9	79.2	◇
89	◇	◇ 1O14(Ⅲ層)		6.7	5.5	1.2	46.8	◇
90	◇	◇ 1N12(Ⅱ)		7.2	6.5	1.8	89.0	◇
91	◇	◇ 表土		5.5	6.7	2.0	72.4	◇
92	◇	◇ 1M16(Ⅲ層)		6.8	6.6	3.0	111.1	◇
93	◇	◇ ◇ (◇)		5.0	5.4	1.6	46.0	◇
94	礫器	◇		7.8	8.9	4.3	350.0	◇
95	剥片石器	◇ 1N18(Ⅱ)		5.9	5.9	2.5	90.1	黒色安山岩
96	礫器	◇ 1O14(Ⅲ下)		7.7	9.1	2.8	192.6	黒色頁岩
97	石匙	◇ 1N16(Ⅱ)		5.0	3.0	1.0	13.7	◇
98	◇	◇ 1M14(Ⅲ層)		5.5	3.9	0.7	17.4	◇
99	◇	◇ 1R12(Ⅱ)		5.0	6.9	1.5	34.5	流紋岩質凝灰岩
100	◇	◇ 1H02(Ⅱ上)		1.8	4.0	0.7	6.9	チャート
101	石錐(ドリル)	◇ 1N16(Ⅱ)	完形	3.1	2.3	0.4	2.3	黒色頁岩
102	◇ (◇)	◇ 1U10(Ⅱ中)	◇	2.5	2.3	0.5	1.6	黒色安山岩
103	◇ (◇)	◇ 1O10(Ⅰ)	◇	3.2	2.7	1.2	7.6	黒色頁岩
104	◇ (◇)	◇ 1L16(Ⅱ)	先端部欠損	3.1	2.3	1.0	7.5	珪質頁岩
105	◇ (◇)	◇ 1R12(◇)	完形	7.2	3.0	0.7	10.0	黒色頁岩
106	◇ (◇)	◇ 1O14(Ⅳ)	先端部欠損	4.4	2.5	1.1	10.5	黒色安山岩
107	◇ (◇)	◇ 1R12(Ⅱ)	完形	4.0	3.5	1.1	12.2	黒色頁岩
108	◇ (◇)	◇ 1U10(Ⅱ中層)	◇	7.2	2.5	1.1	13.5	◇
109	石鏃(三角形)	◇ 1N16(Ⅲ)	◇	3.3	2.2	0.6	4.0	黒色安山岩
110	◇ (◇)	◇ 1O14(Ⅲ)	先端部欠損	3.3	2.2	0.9	4.4	◇
111	◇ (◇)	◇ 1N10(Ⅰ)②	完形	3.0	1.8	0.6	2.9	黒色頁岩

第Ⅳ章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
112	石鏃 (三角形)	A区表土	完形	2.7	2.0	0.8	3.0	黒色安山岩
113	◇ (◇)	◇ 1 N14 (Ⅱ)	◇	2.5	1.9	0.7	3.1	◇
114	◇ (ハート形)	◇ 1 L14 (Ⅱ)	尾部欠損	3.4	2.2	0.4	1.9	◇
115	◇ (◇)	◇ 1 M14 (Ⅲ)	先端部欠損	2.1	2.5	0.5	2.1	◇
116	◇ (◇)	◇ 1 U10(Ⅱ上層)	◇	2.5	2.1	0.7	2.4	◇
117	◇ (◇)	◇ 1 G03 (Ⅰ) ㊦	◇	2.2	1.9	0.4	1.2	◇
118	◇ (◇)	◇ 表土	◇	2.1	2.0	0.4	1.2	◇
119	敲石	◇ 1 M16 (Ⅲ)	両端部欠損	14.7	9.0	5.8	1220.0	黒色頁岩
120	磨石	◇ ◇ (◇)	◇	11.7	4.4	3.2	270.0	◇
121	◇	◇ 1 U10(Ⅱ中層)	◇	11.4	4.4	4.6	280.0	◇
122	石核	◇ ◇ (Ⅰ)		9.5	12.3	6.4	800.0	◇ (化石含有)
123	◇	◇ 1 N16		4.4	7.1	5.3	159.3	珪質頁岩
124	磨石	◇ 1 U10 (Ⅱ中)	完形	12.3	11.4	4.7	1150.0	石英閃緑岩
125	◇	◇ 1 R21 (Ⅰ)	◇	12.3	9.3	5.3	980.0	◇
126	◇	◇ 1 M16 (Ⅲ下)	完形	9.3	7.1	4.3	410.0	◇
127	◇	◇ ◇ (Ⅲ)	◇	8.1	7.5	5.8	520.0	◇
128	敲石	◇ 1 U10 (Ⅱ層)	◇	15.0	7.1	5.2	100.0	◇
129	磨石	◇ 1 M16 (Ⅲ)	◇	14.1	8.4	3.9	680.0	◇
130	◇	◇ 表土	◇	12.7	5.0	3.1	400.0	流紋岩
131	◇	◇ 1 U10(Ⅱ中層)	◇	11.9	5.2	3.5	350.0	石英閃緑岩
132	◇	◇ 表土	◇	138	5.3	1.7	195.1	細粒安山岩
133	◇	◇ 1 U10(Ⅱ中層)	欠損	8.7	4.9	2.2	155.5	デイサイト質凝灰岩
134	◇	◇ 1 L16 (Ⅱ)	完形	14.0	10.8	3.2	720.0	細粒安山岩
135	◇ (小形)	◇ 1 M12 (Ⅲ下)	◇	6.3	4.9	3.9	174.7	変質安山岩
136	◇ (◇)	◇ 1 N14 (Ⅱ)	◇	6.2	4.0	2.5	87.7	石英閃緑岩
137	◇ (◇)	◇ 1 O14(Ⅱ中層)	◇	5.0	4.2	2.5	73.1	デイサイト
138	◇ (◇)	◇ 1 N16 (Ⅱ)	端部欠損	3.7	3.0	0.9	14.9	黒色頁岩
139	◇ (◇)	◇ 1 O14 (Ⅲ層)	完形	3.5	2.9	1.1	16.4	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
140	磨石(小形)	A区1014(Ⅲ下)	完形	3.1	3.0	7.0	9.7	黒色頁岩
141	凹石	＊ 1N14(Ⅱ)	＊	11.8	10.3	6.9	1240.0	石英閃緑岩
142	＊	＊ 1R14(＊)	＊	10.5	8.6	6.1	890.0	＊
143	＊	＊ 1N16(Ⅲ)	＊	9.5	8.5	5.2	700.0	＊
144	＊	＊ 1U10(Ⅱ中)	＊	9.9	8.5	3.7	520.0	粗粒安山岩
145	＊	＊ 1014(Ⅲ下)	＊	15.0	7.1	4.1	660.0	＊
146	＊	＊ 表土	＊	13.7	8.0	5.2	940.0	石英閃緑岩
147	磨製石斧(小形)	＊ 1014(Ⅲ層下)	両端部欠損	4.7	4.4	2.7	109.5	変質玄武岩
148	＊ (＊)	＊ 1N16(Ⅰ)	基部欠損	2.8	1.6	6.5	5.7	変質蛇紋岩
149	石棒	＊ 1R12(Ⅱ)	＊	4.1	6.4	4.6	182.9	石英閃緑岩
150	＊	＊ 1M16(Ⅲ下)	完形	21.9	9.6	4.3	1300.0	輝緑岩
151	石錘	＊ 1U10(Ⅰ)	＊	6.5	4.8	1.0	33.9	珪質変質岩
152	＊	＊ 12-0	＊	6.4	7.0	1.6	126.0	かんらん岩
153	＊	＊ 1P12(Ⅱ)	＊	6.0	8.5	1.6	98.3	凝灰岩質砂岩
758	石鏃(ハート形)	＊ 1住ピット1	尾部欠損	2.1	1.5	0.5	2.5	黒色安山岩

2 B 区

① 概 要 (第34図、図版25・26)

B区はA区北半の埋没谷とC区との間に湾入する埋没谷とに挟まれた、東西に走る緩やかな台地状をなす上位段丘面の中位にある。範囲は幅25m、距離60mである。

調査前は宅地となっており移転後、道路部分を除く範囲を重機により表土をローム面まで掘削し調査を行なった。北端の山石露頭部分は人力により遺物の採集を行なった。

B区を載せる台地は南北150m、東西200mの扇状をなしており、上位段丘面上位の段丘崖（比高差約4m）を基点に東方へ広がりを持ち、東端は比高差5mの下位への小段丘崖となっている。調査範囲はこの台地のほぼ中央に位置している。

調査位置の台地幅は南北55mで、東方へ緩やかに下り南北になだらかな丸みを持っている。標高はA・D区と同じ455mである。

ローム面には山石が各所に露頭し、特にC区との間に幅15mの浅い埋没谷への移行部となる調査区北端には山石の大礫が累累と露頭している。

B区で確認された遺構は後期中葉の土坑37基だけで、他に径約2mの多孔石が1石調査区北端に露頭していた。

土坑は台地の頂部を幅約15mにわたり、やや斜行する状態で分布し、大きく3群に分かれて分布している。土坑は径約1.30mの楕円形をなすもの20基、径約90cmの円形をなすもの17基に分かれ、重複関係や覆土差から楕円形から円形へ移行して行ったと考えられる。

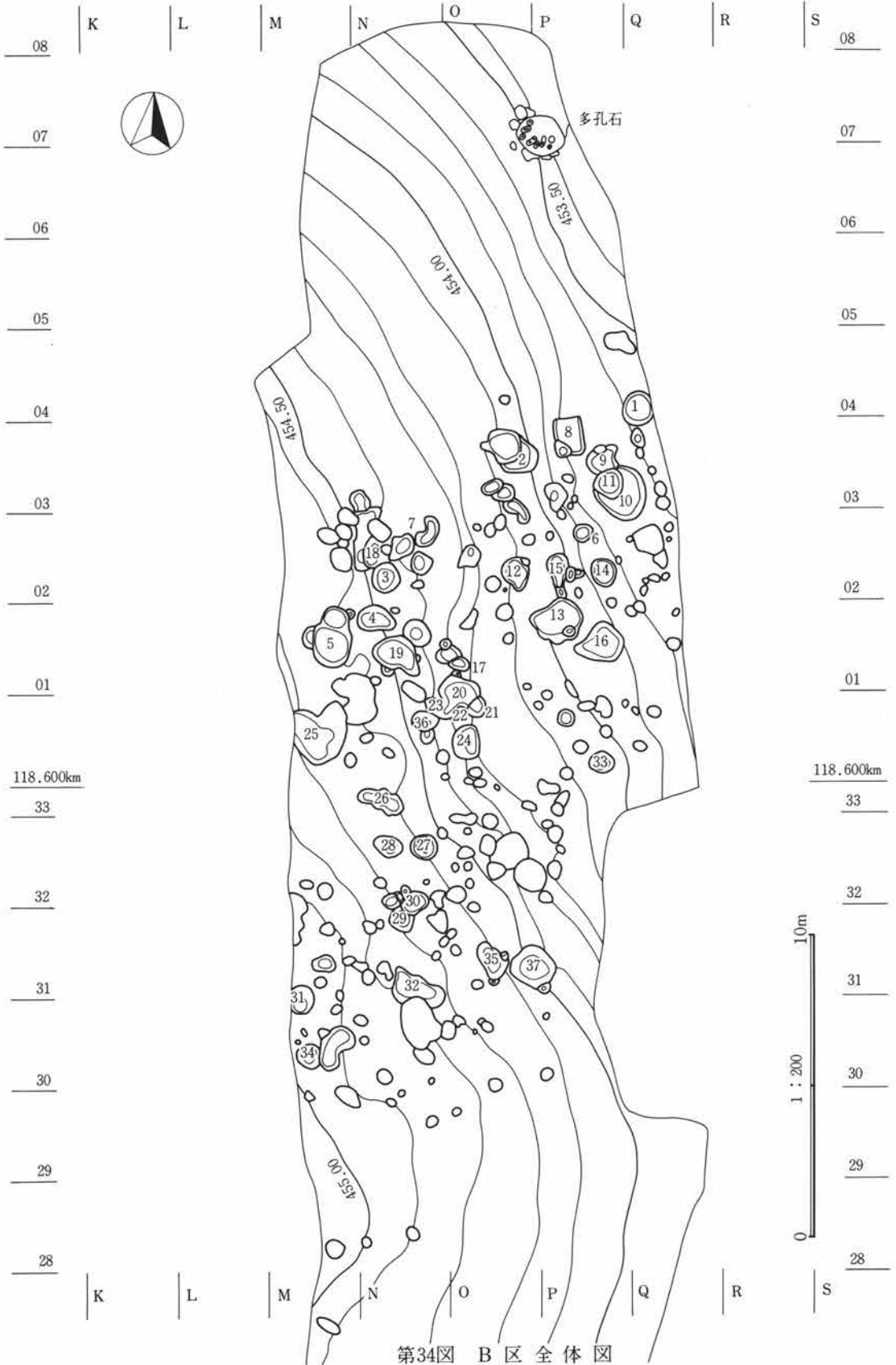
土坑は露頭する山石の陰に作られるものがあり、大型の石皿や河原石が上部に載るものがある。土坑からの出土遺物のうち、土器は破片が主で完形の土器が出土する例はない。また、13基の土坑から26点の石鏃が出土している点が特徴的である。

土坑群は形態や覆土から墓坑と考えられD区の27基の土坑群と形態や時期が合致し、C区の配石遺構を核とした、周囲に広がる配石を持たない土坑群の一郭を構成するものと考えられる。

調査区北端にある多孔石は上面が平坦な径約2mの山石（溶結凝灰岩）をそのまま用いている。上面には楕円形をなす凹みが8個あり3群に分かれている。多孔石のある位置は埋没谷への緩傾斜の移行部となっており、周囲には多くの山石が露頭している。山石の間の土層からは中期～後期の遺物が出土しているが、その中に後期の土偶1点（258、第41図）があり周辺の遺構のあり方から後期の所産である可能性が強い。

B区の土坑、グリットから出土した総土器量は3,710点で、中期に属する土器は3,122点、後期に属する土器は588点で、遺構のあり方と異なり中期の土器量の方が多いが小破片が圧倒的に多く、土坑にも破片が混入していた。

総石器量は798点で内、剥片が715点と90%を占める。製品は打製石斧7点、磨製石斧1点、剥片石器23点、石鏃35点、ドリル5点、石皿1点、磨石9点、砥石1点、石棒1点、飾垂具1点である。石器は後期を主としていると考えられるが、中期のものも多く混入していると考えられる。



第34図 B区全体図

② 土 坑 (第35～45図、図版27-1～34-1、第3表)

土坑は、北東隅の1号から南東隅の37号まで等高線に対して斜交する幅16mの帯状に分布する。その数は37基に及び、その半数ほどから遺物の出土を見ただけであるが、凡そ後期堀ノ内式～加曽利B式にかけて作られたもので、北のD区土坑群と対をなし、環状を呈すると推定される。

挿図に用いた土層名称及び説明は、36基全てについて下記の通り統一をした。

B区土坑土層説明

- ① 黒色土 ローム粒、軽石を含みかたくしまる。部分的に炭化物混入 (遺物多い)
- ② 黒褐色土 ローム粒、軽石を多く含み、部分的に炭化物混入 (遺物多い)
- ③ 褐色土 ローム粒とブロックが多く、粘性をおびる。主に壁際に分布し、壁の崩落土か。
- ④ ローム層 上部ロームに相当し、大小の山石が多く含まれる。強い粘性をおびる。

1号土坑 (第35図)

2 Q04グリットに位置する。形状は、直径約1mの不整円形を呈し、底面は平坦で深さ25cmである。覆土は、ローム粒等を多く含む黒褐色土が全面に堆積し、かたくしまっている。出土遺物はない。

2号土坑 (第35・43図、図版32-2、34-1)

2 P～Q03グリットに位置する。形状は、121×111cmの円形を呈し、東側に一段浅くなって張り出している。底面は丸みを持ち、最深部で66cmである。確認面では、No. 154の輝緑岩製の石皿1点とNo. 199の多孔石が出土している。覆土は、上面に黒色土、下面に黒褐色土が全面に堆積するが、少量の炭化物がともに含まれている。

3号土坑 (第35図)

2 N02グリットに位置し、山石をめぐって7号、18号がある。形状は、70×65cmの円形を呈し、断面鍋底状で深さ36cmである。覆土は、黒色土、褐色土がレンズ状に堆積し上層からNo. 211、212の剥片石器、磨石が出土している。

4号土坑 (第35・38・43・45図、図版27-1・32-1・2)

2 N01グリットに位置する。形状は、111×93cmの楕円形を呈し、底面は平坦で深さ33cmである。覆土は、黒褐色土と褐色土が上下に全面に堆積する。遺物は多く、磨製石斧1点、短冊型石斧1点、石鏃3点、剥片石器3点、磨石1点、凹石1点の石器と、鉢、深鉢の土器がある。

5号土坑 (第35・43図、図版27-2・32-2)

2 N01グリットに位置し、壁際にピットが重複する。形状は、188×135cmの楕円形を呈するが、中央部に120×115cmの山石があって北側だけの可能性もある。覆土は、黒褐色土が殆どを占めるがやや不安定な状態にある。遺物は剥片石器1点と土器少量がある。

6号土坑 (第35図)

2 P02グリットに位置する。形状は、直径60cmの円形を呈し、断面円筒状、深さ59cmである。覆土は中央部に褐色土が貫入し、壁際に黒褐色土が分布する不整合の状態である。遺物は、深鉢の土器破片少量が出土している。

7号土坑 (第35・43図、図版32-2)

2 N02グリットに位置し、3号、18号とともに山石群をめぐっている。形状は、75×69cmの円形を呈し、底面は平坦で深さ29cmである。底面近くに拳大の河原石13個が敷かれている様である。覆土は黒色土と黒褐色土がレンズ状に堆積し、18号を切って作られていることがわかる。

8号土坑 (第35・38図、図版32-1)

2 P03グリットに位置する。山石を利用した長方形土坑で107×92cm、深さ34cmである。南辺の東西両隅に柱穴様の直径20cm前後のピットが重複している。覆土は、黒褐色土が全面に堆積する。遺物は、深鉢の胴部破片等が少量あり、No. 265の網代圧痕を持つ底部を図示した。

9、10、11号土坑 (第35・38・45図、図版27-3、32-2)

2 P~Q-02~03グリットに位置し、11号が最も古く、9号、10号の順である。

9号は、127×99cmの円形を呈し、深さ31cmである。覆土は、褐色土の単一層で、深鉢の胴部破片が少量出土している。

10号は、185×160cmの南北方向に長い円形を呈し、底面は平坦で深さ20cmである。覆土は、黒色土の単一層で、No. 212の石鏃のほかに土器片少量が出土している。

11号は、104×92cmの円形を呈し、断面円筒状で深さ56cmである。覆土は、黒褐色土の単一層でNo. 213の石鏃1点と胴部を主とした土器片が50片程出土し、No. 266の浅鉢を図示した。

12号土坑 (第36・38・43図、図版32-1・33-1)

20~P-02グリットに位置する。形状は、108×86cmの南北方向に長い不整円形を呈し、深さ24cmである。遺物は、No. 214剥片石器、215、216の磨石、No. 267、268の鉢があり、後期主体である。

13号土坑 (第36・45図、図版28-1・33-1)

2 P01グリットに位置する。形状は、150×135cmの東西に長い楕円形を呈し、底面は平坦で深さ43cmである。南辺中央寄りにピットが重複する。覆土は、黒色土と黒褐色土が西側から流入して全面に堆積する。遺物は、No. 217、219の石鏃2点がある。

14号土坑 (第36図、図版28-2)

2 P02グリットに位置する。形状は、86×85cmの円形を呈し、断面円筒状、底面は平坦で深さ46cmである。覆土は、全体に褐色土が堆積し人為埋没か。遺物は、深鉢胴部の破片が約50片ある。

15号土坑 (第36・38図、図版32-1)

2 P02グリットに位置する。形状は、112×70cmの南北に長い不整楕円形を呈し、南東側に直径40cm前後のピットが重複乃至隣接して形状を歪めている。断面は鍋底状で、最深部で59cmを測る。覆土は、黒色土と黒褐色土が堆積するが新旧に分けられる状態でもある。中央部には、方40cm程の石が単独であり、意図的に持ちこまれたものか。遺物は、深鉢や鉢の小破片が約60片出土している。

16号土坑 (第36・38・45図、図版28-3・32-1・33-1)

2 P01グリットに位置する。形状は、170×137cmの東西に長い不整円形を呈し、底面は平坦で深さ38cmである。底面の東寄りには53×32cm、深さ16cmの楕円形ピットがある。覆土は、黒色土、黒褐色土がレンズ状に堆積し、確認面近くに拳大の河原石が多い。遺物は、No. 218、220の石鏃、269の浅鉢のほかに深鉢胴部の破片が約30片ある。

17号土坑 (第36・38・44・45図、図版28-3・32-1・33-1)

2 O01グリットに位置する。形状は、75×49cmの東西方向に長い楕円形を呈し、南北両辺に直径50cm前後のピットが重複する。底面は平坦で深さ14cm、黒褐色土と褐色土が堆積する。遺物は、No. 221の短冊型石斧、222～224の剥片石器、225～229の石鏃5点と、No. 273～275の鉢のほかに土器片約70片がある。

18号土坑 (第35図)

2 M02グリットに位置し、7号土坑に切られる。形状は、155×98cmの東西に長い不整円形を呈し、南辺には3号土坑が隣接する。群在する山石の基部に占地し、断面鍋底状を呈し、最深部で50cmである。覆土は、上から黒色土、黒褐色土が自然堆積し、深鉢の胴部破片20片が出土している。

19号土坑 (第36・38・44図、図版29-1・32-1・33-1)

2 N01グリットに位置する。形状は、160×111cmの東西に長い楕円形を呈し、南辺にピットが重複し歪んでいる。底面は平坦で、深さ43cmである。覆土は、褐色土が全面に堆積した上に西側から黒褐色土と黒色土が流入している。遺物は多く、石器にはNo. 230の短冊型石斧、231の砥石、232・233の剥片石器、234石錐、235～237の石鏃3点、土器はNo. 276の鉢、277の深鉢を始めとして破片180片がある。

20号・21号・22号・23号土坑 (第36・38・44・45図、図版29-3・30-1・2・32-1・33-2)

2 N-O-00～01グリットで4基が重複して位置する。覆土の様子からすると、20、21号が古く、22号が次ぎ、23号が最も新しい。

20号は、120×105cmの東西方向に長い楕円形を呈し、4基の中で最も大型である。底面は平坦で、深さ33cmである。No. 278、279の鉢、280、281の深鉢が出土している。

21号は、70×65cmの円形を呈し、20号の南辺に重複し底面を同じくする。遺物は、深鉢破片が15片

出土している。

22号は、70×65cmの円形を呈し、20号の西南辺に重複する。覆土は、黒褐色土が全面に堆積し、褐色土をもって20号と分離する。底面は平坦で35cmあり、20号と同一の面である。遺物は、No. 278の鉢、238の剥片石器のほかに土器破片52片がある。

23号は、直径60cmの円形を呈し、22号に重複するが底面に約20cmのレベル差があり、最も新しいだけでなく、時間差を持つものか。底面のほぼ全体に山石があり、これを利用したものであろう。遺物は多く、石器にはNo. 239、240の剥片石器、241の石錐、242、243の有茎石鏃、土器はNo. 279、280の浅鉢、281の深鉢のほかに中期～後期の深鉢、鉢の胴部破片270片がある。

24号土坑（第36・45図、図版33-2）

20-00グリットで4基の土坑が重複する20号等の南に位置する。形状は、121×44cmの南北に長い楕円形を呈し、南側に大小5基のピットが接し、山石が顔をのぞかせている。底面は西半分には山石があり平坦面を利用している。中央の溝状の部分で深さ49cmであるが、山石との関係からすると全体に平坦で深さ20cm程であろう。覆土は褐色土の単一層で、人為埋没と考えられる。遺物は、No. 244の石鏃と深鉢胴部を主とする破片32片がある。

25号土坑（第36・45図、図版33-2）

2M00グリットに位置し、西側は調査区域外である。形状は、現状で175×127cm、深さ33cmの隅丸長方形を呈する。北東隅を始めとして山石が多く顔を出し、一部は壁として利用している。覆土は、黒色土が全面に堆積し、石鏃2点、鉢、深鉢等の破片37片が出土している。

26号土坑（第37・38・45図、図版32-1・33-2）

1N33グリットに位置する。形状は、155×70cmの東西に長い不整長円形を呈し、底面は平坦で深さ11cmである。遺物は、石錐、磨石、深鉢、鉢の破片282片が出土している。

27号土坑（第37・44図、図版30-3・33-2）

1N32グリットに位置する。形状は、85×78cmの円形を呈し、断面皿状で深さ18cmである。底面の中央部には、58×32cmの扁平な河原石があり、上面での標示物であった可能性がある。覆土は、河原石を境にして黒褐色土と褐色土が堆積している。遺物は、No. 249、250の剥片石器、深鉢、鉢の破片58片が出土している。

28号土坑（第37・45図、図版33-2）

1N32グリットで27号に隣接して位置する。形状は、100×69cmの楕円形を呈し、底面は平坦で深さ39cmである。底面近くには山石が多く顔を出しているが、壁の一部に利用している。覆土は、黒色土、黒褐色土がレンズ状に自然堆積している。遺物は、石器にはNo. 251、252の石鏃2点、土器には深鉢や鉢の胴部破片を主とした163片が出土している。

29号、30号土坑（第37・45図、図版33-2）

1 N31～32グリットで2基が重複して位置する。覆土の堆積状態では29号が古い。

29号は、90×79cmの円形を呈し、北辺に30号が、西辺に連結するピットが重複する。底面は鍋底状で深さ41cmである。覆土は黒褐色土の単一層で、No. 253の用途不明石製品と土器片49片が出土した。

30号は、90×74cmの円形で、深さ58cmであるが、底面近くに径20cm前後の円礫10個を敷き並べている。遺物は、中期の深鉢を主とする土器片84片がある。

31号土坑（第37・39・44図、図版32-1・33-2）

1 M30～31グリットに位置する。形状は、87×70cmの円形を呈し、断面円筒形で深さ53cmである。覆土は、黒褐色土、褐色土がレンズ状に自然堆積し、剥片石器1点と土器片98片が出土した。

32号土坑（第37図、図版31-1）

1 N30～31グリットに位置する。151×87cmの長方形で山石を壁の一部に利用している。底面は北が深く40cmを測る。覆土は北半の黒色土と南半の黒褐色土とに分けられ、覆土を異にした新旧2時期に対応するものか。遺物は、深鉢等の破片が17片出土している。

33号土坑（第37図）

2 P00グリットに位置する。形状は、77×63cmの円形を呈し、底面に一段深い掘りこみがあり49cmを測る。褐色土の単一層に近く、深鉢の胴部等が53片出土している。

34号土坑（第37図）

1 M30グリットに位置する。形状は、74×73cmの不整円形を呈し、深さ43cmである。遺物は、深鉢の胴部を主とする破片が62片出土している。

35号土坑（第37・45図、図版31-2・33-2）

1 O31グリットに位置する。125×68cmの南北に長い楕円形を呈し、深さ23cmである。覆土は、黒色土と黒褐色土がレンズ状に自然堆積し、No. 255の石鏃と深鉢等の胴部破片15片がある。

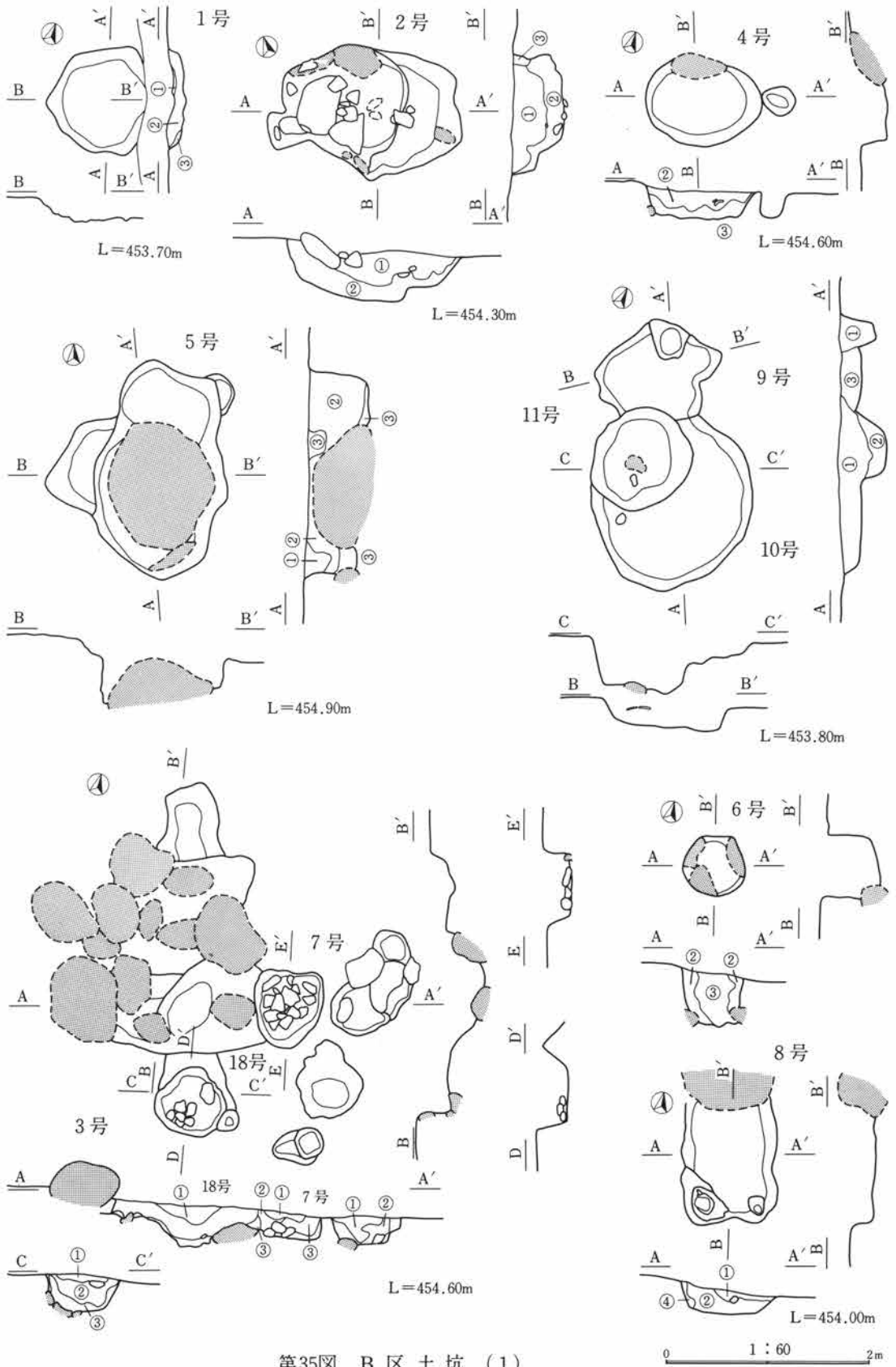
36号土坑（第37・44図、図版33-2）

2 N00グリットに位置する。形状は、72×58cmの不整長円形を呈し、深さ33cmである。遺物は、No. 256の磨石1点と中期を主とする土器片35片がある。

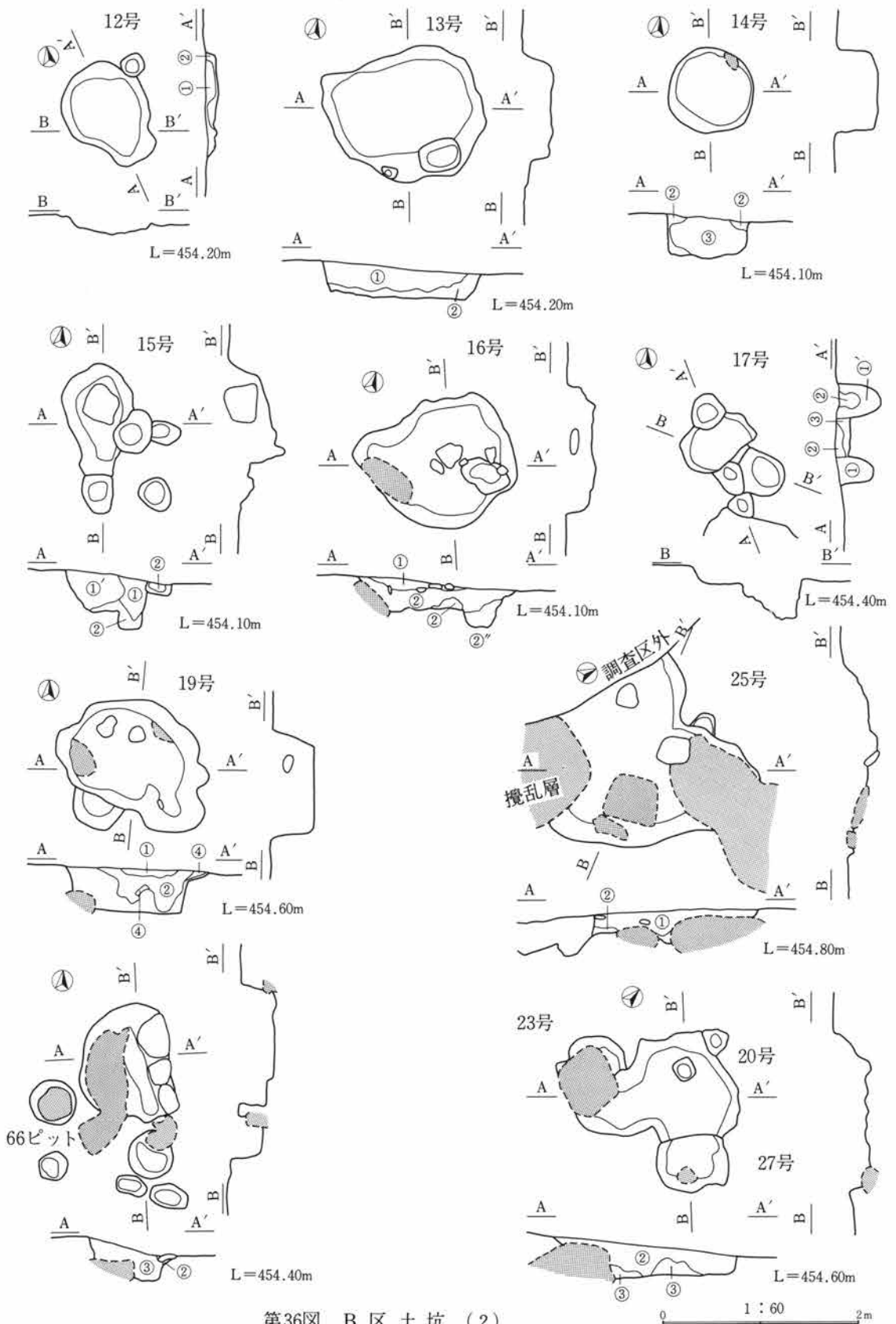
37号土坑（第37・45図、図版33-2）

1 O～P31グリットに位置し35号に隣接する。形状は、130×130cmの円形を呈し、深さ26cmである。断面は浅い皿状で、壁沿いに山石が顔を出している。遺物は、No. 257の石鏃1点と中期を主とする深鉢の胴部等の破片が56片出土している。

3. 縄文時代の遺構と遺物

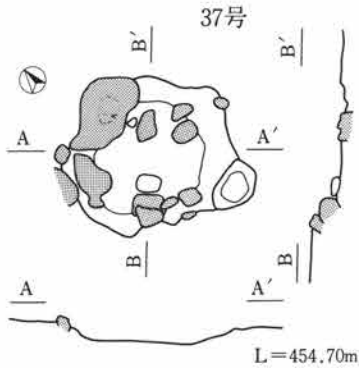
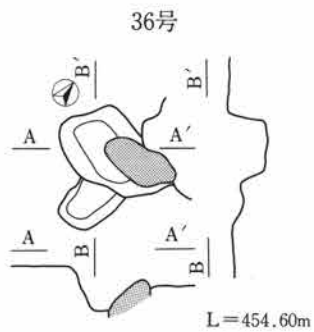
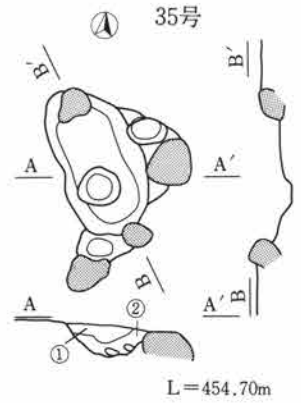
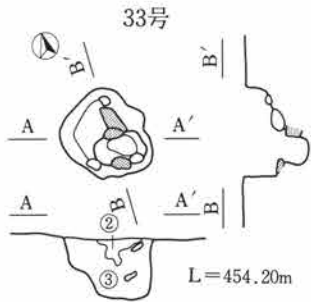
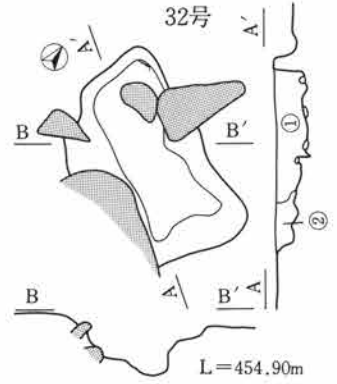
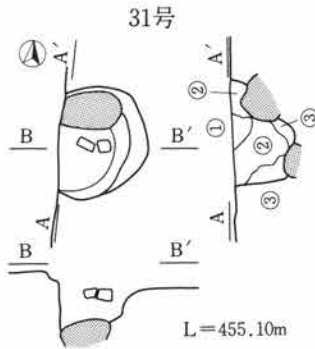
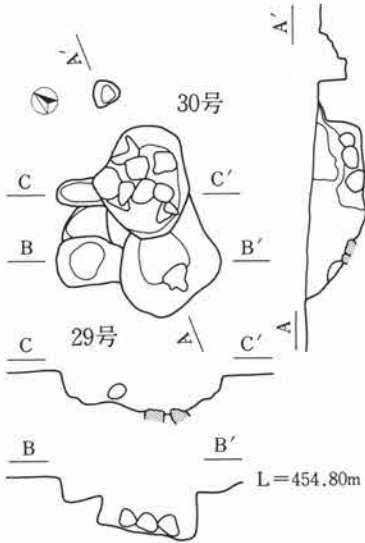
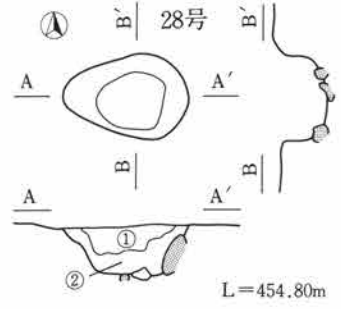
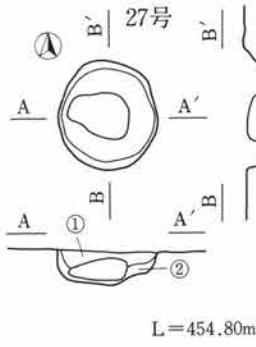
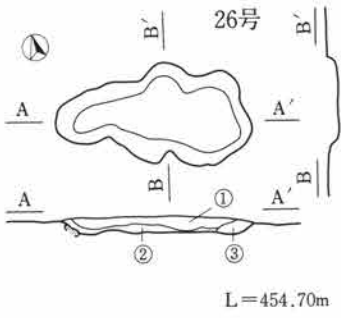


第35図 B区土坑(1)



第36図 B区土坑(2)

3. 縄文時代の遺構と遺物



第37図 B区土坑(3)

0 1 : 60 2m

第3表 深沢遺跡B区土坑一覧表 (第35~37図)

単位 cm

土坑番号	グリット位置	平 面 形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出 土 遺 物	備 考
1号	2N-04	円形	100×99×25	N-23°-W		
2号	2N-03	円形	121×112×66	N-62°-W	石皿、多孔石	石皿と多孔石は確認面近くから出土
3号	2N-02	円形	70×65×36			
4号	2N-01	楕円形	111×93×33	N-70°-E	磨斧、石鏃、剥片石器	
5号	2M-01	楕円形	188×135×60	N-16°-E	磨石、凹石、深鉢、鉢 剥片石器	
6号	2P-02	円形	61×60×59			
7号	2N-02	不整円形	75×69×29	N-15°-W	剥片石器、磨石	18号を切る
8号	2P-03	長方形	107×92×34	N-8°-W	深鉢	
9号	2P-03	円形	127×99×31	N-50°-E		11号より新しく、10号よりも古い
10号	2P、Q-03	円形	185×160×20	N-37°-W	石鏃	9号、10号、11号の中で最も新しい
11号	2P-03	円形	104×92×56	N-3°-E	石鏃、鉢	
12号	2O-02	不整円形	108×86×24	N-23°-W	剥片石器、磨石2、深鉢、鉢	
13号	2P-01	楕円形	150×135×43	N-59°-E	石鏃2	
14号	2P-02	円形	86×85×46	N-14°-W		
15号	2P-02	不整楕円形	112×70×59	N-5°-W	深鉢2、鉢	中央部に50cm角の山石がある
16号	2P-01	不整円形	170×137×38	N-51°-E	石鏃2、浅鉢	確認面近くに拳大の河原石が多い
17号	2O-01	楕円形	75×49×14	N-55°-E	打斧、剥片石器2、ラ、スクレイパー、石鏃5、鉢3	
18号	2M-02	不整円形	155×98×50	N-36°-E		7号より古い、山石に寄せつける
19号	2N-01	楕円形	160×111×43	N-60°-W	打斧、砥石、剥片石器2、石鏃、石鏃3	
20号	2N.O-00	楕円形	120×105×33	N-70°-W		21~23号と重複し、21号とともに最も古い
21号	2O-00	円形	70×65×37	N-44°-E		
22号	2O-00	不整円形	85×64×35	N-30°-E	剥片石器、鉢	23号より古い
23号	2N-00	円形	60×60×18	N-20°-W	石鏃2、剥片石器2、ドリル、鉢、深鉢2	21~23号の中で最も新しい、底石に山石を敷くか
24号	2O-00	楕円形	121×44×49	N-20°-W	石鏃	
25号	2M-00	隅丸長方形	175×127×33	N-62°-W	石鏃2	
26号	1N-33	不整長方形	155×70×11	N-76°-W	ドリル、磨石、深鉢3、鉢	

土坑番号	グリッド位置	平面形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出土遺物	備考
27号	1N-32	円形	85×78×18		剥片石器	底面中央に58×32の石があり、抱き石葬か
28号	1N-32	楕円形	100×69×39	N-82°-W	石鏃2	
29号	1N-31	円形	90×79×41	N-52°-E	垂飾具	30号よりも古い
30号	1N-32	円形	90×74×58	N-52°-E		底面近くに径20cm前後の円礫20個あり
31号	1M-30.31	円形	87×70×53	N-3°-W	剥片石器、土製品	
32号	1N-31	長方形	151×87×40	N-84°-W		覆土が南北二分され、2基の重複か
33号	2P-00	円形	77×63×49			
34号	1M-30	不整円形	74×73×43	N-25°-E		
35号	1O-31	楕円形	125×68×23	N-35°-W	石鏃	
36号	2N-00	不整長方形	72×58×33	N-80°-W	磨石	
37号	1O.P-31	円形	130×130×26		石鏃	

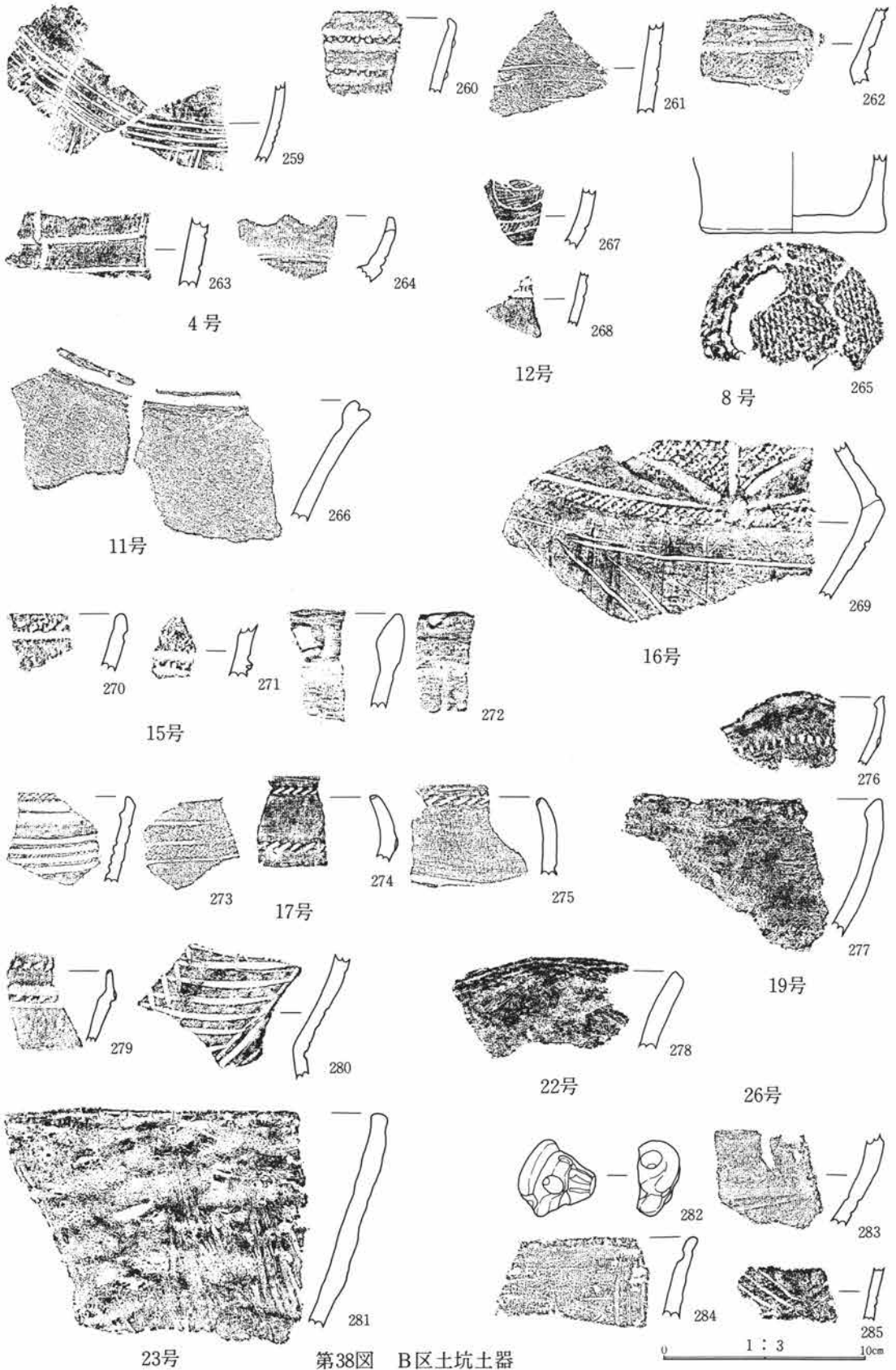
註 1 B区の土坑は、調査時に於いて1-41号までを記録し、今報告でも遺物の集計・登録で、名称はそのままとした。しかし、37号以下は整理により近世以降か、かく乱と判断されたために割愛した。尚、37号以下の名称を使用したのは、石器観察表のみである。

2 出土遺物にある、ラ、スクレイパーは、ラウンドスレイパーの略称である。

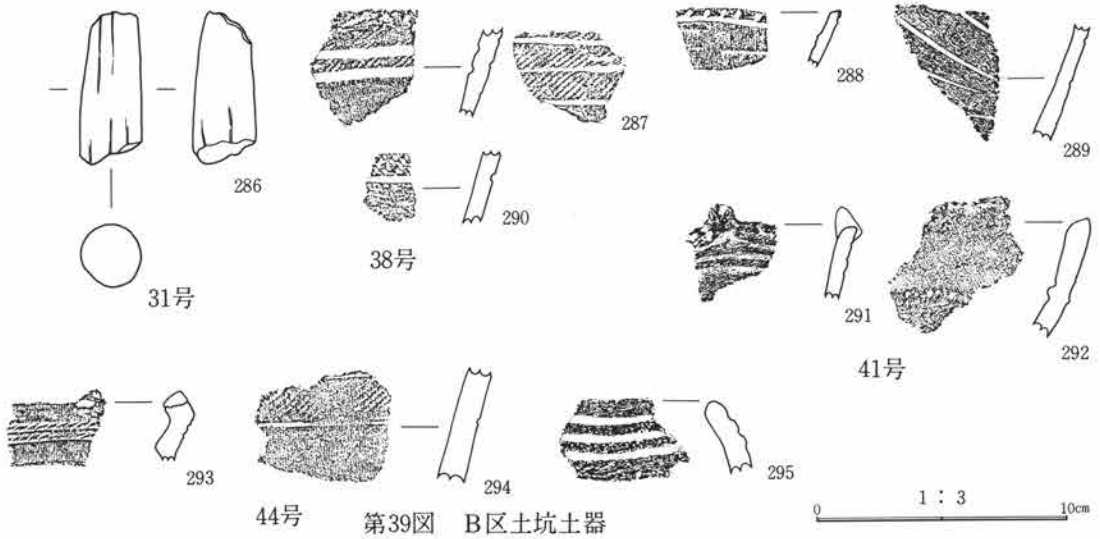
③ 土坑出土の土器 (第38・39図、図版32-1)

B区より検出された土坑は37基あり、その内土器の出土した土坑は14基である。

4号土坑 259は半截竹管による平行沈線を横位・斜位に施す。260は口縁下に細紐線を巡らす。堀之内2式。261は条線を施す。加曽利B3式。262・263は横位平行沈線帯を縦区画する。262は加曽利B2式。263は加曽利B1式。264は小波状口縁を呈し口縁下内外面に沈線を巡らす。赤色塗彩する。精製土器で器形は浅鉢。加曽利B2。8号土坑 265は底部に網代痕がある。11号土坑 266は口唇部末端を肥厚させ、口唇に1条の沈線をめぐらす、無文の浅鉢。267は精製土器、充填縄文が施される。縄文はLR。堀之内2式。268は沈線間に刺突を施す。15号土坑 270は口縁部に沈線を巡らし区画する。口唇下LR縄文、沈線下無文。271は平行沈線により区画し、沈線間に刺突を施す。縄文はLRである。272は口縁部を肥厚させ、内面に円形状の文様を持つ。外面無文。16号土坑 269は肩部が「く」字状に強く張り出す深鉢形土器。体部上半は弧状に区画された磨消縄文、下半は沈線を横位・斜位に施す。縄文はLR。加曽利B3式。17号土坑 273は2段の横帯文が施される。口唇内側に刻みを施し、内面には横線文と刻目が巡らされている。加曽利B1式。274・275は外面を丁寧に研磨している。口唇部に刻みを施し、274は口縁部と体部の境に刻みのある横線を、275は沈線を巡らす。加曽利B1式。19号土坑 276は波状口縁を呈し、口縁下の微隆帯に刻みを施す。加曽利B2式。277は粗製深鉢形土器

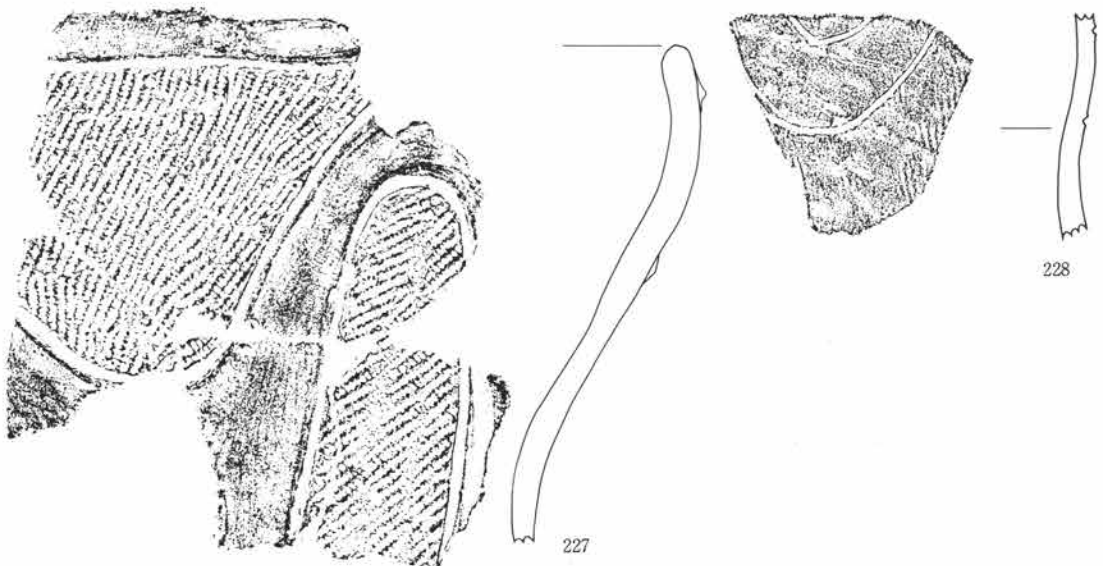


第38図 B区土坑土器



第39図 B区土坑土器

の口縁部片。無文。22号土坑 278は口縁部片、無文。23号土坑 279は外面を丁寧に研磨している。口唇部及び口縁部に刻みを施す。内面に1条の沈線を巡らす。加曾利B 1式。280はくびれ部の横位沈線下に羽状沈線を施文する。加曾利B 3式。281は粗製の深鉢形土器で内外面に輪積み技法が顕著。26号土坑 282は波状口縁を呈する深鉢形土器の波頂突起。加曾利B 1式。283は平行沈線、縦沈線と刺突文を施す。縦沈線は対弧線と思われる。加曾利B 2式。284は縦沈線を施し、口唇内側に1条の沈線を巡らす。285は沈線を施しその間を磨消縄文する。縄文LR。堀之内2式。31号土坑 286は円柱の土製品であり、土偶の脚部と考えられる。38号土坑 287はLR縄文に3条の沈線を巡らす。内面には沈線間にLR縄文を施す。加曾利B 1式。288は口唇下に1条の沈線を巡らし口唇端に刻みを施す。加曾利B 3式。289は条線を施す。加曾利B 3式。290は沈線間を充填縄文する。縄文LR。加曾利B 3式。41号土坑 291は口唇直下には幅の狭い帯縄文を施し、口縁部と胴部の境には横線を巡らす。これらの間に貼付文が施されている。292は口縁部を若干研磨し、体部に条線を施す。口縁内面に沈線帯を施す。加曾利B 1式。44号土坑 293は口縁に刻目のある平行沈線帯を巡らす。加曾利B 1式。294は平行沈線にLR縄文を施す。沈線下無文。加曾利B 1式。295は口縁部に横位沈線を施す。



第40図 B区グリット土器 (1)

0 1:3 10cm

④ グリット出土の土器 (第40～42図、図版35)

加曾利 E 4 式に比定される土器群。227は口縁部に無文帯をもちその下に微隆起帯が巡る。胴部には微隆起帯による U 字状、 \cap 字状の区画文が施され、区画外の縄文は磨消される。縄文は横位 RL である。228は弧状沈線を施し、LR 縄文を施文する。

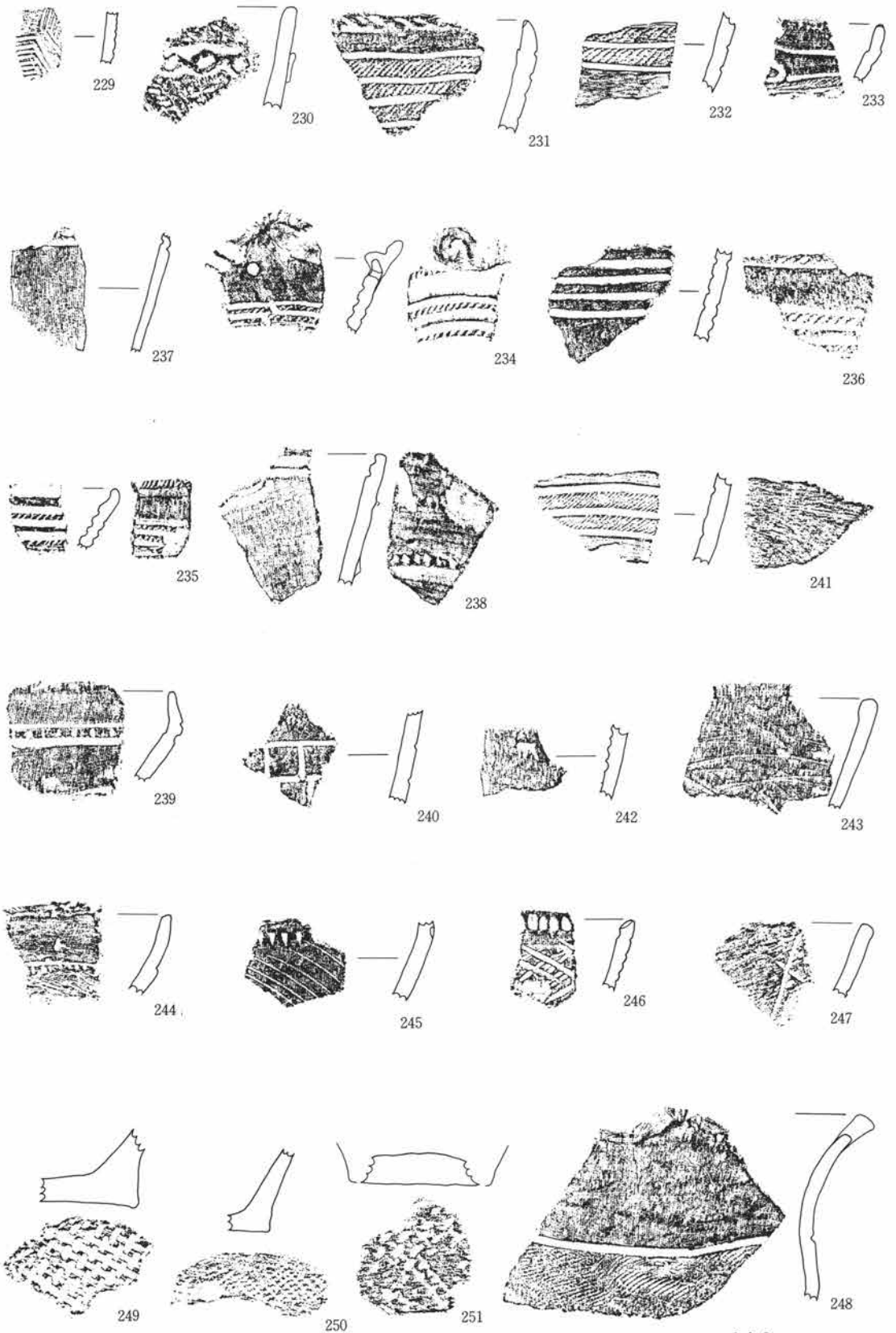
堀之内 2 式に比定される土器群。229は菱形に沈線を施す。238は精製深鉢土器口縁部片で、口縁下に 2 条の細紐線を貼付け巡らす。口縁内面には 2 条の沈線を巡らし、弧状を呈する部分は突起貼付部であると思われる。

加曾利 B 1 式に比定される土器群。230・231・240以外は精製土器である。230は波状口縁を呈し、頸部に連続指圧痕がつけられた粘土紐を施す。口唇部より全面に不明瞭な縄文が施されている。240は横位沈線に縦区切り沈線を施す。231・233～235は口唇端部に刻みを施す。231・232には幅広の縄文帯に数条の沈線を巡らす。共に LR 縄文。233は沈線により文様構成され沈線間を磨消縄文する。縄文 LR。234～237は数段の横帯文が巡る。234には縦区切り沈線が施されている。また、口唇部には 8 字状粘土紐把手を貼付し、把手下に直径 6 mm の小孔を穿つ。241・242は無文。234～236・241・242の器内面には沈線帯を施し、沈線間に 234・235は刻みを、237・236は無文、241・242は LR 縄文をそれぞれ施している。

加曾利 B 2 式に比定される土器群。口縁部沈線間に刻みを施す。内外面良く研磨されている。

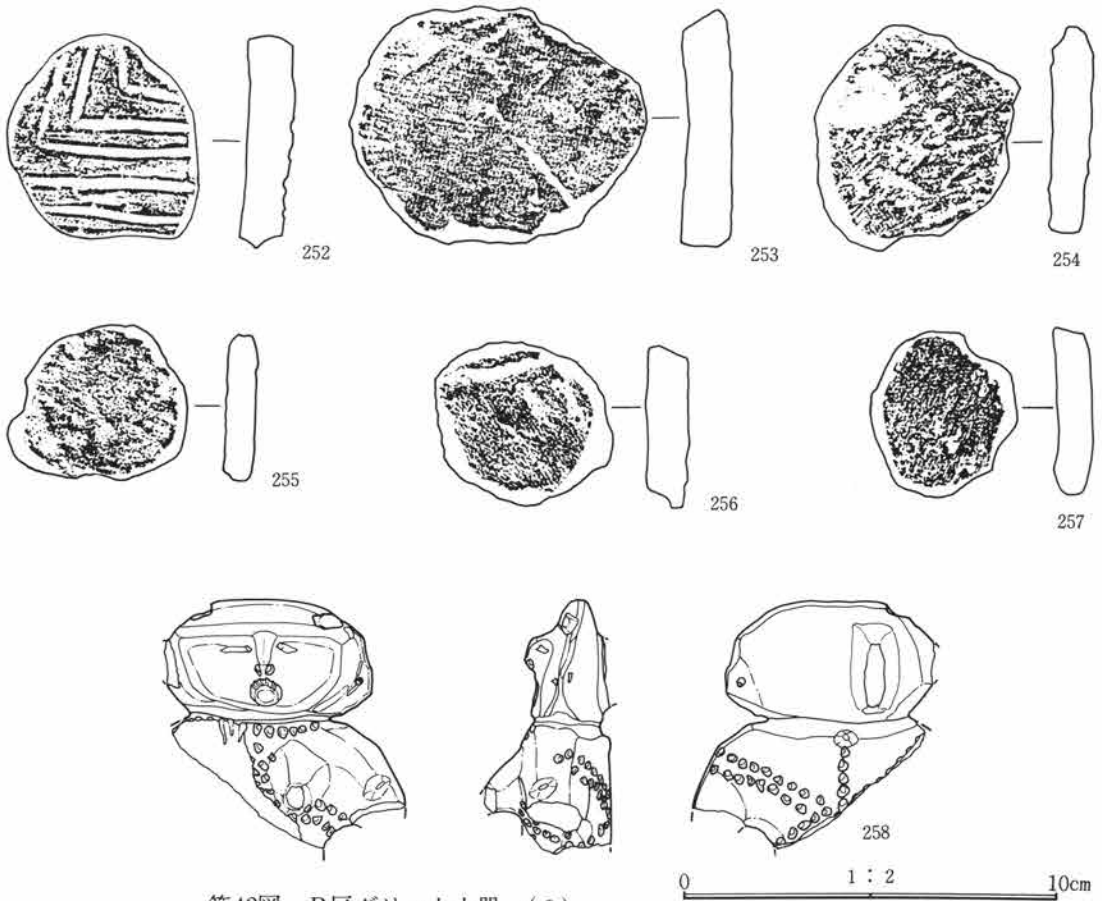
加曾利 B 3 式に比定される土器群。243は口縁を肥厚する。無文。244・245は口縁部無文で肩部に刻みを巡らし、体部に条線を施す。246は口唇部に刻みを施し、体部に条線を施す。

248は晩期最終末から弥生前期終末。小波状を多数持つ口縁と考えられ、口縁部無文、頸部に 1 条の沈線を巡らし、体部に LR 縄文を施す深鉢形土器である。



第41図 B区グリット土器 (2)

0 1 : 3 10cm



第42図 B区グリット土器 (3)

247は時期不詳。口縁部片である。口唇部より斜位に沈線を施す。

249・250・251は底部片である。底部に網代痕がある。

252～257は土製円盤である。土器片を利用したもので6個出土した。252だけが有文で他は無文である。いずれも後期に比定される。

258は多孔石近くの山石の露頭部分から出土した土偶の破片である。胸部の片面から胴部以下と腕および片方の耳が打ち欠かれている。残存する高さは6.8cm、幅6.3cm、厚さ2.2cmである。頭部は長さ3.2cm、幅5.5cm、厚さ1.3cmで横長の楕円形をしている。顔は輪郭を縁取り眼・口・鼻・鼻孔・眉・耳を具象的に表現し耳には小孔が貫通している。頭部上端には横方向に径3mmの孔が貫通し、背面には一方に寄った位置に縦位で楕円形の突起があり端部が打ち欠かれている。首は1条の沈線を巡らし頭部と体部の境を表現している。胸部前面には乳房が表現され、背部に連なる状態で1条と2条の連続刺突が襷状に巡っている。

⑤ 土坑出土の石器

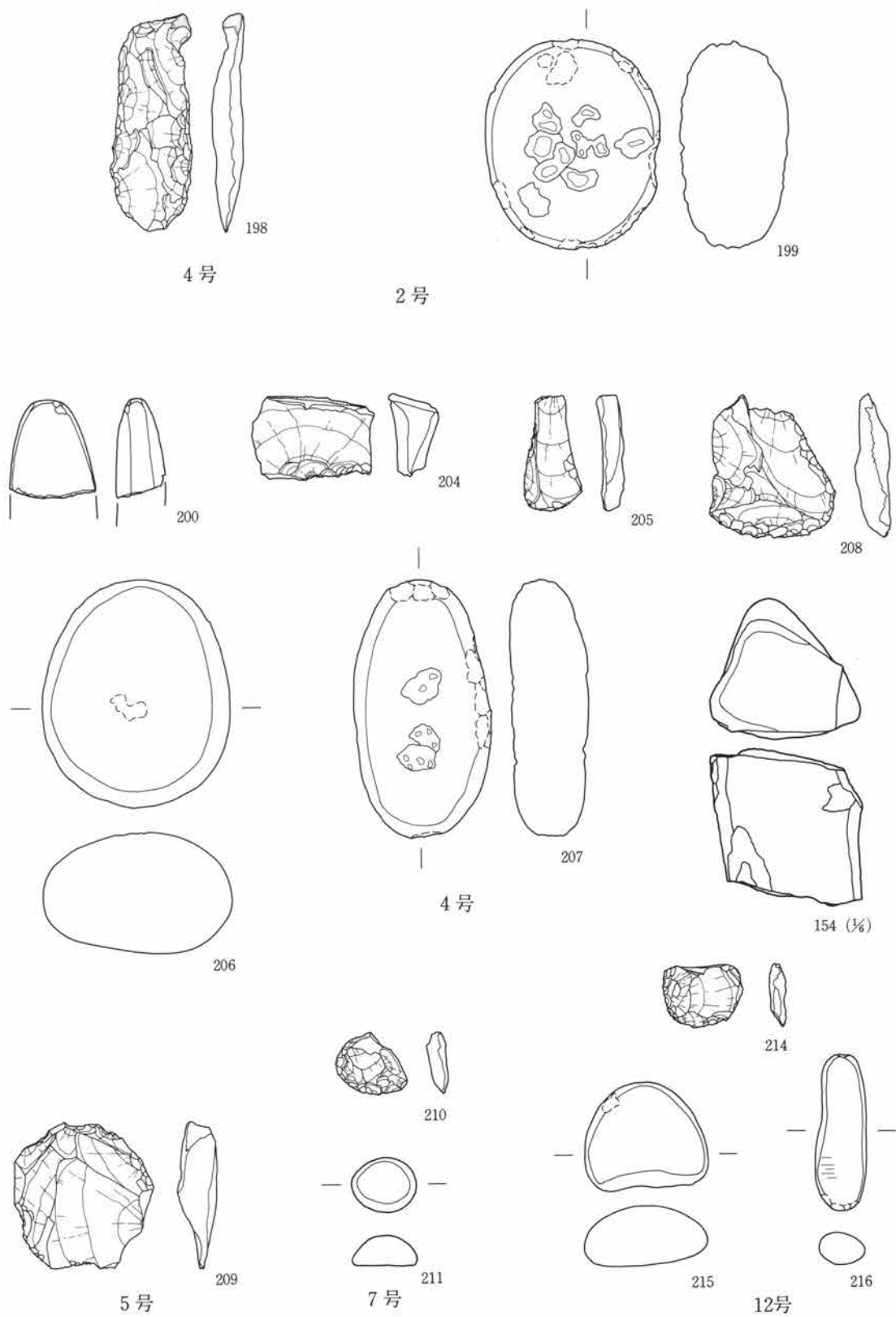
198は短冊形の打製石斧である。基部の一部に自然面を残している。刃縁は丸みをおび、両側縁に微細な調整加工を施している。199はほぼ円形に近い凹石であり、両面ともに凹痕がある。200は定角式磨製石斧の基部破片である。器体中央部以下は欠損している。204は平刃で下端部のみ使用した、剥片石器である。削器として使用されたものであろう。205は横長の剥片を素材とする剥片石器であり、刃縁は丸みをもっている。206は卵形をした磨石であり、中央部には凹痕もある。207は楕円形をした扁平な凹石である。208は下端部と正面右側縁に刃部を作出した剥片石器である。154は石皿の破片であり、正面には擦痕が認められる。209・210・214は不定形の剥片を素材とする剥片石器である。210と214は貝殻状の剥片を素材とし、側縁部に微細な刃部加工を施している。211は円形の磨石であり、断面はカマボコ形を呈している。215・216ともに磨石である。

211は基部を欠損する打製石斧であり、刃縁はやや丸みを呈している。222・223は不定形の剥片石器である。224は円に近い形状を呈し、その周囲には調整加工が施されている。230は短冊形をした打製石斧であり、刃縁は山形に尖っている。231は砥石の剥片であり、正面には擦痕が認められる。232は横長の剥片を素材とし、下端を刃部として使用している。233も北端部のみ刃部としている。238～240は不定形の剥片を素材とし、2側縁に刃部加工を施した剥片石器である。249・250・254も剥片石器である。

201～203・212・213・217～220・225～229・235～237・242～246・251・252・255・257・259・260は打製石鏃である。201は大形の凹基無茎鏃である。202は凸基有茎鏃であり、両端が欠損している。203は側縁のみ調整加工を施した石鏃である。未製品の可能性もあろう。刃部は突出しているが、全体的に丸みをおびている。212はやや基部の挟り込みが認められる。凹基無茎鏃に類する。213は平基無茎鏃である。217は両端が欠損しているが、規則的な押圧剝離により調整されている。219と220は基部がやや挟り込まれた凹基無茎鏃である。228と229は基部の挟り込みが顕著に認められる。234・245・246・251・252も凹基無茎鏃である。246の調整加工は粗い。237と242は凸基有茎鏃である。243は平基有茎鏃に近いものである。244は部分的に調整加工を施したものであり、未製品と思われる。255は凹基鏃に近いものである。257は脚部の先端部が丸みをもつ、凹基無茎鏃である。259は凹基無茎鏃である。260は基部が欠損しているため形態は不明である。両側縁から規則的な押圧剝離により調整されていることと、大形であることから、石槍の可能性もあろう。

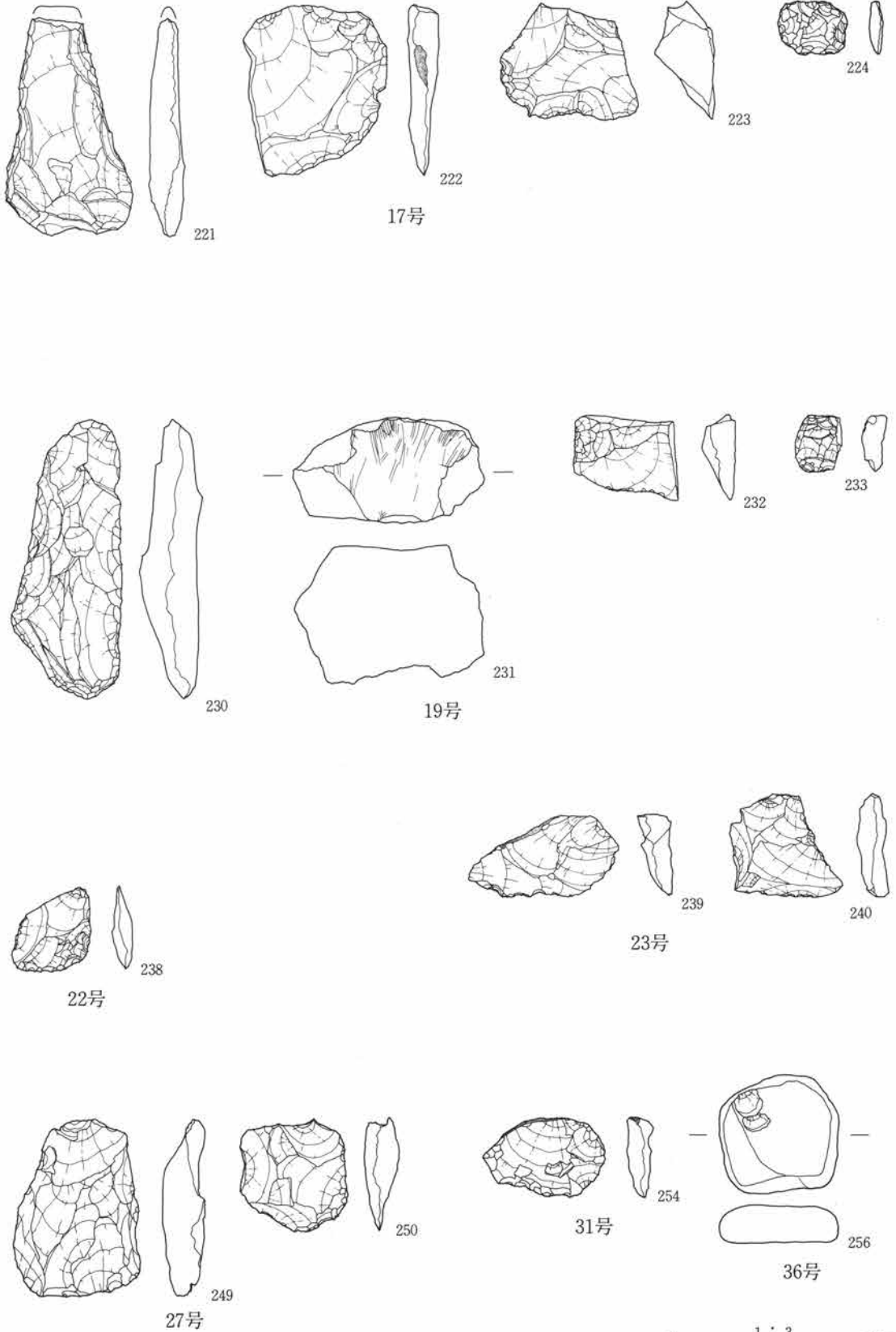
234・241・247・258・261は石錐である。247は刃部を欠損しているため、あまり明確でないが258と形状が類似しているため石錐とした。253は黄褐色の珪質変質岩を使用した石製品である。

156～164は打製石斧である。156～158は標準的な大きさの短冊形を呈した石斧である。156は刃縁は直刃となり、157と158は丸刃となっている。また、157は器中央部に着柄により生じたと思われる磨耗痕が認められる。159は大形の石斧であり、刃部には河原石の礫表皮を残している。刃縁は丸みをもち、側面は彎曲している。160・161は短冊形を呈し、刃部は山形を呈している。160は157と同様に磨耗痕が認められる。162は小形で短冊形をした石斧で、器中央部までの磨耗痕が認められる。163は正面に自然面を残した楕形の石斧である。器中央部で破損している。164は粗い剝離により形づく

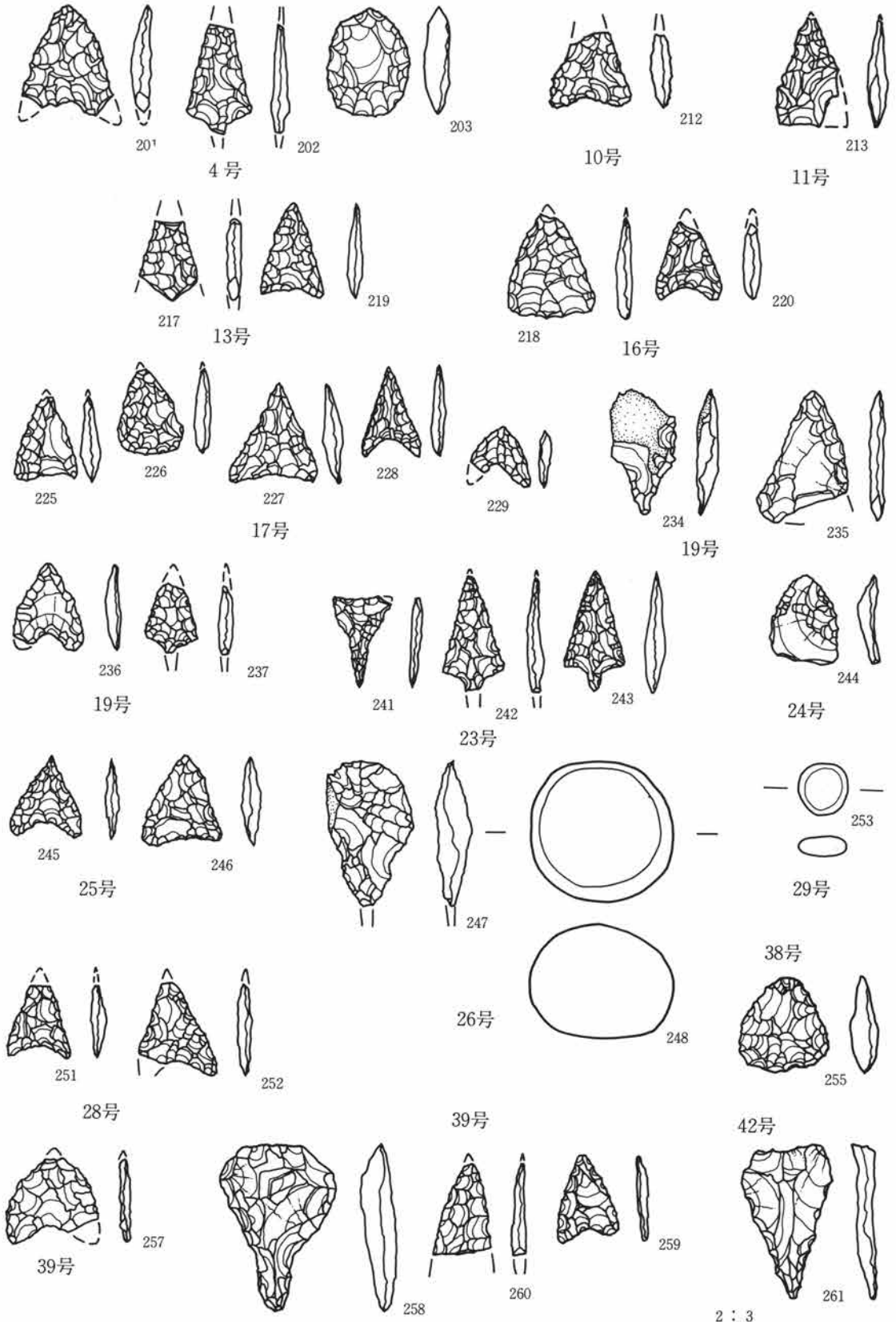


第43图 B区2·4·5·7·12号土坑石器 (1)

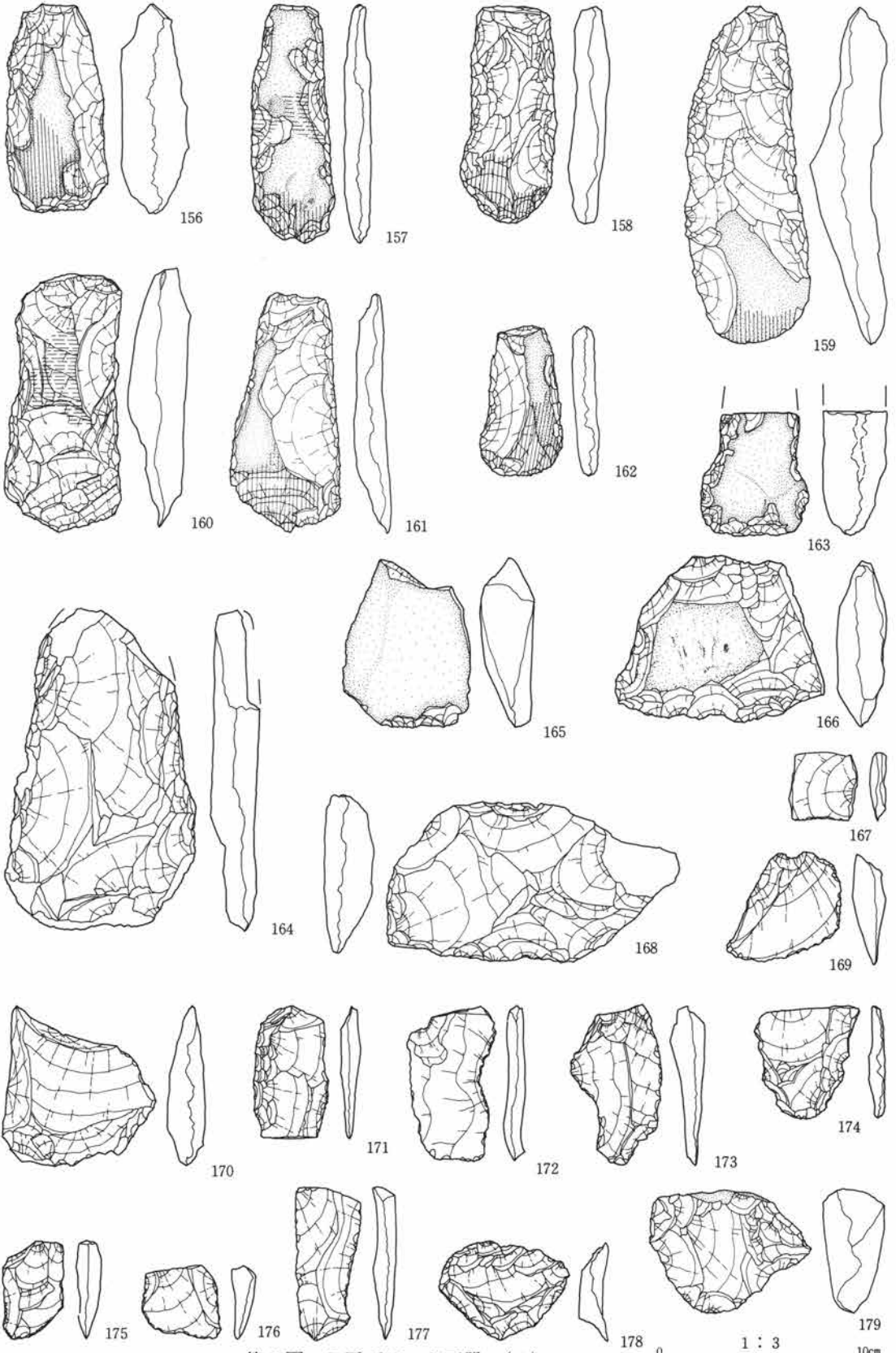
0 1:3 10cm



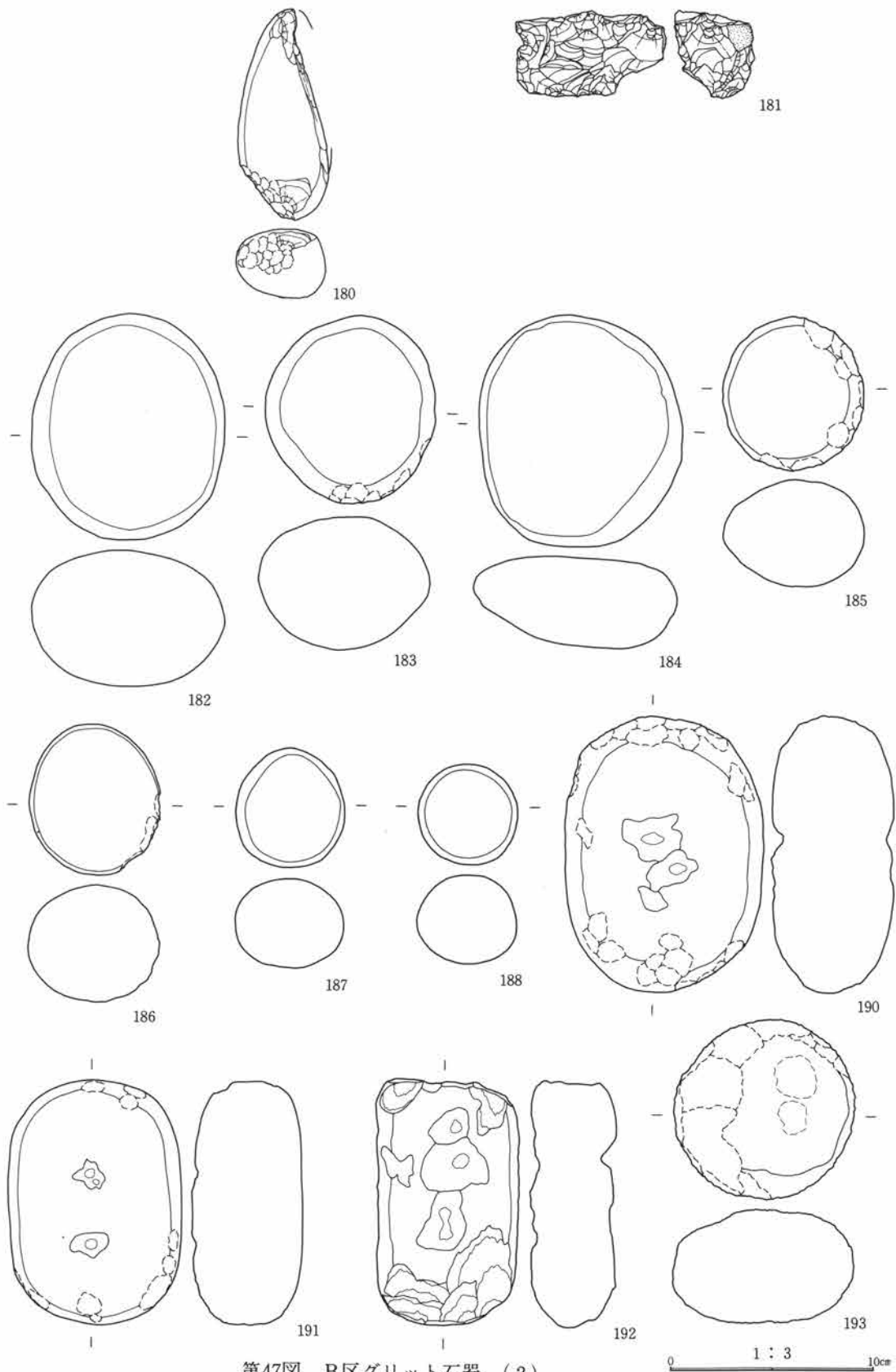
第44図 B区17・19・22・23・27・31・36号土坑石器 (2)



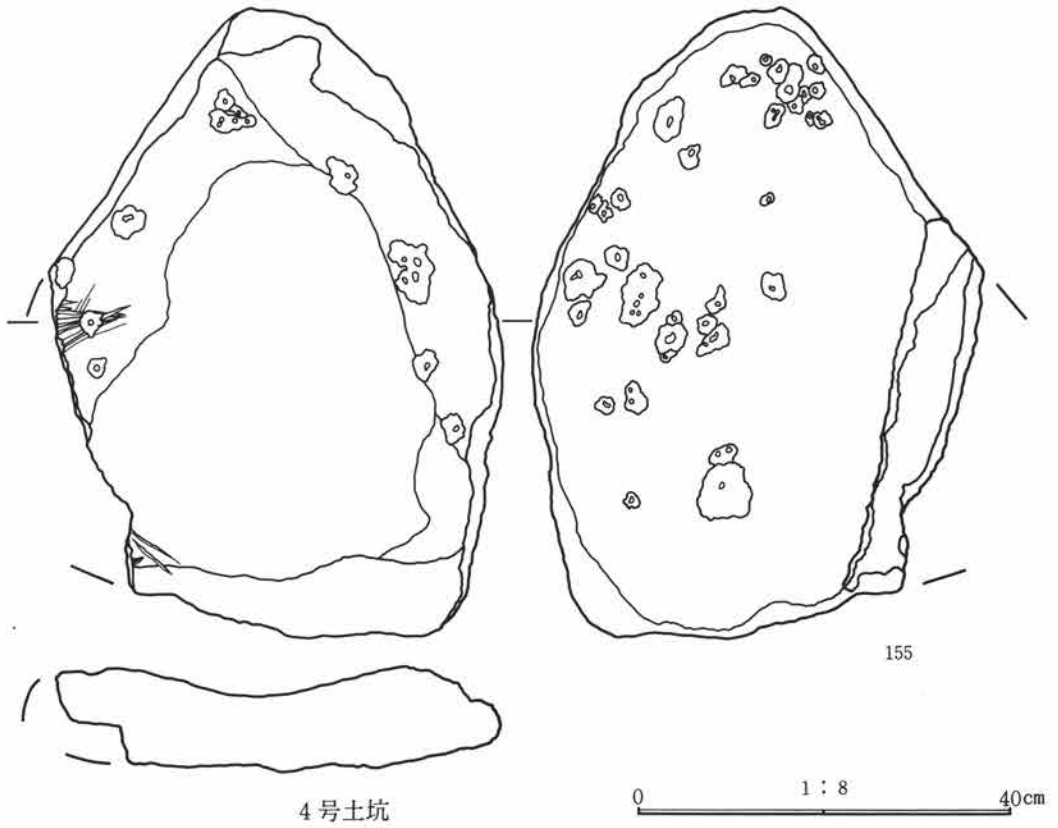
第45图 B区土坑出土石鏃集成



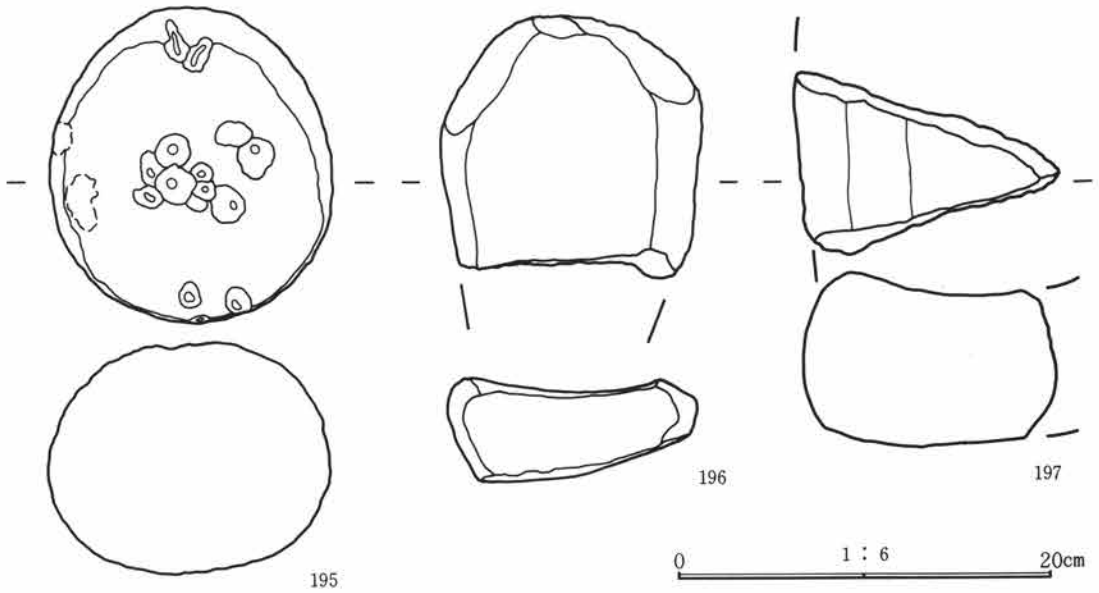
第46図 B区グリット石器 (1)



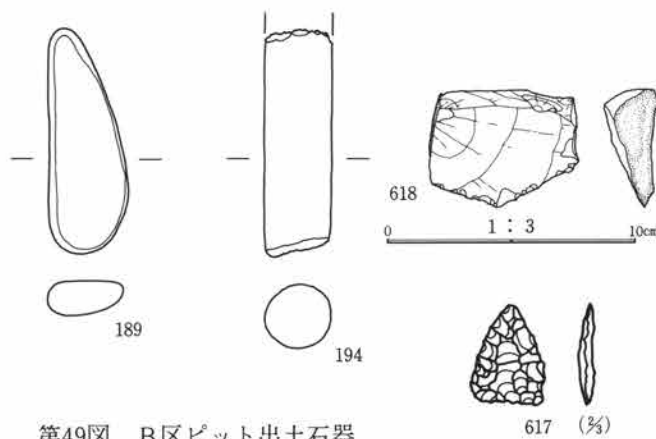
第47図 B区グリット石器 (2)



4号土坑



第48図 B区4号土坑・グリット石器 (3)



第49図 B区ピット出土石器

の字状の刃部を形成している。170は下端部と正面の右側縁に刃部を作出しているが、やや角張るために、変形「コ」の字状の刃部を作出している。171は平行する両側縁を刃部として使用している。172は下端部と平行する2側縁の3辺を刃部として使用している。173も同様に3辺を刃部として使用しているが、両側縁はやや彎曲した刃部となっている。174も3辺を刃部としているが、下端部は突出している。175・176も3辺を刃部としている。下端部の刃部は斜めの刃がむけられている。177は174と同様に下端部が尖るような形状を呈している。178と179は逆三角形の剥片を素材として使用している。刃部は突出し、その両側縁を使用している。

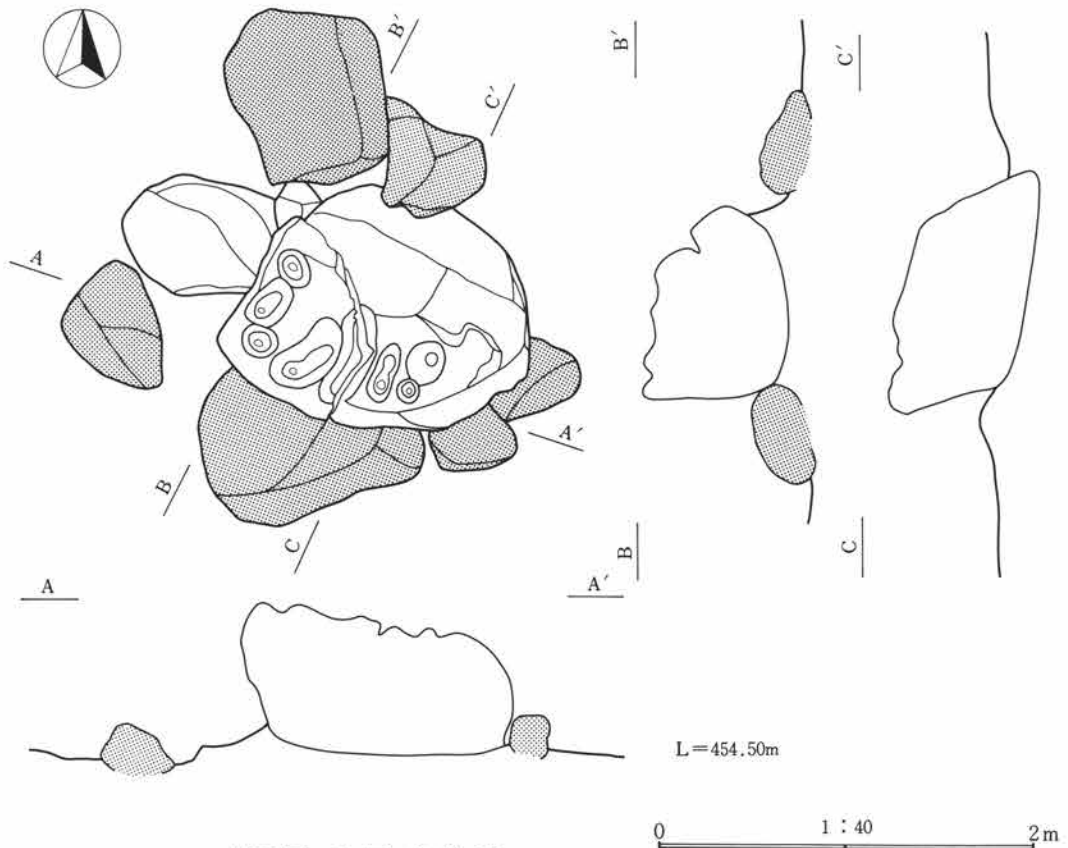
180は敲石である。正面の右肩部が欠損している。181は青緑色を呈する変質凝灰岩製の石核である。不規則な方向から連続的に剝離している。正面右側縁上端部に一部分自然面を残している。上端部は正面と裏面の斜め方向から剝離し、横断面の形態は舟底形に近い形状を呈している。182・184～188・193は磨石である。182と184は大形の磨石である。185は磨石であるが、周辺部には敲打痕が認められる。敲石と兼用したものである。186～188は小形で、円形を呈する磨石である。193は磨石であるが、凹痕が認められる。器表面の磨耗が著しい。183は敲石である。190は楕円形を呈する凹石であり、表・裏面ともに凹痕がある。191も同様の凹痕が認められるが、表面だけに凹痕が認められる。192は表面に凹痕が認められる。

155は大形の石皿破片であり、縁の部分と裏面には凹痕が認められる。また、表面の縁の一部には擦痕が認められる。195は円形を呈する多孔石である。196と197は石皿破片である。197はかなりの厚みをもつものであり、大形の石皿と思われる。

189は長楕円形を呈する扁平な磨石である。194は点紋緑色片岩を使用した、断面が円形を呈する石器である。両端が欠損しているが、石棒の破片と思われる。618は不定形の剥片を素材とした剥片石器である。下端部を刃部として使用している。刃縁は中央部の突出する山形を呈する。617は平基無茎石鏃である。表・裏面ともに規則的な押圧剝離により調整されている。

られた、広楕のような形を呈する石斧である。基部寄りで破損している。

165～179は不定形の剥片を素材とした、剥片石器である。165は下端部のみ刃部として使用している。直刃である。166は大形の剥片石器であり、下端部のみ刃部として使用している。丸刃である。167は1側縁のみを使用している。168は下端部と正面左側縁の2辺を刃部として使用している。169も2側縁に「L」



第50図 B区多孔石

⑥ 多孔石 (第50図)

多孔石は、土坑群がある屋根筋からは外れた、C区を望む北側の緩斜面上に単独で位置する。北端にある1号土坑からで8mの距離がある。北側緩斜面は、溶結凝灰岩(大峰山系)の転石が多く露頭するが、この多孔石は中でも大ぶりなものを選んでいる。

調査に入る前に基底部付近まで露呈していたが、根固め様に入り組んだ基底部の様子、大ぶりな石を選んでいること、平坦面を意識して据えた状態にあることから人為的な遺物、しかも原位置にあると判断した。

大きさは、上端面での長さ約150cm、最大幅118cm、高さ約80cmである。凹穴のほかには特徴的な加工痕はないが、北側の側面は剥落だけでなく、若干の成形を伴うものか。凹穴さ8個あり、円形と連結して楕円形のものに分けられ、都合5列からなる。大きさは、直径12~19cm、深さ3~6cm。断面は浅い鍋底状である。

遺物は、周囲からかく乱を主とする中期後半頃の土器や石器が出土している。中でもNo. 258の胴部中位以下を欠損した土偶の存在は、多孔石の性格を考える上で象徴的である。土偶との結びつきが強いとすると、本例は後期に属し、配石と土坑の求心的な信仰の対象物とできるか。

第 4 表 深沢遺跡B区石器観察表 (第43~49図)

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
154	石皿	B区4号土坑S-1	破片	15.3	14.8	13.7	3,820.0	輝緑岩
155	◇ (多孔石)	◇ 表土	完形	66.3	48.3	11.1	33.7kg	安山岩質凝灰岩
156	打製石斧 (短冊形)	◇ (攪乱層)	◇	10.1	5.0	3.3	201.6	黒色頁岩
157	◇ (◇)	◇ (◇)	◇	11.6	4.2	1.9	84.8	◇
158	◇ (◇)	◇ (◇)	略完形	10.5	4.5	1.8	108.1	◇
159	◇ (◇)	◇ (◇)	完形	16.5	6.1	3.7	268.6	◇
160	◇ (◇)	◇ (◇)	◇	12.6	5.7	3.1	215.4	◇
161	◇ (◇)	◇ (◇)	◇	11.6	5.4	1.8	111.8	◇
162	◇ (◇)	◇ 表土	◇	7.2	4.1	1.2	40.8	◇
163	◇ (◇)	◇ (攪乱層)	基部欠損	6.0	5.3	3.1	124.5	◇
164	◇ (撓形)	◇ (◇)	略完形	15.7	9.0	2.2	365.3	◇
165	剥片石器	◇ (◇)		8.2	6.3	2.7	149.9	◇
166	◇	◇ (◇)		8.1	10.2	2.4	205.1	◇
167	◇	◇ (◇)		3.4	3.4	0.9	12.8	◇
168	◇	◇ (◇)		7.9	14.4	1.5	264.3	◇
169	◇	◇ (◇)		5.4	5.5	1.6	30.9	◇
170	◇	◇ (◇)		7.9	7.5	1.9	98.0	◇
171	◇	◇ (◇)		6.5	3.6	1.0	20.4	◇
172	◇	◇ (◇)		7.6	4.4	1.1	28.4	◇
173	◇	◇ (◇)		7.8	4.5	1.7	40.9	黒色安山岩
174	◇	◇ 表土		5.5	5.2	0.9	21.4	黒色頁岩
175	◇	◇ (攪乱層)		4.8	3.0	1.2	15.1	珪質頁岩
176	◇	◇ 表土		3.6	3.9	1.2	14.2	黒色頁岩
177	◇	◇ (攪乱層)		7.5	3.2	1.2	26.8	◇
178	◇	◇ 表土		4.8	6.5	1.5	39.3	◇
179	◇	◇ (攪乱層)		6.1	7.9	3.0	130.1	◇
180	磨石	◇ (◇)	一部欠損	10.3	4.4	3.3	197.1	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
181	石核	B区 (攪乱層)		4.1	7.4	3.9	89.6	変質凝灰岩
182	磨石	☿ (☿)	完形	11.0	9.5	6.6	970.4	ひん岩
183	敲石	☿ (☿)	☿	9.2	8.3	6.4	642.9	☿
184	磨石	☿ (☿)	☿	11.3	10.0	4.4	748.4	砂岩
185	☿ (敲石)	☿ (☿)	☿	7.5	6.9	5.2	370.0	石英閃緑岩
186	☿	☿ (☿)	☿	7.3	6.4	5.7	362.9	☿
187	☿	☿ 表土	☿	5.8	5.4	4.3	183.2	珪質変質岩
188	☿	☿ (攪乱層)	☿	4.9	4.9	4.3	147.8	石英閃緑岩
189	☿	☿ (ピット130)	☿	9.0	3.0	1.4	57.7	流紋岩?
190	凹石	☿ (攪乱層)	☿	13.5	8.7	6.0	1286.5	石英閃緑岩
191	☿	☿ (☿)	☿	11.9	8.5	5.4	950.1	☿
192	☿	☿ 表土	☿	12.0	7.0	4.3	621.6	緑色片岩
193	磨石	☿ (攪乱層)	☿	8.8	8.9	5.5	606.4	石英閃緑岩
194	石棒	☿ ピット31	両端部欠損	9.0	2.7	2.7	129.9	点紋緑色片岩
195	多孔石	☿ (攪乱層)	完形	16.6	15.0	12.3	4150.0	石英閃緑岩
196	石皿	☿ 表土	1/2残	14.0	14.0	5.5	1690.1	粗粒安山岩
197	☿	☿ ☿	破片	14.0	9.6	9.2	1215.0	☿
198	打製石斧 (短冊形)	☿ 4号土坑	完形	10.6	4.0	1.5	60.1	細粒安山岩
199	凹石	☿ 2号土坑	☿	10.3	8.6	5.3	708.0	かこう岩
200	磨製石斧	☿ 4号土坑	端部欠損	4.9	4.3	2.4	76.1	変質玄武岩
201	石鏃 (ハート形)	☿ ☿	尾部欠損	2.7	2.3	0.5	2.3	黒色安山岩
202	☿ (有茎形)	☿ ☿	先端部欠損	2.7	1.6	0.5	1.8	黒色頁岩
203	☿ (不明)	☿ ☿	完形	2.7	2.1	0.6	3.1	☿
204	剥片石器	☿ ☿		4.1	6.1	2.5	61.0	☿
205	☿	☿ ☿		5.6	3.0	1.4	20.4	☿
206	磨石	☿ ☿	完形	11.1	9.2	5.9	859.6	珪質変質岩
207	凹石	☿ ☿	☿	12.5	6.7	3.8	496.0	ひん岩
208	剥片石器	☿ ☿		6.9	6.2	1.8	69.1	黒色頁岩

第IV章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
209	剥片石器	B区5号土坑		7.2	6.8	2.0	92.0	黒色頁岩
210	◇	◇ 7号土坑		3.1	3.5	1.0	10.9	黒色安山岩
211	磨石	◇ ◇	完形	2.7	3.2	1.5	17.1	変質凝灰岩
212	石鏃（ハート形）	◇ 10号土坑	先端部欠損	1.8	2.0	0.5	1.5	黒色安山岩
213	◇（◇）	◇ 11号土坑	尾部欠損	2.7	1.5	0.5	1.5	珪質頁岩
214	剥片石器	◇ 12号土坑		3.1	4.0	0.8	10.8	黒色頁岩
215	磨石	◇ ◇	完形	5.3	6.1	3.0	139.7	石英閃緑岩
216	◇	◇ ◇	◇	7.7	2.5	1.6	47.0	黒色頁岩
217	石鏃（不明）	◇ 13号土坑	先端尾部欠	2.0	1.5	0.4	1.2	黒色安山岩
218	◇（三角形）	◇ 16号土坑	先端部欠損	2.6	2.2	4.5	2.2	◇
219	◇（◇）	◇ 13号土坑	略完形	2.4	1.6	0.4	1.0	◇
220	◇（ハート形）	◇ 16号土坑	先端部欠損	1.9	1.7	0.5	0.9	◇
221	打製石斧（短冊形）	◇ 17号土坑	基部欠損	10.7	6.3	1.8	120.6	黒色頁岩
222	剥片石器	◇ ◇		8.3	7.1	1.6	96.0	◇
223	◇	◇ ◇		5.8	6.8	2.9	90.6	◇
224	ラウンドスクレイパー	◇ ◇		2.7	3.4	0.7	7.0	黒色安山岩
225	石鏃（ハート形）	◇ ◇	先端部欠損	2.1	1.6	0.6	1.3	◇
226	◇（三角形）	◇ ◇	◇	2.1	1.6	0.5	0.9	流紋岩質凝灰岩
227	◇（ハート形）	◇ ◇	略完形	2.6	2.2	0.5	1.6	黒色安山岩
228	◇（◇）	◇ ◇	完形	2.2	2.5	0.4	0.6	黒色頁岩
229	◇（◇）	◇ ◇	尾部一部欠	1.4	1.7	0.3	0.5	黒色安山岩
230	打製石斧（短冊形）	◇ 19号土坑	完形	14.6	5.4	3.2	202.9	黒色頁岩
231	砥石	◇ ◇		5.2	9.5	6.8	373.6	珪質変質岩
232	剥片石器	◇ ◇		4.3	5.2	1.7	33.4	黒色頁岩
233	◇	◇ ◇		2.8	2.3	1.2	8.2	珪質凝灰岩
234	石錐	◇ ◇	略完形	3.1	1.6	0.6	2.3	黒色安山岩
235	石鏃（三角形）	◇ ◇	尾部欠損	3.3	2.3	0.4	2.3	◇
236	◇（ハート形）	◇ ◇	完形	2.1	1.8	0.4	1.1	変質玄武岩？

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
237	石鎌 (有茎形)	B区19号土坑	先端尾部欠	1.7	1.4	0.4	0.7	黒色頁岩
238	剥片石器	◇ 22号土坑		4.1	3.7	1.0	16.1	◇
239	◇	◇ 23号土坑		4.0	7.5	1.7	35.3	◇
240	◇	◇ ◇		5.1	5.6	1.5	36.2	◇
241	ドリル	◇ ◇	完形	2.3	1.5	0.3	0.6	珪質頁岩
242	石鎌 (有茎形)	◇ ◇	尾部欠損	3.0	1.5	0.4	1.4	黒色頁岩
243	◇ (◇)	◇ ◇	完形	2.0	1.5	0.5	1.3	◇
244	◇ (不明)	◇ 24号土坑	尾部欠損	2.2	1.7	0.6	1.2	珪質頁岩
245	◇ (ハート形)	◇ 25号土坑	完形	2.0	1.8	0.4	0.9	珪質玄武岩?
246	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.2	2.0	0.5	1.8	黒色安山岩
247	ドリル	◇ 26号土坑	先端部欠損	3.6	2.2	0.9	6.0	チャート
248	磨石	◇ ◇	完形	3.5	3.6	2.8	45.3	流紋岩
249	剥片石器	◇ 27号土坑		8.7	6.3	2.1	112.8	黒色頁岩
250	◇	◇ ◇		5.6	5.4	1.7	47.5	◇ (化石含有)
251	石鎌 (ハート形)	◇ 28号土坑	先端部欠損	1.8	1.5	0.4	0.8	黒色安山岩
252	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	2.3	1.9	0.4	1.1	◇
253	石製品 (飾垂具)	◇ 29号土坑	完形	1.3	1.2	0.5	0.9	珪質変質岩
254	剥片石器	◇ 31号土坑		3.9	6.1	1.3	29.8	黒色安山岩
255	石鎌 (三角形)	◇ 35号土坑	完形	2.3	2.3	0.7	3.7	◇
256	磨石	◇ 36号土坑	◇	6.7	5.8	1.9	112.3	閃緑岩
257	石鎌 (ハート形)	◇ 37号土坑	先端部欠	2.1	2.3	0.3	1.4	黒色安山岩
258	ドリル	◇ 39号土坑	完形	4.2	2.8	0.8	7.7	黒色頁岩
259	石鎌 (ハート形)	◇ ◇	略完形	2.1	1.6	0.3	0.9	◇
260	◇ (不明)	◇ ◇	先端尾部欠	2.3	1.4	0.4	1.0	黒色安山岩
261	ドリル	◇ 42号土坑	完形	3.8	2.2	0.6	3.1	黒色頁岩
617	石鎌 (三角形)	◇ ビット85	◇	2.0	1.5	0.4	0.9	黒色安山岩
618	剥片石器	◇ ビット124		4.7	6.0	2.2	63.1	珪質頁岩

3 C 区

① 概 要 (第51・52図、図版37~40)

C区は北のD区と同一の東方へ緩やかに下るローム台地上にあるが、遺構のまとまりによりD区と区分した。範囲は東西25m、南北30mで、調査は主に人力により拡張・発掘を行なった。また、B区の土坑と同様に配石の覆土は水洗いを行ない細かな遺物の採集を行なった。

C・D区を載せる台地は上位段丘面の中位にあり、南北を埋没谷によって切られている。C区南の埋没谷は幅約15mで北東より南西方向へ延び、上位段丘面上位の小段丘崖まで湾入している。埋没谷は浅く谷頭より緩やかに北東方向へ傾斜している。C区はこの埋没谷に面した北西から南東へ下る緩傾斜面にあり、調査北西隅の標高は453.90mで南東隅の標高は452.60mで、23mの距離をおいて比高差は1.30mである。

C区では後期の環状をなす配石遺構と中期の埋甕1基が確認された。配石遺構は等高線に平行して築かれており、北半はローム面で南半は黒色土中で確認された。全体形状は中央部に配石のない空間を持ち、周囲を6~9mの幅で配石が巡る楕円形を呈している。現状の規模は南北17m、東西20mで配石遺構北半はさらに2m程度広がると考えられ、配石遺構はさらに南西方向へ延びて行くものと考えられる。

配石遺構中央部北東には楕円形の土坑があり、内部に小型の鉢と壺形土器、浅鉢の3個体の土器が伏せられていた。

環状をなす配石遺構は石棺状配石20基、中型配石4基、大型配石2基、列石1基、集石状配石28基から構成され、中央部の空間を取り巻いている。

石棺状配石は東端部を除く他の部分全面に分布し、楕円形をなし長軸は平均約1.70mである。石組の手法や長軸の方向性、位置により7群程度に分けられ、同じ石棺状配石で重複している例がある。また、石棺状配石は大型配石や集石状配石・列石により壊されている。

中型配石は東端部に位置し長軸約3mの楕円形をなし、3基が底面に敷石を持っていた。また、3基が等高線に平行する方向性を持ち、1基が直交する方向性を持っていた。中型配石同志は重複関係はなく石棺状配石とも重複していないが、大型配石や集石状配石には壊されている。

大型配石は東端部において相対する位置関係にある。長軸約4mの楕円形をなし、ともに底面は敷石されている。大型配石は石棺状配石や中型配石を壊しているが、一部の集石状配石が載っている例がある。

列石は南半において中央部の空間を画するように等高線に平行して約6.5m走行している。列石は石棺状配石を切って構築されている。

集石状配石は主に列石に沿う位置と東端部に位置している。形状の不定なものもあるが、立石を持つもの、環状をなすもの、積石状をなすもの、小集石状のもの等に分けられる。このうち、立石を持つ配石は列石に平行して分布している。

これらの配石遺構には丸石・石棒・石皿・多孔石・磨石・凹石あるいは石英質岩や桂化木等が配石



第51図 C区全体図（確認面）

の一部を構成しており、配石からは石鏃が多量に出土し、ヒスイ製小玉や土玉・耳栓・石製飾垂具・土偶等が出土した。また、大型配石からは焼骨が出土した。

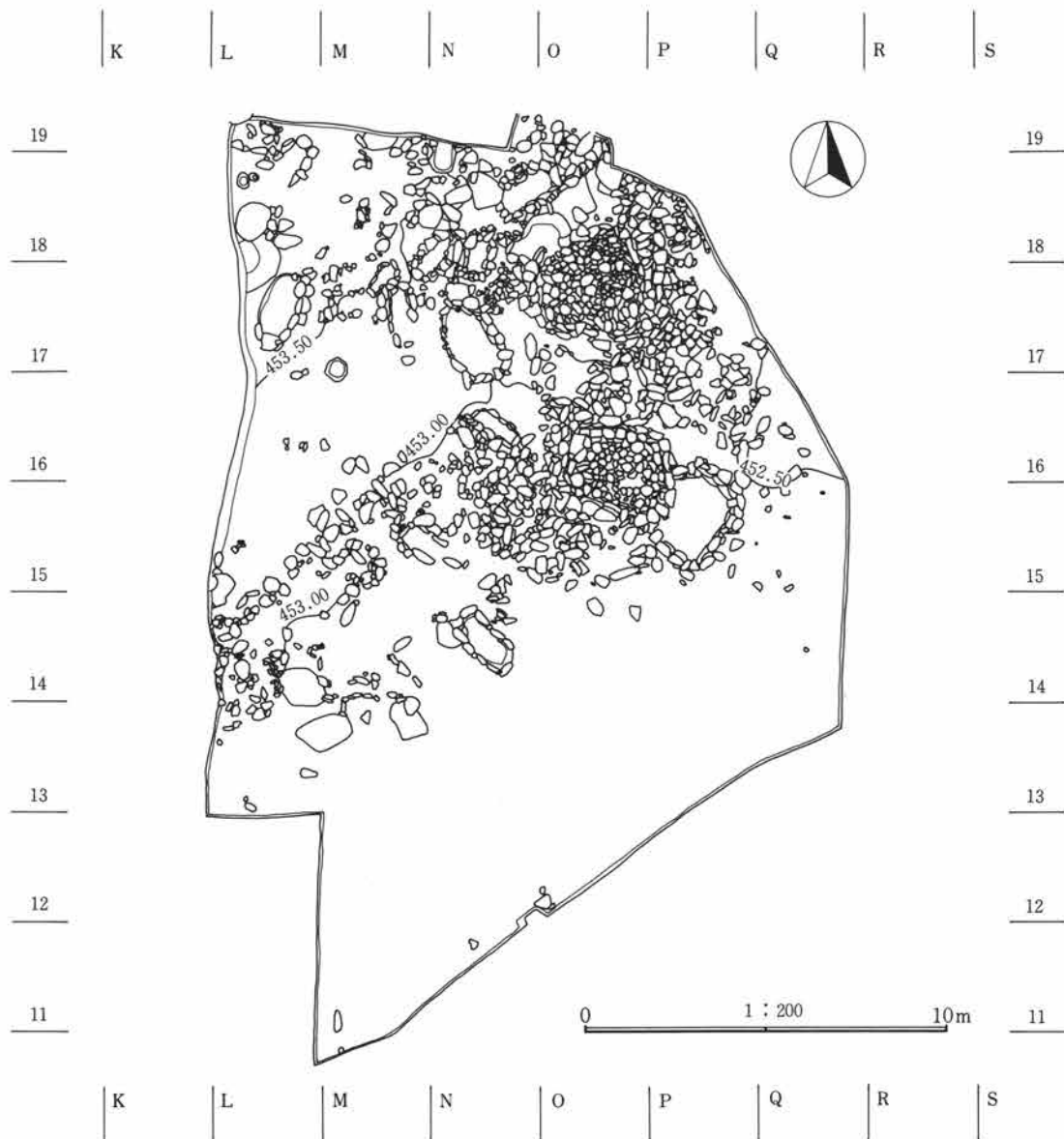
配石遺構は出土遺物により加曾利B 1式から加曾利B 3式の時期に比定され、石棺状配石・中型配石が古く、大型配石遺構・列石・集石状配石へ移り変わって行くと考えられる。

C区の配石遺構やグリットからは中期の土器4,121点、後期の土器6,764点が出土し、A・B区と異なり後期の土器量が増している。総石器量は3,422点で剥片は2,778点で81%を占める。打製石斧94点、磨製石斧4点、剥片石器97点、石鏃139点、ドリル15点、石匙2点、石皿37点、磨石67点、凹石23点、砥石9点、石錘4点、敲石2点、石核17点、石棒10点、多孔石11点、丸石14点、飾垂具等石製品47点、その他の石製品52点である。配石遺構の出土石器を反映し、他区と組成や量比が異なる。

② 配石遺構

全体形状・規模（第51・52図、図版37・38）

配石遺構は中央部に無配石空間を持つ環状をなし全体形状は楕円を呈すると考えられる。調査では



第52図 C区全体図（下面）

東半部が露呈したものと考えられ、配石遺構は南西方向へさらに延びる。現状の規模は南北17m、東西20mで配石遺構北半はさらに2m程度広がるものと考えられる。配石遺構の長軸方向はN-120°-Wで、北西から南東方向へ下る緩傾斜面に構築されており、北半はローム面で南半は黒色土中で確認された。確認面では幅6~9mの河原石の帯が楕円に巡る状態であったが、種々の形状を持つまとまりが認められ、ひとつのまとまりごとに調査を行なって行った。

配石遺構中央部（第51・52図、図版41-2）

中央部は現状において南北5m、東西7mの範囲が配石のない空間となっており、配石遺構の全体形状と同様に楕円をなし、さらに南西方向へ延びると考えられる。中央部北東隅には土坑（中央土坑）

が1基あり、3個体の土器が伏せられていた。

中央土坑 (第53・54図、図版41-2・42)

配石遺構中央部北東隅に位置している。形状は不整楕円形をなし、規模は長軸71cm、短軸56cm、深さ30cmで断面は浅い丸底状を呈している。長軸方位はN-25°-Eである。

覆土は黒褐色土中にローム小ブロックが混入しており、焼土や炭化物は検出されなかった。土坑内には南北に列をなす状態で北端に小型の鉢が中央に浅鉢が逆位で埋設されており、南端に小型壺形土器が立位で埋設されていた。また、土器の周囲には板石が2石立っていた。

第54図のNo. 433は浅鉢ではほぼ完形である。器高17cm、口径32×33.8cm、底径10cmで、内外面とも淡赤褐色をなし丁寧に研磨されている。器厚は5mmと薄い。口縁部平面形は隅丸方形をなし、4山の緩い波状口縁をしている。口縁端部は内傾し丸みを持った鋸歯状を呈している。波状口縁の山の部分に2個の円孔と谷の部分に1個の円孔がそれぞれ穿孔されており相対的に配置されている。文様は口縁部内面に施され、口縁直下に連続した円孔刺突が1条巡り、この下に2条の細隆線が巡っている。下半には6条の沈線が平行して巡り、沈線間は1本おきに斜行沈線が刻まれ疑似縄文をなしている。最下位にはLR縄文が充填されている。底部は網代底となっている。

No. 434は小型の鉢で口縁部の一部を欠損している。器高6.1cm、口径10.8cm、底径6.2cmである。外面は淡褐色を呈し内面は黒色研磨されている。土器は椀状をなし、口縁端部は内傾している。口縁直下に4条の平行沈線が巡っている。底部は網代底となっている。

No. 435は小型の壺型土器ではほぼ完形である。器高9.0cm、口径3.3cm、胴部最大径9.5cm、底径4.5cmである。口径が小さく胴部が球形をなしている。色調は茶褐色～黒褐色を呈し器面を研磨している。文様は口縁直下から胴部上半に施され、2条の平行沈線内を斜行沈線で充填した文様帯を3条配し、中位にRL縄文を地文とする逆「の」の字のモチーフを4単位配している。No. 433～435はいずれも加曽利B1式に比定される。

1号埋甕 (第53図、図版42-2)

2区L-15グリットにあり、列石によって切られ壊されている。大型深鉢の口縁部～胴部上半を正位に黒色土中に埋設していた。口縁部は平縁で縄文を地文に隆帯による楕円区画文が4単位配されている。頸部は緩やかに括れ、胴部には単節斜縄文が施されている。時期は加曽利EⅢ式に比定される。

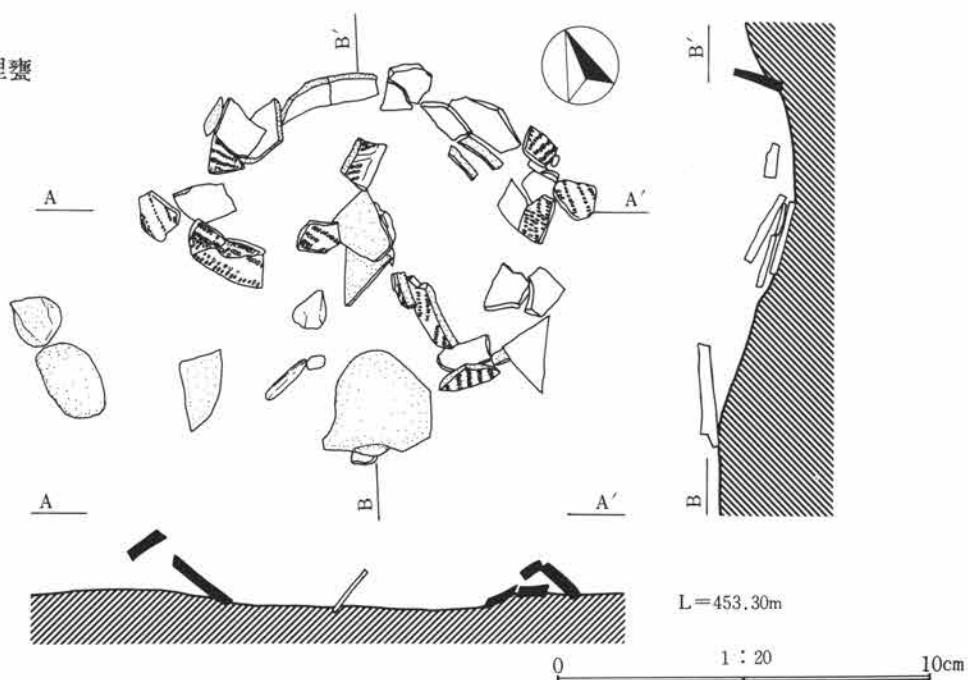
B区とC区の間埋没谷は中期の土器も多く包含しており、埋甕の出土もあり、中期段階より何らかの位置付けがなされていたと推定される。

石棺状配石

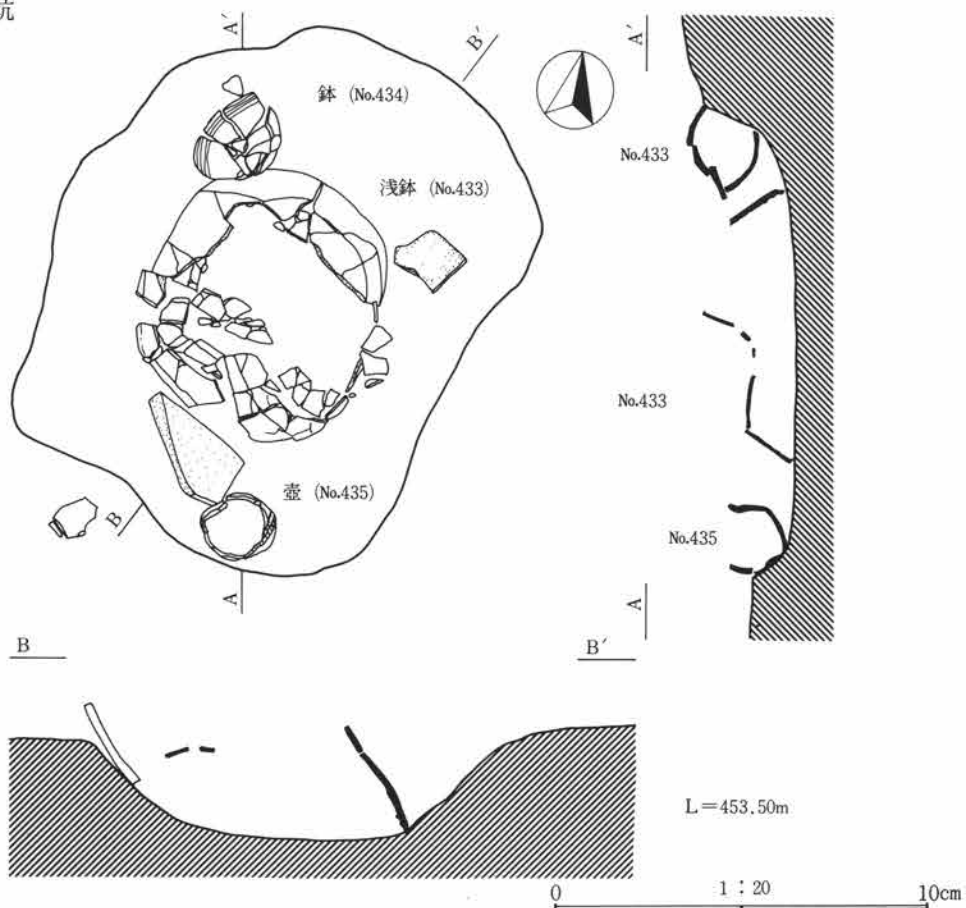
1b号配石 (第55・84図、第5・7表)

配石遺構南縁西端に位置し黒色土中に構築されている。1a号配石によって南半を壊されており、配石は北半部のみ残存していた。形状は長楕円をなすと考えられ、規模は長軸1.45m、短軸1.10m、深さ65cmと推定され長軸方位はN-49°-Wである。

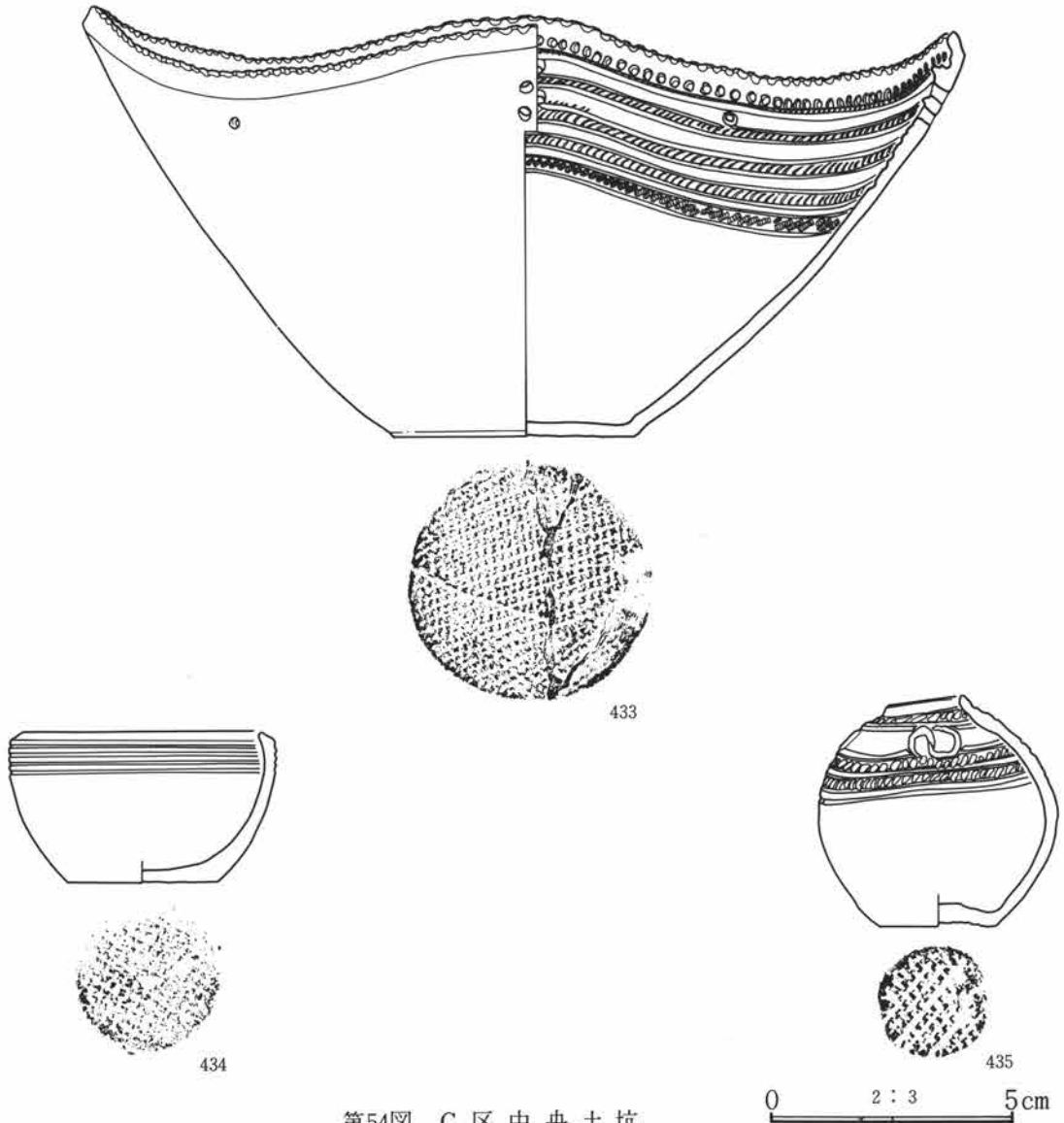
1号埋甕



中央土坑



第53図 C区1号埋甕・中央土坑



第54図 C区中央土坑

配石北半は周壁に沿って大型の河原石を横位に2～3段積み重ね、隙間に小ぶりの石を詰めている。配石からは打製石斧1点と石鏃1点が出土した。

2b号配石 (第55図、第5表)

配石遺構南縁西端に位置し黒色土中に構築されている。列石によりほとんど壊され北端の配石2石が確認されただけである。他の石棺状配石と同様に長楕円のプランをなすと考えられるが規模は不明である。長軸方位は1b号配石に近いと推定される。確認された配石2石は周壁に沿って偏平な河原平を立位で並べている。遺物は出土しなかった。

8b号配石 (第53図、第5表)

配石遺構の東縁中央部寄りに位置し黒色土中に構築されている。35号配石を切り7・8a号配石が脇に載っている。平面形は長方形をなし北半がやや広がっている。規模は長軸1.55m、短軸0.72m、深さ25cmで長軸方位はN-65°-Wである。

周壁に沿って偏平な河原石や板石を横位に1列立て並べている。底面はローム漸移層となっている。遺物は出土しなかった。

18号配石 (第56・77・93・101図、図版44-1、第5・7表)

配石遺構東縁中央部寄りに位置しローム面で確認された。北端では21・22号配石の周石が載っていた。また、周壁の配石が一部抜かれ乱れている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸2.45m、短軸1.58m、深さ65cmで石棺状配石の中では最も大きい。長軸方位はN-63°-Wである。

周壁に沿って配石されており下半は偏平な河原石や山石を立位で1列並べ立て、上端に偏平な河原石を載せ縁石としている。遺物は土器の細片が186点出土し、石器は石鏃7点、石核1点、剥片28点が出土した。

19号配石 (第56・77・93・101図、図版44-2、第5・7表)

配石遺構東縁中央部寄りに位置しローム面で確認された。周壁の配石の一部が抜かれている。30号配石に載り22・23号配石が一部載っている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸1.82m、短軸0.98m、深さ25cmで長軸方位はN-16°-Wである。

周壁に沿って配石されており下半は偏平な河原石を立位で1列並べ立て、上端に大小の河原石を1～2段水平に載せ縁石としている。配石遺構北半の中位の覆土より耳栓が2個(第77図 No. 371・372)出土し、他に打製石斧1点、石鏃1点、小型偏平飾垂具1点、剥片10点が出土した。

21号配石 (第57図、図版45-1・46-1、第5・7表)

配石遺構東縁北寄りに位置しローム面で確認された。周石の一部が18・27号配石に載っており、20・22号配石の一部が載っている。石棺状配石の周囲をさらに楕円形に配石が取り巻いている。石棺状配石は楕円形をなし、規模は長軸1.55m、短軸1.00m、深さ40cmで長軸方位はN-5°-Eである。

石棺状配石は周壁に沿って下半は比較的大きな河原石を立位で1列並べ立て、上端に大小の河原石を水平に載せ縁石としている。

周囲の配石は20・22号配石によって切られているため全体形状や規模は確定できないが、石棺状配石の周囲を幅1m程度で取り巻いていたと推定される。配石は比較的小ぶりの河原石や山石を水平に敷き詰めている。

遺物は土器細片196点、打製石斧1点、石鏃1点、ヒスイ製小玉2点、桂化木1点、剥片55点が出土した。また、覆土中には焼骨の細片が極少量混入していた。

22号配石 (第58・79・93・101図、図版45-2～46-2、第5・7表)

配石遺構東縁北寄りに位置しローム面で確認された。蓋石を持つ石棺状配石を中心に周囲に楕円形の周石が巡る型態をなし、周石の一部が19・21・30号配石に載り、23号配石に一部切られている。

石棺状配石は長楕円形をなし、4石の大きな河原石が長軸に対して直交して載っており蓋石としている。規模は長軸1.85m、短軸1.18m、深さ30cmで長軸方位はN-37°-Eである。配石下半は周壁に沿って比較的大型で偏平な河原石を立位で1列並べ立て、上半に大小の河原石や山石・板平を2～3段横位に積み上げている。

周囲の配石は石棺状配石と軸を同じくする楕円形をなし、規模は長軸1.85m、横軸1.18mである。配石の縁辺部は大型の河原石や山石を直列させて囲い込んでおり、内部に大小の河原石や山石を詰め

ている。また、露頭する山石も配石の一部として用いている。遺物は土器細片110点、石鏃3点、石皿1点、石核1点、剥片19点が出土した。

26号配石 (第59・79・98・101図、図版47-1、第5・7表)

配石遺構東縁北寄りに位置しローム面で確認された。覆土上半には大小の礫が多量に混入し、配石の一部が乱れている。31号配石に配石の一部が載っている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸2.05m、短軸1.50m、深さ30cmで長軸方位はN-50°-Eである。

周壁に沿って配石されており西壁を除く他の壁は、下半を偏平な河原石を立位で1列並べ立て上半は河原石や山石を横位に2~3段積み上げ縁石としている。西壁は最下部より河原石や山石・板石を横位に並べ3~4段積み上げている。遺物は土器細片150点、打製石斧2点、磨石4点、凹石1点、砥石1点、小型偏平飾垂具1点、丸石1点、剥片55点が出土した。

27号配石 (第59・79・98・102図、図版47-2、第5・7表)

配石遺構東縁北寄りに位置しローム面で確認された。20号配石によって南壁を切られており、21号配石の一部が載っている。また、北半は攪乱されており配石が抜かれている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸1.71m、短軸0.92m、深さ25cmで長軸方位はN-59°-Eである。

配石は西壁だけが確認され、周壁に沿って偏平な河原石を立位で並列させ上端に小型の河原石が載っていた。遺物は土器細片82点、打製石斧1点、礫器1点、石鏃1点、凹石1点、ヒスイ製小玉1点、剥片15点と土製小玉1点が出土した。

28号配石 (第59・79・98図、図版48-1、第5・7表)

配石遺構東縁北東寄りに位置し黒色土中で確認された。周辺には河原石が散乱し上半は一部攪乱を受けている。また、北半は調査できなかった。平面形は石棺状配石と同様に楕円形をなすと考えられる。現状の規模は長軸1.38m、短軸1.05m、深さ45cmで長軸方位はN-27°-Eである。

周壁に沿って配石されており、下半は偏平な河原石を立位で1列並べ立て上端に河原石が横位で載っている。遺物は土器細片38点、石匙1点、石核1点、丸石1点、桂化木1点、剥片6点が出土した。

30号配石 (第59・80図、図版48-2、第5・7表)

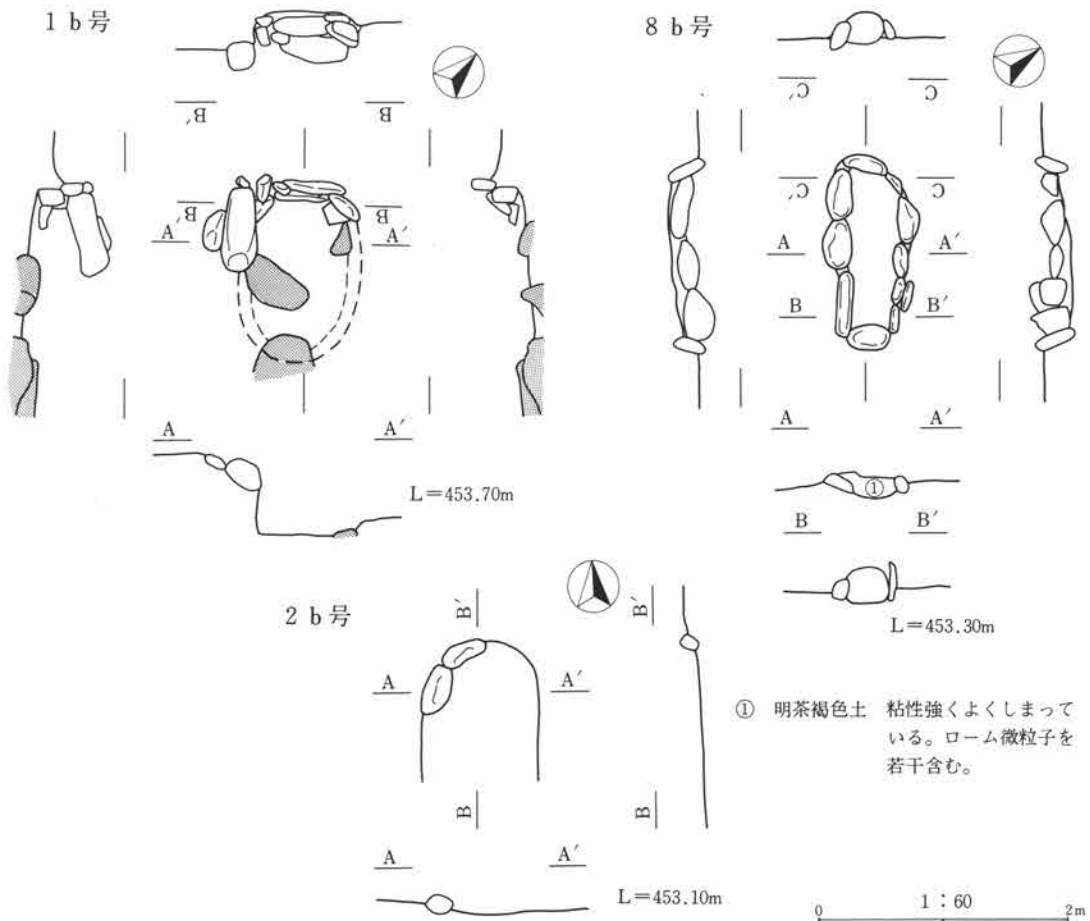
配石遺構東縁中央部寄りに位置しローム面で確認された。19・22・23号配石の一部が載っている。石棺状配石の中で最小規模の配石で北半が広がる長楕円形を呈している。規模は長軸1.13m、短軸0.70m、深さ18cmである。周壁に沿って小ぶりの河原石を立位で並べ立てている。遺物は土器細片57点、剥片11点が出土した。

31号配石 (第59・102図、図版49-1、第5・7表)

配石遺構東縁北東寄りに位置し黒色土中で確認された。周囲は攪乱が著しく配石の一部が乱れている。また、北半は調査できなかった。他の石棺状配石と同様に長楕円形を呈すると考えられる。現状の規模は長軸1.25m、短軸1.17m、深さ35cmで長軸方位はN-27°-Eである。

周壁に沿って配石され、下半は偏平な河原石を立位で1列並べ立て上端に横位で河原石を載せている。遺物は土器細片11点、石鏃1点、剥片5点が出土した。

33号配石 (第59・102図、図版49-2、第5・7表)



第55図 C区 1 b・2 b・8 b号配石

配石遺構東縁中央に位置しローム面で確認された。20 a号配石によって北壁が切られており、17号配石の一部が載っている。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.85m、短軸0.72m、深さ35cmで長軸方位はN-57°-Wである。

周壁に沿って配石され、大型で偏平な河原石を立位で1列並べ立て隙間に小ぶりな河原石を詰めている。南壁の一部には平積みの中にもある。遺物は土器細片14点、磨石1点、剥片3点が出土した。

35号配石 (第59・102図、図版50-1、第5・7表)

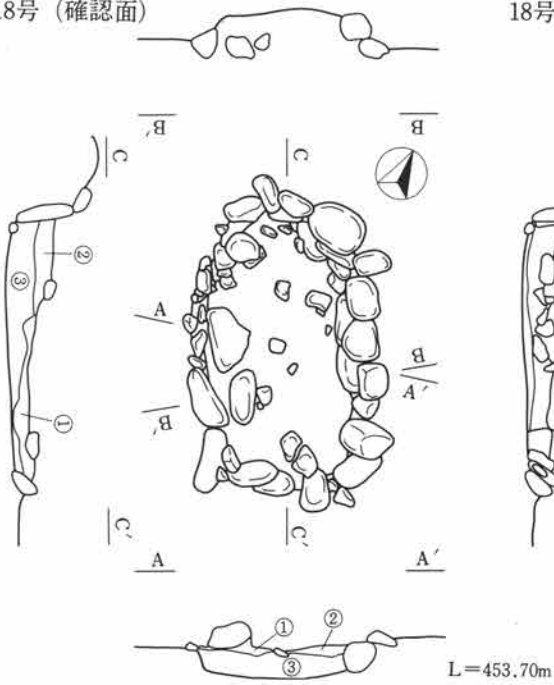
配石遺構東縁中央寄りに位置し黒色土中で確認された。8 b配石によって北半を切られ、7号配石が載っている。平面形は長楕円形と考えられ、現状の規模は長軸1.30m、短軸0.95m、深さ33cmで長軸方位はN-26°-Wである。

周壁に沿って大型で偏平な河原石を立位で1列並べ立てていたと考えられるが、ほとんどの石が倒れ込んでいる。7号配石構築時に破壊されたものと考えられる。遺物は土器細片9点、石鏃2点、剥片2点が出土した。

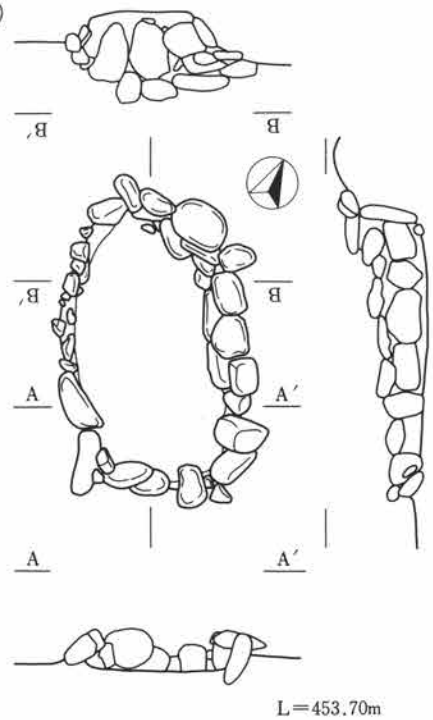
A号配石 (第60図、図版50-2、第5表)

配石遺構の南縁に位置し東西両壁部分に山石が露頭しており、黒色土中で確認された。南壁の配石はほとんど抜かれており、北壁も配石が乱れている。平面形は長楕円形で、規模は長軸2.16m、短軸

18号 (確認面)

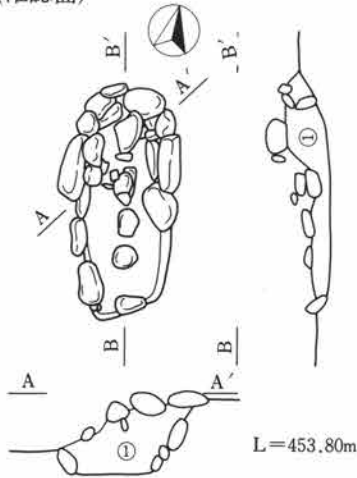


18号 (下面)

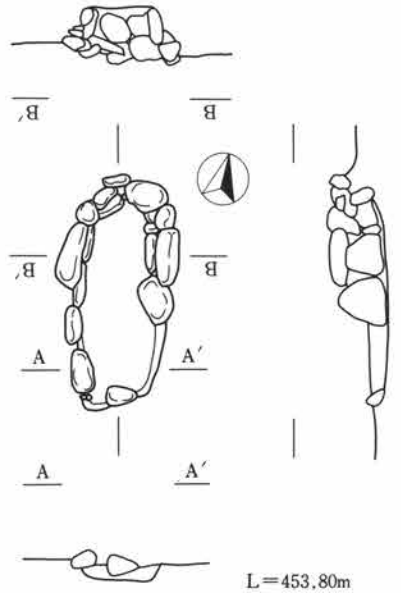


- ① 黒褐色土 しまっており、若干粘性あり、黄色のローム粒を含む。
- ② 茶褐色土 炭化物を若干含み、粘性少しあり。
- ③ 茶褐色土 炭化物を若干含み、しまりはない。

19号 (確認面)



19号 (下面)

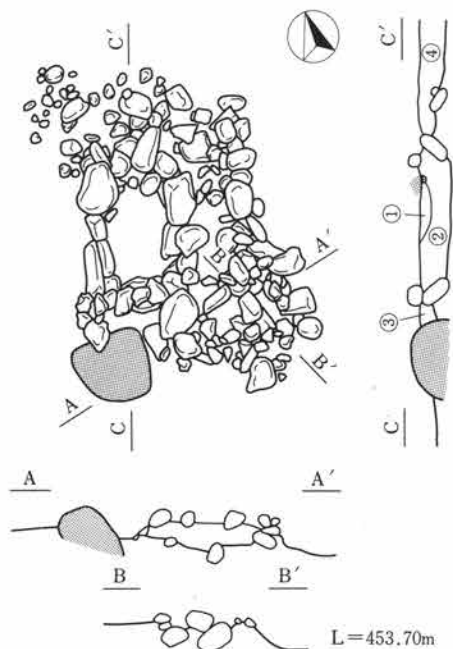


- ① 明褐色土 粘性強く、小山石をやや多く含む。

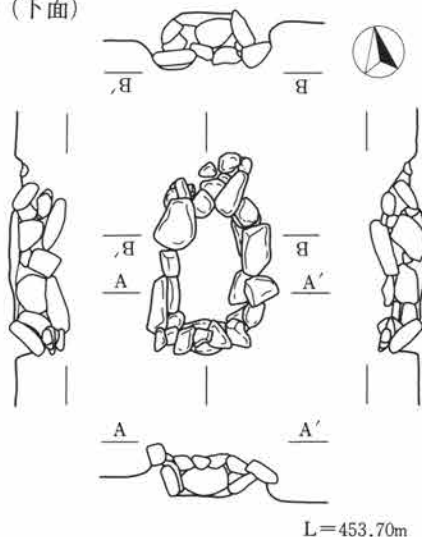
0 1:60 2m

第56図 C区18・19号配石

21号 (確認面)

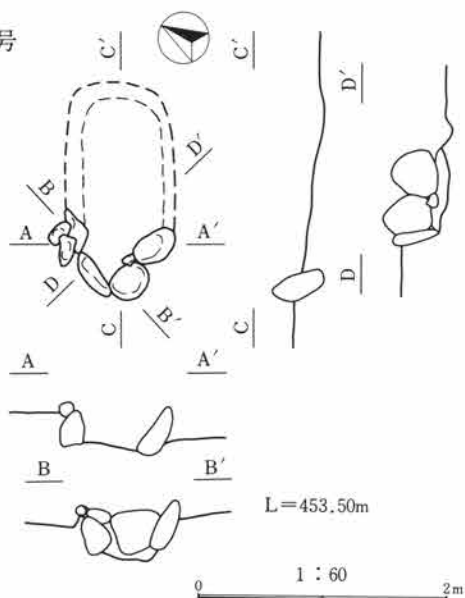


21号 (下面)



- ① 黒褐色土 山石(0.2~1cm)を多く含み、粒子はやや細かく粘性はやや強い。
- ② 褐色土 山石を多く含み、粒子粗く(砂質)粘性弱い(炭火物を極少量含む)。
- ③ 黒色土 山石を含み、ローム小ブロック?極少量含む。粒子やや細かく、粘性やや弱い。
- ④ 黒色土 ③と同様。

27号



第57図 C区21・27号配石

0.80m、深さ28cmで長軸方位はN-81°-Wである。

配石は周壁に沿って立位で1列並べていたと考えられる。遺物は土器細片7点が出土しただけである。

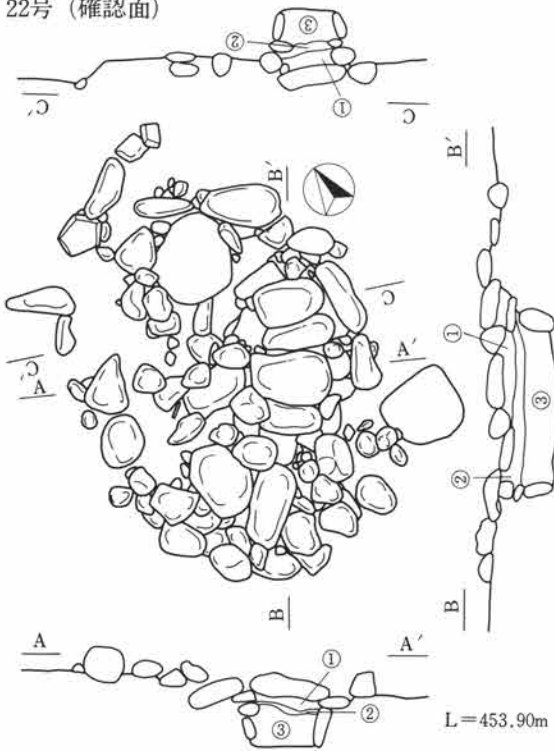
C号配石 (第60図、図版50-2、第5表)

配石遺構南縁のA号配石とD号配石の間に位置し、黒色土中で確認された。配石は4石が確認されただけで他は抜かれていた。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.75m、短軸0.95m、深さ10cmで長軸方位はN-46°-Wである。

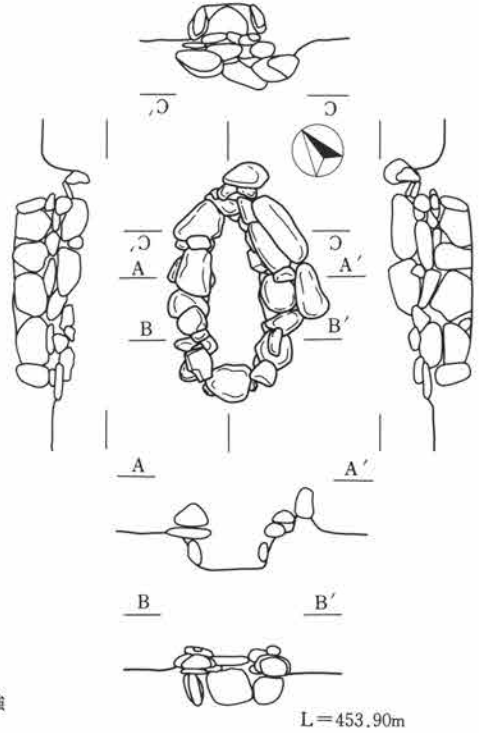
配石は周壁に沿って河原石や山石を立位で1列並べていたと推定される。遺物は土器細片11点、剥片1点が出土した。

D号配石 (第60図、図版51-1、第5表)

22号 (確認面)



22号 (下面)



- ① 黒褐色土 細かい砂礫を含み、粒子は細かく粘性強い。
 ② 茶褐色土 山石風化粒を多く含み、粒子は密で粘性は①より強い。
 ③ 明褐色土 粘性強く、小山石を多く含む。

第58図 C区22号配石

0 1 : 60 2m

配石遺構南縁でC号配石と近接して位置し黒色土中で確認された。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸2.08m、短軸0.98m、深さ68cmで長軸方位はN-43°-Wである。

周壁に沿って大型で偏平な河原石を立位で1列並べ、隙間に小ぶりの河原石を詰めている。遺物は土器細片3点が出土しただけである。

E号配石 (第60図、図版51-2、第5表)

配石遺構南縁中央寄りに位置し黒色土中で確認された。南半の配石は抜かれ乱れており、北半には、5号配石の一部が載っている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸1.92m、短軸1.20m、深さ20cmで長軸方位はN-56°-Wである。

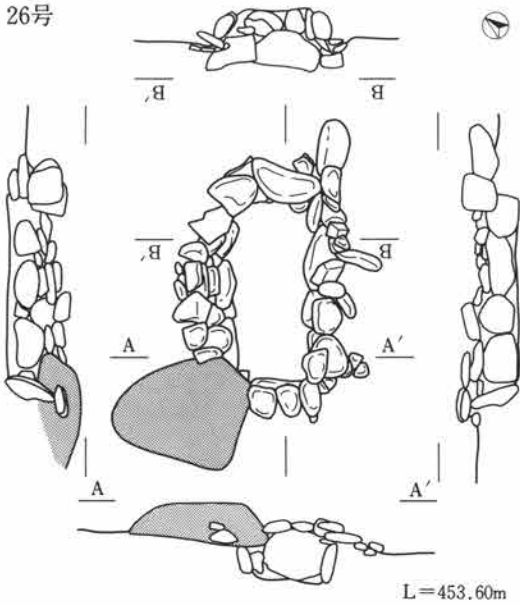
周壁に沿って大型で偏平な河原石を1列巡らし、上端に偏平な河原石を載せている。遺物は土器細片9点が出土しただけである。

G号配石 (第60・100図、図版52-1、第5・7表)

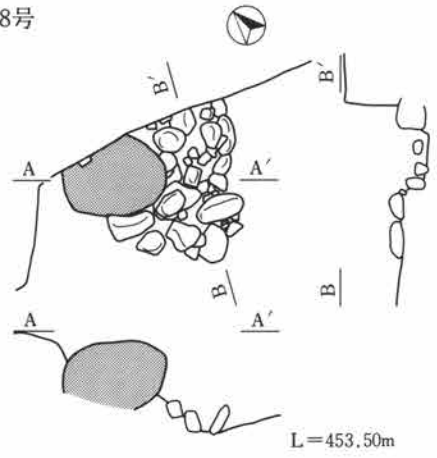
配石遺構北縁中央部寄りに位置しローム面で確認された。西半周壁は攪乱され石が抜かれている。平面形は長楕円形をなし、規模は長軸2.25m、短軸1.30m、深さ45cmで長軸方位はN-18°-Eである。

周壁に沿って偏平な河原石を2重に巡らし、隙間を小ぶりの河原石や山石で詰めている。遺物は土器細片12点、打製石斧1点、石英質岩1点、桂化木1点、剥片6点が出土した。

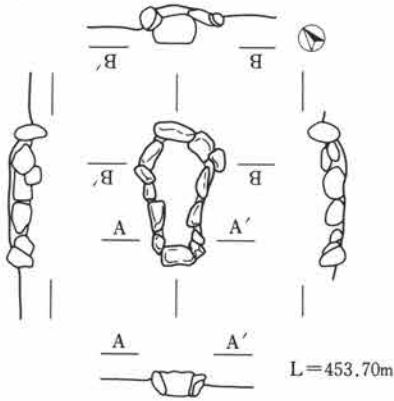
26号



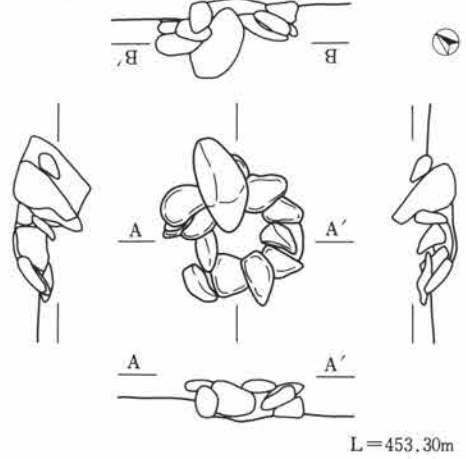
28号



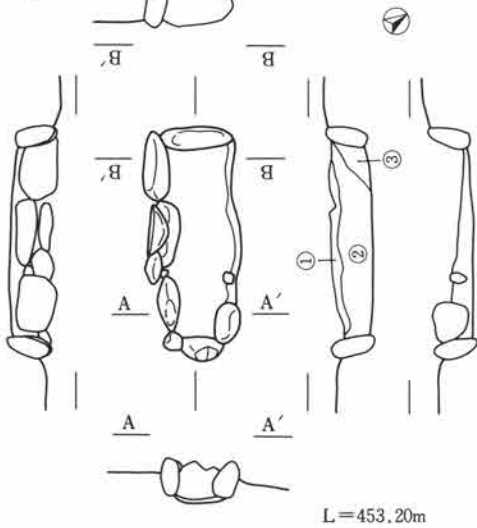
30号



31号

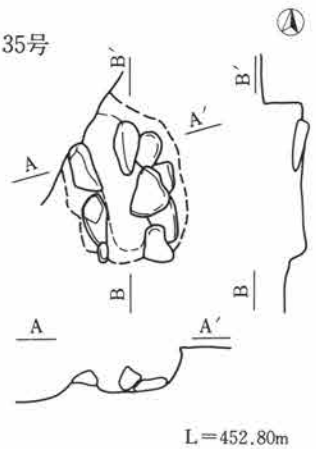


33号



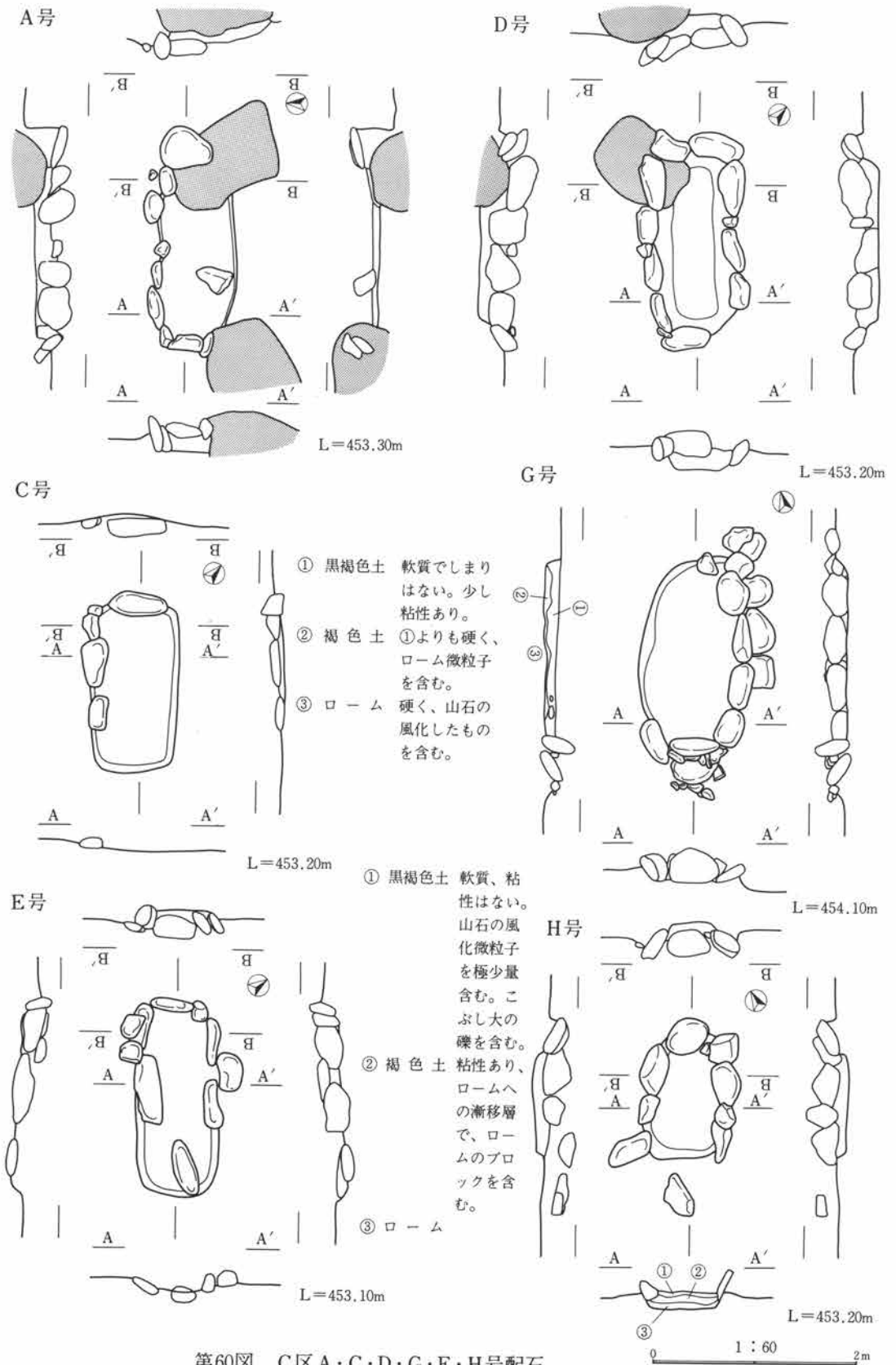
- ① 黒褐色土 ロームの粒子や砂を含み、粘性が弱い。
- ② 褐色土 ロームの粒子や砂を多く含み、粘性が強い。また、礫や軽石も含む。硬くしまっている。
- ③ 褐色土 ロームの粒子や砂を多く含み、粘性が強い。また礫や軽石が少ない。

35号



第59図 C区26・28・30・31・33・35号配石

0 1 : 60 2m



第60図 C区A・C・D・G・E・H号配石

H号配石 (第60・100図、図版52-2、第5・7表)

配石遺構北縁北寄りに位置しローム面で確認された。南半は攪乱を受け配石が抜かれ乱れている。平面形は長楕円形をなすと考えられ、現状の規模は長軸1.35m、短軸0.95m、深さ37cmで長軸方位はN-30°-Eである。

周壁に沿って偏平な河原石を1列巡らしたと考えられる。遺物は土器細片7点が出土しただけである。

中型配石

10号配石 (第61・75・89図、図版53、第5・7表)

配石遺構東縁南東隅に位置し黒色土中で確認された。11号配石によって西壁が切られ、12号配石の一部が載っている。平面形は楕円形をなし、規模は長軸3.00m、短軸2.40m、深さ52cmで長軸方位はN-30°-Eである。覆土上半には多くの河原石が混入していた。

周壁に沿って配石されており、北壁を除く他の壁は大型の河原石を平積みにし3~4段積み上げている。北壁は下半を偏平な河原石を立位で3石を並列させ、上端に偏平な河原石を2段平積みしている。底面は平坦で敷石されていなかった。遺物は土器細片672点、打製石斧1点、剥片石器1点、礫器1点、石鏃15点、ドリル1点、飾垂具1点、剥片92点が出土した。

16a号配石 (第62・92図、図版54、第5・7表)

配石遺構東縁中央に位置し黒色土中で確認された。13・16b・20a・20b号配石が載り、南壁と東壁が壊され、底面の敷石の一部が抜かれている。平面形は楕円形をなし、規模は長軸3.05m、短軸2.15m、深さ28cmで長軸方位はN-54°-Eである。

周壁は長楕円形の大型の河原石を2~3段積み上げ、上端には小ぶりの河原石や板石が載っている。底面にも偏平な河原石を短軸に平行するように敷き、隙間を所々小礫で詰めている。遺物は土器片212点、打製石斧1点、剥片石器3点、礫器1点、石鏃4点、ドリル1点、石核1点、ヒスイ製小玉1点、桂化木1点、剥片42点が出土した。

20b号配石 (第62図、図版56~58、第5表)

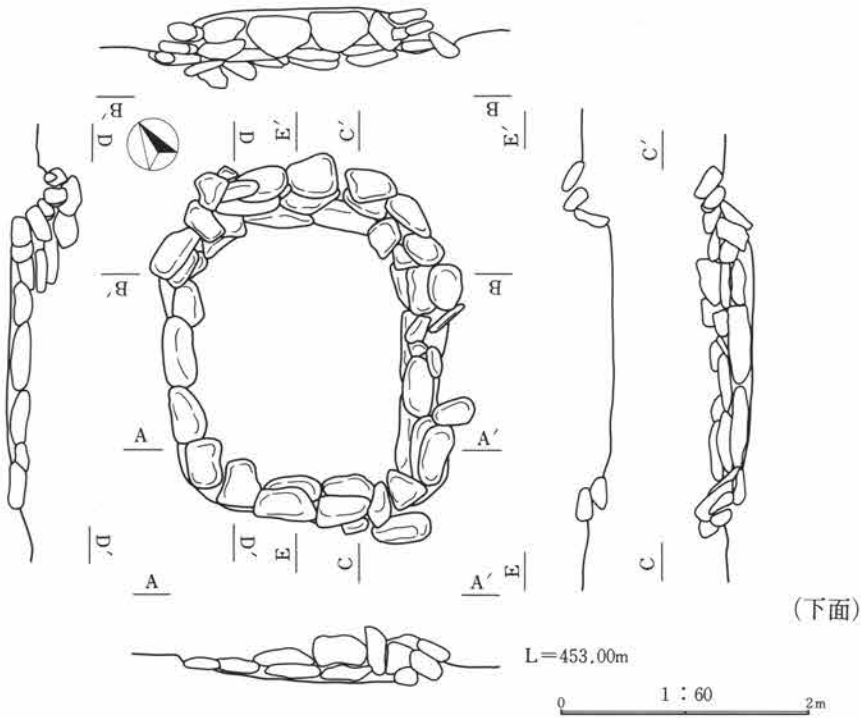
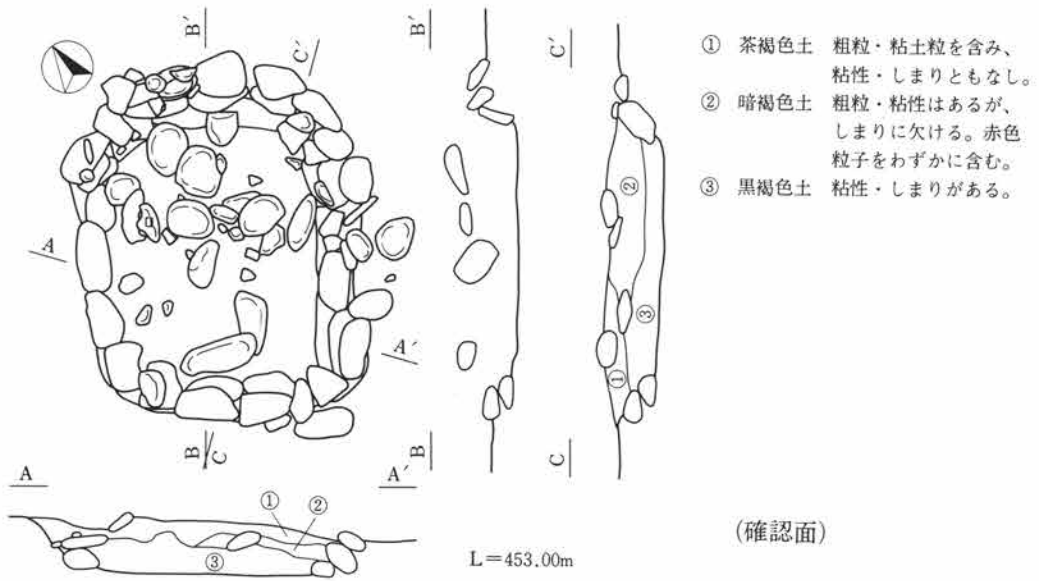
配石遺構東縁北東寄りに位置し黒色土中で確認された。16a号配石に接し一部載る状態で造られており、20a号配石は20b号配石を造り直して構築している。改築の際西壁を壊している。平面形は楕円形をなし、現状の規模は長軸3.23m、短軸2.40m、深さ35cmで長軸方位はN-1°-Wである。

南北壁は偏平で大型の河原石を立位で1列巡らし一部平積みしている。東壁は同様の河原石を2重に巡らしている。底面には偏平な大小の河原石や山石・板石を不規則に敷いている。本配石に属する遺物は不明である。

34号配石 (第62図、第5表)

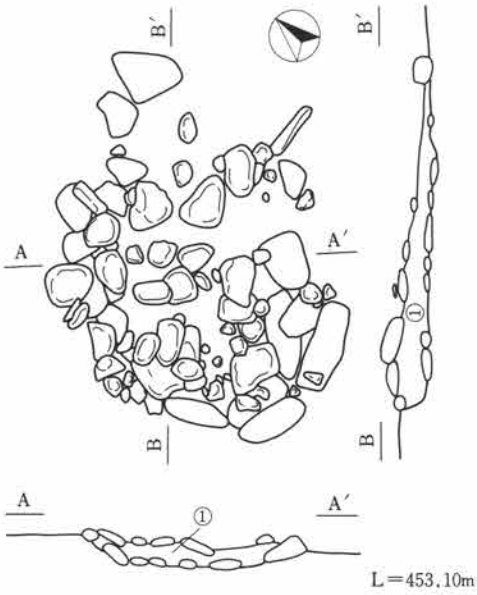
配石遺構東縁南東寄りに位置し黒色土中で確認された。上部に7・9・11号配石が載っており、底面の敷石の一部が確認されただけである。平面形は不明であるが10号配石と同一の長軸方向を持つ楕円形と推定される。現状の規模は長軸2.45m、短軸1.40mである。底面には大小の偏平な河原石を敷いている。遺物は出土しなかったが近接して石棒が1点出土した。

3. 縄文時代の遺構と遺物



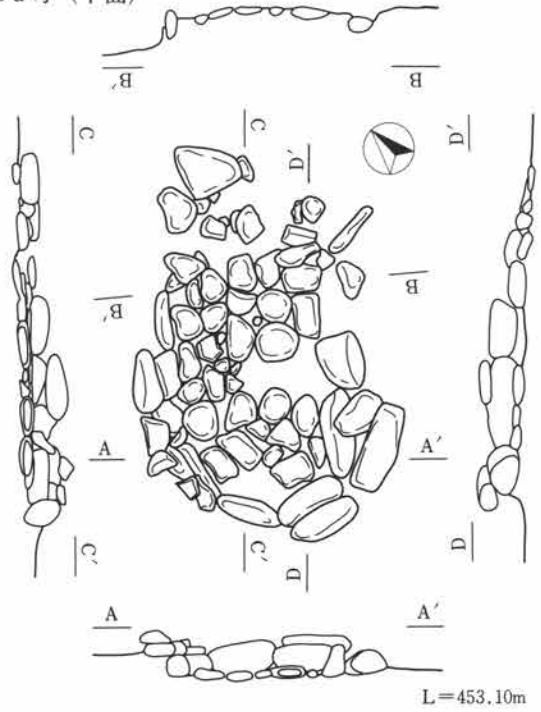
第61図 C区10号配石

16 a 号 (確認面)

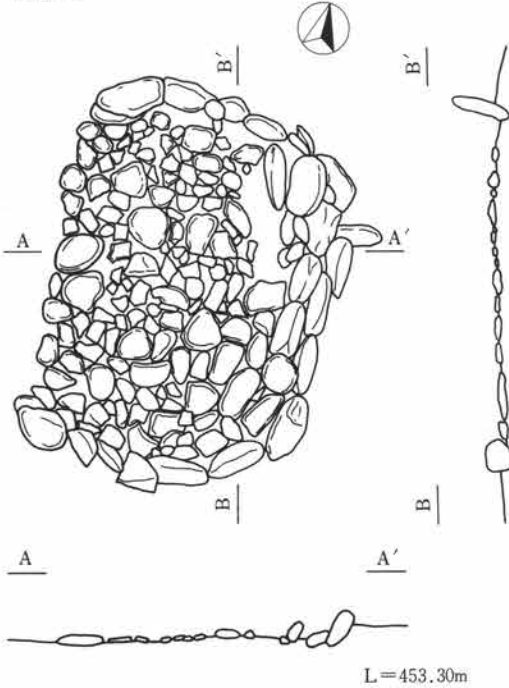


① 茶褐色土 しまりあり、粘性なく粒子が粗い。

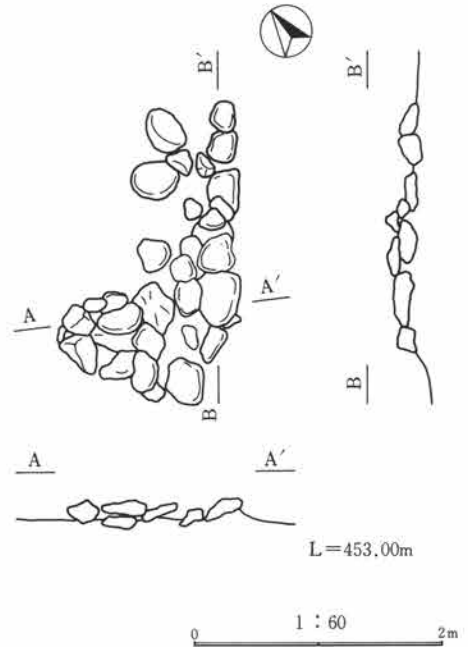
16 a 号 (下面)



20 b 号



34号



第62図 C区16 a・20 b・34号配石

大型配石

11号配石 (第63・75・90・91図、図版55、第5・7表)

配石遺構東縁南東寄りに位置し黒色土中で確認された。10・34号配石を切り、7・9・14号配石の一部が載っている。周壁上端の配石はずれているものが多く、覆土上半には大小の礫が混入していた。

平面形は隅丸長方形をなし、規模は長軸3.55m、短軸2.85m、深さ35cmで長軸方位はN-100°-Eである。

東西両壁は偏平で大型の河原石を立位で並べており、北壁は下半を立位で並べ上半に長楕円形の河原石を2～3段平積みしている。南壁は長楕円形の河原石を3段に平積みしている。それぞれの壁の隙間は小ぶり礫を詰めている。底面にも敷石されており、敷石には板石が多用されている。周壁寄りには比較的大きな河原石や板石を敷き、中央部は比較的小さい河原石や板石を敷いている。

出土遺物は多く、土器片682点、打製石斧4点、剥片石器9点、石鏃30点、石匙1点、石皿7点、磨石5点、凹石4点、多孔石1点、石核3点、石英質岩1点、桂化木1点、石製円盤2点、剥片285点があり、他に土偶の破片2点、棒状土製品1点、手捏土器1点がある。

20a号配石 (第64～66・78・94～97図、図版56～58、第5・7表)

配石遺構東縁北東寄りに位置し西半はローム面で東半は黒色土中で確認された。16a・21・27号配石に載っており、16b号配石の一部が載っている。北壁は一部が攪乱を受け石が抜かれており、他の壁も上端の石がずれている。20a号配石は20b号配石の西壁を壊し、長軸方向が直交する状態で造り直している。

平面形は隅丸長方形をなし改築のため東半が広がっている。規模は長軸3.85m、短軸3.22m、深さ43cmと配石遺構中最大規模を持つ。長軸方位はN-82°-Eである。覆土上半には大小の礫が混入していた。また確認時において配石の北西隅の4石が立った状態で出土したが、これは後世の攪乱によるものである。

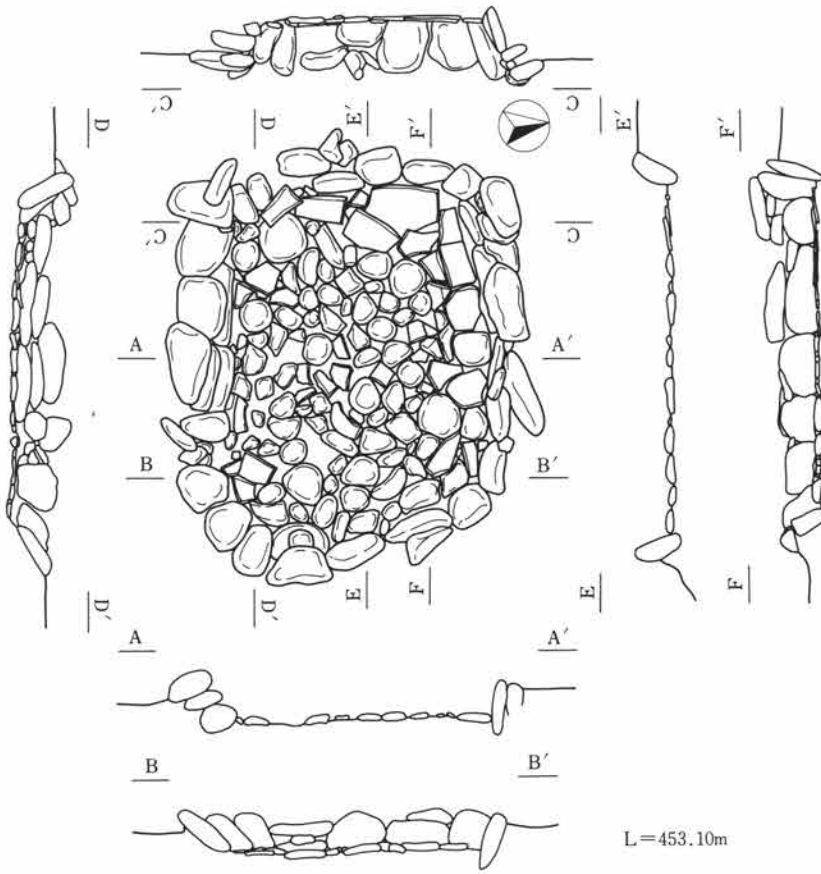
東壁は20a号配石東壁の内側に長楕円形の河原石を2列直列させ2～3段平積みし、上端に偏平で小ぶりな河原石を載せて造り直している。南壁東半は20b号配石南壁の内側に偏平な河原石を斜めに1列立て並べ、20b号配石南壁との隙間に大小の河原石や石棒を詰め込んでいる。西半は偏平な河原石を立位で2重に巡らしている。西壁の下半は偏平で大型の河原石を立位で1列並べ、上半には偏平な河原石を3段平積みしている。北壁西半は攪乱され石積みの状態は不明であるが、東半は20b号配石北壁をそのまま使用している。

底面の敷石は東半は20b号配石の敷石をそのまま使用しており、西半は比較的大きさの揃った河原石や山石・板石を新たに敷いている。

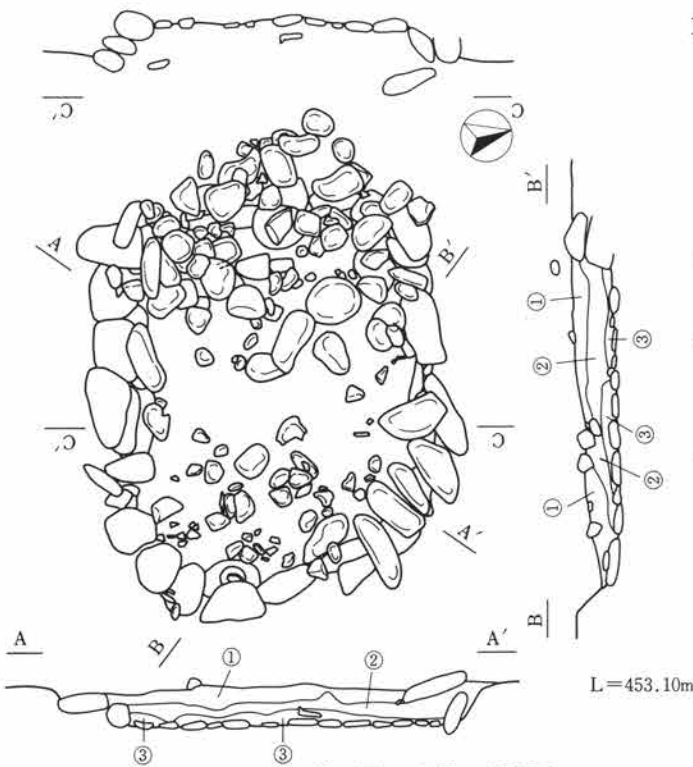
出土遺物は多く、土器片2,066点、打製石斧2点、剥片石器3点、石鏃31点、ドリル3点、石皿14点、磨石4点、凹石2点、石棒6点、飾垂具5点、ヒスイ製小玉21点、メノウ製小玉1点、石英質岩3点、剥片412点、他に土偶片2点、耳栓1点、棒状土製品1点、土製円板4点がある。また、微細な破片ではあるが焼骨が覆土に多量に含まれていた。

列石 (第67図、図版59・60、第5・7表)

11号 (下面)



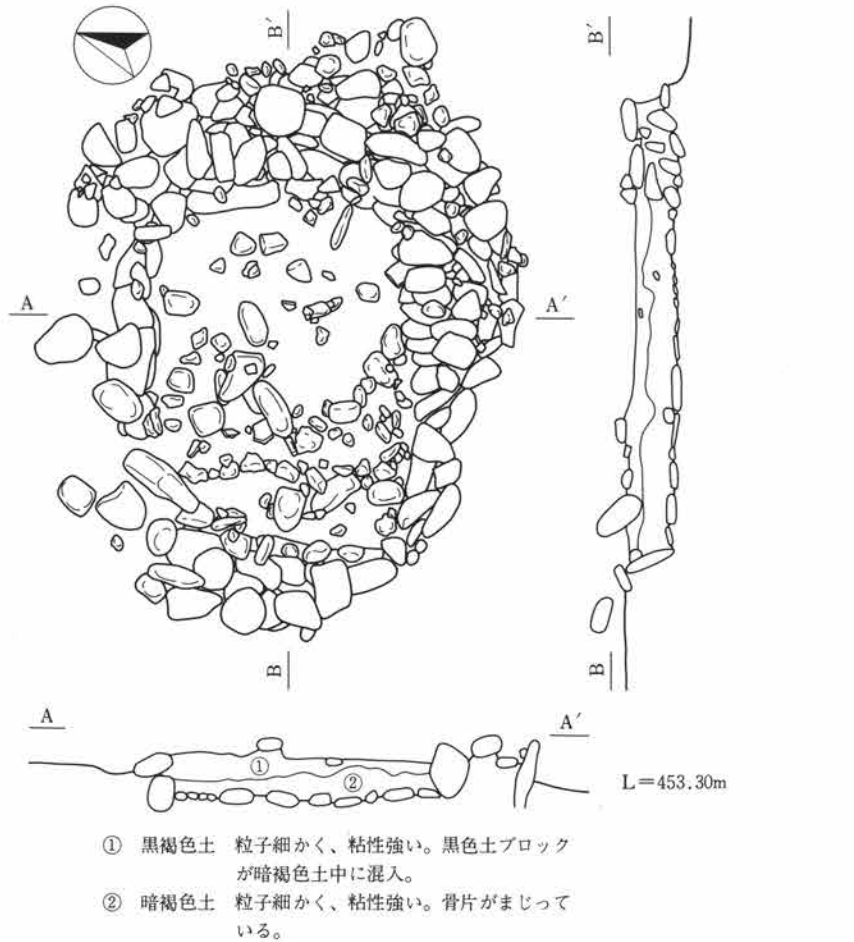
11号 (確認面)



- ① 黒褐色土 粘性・しまりにやや欠ける。褐色の細かな粒子を含む。
- ② 黒褐色土 粘性・しまりともある。他の層に比較し大きな褐色粒子を含む。数個の土器片を含む。
- ③ 黒褐色土 他の層に比較し粘性・しまりが強い。細かな褐色粒子を若干含む。

第63図 C区11号配石

0 1 : 60 2m



第64図 C区20 a号配石 (1) 確認面

0 1 : 60 2m

配石遺構中央部南辺に位置し黒色土中で確認された。2 b号配石を切り、2 a・6号配石の一部が載っている。規模は長さ6,65m、幅平均0.75mで長軸方位はN-136°-Wである。調査初期段階では3基の集石状配石として考えていたが、最終段階で列石と判断した。

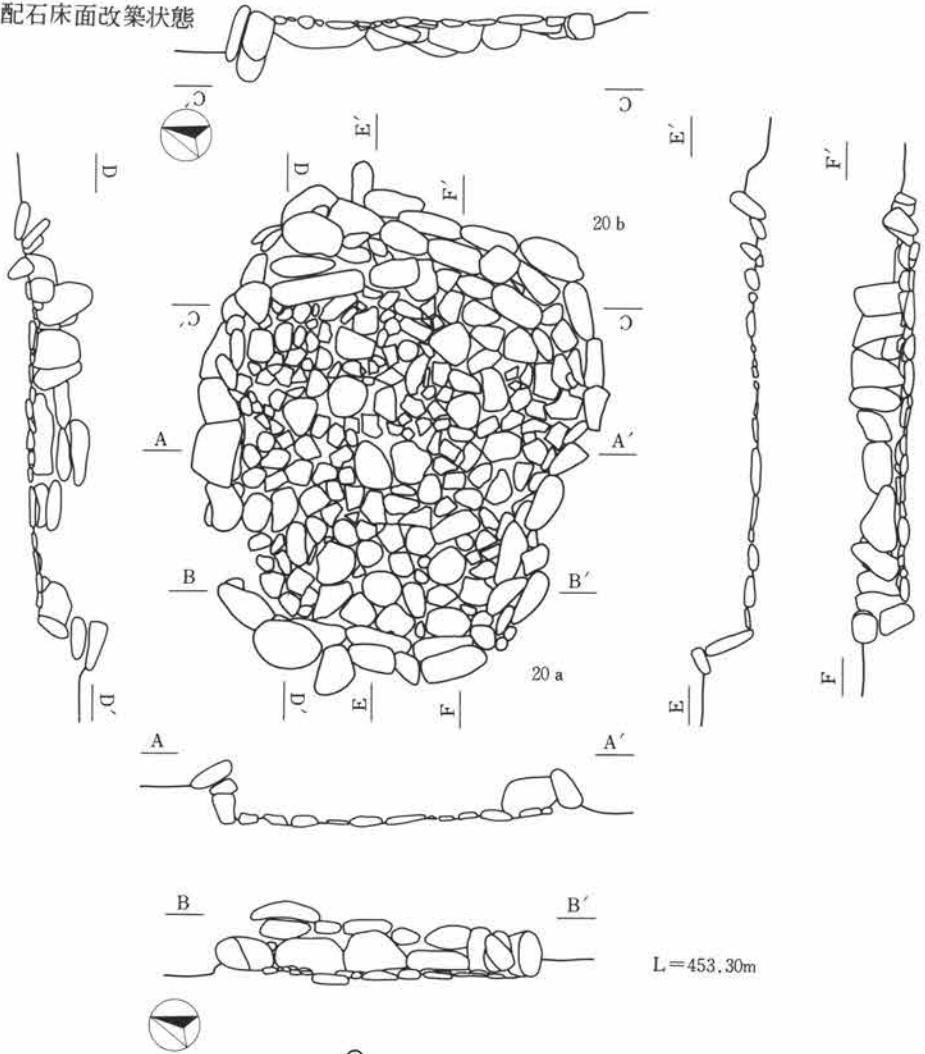
列石は偏平で大型の河原石や板石を並列させて並べており、東半はやや乱れている。配石遺構中央部東南隅より調査区西端まで走向しておりさらに南西方向へ延びると考えられ、中央部と南縁配石群を区分する状態で構築されている。遺物は土器片109点、石鏃2点、多孔石1点、小型偏平飾垂具1点、剥片6点が出土した。

集石状配石

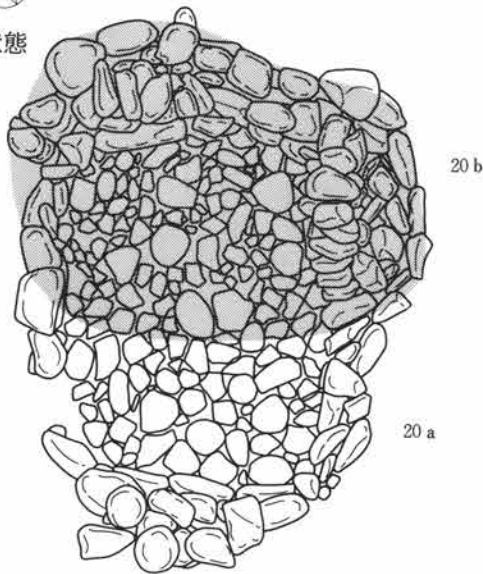
1 a号配石 (第68・72・84・101図、図版59-1、第5・7表)

配石遺構南縁南西寄りに位置し黒色土中で確認された。1 b号配石を壊して構築されている。平面形は内核を持つ環状をなし、規模は径1.95mである。

20 a · b号配石床面改築状態

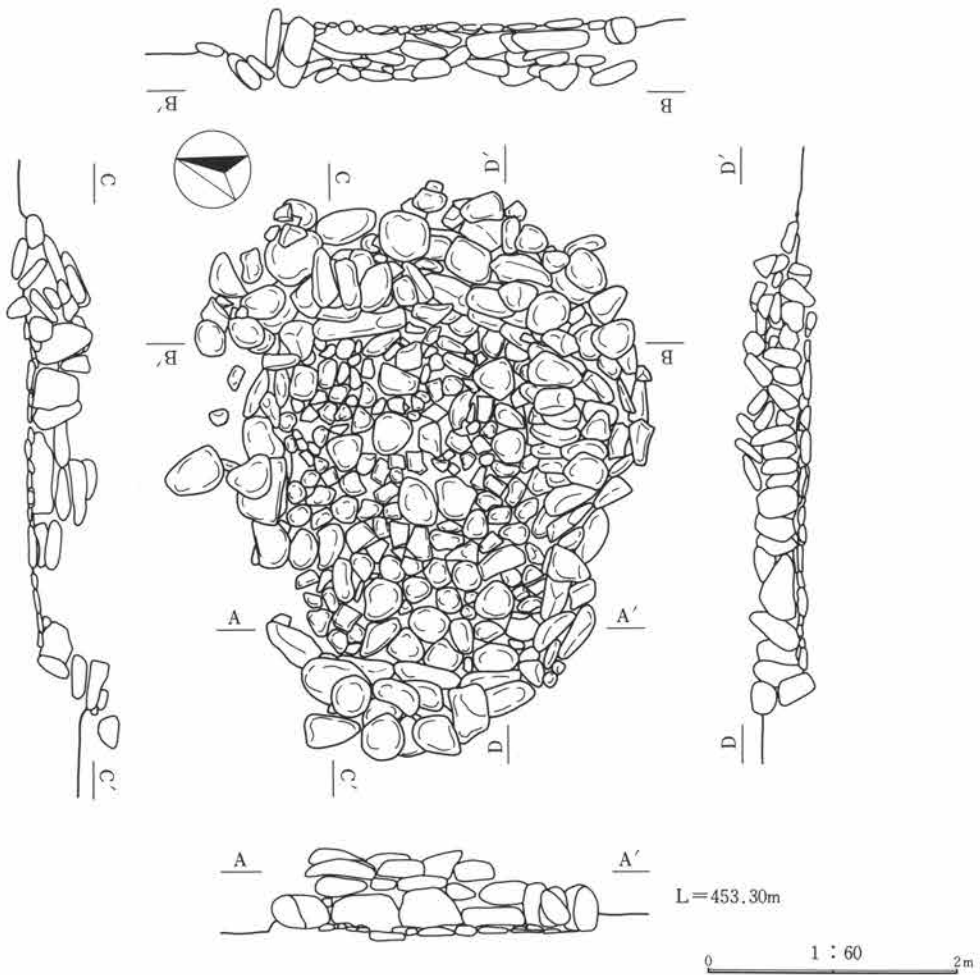


20 a · b号配石周壁改築状態



第65図 C区20 a · b号配石 (2)

0 1 : 60 2m



第66図 C区20a号配石 (3)

内核は山石だけが配され2石の大型の山石を中心に小型の山石が基部に据えられていた。環状に巡ぐる外周には大小の河原石と山石が配され面を内傾させて巡っていた。配石の下部には落ち込みは確認されなかったが1b号配石を壊しており、土坑等の落ち込みが推定される。遺物は土器片105点、打製石斧1点、石鏃1点、磨石1点、砥石1点、桂化木1点、剥片23点が出土した。

2a号配石 (第68・84図、図版59-2、第5・7表)

配石遺構南縁南西寄りに位置し黒色土中で確認された。列石に載っている。平面形は環状をなし、規模は径70×75cmである。

大小の河原石や山石が環状に巡っており丸石も配されていた。遺物は土器片49点、磨石1点、剥片13点が出土した。

3号配石 (第68・84・101図、図版60-1、第5・7表)

配石遺構南縁中央寄りで列石に近接して位置し黒色土中で確認された。配石南辺が乱れている。平面形は環状をなし中央に長楕円形の河原石を用いた立石がある。規模は径1.30×1.45mである。

立石は長さ68cmで北西方向へ倒れ込んでいた。周囲には大小の河原石が1～2段で巡っており丸石1石が配されていた。下部には落ち込み等は確認されなかった。遺物は土器片27点、石鏃2点、砥石1点、石核1点、石皿1点、剥片9点が出土した。

5号配石 (第68・72・85・101図、図版60-2、第5・7表)

配石遺構南縁北東寄りに位置し黒色土中で確認された。E号配石や列石の一部が載っている。確認された平面形は乱れた楕円形をなしているが、環状をなす可能性が高い。現状の規模は1.63×2.90mである。

確認されたのは環状に巡る配石の一部と考えられ、中型の河原石や山石・板石を積み重ねて巡らしている。遺物は土器片73点、剥片石器7点、ドリル1点、磨石5点、剥片74点が出土した。

6号配石 (第69・72・86・101図、図版61-1、第5・7表)

配石遺構南縁東寄りに位置し黒色土中で確認された。34号配石に載っており、7号配石の一部が載っている。確認された平面形は半円形をなすが、円形を呈していた可能性が高く中央に小立石を持っている。現状の規模は1.32×1.95mである。

立石は長さ30cmで北方へ倒れ込んでおり、大小の河原石や山石が周囲に配されている。配石の外周は偏平で大型の河原石が面を内傾させて巡っている。遺物は土器片75点、石鏃1点、剥片石器1点、石皿5点、磨石1点、多孔石2点、石英質岩1点、剥片28点が出土した。

7号配石 (第69・87・101図、図版61-1、第5・7表)

配石遺構南縁東寄りに位置し黒色土中で確認された。6・8 a・8 b・34・35号配石に載り、34・35号配石を壊している。平面形はやや楕円形をなし積石状を呈している。規模は1.37×2.55mである。

大小の河原石や山石を不規則に集合させている。下部にある配石を壊している所から、配石下に土坑等の落ち込みが推定される。遺物は土器片154点、打製石斧1点、磨製石斧1点、剥片石器4点、石鏃4点、石皿1点、磨石1点、丸石1点、石英質岩1点、剥片30点が出土した。

8 a号配石 (第69・72・88・101図、図版61-2、第5・7表)

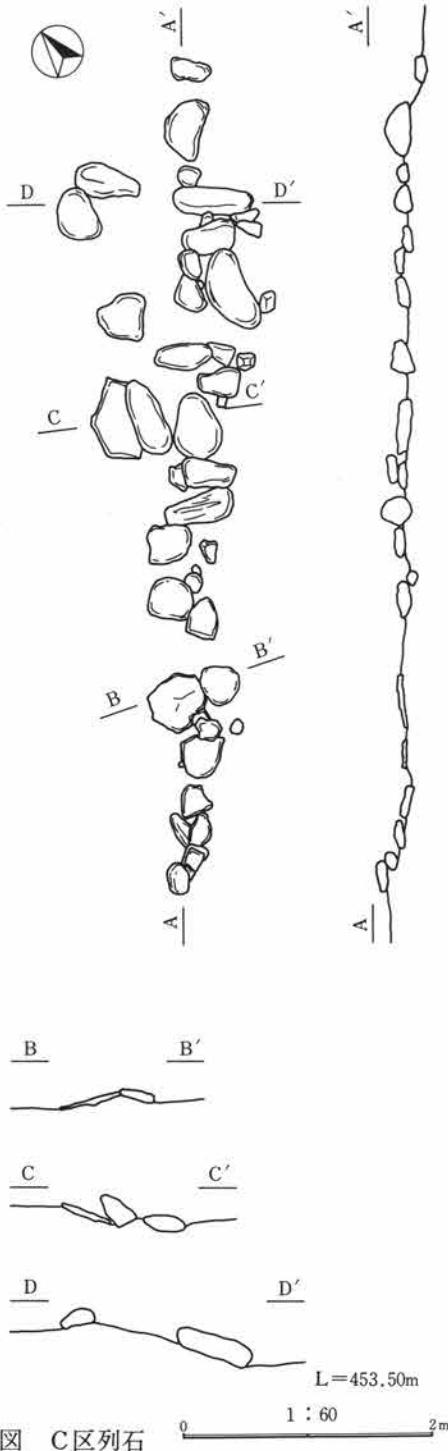
配石遺構南縁中央部寄りに位置し黒色土中で確認された。8 b号配石に載り、7号配石の一部が載っている。平面形はやや乱れた円形で、中央に大きな立石を持つ集石状をなす。規模は1.56×1.92mである。

立石は長さ70cmの長楕円形の河原石で南東方向に倒れていた。立石の基部には大小の河原石が集合しており、特に石英の結晶が露出するものや孔のあいた石英質岩が7石用いられていた。配石下部には土坑等の落ち込みは確認されなかった。遺物は土器片87点、打製石斧3点、剥片石器1点、石鏃2点、石皿2点、凹石1点が出土した。

9号配石 (第69・72・73・88・101図、図版62-1、第5・7表)

配石遺構南縁南東寄りに位置し黒色土中で確認された。一部が11号配石に載り、34号配石を壊して構築されている。平面形は楕円形を呈しているが配石は西半に集中しており、東半は別の配石の可能性もある。規模は2.27×3.35mである。

西半は積石状をなし円形のまとまりを見せている。中央に偏平で中型の河原石が斜めに立っていたが動いている可能性が高い。東半は半円形に河原石が巡っており、長楕円形の河原石が多用されてい



第67図 C区列石

る。配石下部には土坑等の落ち込みは確認されなかった。遺物は土器片169点、打製石斧1点、剥片石器2点、石鏃1点、石核1点、石皿1点、磨石1点、小型偏平飾垂具1点、石英質岩1点、剥片51点が出土した。

12号配石 (第69・71・88・101図、図版62-2、第5・7表)

配石遺構東縁南東端に位置し黒色土中で確認された。配石の一部が10号配石に載っている。平面形は環状をなし、規模は径1.93×2.07mである。

偏平な河原石や長楕円形の河原石が散在的に環状に巡っている。下部に土坑等の落ち込みは確認されなかった。遺物は土器片61点、打製石斧1点、剥片石器2点、石鏃1点、石核1点、磨石1点、剥片15点が出土した。

13号配石 (第69・76・92・101図、図版63-2、第5・7表)

配石遺構東縁中央東端に位置し黒色土中で確認された。16a号配石に一部載っている。形状も不定形で配石も散在的であるが、16a号配石に混入した礫群を考え合わせると楕円形をなす可能性がある。規模は2.95×3.06mである。下部には土坑等の落ち込みは確認されなかった。

No. 354の深鉢が東縁部で潰れて出土した。他の遺物としては土器片105点、打製石斧1点、剥片石器2点、石鏃1点、石核1点、桂化木2点、剥片30点が出土した。

14号配石 (第70・79・92・101図、図版55、第5・7表)

配石遺構東縁中央部寄りに位置し黒色土中で確認された。11号配石に一部が載っている。形状は楕円形の集石状をなし、規模は2.25×2.58mであ

る。

中型の河原石や山石を集石し、下部には土坑等の落ち込みは確認されなかった。遺物は土器片92点、土製小玉1点、剥片石器1点、石鏃1点、磨石1点、ヒスイ製小玉1点、剥片20点が出土した。

15号配石 (第70・77・92・101図、図版63-2、第5・7表)

配石遺構東縁中央に位置し黒色土中で確認された。11号配石に一部が載っている。形状は円形で集石状をなしており、中型の河原石や山石を用いて囲むように集石している。規模は径1.31×1.53mである。遺物は土器片103点、石鏃1点、磨石1点、丸石1点、石英質岩1点、剥片8点が出土した。

16b号配石 (第70図、図版63-2、第5表)

配石遺構東縁中央に位置し黒色土中で確認された。16a号配石に一部が載っている。形状は立石を持つ集石状をなし、半円形で北半が乱れている。規模は0.75×1.25mである。

立石は長さ50cmの長楕円形の河原石で西方に倒れているが、山石を基礎に直立していたと考えられ、周囲を中型の河原石や山石で囲んでいる。下部には土坑等の落ち込みは確認されなかった。また、遺物も出土しなかった。

17号配石 (第70・77・93図、図版63-2、第5・7表)

配石遺構東縁中央部寄りに位置し黒色土中で確認された。半円形の環状をなし、一部が33号配石に載っている。規模は2.10×2.50mである。

長楕円形の河原石を1列環状に配し、丸石も配されている。下部には土坑等の落ち込みは確認できなかった。遺物は土器片256点、剥片石器1点、剥片6点が出土した。

23号配石 (第68・79・93図、図版64-1、第5・7表)

配石遺構北縁中央部寄りに位置し黒色土中で確認された。19・30号に載っている。形状は乱れてはいるが立石を持ちやや環状をなしている。規模は径2.00×2.15mである。

中型の河原石や山石・板石が不規則に巡り、南東隅に立石があり脇に丸石が配され、南北両縁にも丸石が配されている。内部にも比較的小ぶりな河原石や山石が配され、配石下部は山石の小礫が敷かれていたような状態であった。遺物は土器片25点、石皿2点、磨石1点、剥片12点が出土した。

24号配石 (第70・101図、第5・7表)

配石遺構北縁の調査区西端に位置しローム面で確認された。露頭する大型の山石の東縁に偏平な河原石が集合していた。西側に大きな攪乱坑があり形状は不明で、下部には落ち込み等は確認されなかった。規模は0.70×1.00である。遺物は土器片2点、石棒片1点、飾垂具1点、剥片38点が出土した。

25号配石 (第70・100図、第5・7表)

配石遺構北縁で調査区の北端に位置しローム面で確認された。北半は調査できなかったので全体形状は不明であるが、露頭する山石の周囲に中小の河原石や山石が巡っている。下部に土坑等は確認できなかった。現状の規模は1.00×2.95mである。遺物は土器片47点、凹石1点、剥片32点である。

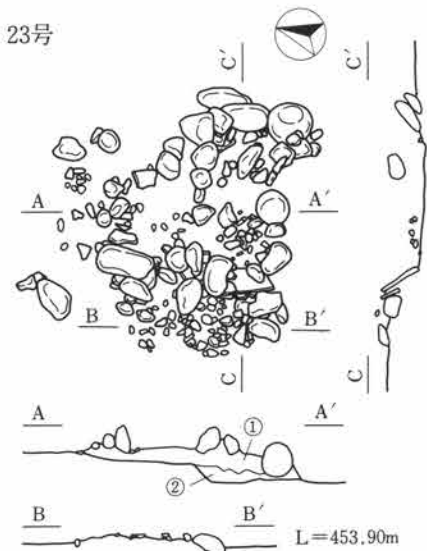
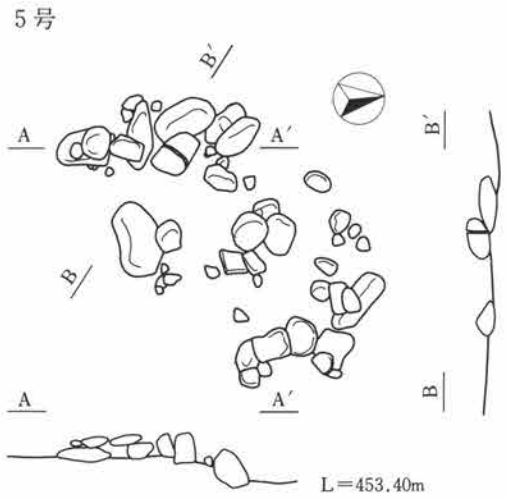
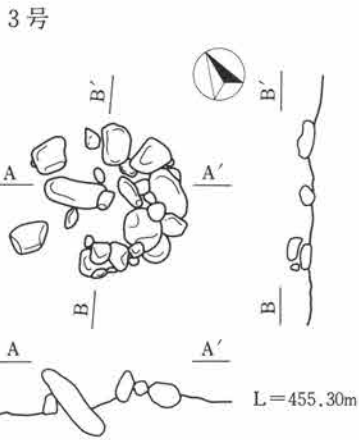
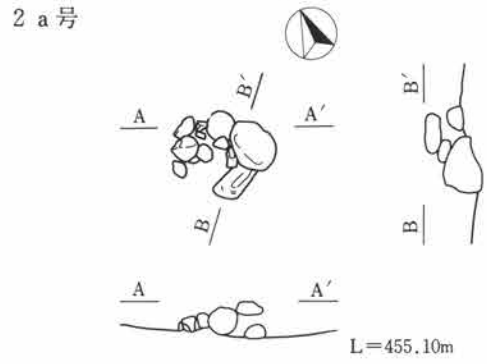
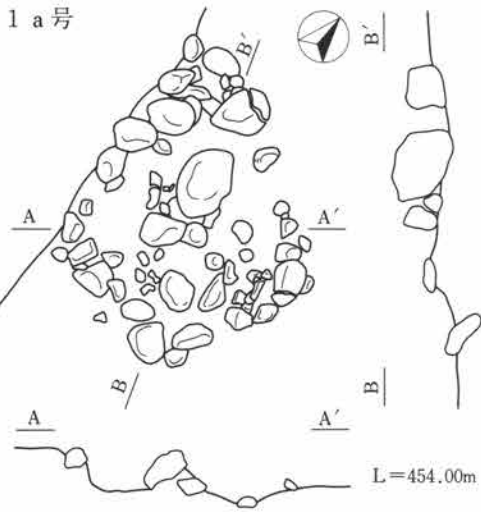
29号配石 (第70・80・99図、第5・7表)

配石遺構東縁北東隅に位置し黒色土中で確認された。東半は調査できなかったので全体形状は不明であるが、大小の河原石が不規則な積石状を呈している。下部は土坑等は確認できなかった。遺物は土器片126点、石鏃2点、石皿1点、凹石1点、多孔石2点、石英質岩1点、剥片32点が出土した。

32号配石 (第70図、第5表)

配石遺構東縁北端に位置し黒色土中で確認された。西半は調査できなかったので全体形状は不明であるが、中小の河原石や山石が環状に巡っていた。下部は土坑等は確認されなかった。遺物は出土しなかった。

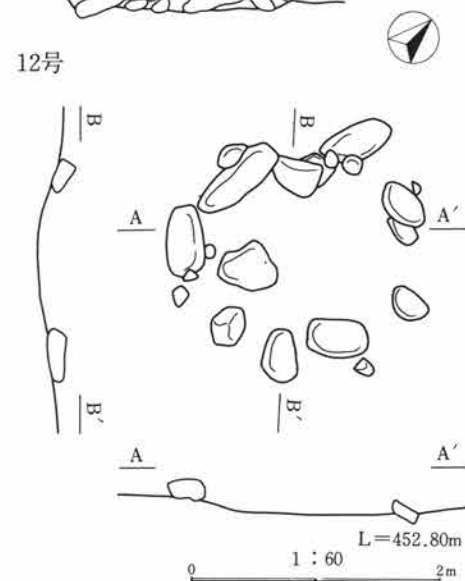
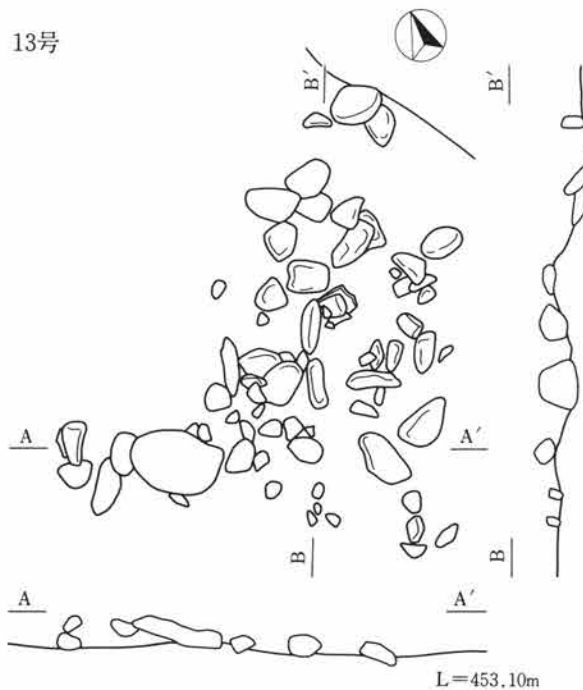
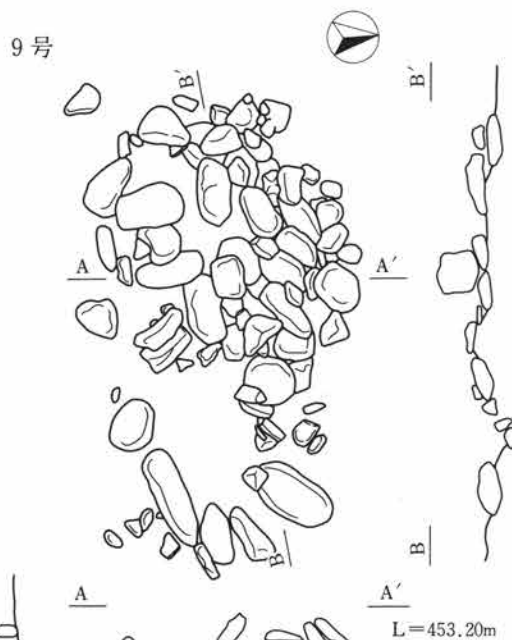
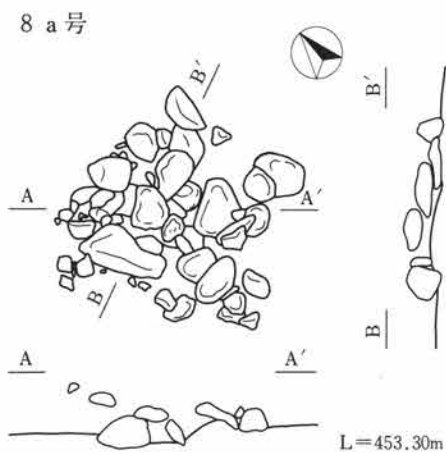
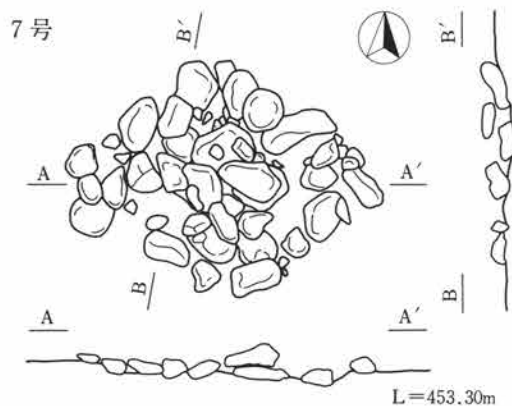
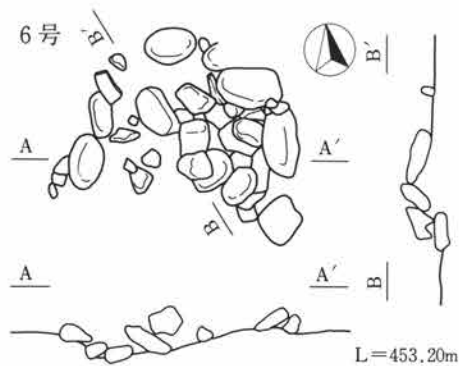
3. 縄文時代の遺構と遺物



- ① 黒色土 小石をやや多く含み、粒子やや粗く粘性弱い。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

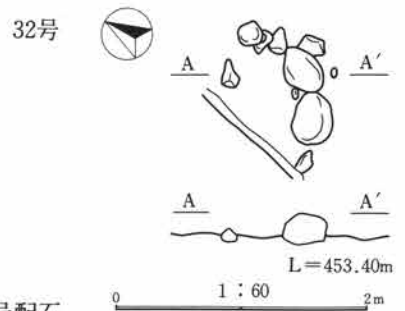
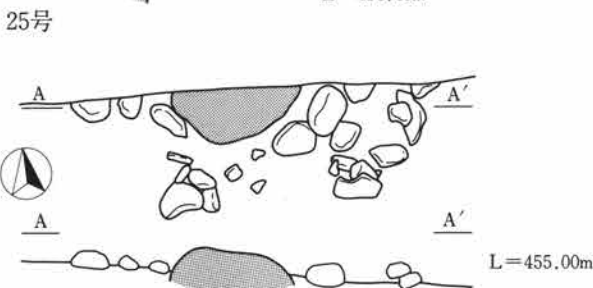
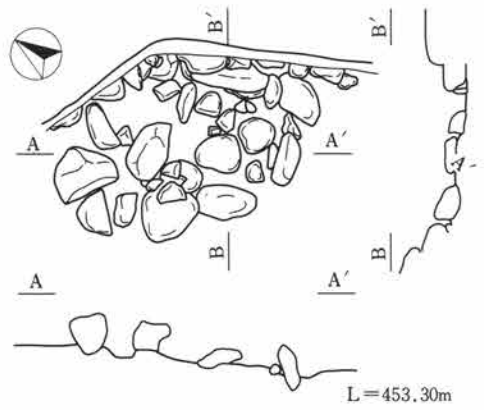
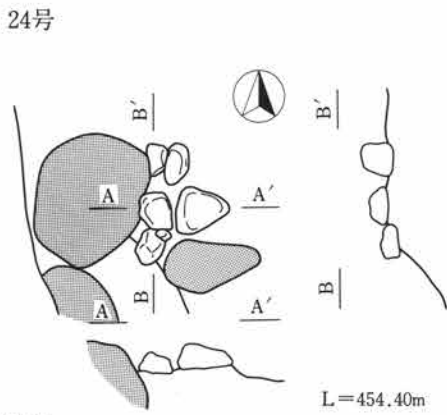
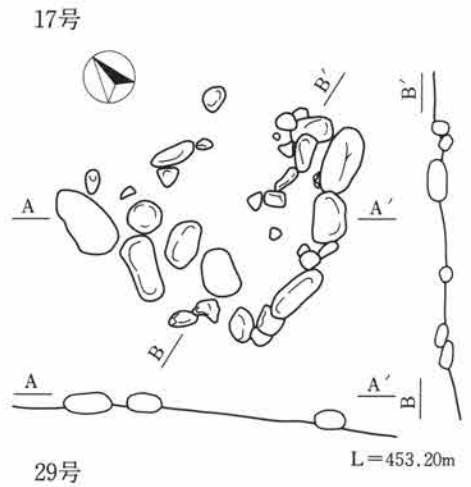
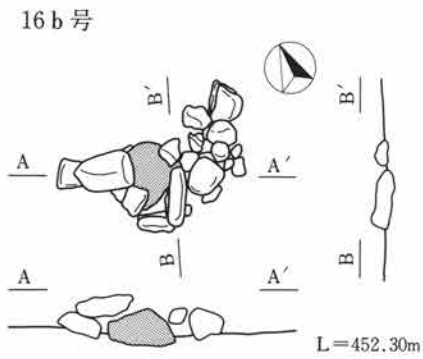
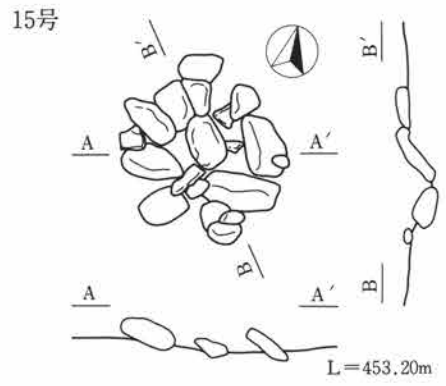
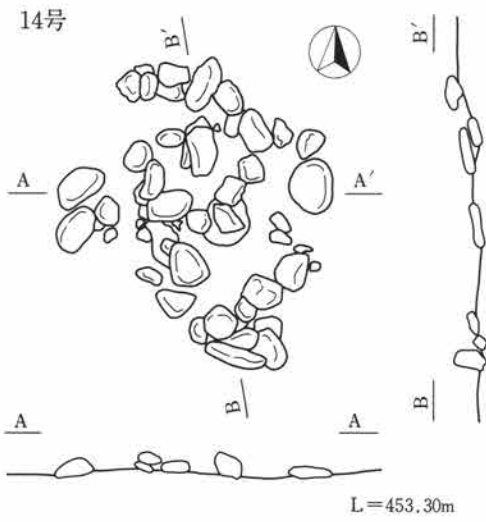
第68図 C区 1 a・2 a・3・5・23号配石

0 1 : 60 2m



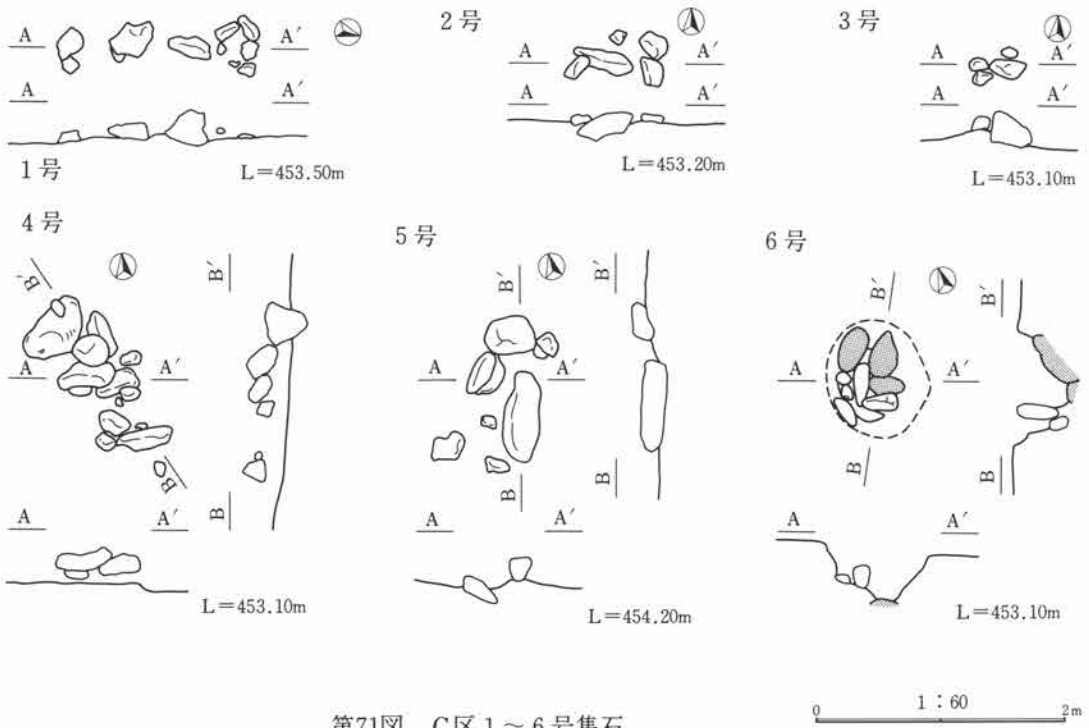
第69図 C区 6・7・8 a・9・12・13号配石

3. 縄文時代の遺構と遺物



第70図 C区14・15・16 b・17・24・25・29・32号配石

0 1 : 60 2m



第71図 C区1～6号集石

集石

数石の礫が集合し、小規模で形状の定かでないものを集石として扱った。

1号集石 (第71・74図、第6表)

配石遺構南縁で1 a号配石の東に位置し黒色土中で確認された。中小の河原石や山石・板石が2～6石3箇所に集合していた。規模は0.45～1.62mである。下部に土坑等は確認されず、遺物も出土しなかった。

2号集石 (第71図、第6表)

配石遺構南縁でA号配石の北に近接して位置し黒色土中で確認された。中小の河原石が5石連なる状態で集合していた。規模は0.55～0.86mである。下部に土坑等は確認されず遺物も出土しなかった。

3号集石 (第71図、第6表)

配石遺構南縁でD号配石の西に近接して位置し黒色土中で確認された。中小の河原石が4石集合していた。規模は0.33～0.45mである。下部に土坑等は確認されず、遺物も出土しなかった。

4号集石 (第71・100図、第6・7表)

配石遺構南縁でD号配石の北に近接して位置し黒色土中で確認された。中小の河原石が折り重なるように集合していた。規模は0.70×1.64mである。下部に土坑等は確認されなかった。遺物は磨石1点が出土した。

5号集石 (第71・74図、第6表)

配石遺構南縁の4号配石の南に近接して位置し黒色土中で確認された。中小の河原石8石が散在し、長楕円形で長さ70cmの大型の河原石が横たわっており、立石の可能性はある。この礫の直下30cmには

第5表 深沢遺跡C区配石一覧表

単位 cm

配石番号	グリット位置	平面形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出土遺物	備考
1 a 号	2 L - 1 4	集 石	1.95×1.95		石鏃、砥石、凹石、鉢 2、深鉢	
1 b 号	2 L - 1 4	石 棺	1.45×1.10× 1.17×0.76	N-49°-W	打斧、石鏃	
2 a 号	2 L - 1 4	集 石	0.70×0.75		凹石、丸石	
2 b 号	2 L - 1 4	石 棺	1.10×0.93×	N-3°-E		
3 号	2 M - 1 5	集 石	1.30×1.45		石鏃2、砥石	
5 号	2 M - 1 5	集 石	1.63×2.90		白玉、剥片石器3、磨 石5、深鉢3、鉢	
6 号	2 N - 1 5	集 石	1.32×1.95		深鉢、石鏃、磨石、石 皿2、多孔石、深鉢	
7 号	2 N - 1 5	集 石	1.37×2.55		石鏃2、磨斧、剥片石 器2、磨石、石皿、丸 石	
8 a 号	2 N - 1 6	集 石	1.56×1.92		石鏃2、打斧、凹石、 磨石、石英8、石皿、 深鉢3、鉢	
8 b 号	2 N - 1 6	石 棺	1.54×0.72× 1.20×0.38	N-65°-W		
9 号	2 O - 1 5	集 石	2.27×3.35		白玉、ドリル、剥片石 器、磨石、石皿、鉢6、 深鉢3、手づくね、円 盤	
10 号	2 P - 1 5	中型 配石	3.00×2.40× 2.00×1.65×	N-30°-E	石製品3、石鏃11、ド リル、剥片石器2、鉢、 深鉢2	
11 号	2 O - 1 6	大型 配石	3.55×2.85× 2.70×2.00×	N-100°-E	石製品4、石鏃20、ド リル、石匙、打斧2、 凹石、石皿5、磨石2、 剥片石器2、多孔石、 鉢、深鉢、手づくね、 土製品、円盤、土偶	
12 号	2 Q - 1 6	集 石	1.93×2.07		打斧、石鏃、剥片石器、 磨石、鉢、深鉢2	
13 a 号	2 P - 1 6	集 石	2.95×3.06		剥片石器、礫器、桂化 木、石鏃、鉢、深鉢3	
14 号	2 O - 1 6	集 石	2.25×2.58		剥片石器、磨石、石製 品、石鏃	
15号	2 O - 1 6	集 石	1.31×1.53		石鏃、磨石、丸石、鉢、 深鉢	

第IV章 深 沢 遺 跡

配石番号	グリット位置	平面形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出土遺物	備 考	
16 a 号	2 P - 1 7	中型 配石	3.05×2.15× 28	N-54°-E	打斧、剥片石器2、石 鏃3、ドリル、深鉢4、 鉢	改築後、東南隅に間仕切 り石をつめる	
16 b 号	2 O - 1 7	集 石	0.75×1.25				
17 号	2 O - 1 7	集 石	2.10×2.50		剥片石器		
18 号	2 N - 1 7	石 棺	2.45×1.58× 65 1.90×1.05× 65	N-63°-W	石鏃7、深鉢、鉢2		
19 号	2 M - 1 7	石 棺	1.82×0.98× 25 1.40×0.45× 25	N-16°-W	石製品、石鏃、打斧、 丸石、耳栓2		
20 a 号	2 O - 1 7	大型 配石	3.85×3.22× 43 2.90×2.00× 43	N-82°-E	石鏃29、ドリル3、磨 石4、石皿6、石棒6、 白玉18、石製品4、剥 片石器2、鉢10、深鉢 9、土偶2、耳栓、土 製品、円盤4		
20 b 号	2 O - 1 7	中型 配石	3.23×2.40× 35 2.67×1.90× 35	N-1°-W			改築前
21 号	2 N - 1 8	石 棺	1.55×1.00× 40 80× 50× 40	N-5°-E	白玉、石鏃、打斧		
22 号	2 N - 1 8	石 棺	1.85×1.18×30 115×0.40× 30	N-37°-E	石鏃3、石皿2、丸石		
23 号	2 L - 1 8	集 石	2.00×2.15		石皿、磨石、鉢、深鉢		
24 号	2 L - 1 8	集 石	0.70×1.00		石製品		
25 号	2 M - 1 8	集 石	1.00×2.95		凹石		
26 号	2 N - 1 8	石 棺	2.05×1.50× 30 1.40×0.60× 30	N-50°-E	石製品、磨石4、凹石、 砥石、石棒、鉢4、深 鉢		
27 号	2 N - 1 8	石 棺	1.71×0.92× 25 1.45×0.64× 25	N-59°-E	白玉、石鏃、石皿、土 玉、鉢3、深鉢		
28 号	2 O - 1 8	石 棺	1.38×1.05× 45	N-27°-E	石匙、丸石、鉢3、深 鉢		
29 号	2 P - 1 8	集 石	2.40×1.50		石鏃2、磨石、凹石2、 石皿、多孔石、鉢2、 深鉢2		
30 号	2 M - 1 7	石 棺	1.13×0.70× 18 0.30×0.35× 18	N-43°-E	深鉢3、鉢		
31 号	2 O - 1 8	石 棺	1.25×1.17× 35 0.30×0.40× 35	N-27°-E	石鏃		
32 号	2 N - 1 9	集 石	1.20×0.85				
33 号	2 O - 1 7	石 棺	1.85×0.72× 35 1.48× 45× 35	N-57°-W	磨石		

配石番号	グリット位置	平面形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出土遺物	備考
34号	2N-15	中型配石	240×140×37	N-38°-E		
35号	2N-16	石棺	1.30×0.95×33	N-26°-W	石鏃2	
A号	2M-13	石棺	112×35×33	N-81°-E		
C号	2M-14	石棺	2.16×0.80×28	N-46°-W		
D号	2N-14	石棺	163×70×28	N-43°-W		
E号	2M-15	石棺	1.75×0.95×10	N-56°-W		
G号	2L-17	石棺	143×65	N-18°-E	石鏃、打斧	
H号	2L-18	石棺	2.08×0.98×68	N-30°-E	石製品、磨石2	
列石	2L-M-14~16		158×65×68	N-136°-W	石鏃、多孔石	
			1.92×1.20×20			
			1.73×0.65×20			
			2.25×1.30×45			
			1.65×0.78×45			
			1.35×0.95×37			
			0.93×0.55×37			
			6.65×0.75			

第6表 深沢遺跡C区集石一覧表

単位 cm

集石番号	グリット位置	平面形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出土遺物	備考
1号	2M-14	集石	1.60×0.50×28		鉢	
2号	2M-14	集石	0.55×0.86			
3号	2N-14	集石	0.33×0.45		磨石	
4号	2N-14	集石	0.70×1.64			
5号	2M-14	集石	1.15×0.70×35			
6号	2L-14	集石	0.60×0.50×40			

把手付浅鉢が逆位で出土したが、本配石に属するものか明確でない。

6号集石 (第71図、第6表)

配石遺構南縁の1a号配石の北に位置し黒色土中で確認された。中小の河原石が立位でL字状に配されていた。掘形プランは確認できなかった。遺物は出土しなかった。

7号集石

配石遺構北縁で調査区の北西隅に位置している。表土からローム面まで30cmと浅く、配石中に表土が多く混入しており原位置を保っている可能性は弱い。径約1mの範囲に河原石が散布していた。

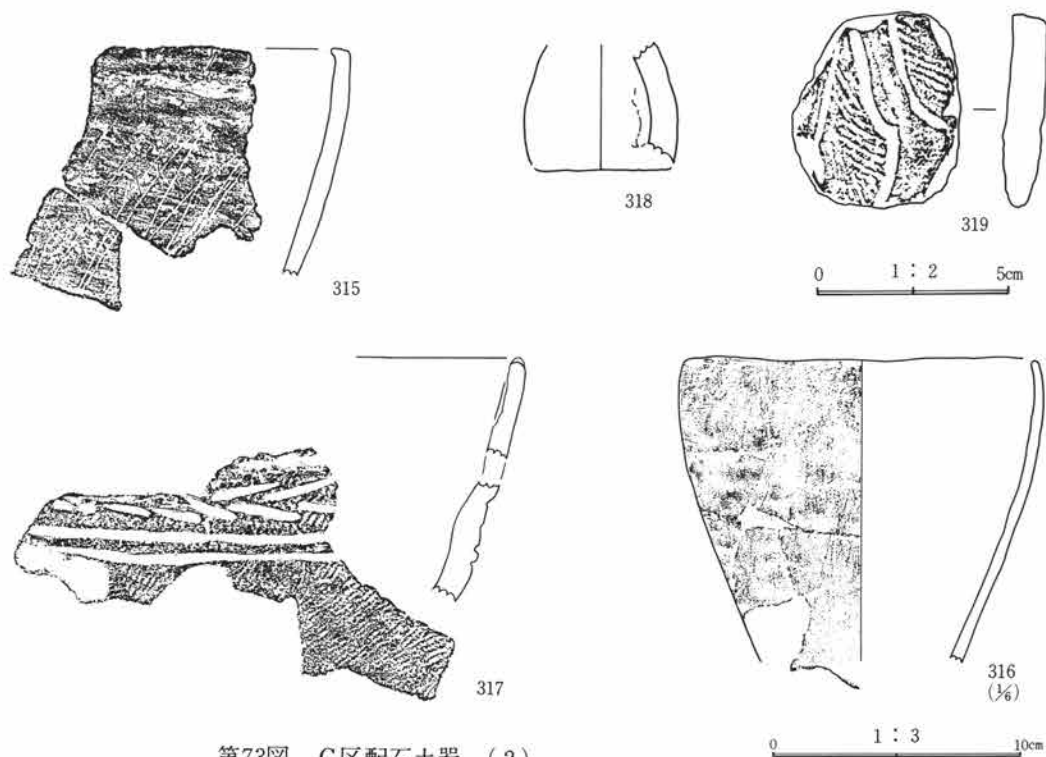
③ 配石遺構出土の土器

C区における配石群は61基検出され、すべての配石から土器が出土しているが、多くは小破片である。

1号配石 296・297は条線を施文する。296は口唇部に刻みを施し、内面口唇下に1条の沈線を巡らす。298は無文の粗製土器で口唇部に指頭圧痕を施す。296・297・298は加曾利B 3式。5-a号配石 299は口唇部を把厚させ波状口縁を成し、口縁部に楕円棒状沈線を施し棒内をさらに沈線で2分しLR縄文を充填する。頸部には隆帯を施し瘤状突起をもつ。300は外面無文で、口縁内面に2本の沈線を巡らす。口縁部内外面とも研磨される。301は無文。302は平行沈線の上に縦長の刻目をもつ瘤状の貼付を施す。300・302は加曾利B 1式。299は安行1式。6号配石 303は口縁部に稚拙なRL縄文を施文する。加曾利B 2式。6-b号配石 304は無文。口縁内面に1条の沈線を巡らす。口径16.3cm。残存高13.5cm。加曾利B 1式。8号配石 305は綾杉状の沈線を施す。306は刻目を巡らし文様区画する。305・306は加曾利B 3式。307・308は底部に網代痕がある。9号配石 309は口縁部無文で補修孔を穿つ。310は口縁部無文帯に縦の粘土紐を貼付する。311は口唇部にLR縄文を施し、口縁部に平行沈線を巡らし、沈線間に連続刺突文を施す。312・314は綾杉状の沈線を施す。312は波状口縁を呈し、口唇部内側に刻みを施し、1条の沈線を巡らす。313は刻みの区画を施す。内側に沈線を巡らす。315は口縁部片。口唇部のみ研磨する。体部には条線を施す。316は口径28.5cm残存高24.0cmを計る。無文の粗製鉢形土器。317はRL縄文を全面に施文し、平行沈線間に綾杉状の沈線を施文する。外面赤色塗彩。318はミニチュア土器。内外面赤色塗彩されている。319は土製円盤と思われる。311~315は加曾利B 3式。317は御経塚式と思われる。10号配石 320は浅鉢形土器。口縁部に縄文帯と刻目帯を巡らし、縦長の貼付文を施文する。縄文LR。321は弧状・平行沈線により区画し、磨消縄文を施す。縄文LR。322は無文の粗製深鉢土器。321は加曾利B 2式、320は加曾利B 3式。11号配石 323は口縁部にLR縄文を施文し口縁下に刻みを巡らし区画する。口縁部の突起部は指頭圧痕による円形凹と縦沈線を施す縦長の貼付を行う。324・337は鉢形土器口縁部片である。口縁に平行沈線帯を施す。325は肩部が「く」字状に強く張り出す器形の深鉢形土器口縁部片である。縦と弧状沈線で磨消縄文を区画する。縄文LR。326・327は沈線区画内を磨消縄文する。326はLR縄文を縦・横位に施文し、羽状縄文を構成する。327も不明瞭であるが同様であろう。328は横位沈線帯を段状に縦区画する。口唇部及び口縁内側に沈線帯を施す。329・330は沈線を巡らし文様区画する。329は沈線内に刻みを施す。329・330ともに口縁部にLR縄文を施文し、体部に斜方向の条線を施す。331・333は体部片で331は無文。333は微隆帯に刻みを施す文様で区画され、斜方向に条線を施す。332・334は綾杉状の沈線を施す。335は肥厚させた口唇部に刻みの入った瘤状の貼付を施す。336は口唇部に刻みのある瘤状貼付し、肩部は「く」字状に張り出す。無文。338・339は粗製土器。338は口唇部に刻みを施す。無文。340はミニチュア土器。341は円柱の土製品。342・343は底部に網代痕がある。344~347は土製円盤である。土器片を利用したものである。344にLR縄文が施文されているほかは、無文である。349は土偶の左脚部の破片である。長さ5.2cm幅4.8cm厚さ2.8cmである。端部をわずかにつまみ出してつま先とかかとを表現している他は全体に厚くて丸い作りである。350は土偶の頭部である。眉から鼻筋に



第72図 C区配石土器 (1)



第73図 C区配石土器 (2)

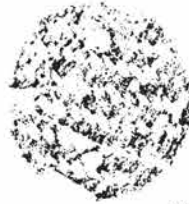
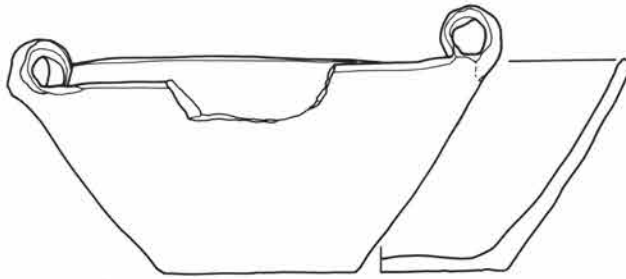
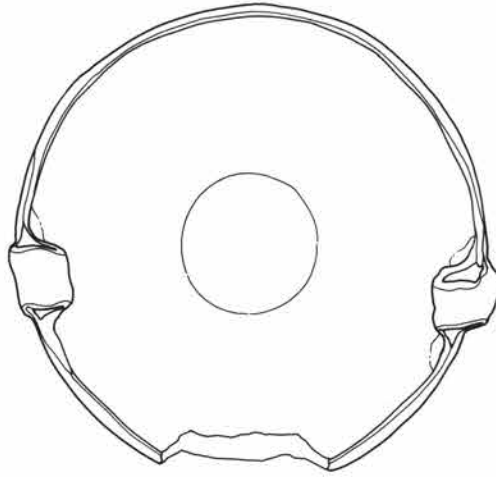
かけてリアルに表現されている。耳は穿孔により、完略表現されつるして使用した事も考えられる。首以下は欠損し、顔面の長さ4.6cm幅5.7cm厚さ1.4cmを計る。328は加曽利B 1式、323・325は加曽利B 2式、329～335は加曽利B 3式、324・337は曾谷式である。326・327は宝ヶ峯式と思われる。12号配石 351は口唇部の貼付突起が欠落したもので、口唇部にLR縄文施文のほかに突起に施されていると思われる刺突がある。口縁部に1条の沈線を巡らし、上部に無文帯、下部に斜方向の沈線を施す。352は縦連対弧文とそれを起点とした横位平行沈線が施される。353は沈線が施されている。352は加曽利B 2式、351は加曽利B 3式。13-a号配石 354は口唇下に微隆帯を巡らし、体部に綾杉状の沈線を施す。355は沈線を巡らし区画する。綾杉状の沈線及び無文帯を施す。356は口縁部にLR縄文を施文し、沈線を巡らし区画し、体部には斜行沈線を施す。357は口縁部に2条の沈線及び微隆帯を巡らす。354～356は加曽利B 3式。14号配石 358はミニチュア土器。口唇部に刻みを施し、頸部に綾杉状の沈線を施す。加曽利B 3式。359は土玉である。直径は9mmで両面から穿孔されている。表面は、比較的滑らかに仕上げられているが紐ずれは見られない。15号配石 360は口径30cm、残存高16.5cmを計る。口唇部に刻みを施し、内面に1条の沈線を巡らす。口縁部及び胴下半に綾杉状の沈線を施し、胴上部は無文である。加曽利B 3式。361は無文の粗製土器。16号配石 362は口唇部突起。363は口縁部に3条の隆帯を巡らし瘤状の貼付を施す。364・365・366は斜行沈線を施す。362は加曽利B 2式、364～366は加曽利B 3式、363は曾谷式。17号配石 367は縄文帯を施す。18号配石 368は口唇部突起。加曽利B 2式。369は波状口縁部片で口唇部よりコ状の刻みを施す微隆帯をもつ。胴部は無文。370は底部に網代痕がある。19号配石 371・372は耳飾り。20号配石 373は体部張り出し部に刻みを入れた瘤状の貼付を施し、頸部には刻みのある隆帯を巡らす。外面及び内面頸部以上に赤色塗彩を施す。



430



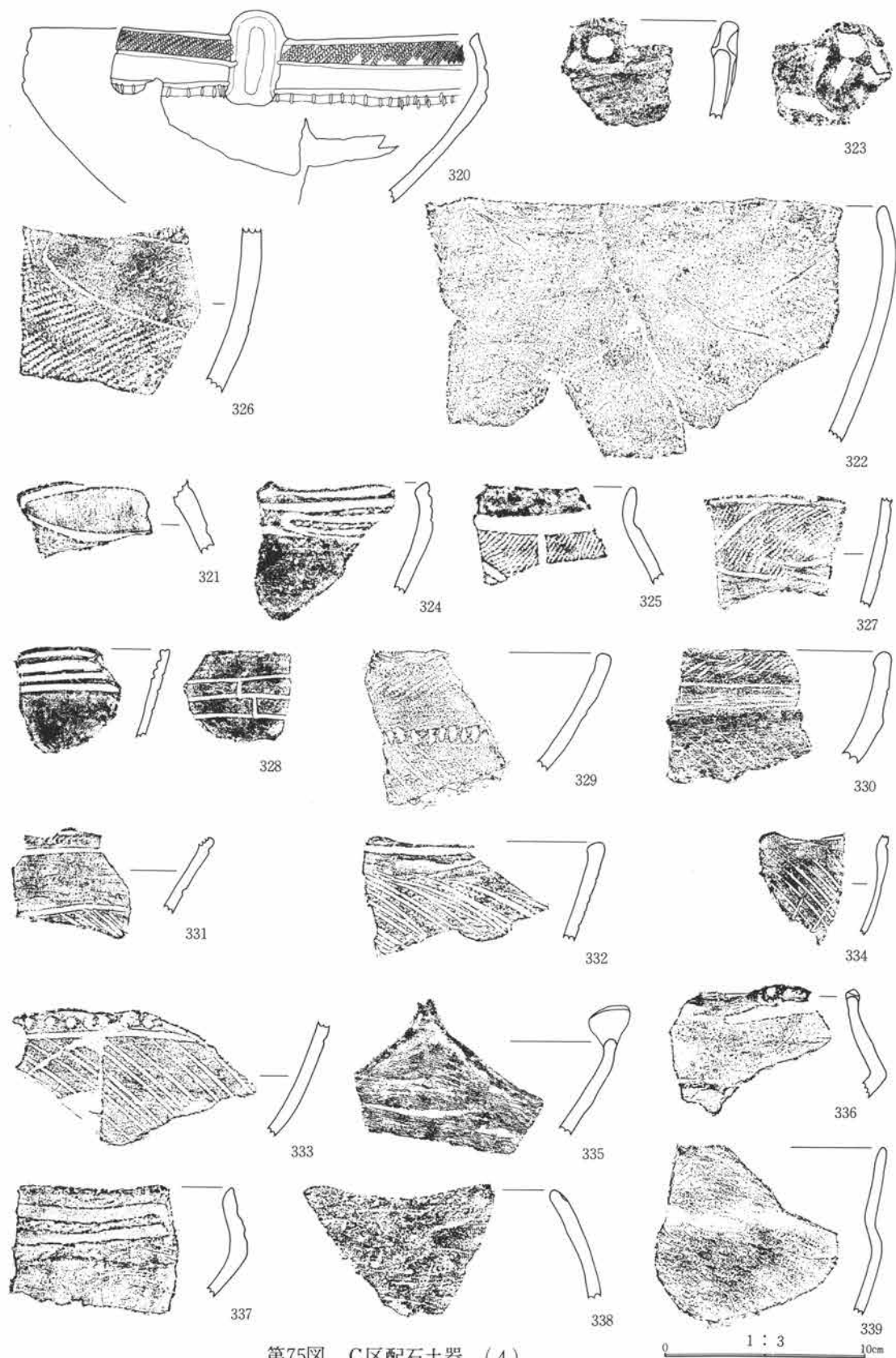
431



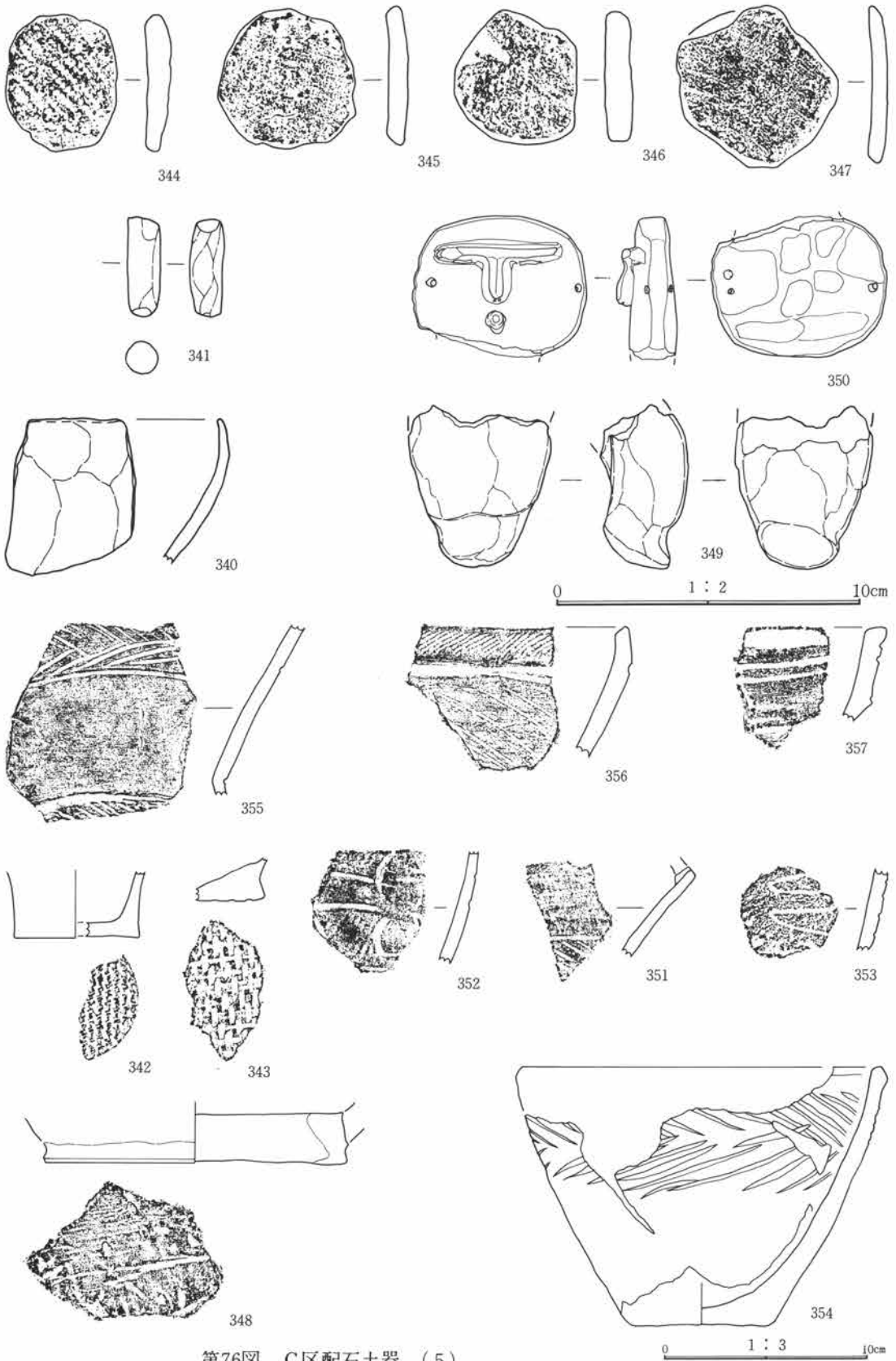
432

0 1 : 3 10cm

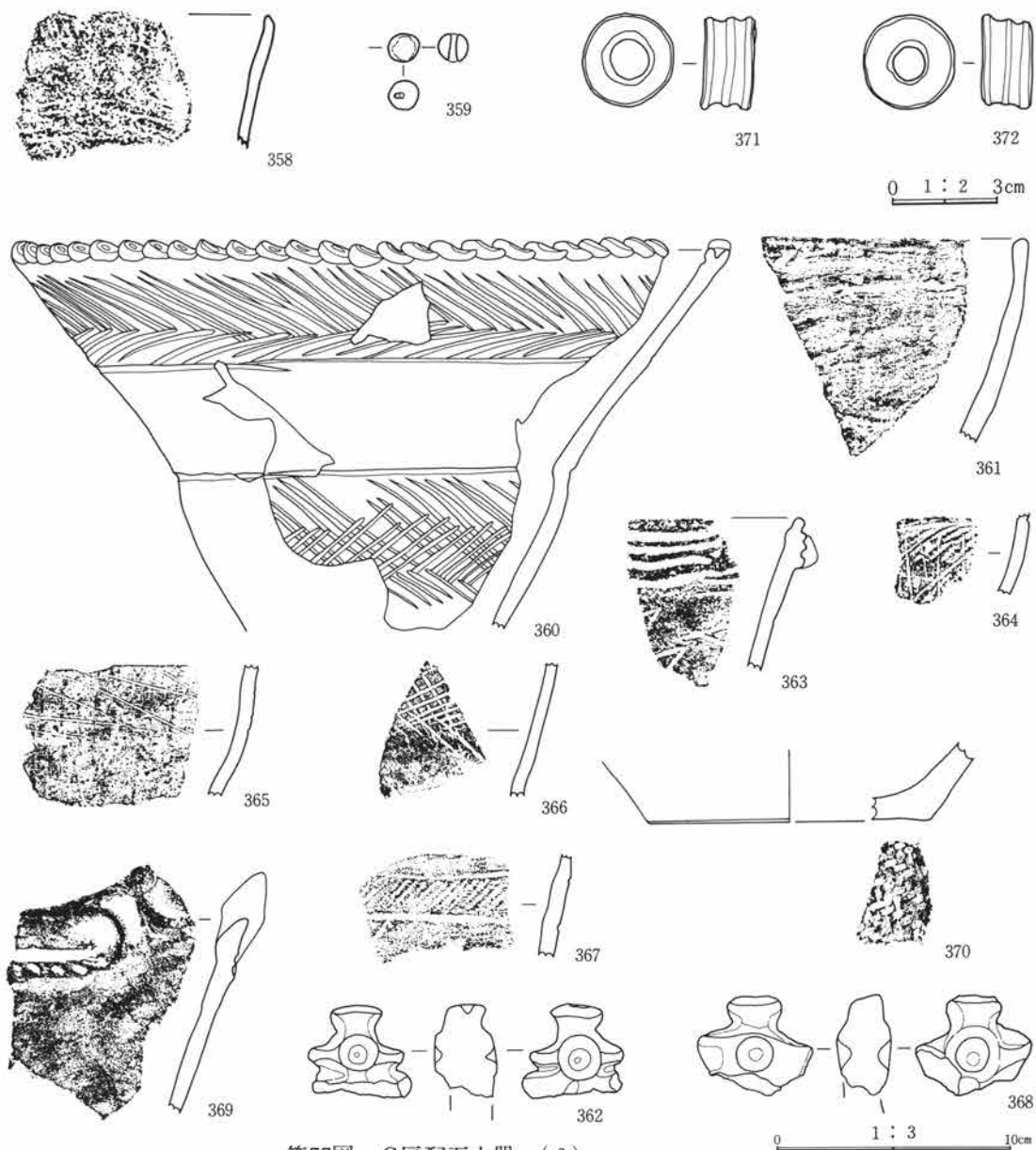
第74図 C区配石土器 (3)



第75図 C区配石土器 (4)

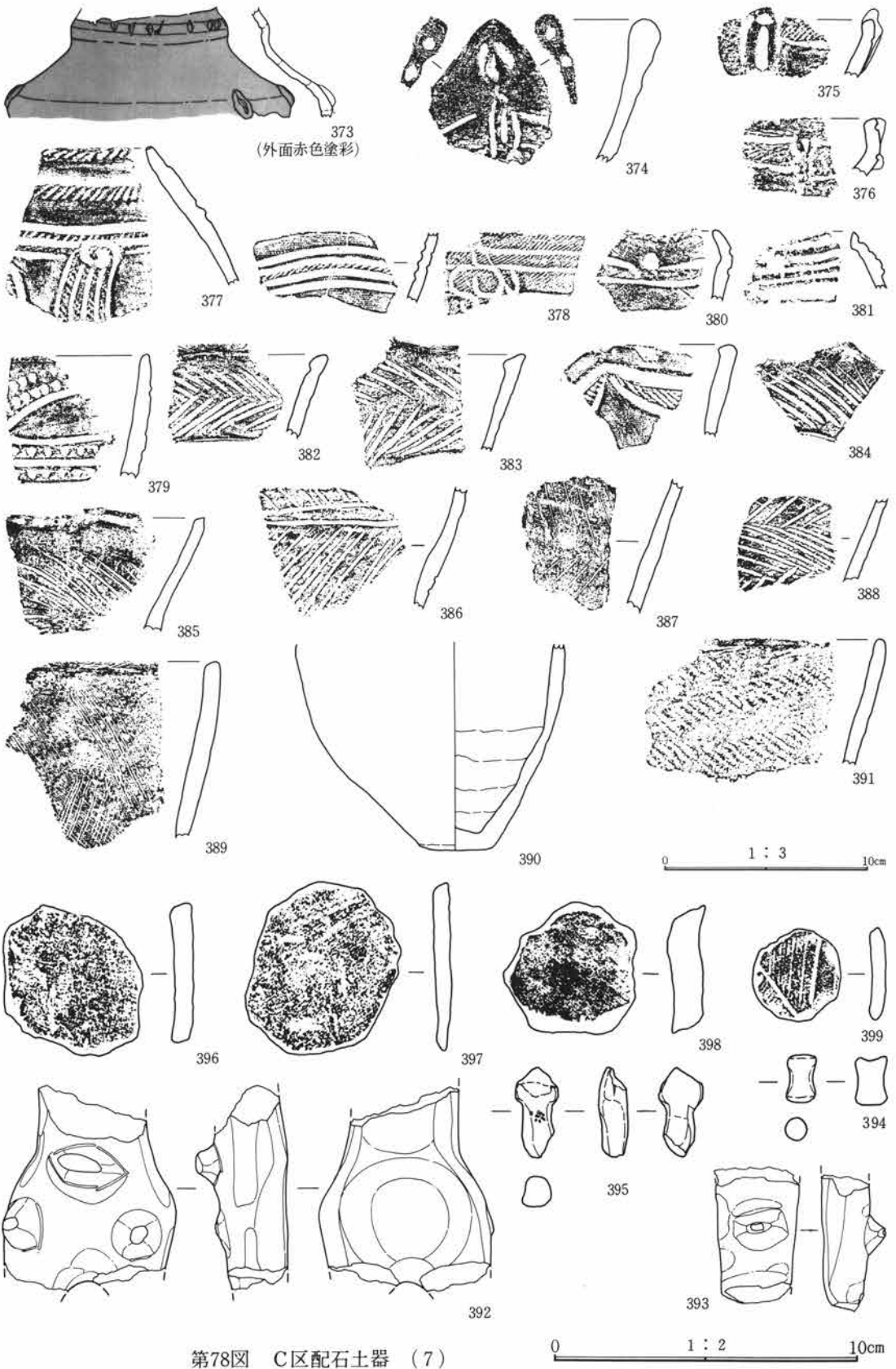


第76図 C区配石土器 (5)

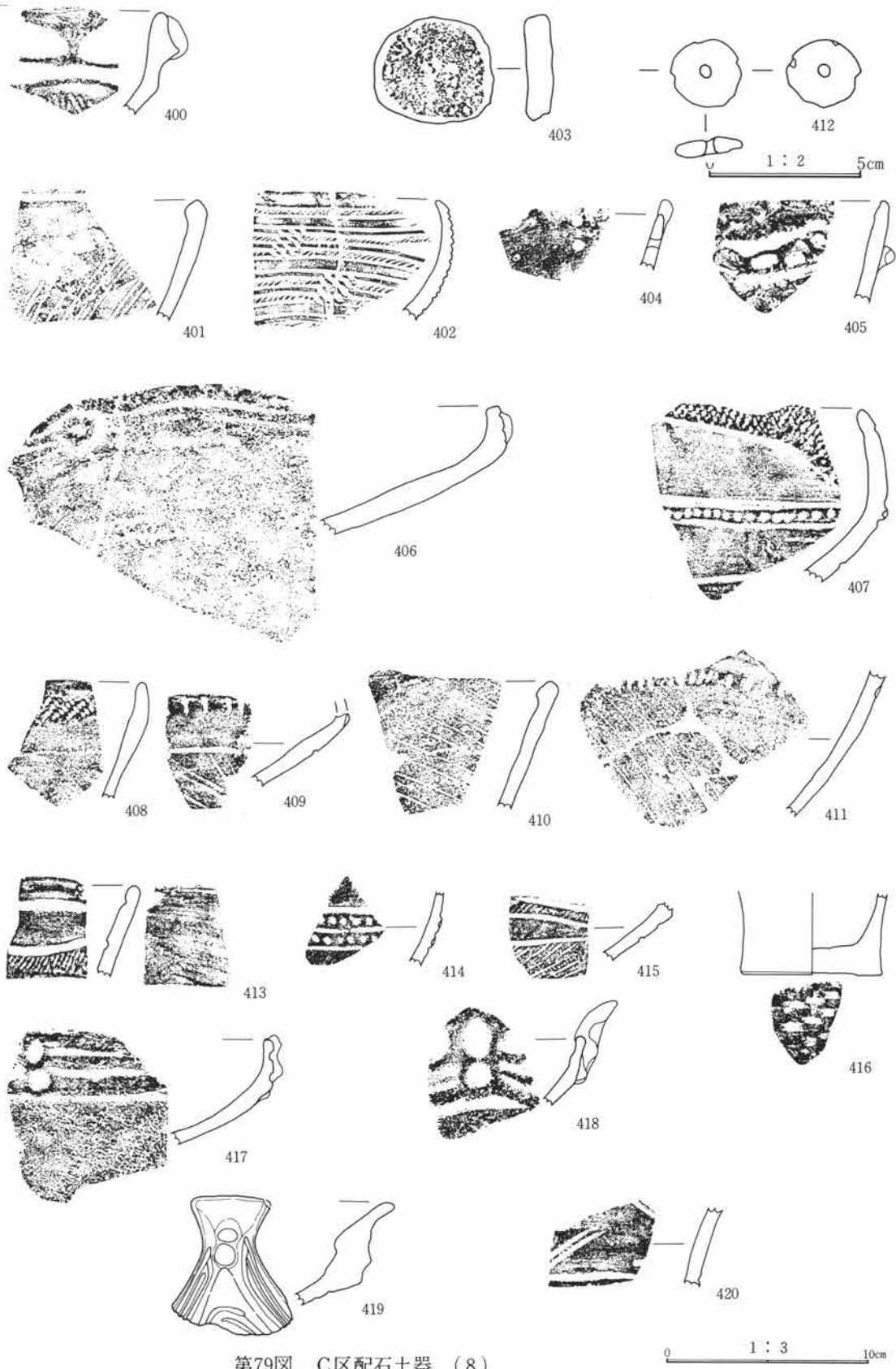


第77図 C区配石土器 (6)

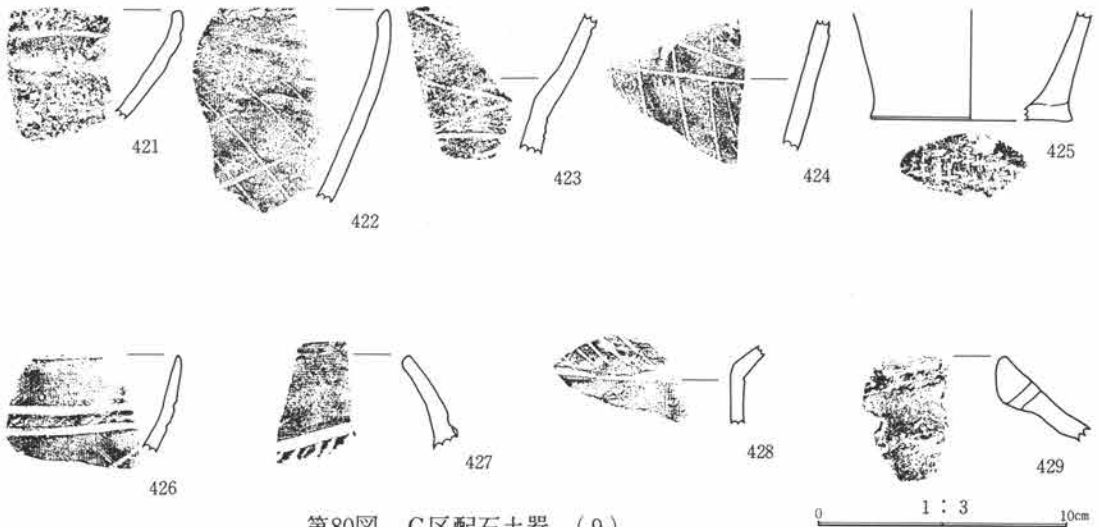
注口付土器と思われる。374は波状口縁を呈し、波頂部の側面に刺突を施す突起をもつ。口縁部に縦連対弧文とそれを起点とした横位平行沈線を施す。375は口唇部に連弧状の磨消縄文を施し、その連結部には指頭圧痕及び縦刻みを施した突起を貼付する。縄文L R。376は口唇下に2条の沈線を巡らし、沈線上に縦刻みのある瘤状の貼付を施す。沈線間にL R縄文を充填する。377は口唇部・口縁部に刻みを施し、頸部に3条の沈線を巡らす。沈線間に刻みを施す。体部には蕨手状及び垂下沈線を単位弧状沈線を施し、磨消縄文を区画する。縄文L R。378は平行沈線に区画された縄文帯をS字状の重層により縦に区切られる。内面に4条の沈線帯を巡らし、1本のみに刻みを施す。379は口縁部に弧状及び平行沈線帯を施し、沈線間に刻みを施す。380は口唇部に刻みを施し、平行沈線を巡らせ、沈線上に刺突を施す。381は波状口縁を呈し、口縁部を肥厚させ沈線帯を巡らす。382～389は斜行沈線を



第78図 C区配石土器 (7)

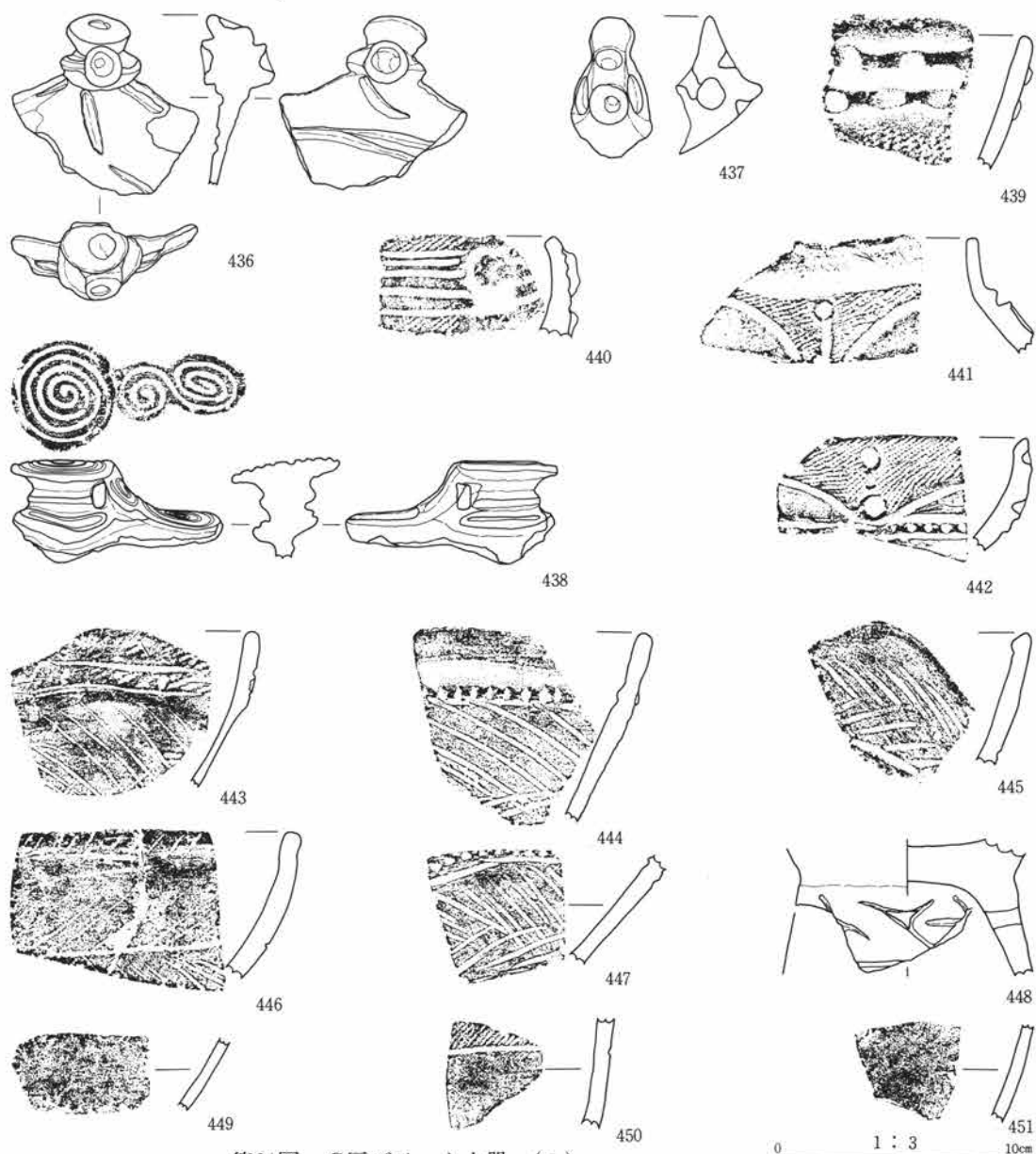


第79図 C区配石土器 (8)



第80図 C区配石土器 (9)

施す。384の内面には弧状に沈線を施し沈線内にR L縄文を充填する。390は無文粗製土器。胴部下半部片。底径3.1cm。残存高10.5cm。391は2cm程のR L縄文原体を3cm程回転させた稚拙な施文の粗製土器。377は堀之内2式、378・380は加曾利B 1式、374~376は加曾利B 2式、373・382~389は加曾利B 3式。381は曾谷式。392は土偶の下胴部である。下腹部及び両脛頭には瘤状の突起が表現されている。現存長6.6cm幅5.6cm厚み2.3cmである。393は土偶の脚、395はペン先状の土製品、394は長さ1.6cmの耳栓、396~399は、土製円盤である。22号配石 400は2条の沈線を巡らし、一部をつまみあげている。縄文L R。401は斜行沈線を施す。402は横位沈線間を無文と刻み目で4本1単位を多段に施し、隆帯を斜方向に磨消する。鉢形土器である。403は土製円盤。400は加曾利E 3式、402は加曾利B 1式、401は加曾利B 3式。23号配石 404は口唇部に突起の貼付痕があり、その下に小穴を穿つ。405は口縁部に連続指圧痕を施した粘土紐を貼付する無文の粗製土器。26号配石 406は口縁に平行沈線を巡らし瘤状の貼付を施す鉢形土器。407は口縁部に弧状に区画された磨消縄文を施し、肩部に刻目帯を巡らす。縄文L R。408は口縁部にL R縄文を施文し、体部に斜行沈線を施す。408は肩部に刻みを施す。410・411は斜行沈線を施す。411には刻目帯を巡らす。407は加曾利B 2式、408~411は加曾利B 3式、406は曾谷式。27号配石 412は土製有孔円盤。413は外面無文で内面に弧状に区画された磨消縄文を施す。縄文L R。414は沈線間に刻みを施す。415は沈線間を磨消縄文する。縄文は異束縄文。416は底部に網代痕がある。28号配石 417は口縁に平行沈線を巡らし8字状の粘土紐を貼付する鉢形土器。418・419は把手状立ち上がり口縁部片。420は斜行沈線を施す。417~419は曾谷式。29号配石 421は口唇下に沈線を巡らす。422~424は斜行沈線を施す。425は底部に網代痕がある。422~424は加曾利B 2式、421は曾谷式。30号配石 426は口縁部に2条の沈線を巡らし、体部に弧線文を施す。427は刻目帯を巡らす。428はくびれ部に沈線を巡らし区画する。上部斜行沈線、下部無文である。429は肥厚した口縁部無文帯に小穴を穿つ。426~428は加曾利B 2式。

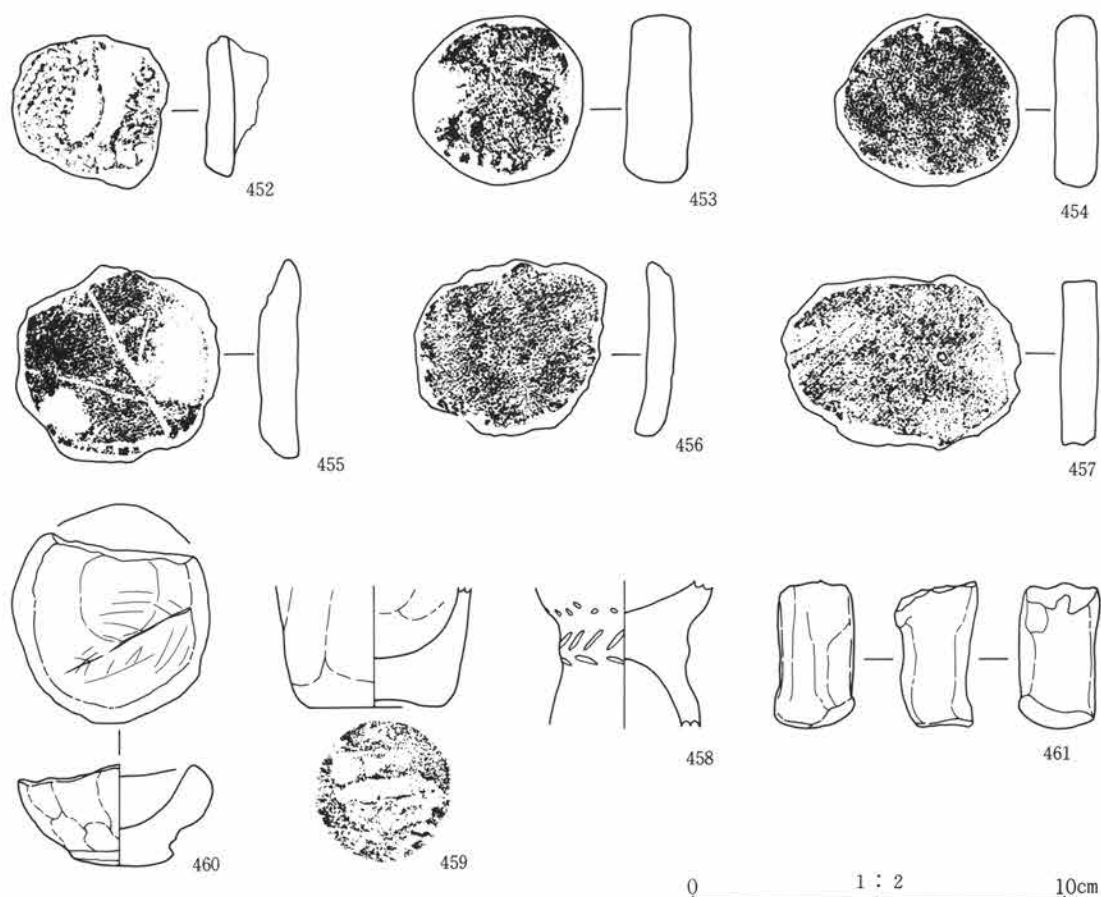


第81図 C区グリット土器 (1)

④ グリット出土の土器

加曾利E 4式に比定される土器群。452は橋状把手剥落口縁部片である。L R縄文を施文する。堀之内2式に比定される土器群。437は注口付土器把手部片。438は把手。

加曾利B 1式に比定される土器群。439・462・463は口縁部に連続指圧痕を施し、465は刻目を施した粘土紐を巡らす粗製深鉢形土器口縁部片。464は、口唇部に1条の沈線を巡らし、肥厚させた突起を施す粗製深鉢形土器口縁部片。439は隆帯を2条巡らし、体部にR L縄文を施文する。462・463は無文。加曾利B 2式に比定される土器群。436は口縁部を肥厚させ刻目を施し突起を貼付する。内面には2条の沈線を巡らす。442は弧状沈線で磨消縄文を区画し刺突文を施す。縄文L R。頸部には刻目帯が施される。



第82図 C区グリット土器 (2)

加曾利B 3式に比定される土器群。441は肩部が「く」字状に強く張り出し、口縁が直立する器形の深鉢形土器。縦及び弧状沈線で磨消縄文を区画する。縦沈線に刺突文を施す。縄文L R。443~447は綾杉状沈線を施す。

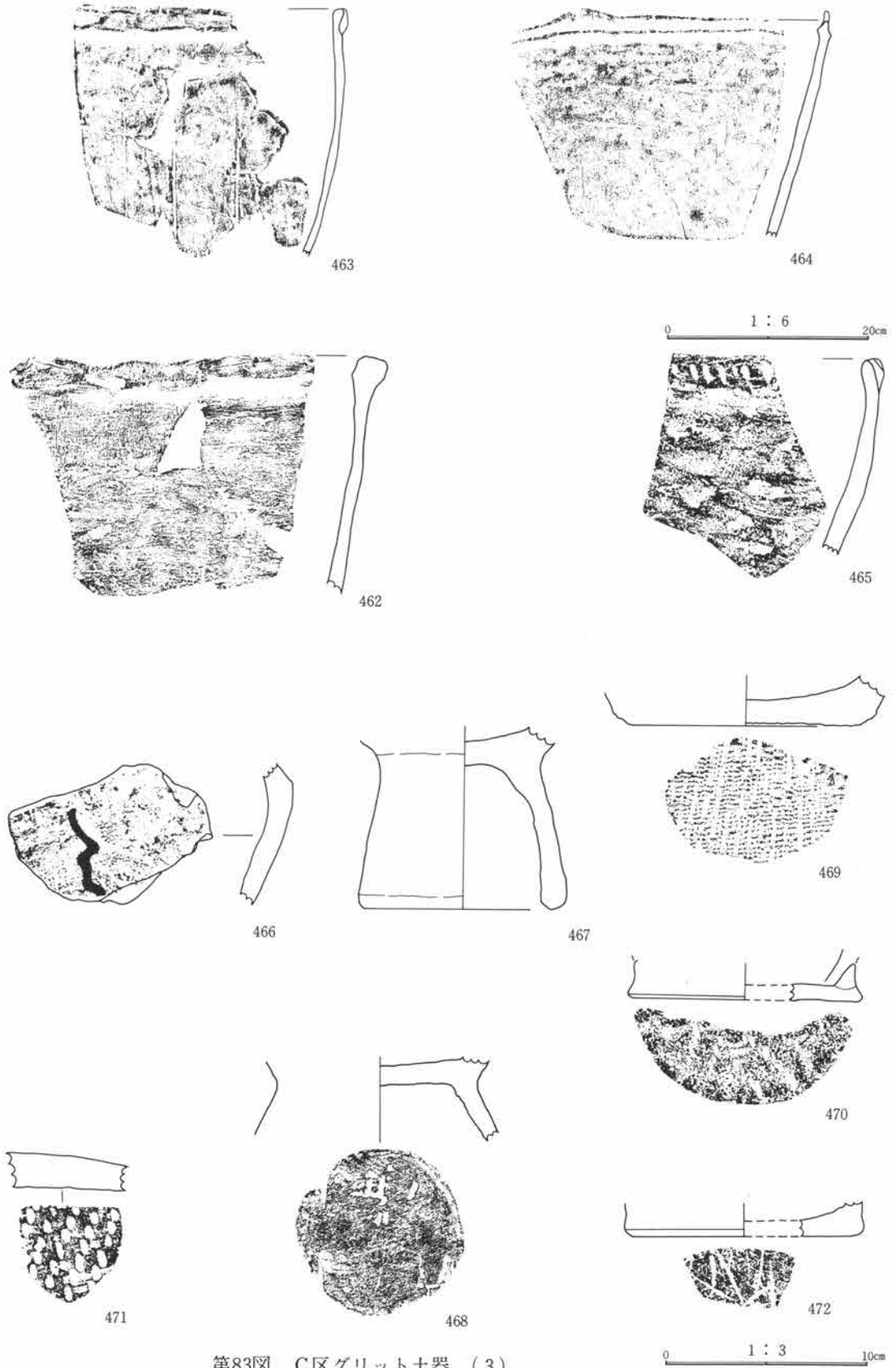
曾谷式に比定される土器群。440は口唇下と肩部に縄文帯を施しその間に平行沈線を巡らせ瘤状の貼付を施す。

安行3 A式に比定される土器群。448は台付土器の台部片である。縄文帯を施し三叉文の透し彫りを施す。縄文帯に赤色塗彩あり。縄文L R。

赤色塗彩を施す土器群。449・451は無文。450は沈線にL R縄文を施す。

ミニチュア土器群。458は台付土器底部片、刺突や綾杉状の刻目を施す。459は底部片。460は碗形を呈し底部にボタン状の貼付をする。内面に木葉圧痕有り。

底部片。466~468は、台付土器の台部片である。469~471は網代痕。472は木葉痕がある。



第83図 C区グリット土器 (3)

⑤ 配石遺構出土の石器

1 a 号配石の262は粗雑な有茎石鏃で先端部を欠損している。263は硬質で楕円形の磨石で表・裏・側面に打痕と擦痕がある。264は偏平な磨石で表裏に擦痕がある。

1 b 号配石の265は撓形打製石斧で基部側面を欠損している。やや荒い作りである。266は無茎石鏃で基部が深く湾入し一方の脚部を欠損している。

2 a 号配石の267は円形で偏平な磨石で表・裏・側面に浅い打痕がある。504は丸石で一部に浅い打痕がある。526～528も丸石で528は半分に割れている。529は多孔石、530は石皿で浅く凹んでおり周縁部に多数の孔がある。

3 号配石の268・269は基部が浅く湾入した無茎石鏃で、270は河原石をそのまま用いた大型の石皿で浅く凹んでいる。271は砥石で表裏に「V」字状の溝がある。272の先端部を欠損した無茎石鏃と273の多孔石は列石より出土した。

5 号配石の275～277は剥片石器で275と277は1側面を276は2側面を刃部としている。274は白玉の未成品である。278は「T」字形のドリルで先端部を欠損している。279～283は楕円形の磨石で側面に打痕がある。

6 号配石の284は鋭利な無茎石鏃で一方の脚を欠損している。285は楕円形の磨石で、286は河原石をそのまま用いた石皿で湾曲している。287は多孔石で片面のみ孔がある。505・506は河原石をそのまま用いた大型の石皿でわずかに凹んでいる。

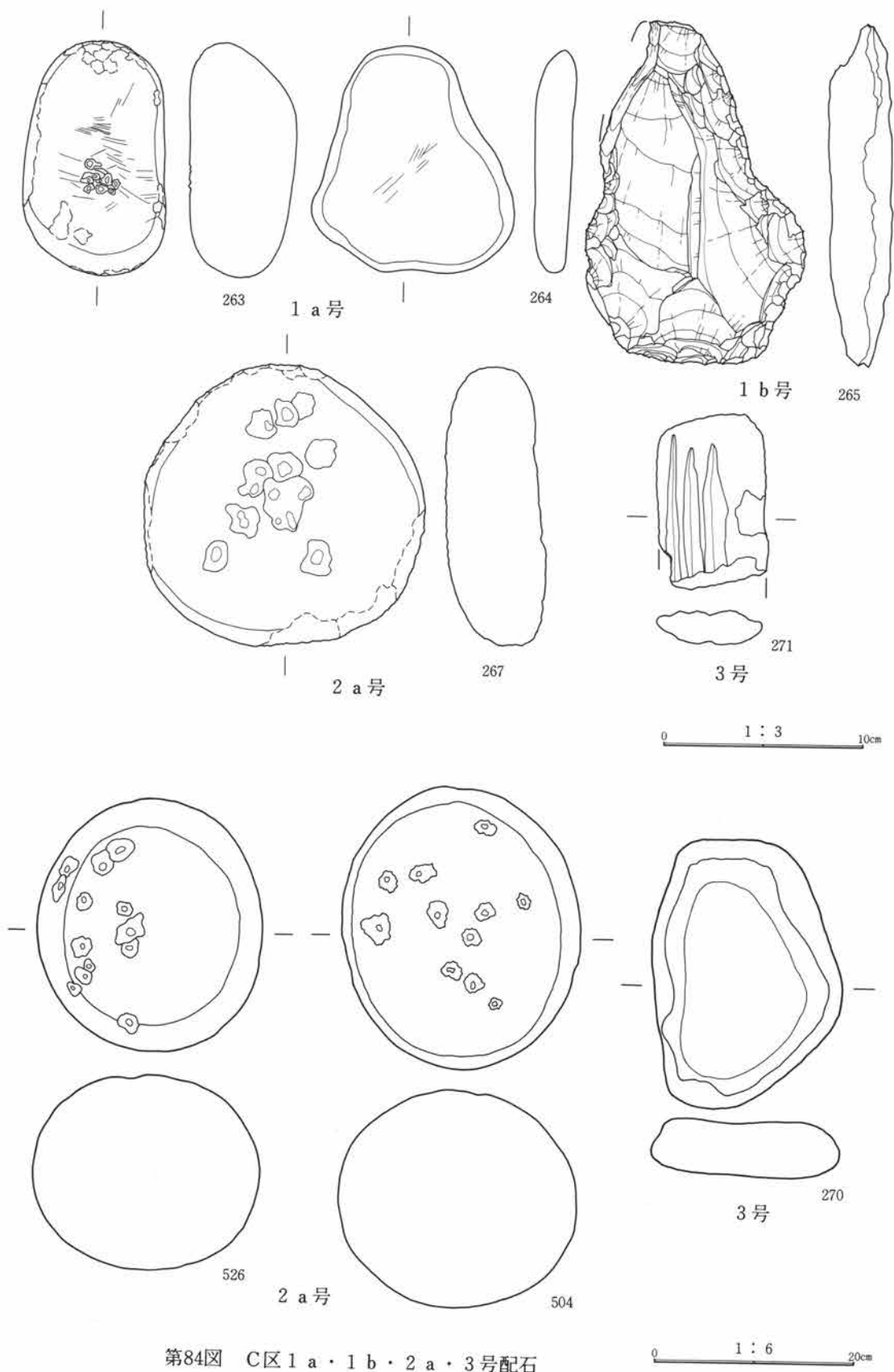
7 号配石の288は粗雑な無茎石鏃で、289は一方の側面を欠損した有茎石鏃である。290は定形の磨製石斧で基部が欠損している。291・292は剥片石器で291は1側面を292は両側面を刃部としている。293は楕円形で偏平な大型の磨石で側面に打痕がある。507は河原石をそのまま用いた大型の石皿で、508は楕円形をした丸石である。

8 a 号配石の294・298は粗雑な有茎石鏃で、295は撓形打製石斧で基部を欠損し表面に自然面を残す。296は楕円形の凹石で側面にも打痕がある。297は円形の磨石である。299～306 (図版71) は石英質岩の自然石で石英の結晶が密集するものや自然の孔が貫通する多孔石状をなすもの等がある。

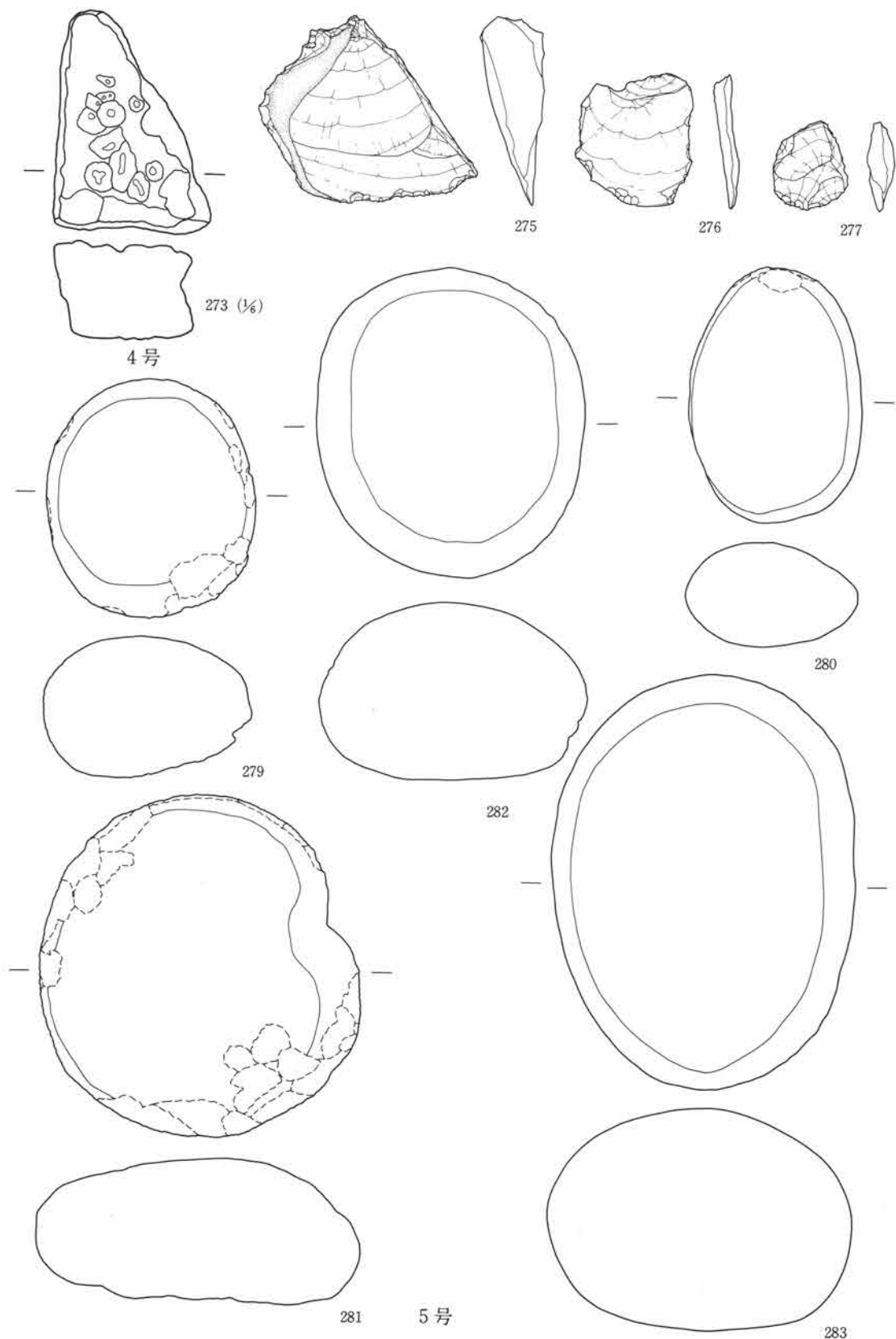
9 号配石の307は白玉の破片で、308はドリルの先端部の破片である。309は3側面を刃部とする剥片石器で、310は楕円形の磨石である。

10号配石の312・313のような円形や楕円形をなす小型の自然石が本遺跡から多く出土した。多くはやや偏平な形状で白色・黄色・褐色・黒色・浅緑色をなしており、飾垂具の一部と考えた。314は偏平で楕円形をなし全面が磨られており飾垂具と考えられる。315～317は無茎石鏃で、318～324は有茎石鏃で先端部を欠損している。325は大型の石鏃で、326はドリル、327・328は剥片石器で327は楔状をなしている。10号配石からは15点の石鏃が出土したが無茎が8点、有茎が7点である。

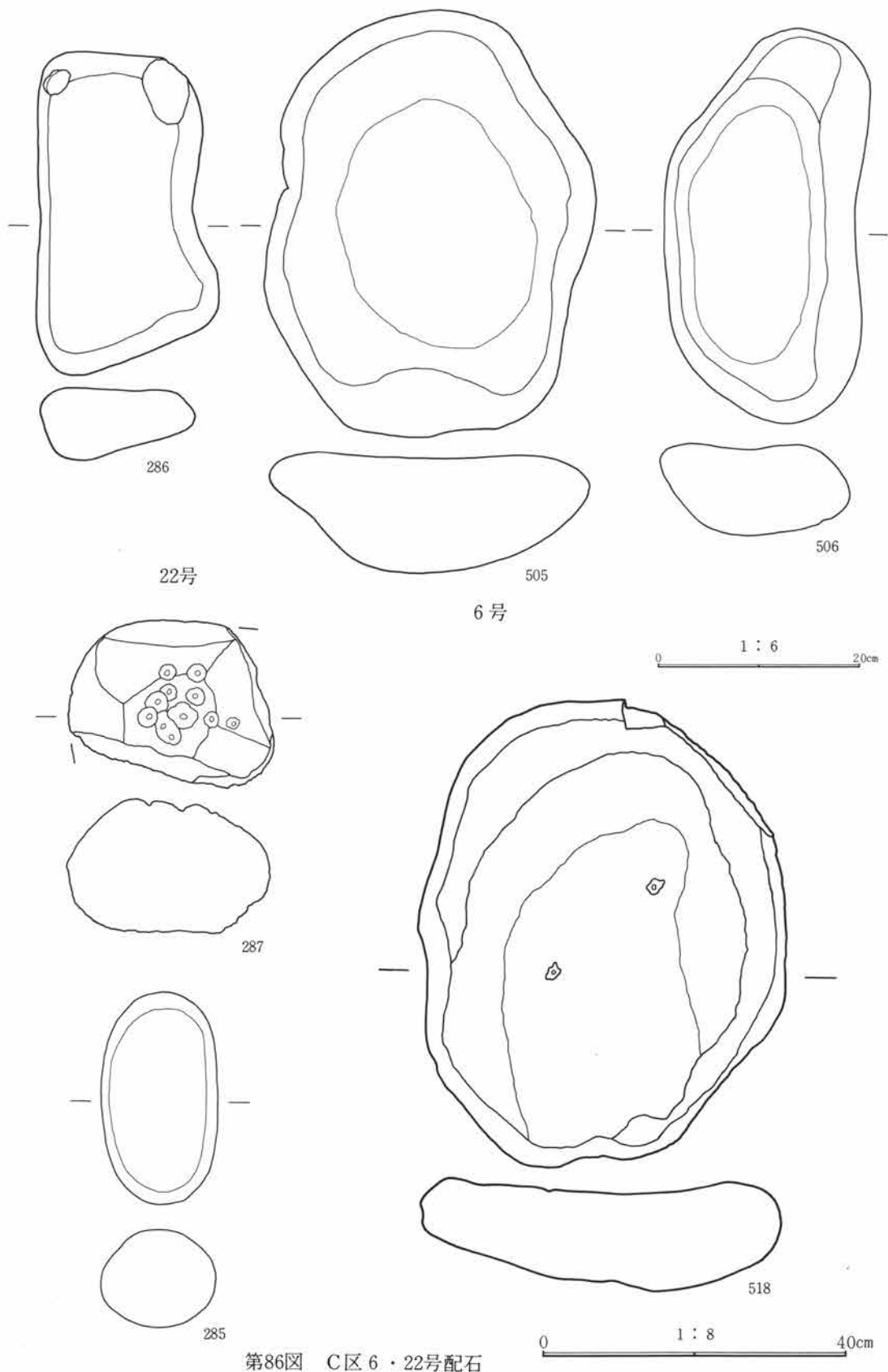
11号配石の329は軟質な石質で作られた飾垂具で上方に両面穿孔の孔があり、相対する4箇所に挟り込みがあり花卉状をなしている。330～332は自然石を用いた飾垂具である。333～335は三角形の石鏃で、336～338は無茎石鏃、339～352は有茎石鏃で小型のものは粗雑な作りである。353は十字架状をなすドリルである。354は横形の石匙で刃部は丸く両面より押圧剝離している。抓み部は長く両面



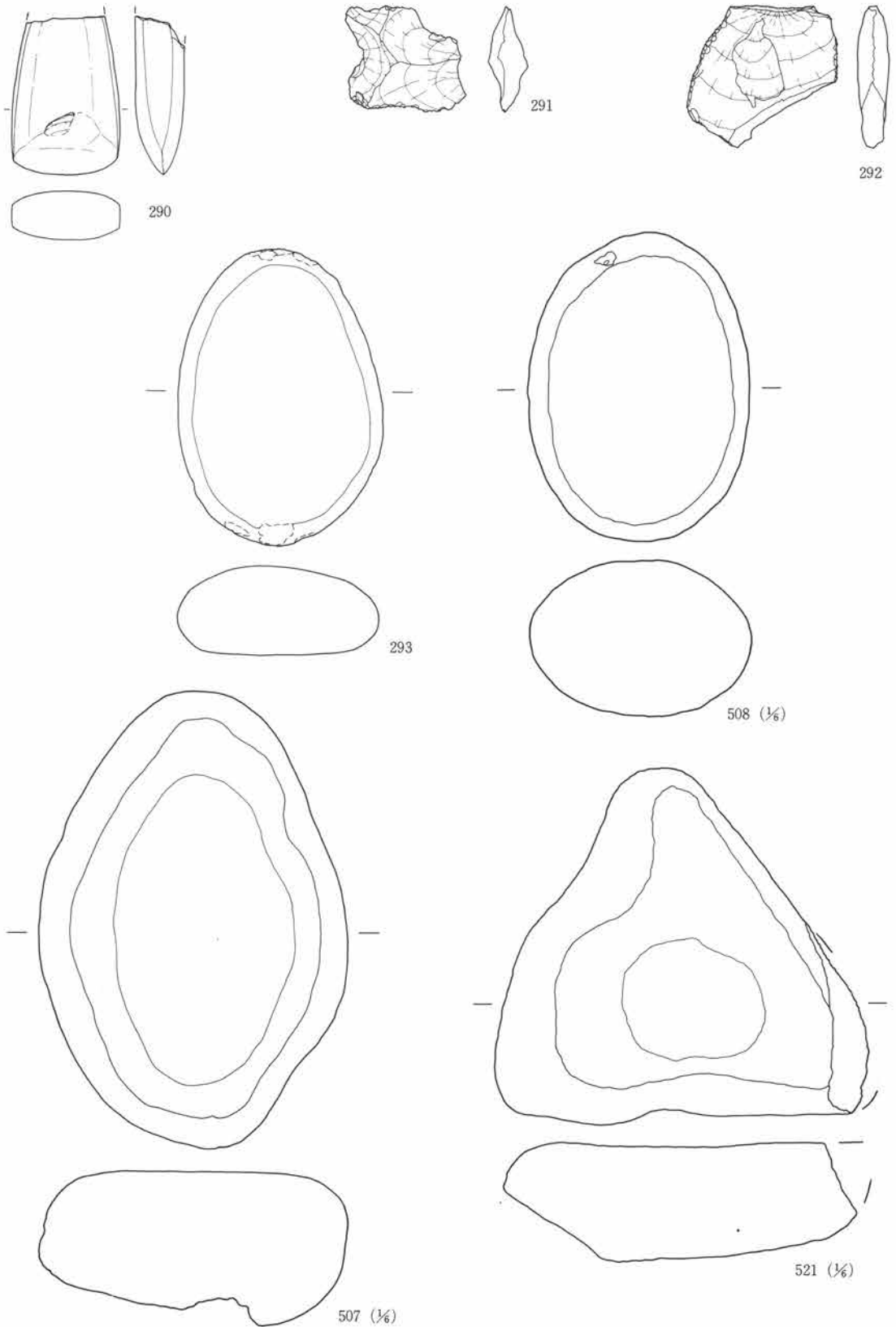
第84図 C区1 a・1 b・2 a・3号配石



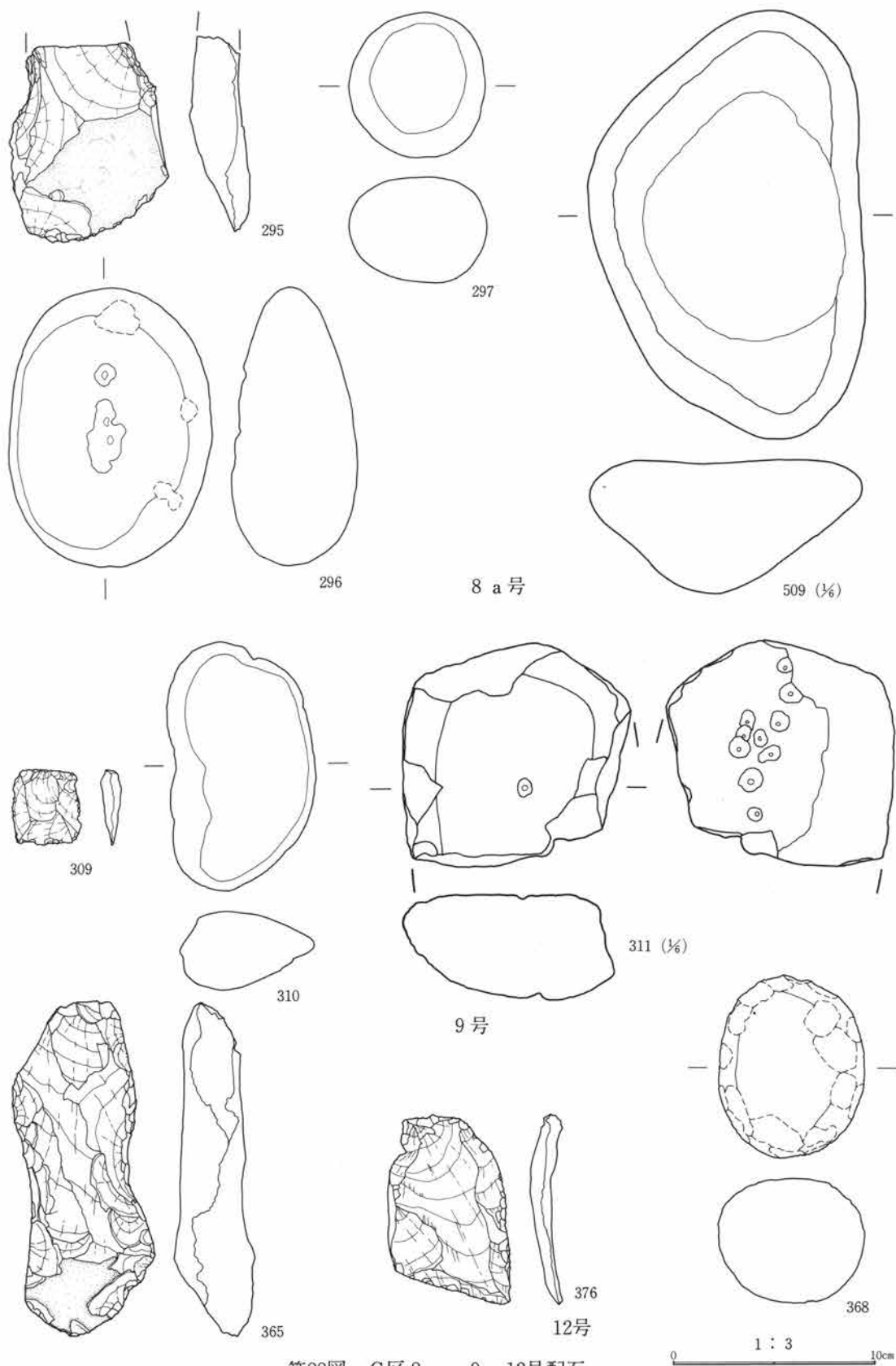
第85図 C区4・5号配石



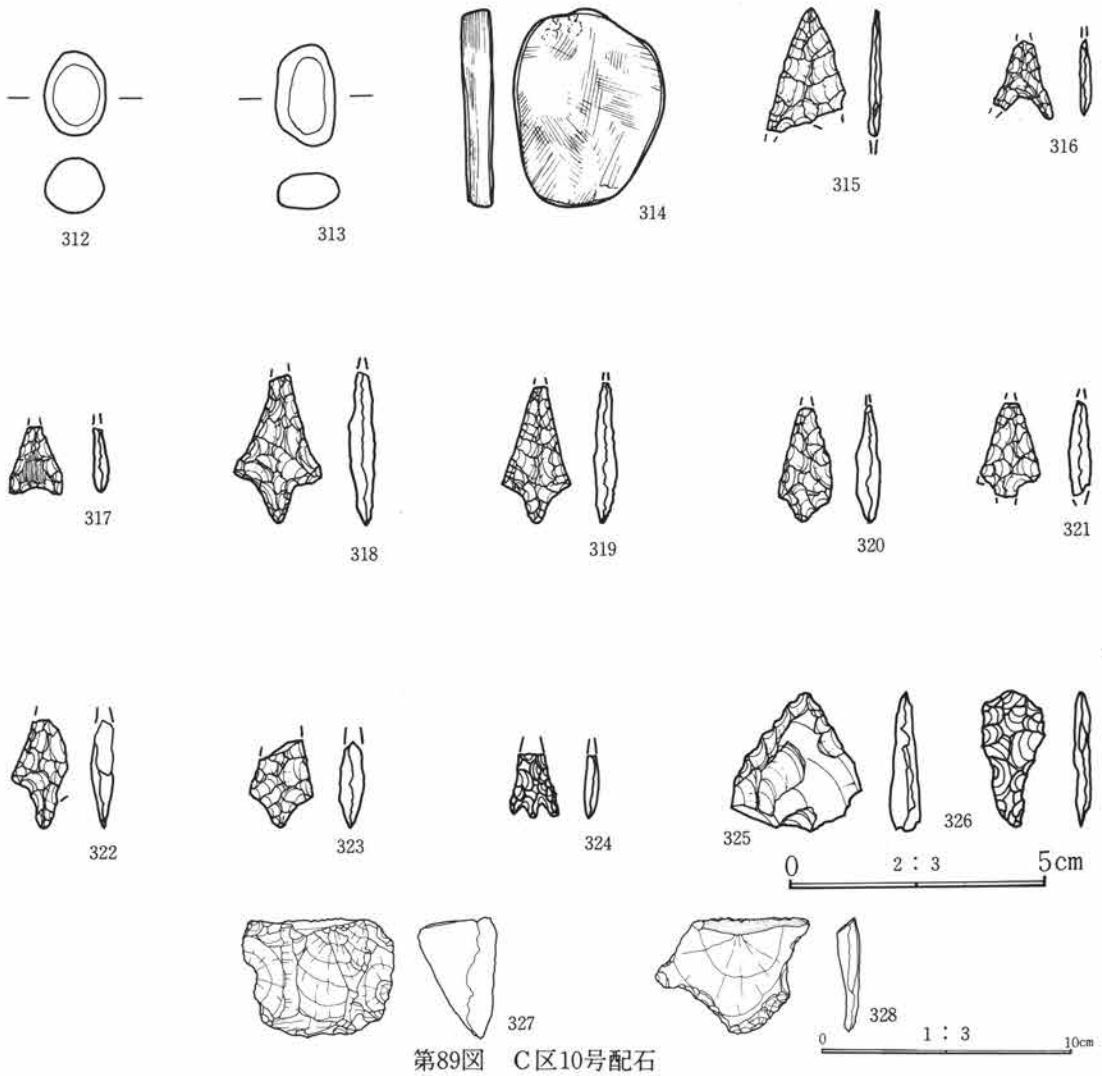
第86図 C区6・22号配石



第87図 C区7号配石



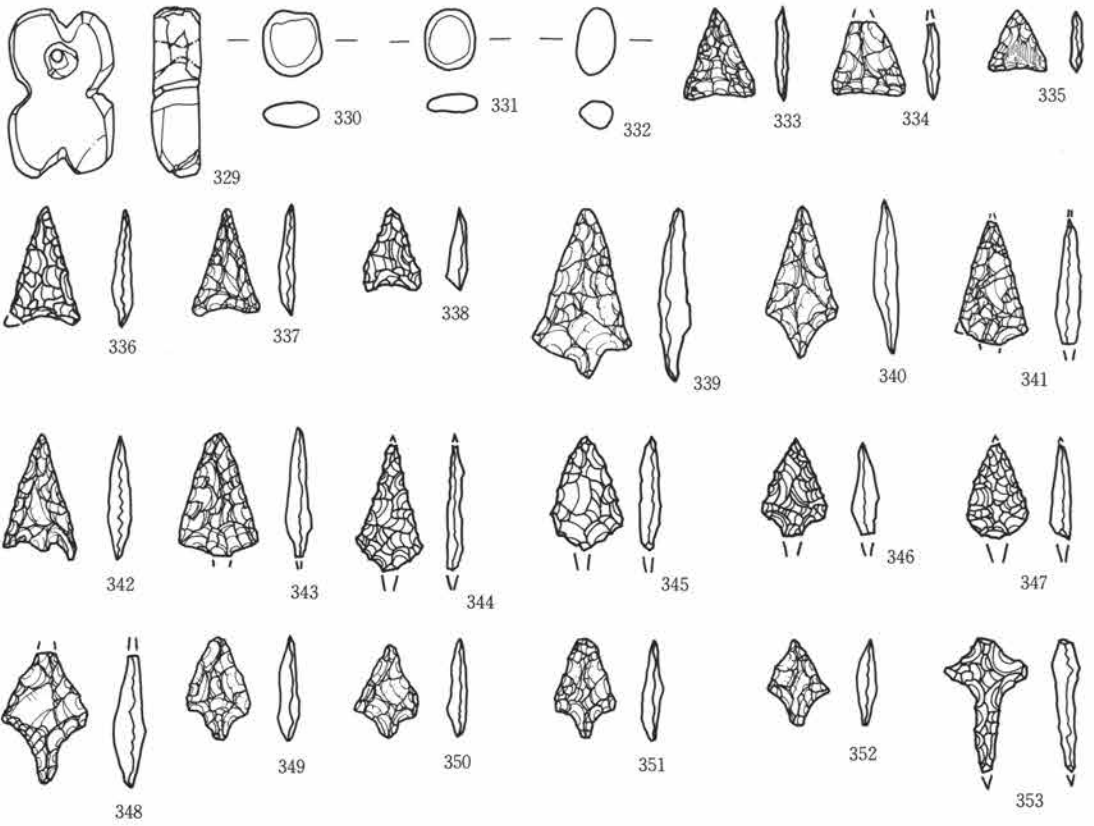
第88図 C区8 a · 9 · 12号配石



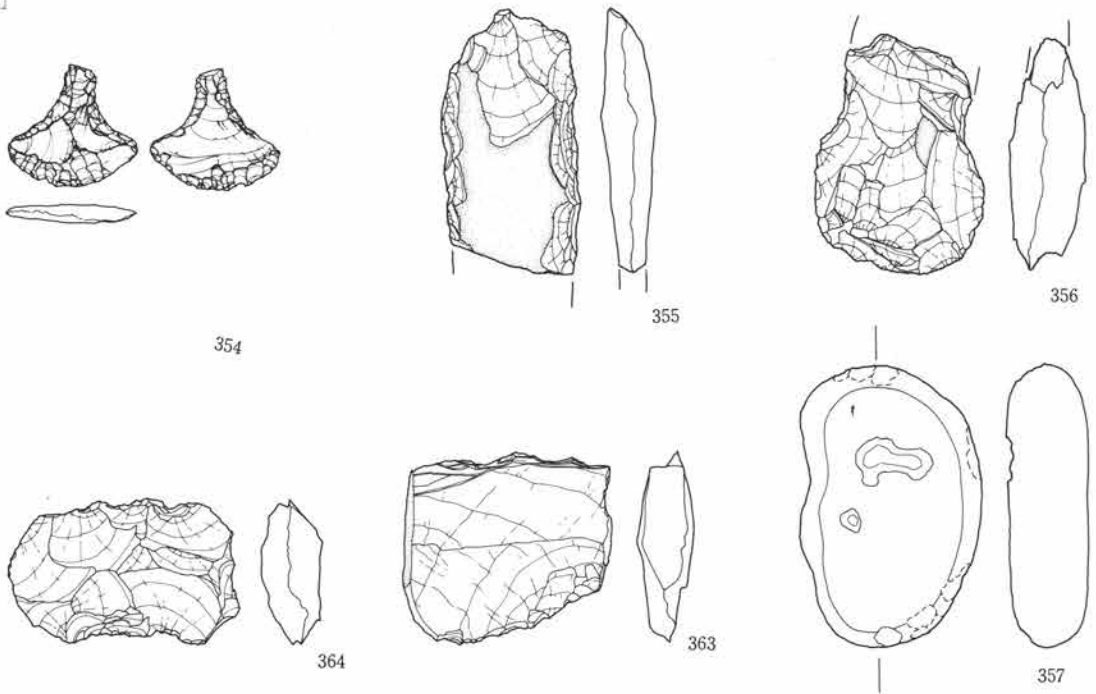
が丁寧に潰されている。355は短冊形打製石斧で自然面を残し刃部を欠損している。356は揆形打製石斧で基部を欠損している。363・364は剥片石器で363は1側面を刃部とし、364は内湾した刃部となっている。357は楕円で偏平な凹石で側面にも打痕がある。358は定形の石皿の破片で上端両側が突起し、裏面に1対の四角形の脚がある。359も定形の石皿の破片で表面は浅い「U」字状をなし、裏面中央は多孔石状に孔が集中している。360・361は楕円形の小型の磨石である。362は河原石をそのまま用いた石皿で端部を欠損している。510・511は河原石を用いた大型の石皿で表面がわずかに凹んでいる。510には孔がある。512は多孔石で上端に孔が集中している。11号配石からは30点の石鏃が出土しているが無茎が9点、有茎が18点、不明3点で有茎の出土が多い傾向にある。

12号配石の365は短冊形打製石斧で厚みがあり一部に自然面を残す。刃部は丸く両側中央がやや挟れ込んでいる。366は無茎石鏃で一方の脚を欠損している。367は剥片石器で2側面を刃部としている。368は楕円形の磨石で側面に多数の打痕がある。

13号配石の369は剥片石器で2側面を刃部としている。370は礫器で裏面に大きく自然面を残し、荒



0 2 : 3 5cm

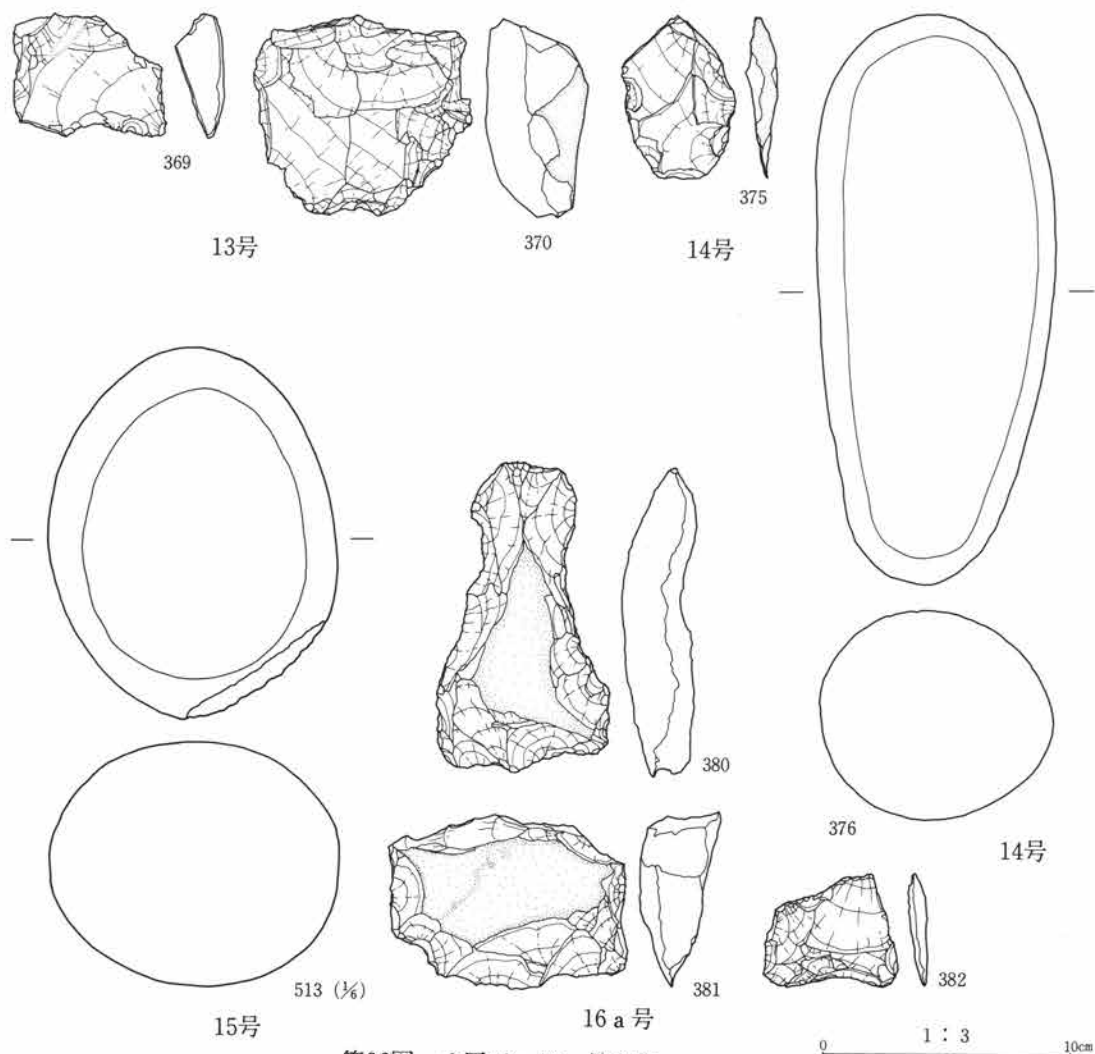


0 1 : 3 10cm

第90図 C区11号配石 (1)



第91図 C区11号配石 (2)



第92図 C区13～16 a号配石

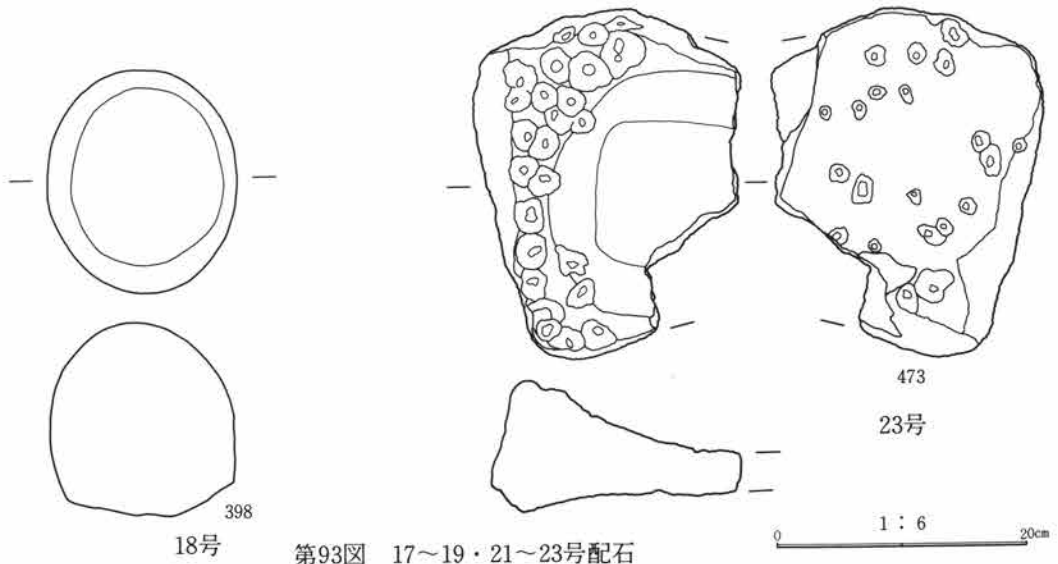
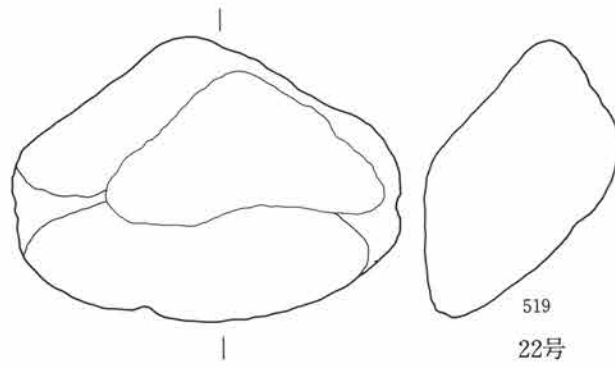
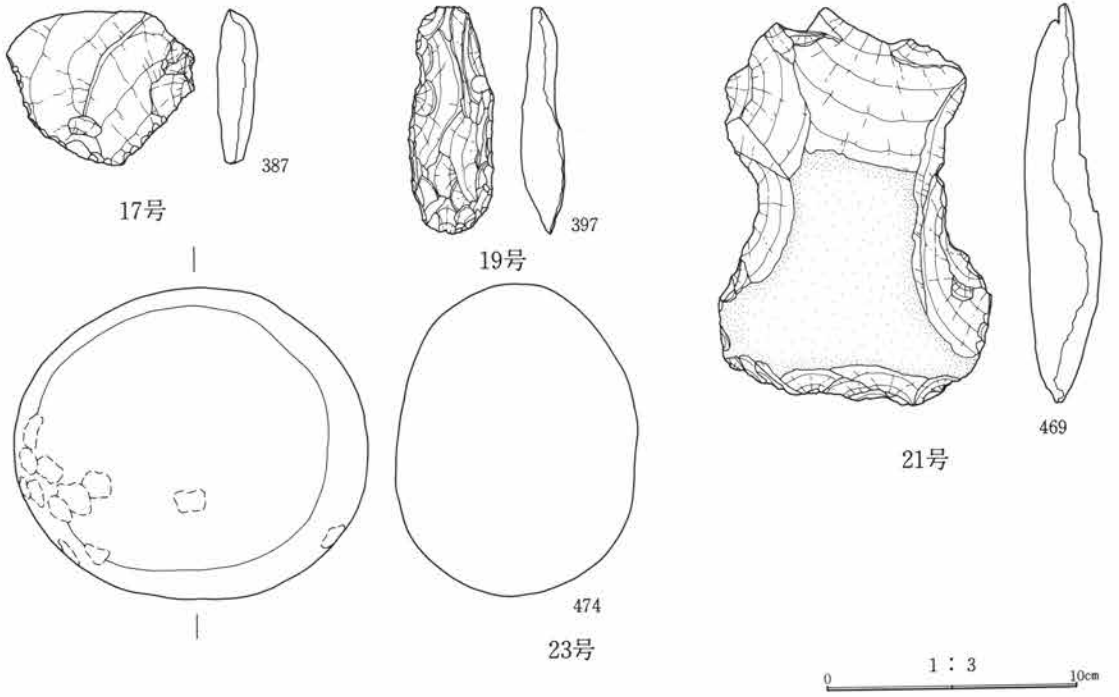
い剥離が加えられている。371 (図版74) は桂化木である。石英質岩とともに特別な石として配石に持ち込まれたものと考えられる。372は石鏃で基部を欠損している。

14号配石の373は自然石を用いた飾垂具で隅丸三角形をなし、透明感のある淡黄色の石である。374は石鏃で基部を欠損している。375は剥片石器で先端部に丸い刃部を付けている。376は長楕円形をなす大型の磨石である。

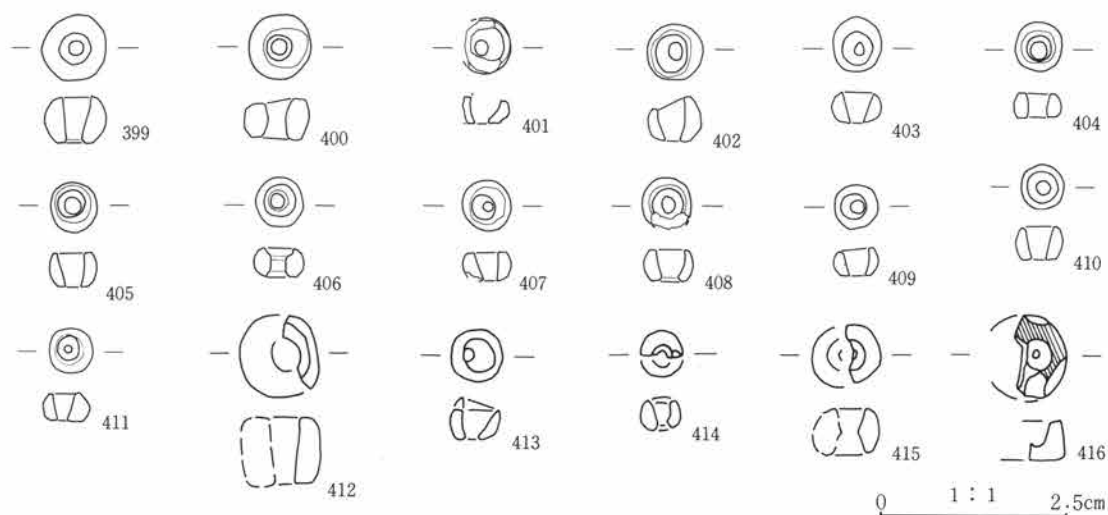
15号配石の377は鋭利な無茎石鏃である。378は楕円形をなす小型の磨石である。379 (図版74) は石英の自然石である。513は丸石で一部を欠損している。

16 a 号配石の380は撓形打製石斧で一部に自然面を残し、刃部は使用により剥離している。381・382は剥片石器で381は1側面に荒い剥離を加え刃部とし楔状をなしている。382は2側面を刃部としている。383～385は石鏃で383は三角形をなし、384は基部を欠損し、385は一方の脚を欠損した無茎石鏃である。386は三角形の抓み部を持つドリルで先端部を欠損している。

17号配石の387は剥片石器で「V」字状に刃部を作出している。18号配石の388は鋭利な無茎石鏃で、



第93図 17~19・21~23号配石



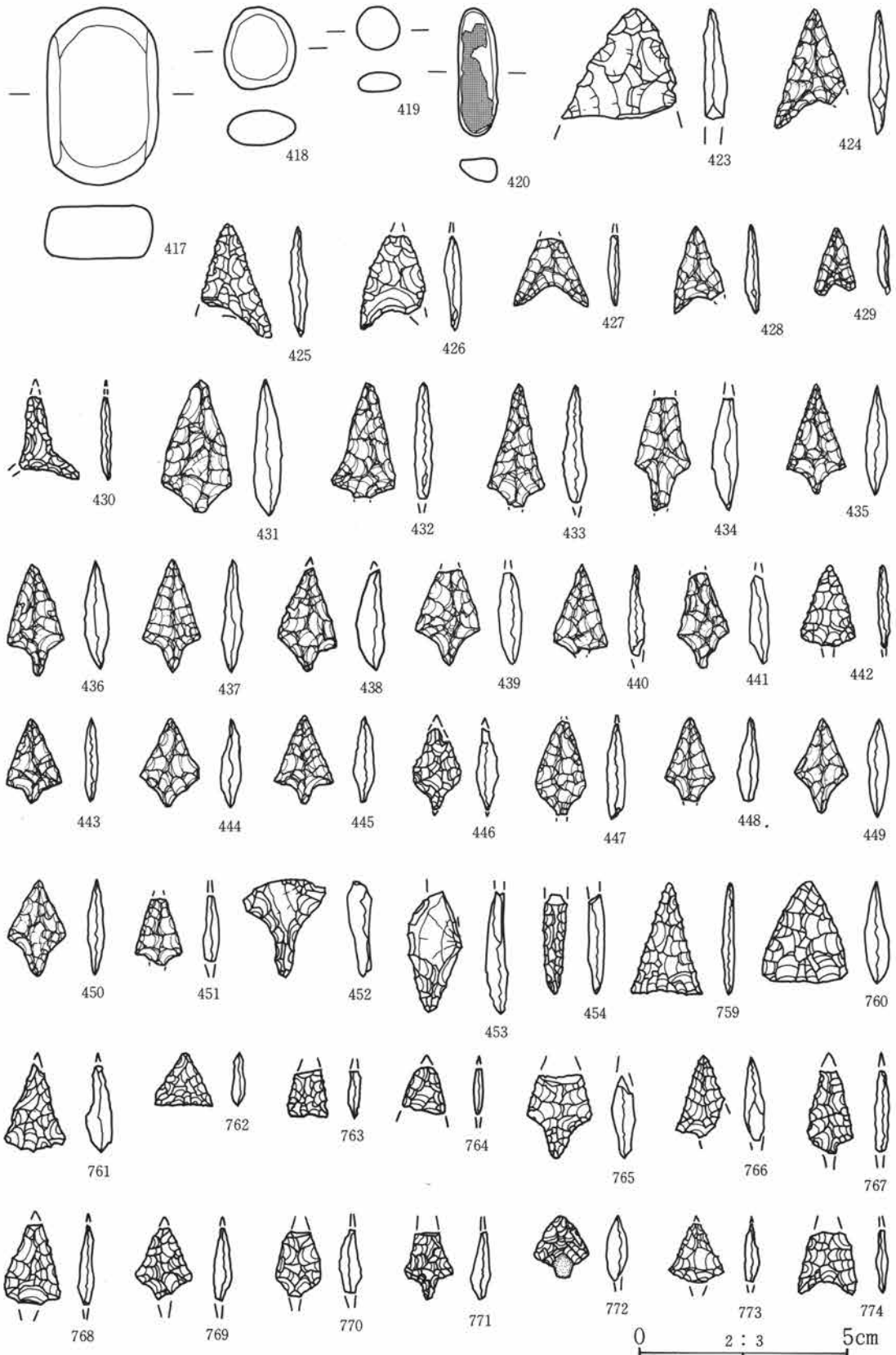
第94図 C区20号配石 (1)

389・390も無茎石鏃であるが先端部や脚の一部を欠損している。391～394は有茎石鏃で391と394は完
 存し、他は先端部や基部を欠損している。やや荒い作りである。

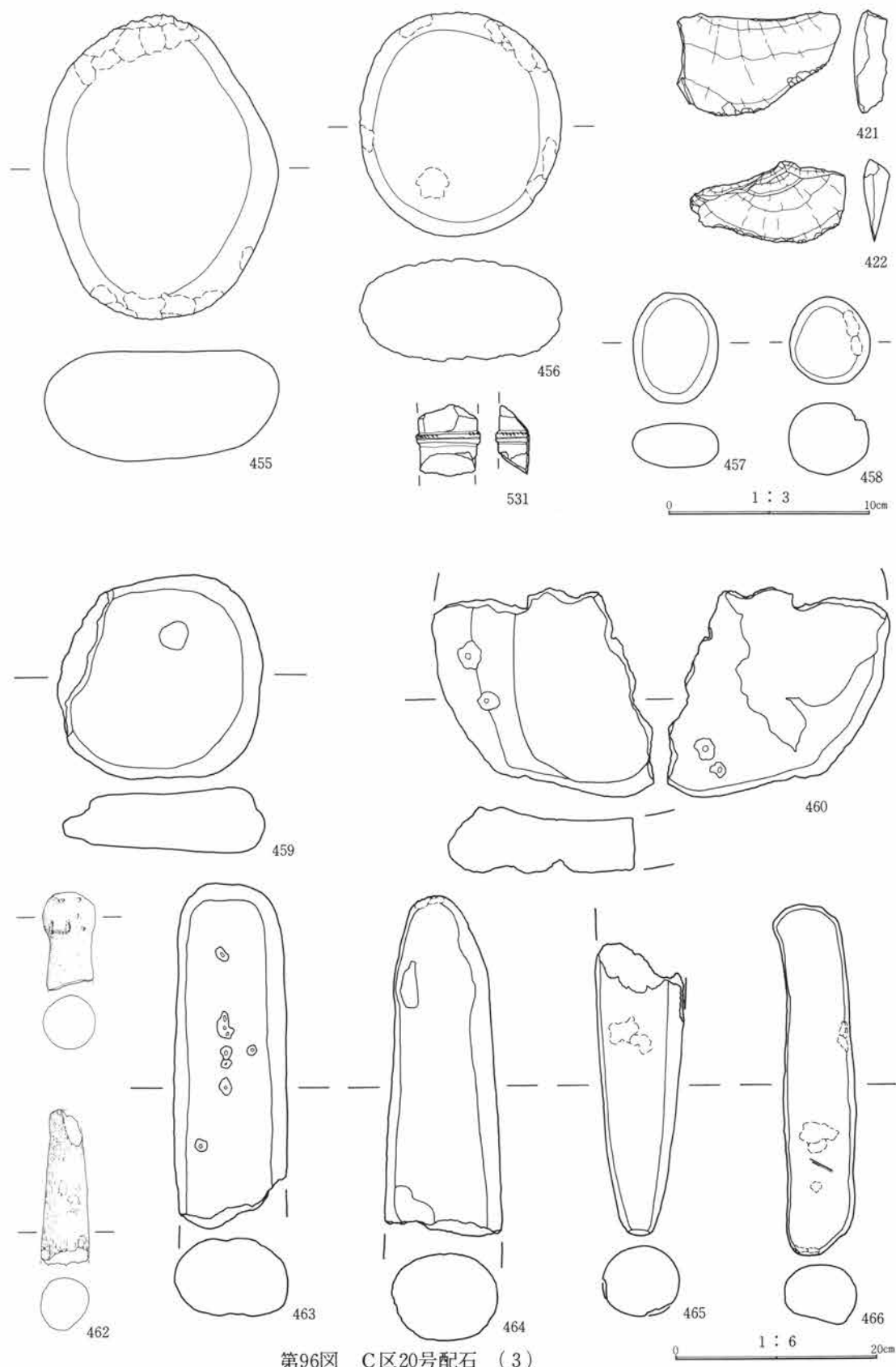
19号配石の395は自然石を用いた楕円形の小型の飾垂具で、396は先端部が欠損した無茎石鏃である。
 397は小型の短冊型打製石斧で刃部が丸く鋭利である。398は半球形の小型の丸石である。

20 a 号配石からは多量の石器が出土している。399～416は白玉で割れているものや未成品もあるが、
 径は6～9mmで片面穿孔が多いが両面穿孔もある。他に2点の小破片が出土した。417は隅丸長方形
 をなし黒色を呈する飾垂具と思われる石器で、全面が丁寧に研磨されている。418・149は自然石を用
 いた偏平で円形をなす小型の飾垂具である。420は長楕円形の赤色塗彩された石器で飾垂具と考えら
 れる。421・422は剥片石器で1側面に丸刃が付いている。423は大型の石鏃で基部を欠損している。
 424～430・774は無茎石鏃で先端部や脚を欠損するものが多い。431～451・765～773は有茎石鏃で基
 部を欠損するものが多く粗雑な作りが目立つ。759・760・761～763は三角形の石鏃で759・760は混入
 の可能性がある。20号配石からは31点の石鏃が出土したが無茎石鏃9点、有茎石鏃16点、三角鏃5点、
 不明1点で有茎石鏃が大半を占める。452～454はドリルで452は三角形の掴みが付く。453は剥片を利
 用したドリルである。454は先端部の破片である。455～458は楕円形の磨石で455・456は側面に打痕
 がある。457・458は小型の磨石で一部に打痕が見られる。459・460は石皿で459は偏平な河原石をそ
 のまま用いている。460は定形の石皿の破片で浅く凹み、周縁部と裏面に孔がある。514～517も河原
 石をそのまま用いた大型の石皿で、表面が浅く凹み514は周縁部と裏面に孔が散在している。461～
 465は石棒である。461は先端部の破片で端部を丸く加工している。462は基部と先端部の一部を欠損
 する破片で、先端部をわずかに加工している。463は大型の石棒の破片でほとんど加工していないが、
 表・裏・側面に浅い打痕が散在する。464も大型の石棒の破片で基部を欠損する。先端部は膨らみ
 を持つがほとんど加工していないと思われる。465は大型石棒の基部の破片で一部に打痕があり加工し
 ている。466は硬質の自然石で石棒を意識していると考えられる。表・裏・側面にはわずかに打痕が
 あり、一部に擦痕も見られる。

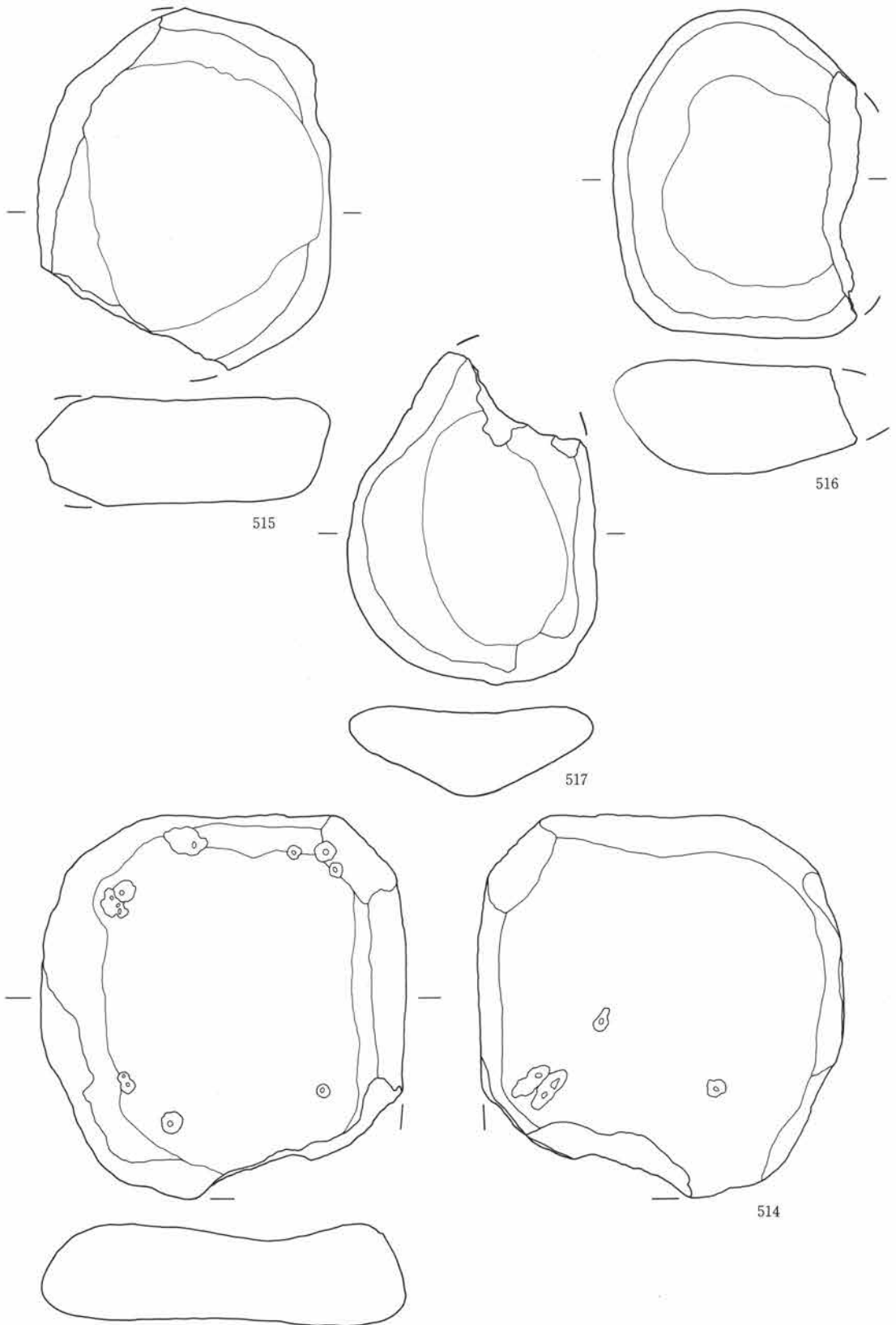
21号配石の467はひすい製の極めて小さい白玉である。468は鋭利な無茎石鏃で一方の脚部を欠損し



第95図 C区20号配石 (2)

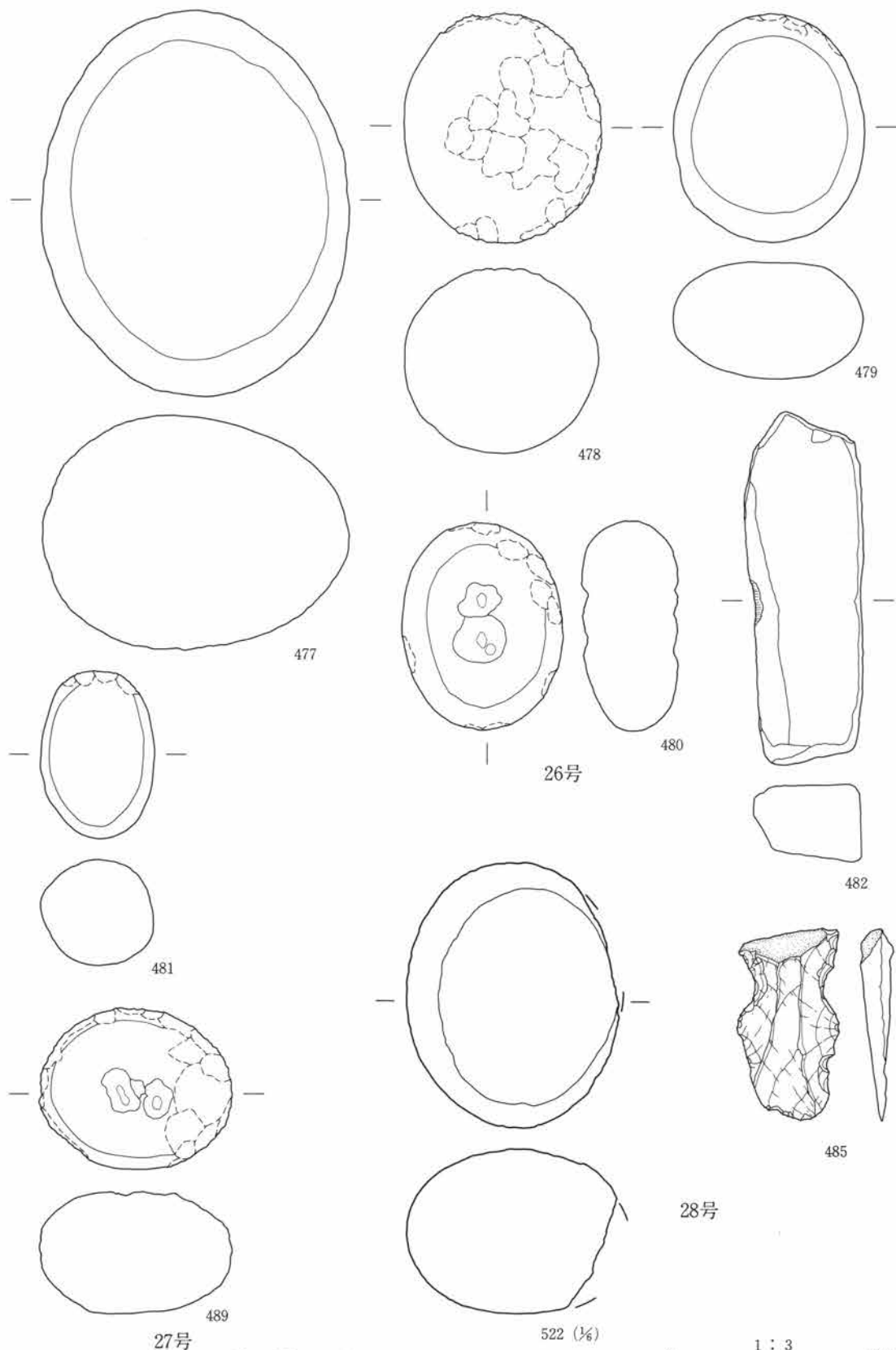


第96図 C区20号配石 (3)

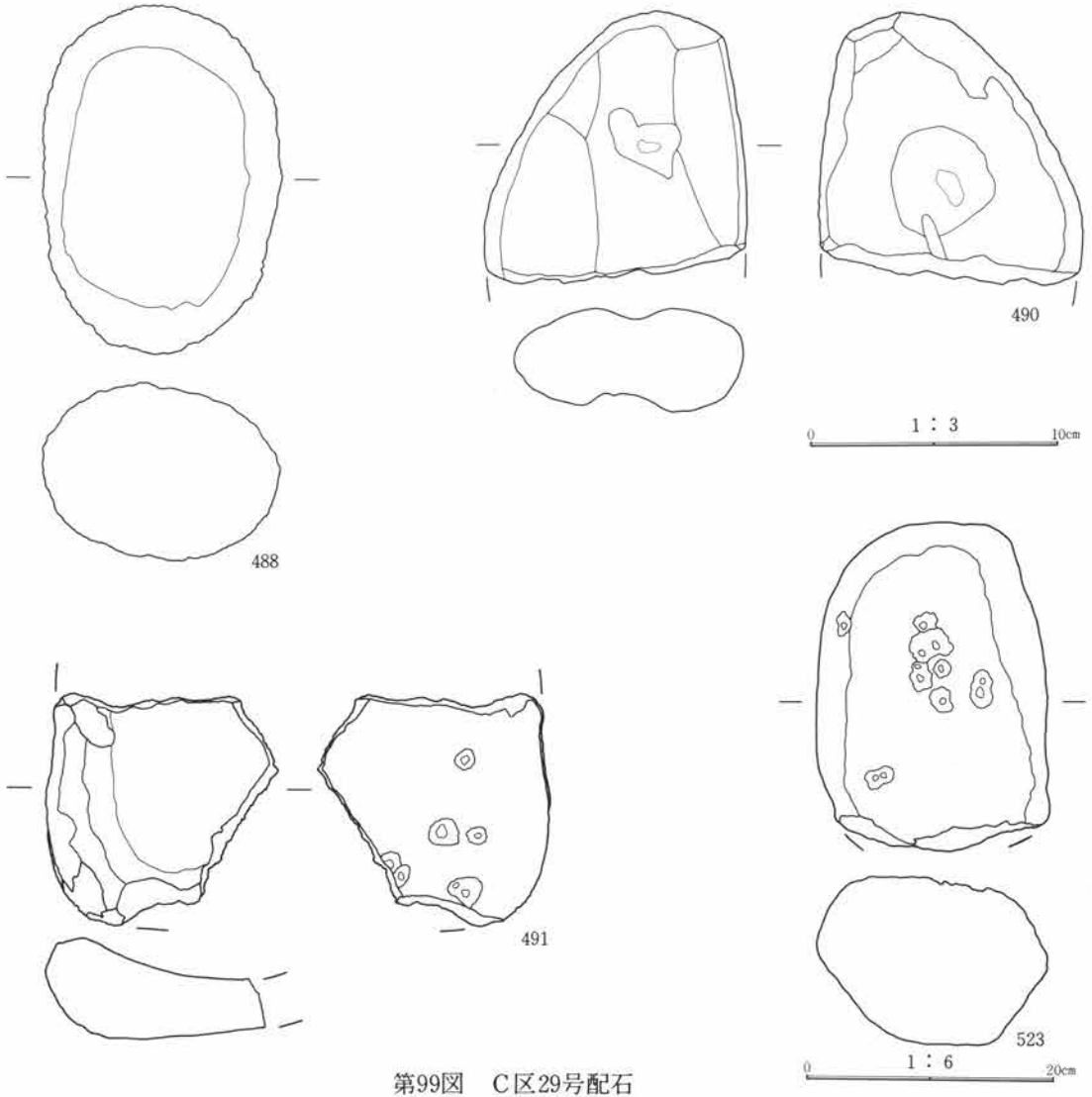


第97図 C区20号配石 (4)

0 1 : 6 20cm



第98図 C区26・27・28号配石



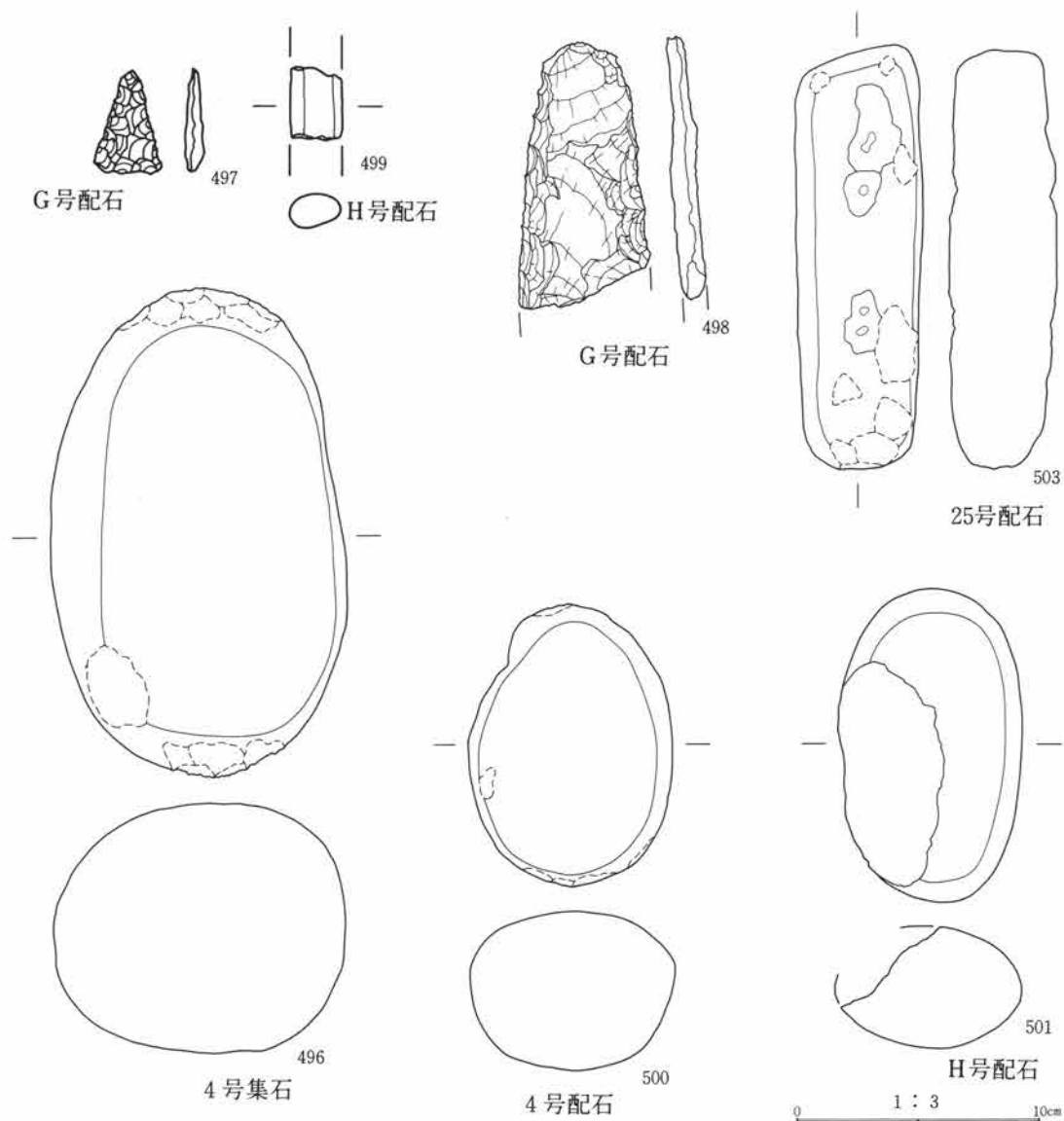
第99図 C区29号配石

ている。469は分銅形打製石斧で表面に自然面を残し、荒い剥離が加えられ作出されている。

22号配石の470は大型で三角形をした石鏃である。荒く剥離され基部がわずかに湾入している。471は無茎石鏃で側面から一方の脚部を欠損している。472は先端部のみの石鏃の破片である。518・519は河原石をそのまま用いた大型の石皿で518は浅く凹み、表面の2箇所孔がある。519は表面の中央部のみが磨られている。520は球形をなす丸石である。

23号配石の473は定形の石皿の破片で「U」字状に磨られ、周縁部には孔が密集し裏面にも孔が存在する。474は大型の磨石で側面に打痕が見られる。524は球形をなす丸石である。

24号配石の475は円形で偏平な自然石を用いた飾垂具である。26号配石の476も円形で偏平な自然石を用いた飾垂具である。477はやや楕円形をした丸石である。478は円形の磨石で打痕が著しい。479は楕円形の磨石で側面の一部に打痕が見られる。480は楕円形の凹石で表裏に2孔ずつの孔があり、側面には打痕が見られる。481は楕円形で小型の磨石で側面の一部に打痕が見られる。482は断面が四角形で不整形な丸石で表裏面が良く磨れている。

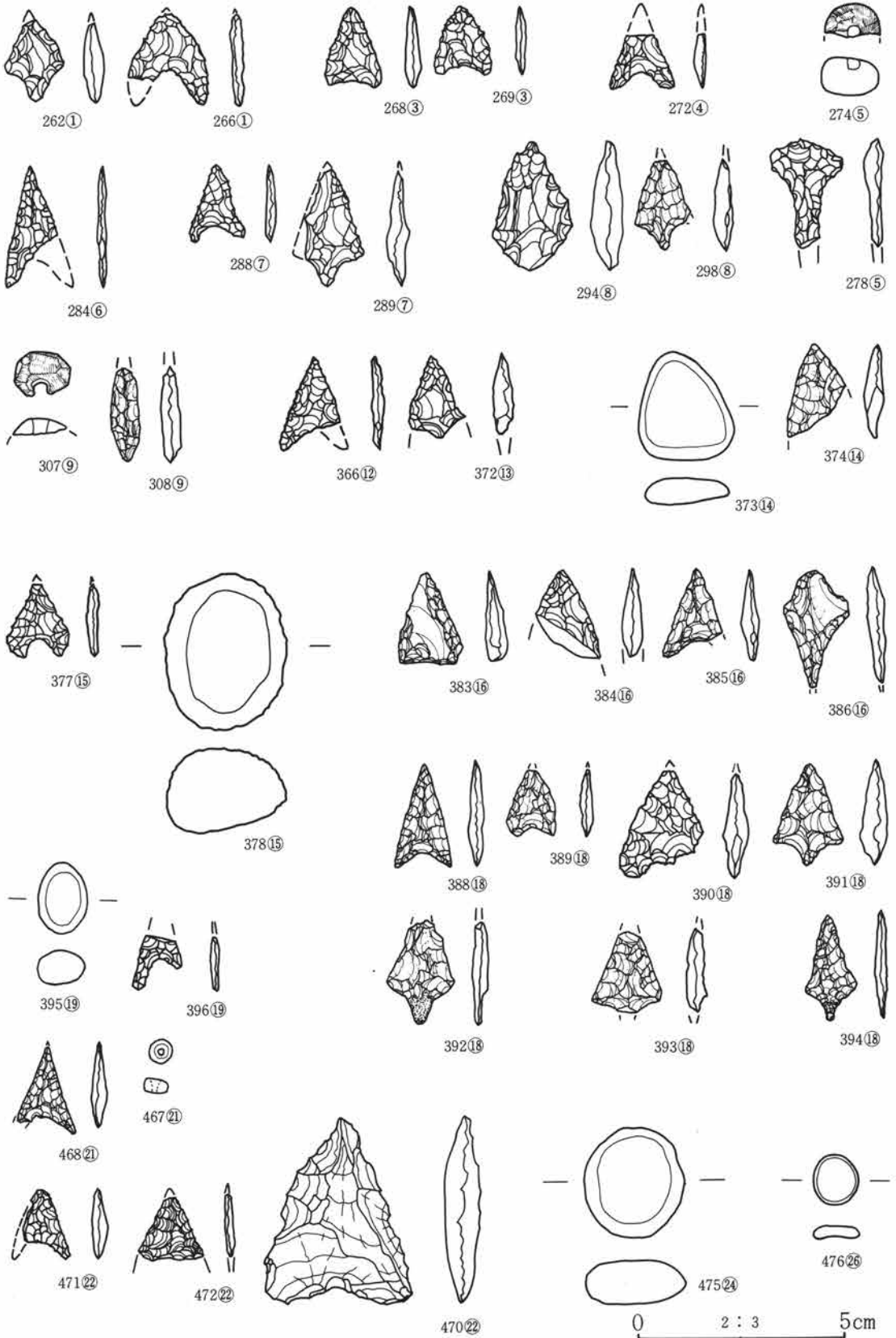


第100図 C区4・25・G・H号配石、4号集石

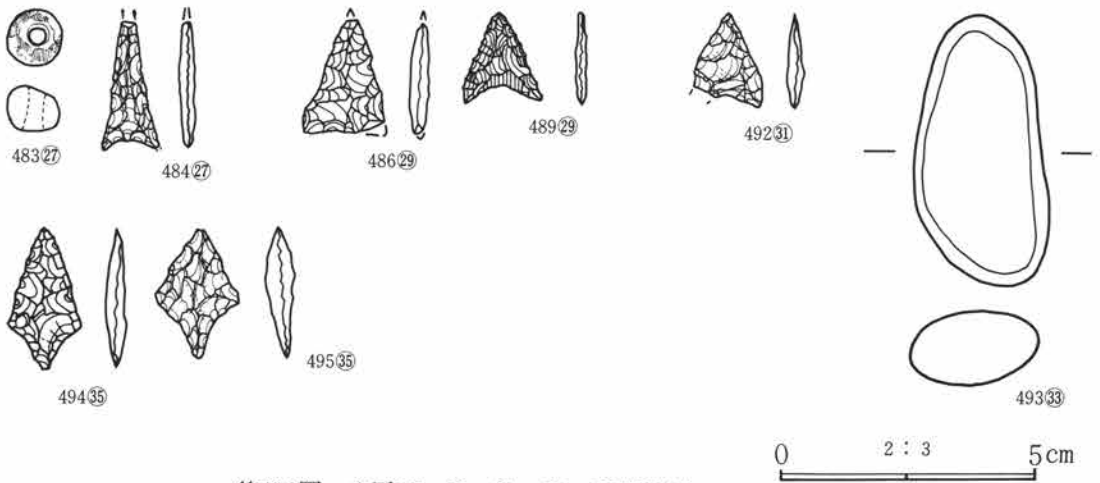
27号配石の483は大型の白玉で片面より穿孔されている。484は先端部を欠損するが細身の石鏃で基部が浅く湾入している。521は河原石をそのまま用いた大型の石皿で中央部が浅く凹んでいる。

28号配石の485は縦形の石匙で柄部は自然面を残し両側より浅い抉り込みが加えられている。刃部は薄くわずかに押圧剥離されている。522は楕円形をなす丸石で側面を一部欠損する。

29号配石の486・487は石鏃で486は三角形をなし粗雑な作りである。487は無茎石鏃である。488は楕円形の磨石で表面の剥落が著しい。489は凹石で表面に2つの孔があり側面には打痕が多く見られる。490は凹石の破片で表裏面に孔が1個ずつあり磨られている。491は定形の石皿の破片で表面は浅い「U」字状をなし、裏面には孔が散在する。523は多孔石で一部側面を欠損する。表面中央に孔が集中し、周縁部にも2孔ある。



第101図 C区 1・3～9・12～16・18・19・21・22・24・26号配石



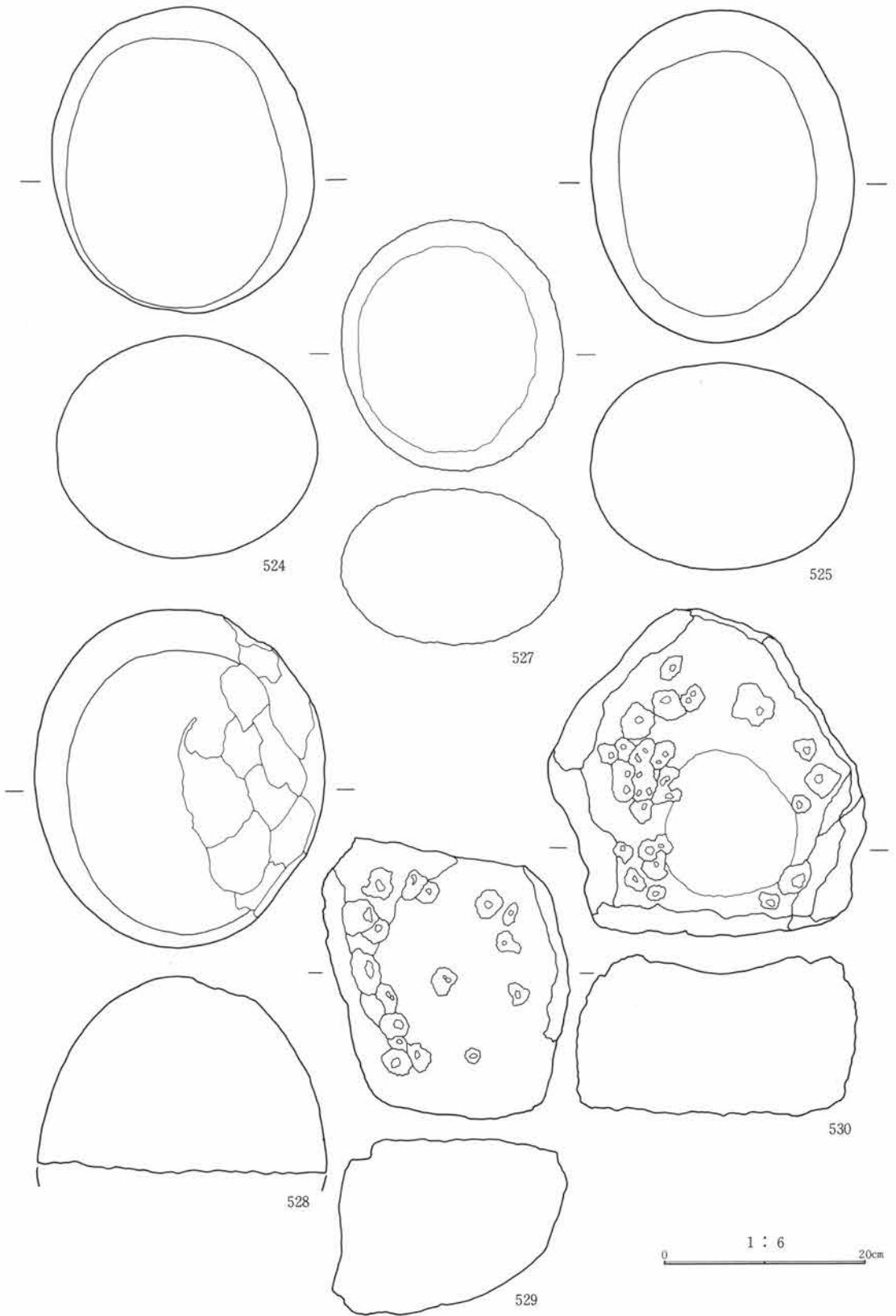
第102図 C区27・29・31・33・35号配石

31号配石の492は無茎の石鏃で先端部は鋭利である。33号配石の493は楕円形をなす小型の磨石である。35号配石の494・495はともに有茎石鏃でやや粗雑な作りである。

G号配石の497は三角形でやや粗雑な石鏃である。498は短冊形打製石斧で薄身の作りで刃部を欠損している。

H号配石の499は棒状の小型の石製品で両端が欠損している。500は楕円形の磨石で側面に打痕が見られる。501も磨石で側面を欠損している。502（図版78）は自然石で多孔石状に自然の孔があいている。

503は25号配石より出土した凹石で、隅丸長方形をなし表裏に2孔1対の孔が2対ずつあり両端部には打痕が見られる。496は4号集石より出土した大型の磨石で、両端部に打痕が見られる。525は1a号配石の南で調査区の南西隅に1石だけで出土した楕円形をなす丸石である。



第103号 C区2a : 23号配石

⑥ グリット出土の石器 (第104～108図、図版84-2～86-2)

532～535は短冊形の打製石斧で532は身が厚く側面に自然面を残し刃部は平刃で使用により割れている。また、一方の側面を欠損する。533は薄身で長方形をなし、表面に大きく自然面を残す。534・535は細身で刃部が丸くともに基部を欠損している。

536～541は撓形の打製石斧で536・537・540は大型で刃部は丸く広がっており、中央で屈曲し基部は直線的となる。538・539は中型の石斧で形状は大型と同様である。541も中型であるが基部が尖り刃部に向って直線的に開き刃部が丸い。表面に自然面を大きく残している。

542・543は小型の打製石斧で基部は定角で小さく、刃部に向って直線的に開き刃部も直線的な平刃である。

544～546は分銅形の打製石斧で両側中央に挟り込みがあり、両端部の刃部はともに丸刃である。544は表面に自然面を列し、545は刃部を欠損し他方の刃部には使用による磨耗痕が見られる。また、545と546の挟り込み部には着柄による擦痕が見られる。547も分銅形であるが、挟り込みが上端に寄っており、上端は自然面を残し刃を設けていない。刃部は一方の端部だけで丸刃である。

548～565は剥片石器である。548～552は1側面に直線的な刃部を持つ石器で剥片取りや形状は不定である。549・551は楔状をなし、552は縦形である。553・555は1側面に丸刃を持つ石器で、557は打撃点側を刃部とし、555はやや台形をなす。554・558・559は刃部が尖る石器で554は平行する側面も刃部とし先端部を三角形に尖らせている。558・559は「V」字状に刃部を設けている。556・557は「L」字状に2側面に直線的な刃部を持つ石器である。他の剥片石器と同様に剥片取りや形状は不定である。560～563は「コ」の字状に3側面に刃部を持つ石器である。560・561は長方形をなすが剥片取りは不定である。562は刃部がやや丸い。564・565は多角形をなしそれぞれの辺を刃部としている。566・567は不整形をなしラウンド・スクレイパー状の石器で周縁部全てに刃部を設けている。

568は礫器で表面に大きく自然面を残し、やや荒い剥離で直線的な刃部を設けている。569は敲石で長楕円形をなす硬質な礫を用いており裏面や両側面は自然面のままで、表面は両端部より剥離され、一方の端部は複数の打撃が加えられている。570は石核で上下両面に平坦面を設け、上下両方向より主に打撃が加えられているが側面方向からの打撃痕もある。

571～581は石鏃である。571～574は三角形をなし571は基部がわずかに突出し、574は基部がわずかに湾入している。575～577はハート形をなす無茎石鏃でそれぞれ一方の脚端部を欠損する。578～581は有茎石鏃であるが基部を欠損している。578～580の先端部は三角形をなし、581は逆刺が作出されている。

582～586はドリルである。582・583は棒状をなしわずかに抓み部が作出されている。584は「T」字状に抓み部が付けられ、先端部は欠損している。585は抓み部を欠損する。586は三角形をなし先端部が短く、剥片をわずかに加工してドリルとしている。

587・588は形状の不定な石鏃で上下両側面の相対する位置を小さく打ち欠き挟り込みを入れている。

589・590は小型磨製石斧で589は定角状の丁寧な作りである。590は基部がやや尖っている。591は

軟質な石材を用いた磨製石斧で短冊状の形態をなし磨ってはいるが打製の痕跡を残している。中央部に斜めに着柄による擦痕がある。

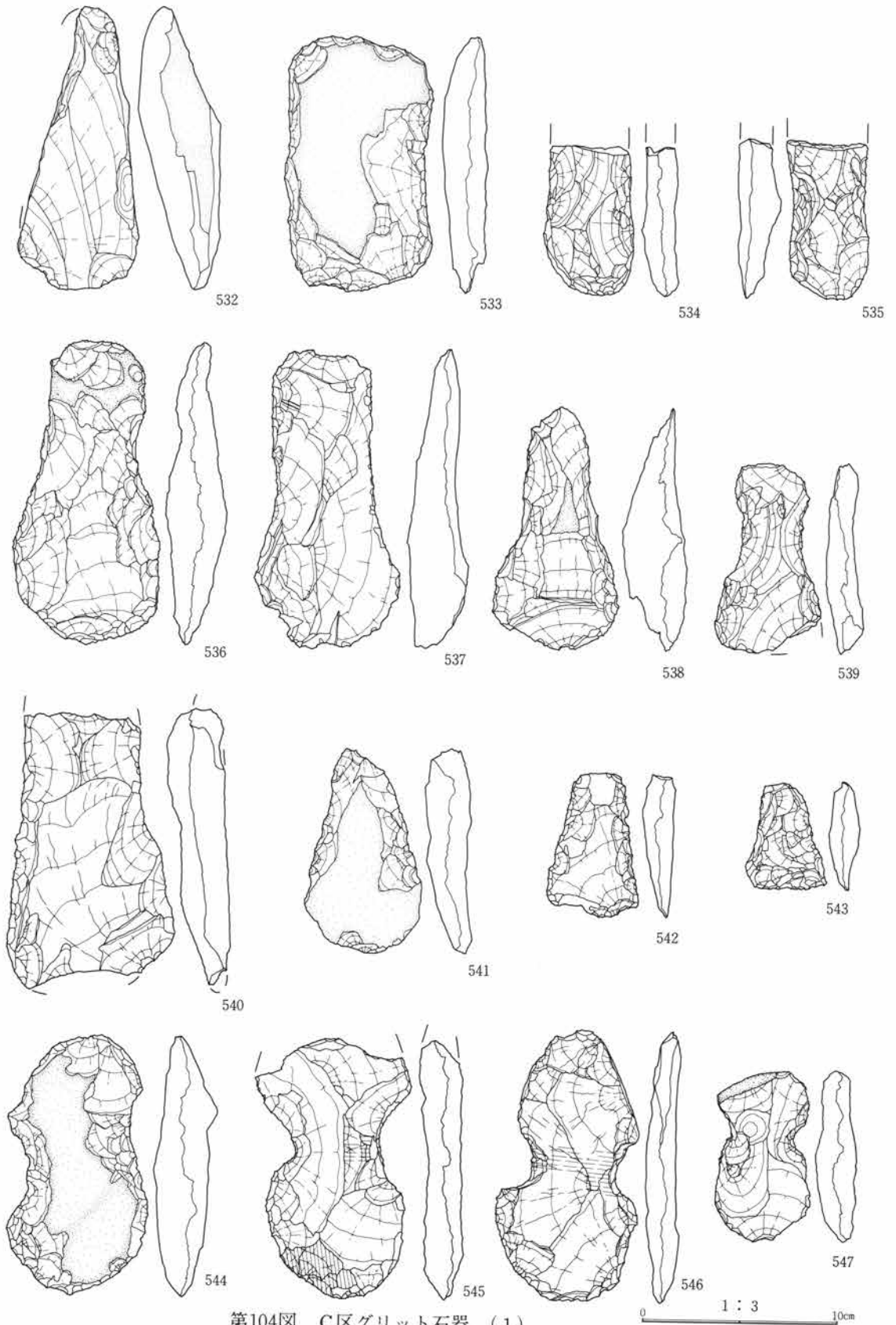
592は砥石で表裏面に擦痕が見られるが、縄文時代に属するかは不明である。593は球形をなす磨石で全面が良く磨れ、側面の一部に打痕が見られる。

549～596は石棒の先端部の破片である。594はさらに半分に割れており先端部を丸く作出している。595もさらに半分に割れており先端部は具現的に表現されている。596も半分に割れ全面が丁寧に磨られており、端部を刻み目を入れることにより表現している。

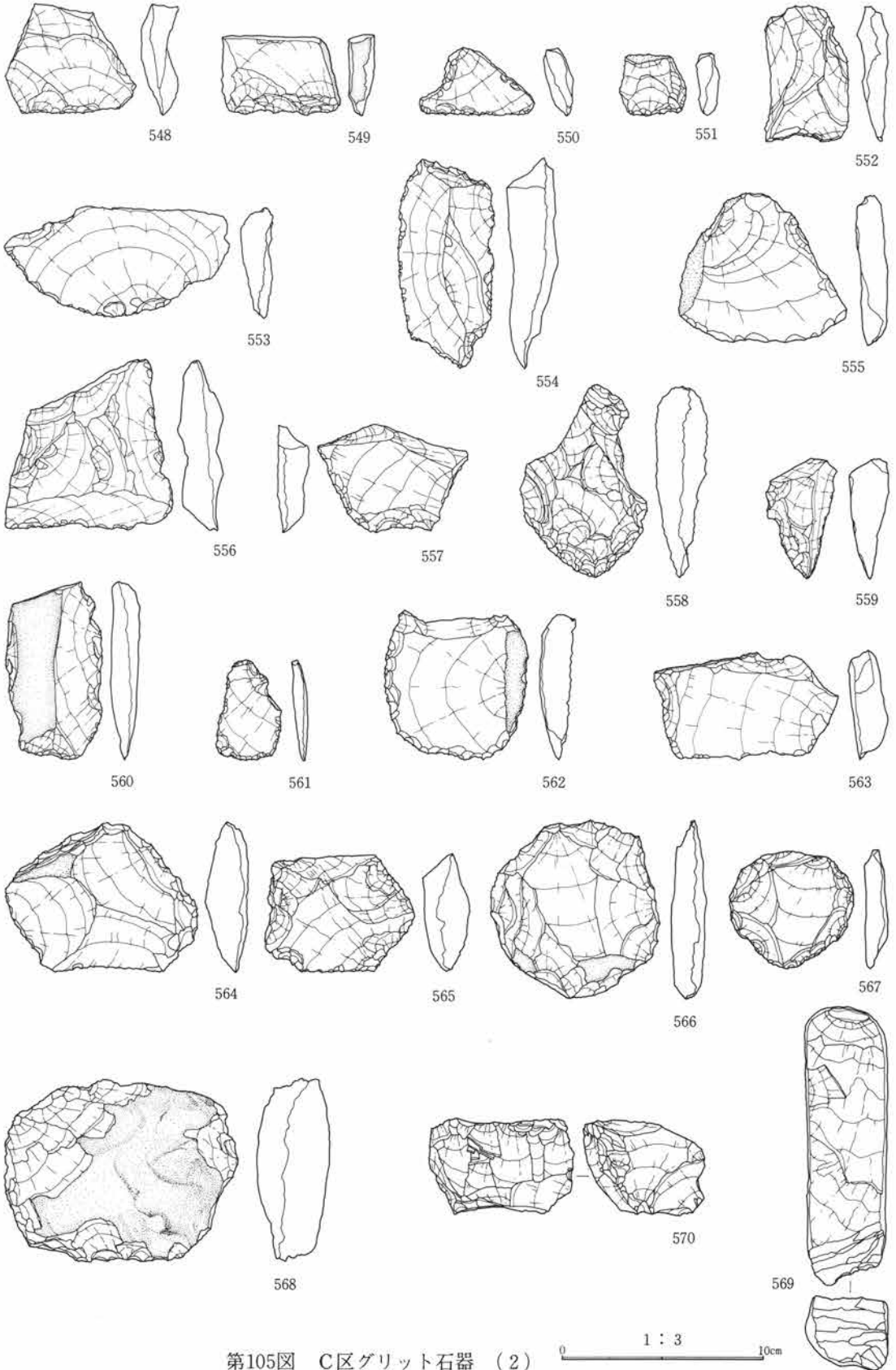
597～600は偏平で楕円形をなす自然石で黒色や褐色を呈し表面が磨かれたような状態で飾垂具と考えられる。

601～611は磨石である。601～604は円形・楕円形をなす偏平なタイプで大小があり、601は側面に打痕が見られ、603は硬質な石材で擦痕が多数見られる。606～609は円形・楕円形をなす厚みのあるタイプで大小があり、607は側面に打痕が見られる。610・611は長楕円形をなしともに良く磨れている。605は硬質な石材で打製石斧の破片を利用したと考えられる。全面が非常に良く磨れているが剝離面の痕跡をわずかに残している。

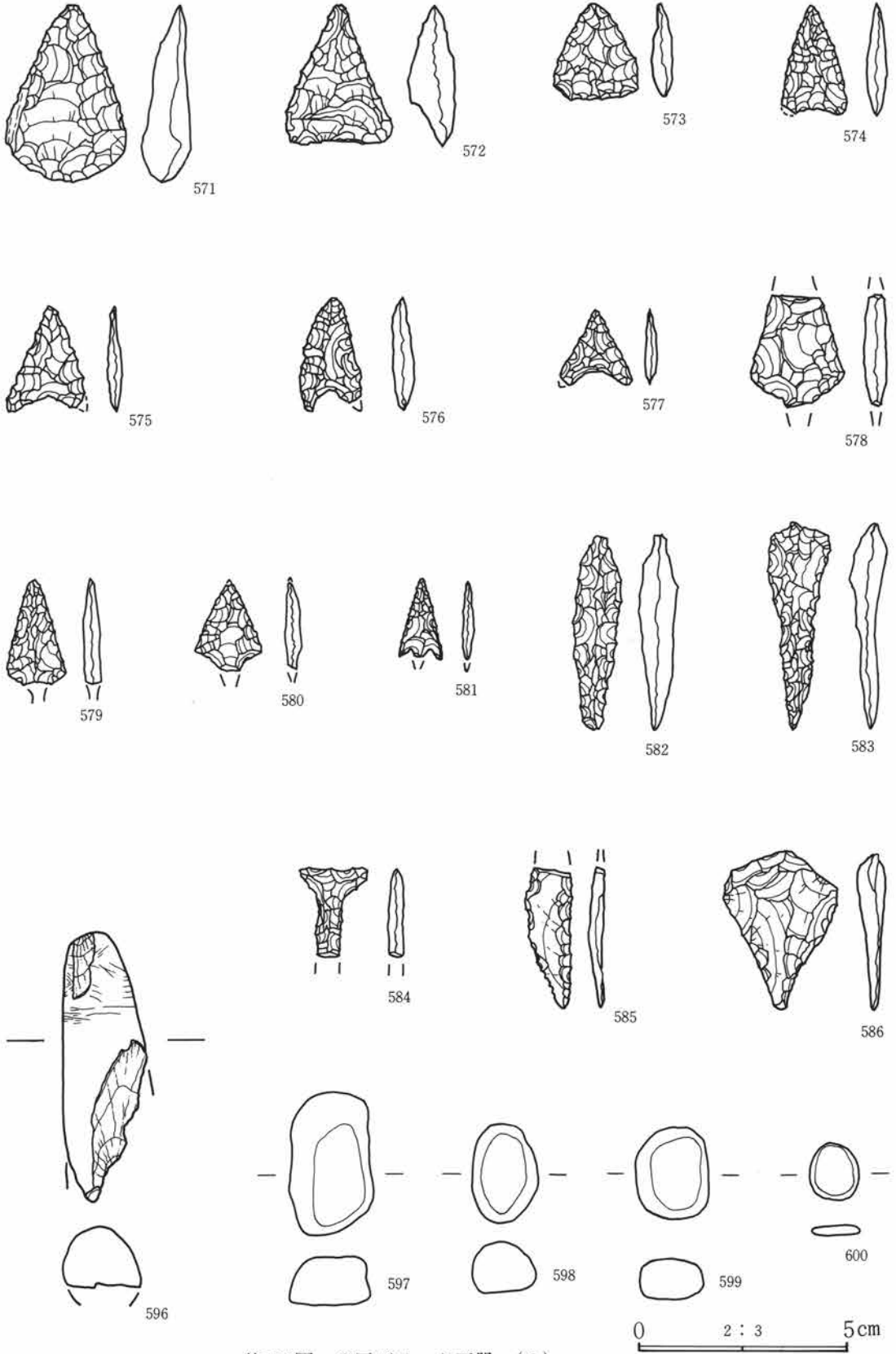
612～615は凹石である。612・613は偏平で円形をなし表裏中央に2孔1対の孔がある。614・615は偏平で長楕円形をなし同じく表裏に2孔1対の孔がある。614の一方の端部は打撃により著しく割れている。616は定形の石皿の破片で裏面に孔が散在する。



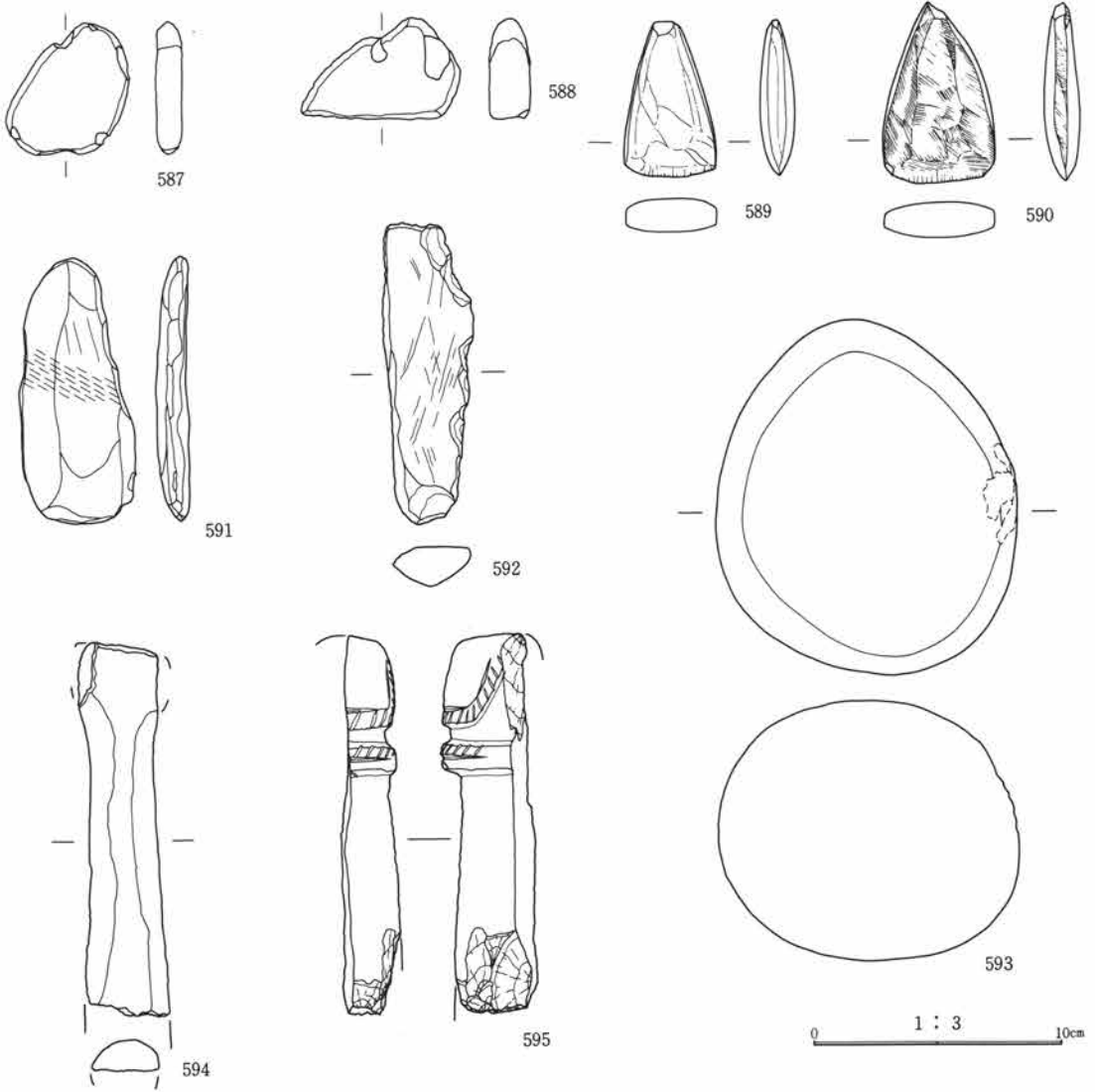
第104図 C区グリット石器 (1)



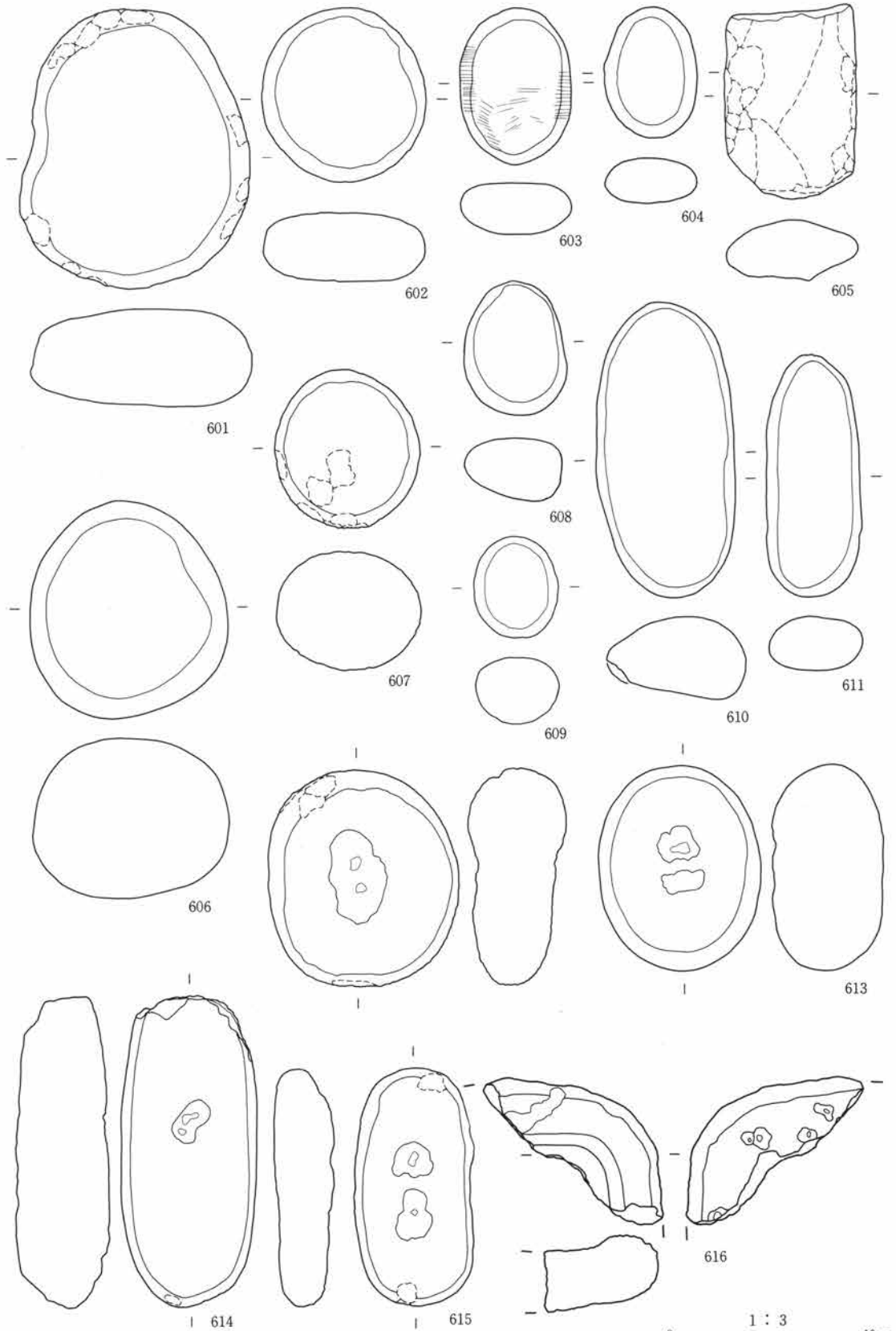
第105図 C区グリット石器 (2)



第106図 C区グリット石器 (3)



第107図 C区フリット石器 (4)



第108図 C区グリット石器 (5)

第7表 深沢遺跡C区石器観察表

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
262	石鏃(有茎形)	C区1a号配石	先端部欠損	2.0	1.5	0.5	1.2	黒色頁岩
263	凹石	◇ 1a号配石	完形	11.4	7.1	5.3	725.7	◇
264	砥石	◇ 1a号配石S-2	◇	11.1	10.1	2.0	358.4	細粒安山岩
265	打製石斧(挽形)	◇ 1b号配石	先端部欠損	16.9	11.0	3.3	581.2	黒色頁岩
266	石鏃(ハート形)	◇ 1b号配石	尾部欠損	2.3	2.0	0.4	1.1	黒色安山岩
267	凹石	◇ 2a号配石S-2	完形	14.9	13.9	5.1	148.0	石英閃緑岩
268	石鏃(ハート形)	◇ 3号配石	◇	2.0	1.4	0.4	0.8	黒色安山岩
269	◇ (◇◇)	◇ ◇	◇	1.7	1.4	0.3	0.4	珪質頁岩
270	石皿	◇ ◇	◇	26.5	18.5	5.5	5500.0	石英閃緑岩
271	砥石	◇ ◇ 平石下部	破片	8.7	5.7	1.7	109.2	砂岩
272	石鏃(ハート形)	◇ 4号配石	先端部欠損	1.3	1.6	0.3	0.4	チャート
273	多孔石	◇ ◇ S-1	完形	21.9	15.7	9.6	342.0	砂岩
274	白玉	◇ 5号配石	片残	0.9	1.4	0.9	1.6	珪質変質岩
275	剥片石器	◇ 5a号配石		9.3	11.0	3.2	229.0	黒色頁岩
276	◇	◇ 5号配石		6.6	5.7	0.9	34.9	◇
277	◇	◇ 5a号配石		4.5	1.7	1.4	13.9	流紋岩質凝灰岩
278	ドリル	◇ ◇	先端部欠損	2.7	1.8	0.6	1.7	珪質頁岩
279	磨石	◇ ◇	完形	11.7	10.4	6.9	128.0	石英閃緑岩
280	◇	◇ 5号配石	◇	12.7	8.6	5.3	84.0	◇
281	◇	◇ 5a号配石	◇	17.0	15.9	7.0	304.0	◇
282	◇	◇ 5b号配石	◇	15.2	13.4	8.7	260.0	◇
283	◇	◇ ◇	◇	20.5	15.0	11.0	506.0	◇
284	石鏃(ハート形)	◇ 6b号配石	尾部片欠損	3.0	1.2	0.3	0.7	黒色頁岩
285	磨石	◇ ◇ S-1	完形	20.7	11.4	10.0	360.0	石英閃緑岩
286	石皿	◇ ◇	◇	31.6	15.3	7.1	653.0	◇
287	多孔石	◇ ◇	片残	16.3	20.3	13.0	511.0	◇
288	石鏃(ハート形)	◇ 7号配石	完形	1.9	1.4	0.3	0.4	流紋岩質凝灰岩

第IV章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
289	◇ (有茎形)	C区7号配石	側面先端欠	2.9	1.5	0.6	1.6	黒色頁岩
290	摩製石斧 (大形)	◇ ◇	先端部欠損	7.8	5.5	2.4	179.8	変質玄武岩
291	剥片石器	◇ ◇		5.2	6.0	1.9	44.3	黒色頁岩
292	◇	◇ ◇		6.9	7.3	1.6	82.6	◇
293	磨石	◇ ◇	完形	14.6	10.1	4.4	960.0	溶結凝灰岩 (大峰・三峰)
294	石鏃 (有茎形)	◇ 8号配石	◇	3.1	1.9	0.8	4.3	黒色岩
295	打製石斧 (挽形)	◇ 8号配石内	基部欠損	9.5	7.7	2.8	230.2	◇
296	凹石	◇ ◇	完形	13.6	10.0	6.2	1220.0	石英閃緑岩
297	磨石	◇ ◇	◇	7.0	6.7	5.2	350.4	◇
298	石鏃 (有茎形)	◇ ◇	先端尾部欠	2.3	1.4	0.5	1.1	黒色安山岩
299	自然石	◇ ◇		18.0	16.7	10.2	3400.0	玉ずい質石英
300	◇	◇ ◇		21.2	16.5	10.6	4700.0	石英質岩
301	◇	◇ ◇		18.0	15.0	9.6	2700.0	◇
302	◇	◇ 8号配石		13.2	10.5	8.7	1340.0	◇
303	◇	◇ ◇		13.9	12.0	9.2	1120.0	◇
304	◇	◇ ◇		12.0	9.2	7.9	822.1	珪質変質岩
305	◇	◇ ◇		6.4	5.7	4.5	201.1	玉ずい質石英
306	◇	◇ ◇		21.0	20.5	9.0	3990.0	石英質岩
307	白玉	◇ 9号配石	殒残	1.1	1.4	0.4	0.8	緑色珪質岩
308	ドリル	◇ ◇	つまみ部欠	2.3	0.7	0.5	0.9	黒色頁岩
309	剥片石器	◇ ◇		3.7	3.3	1.0	12.5	◇
310	磨石	◇ ◇ S-1	完形	12.1	7.2	3.9	485.6	石英斑岩
311	石皿 (多孔石)	◇ ◇	側面欠損	21.7	22.5	10.4	6620.0	石英閃緑岩
312	石製品 (飾垂具)	◇ 10号配石	完形	1.6	1.2	1.1	2.6	珪質変質岩
313	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.0	1.6	0.7	1.4	
314	◇ (◇)	◇ ◇	◇	3.9	3.0	0.6	11.4	珪質変質岩
315	石鏃 (不明)	◇ ◇	尾部欠損	2.5	1.5	0.3	0.9	黒色頁岩
136	◇ (ハート形)	◇ ◇	先端尾部欠	1.6	1.2	0.2	0.4	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
317	◇ (◇)	C区10号配石	先端部欠損	1.3	1.1	0.3	0.4	黒曜石
318	◇ (有茎形)	◇ ◇	◇	3.0	1.8	0.5	1.6	黒色頁岩
319	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.8	1.4	0.4	1.2	◇
320	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.3	1.1	0.5	0.9	黒色安山岩
321	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	1.9	1.2	0.4	0.8	◇
322	◇ (◇)	◇ ◇	先端部欠損	2.2	1.2	0.5	0.9	黒色頁岩
323	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.8	1.3	0.5	0.8	◇
324	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.3	1.0	0.3	0.3	◇
325	◇ (不明)	◇ ◇	尾部欠損	2.8	2.6	0.6	3.6	◇
326	ドリル	◇ ◇	完形	2.7	1.2	0.4	1.1	黒色安山岩
327	剥片石器	◇ ◇		4.8	6.1	3.2	95.2	黒色頁岩
328	◇	◇ ◇		4.5	6.2	0.9	23.2	◇
329	石製品 (飾垂具)	◇ 11号配石	完形	3.4	2.2	1.0	6.6	変質凝灰岩
330	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.3	1.2	0.5	0.9	珪質変質岩
331	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.2	1.0	0.3	0.5	デイサイト
332	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.4	0.7	0.7	0.9	チャート
333	石鏃 (ハート形)	◇ ◇	◇	1.9	1.4	0.3	0.5	黒曜石
334	◇ (三角形)	◇ ◇	先端部欠損	1.4	1.3	0.3	0.5	黒色頁岩
335	◇ (ハート形)	◇ ◇	完形	1.3	1.1	0.2	0.3	黒曜石
336	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.3	1.5	0.4	0.8	珪質頁岩
337	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.2	1.3	0.3	0.6	◇
338	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.7	1.1	0.5	0.6	黒色安山岩
339	◇ (有茎形)	◇ ◇	◇	3.4	1.9	0.6	2.5	黒色頁岩
340	◇ (◇)	◇ ◇	◇	3.0	1.4	0.5	1.6	◇
341	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	2.5	1.6	0.5	1.5	◇
342	◇ (◇)	◇ ◇	完形	2.5	1.5	0.5	1.3	◇
343	◇ (◇)	◇ ◇	尾部欠損	2.6	1.6	0.5	1.6	珪質頁岩
344	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	2.5	1.3	0.3	0.8	チャート

第Ⅳ章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
345	石鏃 (有茎形)	C区11号配石	尾部欠損	2.3	1.4	0.4	1.2	黒色頁岩
346	◇ (◇)	◇ ◇	完形	1.9	1.3	0.5	0.8	黒曜石
347	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	1.9	1.2	0.4	0.7	チャート
348	◇ (◇)	◇ ◇	先端部欠損	2.6	1.7	0.6	1.3	珪質頁岩
349	◇ (◇)	◇ ◇	完形	2.1	1.2	0.4	1.0	黒色頁岩
350	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.9	1.2	0.4	0.8	◇
351	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.0	1.2	0.4	0.7	珪質頁岩
352	◇ (◇)	◇ ◇	◇	1.7	1.2	0.4	0.9	黒色頁岩
353	ドリル	◇ ◇	先端部欠損	3.7	1.7	0.5	1.1	◇
354	石匙	◇ ◇	完形	4.9	5.2	0.7	12.7	珪質頁岩
355	打製石斧 (短冊形)	◇ ◇	基部欠損	10.6	5.3	2.2	155.3	黒色頁岩
356	◇ (撓形)	◇ ◇	先端部欠損	9.3	6.9	3.2	195.4	◇
357	凹石	◇ ◇	完形	11.2	7.3	3.3	424.7	粗粒安山岩
358	石皿	◇ ◇	片残	19.5	22.3	6.1	168.0	◇
359	◇	◇ ◇	片残	24.9	23.2	11.4	7050.0	溶結凝灰岩 (大峰・三峰)
360	磨石	◇ ◇	完形	5.0	4.2	2.6	75.3	花崗岩
361	◇	◇ ◇	◇	4.4	3.1	1.8	30.1	砂岩
362	石皿	◇ ◇	端部欠損	22.3	19.6	7.1	5010.0	石英閃緑岩
363	剥片石器	◇ ◇		7.6	8.4	2.2	197.1	黒色頁岩
364	◇	◇ ◇		5.7	9.3	2.5	113.7	◇
365	打製石斧 (分銅形)	◇ 12号配石	完形	16.4	7.0	4.0	450.4	◇
366	石鏃 (ハート形)	◇ ◇	尾部欠損	2.3	3.4	0.3	0.7	珪質頁岩
367	剥片石器	◇ ◇		9.2	6.0	1.6	58.8	黒色頁岩
368	磨石	◇ ◇	完形	8.9	7.2	6.1	565.9	花崗岩
369	剥片石器	◇ 13号配石		4.8	6.0	1.7	54.2	黒色頁岩
370	礫器	◇ ◇		7.9	8.8	4.1	303.6	◇
371	桂化木	◇ 13a号配石		20.3	12.5	9.8	3230.0	桂化木
372	石鏃 (不明)	◇ 13a b号配石	尾部欠損	2.0	1.4	0.5	0.9	珪質凝灰岩

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
373	石製品（飾垂具）	◇ 14 a 号配石	足形	2.7	2.4	0.6	6.8	チャート
374	石鏃（不明）	◇ ◇	尾部欠損	2.3	1.4	0.5	1.2	黒色頁岩
375	剥片石器	◇ 14号配石		6.5	4.6	1.3	32.5	◇
376	磨石	◇ ◇	完形	22.7	9.5	8.3	2760.0	ひん岩
377	石鏃（ハート形）	◇ 15号配石	先端部欠損	1.3	1.5	0.3	0.5	チャート
378	磨石	◇ ◇	完形	3.8	3.0	2.1	36.4	石英閃緑岩
379	石英	◇ ◇		6.5	6.0	2.8	122.5	石英
380	打製石斧（撓形）	◇ 16号配石	完形	12.3	7.0	3.1	194.9	黒色頁岩
381	剥片石器	◇ ◇		7.0	9.4	3.3	208.3	◇
382	◇	◇ ◇		4.5	5.4	0.7	18.4	◇
383	石鏃（不明）	◇ ◇	尾部欠損	2.2	1.6	0.5	1.7	珪質頁岩
384	◇（◇）	◇ ◇	先端部欠損	2.6	1.7	0.6	1.3	黒色頁岩
385	◇（ハート形）	◇ ◇	◇	2.2	1.4	0.5	0.9	◇
386	ドリル	◇ ◇	◇	2.9	1.6	0.4	1.7	◇
387	剥片石器	◇ 17号配石		7.1	7.4	1.6	66.8	◇
388	石鏃（ハート形）	◇ 18号配石	完形	2.6	1.4	0.4	0.8	珪質頁岩
389	◇（◇）	◇ ◇	先端部欠損	1.7	1.2	0.3	0.6	黒色安山岩
390	◇（◇）	◇ ◇	先端尾部欠	2.6	2.0	0.6	1.9	◇
391	◇（有茎形）	◇ ◇	完形	2.1	1.7	0.7	1.9	珪質頁岩
392	◇（◇）	◇ ◇	先端部欠損	2.5	1.7	0.4	1.3	黒色頁岩
393	◇（◇）	◇ ◇	先端尾部欠	2.0	1.7	0.5	1.5	◇
394	◇（◇）	◇ ◇	完形	2.6	1.2	0.3	0.7	珪質頁岩
395	石製品（飾垂具）	◇ 19号配石	◇	1.8	1.3	0.8	2.6	変質安山岩
396	石鏃（ハート形）	◇ ◇	先端尾部欠	1.3	1.9	0.2	0.2	黒色頁岩
397	打製石斧（短冊形）	◇ ◇	完形	9.0	3.4	1.8	59.1	◇
398	丸石	◇ ◇	先端部欠損	17.7	15.2	15.3	5920.0	石英閃緑岩
399	白玉	◇ 20号配石	完形	0.9	0.9	0.6	0.6	玉ずい？
400	◇	◇ ◇	◇	0.8	0.8	0.6	0.6	ひすい

第IV章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
401	白玉	C区20号配石	一部欠損	0.8	0.6	0.4	0.2	変質蛇紋岩
402	◇	◇ ◇	完形	0.8	0.8	0.6	0.3	ひすい
403	◇	◇ ◇	◇	0.7	0.7	0.4	0.3	◇
404	◇	◇ ◇	◇	0.7	0.6	0.3	0.2	玉ずい?
405	◇	◇ ◇	◇	0.7	0.6	0.4	0.3	ひすい
406	◇	◇ ◇	◇	0.7	0.7	0.4	0.2	◇
407	◇	◇ ◇	◇	0.7	0.7	0.4	0.2	◇
408	◇	◇ ◇	一部欠損	0.7	0.7	0.4	0.2	◇
409	◇	◇ ◇	完形	0.6	0.6	0.4	0.1	◇
410	◇	◇ ◇	◇	0.6	0.6	0.4	0.3	変質蛇紋岩
411	◇	◇ ◇	◇	0.6	0.6	0.4	0.2	ひすい
412	◇	◇ ◇	1/2残	1.1	1.0	0.9	0.7	滑石
413	◇	◇ ◇	一部欠損	0.7	0.6	0.4	0.3	ひすい
414	◇	◇ ◇	1/2残	0.6	0.3	0.4	0.1	緑色珪質岩
415	◇	◇ ◇	◇	0.8	0.5	0.3	0.2	◇
416	◇	◇ ◇	◇	1.1	1.0	0.5	0.5	◇
417	磨石	◇ ◇	◇	4.3	2.7	1.3	31.9	チャート
418	石製品 (飾垂具)	◇ ◇	◇	2.0	1.7	0.8	4.4	◇
419	◇ (◇)	◇ ◇	◇	0.6	1.1	0.5	0.8	◇
420	◇ (◇)	◇ ◇	◇ (赤色 塗彩)	3.1	1.0	0.6	2.8	不明
421	剥片石器	◇ ◇ (石中)		5.0	8.1	1.6	70.3	黒色頁岩
422	◇	◇ ◇		4.0	7.7	1.3	28.0	◇
423	石鏃 (不明)	◇ ◇	尾部欠損	2.7	2.5	0.6	3.4	黒色安山岩
424	◇ (ハート形)	◇ ◇	◇	3.0	1.8	0.5	1.4	珪質頁岩
425	◇ (◇)	◇ ◇	尾部欠損	2.7	1.7	0.4	0.8	◇
426	◇ (◇)	◇ ◇	先端尾部欠	2.3	1.6	0.4	1.1	黒色頁岩
427	◇ (◇)	◇ ◇	先端部欠損	1.7	1.8	0.3	0.7	◇
428	◇ (◇)	◇ ◇	尾部欠損	2.2	1.2	0.3	0.6	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
429	石鏃(不明)	C区20号配石	尾部欠損	1.7	1.0	0.3	0.4	黒曜石
430	◇(◇)	◇◇	先端尾部欠	2.0	1.5	0.3	0.4	珪質頁岩
431	◇(有茎形)	◇◇	完形	3.3	1.7	0.7	3.1	◇
432	◇(◇)	◇◇	尾部欠損	2.8	1.6	0.4	1.5	チャート
433	◇(◇)	◇◇	完形	2.9	1.4	0.6	1.7	黒色頁岩
434	◇(◇)	◇◇	先端部欠損	2.7	1.3	0.6	1.4	珪質頁岩
435	◇(◇)	◇◇	完形	2.6	1.4	0.5	1.2	◇
436	◇(◇)	◇◇	◇	2.7	1.5	0.6	1.7	黒色頁岩
437	◇(◇)	◇◇	◇	2.8	1.5	0.5	1.0	◇
438	◇(◇)	◇◇	先端部欠損	2.5	1.5	0.7	1.7	◇
439	◇(◇)	◇◇	◇	2.4	1.7	0.5	1.0	珪質凝灰岩
440	◇(◇)	◇◇	尾部欠損	2.2	1.3	0.4	0.9	黒色安山岩
441	◇(◇)	◇◇	先端部欠損	2.2	1.3	0.5	1.0	黒色頁岩
442	◇(◇)	◇◇	尾部欠損	2.0	1.3	0.3	0.5	珪質頁岩
443	◇(◇)	◇◇	完形	2.1	1.9	0.3	0.9	チャート
444	◇(◇)	◇◇	◇	2.2	1.4	0.5	1.3	黒色頁岩
445	◇(◇)	◇◇	◇	2.2	1.5	0.5	0.9	◇
446	◇(◇)	◇◇	先端部欠損	1.4	1.2	0.5	0.8	黒色安山岩
447	◇(◇)	◇◇	尾部欠損	2.3	1.3	0.4	1.1	チャート
448	◇(◇)	◇◇	◇	2.0	1.2	0.5	0.9	黒色安山岩
449	◇(◇)	◇◇	完形	2.4	1.5	0.5	1.2	黒色頁岩
450	◇(◇)	◇◇	◇	2.3	1.5	0.4	1.2	◇
451	◇(◇)	◇◇	先端部欠損	1.6	1.1	0.4	0.5	珪質凝灰岩
452	ドリル	◇◇	完形	2.4	2.1	0.6	1.8	黒色頁岩
453	◇	◇◇	基部欠損	3.0	1.4	0.6	2.0	◇
454	◇	◇◇	先端部のみ	2.4	0.6	0.4	0.5	珪質頁岩
455	磨石	◇◇	完形	14.5	11.6	5.4	1460.0	石英閃緑岩
456	◇	◇◇	◇	10.9	10.0	4.9	832.4	◇

第IV章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
457	磨石	C区20号配石	完形	5.4	4.2	2.2	76.2	石英閃緑岩
458	〃	〃 〃	〃	4.3	4.0	3.5	72.4	流紋岩質凝灰岩
459	石皿	〃 〃	〃	19.8	20.4	6.0	4040.0	石英閃緑岩
460	〃	〃 〃	破片	20.5	21.8	6.5	3230.0	溶結凝灰岩(大峰・三峰)
461	石棒	〃 〃	基部欠損	9.7	5.3	5.5	368.9	粗粒安山岩
462	〃	〃 〃	〃	15.8	5.5	5.0	658.4	点紋緑色片岩
463	〃	〃 〃	〃	33.9	11.1	7.5	5500.0	〃
464	〃	〃 〃	〃	34.4	10.2	8.7	5300.0	〃
465	〃	〃 〃	〃	28.6	8.6	6.8	2720.0	〃
466	〃	〃 〃	完形	34.5	7.1	5.6	2660.0	黒色頁岩
467	白玉	〃 21号配石	〃	0.6	0.6	0.3	0.2	ひすい
468	石鏃(ハート形)	〃 〃	尾部欠損	2.1	1.5	0.4	0.5	珪質凝灰岩
469	打製石斧(分銅形)	〃 〃	完形	15.8	10.9	3.0	540.1	黒色頁岩
470	石鏃(ハート形)	〃 22号配石	〃	4.6	3.7	0.9	12.5	〃
471	〃(〃)	〃 〃	尾部欠損	7.0	1.1	0.4	0.4	〃
472	〃(三角形)	〃 〃	先端尾部欠	1.5	1.6	0.3	0.5	黒曜石
473	石皿(多孔石)	〃 23号配石	片残	27.3	20.2	10.5	5560.0	デイサイト質凝灰岩
474	磨石	〃 〃	完形	14.1	12.4	9.7	2610.0	閃緑岩
475	石製品(飾垂具)	〃 24号配石	〃	2.7	2.5	1.1	11.2	珪質変質岩
476	〃(〃)	〃 26号配石	〃	1.2	1.1	0.3	0.7	チャート
477	磨石	〃 〃	〃	18.8	15.0	11.4	4060.0	粗粒安山岩
478	〃	〃 〃	〃	11.2	10.0	9.0	1320.0	石英閃緑岩
479	〃	〃 〃	〃	11.1	9.4	5.7	906.5	〃
480	凹石	〃 〃	〃	10.0	7.9	4.8	568.2	〃
481	磨石	〃 〃	〃	8.1	5.6	5.2	309.9	溶結凝灰岩(大峰・三峰)
482	砥石	〃 〃	〃	17.2	5.3	3.7	582.9	粗粒安山岩
483	白玉	〃 27号配石	〃	1.1	1.0	0.9	1.6	緑色珪質岩
484	石鏃(ハート形)	〃 〃	先端部欠損	2.5	1.2	0.3	0.7	珪質凝灰岩

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
485	石匙	◇ 28号配石	完形	9.3	5.0	1.6	50.9	黒色頁岩
486	石鎌(三角形)	◇ 29号配石	先端尾部欠	2.2	1.6	0.4	1.1	◇
487	◇ (ハート形)	◇ ◇	完形	1.8	1.6	0.3	0.5	黒曜石
488	磨石	◇ ◇	◇	14.0	9.6	7.1	1460.0	花崗岩
489	凹石	◇ ◇	◇	9.5	7.8	6.0	6646.0	◇
490	石皿(多孔石)	◇ ◇	以残	18.3	18.7	7.5	3090.0	溶結凝灰岩(大峰・三峰)
491	凹石	◇ ◇	破片	10.5	10.5	4.1	517.2	砂岩
492	石鎌(ハート形)	◇ 31号配石	尾部欠損	1.9	1.4	0.4	0.6	珪質頁岩
493	磨石	◇ 33号配石	完形	5.4	2.8	1.5	32.1	黒色頁岩
494	石鎌(有茎形)	◇ 35号配石	◇	2.8	1.5	0.4	1.0	◇
495	◇ (◇)	◇ ◇	◇	2.6	1.7	0.6	1.6	◇
496	磨石	◇ 4号集石S-2	◇	19.9	12.2	10.2	3710.0	石英閃緑岩
497	石鎌(三角形)	◇ G号配石	◇	2.1	1.9	0.4	0.7	黒色頁岩
498	打製石斧(短冊形)	◇ ◇	刃部欠損	10.7	5.3	1.1	76.2	◇
499	石製品(飾垂具)	◇ 51号配石S-77	両端部欠損	1.4	1.1	0.7	1.7	不明
500	磨石	◇ ◇	完形	10.5	8.4	6.4	844.4	砂岩
501	◇	◇ ◇	◇	12.7	7.4	4.5	655.0	閃緑岩
502	自然石(多孔石状)	◇ ◇		13.0	10.0	3.0	476.5	珪質変質岩
503	凹石	C区ウ集石(25配石)	完形	17.4	5.2	4.5	563.5	輝緑岩
504	丸石	◇ 2a号配石	◇	27.8	23.8	21.4	19.7kg	石英閃緑岩
505	石皿	◇ 6b号配付	◇	41.4	31.0	11.2	23.7kg	◇
506	◇	◇ ◇	◇	38.6	18.8	9.0	11.7kg	◇
507	◇	◇ 7号配石	◇	44.6	30.4	15.2	25.5kg	石英斑岩
508	丸石	◇ ◇	◇	30.2	21.8	14.2	14.3kg	石英閃緑岩
509	石皿	◇ 8号配石	◇	41.7	26.6	12.8	19.5kg	粗粒安山岩
510	◇	◇ 11号配石	◇	40.3	37.1	12.5	28.5kg	◇
511	◇	◇ ◇	◇	41.6	37.0	8.8	21.8kg	◇
512	多孔石	◇ ◇	◇	21.5	20.8	14.0	7800.0	溶結凝灰岩(大峰・三峰)

第Ⅳ章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
513	丸石	◇ 15号配石	側面一部欠	29.4	23.2	19.2	19.0kg	石英閃緑岩
514	石皿	◇ 20号配石	完形	37.4	36.0	9.9	22.0kg	◇
515	◇	◇ ◇	側面欠損	35.4	29.0	10.0	18.3kg	◇
516	◇	◇ ◇	◇	32.2	24.6	11.2	12.6kg	粗粒安山岩
517	◇	◇ ◇	◇	32.6	24.6	9.0	8600.0	石英閃緑岩
518	◇	◇ 22号配石	完形	60.9	48.0	14.4	49.8kg	◇
519	◇	◇ ◇	◇	31.0	22.8	15.6	12.0kg	◇
520	丸石	◇ ◇	◇	29.9	28.5	24.2	28.2kg	◇
521	石皿	◇ 27号配石	◇	34.8	34.6	11.8	20.7kg	◇
522	丸石	◇ 28号配石	一部欠損	25.7	20.8	16.0	12.5kg	◇
523	多孔石	◇ 29号配石	◇	26.4	18.6	13.4	8600.0	砂岩
524	丸石	◇ 2 a 号配石	完形	30.0	26.0	21.8	23.6kg	石英閃緑岩
525	◇	◇ ◇	◇	32.6	26.0	20.4	26.0kg	◇
526	◇	◇ ◇	◇	25.0	22.6	19.2	14.7kg	◇
527	◇	◇ ◇	◇	24.6	22.0	15.4	12.1kg	◇
528	◇	◇ ◇	壊残	33.2	28.6	19.2	25.3kg	◇
529	多孔石	◇ ◇	完形	27.7	24.6	17.4	16.3kg	溶結凝灰岩(大峰・三峰)
530	◇	◇ ◇	◇	32.0	30.6	15.0	25.0kg	◇ (◇ ・ ◇)
531	石棒	◇ 26号配石上	両端部欠損	3.5	3.2	1.7	19.9	変質玄武岩
532	打製石斧(短冊形)	◇ ZOP17-Ⅲ	側面欠損	14.3	6.2	4.2	322.8	黒色頁岩
533	◇ (◇)	◇ 表土	完形	13.0	7.6	2.3	296.7	◇
534	◇ (◇)	◇ グリット	基部欠損	7.5	4.6	1.8	85.2	◇
535	◇ (◇)	◇ ◇	壊残刃部欠	9.0	4.1	2.2	78.1	◇
536	◇ (撓形)	◇ ◇	完形	15.4	7.5	3.1	310.7	◇
537	◇ (◇)	◇ ◇	◇	15.2	7.4	3.1	276.0	◇
538	◇ (◇)	◇ ◇	◇	12.3	6.5	3.5	202.2	◇
539	◇ (◇)	◇ 表土	刃部一部欠	9.6	5.4	1.9	76.9	◇
540	◇ (◇)	◇ グリット	基部欠損	14.0	8.5	3.0	307.1	◇

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
541	◇ (撓形)	C区グリット	完形	10.3	6.0	2.3	134.3	黒色頁岩
542	◇ (◇)	◇ ◇	◇	7.3	4.1	1.7	53.2	◇
543	◇ (◇)	◇ ◇	◇	5.4	4.1	1.6	30.4	◇
544	打製石斧 (分銅形)	◇ ◇ 表土	◇	13.1	7.2	3.2	280.4	◇
545	◇ (◇)	◇ ◇	基部欠損	13.2	7.9	2.0	238.2	◇
546	◇ (◇)	◇ ◇	完形	13.2	7.2	1.7	153.3	◇
547	◇ (◇)	◇ 表土	◇	8.6	4.8	2.1	84.8	珪質変質岩
548	剥片石器	◇ ◇		5.4	6.1	1.4	54.2	黒色頁岩
549	◇	◇ ◇		4.0	5.8	1.3	43.8	◇
550	◇	◇ グリット		3.3	5.7	1.5	23.2	珪質頁岩
551	◇	◇ ◇ ◇		3.0	3.3	1.2	12.9	黒色頁岩
552	◇	◇ ◇		6.6	4.1	1.5	43.6	◇
553	◇	◇ Z N16-Ⅲ		5.4	11.1	1.6	84.0	◇
554	◇	◇ グリット		10.2	4.7	2.5	95.6	◇
555	◇	◇ 表土		7.3	8.2	1.3	92.8	◇
556	◇	◇ グリット		8.0	8.3	2.2	118.0	◇
557	剥片石器	◇ J11-Ⅳ		5.3	7.4	1.5	53.1	◇
558	◇	◇ Q17-Ⅲ		9.4	6.4	2.5	101.7	◇
559	◇	◇ グリット		5.9	3.5	1.9	19.9	珪質頁岩
560	◇	◇ 表土		8.2	4.7	1.4	59.1	黒色頁岩
561	◇	◇ グリット		4.9	3.2	0.8	8.8	珪質頁岩
562	◇	◇ 表土		7.3	7.1	1.8	108.8	黒色頁岩
563	◇	◇ O12-14Ⅲ		5.3	9.0	1.9	82.7	◇
564	◇	◇ 表土		8.4	9.3	2.1	127.2	◇
565	◇	◇ グリット		5.8	7.3	2.3	105.5	◇
566	ラウンドスクレイパー	◇ 表土		8.7	8.5	1.8	163.1	◇
567	◇	◇ グリット		5.7	6.1	1.1	48.6	◇
568	礫器	◇ 表土		8.9	11.5	3.6	469.0	◇

第IV章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
569	敲石	C区表土		13.5	4.1	3.7	294.8	細粒安山岩
570	石核	＊ Z O17～18Ⅲ		4.6	7.1	6.0	230.1	黒色頁岩
571	石鏃 (有茎形)	＊ 表土	完形	4.3	3.0	1.2	13.3	＊
572	＊ (三角形)	＊ グリット	＊	3.3	2.6	1.2	7.9	黒色安山岩
573	＊ (＊)	＊ ＊	＊	2.4	2.1	0.5	2.2	黒色頁岩
574	＊ (＊)	＊ ＊	尾部一部欠	2.6	1.6	0.5	1.7	珪質頁岩
575	＊ (ハート形)	＊ ＊	＊	2.6	1.9	0.4	1.3	黒色安山岩
576	＊ (＊)	＊ 表土	＊	2.8	1.5	0.5	1.8	珪質頁岩
577	＊ (＊)	＊ ＊	＊	1.9	1.8	0.3	0.6	黒色頁岩
578	＊ (有茎形)	＊ グリット	先端尾部欠	2.8	2.4	0.5	3.7	黒色安山岩
579	＊ (＊)	＊ ＊	尾部欠損	2.5	1.5	0.4	1.2	珪質頁岩
580	＊ (＊)	＊ 表土	＊	2.1	1.7	0.4	1.2	黒色頁岩
581	＊ (＊)	＊ ＊	＊	1.9	1.1	0.3	0.5	珪質頁岩
582	ドリル	＊ ＊	完形	4.7	1.1	0.9	4.7	黒色頁岩
583	＊	＊ グリット	＊	5.0	1.5	0.8	4.0	珪質頁岩
584	＊	＊ ＊	先端部欠損	2.2	1.7	0.4	1.2	チャート
585	＊	＊ Z P16-Ⅱ	つまみ部欠	3.0	1.1	0.4	1.6	黒色頁岩
586	＊	＊ 表土	完形	3.8	2.8	0.7	5.0	＊
587	石錐	＊ ＊	＊	5.3	5.6	1.1	41.7	＊
588	＊	＊ Z L N-Ⅳ	＊	4.1	6.4	1.7	21.6	軽石
589	磨製石斧	＊ Z L14-Ⅲ	＊	6.3	3.7	1.4	52.4	変質蛇紋岩
590	＊	＊ Z M N13-15西 Ⅲ	＊	7.3	4.5	1.4	67.7	＊
591	＊	＊ 表土	＊	10.6	4.6	1.3	68.9	砂岩
592	砥石	＊ Z O15Ⅱ	＊	12.0	3.2	1.6	74.0	細粒安山岩
593	磨石	＊ グリット	＊	14.2	12.1	10.4	280.0	閃緑岩
594	石棒	＊ Z O12-14Ⅲ	基部欠損	15.0	2.8	1.3	105.3	緑色片岩
595	＊	＊ グリット	側面基部欠	15.1	3.5	2.8	161.6	頁岩
596	＊	＊ ＊	基部欠損	6.4	2.1	1.5	24.0	＊

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
597	石製品	C区グリット	完形	3.5	2.1	1.2	15.0	流紋岩
598	〃	〃 表土	〃	2.5	1.6	1.2	7.3	珪質変質岩
599	〃	〃 O16Ⅲ	〃	2.3	1.8	1.0	6.4	チャート
600	〃	〃 ZMV-12Ⅲ	〃	1.2	1.4	0.2	0.7	珪質頁岩
601	磨石	〃 グリット	〃	13.8	11.5	4.9	1208.6	石英閃緑岩
602	〃	〃 ZL13-Ⅲ	〃	8.6	8.2	3.4	359.6	〃
603	〃	〃 表土	〃	7.7	5.5	2.5	182.4	黒色頁岩
604	〃	〃 グリット	〃	6.5	4.6	2.2	95.4	砂岩
605	〃	〃 〃	〃	9.5	6.6	3.0	279.7	黒色頁岩
606	〃	〃 〃	〃	10.8	9.9	7.9	1275.1	粗粒安山岩
607	〃	〃 表土	〃	7.8	7.3	5.8	447.7	石英閃緑岩
608	〃	〃 〃	〃	6.7	5.2	3.1	152.0	砂岩
609	〃	〃 〃	〃	5.0	4.2	3.3	93.4	アブライト
610	〃	〃 グリット	〃	14.6	6.9	4.2	638.1	珪質変質岩
611	〃	〃 〃	〃	12.0	4.7	2.6	260.0	砂岩
612	凹石	〃 ZO17-Ⅲ	〃	10.8	9.5	4.9	735.3	石英閃緑岩
613	〃	〃 表土	〃	10.2	8.1	5.6	744.0	細粒安山岩
614	〃	〃 〃	〃	15.4	6.8	4.6	714.1	輝緑岩
615	〃	〃 〃	〃	11.8	6.0	3.0	345.1	石英閃緑岩
616	石皿	〃 グリット	破片	14.6	17.8	7.6	1602.0	溶結凝灰岩(大峰・三峰)
759	石鏃(三角形)	〃 20号配石	完形	2.7	1.8	0.3	1.7	珪質頁岩
760	〃(〃)	〃 〃	〃	2.5	2.1	0.6	3.4	黒色頁岩
761	〃(〃)	〃 〃	先端部欠損	2.1	1.5	0.6	2.1	〃
762	〃(〃)	〃 〃	完形	1.3	1.4	0.3	1.2	チャート
763	〃(〃)	〃 〃	先端部欠損	1.5	0.9	0.3	1.0	珪質頁岩
764	〃(不明)	〃 〃	先端尾部欠	1.1	1.1	0.2	0.9	流紋岩質凝灰岩
765	〃(有茎形)	〃 〃	先端部欠損	2.0	1.6	0.6	1.9	珪質頁岩
766	〃(〃)	〃 〃	尾部欠損	2.0	1.1	0.5	1.4	チャート?

第Ⅳ章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
767	石鎌（有茎形）	C区20号配石	先端尾部欠	2.0	1.2	0.4	1.5	チャート？
768	◇（◇）	◇ ◇	◇	2.0	1.4	0.4	1.6	黒色頁岩
769	◇（◇）	◇ ◇	◇	1.7	1.4	0.5	1.5	珪質頁岩
770	◇（◇）	◇ ◇	◇	1.5	1.1	0.5	1.5	珪質凝灰岩
771	◇（◇）	◇ ◇	先端部欠損	1.6	1.2	0.4	1.2	◇
772	◇（◇）	◇ ◇	完形	1.5	1.3	0.5	1.4	◇
773	◇（◇）	◇ ◇	先端尾部欠	1.4	1.4	0.4	1.1	珪質頁岩
774	◇（ハート形）	◇ ◇	先端部欠損	1.5	1.4	0.3	1.3	◇
775	石英結晶	◇ Z O 15—Ⅱ		2.5	0.9	0.6	2.4	石英（水晶）

4 D 区

① 概要 (第109図、図版87)

D区はC区と同一の東方へ緩やかに下るローム台地上にあり、北のE区との間には埋没谷が湾入している。範囲は東西25m、南北45mで、調査は重機により表土掘削し遺構の調査を行なった。また、B・C区のように土坑の覆土の水洗いは行なわなかった。

C・D区を載せる台地は上位段丘面の中位にあり、南のB区との間には約15mの浅い埋没谷が湾入し北のE区との間にも幅約30mの深い埋没谷が湾入している。D区は両埋没谷に挟まれたローム台地上にあり、標高は調査区西端で454.70m、東端で453.40mである。D区でも山石が多く露頭し、特に北半に多い。

D区では後期の土坑27基と配石土坑1基が確認され、調査区北端には溝状遺構があり後期初頭～中葉の多量の遺物が包含されていた。

27基の土坑はB区と同様の特徴を持ちC区の配石遺構を環状に囲むかのように分布し、大きく2群に分かれて集中している。また、土坑は楕円形を基調とするものと円形を基調とするものとに分かれ、楕円形から円形への変遷が各群内でたどれる。

配石土坑は上記の土坑群と離れ1基だけ北端寄りの溝状遺構の脇に位置し、ローム面より露頭する大きな山石の陰に作られている。

D区の土坑や溝状遺構・グリット等からの出土土器総量は19,981点で、内、中期は9,850点、後期は10,131点で数量的には後期がわずかに多い程度であるが中期の土器片は小破片が多く、D区の主体は遺構の分布状態からも後期の土器が主体を占める。

出土石器総量は4,665点でこの内、剥片が4,215点で90%を占める。製品としては打製石斧113点、磨製石斧1点、剥片石器123点、石鏃66点、石匙2点、ドリル16点、石皿7点、磨石55点、凹石11点、砥石4点、石錘5点、敲石5点、石核24点、多孔石3点、丸石1点、石製品11点、その他30点である。

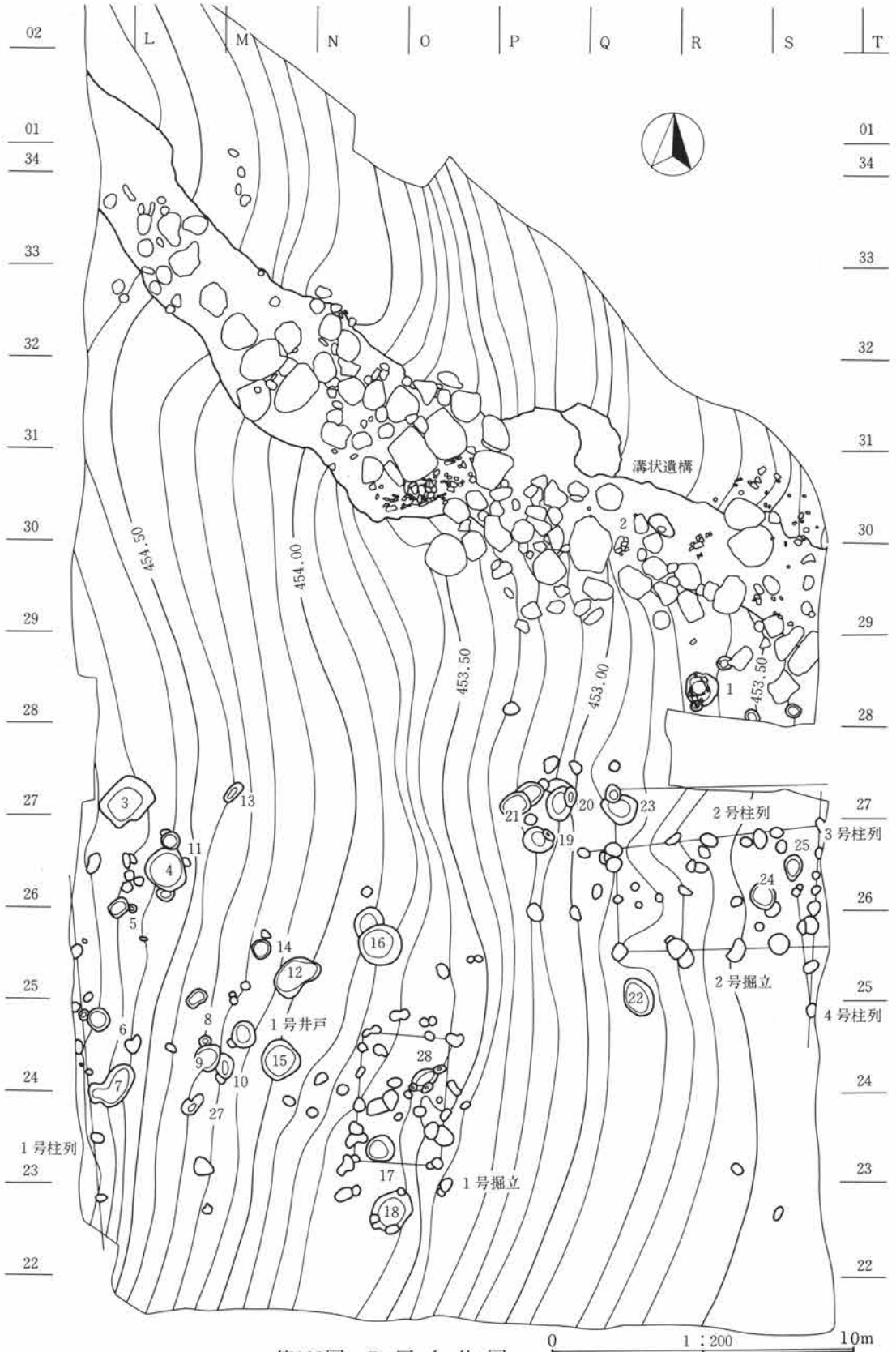
② 溝状遺構 (第110・111図、図版88～90)

調査区の北端で等高線に直交し、北西方向より流入し南東方向へ流出する流路が確認されたが後期初頭～中葉の遺物を多量に包含しており、縄文時代の流路として溝状遺構と称した。

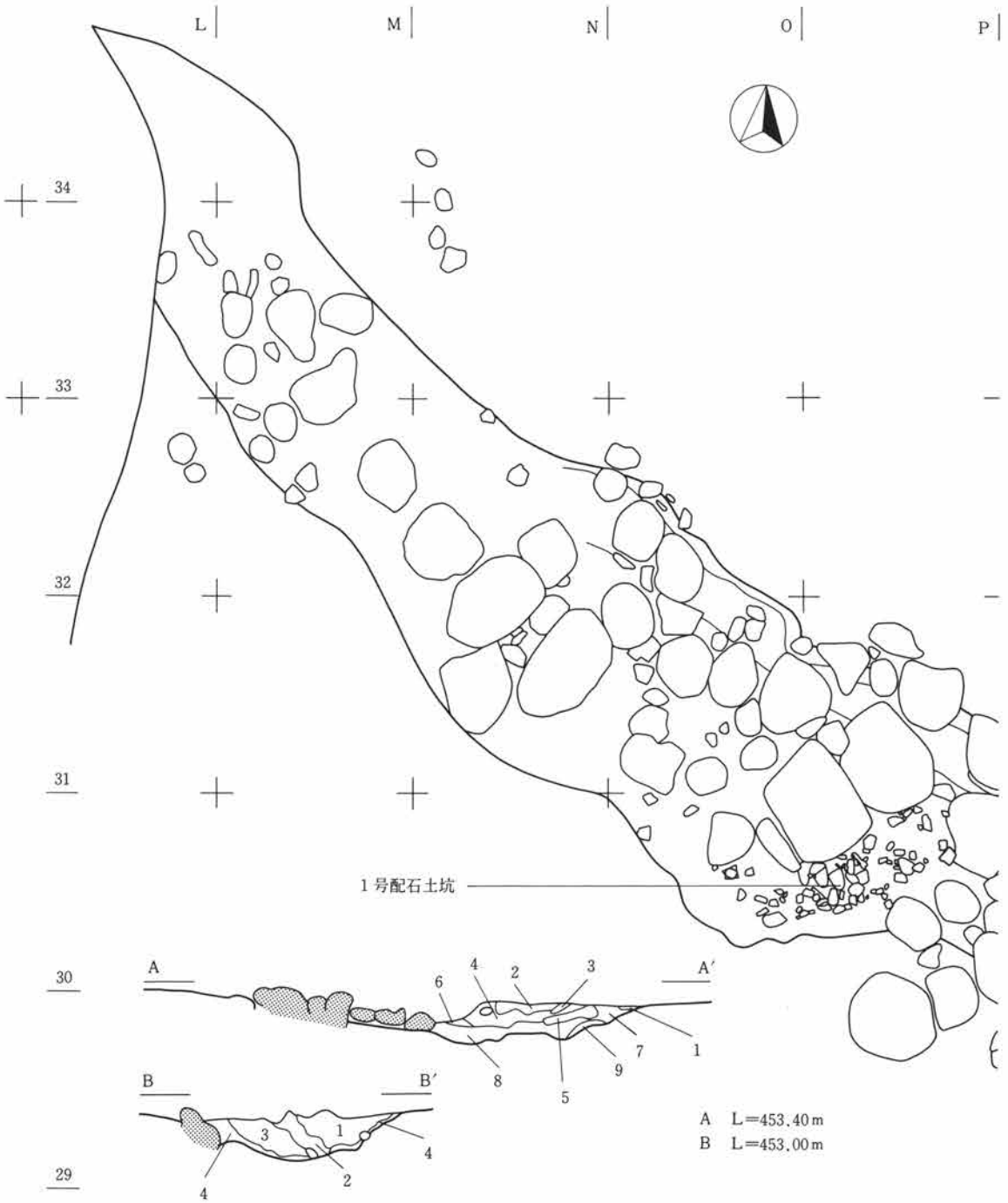
幅は2.70～5.00mで深さは0.60～1.20mで皿状の断面を呈している。流路の底面や周囲にはローム面より露頭する大小の山石が群在し、遺物は調査区東端寄りの下流部に集中していた。

土層の堆積は概ね3期に分かれ、最下層は粘性のある黒褐色土で遺物を多量に包含し、静かな流れが推定される。中間層は灰褐色砂質土で遺物をほとんど包含せず、多量の水が推定される。最上層は黒色土で少量の遺物を包含し、水流はあまり推定されず埋没過程の最終段階と考えられる。

溝状遺構からは堀之内I式から加曾利B2式の遺物が出土しており、配石遺構や土坑群よりも古い段階から遺物が廃棄され、配石遺構や土坑群と同時に廃棄行為を終了している。後期初頭から中葉の集落は上位段丘面の最上位面に予想され、溝状遺構は廃棄の場として当初より設定され配石遺構や土坑群の設定後も廃棄の場を継続しており、設定後は北限を画する意味も加ったと推定される。



第109図 D区全体図



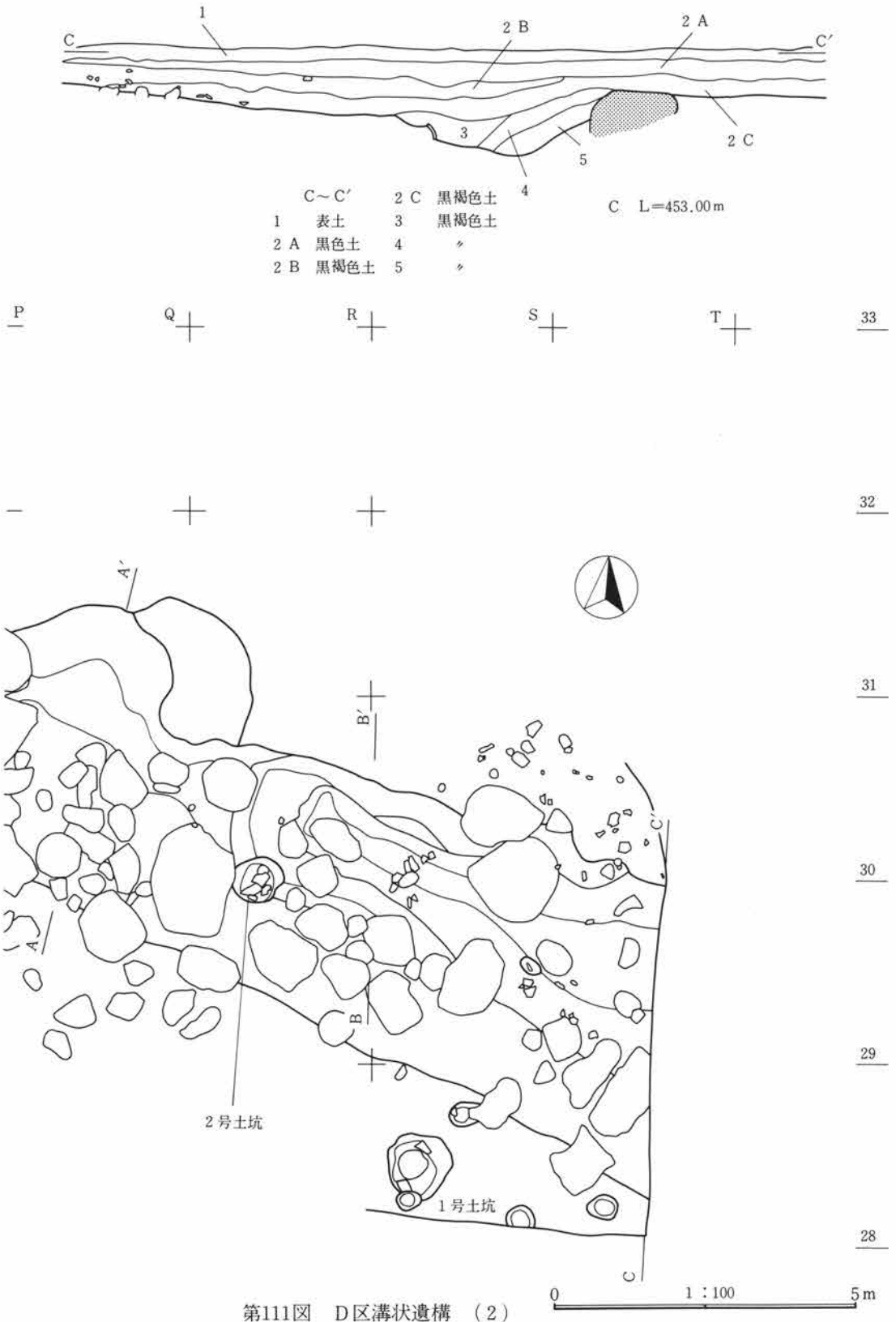
1号配石土坑

A L=453.40 m
B L=453.00 m

- | | | |
|----------|---------|----------|
| 1号溝上層説明 | 5 黄褐色土 | B~B' |
| A~A' | 6 〃 | 1 黒褐色砂質土 |
| 1 黒色土 | 7 黒褐色土 | 2 〃 〃 |
| 2 黄褐色砂質土 | 8 〃 | 3 黒色土 |
| 3 〃 〃 | 9 〃 | 4 黄褐色土 |
| 4 灰褐色土 | 10 黄褐色土 | 5 黄褐色土 |

第110図 D区溝状遺構 (1)

0 1:100 5m



第111图 D区溝状遺構 (2)

③ 土坑

土坑は、等高線に沿って27基が確認された。分布上は、標高453.50～454.50mの一群と溝状遺構寄りの標高452.50～453mにかかる一群とに大別される。形状は、楕円形を基調とするもの9基、円形を基調とするもの18基に分類される。両者は混在して時期差を示すものではないが、楕円形のものには等高線に対して斜交するものと平行に近いものがあり、B区土坑群と同様な傾向を示している。

遺物は、後期堀之内～加曽利B式にかけての土器片が多く、2号・22号の様に復元可能な個体があり、中でも16号の双孔注口土器、27号の土偶は注目される存在である。しかし、B区で見られた様な石鏃が多出する傾向はなく、19号が唯一の例である。

1号土坑 (第112・115図、図版92-1・97-1)

2 R 28グリットに位置する。形状は、108×100cmの南北に長い円形を呈する。底面は平坦で深さ16cmである。覆土は、黒色土と褐色土の上下2層からなり、土坑中央の黒褐色土の上面には直径約50cmの偏平な丸石があり、周囲に小さな板石が散在していた。遺物は、この丸石下に破片となったNo. 473の堀之内2式の深鉢口縁を始めとする80片の土器があり、個体を異にし復元するに至らなかった。中央の丸石は、出土状態から抱き石葬を示すものか。

2号土坑 (第112・132・133図、図版92-2)

土坑群の北を画する溝状遺構の東南寄り、2 Q 29～30グリットに位置し、土坑群の中では最も北にある。形状は、82×72cmの南北に長い円形を呈し、西辺は溝状遺構中の山石に接している。底面はほぼ平坦で深さ54cmを測るが、北端に径18cmのピットがある。底面上には南北方向で山石5個が並び、No. 474の堀之内2式の鉢が中央部から出土した。

3号土坑 (第112図)

2 K～L-27～28グリットに位置する。形状は、158×128cmの南北方向に長い隅丸長方形を呈し、断面鍋底状で深さ50cmである。覆土は、黒色土と褐色土の上下2層に分けられ、西側からの流入方向で自然堆積している。遺物は土器片1点が出土しただけである。

4号、11号土坑 (第112・115・133図、図版92-2・97-1・99-1)

2 L 26グリットに位置する。連結して重複するが、覆土から4号が新しいと判断される。

4号は、直径132cmの円形で深さ24cmである。覆土は炭化物を含む黒色土の単一層で、遺物を多く含んでいる。遺物は、No. 628の磨石と鉢の破片約30片が出土している。

11号は、60×52cmの南北に長い円形で深さ119cmである。覆土は炭化物を多く含む黒色土の単一層で4号に類似するが遺物を殆ど含まない。

5号土坑 (第112・115図、図版92-3・97-1)

2 K 25～26グリットに位置する。形状は、78×46cm、南北に長い不整楕円形で深さ58cmである。小型であるが、掘り方はしっかりしている。遺物は殆どなく、鉢の小破片が10片ある。

6号土坑 (第112・115図、図版93-1・97-1)

2 K 24グリットに位置する。形状は、直径68cmの円形で深さ40cmである。覆土は、黒色土と褐色土の上下2層で遺物は殆ど含まない。

7号土坑 (第112図、図版93-2)

2 K 23～24グリットに位置する。形状は、160×86の楕円形を呈し、隅にピットが重複する。断面は舟底状で最深部で42cmを測る。覆土は、黒色土と黄褐色土とが自然堆積する。遺物はない。

8号土坑 (第112図、図版93-3)

2 L 25～26グリットに位置する。形状は、103×46cmの隅丸長方形を呈し、底面は平坦で深さ85cmである。覆土は、底面近くにある30×20cmの板石を境にして上の黒色土と黄褐色土とが明瞭に分かれ、人為埋没したと思われる。遺物はない。

9号、10号土坑 (第112・115図、図版94-1・97-1)

2 L～M24グリットに連結して位置し、覆土から9号が新しいと判断される。

9号は80×78cmの円形を呈し、深さ23cmである。覆土は、黒褐色土の単一層で、中に大きな板石2点がある。遺物は土器片1片がある。

10号は、63×34cmの楕円形を呈し、深さ28cmである。西面には皿状の土坑が重複し、形状を歪めている。覆土は黒褐色土と黄褐色土とがレンズ状に堆積する。遺物は土器片1片がある。

12号土坑 (第113・115・133図、図版94-2・97-1・99-1)

2 M25グリットに位置する。形状は、156×104cmの東西方向に長い不整楕円形を呈する。底面は平坦で深さは58cmである。覆土は、底面全体を覆う黄褐色土上に黒褐色土がレンズ状に堆積する。確認面近くには、大小約10個の河原石が壁沿いにまばらではあるがめぐっている。遺物は、No. 629の剥片石器やNo. 487、488の鉢等の破片が約40片出土している。

13号土坑 (第113・115・133図、図版94-3・97-1・99-1)

2 M27グリットに位置する。形状は、72×40cmの隅丸長方形を呈し、断面舟底状で深さ36cmである。覆土は、焼土粒を含む黒褐色土と褐色土とが上下に堆積し、底面近くに特に焼土が多い。しかし、壁面の焼けた様子はなく、人為的な埋没によると考えられる。遺物は、No. 630の剥片石器、No. 489、490の鉢等の破片が出土している。

14号土坑 (第113・115図、図版97-1)

2 M25グリットに位置する。形状は、54×50cmの円形で、断面円筒形を呈し深さ87cmである。遺物は、No. 491の粗製深鉢の破片等の土器破片 8 片がある。

15号土坑 (第113図、図版95-1)

2 M24グリットに位置する。形状は、118×114cmの円形を呈し、底面は平坦で深さ20cmである。覆土は黒褐色土が見られ、中央の底面近くには手のひら大の板石 5 個が長軸方向に並んでいた。遺物は土器片 7 片がある。

16号土坑 (第113・115・116・133図、図版95-2・3・97-1・98・99-1)

2 N25グリットに位置する。形状は、148×122cmの円形を呈し、東辺側は岩塊状の山石 2 個に寄せつけている。北側に直径90cm前後の円形土坑が一段浅いレベルで重複しており、本土坑の方が古いと判断される。覆土は、黒色土、黒褐色土、褐色土の順にレンズ状に堆積し、中位の黒褐色土から主に遺物が出土した。No. 492の双孔注口土器は、北側の土坑確認面近くから注口部を下にして出土した。頭位が北とすると、この土器を胸に抱いたものと推定される。

16号からは、No. 493の加曽利 B 2 式の鉢や497の注口土器等が出土したが、器種、個体数が多く、石器は No. 631の分銅型石斧、633の用途不明の小さな丸石がある。

17号土坑 (第113・115・116・133図、図版96-1・97-1・99-1)

2 N23グリットに位置する。形状は、88×86cmの円形で断面円筒状で深さ60cmである。覆土は少量の炭化物を含む黒褐色土が上下に分かれる。遺物は、加曽利 B 2 式の No. 499~500の鉢胴部片等27片と分銅型石斧 1 点が出土している。

18号土坑 (第113・116図、図版96-1・97-1)

2 N22グリットで17号の南に位置する。形状は、156×108cmの南北方向に長い不整楕円形を呈し、断面皿状で深さ27cmである。覆土は黒色土下に少量の炭化物を含む褐色土が堆積する。遺物は、No. 501の加曽利 B 2 式の鉢口縁部の破片だけである。

19号土坑 (第113・132・133図、図版96-2・97-2・99-1)

2 P26グリットで20号、21号の南に位置する。形状は、92×78cmの東西方向に長い楕円形を呈し、底面は平坦で深さ35cmである。遺物は、No. 502の大型粗製深鉢 1 個体が中央部に口縁を北にして押しつぶされた様な状態で出土した。No. 635の三角石鏃 1 点が共伴する。

20号土坑 (第113・116図、図版97-1)

2 P27グリットで21号の東に位置する。形状は、116×78の南北方向に長い不整楕円形を呈し、底面は平坦で深さ32cmである。覆土は少量の炭化物と軽石を含む黒色土の単一層である。東辺にかかって褐色土で埋没する。80×56×70cmの南北に長い楕円形土坑がある。遺物は、加曽利 B 2 式の No.

503の深鉢胴部の破片22片がある。

21号土坑 (第114・116図、図版97-1・99-1)

2 P 27グリットで19号の北西に位置する。覆土を異にする2基が重複し、21号としたものが古い。形状は、74×70cmの南北方向に長い円形を呈し、断面円筒形を呈し深さ90cmである。覆土は、黒色土と黒褐色土がレンズ状に堆積する。東北に重複する土坑は、直径約70cmに復元され深さ60cmである。2基の境である北西の確認面では、壁にくいこんで大型の多孔石が据えられていた。遺物は、No. 504～506の堀之内2式、加曾利B式の鉢、深鉢の破片等33片がある。

22号土坑 (第114図)

2 Q 24～25グリットで単独に位置する。124×98cm、深さ13cmの不整楕円形を呈する。

23号土坑 (第114図)

2 Q 26～27グリットで20号の東に位置する。形状は、84×76cmの南北に長い円形を呈し、西南辺を山石に寄せつけている。断面は鍋底状で深さ32cmである。覆土は、黒色土と黒褐色土が堆積し、土器の細片が7片出土している。

24号土坑 (第114・116図、図版97-1)

2 R～S-26グリットで25号の西南に位置する。形状は、確認面で歪むものの直径88cmの円形である。北壁はオーバハンクするものの、断面はほぼ円筒状、底面は平坦で深さ71cmである。遺物は、No. 507、堀之内2式の深鉢口縁部破片等37片の土器が出土している。

25号土坑 (第114図、図版96-3)

2 S 26グリット24号の北東1 mに位置する。形状は、歪みを持つが72×70cmの円形で、深さ31cmである。

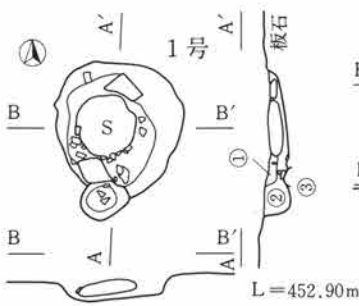
27号土坑 (第114図、図版96-3)

2 L 23グリットで9号、10号土坑の南に位置する。形状は、70×42cmの楕円形で、規模と掘り方の点で5号、8号土坑と類似する。底面は平坦、壁も直に近い立ち上がりで、しっかりした掘り方をしている。深さは62cmである。遺物は、北壁の立ち上がりから、四肢を欠損し胴部だけのNo. 508の土偶1点が出土している。

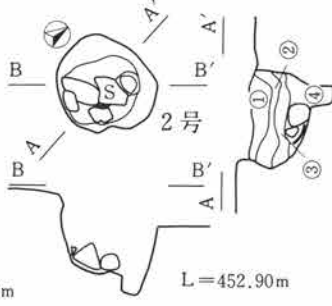
28号土坑 (第114図)

2 O 24グリットで17号の北東3 mに位置する。壁際3箇所の小ピットが重複するが、94×46cmの南北方向に長い楕円形を呈する。底面は平坦で、深さ8cmしか残存しないが、地形勾配を考慮すると本来は8号、27号の類例とできる。遺物は、加曾利B 2式等の鉢、深鉢の破片15片が出土している。

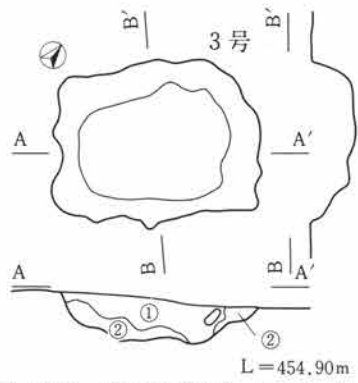
3. 縄文時代の遺構と遺物



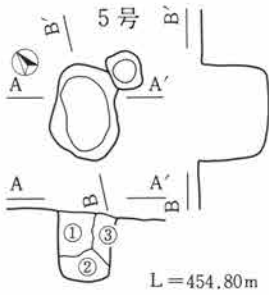
- ① 黒色土 粘性あり、少量の炭化粒と山石の破片を含む。
- ② 黒褐色土 粘性あり、炭化粒と山石の破片を含む。
- ③ 茶褐色土 ローム



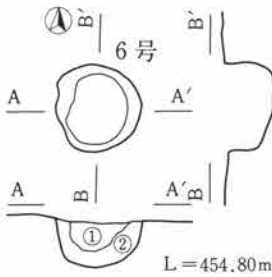
- ① 黒色土 粒性あり、少量の炭化粒と山石の破片を含む。
- ② 黒褐色土 粒性あり、少量の砂質土と山石の破片を含む。
- ③ 黒褐色砂質土 弱い粘性、砂質土と山石の破片を多量に含む。
- ④ 褐色土 粘性が少しあり、砂質土と山石の破片、遺物を含む。



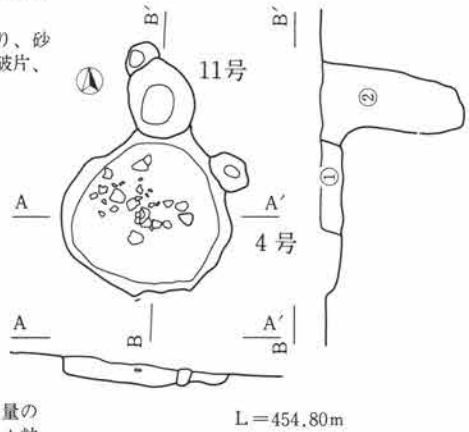
- ① 黒色土 粘性がありしまっている。少量の山石の破片、ローム粒を含む。
- ② 褐色土 粘性があり、ローム粒等含む。



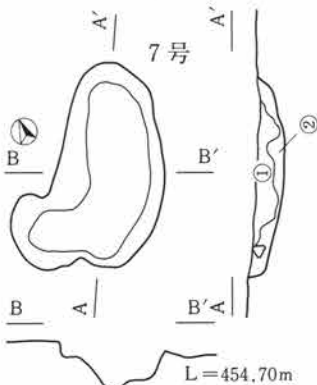
- ① 黒色土 粘性があり堅緻、炭化粒やローム粒を含む。
- ② 黒褐色土 粘性があり、少量の炭化粒とローム等含む。
- ③ 黄褐色土 堅緻、ローム粒やブロックを多量に含む。



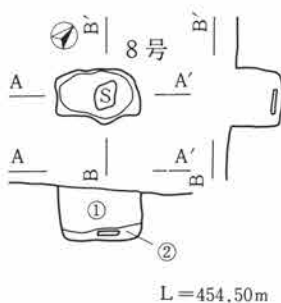
- ① 黒褐色土 粘性があり堅緻、少量の炭化物と多量のローム粒を含む。
- ② 褐色土 かたくしまっている、多量のローム粒を含む。



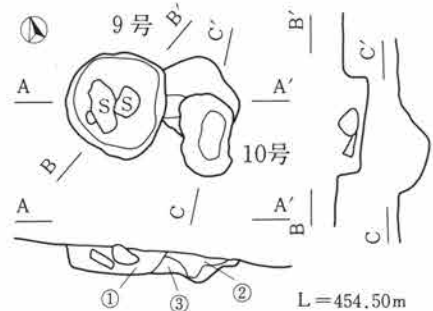
- ① 黒色土 炭化物、遺物が多く、ローム粒等も含む。
- ② 黒色土 炭化物が多いが遺物を含まない。



- ① 黒色土 粘性がなかった、少量の軽石やローム粒を含む。
- ② 黄褐色土 粘性があり上部に軽石が多く、下部少ないローム粒等を多く含む。



- ① 黒色土 粘性があり堅緻、上部に軽石を少量含み、全体にローム粒等を多く含む。
- ② 黄褐色土 粘性があり、ローム粒を多量に含む。

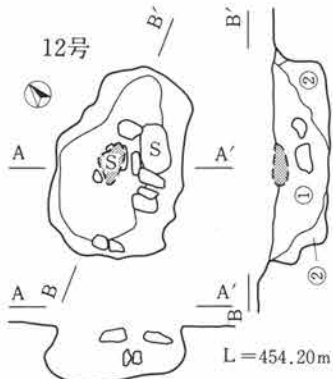


- ① 黒褐色土 粘性があり堅緻、上部に少量の軽石を含み、ローム粒、山石、板石も含む。
- ② 黒褐色土 ①層と殆ど同じだが、ロームブロックをやや多く含む。
- ③ 黄褐色土 粘性がありソフトローム漸移層である。

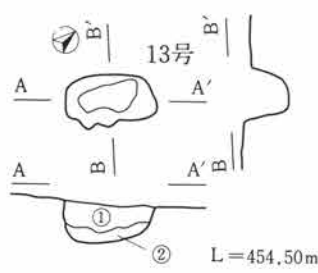
第112図 D区土坑 (1)

0 1:60 2m

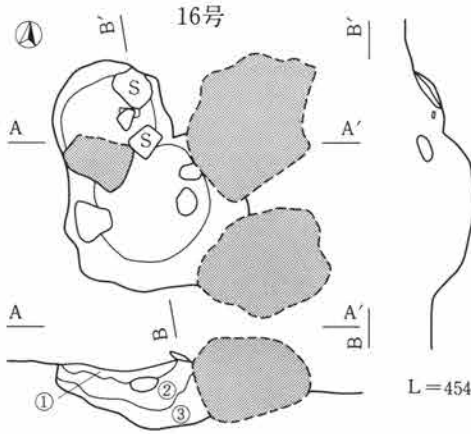
第IV章 深沢遺跡



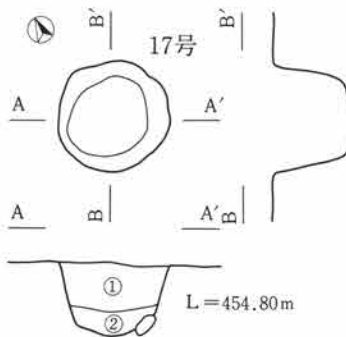
- ① 黒褐色土 やや粘性があり上部に少量の軽石を含む。ローム粒やブロックが多量に含み、遺物や山石を含む。
- ② 黄褐色土 粘性があり、ローム粒やブロックを多量に含む。



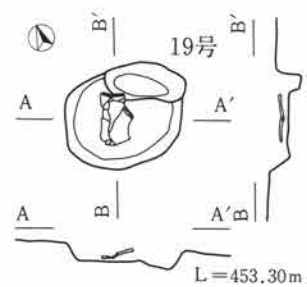
- ① 黒褐色土 やや粘性があり、少量の軽石や焼土を含む、ローム粒多い。
- ② 褐色土 少量の軽石と焼土を含みローム粒やブロックを多く含む。
- ③ 褐色土 粘性があり、ローム粒やブロック多く、底面に焼土が多い。



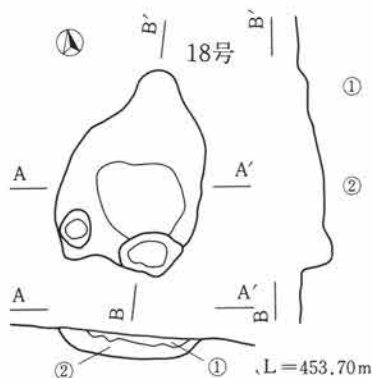
- ① 黒色土 粘性があり堅緻、少量の軽石とローム粒を含む。
- ② 黒褐色土 粒性があり、炭化粒とローム粒を全体に含む。
- ③ 褐色土 やや粘性があり、ローム粒やブロックを多く含む。



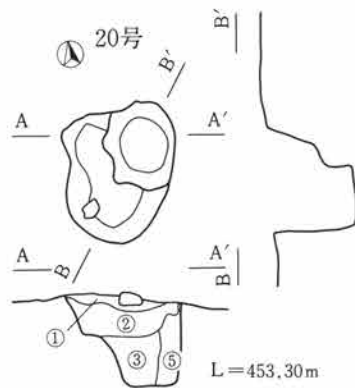
- ① 黒褐色土 粘性があり、少量の炭化粒とやや多くロームの粒子とブロックを含む。
- ② 黒褐色土 粘性があり、少量の炭化粒とロームの粒子を含む。



- ① 黒色土 堅緻、少量の炭化物と軽石を含む。
- ② 黒色土 ややしまっており、少量の炭化粒と山石の破片を含む。
- ③ 黒褐色土 粘性があり、山石、ローム粒が多い。
- ④ 黒褐色土 ③層よりローム少ない。
- ⑤ 褐色土



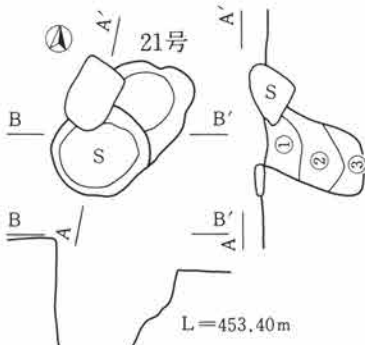
- ① 黒褐色土 粘性があり、ローム粒を含む。
- ② 褐色土 粘性が強く、少量の炭化物とローム粒を含む。



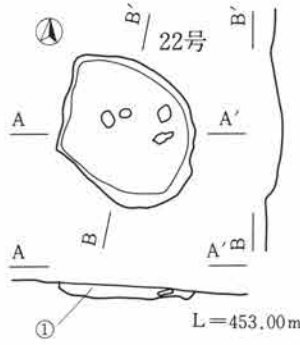
第113図 D区土坑 (2)

0 1:60 2m

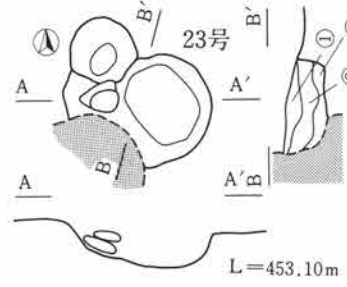
3. 縄文時代の遺構と遺物



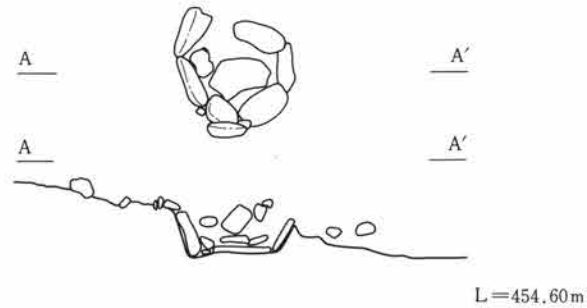
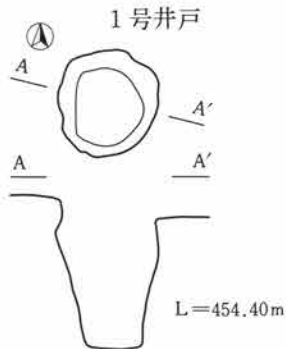
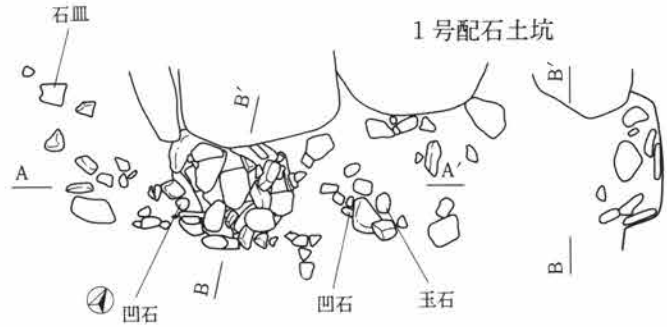
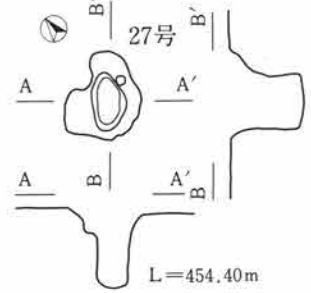
- ① 黒色土 堅緻、山石の破片と少量の炭化粒を含む。
- ② 黒色土 やや堅緻、山石の破片と炭化粒、ローム粒を含む。
- ③ 黒褐色土 ②層と同じであるが下部に小石を多く含む。



- ① 褐色土 やや粒性があり少量の炭火粒と山石の破片を含む。



- ① 黒色土 粘性があり少量の炭化粒と山石の破片、ローム粒を含む。
- ② 黒褐色土 粘性があり山石が多い。
- ③ 黒褐色土 ②層より山石が少なく、黒色である。



第114図 D区土坑 (3)、1号配石土坑、1号井戸

0 1 : 60 2m

第8表 深沢遺跡D区土坑一覽表

土坑番号	グリット位置	平 面 形	長さ×幅×深さ	主軸方向	出 土 遺 物	備 考
1 号	2 R — 2 8	円 形	108× 100× 16	N-10°-W	深鉢	中央に直径50cmの扁平丸石がある。抱き石葬か
2 号	2 R-29. 30	円 形	72× 82× 67		剥片石器、鉢	底面に山石5個が並らぶ
3 号	2 K-26. 27	隅丸長方形	128× 158× 50	N-42°-E		
4 号	2 L — 2 6	円 形	132× 132× 24		磨石、鉢4	11号と重複し、4号が古い
5 号	2 K-25. 26	不整楕円形	78× 46× 58	N-25°-E	鉢	
6 号	2 K — 2 4	円 形	68× 68× 40		鉢	
7 号	2 K-23. 24	楕 円 形	160× 86× 42	N-27°-E		
8 号	2 L-24. 25	隅丸長方形	103× 46× 85	N-45°-E		底面近くに30×20cmの板石がある
9 号	2 M — 2 4	円 形	80× 78× 23		深鉢	10号を切る、中位に板石2点がある
10 号	2 M — 2 4	楕 円 形	64× 34× 28	N-30°-E		9号より古い
11 号	2 L — 2 6	円 形	60× 52× 119		深鉢、鉢4	
12 号	2 M — 2 5	不整楕円形	156× 104× 58	N-55°-E	剥片石器、鉢2	
13 号	2 M — 2 7	隅丸長方形	72× 40× 36	N-42°-E	剥片石器、深鉢、鉢	底面近くに焼土粒が多い
14 号	2 M — 0 2	円 形	54× 50× 87		深鉢	
15 号	2 M — 2 4	円 形	118× 114× 20			底面近くに5個の板石が並らぶ
16 号	2 N — 2 5	円 形	122× 148× 51		石製品、打斧、双孔注口、鉢、深鉢、注口	円形土坑が重複、双孔注口土器は副葬か
17 号	2 N — 2 3	円 形	86× 88× 60		打斧、鉢3	
18 号	2 N — 2 2	不整 円形	156× 108× 27	N-23°-E	鉢	
19 号	2 P — 2 6	楕 円 形	92× 78× 35	N-100°-E	粗製深鉢、石鏃	組成深鉢口縁を北にして単独で出土
20 号	2 P-26. 27	不整楕円形	116× 78× 53	N-9°-W	深鉢	東辺に70×56×70cmの楕円形土坑が重複
21 号	2 P — 2 7	円 形	74× 70× 90		多孔石、鉢、深鉢2	東北辺に直径約70cm、深さ60cmの円形土坑が重複
22 号	2 Q — 2 5	不整楕円形	124× 98× 13	N-50°-W		
23 号	2 Q — 2 7	円 形	84× 76× 32	N-32°-W		
24 号	2 S — 2 6	円 形	88× 88× 71		鉢	
25 号	2 S — 2 6	円 形	72× 70× 31			
27 号	2 L — 2 3	不整楕円形	70× 42× 62	N-36°-E	土偶	土偶は北壁の立ち上がりから出土
28 号	2 O — 2 4	楕 円 形	94× 46× 8	N-34°-E		

1号配石土坑 (第110・114・133図、図版91-1)

2N~O-30グリットに位置し、溝状遺構の中にある山石を利用するかの様に寄せつけて作られている。D区の土坑群の中では、配石を伴う唯一の例で、円形で小型なこと、底面に石を敷いている点を特徴としてC区の配石とは区別される。

上面での大きさは、95×85cmの円形を呈し、北側は山石に寄せつけて側石の代用としている。内法は72×70cmで、底面には2枚の板石を敷き、確認面からの深さは55cmを測る。

石の用い方は、直径約1mの円形土坑の中に、①. 底面に板石を敷く、②. 底面際を少し掘り下げて側石を立てて、すき間を割石で充填する、③. 上部は凹石等を含む、小ぶりの石を積む、という造築の順序をたどっている。石は、転石と割石、板石の3種類があり、山石と河原石との比は半々位である。上部は、蓋石施設を意図したものではなく、積み上げた程度で立石は共伴しない。

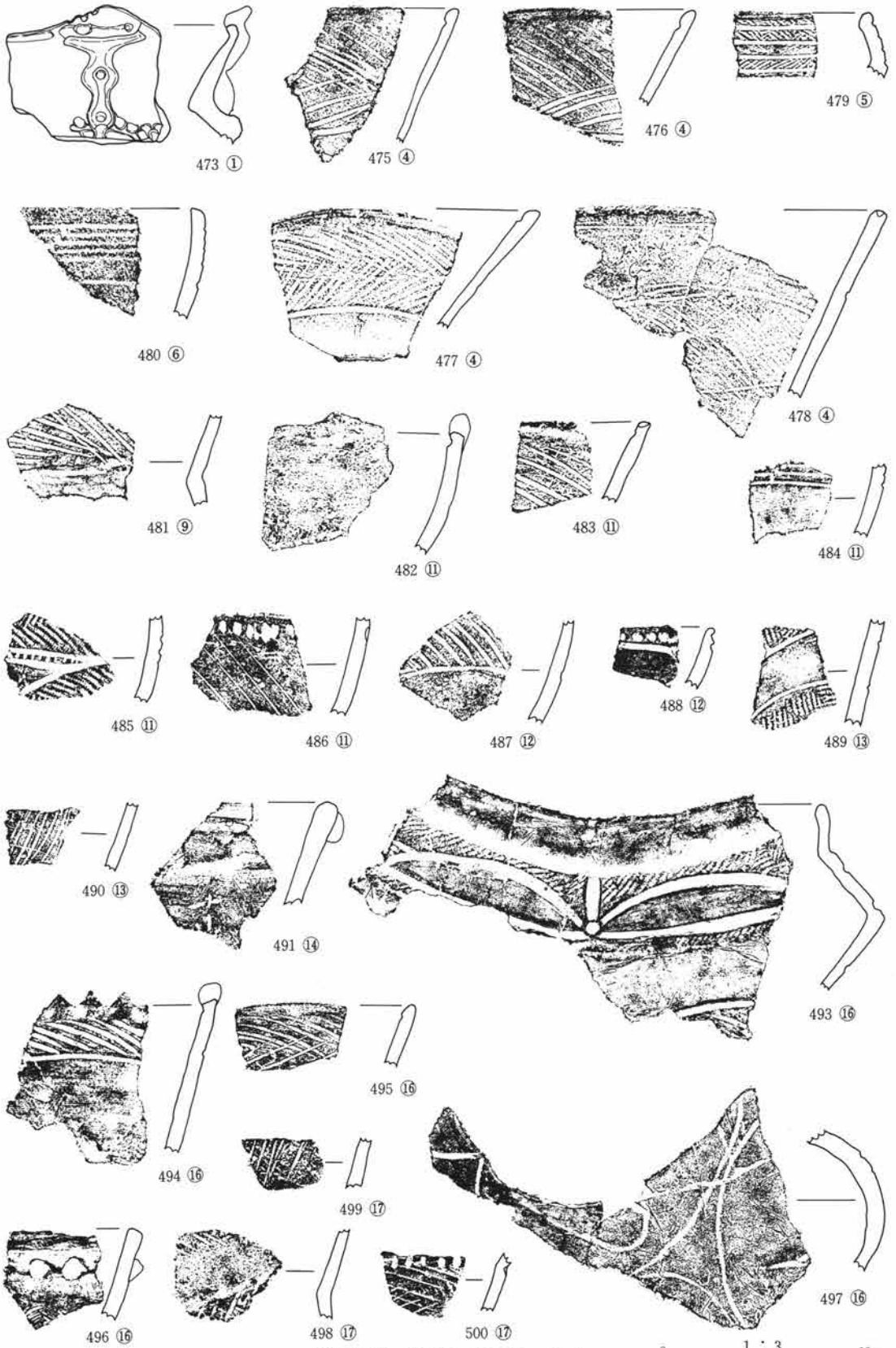
覆土は、底面の板石直上に厚さ5cmで炭化物を多く含む、粘性に富む暗褐色土が堆積し、土器片を多く含んでいた。上面は、溝状遺構の流水により堆積した砂質の黒褐色土で、山石の粒子を多く含んでいた。

時期は、覆土の様子からすると溝状遺構よりも古いのが、窪地と山石は占地の中で十分に意識されている。

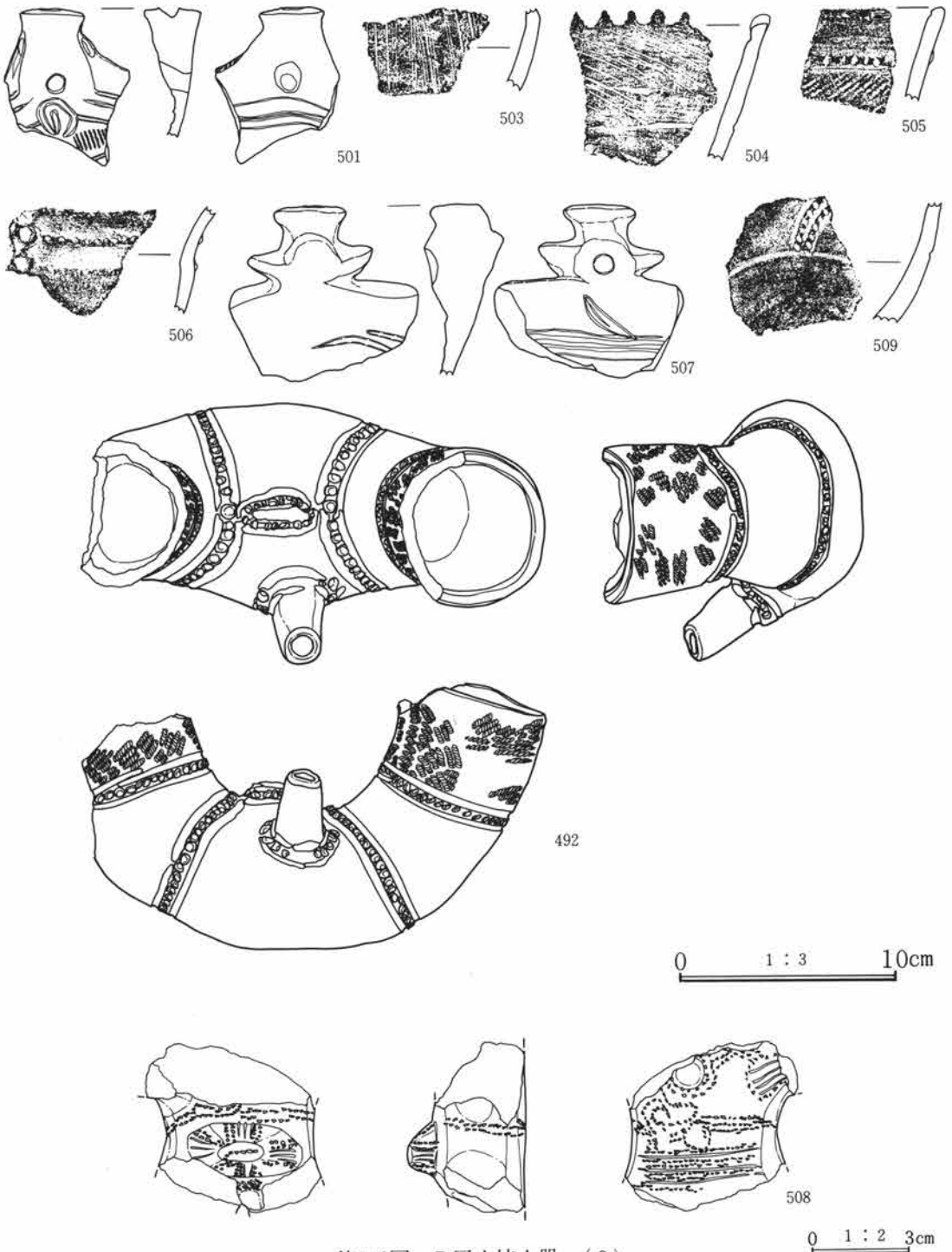
また、同一確認面の東側に連らなって、凹石、丸石を含む配石状のものがある。占地を共有して、相似形をなすかの様であるが、掘り方が不明瞭で石を組んだ様子がない。

④ 土坑出土の土器 (第115・116図)

1号土坑 473は口縁部が外反し、頸部がくびれ胴部がふくらむ鉢形土器。波状口縁を呈し、波長部を肥厚させ外面に2箇所内面に3箇所の刺突と刻目を施す。波長部下に1条の粘土紐を垂下させくびれ部で橋状を成し、くびれ下の刻目を施した曲線的な紐線に接続する。橋状端部に刻目を施す。堀之内I式。2号土坑 474は口縁部が外反し、頸部がくびれ胴部がふくらみ、底部でつぼまる鉢形土器。口径18.4cm、器高14.5cmを計る。波頂口縁を呈し、4単位の波頂部に刺突を施す。くびれ部に1条の沈線を巡らし区画する。胴部には波長下に渦巻文、その間に弧状Π字状等曲線的な沈線を施す。またLR縄文を施文する。底部には木葉痕がある。堀之内I式。4号土坑 475~477は綾杉状の沈線を施し、口縁内側には1条の沈線を巡らす。478は口唇下に細い横位沈線を施し以下を研磨し、胴上部に斜行沈線を帯状に施す。478は加曾利B2式。475~477は加曾利B3式。5号土坑 479は口縁部に無文帯と縄文帯とを交互に施す。縄文RL。堀之内II式。6号土坑 480は口縁部に5条の沈線を集合させ巡らし、沈線間に縦刻みを階段状に施す。加曾利B1式。9号土坑 481は口縁無文帯をくびれ部で1条の沈線を巡らせ区画し、胴部に綾杉状の沈線を施す。加曾利B3式。11号土坑 482は口唇部に突起を施し、外面無文で内面口唇下に1条の沈線を巡らす粗製土器。483は口唇部に刻目を施し口縁部に斜行沈線を施す。内面口唇下に1条の沈線を巡らす。484は数条の縄文帯を巡らし縦に曲線的な区切りを施す。縄文LR。485はRL縄文を右下がりLR縄文を左下がりに羽状に施文し、刻目帯を巡らせ曲線沈線を施す。刻目帯と曲線沈線区画内を磨消する。486は刻目帯を巡らし、斜行条線を施す。482は加曾利B1式、483~486は加曾利B2式。12号土坑 487は横位沈線により区画する。



第115图 D区土坑土器 (1)



第116図 D区土坑土器 (2)

上部に綾杉状の沈線を施し、下部無文。488は小波状口縁を呈し、口唇下に連続刺突と沈線を巡らす。487・488は加曾利B 2式。13号土坑 489はR L縄文を施文し、曲線の沈線間を磨消する。490は斜行沈線を施す。489は堀之内Ⅱ式。490は加曾利B 2式。14号土坑 491は口唇下に指頭圧痕を施した紐線を巡らす。加曾利B 1式。16号土坑 492は注口付双口土器。口縁部にL R縄文を施文し2条の沈

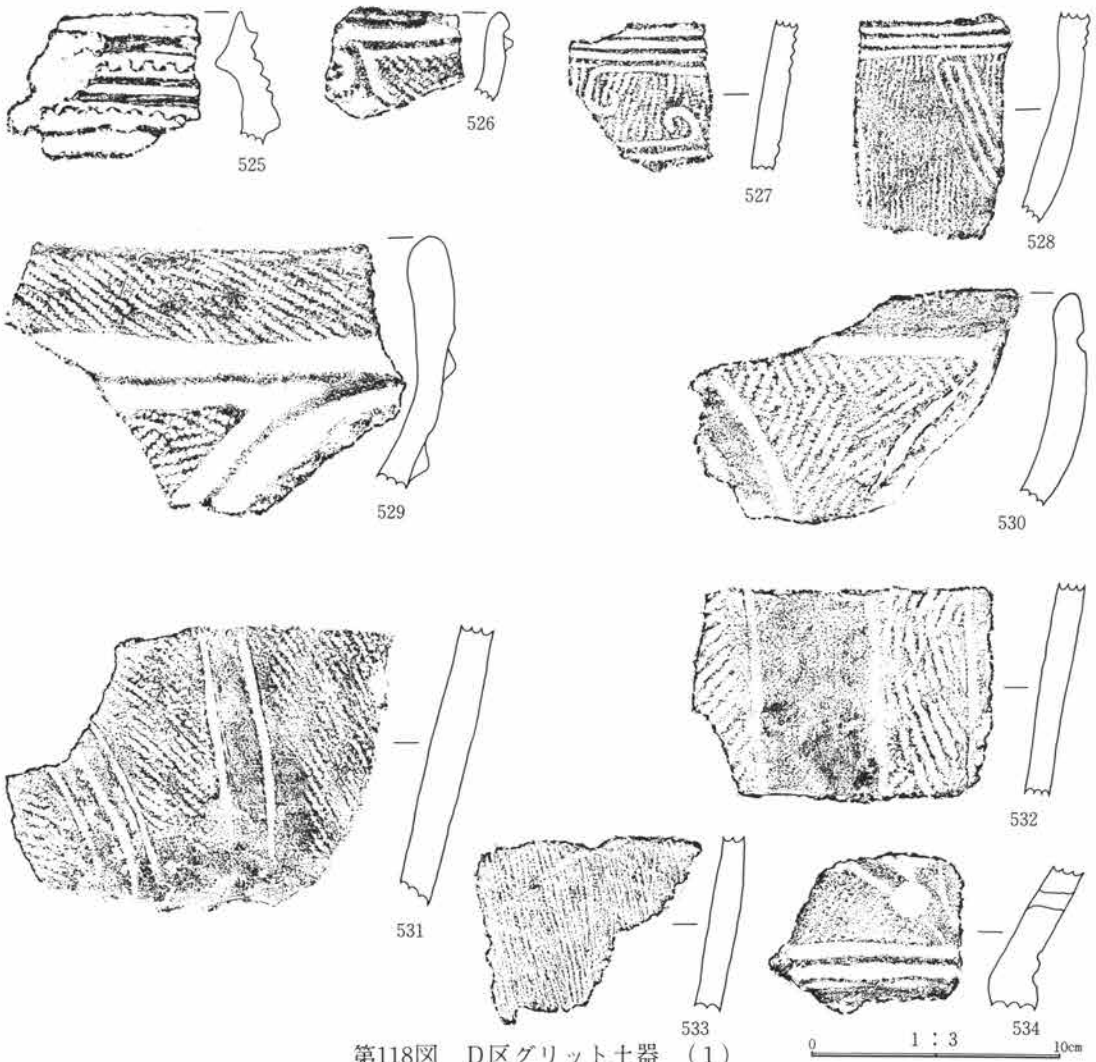


第117図 D区ピット遺物

線間に刺突を施す帯により区画され、体部は良く研磨した無文である。体部屈曲部及び注口接合部・突起接合部においても口縁部文様区画の刺突を施す帯を巡らす。493は肩部が「く」字状に強く張り出し、口縁が直立する器形の深鉢形土器。口縁部無文。胴上部は縦及び弧状沈線で磨消縄文を区画し、縦及び弧状沈線の接点に刺突を施す。胴下部は横位沈線により磨消縄文を区画する。縄文LR。494は口唇部を肥厚させ刻目を施す。口縁部には斜行沈線を施し1条の沈線を巡らせ区画する。495は口縁部に綾杉状の沈線を施す。内面口唇下に1条の沈線を巡らす。496は口縁部に指頭圧痕を施した紐線を巡らす。497は曲線的沈線を施す。注口付土器体部片と思われる。497は堀之内Ⅱ式、492・496は加曽利B1式。493～495は加曽利B3式。17号土坑 498・499・500は綾杉状の沈線を施す。500は頸部に刻目帯を巡らす。493～495は加曽利B3式。18号土坑 501は波状口縁を呈し、波長部を肥厚させ側面及び頂部に刺突を施す。また波頂部下に小穴を穿ち、下位に縦刻目をもつ円形沈線を施す。口唇下には3条の沈線を波状に施し口縁の沈線で区画する。区画内にRL縄文を施す。内面口唇下に2条の沈線を巡らす。加曽利B2式。19号土坑 502は口唇下に指頭圧痕を施した紐線を巡らし、胴部無文の粗製深鉢形土器。加曽利B1式。20号土坑 503は縦位に条線を施す。加曽利B2式。21号土坑 504は口唇部に瘤状の突起を連続し貼付する。口縁部は1条の沈線を巡らせ区画し上位に斜方向に条線を施し、下位は研磨し沈線を施す。内面口唇下に1条の沈線を巡らす。505は口縁無文下に2条の平行沈線を巡らし、沈線間に刻目を施す。下位はLR縄文を施文する。内面口唇下に1条の沈線を巡らす。506は刻目を施した紐線を数条巡らし、8字状貼付を施す。504～506は堀之内Ⅱ式。24号土坑 507は平口縁に把手を施す。口縁部に2条の沈線を施しその間を刺突する。内面口唇下に2条の沈線を巡らす。加曽利B2式。27号土坑 508は土偶の胴部で刺突列点を施す。30号土坑 509は曲線的な沈線を施す。3条の平行沈線間に刻目を施す。

⑤ ピット出土の土器 (第117図)

34ピット 510は肩部に刻目帯を巡らし、1条の巡る沈線により無文部と綾杉状沈線施文部とに区画される。47ピット 511は土製円盤。48ピット 512は口唇下に2条の指頭圧痕を施した紐線を巡らす。加曽利B1式。73ピット 513は波状口縁を呈す。口縁部無文で胴部は斜方に条線を施し波状に沈線を巡らす。内面は口唇下に連続刺突文を施文した幅広の沈線を施し、口唇部及び沈線による微隆帯に刻目を施す。また3条の沈線を巡らす。514・515及び514の内面には数条の平行沈線を巡らす。513～515は加曽利B1式。77ピット 516は513と同一個体と思われる。83ピット 517は口唇下に2条の指頭圧痕を施した紐線を巡らす。加曽利B1式。518は無文の粗製土器。84ピット 519は肩部が「く」字状に強く張り出す器形。弧状及び平行沈線を施し磨消縄文を区画する。縄文LR。口縁部貼付突起の外側は指頭圧痕、内側は2本の刻目を施す。加曽利B3式。87ピット 520は波状口縁を呈し、波長部に突起を貼付する。縦連対弧文とそれを起点とする平行沈線を巡らす。器面は良く研磨されるが、沈線間交互に未研磨部を施す。内面に2条の沈線を巡らす。加曽利B2式。92ピット 521は底部付近片無文。103ピット 522は底部に網代痕がある。106ピット 523は口縁部に2条の平行沈線間に連続刺突を施し巡る。胴部は2条の縄文帯に曲線による縦区切りを施す。加曽利B2式。108ピット 524は弧状及び平行沈線を施し磨消縄文を区画する。加曽利B3式。



第118図 D区グリット土器 (1)

⑥ グリット出土の土器 (第118～132図)

加曾利E 1式に比定される土器群。

525は口縁部に1条の隆帯を巡らせ、集合沈線を施し2条おきに交互刺突を施す。

527は横位平行沈線により文様区画し、区画内はR L縄文を施文する。

528は平行沈線下に絡条体第1類縄文を施文し、斜方向に4条の沈線を施す。

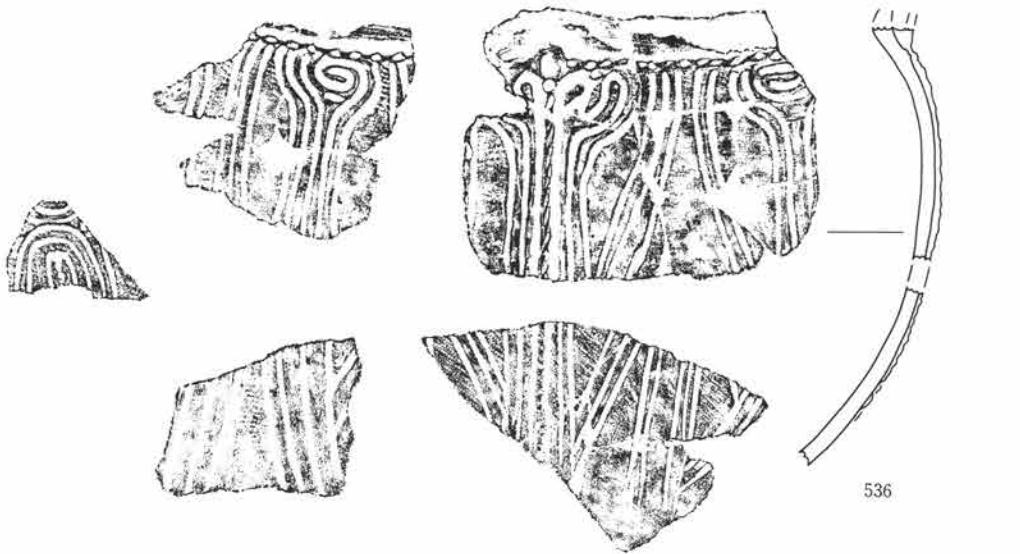
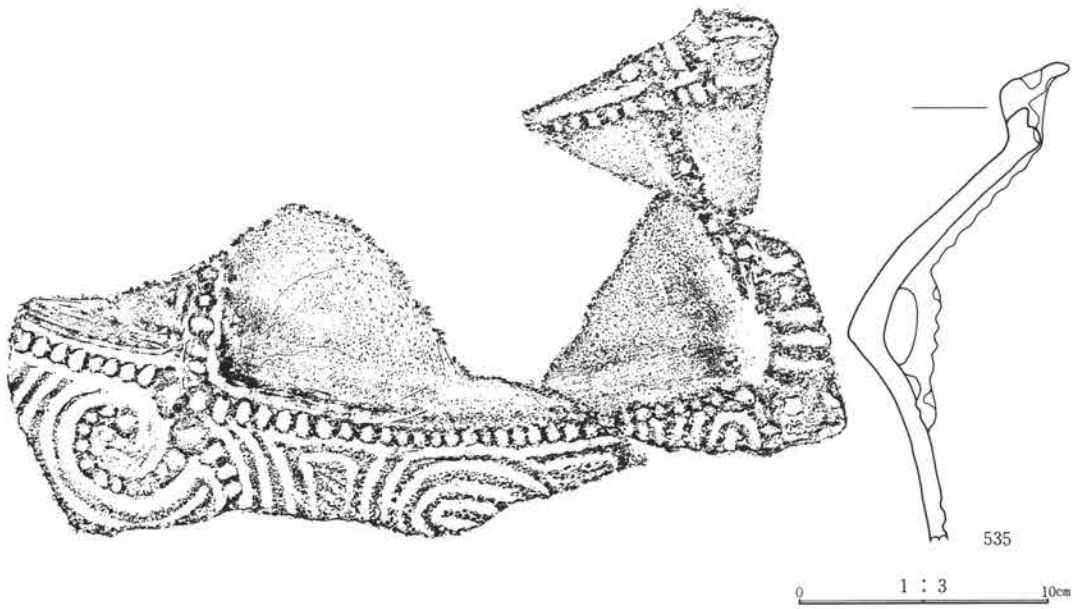
加曾利E 2式に比定される土器群。

526は隆帯により渦巻き状及び半円形区画を施し、区画内にR L縄文を施文する。

534は口縁下くびれ部に2条の沈線を巡らせ、胴部に不明瞭な縄文を施文し、斜行沈線及び小穴を施す。

加曾利E 3式に比定される土器群。

529は口縁部にR L縄文を施し、横位の微隆起带状の隆帯により区画され、胴部も同様の隆帯による渦巻文が施され、その区画内にR L縄文が施文される。



第119図 D区グリット土器 (2)

531・532は垂下沈線を施し、沈線間を磨消する。531はL R、532はR I 縄文を施文する。

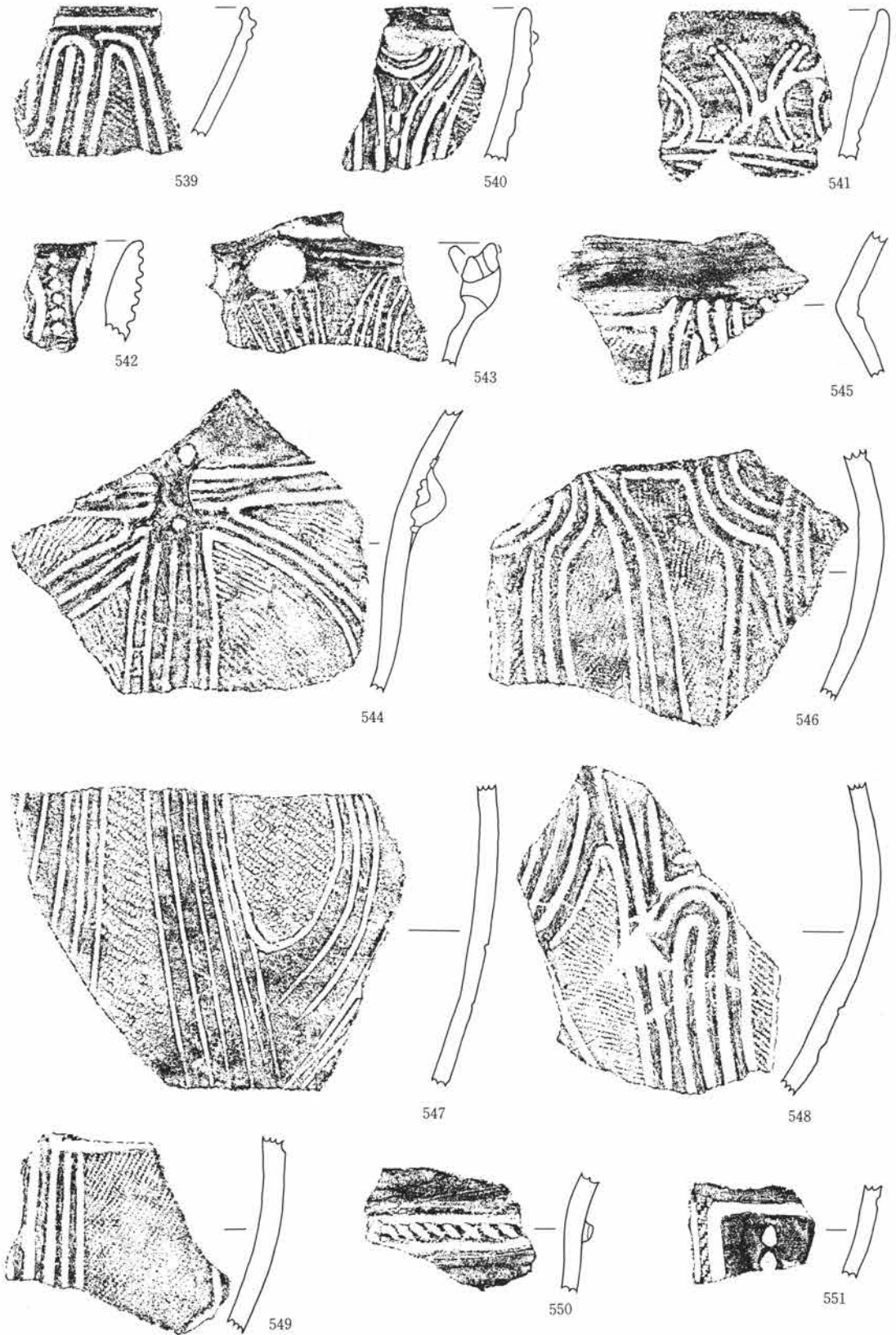
533は条線を施す。

加曾利E 4式に比定される土器群。

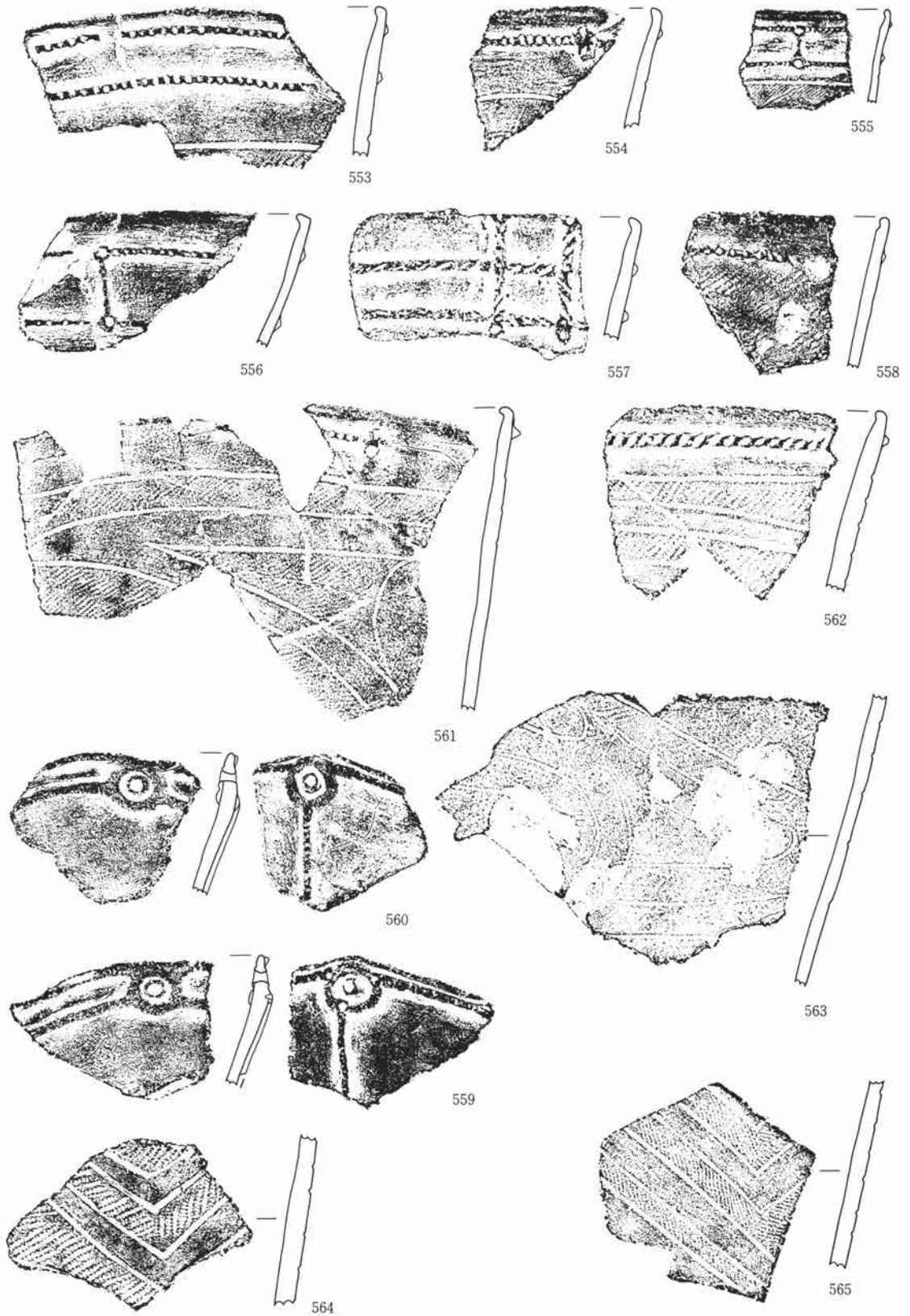
530は沈線により区画され、区画内を磨消する。縄文R L。

堀之内I式に比定される土器群。

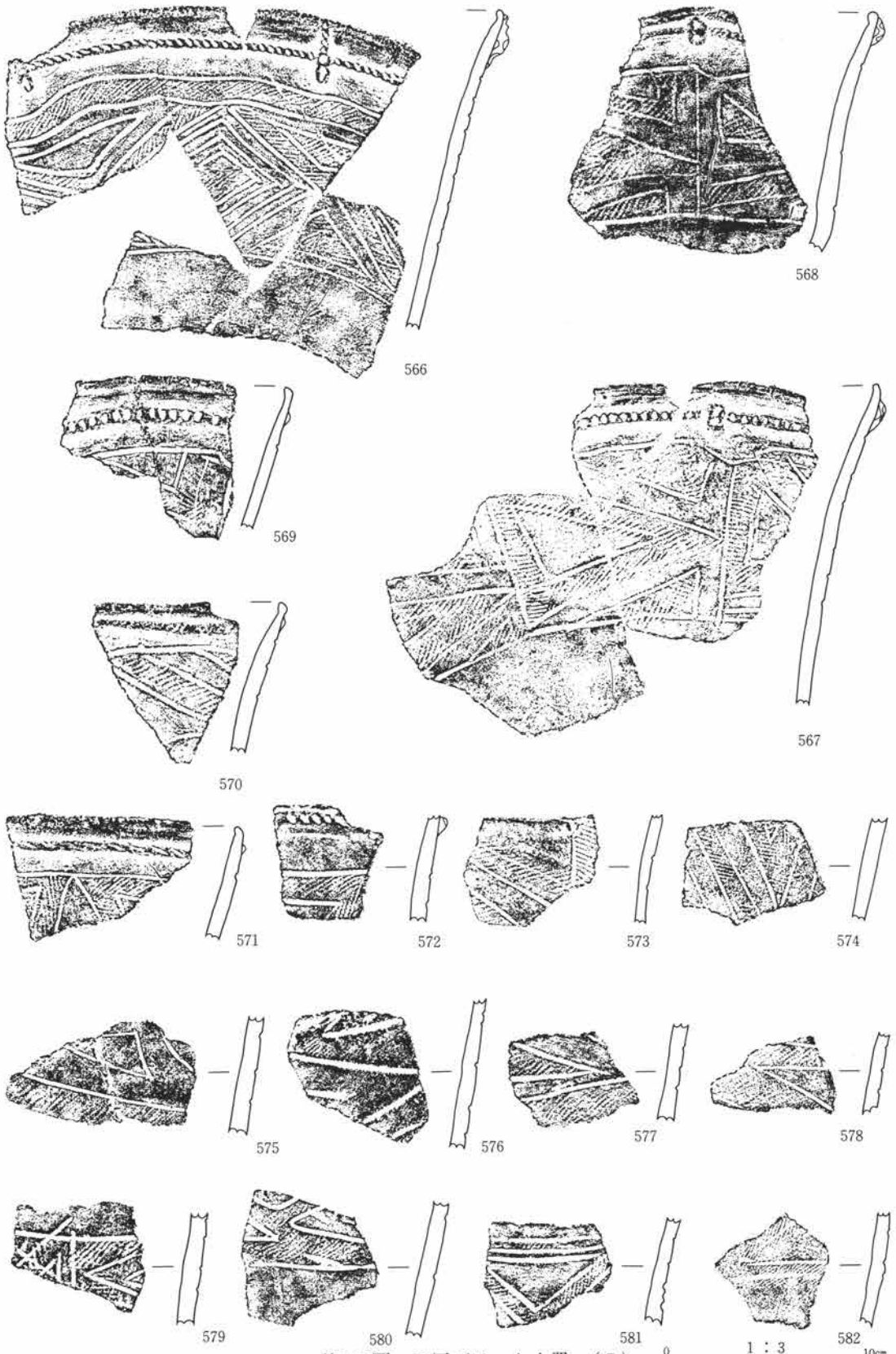
535は口縁部が外反し頸部がくの字状に折れて胴部が張り出す深鉢形土器である。口唇直下及び頸部に刻目を施した紐線を巡らせ、刻目を施した紐線を縦に連結させる。またこの縦の紐線部を橋状把



第120図 D区グリット土器 (3)

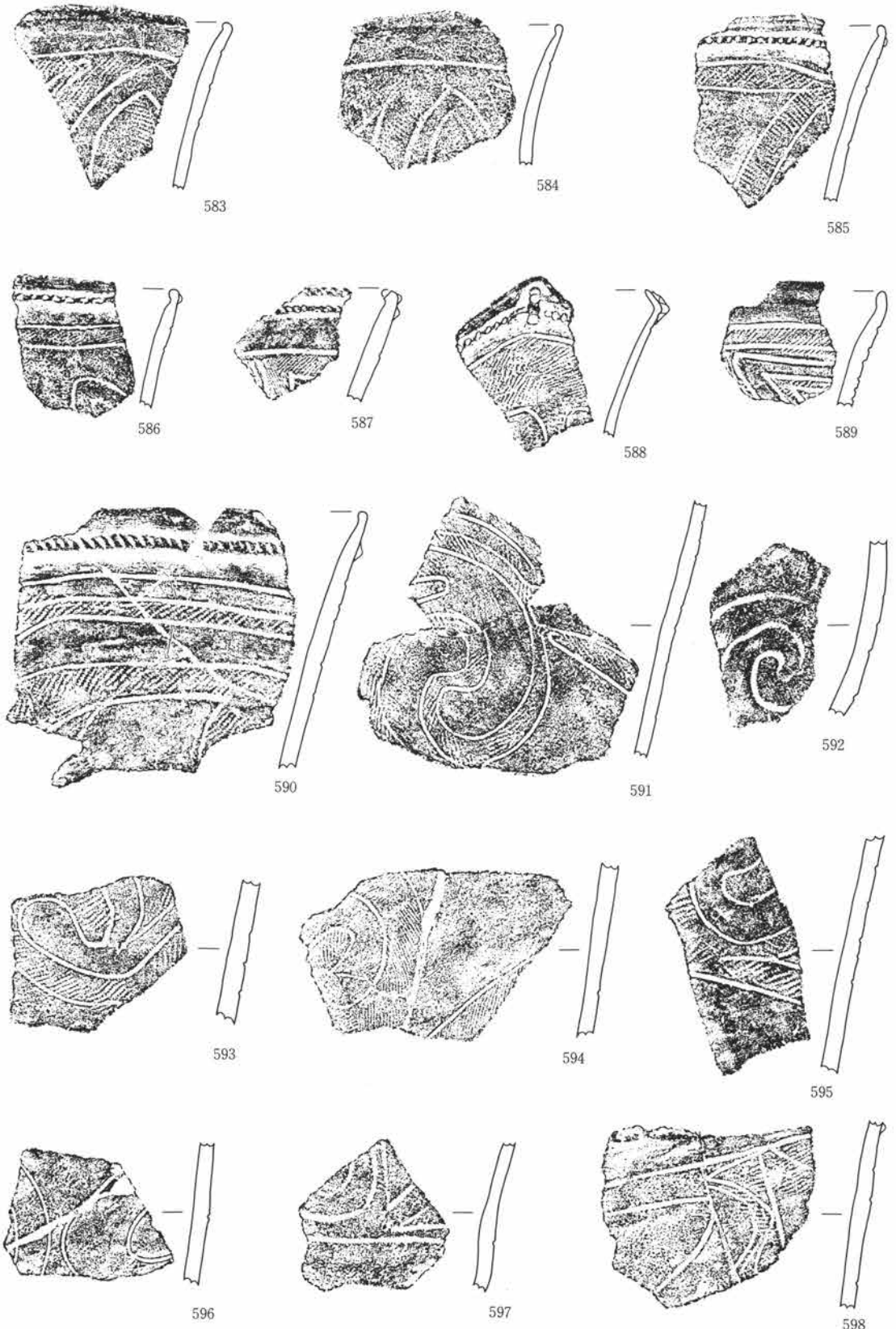


第121図 D区グリット土器 (4)



第122図 D区グリット土器 (5)

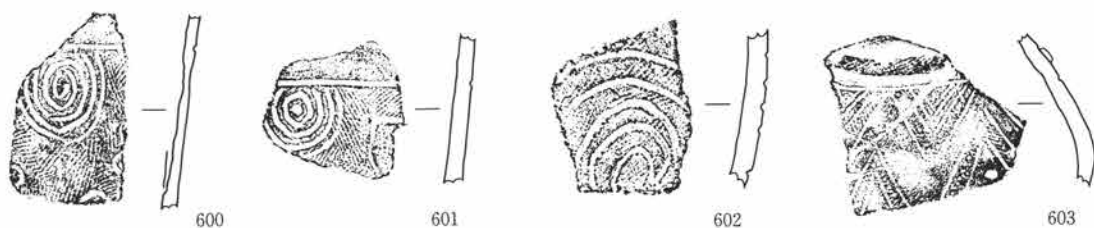
0 1 : 3 10cm



第123図 D区グリット土器 (6)



599



600

601

602

603

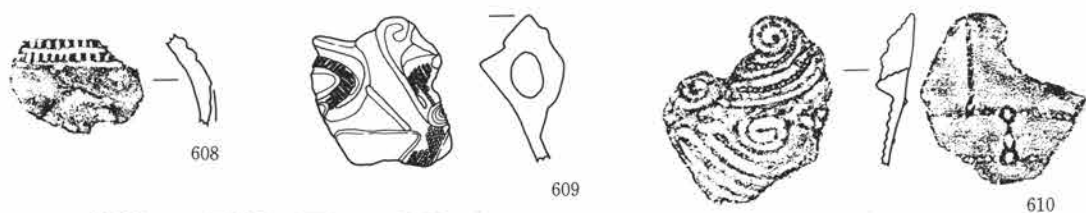


604

605

606

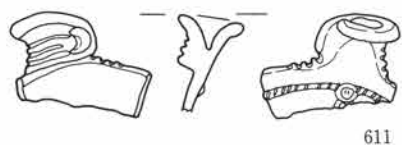
607



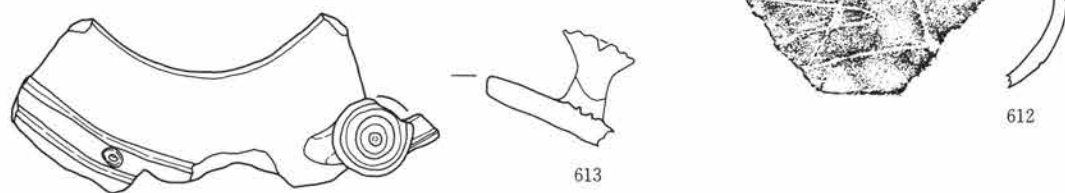
608

609

610



611



612

613

第124図 D区グリット土器 (7)

0 1 : 3 10cm



第125図 D区グリット土器 (8)

0 1 : 3 10cm

手上にも施す。連結された縦の紐線は胴部で渦巻き状になる。口唇部には肥厚させ内外面に刻目や刺突を施す。胴部は渦巻き状の垂下沈線を施す。

536・539～549は多条の沈線文を主体にY字状・弧状及び垂下沈線を施す。

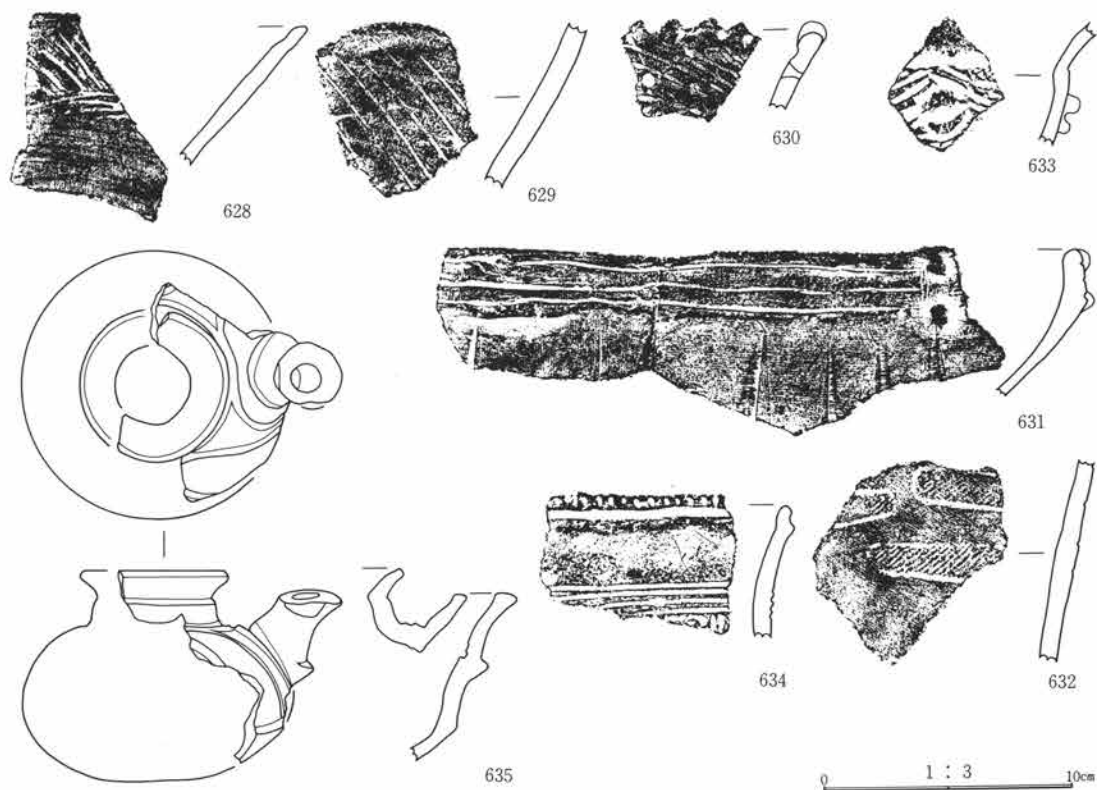
539～543は口縁部片、536・544・545は頸部片、他は胴部片。

536は頸部に指頭圧痕を施した紐線を巡らせ、縦位に同様の紐線を貼付する。その連結部には縦に刻目を施した橋状把手を貼付する。

540・542は縦に連続刺突文を施す。

541はX字状を呈する沈線の端部に刺突を施す。

543は口唇部に突起を持ち、口縁部に小穴を穿つ。



第126図 D区グリット土器 (9)

544は頸部沈線集合部に把手を貼付し刺突を施す。

550は頸部に刻目を施した紐線を巡らす。

551は沈線区画内に指頭圧痕を縦位に施す。

縄文は539・540・544・547～549がL R、546はR Lである。

堀之内Ⅱ式に比定される土器群。

553～599は三角形及び菱形や曲線的な縄文帯により文様構成する。縄文帯はL R縄文が主である。

553～562・566～572・583～590・599は口縁部片、他は胴部片である。

553・555～557・610・611は口唇下に2条の刻目を施した紐線を巡らせ、縦に紐線を施し区切る。

610・611は渦巻き沈線を施す装飾的文様を持つ突起を貼付する。610の沈線内には刺突文を施す。

554・558～562・566～572・585～590・614は口唇下に1条の刻目を施した紐線を巡らせ、554・561・562・566～568・588には8字状の貼付文を施す。

559・560は口唇下に円形の紐線を貼付し、その中に小穴を穿つ。

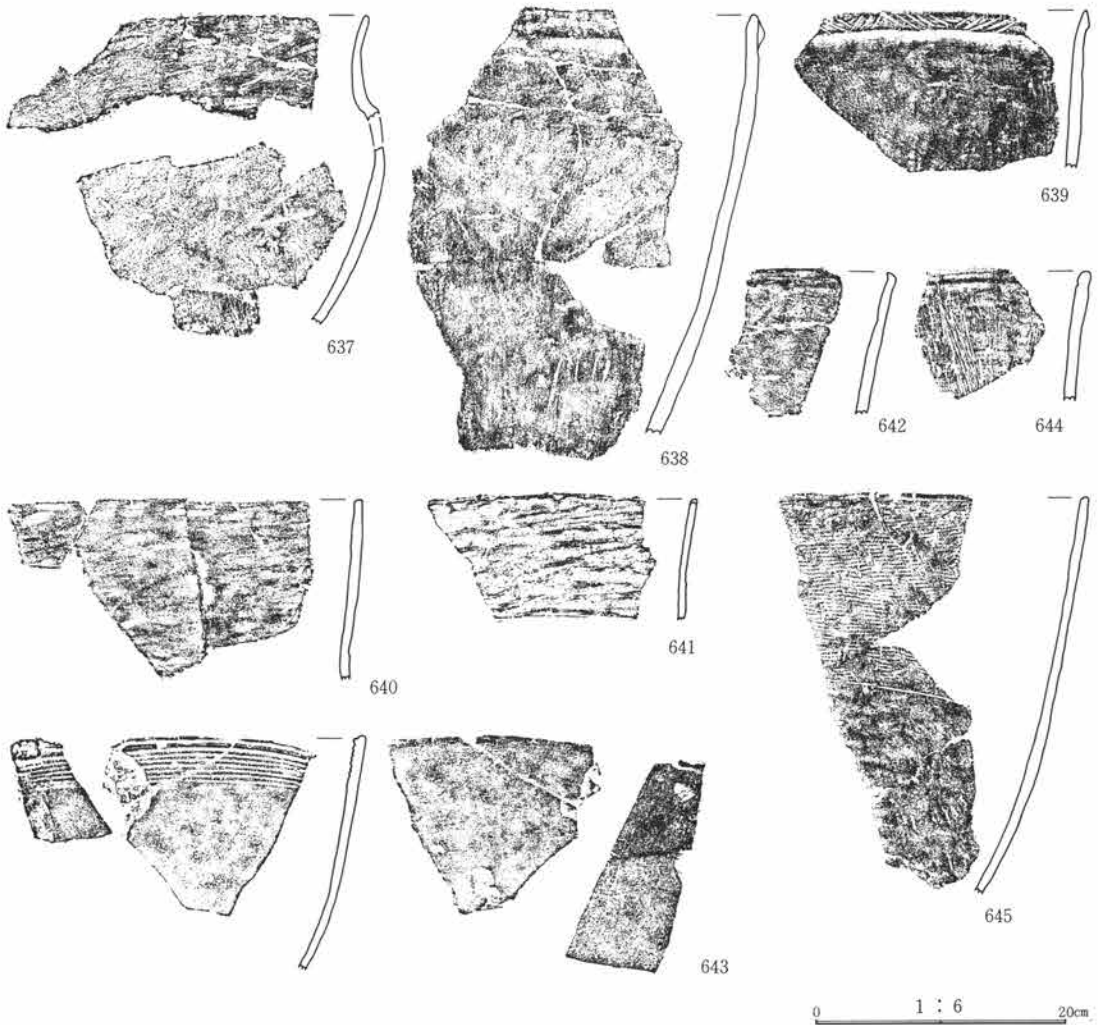
583・584は口唇下無文。

588・614は波状を呈し、波長部に588は折り614は突起を施す。

口縁部片内面は1条の沈線を巡らす、559・560は2条の隆帯と円形貼付を施す。

566は沈線区画内を沈線で充填する。

599～602は渦巻き状沈線を施す。599の胴部には曲線的なL R縄文帯により文様構成する。



第127図 D区グリット土器 (10)

603・604・609・612は注口付土器片である。

603・604・612は体部片である。603は上部無文帯にL R縄文を施す隆帯と沈線を巡らし区画する。胴部には4条の沈線により幾何学的文様を施し外側の沈線間にL R縄文と連続刺突文を施す。

604は無文部に隆帯を施し、沈線間に連続刺突文を施す。

612は沈線による曲線的な文様を施す。

609は口縁部片である。曲線的なL R縄文微隆帯を施し、把手部は8字状の沈線を施す。

613は口縁部を内彎する。2条の隆帯間に円形粘土と渦巻き沈線を施した突起を貼付する。

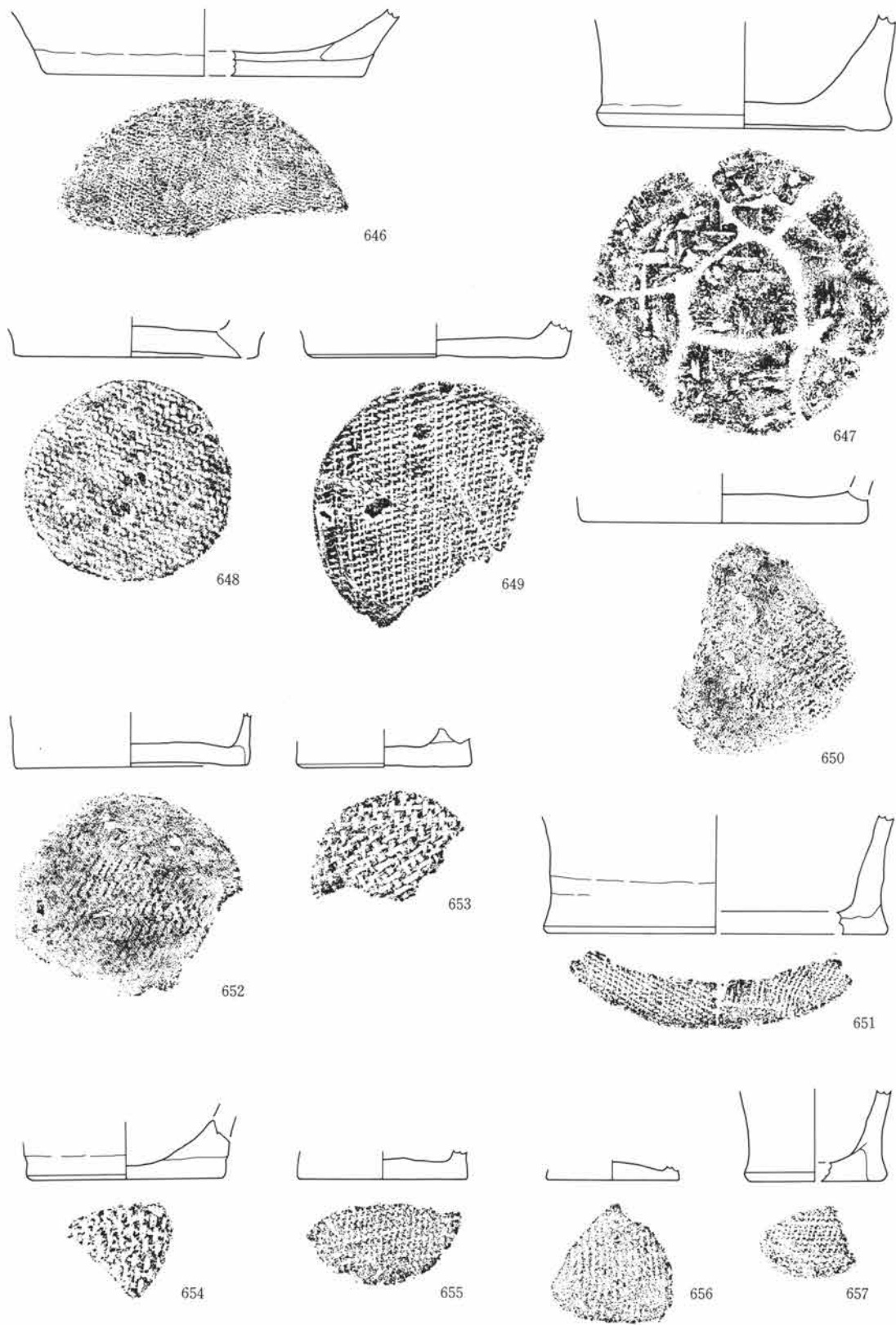
605・606は沈線区画内に刺突文を施す。

632は沈線による曲線的区画内に磨消縄文を施す。縄文L R。

加曾利B 1式に比定される土器群。

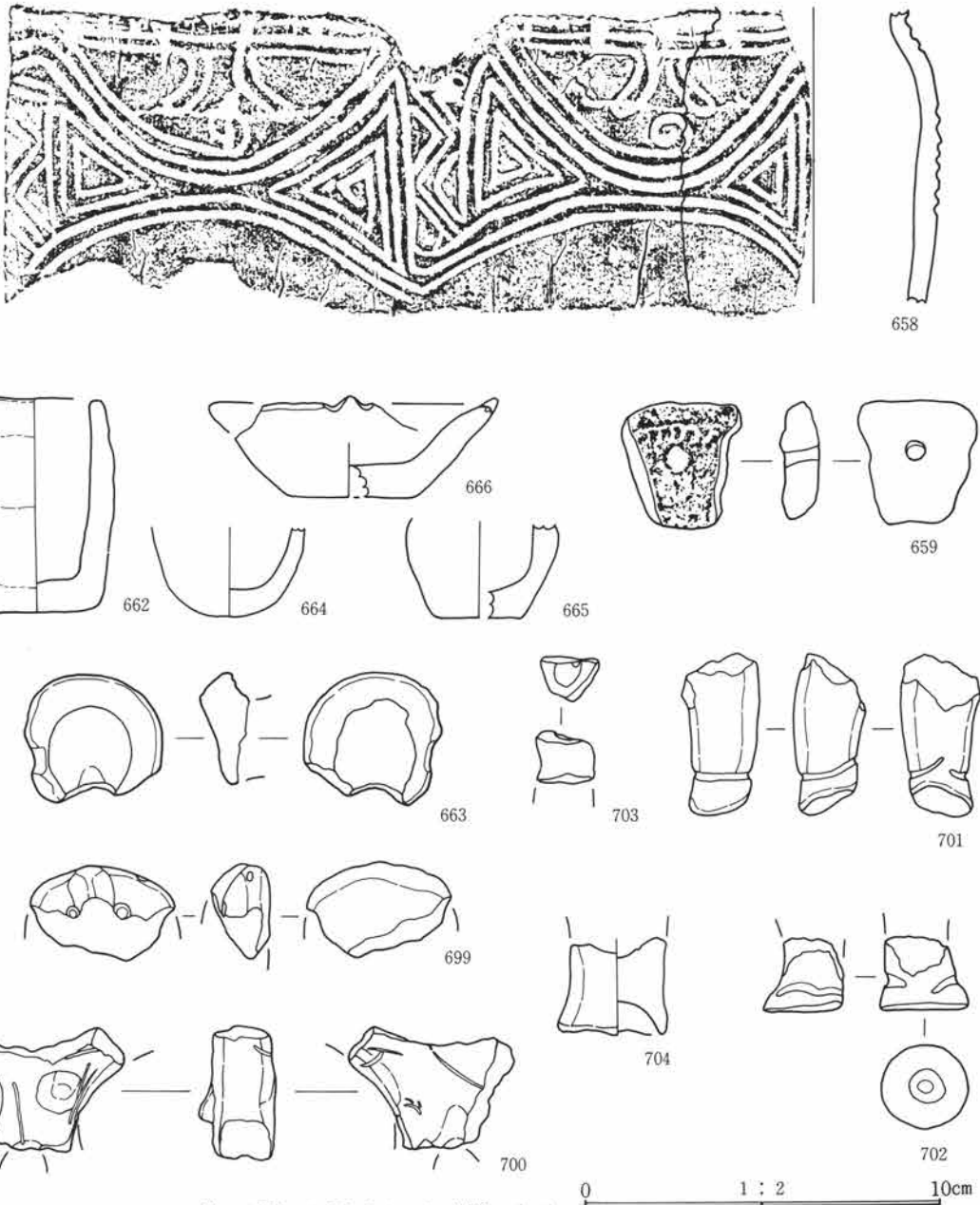
634は口唇部に刻目を施し、口唇直下に1条の沈線を巡らし頸部に集合沈線を施す。

615～618・623は内面に数条の沈線を巡らす。



第128図 D区グリット土器 (11)

0 1 : 3 10cm



第129図 D区グリット土器 (12)

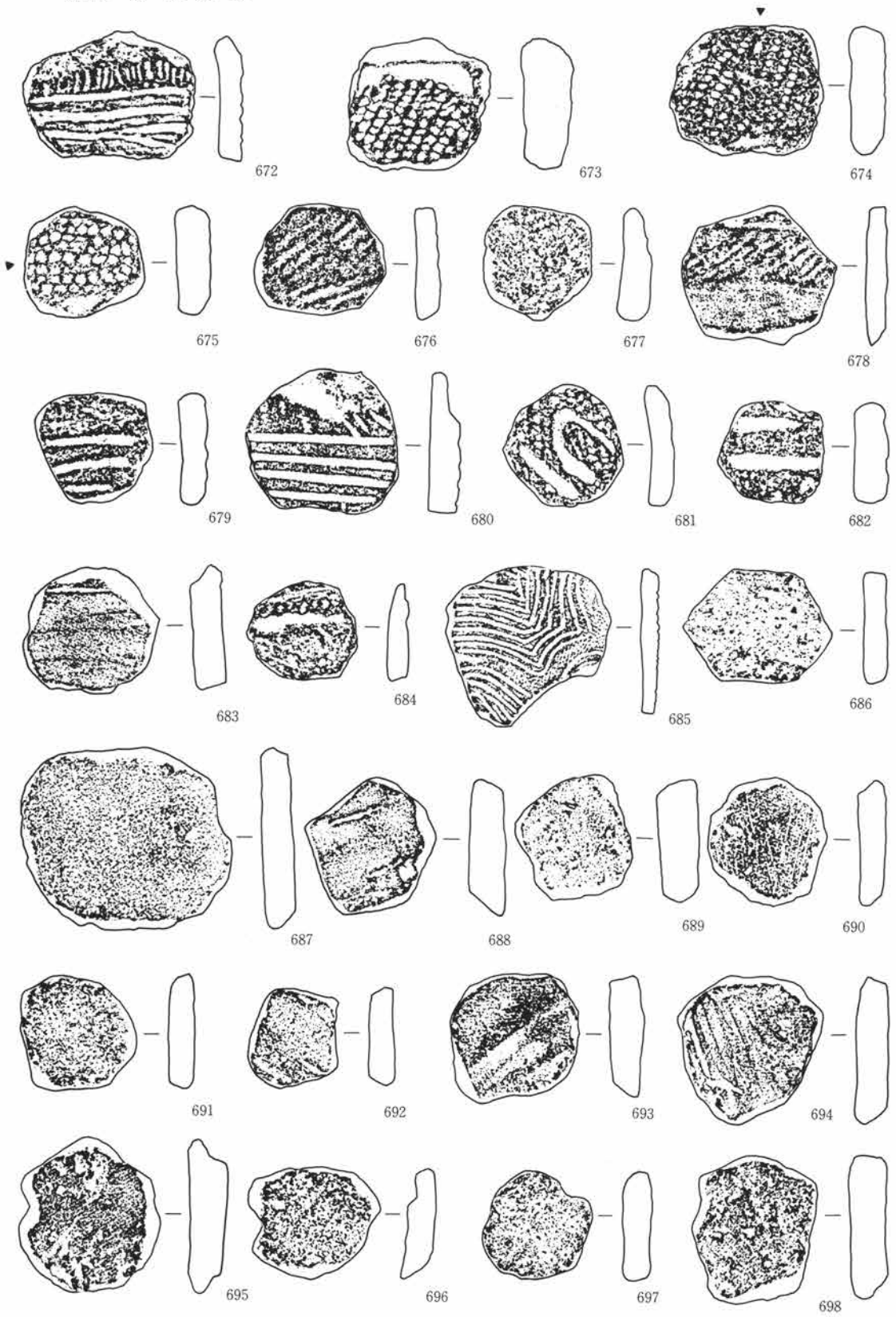
615・616は同一個体と思われる。縦位の沈線により区切られた縄文帯と無文帯を巡らす。

618・623は口唇部および内面沈線間に刻目を施す。618は無文。623は縄文帯を巡らす。

加曾利B 2式に比定される土器群。

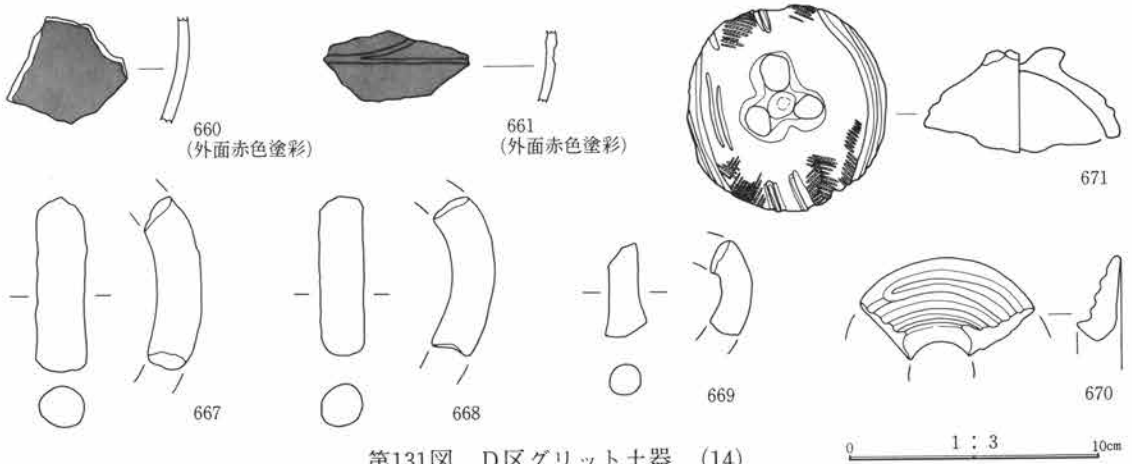
620・621は口縁部がわずかに内湾し、胴上部でくびれ、胴下半がゆるやかなカーブでふくらむ器形。口縁下部に2条の平行沈線が巡り、その間の細い帯状の区画内に刻目を施す。胴上部に縦連対弧文とくびれ部に2条の平行沈線を巡らせる。620は無文。621は連弧状と平行沈線を施す。

619・622は鉢形土器である。619はL R縄文帯を巡らす。622は口縁部に連弧状磨消縄文と縦位刺突を施し、口縁部と胴部の境に2条の沈線を巡らせその間に刻目を施す。



第130図 D区グリット土器 (13)

0 1 : 2 10cm



第131図 D区グリット土器 (14)

625・626は口縁部と胴部の境に2条の沈線を巡らせその間に刻目を施す。胴部は対弧文より曲線的な沈線を施し、区画内を磨消縄文する。626の口縁部無文帯に対弧文が施される。縄文は625はL R、622がR Lである。

627は口縁部にL R縄文を施し、口唇下に2条の刻目帯を巡らす。沈線下無文。

624は斜行沈線を施す。

加曾利B 3式に比定される土器群。

628～630は綾杉状沈線を施す。630は口唇部に刻目を施し、口縁部には小穴を穿つ。

宝ヶ峯式に比定される土器群。

607・608・633・635は器面を研磨する。607・608は3条の沈線間に刻目を施す。633は斜行沈線を施し瘤状貼付をする。635は注口付土器。浮彫手法の連続入組を施す。

曾谷式に比定される土器群。631は口縁に平行沈線を巡らし瘤状の貼付を施す浅鉢形土器。

粗製土器群。637～645は外面無文。638は口唇下にL R縄文帯を巡らす。643は内面に集合沈線を施す。底部片。

646～657は網代痕がある。

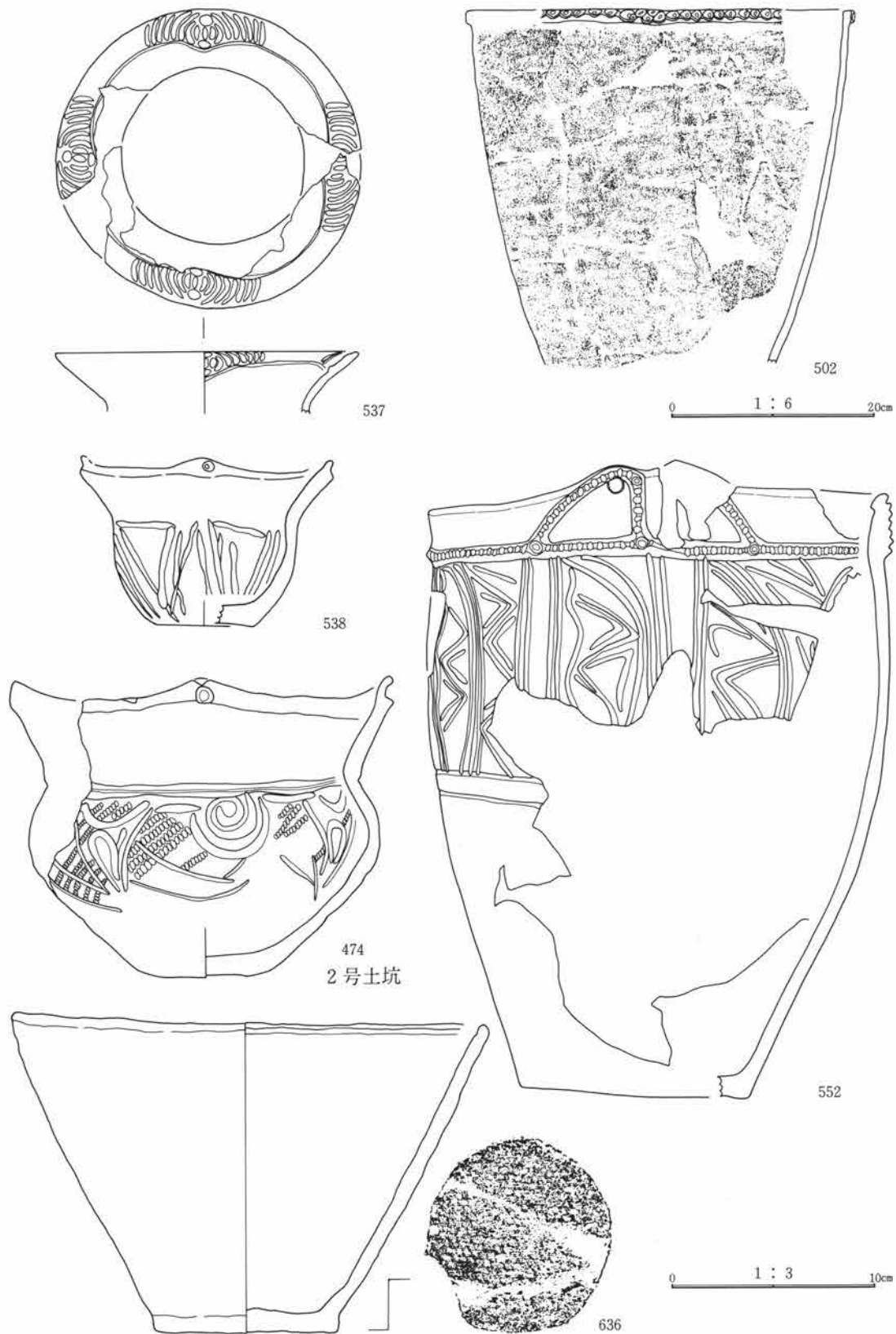
ミニチュア土器

658は口縁部と底部を欠損する筒状の土器で器高8.3cmを測る。沈線により三角状に施文する。全体にススが付着している。662、664～666は鉢・浅鉢を模倣したもので指頭痕を残したままの粗製無文である。659、663、702～704は把手の一部や土製品と思われる。

土 偶

669は頭部の一部で、粘土板上に貼付隆帯で鼻梁が、その両脇に刺突で目が表現されている。700は胸部を主とする胴部で両乳房のほかに、腹部から背面にかけて沈線が表現されている。701は左足で沈線をめぐらして足首を表現している。

672～698は土製円盤、667～669は把手の一部。670、671は蓋である。



第132図 D区グリット土器 (15)、2号土坑

⑦ 土坑出土の石器 (第133図、図版99)

627～630・632・620は剥片石器である。627は下端部と正面右側縁の2辺を刃部として使用している。629と630は下端部のみ刃部として使用している。629の刃縁は内彎し、630は丸刃状を呈している。632は小形の剥片を素材とし、3辺に刃部を作出している。620も小形の剥片を素材としているが、丸みをもつ刃部として使用している。621は黒色頁岩を使用し、一部に自然面を残す礫器である。622は1側縁が平坦になる磨石であり、一部分に敲打痕が認められる。623は下端部の欠損した凹石である。624は多孔石の破片であり、破損が著しい。残存部裏面の凹痕は認められない。625は大形で円形を呈する磨石である。626は凹石であり、両面を使用している。633は小円礫状の石製品であり、用途は不明である。635と619は打製石鏃である。ともに先端部を欠損している。635は平基無茎鏃であり、619は脚部非対称の凹基無茎鏃である。

⑧ ピット出土の石器 (第134図、図版100-2)

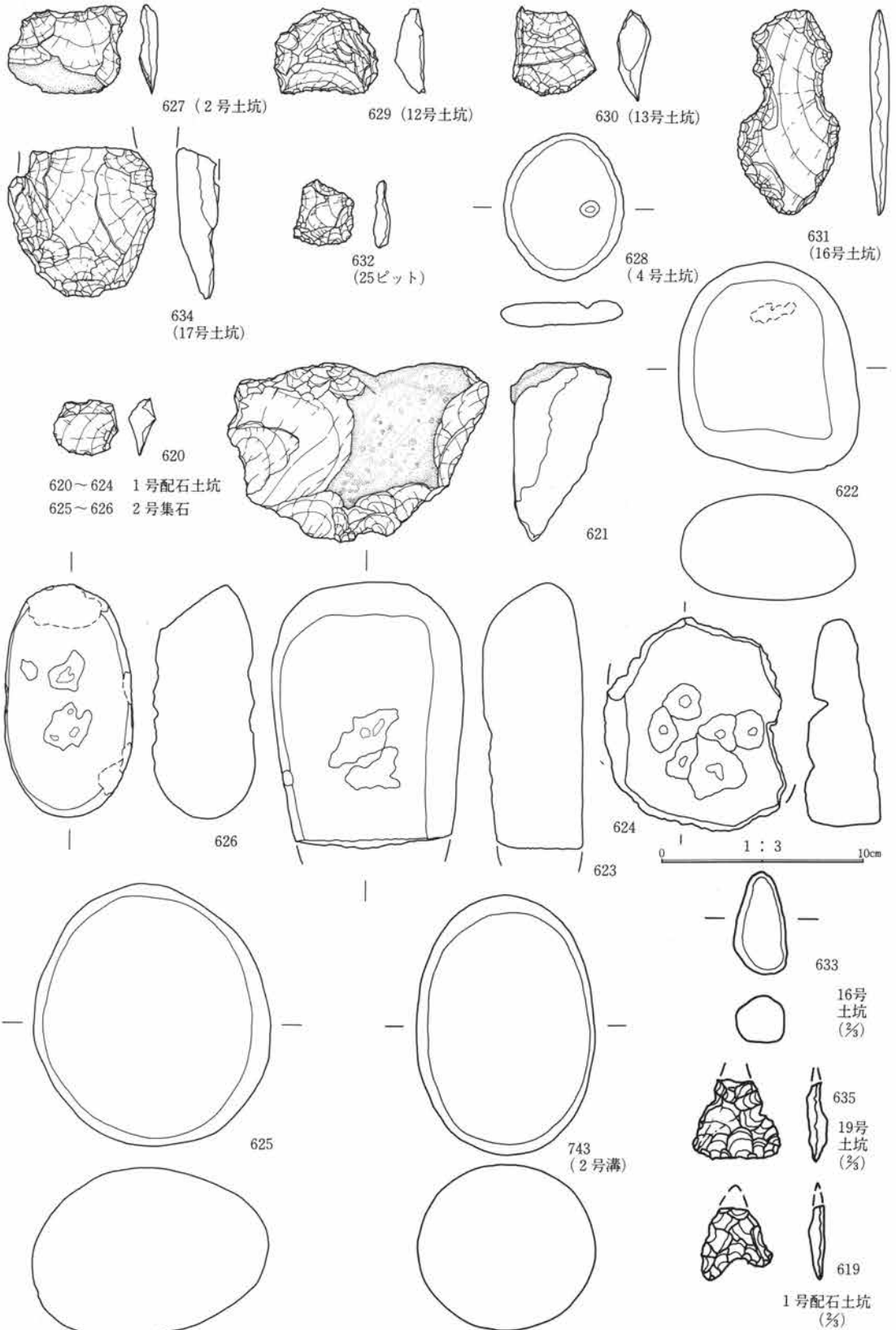
637は楕円に近い形状を呈する大形の磨石である。639は不定形の剥片を素材とする剥片石器である。下端部と正面左側縁の2辺を刃部として使用している。644も同様の剥片石器である。643は楔状を呈する剥片石器で、下端部にやや丸みをもった刃部として使用している。642は長軸方向の両端部に切り込みを加えた切目石錘である。638と641は凹基無茎石鏃である。

⑨ グリット出土の石器 (第135～139図、図版109～111)

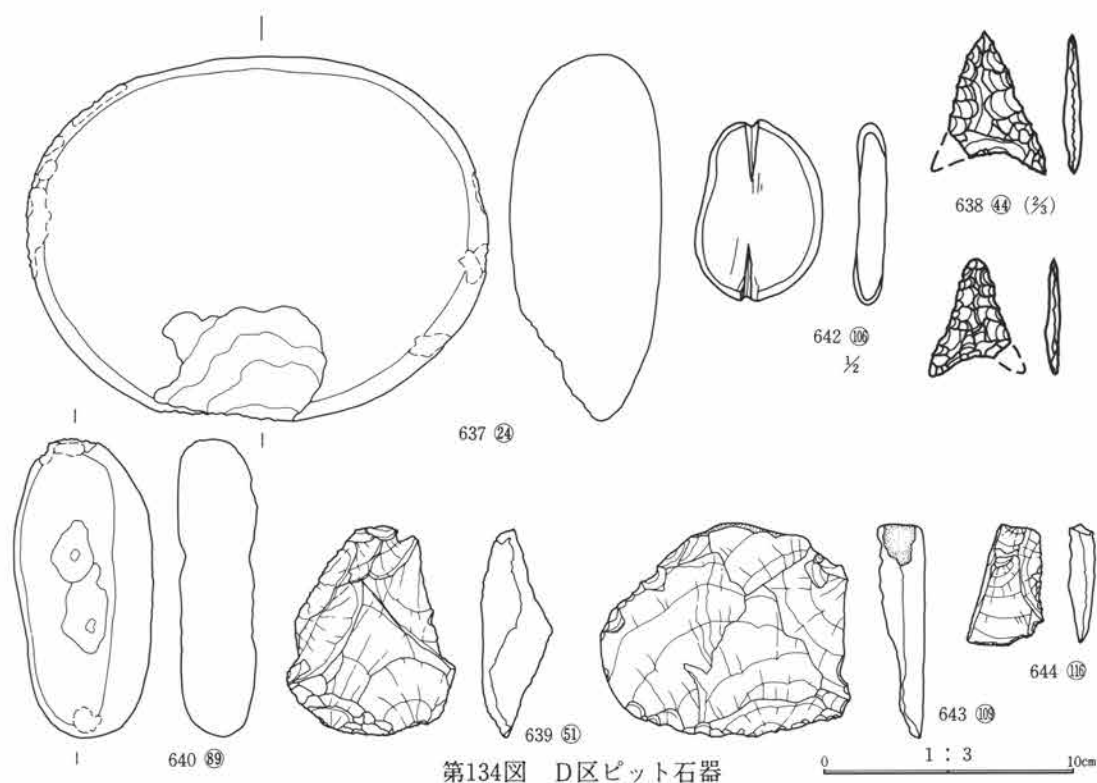
645～659は打製石斧である。645と646は小形・偏平で、短冊形の石斧である。645の刃縁はやや左上りとなり、丸みをおびている。647は正面に大きく自然面を残し、側縁部のみ調整加工を施した短冊形の石斧である。645と同様に刃縁は斜刃となっている。648は横断面がハマボコ状を呈する短冊形の石斧である。649は小型で短冊形をした石斧である。650～653は撓形の石斧である。650は調整加工の段階で欠損したものであると思われるが、変形の撓形となっている。刃部には磨耗痕が認められる。651は正面に大きく自然面を残している。刃縁は中央部で突出し、山形を呈している。652はトランシェ状の石斧である。653は三角形に近い形状を呈している。小形の石斧と思われる。654～659は分銅形の石斧である。654は両端部が尖っている。655も654と同様な形状を呈するが、刃縁はやや左上りとなる。656と657は四角形に近い形状を呈している。656の両端部は使用による磨耗痕が認められる。また、着柄によると思われる磨耗痕が、正面の右側挟り部から左上方にかけて認められる。657は断面が三角形を呈する肉厚の作りとなっている。658は両端ともに欠損している。器体は正面上方からねじれるような力が加わり、使用中に破損したものであると思われる。659は正面に大きく自然面を残し、挟り込み部のみしっかりした調整加工が施されている。分銅形に類する形状の石斧である。660は短冊形の平刃に近い磨製石斧である。側縁部に調整加工を施し、形状を整えた後に研磨している。661は小形の磨製石斧刃部破片である。

662～688は不定形の剥片を素材とした剥片石器である。662～664は大形の剥片を素材とし、下端部のみ平刃の刃部を作出した剥片石器である。665と666は台形に近い形状の剥片を素材とし、下端部の

第四章 深沢遺跡



第133図 D区土坑、集石、2号溝石器



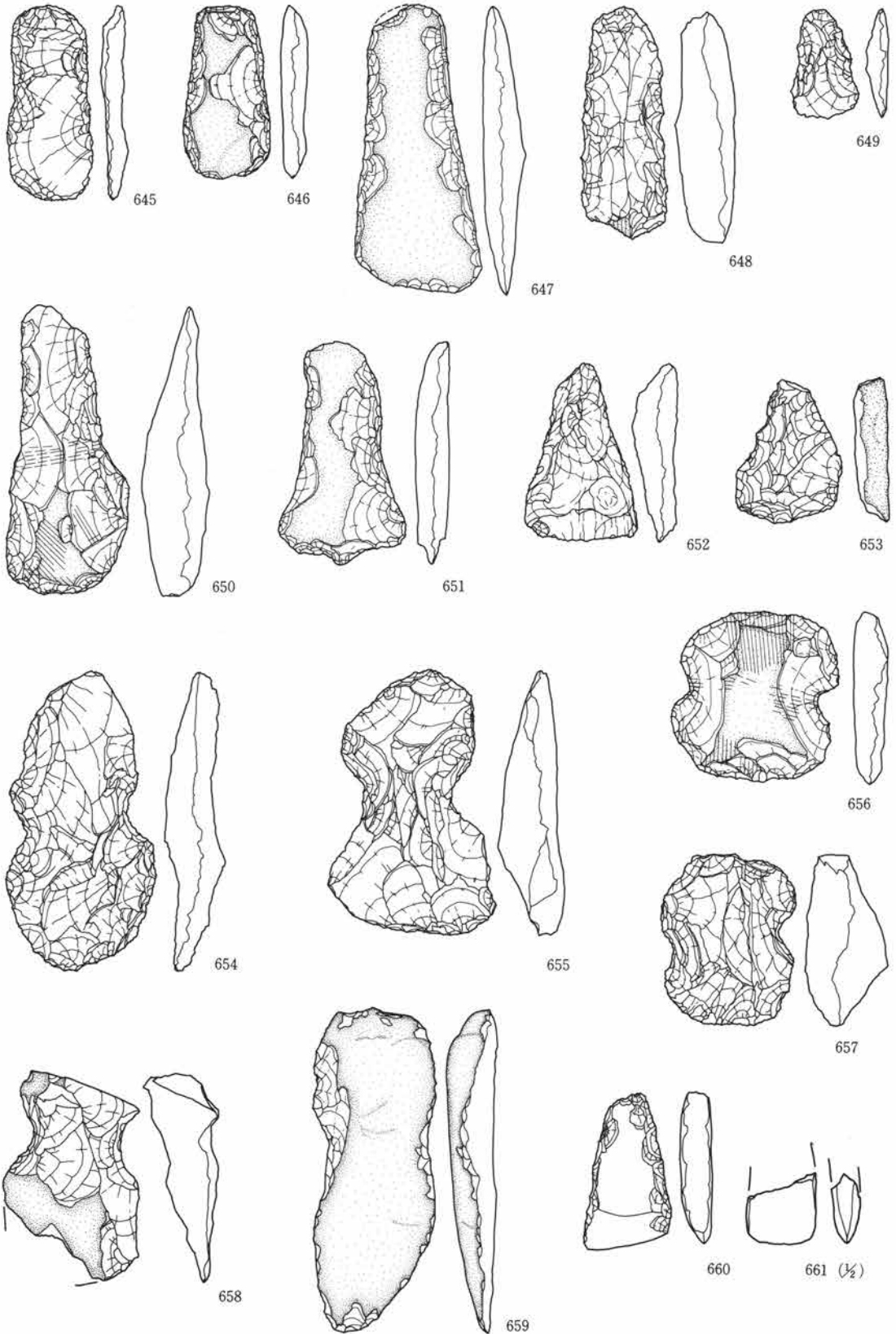
み刃部として使用している。667は縦長状の剥片の端部を切断し、1側縁を刃部としている。668・669は下端部のみ刃部としている。刃縁は丸みをおびている。670と671は下端部と両側縁の3辺を刃部としている。672は六角形に近い形状を呈している。下半部の3辺に刃部加工を施している。673は下端部と正面左側縁の2辺を刃部として使用している。678～683は下端部と両側縁の3辺を刃部として使用している。679は正方形に近い形状を呈している。680は下端部の刃縁はやや丸みを持ち、正面右側縁の刃部は角張っている。682は縦長の剥片を素材とし、刃部は方形を呈している。683は小形の剥片石器であり、下端部の刃縁は丸みをもっている。684と688は円形に近い形状を呈し、両面から刃部加工を全周に施し、剥片石器としている。685と687は正方形に近い形状を呈している。687は断面も長方形を呈している。石核の可能性もあろう。686の側縁部は全周に加工が施されているが、刃潰し加工なのか刃部加工なのか判然としない。689は自然面を残した剥片を使用した、片刃の礫器である。断面は三角形を呈し、刃縁は不規則な凹凸をもつが、平刃形態となっている。

690～706は石鏃である。690と691は大形の平基無茎鏃である。調整加工は粗く、先端部は丸みを持ち、左右非対称の作りである。未製品の可能性もあろう。692と693は基部がやや内彎する凹基無茎鏃である。693ら第1次剥離面を残している。694と695は小形の平基無茎鏃である。695は正三角形に近い形態で、押圧剥離により調整されている。696は大形の凹基無茎鏃である。脚部の側縁ややふくらみをもつ。697も凹基無茎鏃であり、脚部側縁は内彎する。699と700は小形の凹基無茎鏃である。701と702は平基有茎鏃である。702の逆し部先端は丸みをもっている。703は小形の凸基有茎鏃であり、先端と基部の一部が欠損している。704は小形の尖基鏃である。押圧剥離によりしっかりと調整され

ている。705は大形の鏃である。基部の先端は丸みもち、尖基鏃と円基鏃の中間的な形状を呈している。706は基部の先端部が欠損している。大形の尖基鏃に近い形状を呈しているが、両側縁から規則的な押圧剥離が施されている。石槍の可能性もあろう。707～712は石匙である。707と708はつまみ部が丸みをおび、錐部先端は欠損しているが、錐部を細身に尖らせた形態のものである。709と710は三角形を呈した剥片を素材とし、両側縁から調整加工を施し、三角形の錐部を作出したものである。711と712は不定形の剥片を素材とし、端部のみ刃部加工を施し、錐部を作出したものである。711の先端部やや彎曲している。713は粗い調整加工を両面に施した石器である。スクレイパーとしたが、石槍の可能性もあろう。714は縦形の石匙である。刃部は三角形を呈している。また、先端部には若干の調整加工を施している。715は横形の石匙である。716と717は敲石である。716は底面が平坦に近い形状を呈している。718と719は黒色頁岩製の石核である。718は河原石を半截にし、剥離を施し円錐形に製作した石核である。側面には自然面を残している。打面より連続的に剥離を施し、縦長状の剥片を作出している。しかし、側面にはかなりの部分礫表皮を残したままであり、本石核はさらに三角錐状に長い形態のものであったと考えられる。打面再生とともに剥片剥離作業を繰り返していたものであろう。719は舟底形を呈する石核であり、打面の上面観は長方形に近い形状を呈している。河原石を半截にして、上端から連続的に剥片剥離をおこなう技法は、基本的には718と類似しているものであろう。

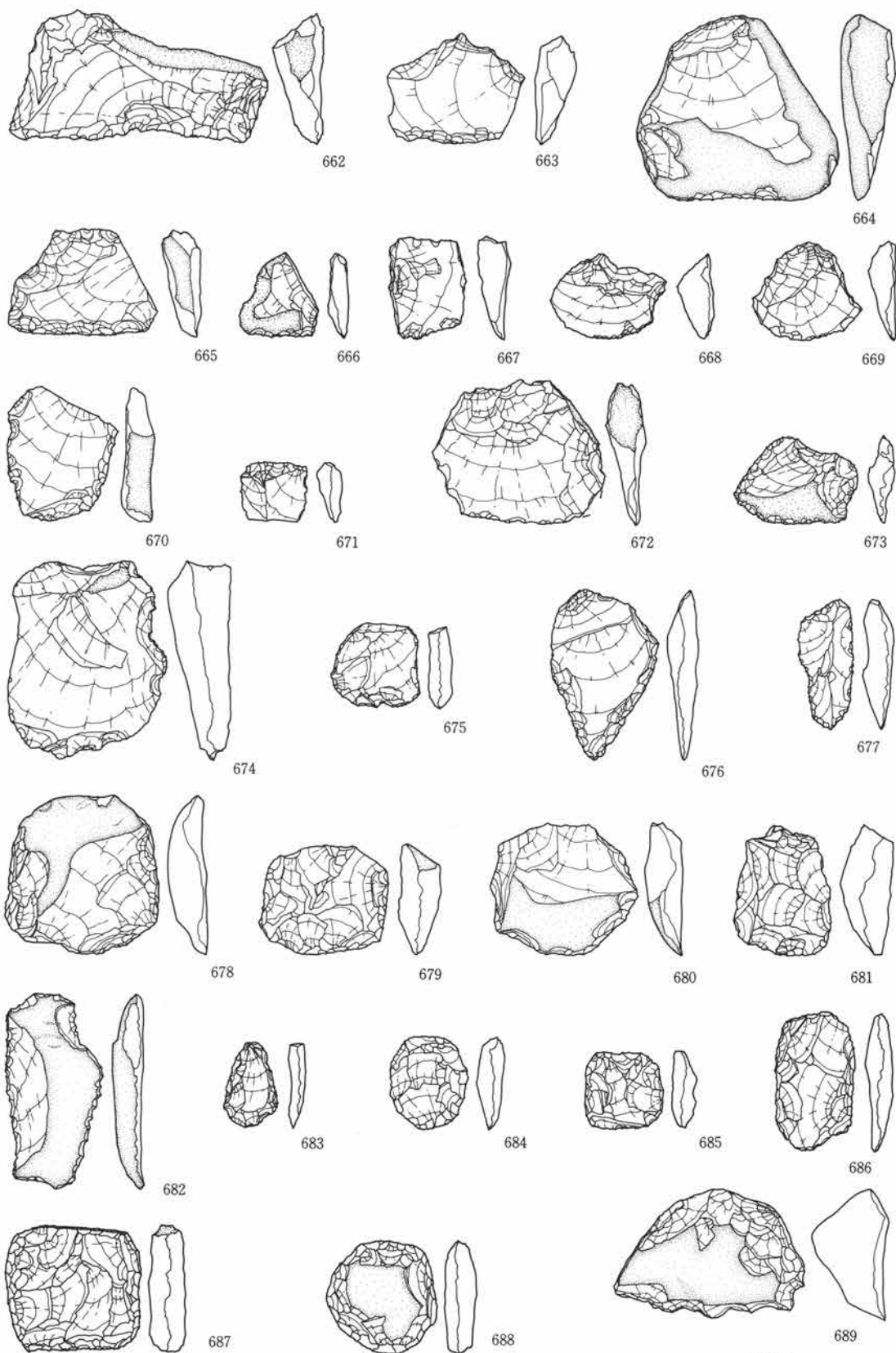
724と725は長方形で偏平な砥石である。724は「U」字状の溝をもち、欠損している。725は幅広の溝がつけられている。表・裏面ともに使用されている。726～736は円形を呈している。726の断面はほぼ円形となり、形態は球形に近い磨石である。730と731は小形で球形に近い磨石である。732と733は小形で楕円形を呈している。733は平面形は楕円形を呈した、小形で偏平の磨石である。734～736は長楕円形を呈した磨石である。735の横断面は方形に近い形状を呈している。737～739は凹石である。737の平面形は円形に近い。738は正面中央部のみ凹痕が認められる。739は長楕円形を呈している。742は基部が欠損しているが、無頭状の石棒破片と思われる。器体は研磨により面取りがされている。さらに、凹痕も認められる。

744～749は小円礫ないしは小円礫の石製品である。744と745は球形に近い。746～749は扁平な形態のものである。755は小形の凹基無茎石鏃である。756は不定形の剥片を素材とし、錐部のみ調整加工をした石錐である。720～723は楕円形を呈する礫を素材とし、長軸方向の両端に剥離を加え製作した石錐である。757は球形に近い形状の磨石である。750は短冊形を呈した打製石斧である。刃部は欠損している。751は揆形に近い形状の打製石斧である。刃部には磨耗痕が認められる。752は不定形の剥片の2辺を刃部とした剥片石器である。740は縁をもつ石皿の破片である。裏面には多数の凹痕がある。753はE区出土の資料である。不定形の剥片を素材とし、下端部を刃部として使用している。刃縁はやや内彎している。754は全周に刃部加工を施した小形の削器である。



第135図 D区フリット石器 (1)

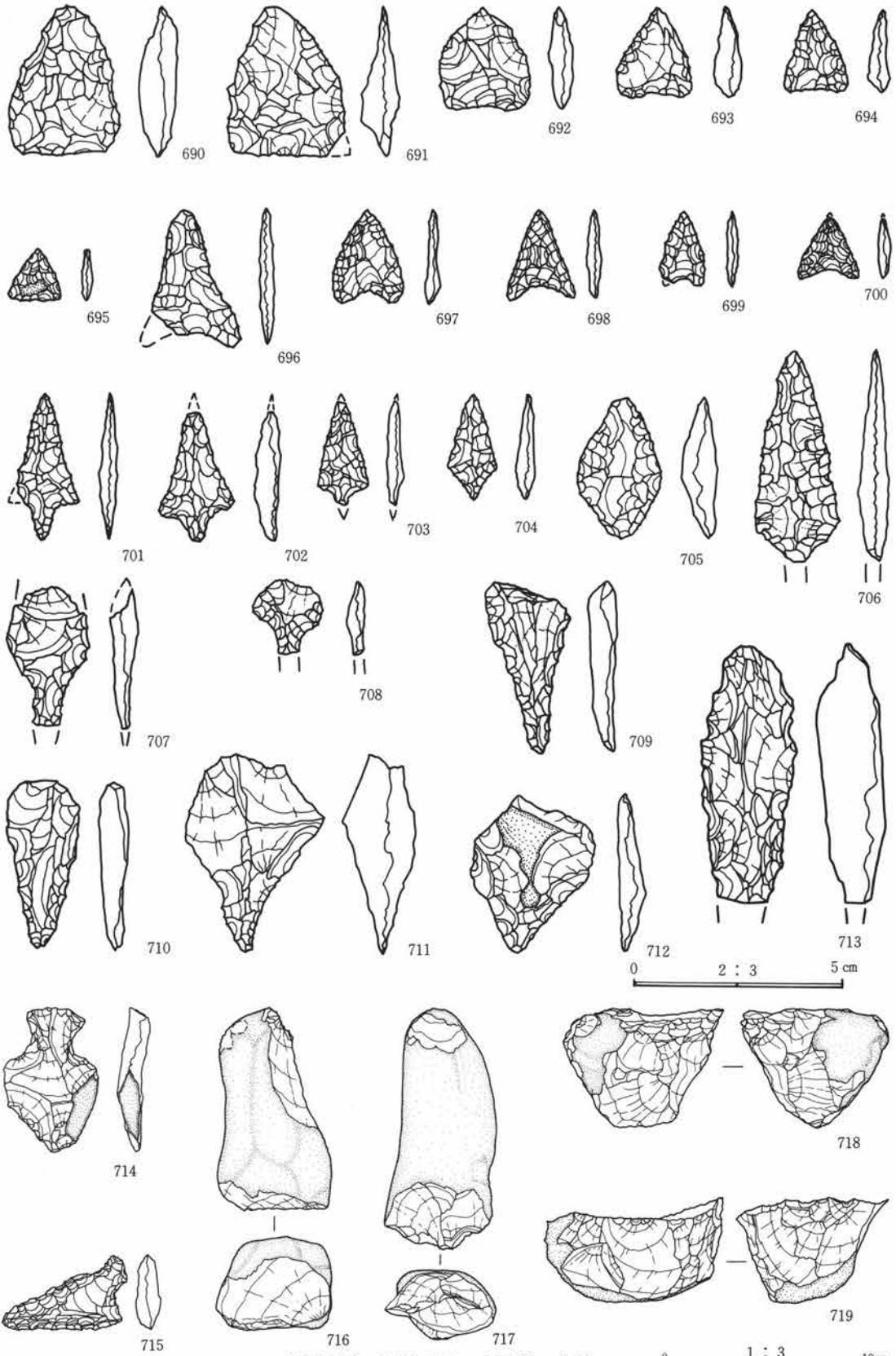
0 1 : 3 10cm



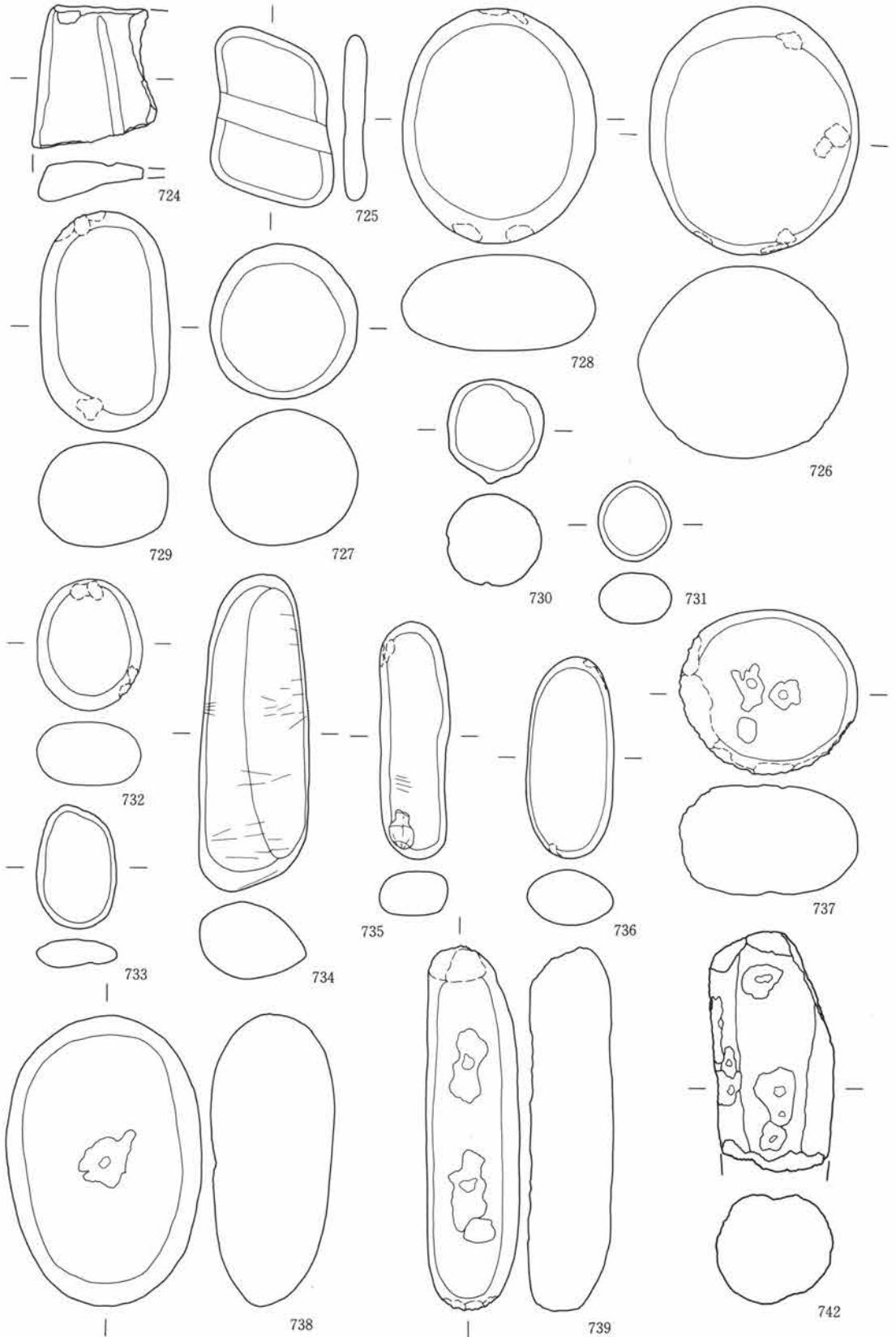
第136図 D区グリット石器 (2)

0 1 : 3 10cm

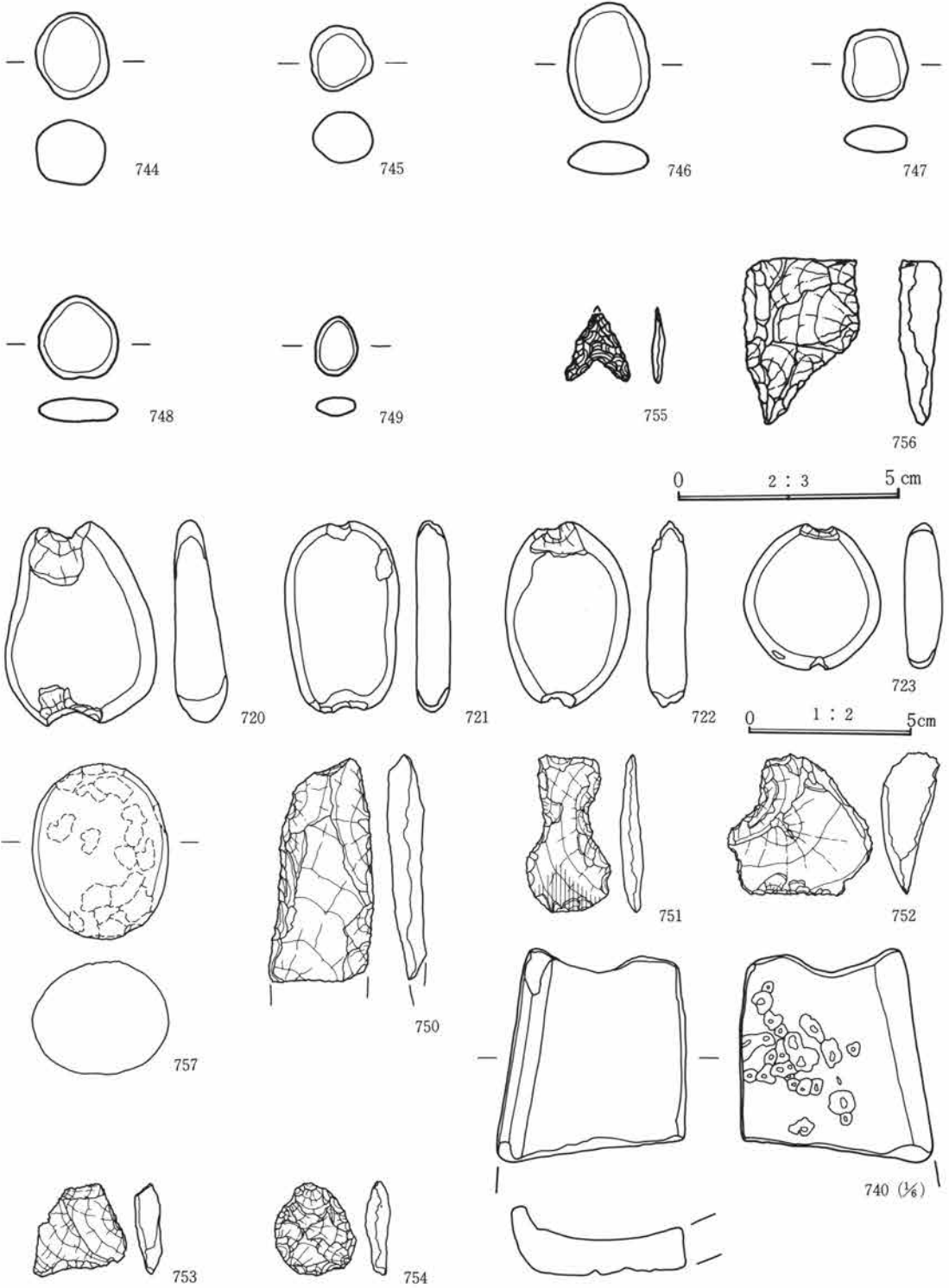
3. 縄文時代の遺構と遺物



第137図 D区グリット石器 (3)



第138図 D区グリット石器 (4)



第139図 D区グリット石器 (5)

第9表 深沢遺跡D区石器観察表

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
619	石鏃（ハート形）	D区1号配石土坑	先端部欠損	1.7	1.7	0.4	0.9	黒色安山岩
620	剥片石器	〃 〃		2.7	3.2	1.3	10.5	黒色頁岩
621	礫器	〃 〃		9.7	12.9	4.9	541.6	〃
622	磨石	〃 〃	完形	10.2	8.9	5.2	730.6	砂岩
623	凹石	〃 〃	基部欠損	12.9	9.3	4.9	190.4	粗粒安山岩
624	多孔石	〃 〃	一部欠損	10.4	9.0	3.7	393.6	溶結凝灰岩（大峰・三峰）
625	磨石	〃 2号集石	完形	12.8	11.6	8.4	1731.4	石英閃緑岩
626	凹石	〃 〃	〃	11.4	6.3	5.1	551.3	粗粒安山岩
627	剥片石器	〃 2号土坑		4.3	5.1	0.8	21.4	黒色頁岩
628	磨石	〃 4号土坑	完形	7.2	5.9	1.2	82.5	変質凝灰岩
629	剥片石器	〃 12号土坑		4.2	5.1	1.4	34.4	黒色安山岩
630	〃	〃 13号土坑		4.3	4.1	1.6	24.7	珪質頁岩
631	打製石斧（分銅形）	〃 16号土坑	完形	10.0	5.0	1.0	50.1	黒色頁岩
632	剥片石器	D区25ピラトNo26		3.3	2.9	0.8	7.5	〃
633	石製品（飾垂具）	〃 16号土坑	完形	2.5	1.3	1.1	4.4	チャート
634	打製石斧（分銅形）	〃 17号土坑		7.3	7.3	2.0	101.6	黒色頁岩
635	石鏃（三角形）	〃 19号土坑	先端部欠損	1.9	2.2	0.5	1.9	黒色安山岩
636	多孔石	〃 21号土坑	完形	19.0	20.1	10.0	4440.0	珪質変質岩
637	磨石	〃 ビット24	〃	18.5	14.5	6.1	2480.0	粗粒安山岩
638	石鏃（ハート形）	〃 ビット44	尾部欠損	2.8	1.8	0.3	1.4	黒色頁岩
639	剥片石器	〃 ビット51		8.3	6.7	2.9	125.7	〃
640	凹石	〃 ビット89	完形	11.9	5.6	3.2	328.5	石英閃緑岩
641	石鏃（ハート形）	〃 ビット96	尾部欠損	2.3	1.6	0.4	0.8	黒色頁岩
642	石錘	〃 ビット106	完形	4.8	3.4	0.8	18.3	〃 ？
643	剥片石器	〃 ビット109		4.8	3.0	1.1	12.6	〃
644	〃	〃 〃 116		8.5	9.7	1.8	143.0	〃
645	打製石斧（短冊形）	〃 2 R29（Ⅲ）	完形	9.5	4.3	1.3	55.1	〃

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
646	打製石斧（短冊形）	D区2 P30溝Ⅲ	完形	8.4	4.3	1.4	62.5	黒色頁岩
647	＊（＊）	＊ 2 M29—Ⅲ	略完形	14.1	6.3	2.1	202.1	グラノファイヤー
648	＊（＊）	＊ 2 R30—Ⅲ	完形	11.3	4.3	3.0	156.4	黒色頁岩
649	＊（＊）	＊ 2 N29—Ⅰ	＊	5.3	3.3	1.1	17.7	黒色安山岩
650	＊（撓形）	＊ グリット	＊	14.1	5.9	3.4	231.3	黒色頁岩
651	＊（＊）	＊ グリットⅢ	＊	11.9	6.2	0.8	105.0	＊
652	＊（＊）	＊ 2 L31—Ⅲ	＊	8.7	5.6	2.2	87.3	＊
653	＊（＊）	＊ 2 R29—Ⅲ	＊	7.1	5.1	1.7	64.3	＊
654	＊（分銅形）	＊ 2—排土	＊	14.5	7.4	3.0	262.5	＊
655	＊（＊）	＊ 2 N29—Ⅲ	＊	12.9	8.3	3.2	260.8	＊
656	＊（＊）	＊ 2 Q30—Ⅲ	＊	8.3	8.1	1.7	146.5	＊
657	＊（＊）	＊ 表土	＊	8.3	6.6	4.0	203.0	＊
658	＊（＊）	＊ 2 Q R 29～31Ⅲ	刃部欠損	9.2	6.6	3.3	167.9	＊
659	＊（＊）	＊ 2 L29—Ⅰ	完形	15.8	6.1	2.5	274.8	＊
660	磨製石斧（大形）	D区グリット		7.5	4.4	1.5	74.7	変玄武岩
661	＊（小形）	＊ 3 N29—Ⅴ	基部欠損	2.3	2.3	0.9	5.3	変質蛇紋岩
662	剥片石器	＊ 2 P26—Ⅲ		6.3	12.6	2.5	145.1	珪質頁岩
663	＊	＊ 2 L31—Ⅳ		5.3	6.8	2.0	56.1	黒色頁岩
664	＊	＊ 2 Q30溝下		9.0	9.9	2.7	263.8	＊
665	＊	＊ 2 O30溝		5.2	7.3	1.9	73.5	＊
666	＊	＊ 2 S30溝下		4.1	3.7	1.0	16.2	＊
667	＊	＊ 2 L31—Ⅲ		4.9	3.8	1.6	35.8	＊
668	＊	＊ 2 N30溝Ⅲ		4.2	5.6	1.8	32.1	珪質凝灰岩
669	＊	＊ 2 S29溝		4.7	5.3	1.4	23.5	黒色頁岩
670	＊	＊ ＊		6.5	5.4	1.6	54.8	＊
671	＊	＊ 2 P溝Ⅲ		2.9	3.2	1.2	10.1	珪質頁岩
672	＊	＊ 表土		7.0	8.5	1.9	91.8	黒色安山岩
673	＊	＊ 2 M N 31—Ⅲ		4.2	6.1	1.3	23.6	珪質頁岩

第四章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
674	剥片石器	D区2S29溝下		9.4	7.6	3.0	193.4	黒色頁岩
675	〃	〃 D区2O30—Ⅲ		4.1	4.3	1.3	22.9	黒色安山岩
676	〃	〃 2N30. 31—Ⅲ		8.2	5.3	1.5	51.7	黒色頁岩
677	〃	〃 2PQ29—Ⅲ		6.3	2.2	1.5	18.1	珪質頁岩
678	〃	〃 2O30—Ⅲ		8.7	7.5	2.0	127.6	黒色頁岩
679	〃	〃 グリット—Ⅲ溝上		5.3	6.3	2.1	76.1	〃
680	〃	〃 2R29—Ⅳ		6.4	7.2	1.8	90.6	〃
681	〃	〃 表土		6.3	4.8	2.6	70.0	〃
682	〃	〃 2N31—Ⅶ		9.5	4.8	1.5	66.5	〃
683	〃	〃 2L25—Ⅲ		4.1	2.6	0.8	9.3	〃
684	ラウンドスクレイパー	〃 2P30—Ⅲ	完形	4.5	3.8	1.4	23.1	黒色安山岩
685	〃	〃 2N30溝Ⅲ	〃	3.7	3.8	1.2	19.2	〃
686	剥片石器	〃 2M31—Ⅲ		6.7	3.9	1.4	37.9	黒色頁岩
687	〃	〃 2N30溝Ⅲ		6.1	6.6	1.8	118.8	〃
688	ラウンドスクレイパー	D区2O27 I—Ⅲ	完形	5.5	5.4	1.6	56.9	〃
689	剥片石器	〃 2P30溝Ⅲ		6.3	9.3	3.3	202.4	〃
690	石鏃 (三角形)	〃 2Q30溝下	完形	3.7	2.2	0.9	8.1	黒色安山岩
691	〃 (〃)	〃 2S29—Ⅲ	尾部一部欠	3.6	2.9	0.9	8.2	〃
692	〃 (〃)	〃 2S30—Ⅲ	完形	2.5	2.2	0.6	3.2	〃
693	〃 (〃)	〃 2P28—Ⅲ	〃	1.8	1.3	0.7	1.9	黒色頁岩
694	〃 (〃)	〃 2L29—Ⅲ	〃	2.0	1.6	0.5	1.3	〃
695	〃 (〃)	〃 2S30—Ⅲ	〃	1.3	1.3	0.3	0.4	黒曜石
696	〃 (ハート形)	〃 2R30—Ⅲ	尾部一部欠	3.4	2.1	0.4	1.9	黒色安山岩
697	〃 (〃)	〃 2Q24—Ⅲ	完形	2.3	1.7	0.4	0.9	珪質頁岩
698	〃 (〃)	〃 2S30—Ⅲ	〃	2.2	1.7	0.4	0.7	〃
699	〃 (〃)	〃 2R29溝Ⅲ	〃	1.8	1.1	0.3	0.5	黒色安山岩
700	〃 (〃)	〃 2S30—Ⅲ	先端一部欠	1.4	1.5	0.3	0.4	黒曜石
701	〃 (有茎形)	〃 表土	尾部一部欠	3.6	1.5	0.5	1.7	珪質頁岩

3. 縄文時代の遺構と遺物

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
702	石鏃(有茎形)	D区2 M31-Ⅲ	先端部欠損	3.1	1.8	0.6	2.6	黒色頁岩
703	◇ (◇)	◇ 排土	先端尾部欠	2.5	1.2	0.4	0.8	チャート
704	◇ (◇)	◇ 2 O25-Ⅲ	完形	2.6	1.2	0.4	0.8	黒色頁岩
705	◇	◇ 2 S29-Ⅲ	◇	3.4	2.1	0.9	4.7	◇
706	石槍	◇ 2 R21-Ⅲ	尾部欠損	5.1	2.1	0.8	6.2	◇
707	ドリル	◇ 2 L29-Ⅲ	先端部欠損	3.4	2.0	0.7	3.9	◇
708	◇	◇ 2 Q27-Ⅲ	◇	1.8	1.7	0.5	1.2	◇
709	◇	◇ 2 Q31-Ⅲ	完形	4.2	2.0	0.7	4.3	黒色安山岩
710	◇	◇ 2 R29溝Ⅲ	◇	4.1	1.8	0.8	4.8	黒色頁岩
711	◇	◇ 2 N O26-Ⅲ	◇	4.8	3.4	1.8	15.5	◇
712	◇	◇ 2 Q29-Ⅲ	◇	3.8	2.9	0.7	7.1	◇
713	スクレイパー	◇ 2 S30Ⅲ R1溝上	基部先端欠	6.2	2.3	1.7	20.7	珪質頁岩
714	石匙	◇ 表土	完形	7.0	4.7	1.6	36.4	黒色頁岩
715	◇	◇ Q R S29~31-Ⅲ	◇	5.9	3.4	1.2	19.2	チャート
716	蔽石	D区2 S29溝下	側面先端欠	9.9	5.6	4.5	313.9	黒色安山岩
717	◇	◇ 2 R29-溝上Ⅲ	先端部欠損	11.7	5.5	3.4	208.3	黒色頁岩
718	石核	◇ 2 R33-I		5.8	7.9	7.2	328.6	◇
719	◇	◇ 2 L31-Ⅲ		4.0	8.8	6.6	356.6	◇
720	石錘	◇ 2 N31-Ⅶ⑦	完形	6.2	4.7	1.6	57.1	◇
721	◇	◇ 2 N30-Ⅲ	◇	5.9	3.5	1.1	35.7	◇
722	◇	◇ 2 R27-Ⅲ	◇	5.7	3.8	1.2	44.2	◇
723	◇	◇ 2 N31-Ⅲ	◇	4.5	4.2	1.2	32.9	◇
724	砥石	◇ 表土	破片	7.0	6.1	1.8	92.0	砂岩
725	◇	◇ 2 Q30-Ⅲ	完形	6.1	8.8	1.1	97.2	◇
726	磨石	◇ 2 S29溝下	◇	12.1	10.4	9.5	1722.3	石英閃緑岩
727	◇	◇ 2 L29-Ⅲ	◇	7.6	7.3	6.1	516.9	デイサイト質凝灰岩
728	◇	◇ 2-I溝N-25	◇	11.5	9.6	4.6	833.0	砂岩
729	◇	◇ 2 S30-Ⅲ	◇	10.7	6.4	5.1	631.4	閃緑岩

第Ⅳ章 深 沢 遺 跡

番号	種 類	出 土 位 置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石 質
730	磨石	D区2 N30—Ⅲ	完形	5.1	4.8	4.5	124.2	デイサイト質凝灰岩
731	◇	◇ 2 S30—Ⅲ	◇	3.9	3.6	2.5	47.9	砂岩
732	◇	◇ 2 R30—Ⅲ	◇	6.4	5.2	3.1	177.6	輝緑岩
733	◇	◇ 2 O30—Ⅲ	◇	6.0	4.0	1.4	50.8	黒色頁岩
734	◇	◇ 表土	◇	15.5	5.4	3.7	443.2	細粒安山岩
735	◇	◇ 2 M29—Ⅲ	◇	11.6	3.5	2.2	165.6	点紋頁岩
736	◇	◇ 2 P30—Ⅲ	◇	9.9	4.3	2.7	175.5	砂岩
737	凹石	◇ 2 N O26—Ⅲ	◇	8.8	8.0	5.3	579.0	かこう岩
738	◇	◇ 2 P29—Ⅲ	◇	14.2	9.7	6.0	1386.4	閃緑岩
739	◇	◇ 溝54	◇	17.8	4.6	4.1	621.5	細粒安山岩
740	石皿	◇ 2 O30溝	両端部欠損	19.6	17.5	6.5	1883.9	粗粒安山岩
741	多孔石	◇ 排土	先端部欠損	10.3	8.8	8.9	995.9	珪質頁岩
742	石棒	◇ 2 S30—Ⅲ	基部欠損	11.8	5.7	5.3	678.4	緑色片岩
743	丸石	◇ 溝No2	完形	25.4	17.4	16.2	10.2kg	アブライト
744	石製品 (飾垂具)	D区2 N30—Ⅲ	完形	2.0	1.7	1.5	6.5	石英閃緑岩
745	◇ (◇)	◇ 2 O S28—Ⅲ	◇	1.5	1.4	1.2	3.1	チャート
746	◇ (◇)	◇ 表土	◇	2.7	1.9	0.6	5.2	◇
747	◇ (◇)	◇ 2 M31—Ⅲ	◇	2.7	1.5	0.6	2.3	珪質頁岩
748	◇ (◇)	◇ 2 Q31—Ⅲ	◇	1.9	1.8	0.5	2.4	珪質凝灰岩
749	◇ (◇)	◇ 2 S30—Ⅲ	◇	1.3	1.0	0.4	0.8	珪質頁岩
750	打製石斧 (短冊形)	◇ 3 R11—Ⅲ	刃部欠損	10.2	4.8	1.7	94.7	黒色頁岩
751	◇ (挽形)	E区3 P9—Ⅲ	完形	7.2	3.9	1.0	26.5	◇
752	剥片石器	D区3 N03—I		6.5	6.6	2.5	85.2	◇
753	◇	◇ 3 N29—Ⅴ		4.2	4.3	1.2	18.0	珪質頁岩
754	ラウンドスクレイパー	E区3 N Q3—I		4.3	3.7	1.2	16.8	珪質凝灰岩
755	石鏃 (ハート形)	D区表土	先端部欠損	1.6	1.5	0.3	0.4	黒曜石
756	ドリル	E区3 R01—Ⅲ	完形	3.8	2.7	1.0	10.5	黒色安山岩
757	磨石	◇ 3 M2—Ⅲ	◇	8.1	6.3	3.2	380.0	石英閃緑岩

4 平安時代の遺構と遺物

① 概要

深沢遺跡で平安時代の遺構が確認されたのは調査区北端のE区だけで、竪穴住居跡が2軒確認された。E区は上位段丘面中位で大峰山東南麓末端の丘陵へ立ち上がる南西傾斜地に位置し、D区との間には幅30mの深い埋没谷が湾入し、地形を異にしている。調査範囲は東西25m、南北28mで、重機により表土を掘削し調査を行なった。

グリットからの出土遺物としては第154図の714・718～723に代表される10世紀代を中心とする遺物が少量出土した。

714は碗の口縁部破片で、718は高台付碗の完形で口縁部が外反し体部は内湾ぎみに下向し外向する高台が付いている。719～721は灰釉の碗か皿の底部破片である。722に丸瓦の小片である。723は蓋の抓み部の破片で天井部が打ち欠かれ、抓みにも相対する位置を打ち欠いている。転用して用いたものであるが用途は不明である。

本遺跡のある利根川・赤谷川の合流点より北西地域は8世紀～10世紀の月夜野古窯跡群が形成されま地域であり、E区の2軒の住居跡より南西300mには深沢窯跡B・C群が、北400mには真沢・水沼窯跡があり、時期的にも合致し窯跡群と何らかの関係を有する小集落が形成されていた可能性がある。

② 住居跡

E区1号住居跡（第141図、図版113）

調査中央の3区L-20グリットに位置し、ローム面を床面としていたが傾斜地に位置していたため東壁は確認できなかった。1号柱列等の近世掘立柱建物の柱穴によって切られている。

平面形は隅丸方形と推定され、規模は東西（推定）3.52m、南北3.42mで南北軸はN-15°-Eである。覆土は傾斜面上方より自然に埋没した様相を示している。

周壁は西壁において高さ49cmが確認され急傾斜で立ち上っている。床面は平坦であるがやや凹凸があり、中央部がやや固く締っていた。周壁より約40cm内側の各隅には「L」字状に幅16～21cm、深さ3～5cmの箱掘り状の周溝が巡っていた。

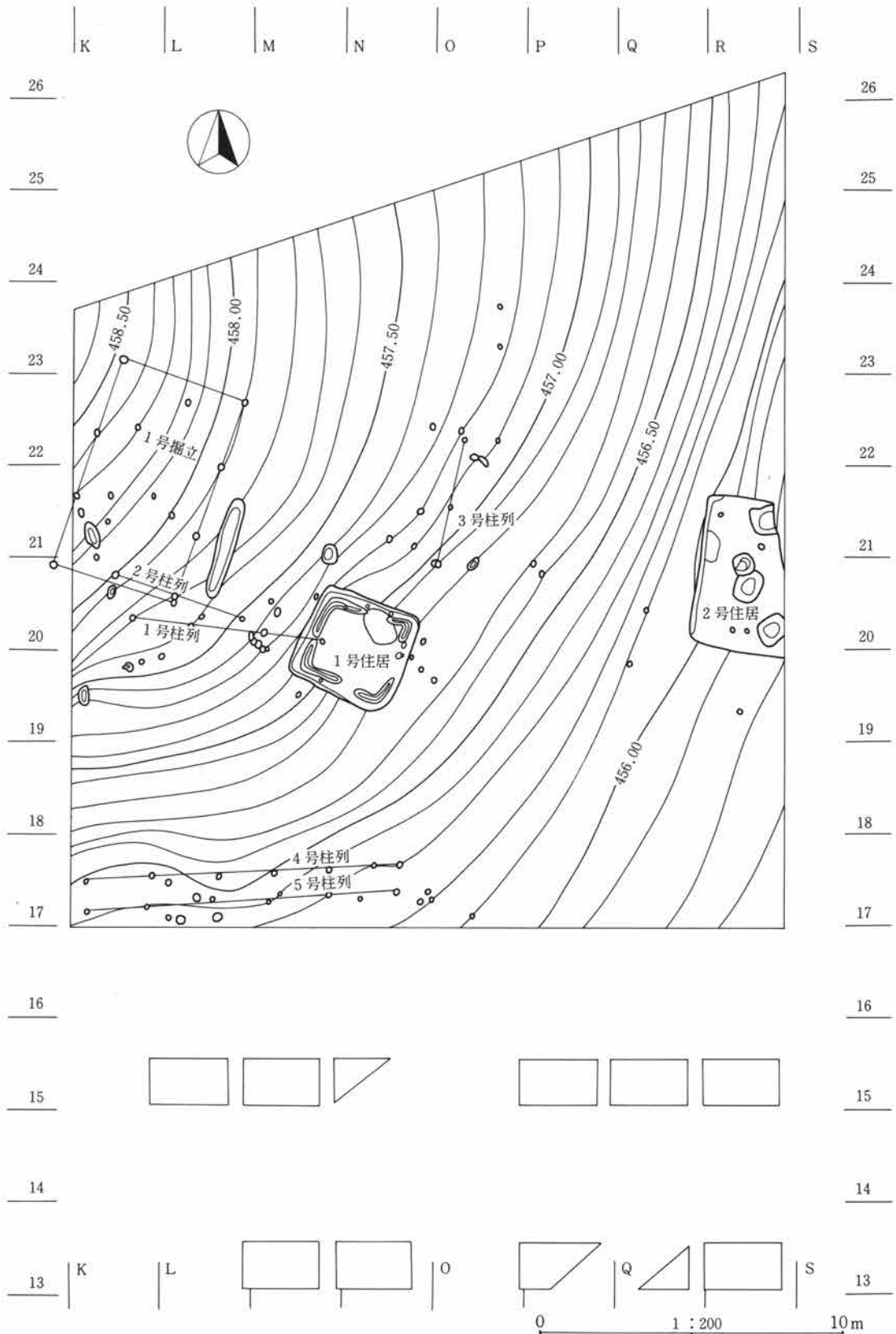
カマドは確認されなかったが北壁のやや東寄りに径約1.8mの範囲で焼土が堆積しており、この位置にカマドがあったと推定される。貯蔵穴等他の施設は確認されなかった。

遺物は西壁寄りの周溝上面に碗の小破片2点と覆土中より同じく小破片が数点出土しただけである。時期の決め手を欠くが、小破片はE区2号住居跡同様9世紀末～10世紀初頭の時期のものである。

E区2号住居跡（第142図、図版114・115）

調査中央東端の3区R-20グリットに位置し、東半は調査区域外となり不明である。また、住居跡のある位置は傾斜は緩やかとなるが、厚さ約20cmの表土下が直接ローム面となり周壁は立ち上がりわずかに確認できた程度である。近世の4本の柱穴が切っている。

平面形は不明であるが南東隅の落ち込みは貯蔵穴と考えられ、カマドを直近の東壁に持っている



第140图 E区全体图

すれば南北に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。規模は現状で西壁4.90m、南壁3.15m、北壁2.05mが確認された。西壁の方位はN-6°-Wである。覆土は攪乱が激しいが自然に埋没した様相を示す。

周壁の高さはほとんどなく、立ち上がりは直線的である。床面は平坦で中央部が固く締っていた。また、西壁中央部の床面上には94×40cmの範囲で白色粘土が薄く堆積し、近くに焼土も小範囲ながら散布していた。周溝は西壁部のみ確認され、幅15~20m、深さ2cmで「U」字状なしていた。柱穴は不明である。

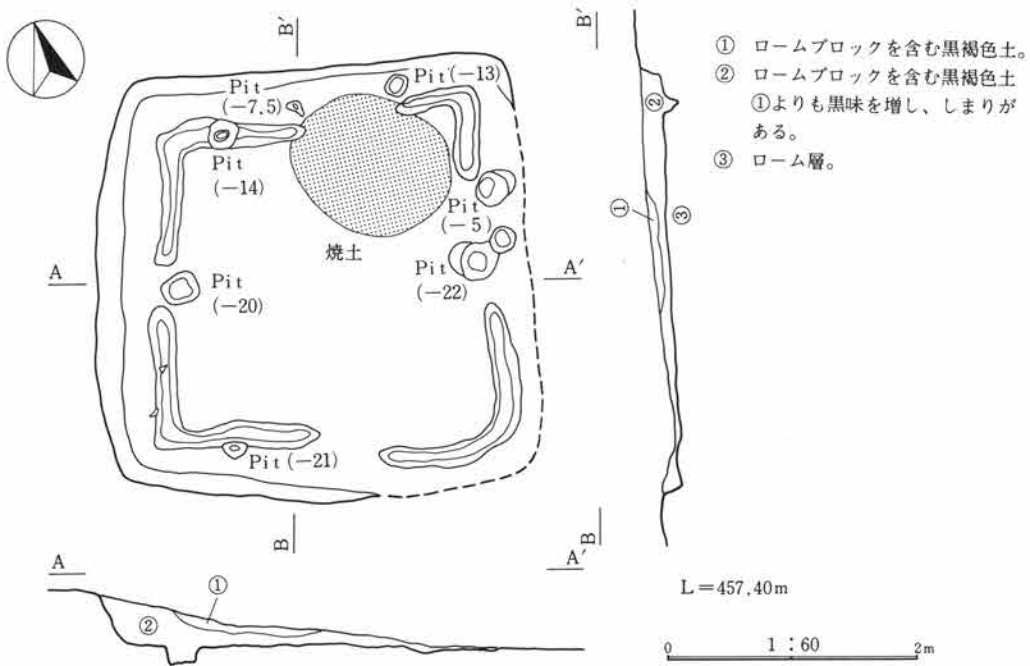
貯蔵穴と考えられる落ち込みが南東隅寄りにあり、楕円形をなし規模は86×64cm、深さ17cmで丸底状を呈していた。カマドは調査区外の東壁にあると推定される。

中央部と北壁中央部寄りには3基の楕円形をなす床面下の落ち込みが確認された。規模は径35~90cm、深さ11~20cmで丸底状をなしていた。

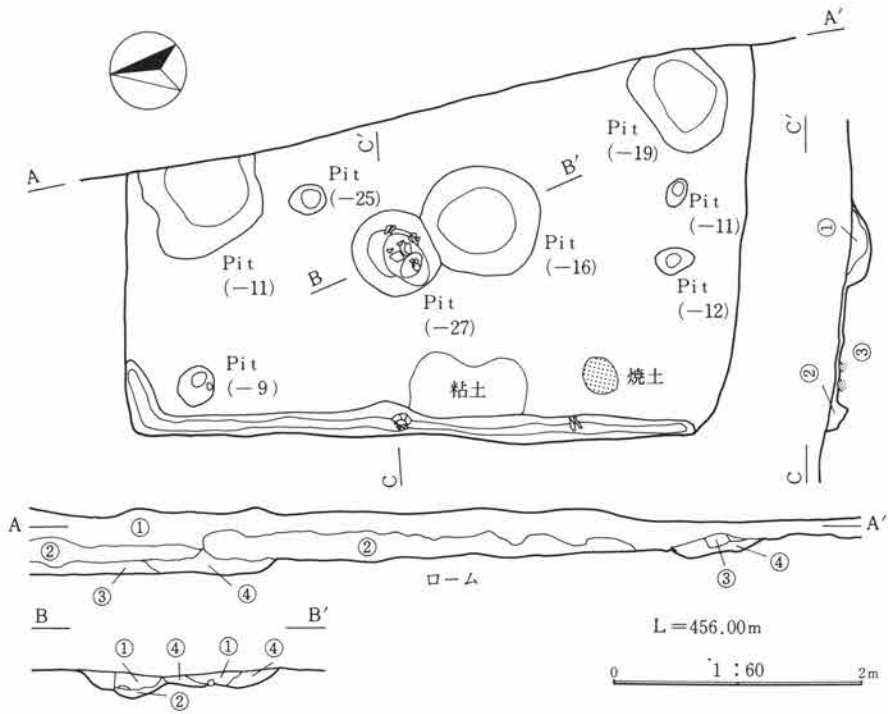
遺物は須恵器の小破片が貯蔵穴や床面下の落ち込みに集中して出土した。第142図の711~717はともに中央部の床面下の落ち込みから出土したものである。

711~716は須恵器碗の口縁部~体部の破片で、口縁部が外反し体部はわずかに膨らみを持って内湾ぎみに下向き外面にロクロ痕を明瞭に残している。711の底部は右回転の糸切り底である。717は羽釜の破片で口縁部は直立し直下に断面三角形の凸帯が巡り、胴部外面はヘラケズリが施されている。これらの土器の胎土には白色鉱物粒子を多く含み、色調は黒褐色~橙色で酸化焙焼成となっている。

出土遺物は月夜野古窯跡群北半の胎土特性を有しており、時期は9世紀末~10世紀初頭と考えられる。



第141図 E区1号住居跡

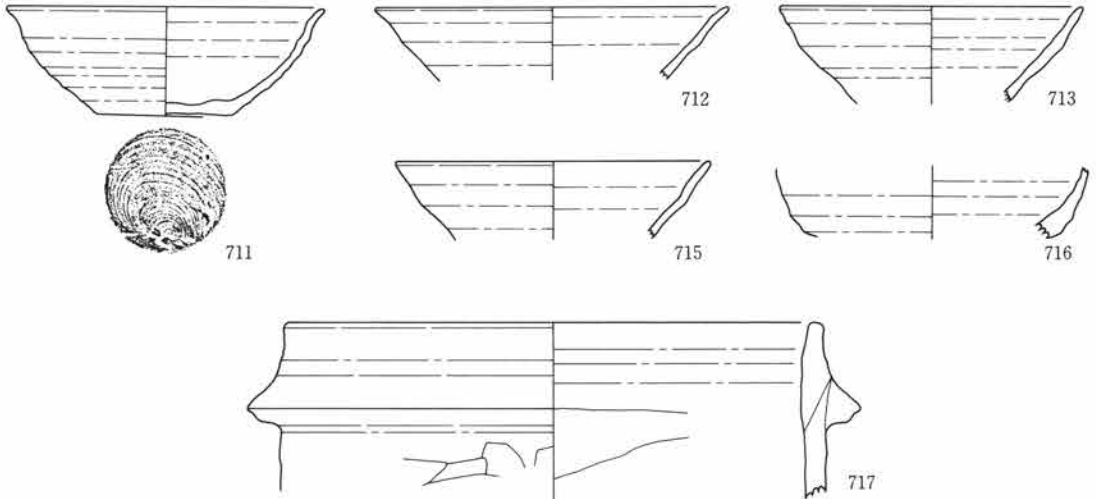


住居土層説明 (A~A')

- ① 黒褐色土 軟質でボンボン橙色のスコリア微粒子を含む、桑畑耕作土。
- ② 黒褐色土 ロームブロック(3~4cm)を多く含む。
- ③ ローム ロームブロック(3~4cm)と白色粘土とか混在する。
- ④ ローム 攪乱を受けたローム層5~8cmの大きなブロックが再度埋められた状態。

床下土層説明 (B~B', C~C')

- ① 黒褐色土 ロームブロック土器片を含む。
- ② 茶褐色土 ロームブロックがシミ状に入る。軟質。(住居址フク土)
- ③ ローム
- ④ 茶褐色土 ②層と同じであるが、粘土や焼土・炭を多量に含む。



第142図 E区2号住居跡遺構、遺物

5. 近世の遺構と遺物

① 概要

近世の遺構は、B、D、E区の各調査区から掘立柱建物跡12棟、柱列9列、溝、土坑、井戸1基が確認されている。このほかには、木の根痕を含む直径20～30cm前後のピットがB区とD区とに多数ある。これらは、相互に重複し合っ、まとまりのある群在傾向を持っている。占地状態は各調査区の中でも一段高い部分から傾斜地にかけてで、B区のみが現在の集落と重複し、D、E区は耕作地であった。

B区の遺構は、調査に入る前まよあった民家との関係が深く、その母屋と納屋の近くの位置からは規模と棟の方向を同じくする2時期以上に細分される8棟の建物があり、一軒の屋敷地の推移を示している可能性がある。

D区の遺構は、谷地に面した北側の緩傾斜地にあり、E区とは谷地をはさんで対峙した位置にある。掘立柱建物跡2棟、柱列4列、井戸1基、ピットが内訳で、建物跡と柱列との重複する様子からは、その数が増えるとともに、占地の上で一定の位置が意識されていたことが示されている。

E区の遺構は、谷地の南傾斜面から高台にかけて、掘立柱建物跡1棟、柱列5列、溝、ピットが確認されている。

遺物は、13世紀代の青磁、常滑大甕等の中世のものが少量出土したが、主体は17～18世紀代にある。陶磁器には、伊万里系、唐津系、京焼系、瀬戸系のものがあり、凡そ近世後期から現代にいたるものである。土製品には、鉄滓と共伴する羽口、土人形がある。石製品には、砥石、石版がある。金属製品には、古寛永を始めとする銭貨、鎌、釘、鉄蹄、ものさし、筆さし、煙管、鏝等がある。これらは、上記の遺構と直接結びつくものではないが、遺構の凡その年代観を示すものである。

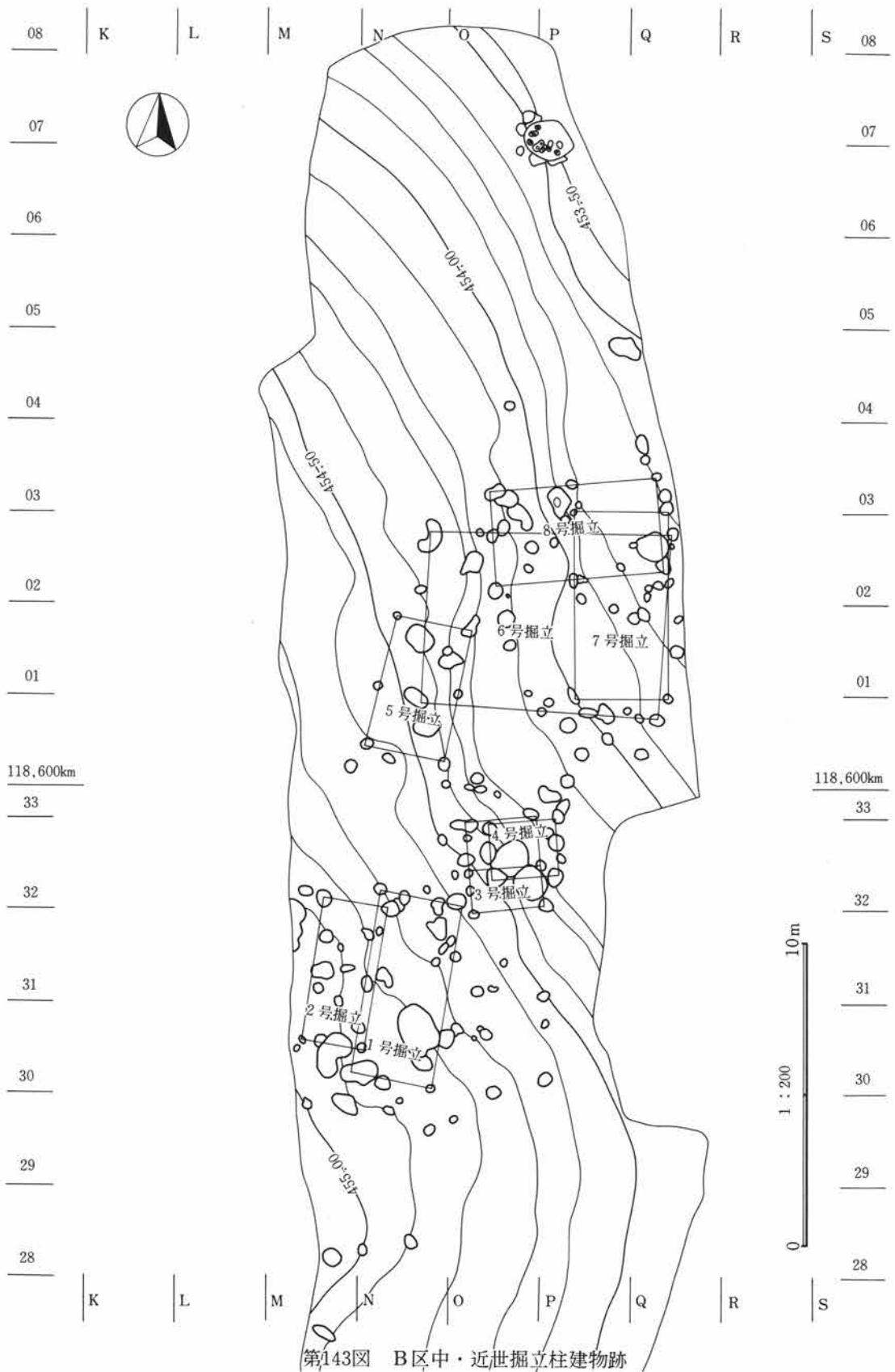
② 掘立柱建物跡（第143～153図、第10表）、柱列

B区1号掘立柱建物跡（第144図、第10表）

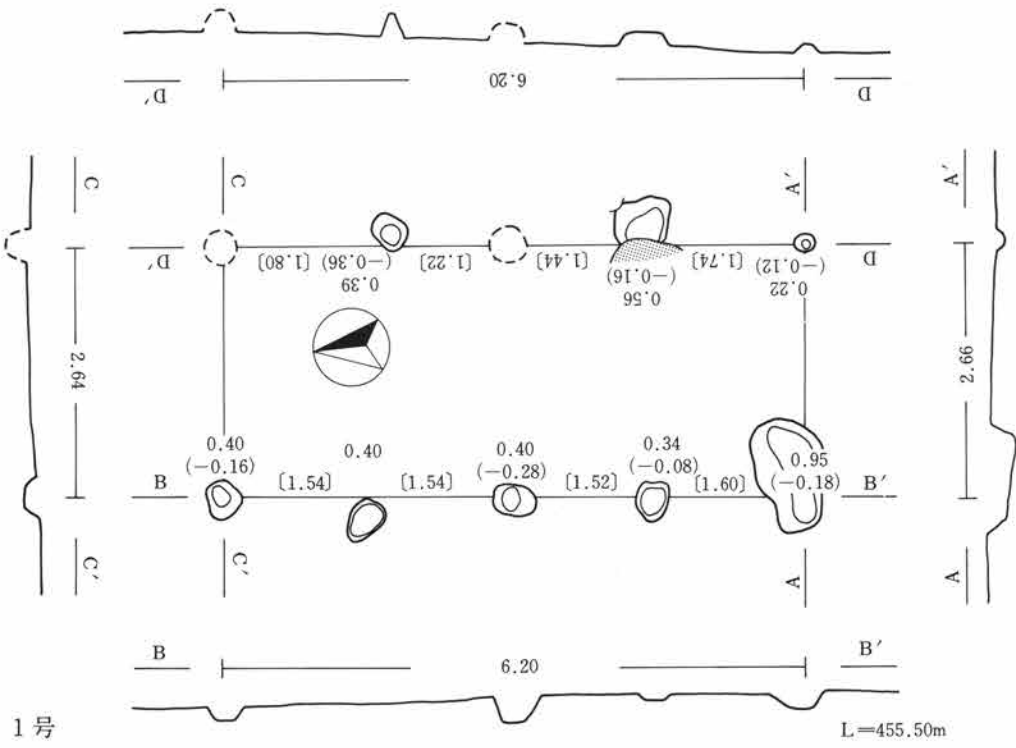
1M～N-30～32グリットに位置し、西桁側で2号、北東隅で3号、4号の各掘立柱建物跡と重複乃至隣接している。南北の棟方向でN-5°-Eを示す。構造は、桁行2間、梁間1間で歪みはない。規模は、桁行6.20m、梁行2.66m、面積16.5㎡である。柱穴は円形を基調とするが、山石にかかる位置では不整形を呈している。柱痕は検出されなかった。出土遺物なし。

B区2号掘立柱建物跡（第144図、第10表）

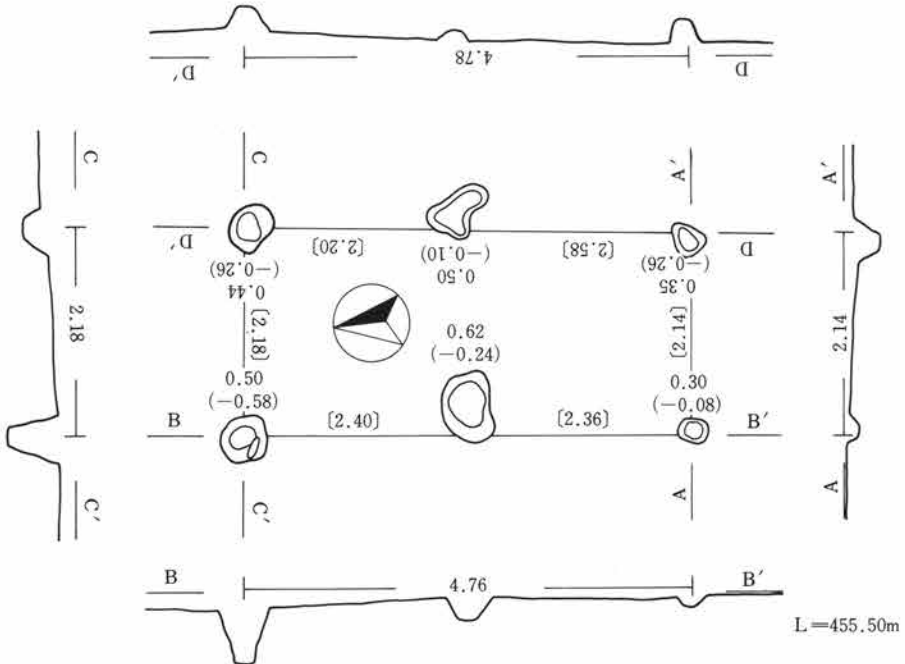
1M～N-30～32グリットで、1号の西桁行に重複している。南北の棟方向でN-7°-Eを示す。構造は、桁行2間、梁間1間で殆ど歪みがない。規模は、桁行4.78m、梁行2.18m、面積10.4㎡である。柱穴は円形を呈し、北西隅が特に深い。1号との新旧関係は不明であるが、位置、規模、方位の点で同一の傾向を示しており、同一の目的をもって作られた建物であろう。



第143图 B区中・近世掘立柱建物跡

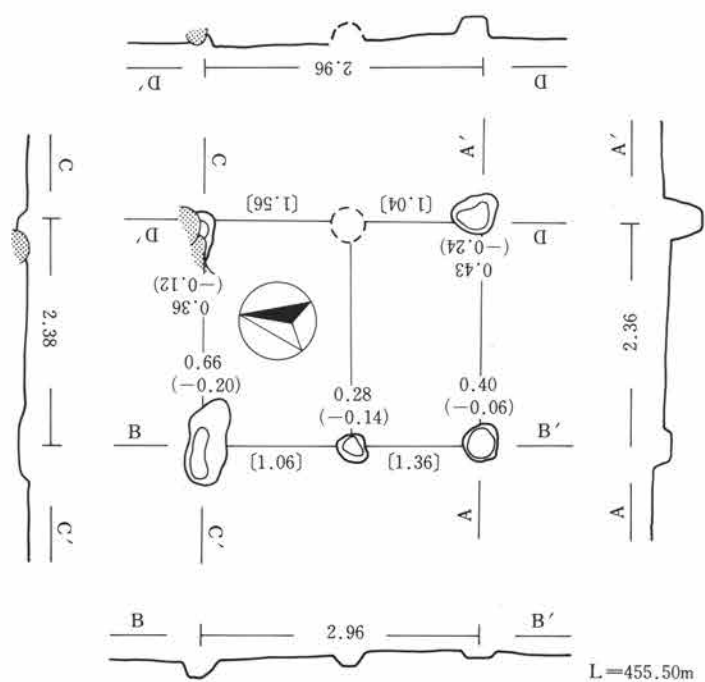


2号



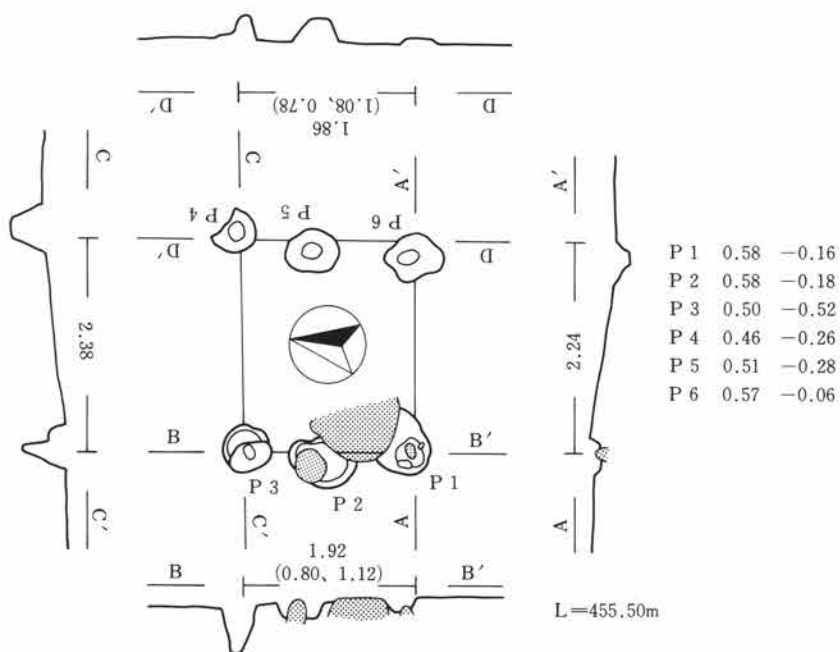
第144図 B区1・2号掘立柱建物跡

0 1 : 80 4m



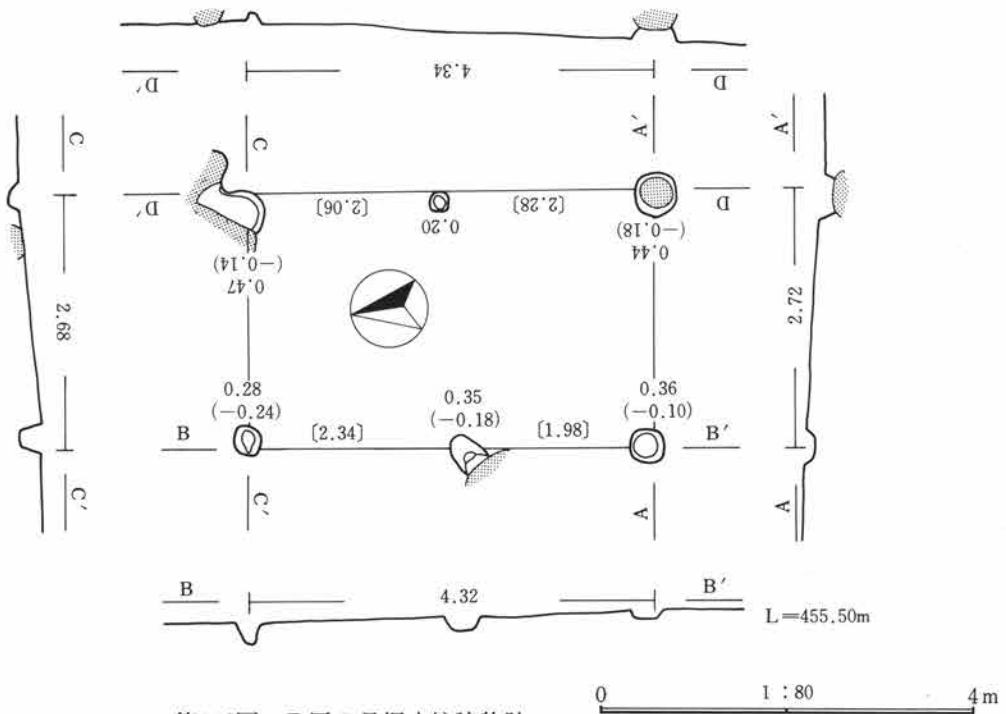
3号

4号



第145図 B区3・4号掘立柱建物跡

0 1 : 80 4m



第146図 B区5号掘立柱建物跡

B区3号掘立柱建物跡 (第145図、第10表)

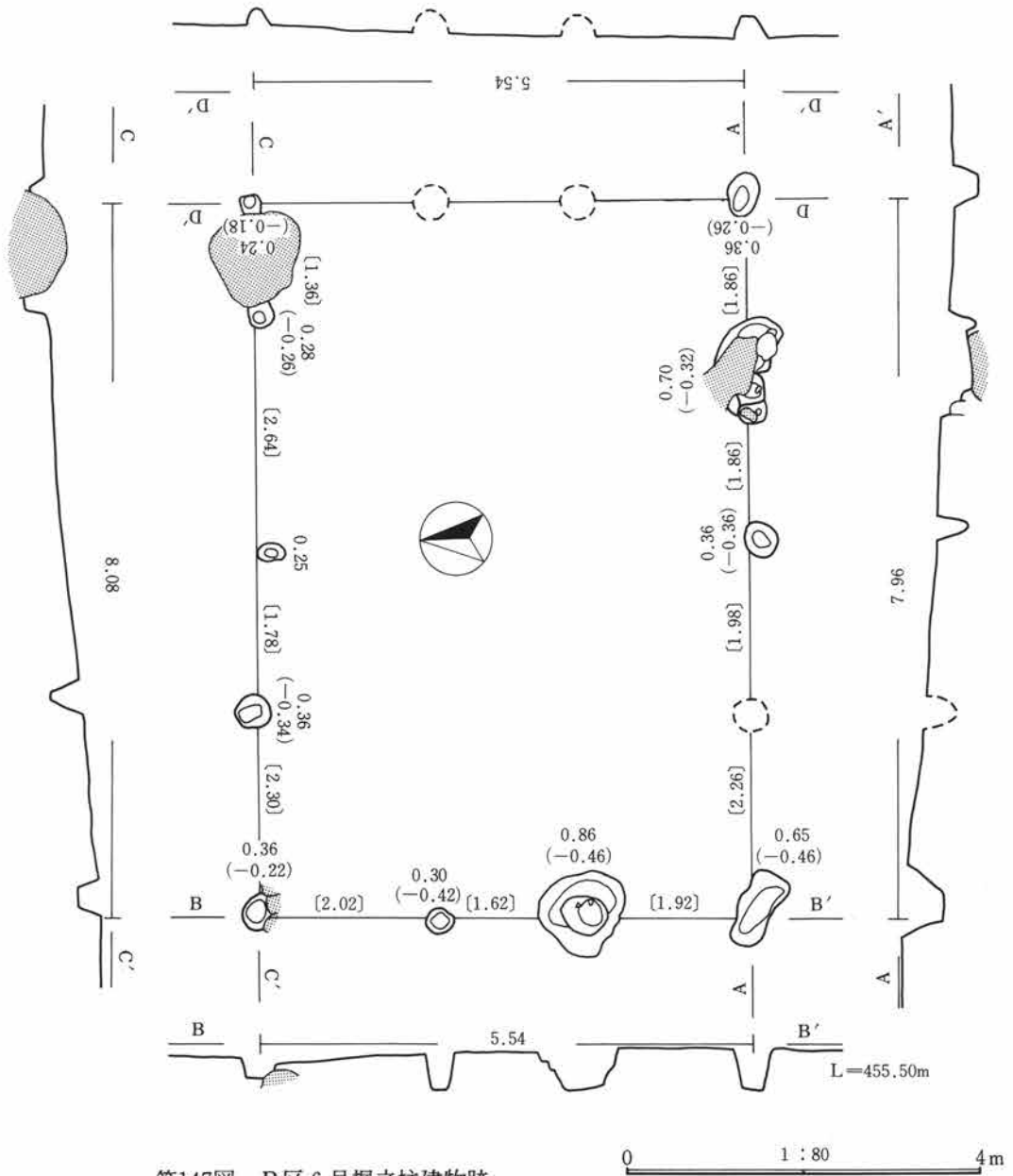
10～P-31～32グリットに位置し、ほぼ同じ場所で4号と重複する。南北の棟方向で方位は西桁行で $N-9^{\circ}-W$ を示す。構造は、桁行2間、梁間1間で殆ど歪みがない。規模は、桁行2.96m、梁行2.38m、面積 6.98m^2 である。柱穴は円形を基調とするが、山石にかかる位置では不整形を呈している。北東隅を好例とするが、山石を礎石の代用として利用している。4号との新旧関係は不明であるが、南西にある1号と2号と同様に、同一の目的を持った建物であろう。

B区4号掘立柱建物跡 (第145図、第10表)

10～P-32グリットに位置し、3号の北東側に全面的に重複する。東西の棟方向で、西梁行での方位は $N-81^{\circ}-E$ を示す。構造は、桁間1間、梁間2間で北東方向に少し歪んでいる。規模は、桁行2.38m、梁行1.92m、面積 4.30m^2 である。柱穴は円形を基調とするが、北側桁間が一様に深い。南西隅では、山石を礎石の代用として利用している。3号とともに極めて小さな建物である。

B区5号掘立柱建物跡 (第146図、第10表)

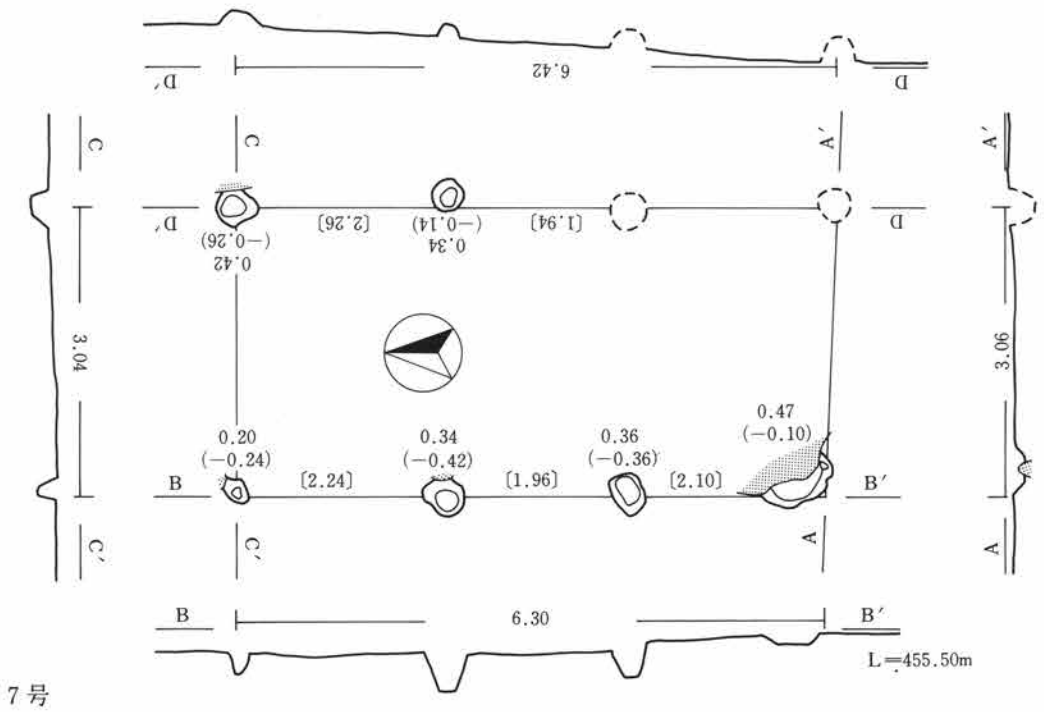
2N～O-00～01グリットに位置し、6号の南西隅に北東側が重複する。南北の棟方向で、東桁行での方位は $N-10^{\circ}-E$ を示す。構造は、桁間2間、梁間1間で殆ど歪みがない。規模は、桁行4.34m、梁行2.72m、面積 11.8m^2 である。柱穴は円形を基調とし、南東隅では山石を礎石の代用として利用している。6号との新旧関係は不明であるが、規模、棟方向の点で南西にある1号と2号に近似し、同一の企画のものにある建物の一つであろう。



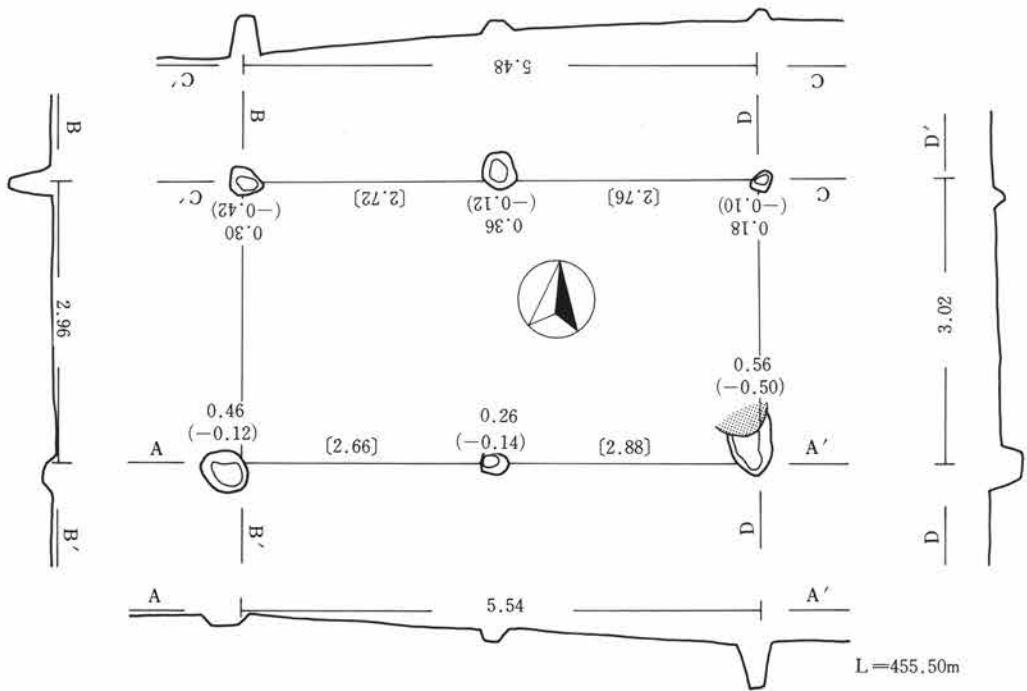
第147図 B区6号掘立柱建物跡

B区6号掘立柱建物跡 (第147図、第10表)

2 N~Q-00-02グリットに位置し、規模、棟方向の点で中心的な建物と推定される。南西隅に5号、東梁行に7号、北桁行に8号が重複する。東西の棟方向で方位は東梁行でN-92°-Eを示す。構造は、桁間4間、梁間3間で殆ど歪みがない。規模は、桁行8.08m、梁行5.56m、面積44.9㎡である。柱穴は円形を基調とするが、東梁間にかけて深くなっている。東梁間の柱穴は不明としたが、地形勾配を考慮すると、東へ伸びる可能性の方が高いか。既存の民家の母屋とは北へ約10mずれているが、南面した大型の建物であることから母屋としての性格であろう。



8号



第148図 B区7・8号掘立柱建物跡

0 1 : 80 4m

B区7号掘立柱建物跡 (第148図、第10表)

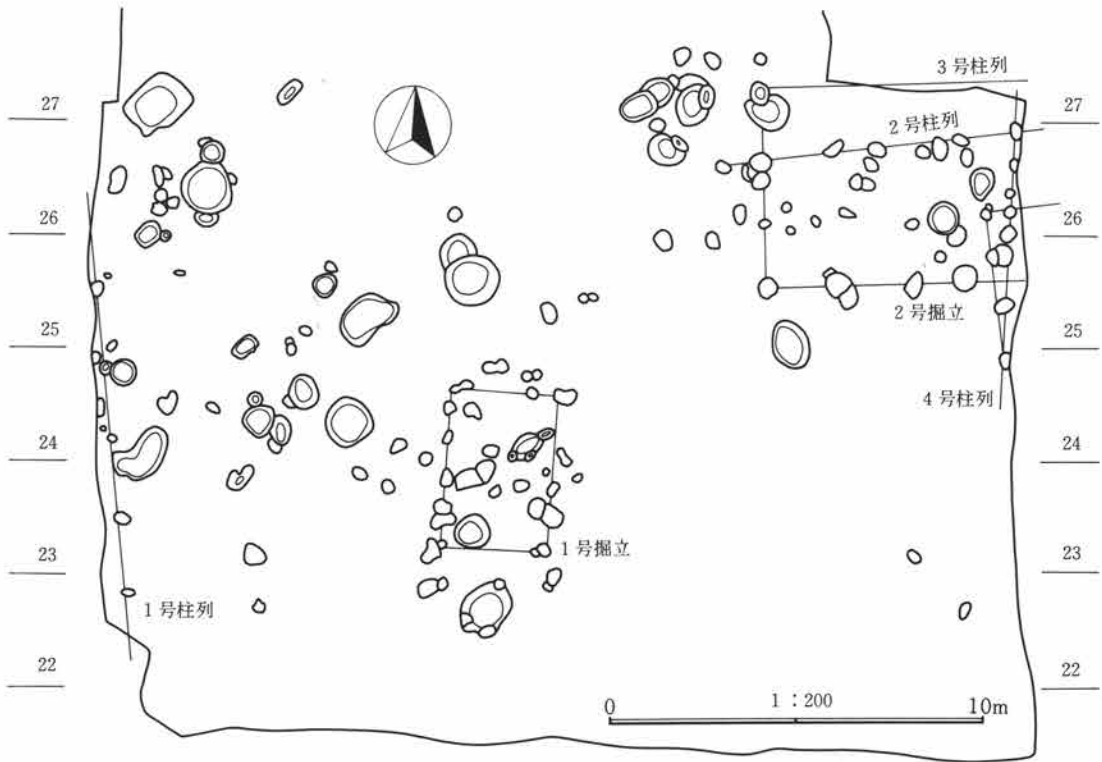
2P~Q-01~02グリットに位置し、6号の東半部にはほぼ全面的に重複する。南北の棟方向で、方位は1号、2号、5号に近い。西桁行でN-2°-Wを示す。構造は、桁間3間、梁間1間で、東桁側が少し長く台形状を呈する。規模は、桁行6.42m、梁行3.06mで桁行は東西で12cmの差がある。面積は19.6m²である。柱穴は円形を基調とするが、山石の間に配列しているために一部は不整形で総じて浅いのが特徴である。柱痕は検出されず、出土遺物もない。重複する6号、8号との新旧関係は不明であるが、棟方向からすると1号、2号と同一企画での建物の一つであろう。

B区8号掘立柱建物跡 (第148図、第10表)

2O~Q-02~03グリットに位置し、南桁側で6号、7号と重複する。東西の棟方向で、方位は南桁行でN-83°-Eを示し、重複する6号に近似する。構造は、桁間2間、梁間1間で殆ど歪みがない。規模は、桁行5.54m、梁行3.02m、面積16.7m²である。柱穴は円形を基調とし、北西隅と南東隅が特に深い。8棟の中で、中心的な建物である6号と同じ東西棟であるが、規模の点でははかと大差がなく、関連を見ることはむずかしい。むしろ、棟方向と占地関係の点で、南約10mにある3号と4号との関連が求められる建物であろう。

第10表 深沢遺跡B区、D区掘立柱建物跡一覧表

番 号	位 置	棟方向	主軸方向	梁 間 桁 間	面 積	備 考
B 1 号	1 N-31~32	南北棟	N-5°-E	4 間 × 3 間 6.20 × 2.66	16.5m ²	2号~4号と重複する。
B 2 号	1 M-30~32 1 N-30~32	南北棟	N-7°-E	2 間 × 1 間 4.78 × 2.18	10.4m ²	1号に重複する。
B 3 号	1 O - 32	南北棟	N-9°-W	2 間 × 1 間 2.96 × 2.36	7.0m ²	4号に重複する。
B 4 号	1 N - 32~ 1 P - 32	東西棟	N-81°-E	1 間 × 2 間 2.24 × 1.92	4.3m ²	3号に重複する。
B 5 号	1 N - 00~ 2 N - 01	南北棟	N-10°-E	2 間 × 1 間 4.34 × 2.72	11.8m ²	6号に重複する。
B 6 号	2 N-01~02 2 Q-00~02	東西棟	N-92°-E	4 間 × 3 間 8.08 × 5.56	44.9m ²	5号、7号、8号に重複する。中心的な大型建物である。
B 7 号	2 P-01~02 2 Q-01~02	南北棟	N-2°-W	3 間 × 1 間 6.42 × 3.06	19.6m ²	6号に重複する。
B 8 号	2 O-02~03 2 Q-02~03	東西棟	N-83°-E	2 間 × 1 間 5.54 × 3.02	16.7m ²	6号、7号と重複する。
D 1 号	2 N-23~24 2 O-23~24	南北棟	N-3°-E	5 間 × 2 間 4.27 × 2.86	12.2m ²	複数のピットがあり建替えをしているか。
D 2 号	2 N-25~27 2 S-25~27	東西棟	N-85°-E	3 間 × 2 間 5.22 × 5.18	27.0m ²	大型建物で建替えがあるか。東側は未調査である。



第149図 D区近世全体図

D区1号掘立柱建物跡 (第150図、第10表)

2 N～O-23～24グリットに位置し、周囲を含めて複数のピットがあることからすると、同一位置での建替えが推定される。南北の棟方向で、方位は東桁行で $N-3^{\circ}-E$ を示す。構造は、桁間5間、梁間2間で、桁間が一様に狭いこと、梁間の中心柱穴が東に片寄っていることが特徴である。規模は、桁行4.27m、梁行2.86m、面積 12.2m^2 である。柱穴は円形を基調とし、隅が深い。また、内部で大小のピットが20前後見られたが東柱か否か判然とせず、先述の様に建替えの柱穴であろうか。2号とは6m離れて直交の位置にあり、地形勾配が変化する西約10mに南北の1号柱列がある。

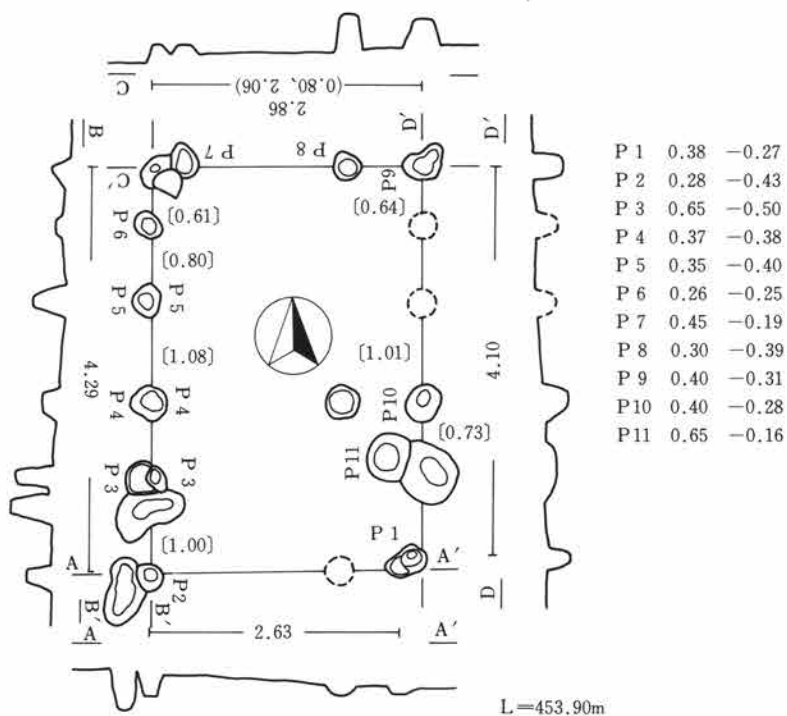
D区2号掘立柱建物跡 (第150図、第10表)

2 Q～S-25～27グリットに位置し、さらに東側に伸びる。2～4号柱列が重複したほかに多くのピットが周囲にあり、1号と同様に建替えの可能性がある。東西の棟方向で、方位は南桁行で $N-83^{\circ}-E$ を示す。構造は、現状で桁間3間、梁間2間で、梁間の中心は北に片寄っている。現状の規模は桁行5.22m以上、梁行5.13m、面積 27m^2 以上と大型の建物である。柱穴は円形を基調とし、直径が60cm前後と大型である。

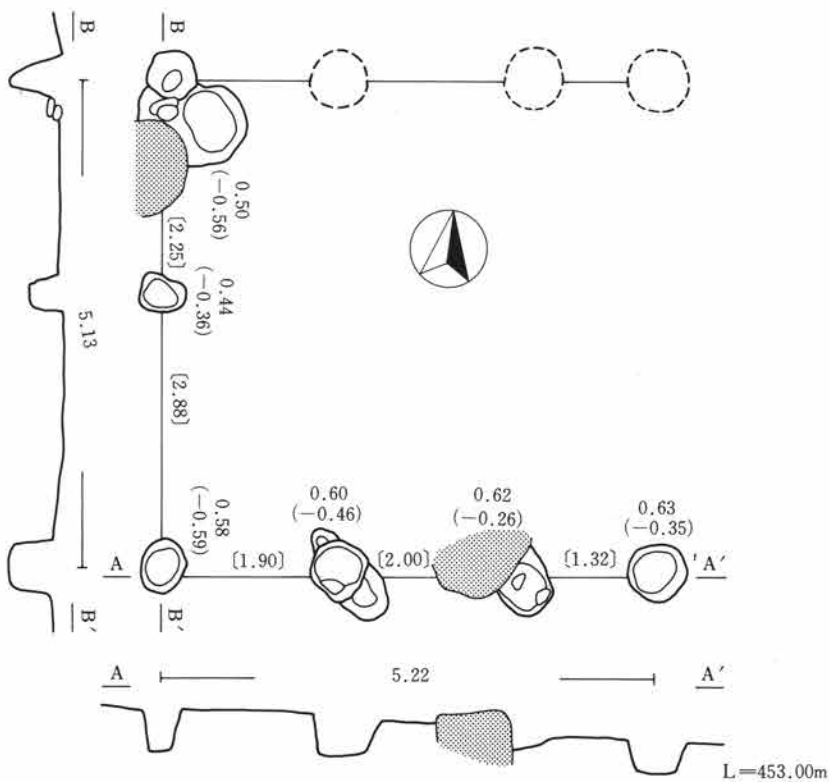
D区1号柱列 (第151図)

2 M-22～25グリットに位置し、南北方向で4間分ある。方位は $N-9^{\circ}-W$ である。地形勾配が変化する所にあり、さらに南北に伸びる可能性がある。柱穴の規模、間隔がほぼ一定し、重複せずに単

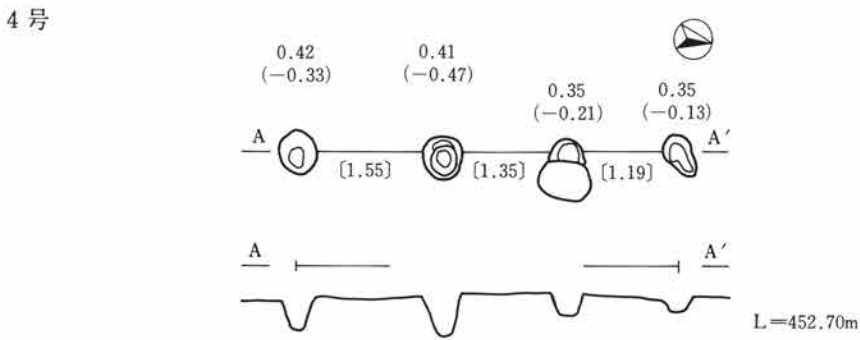
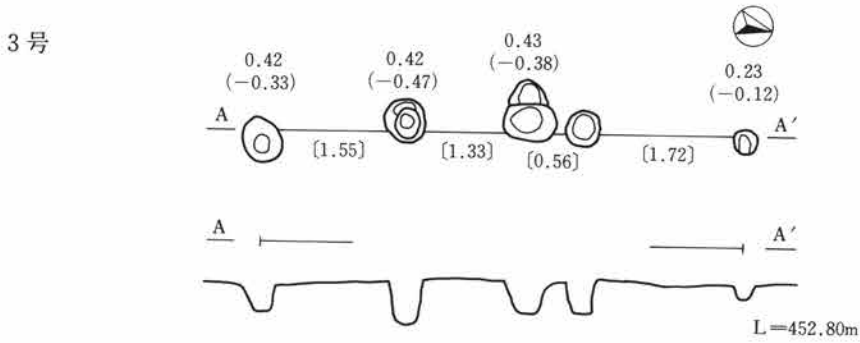
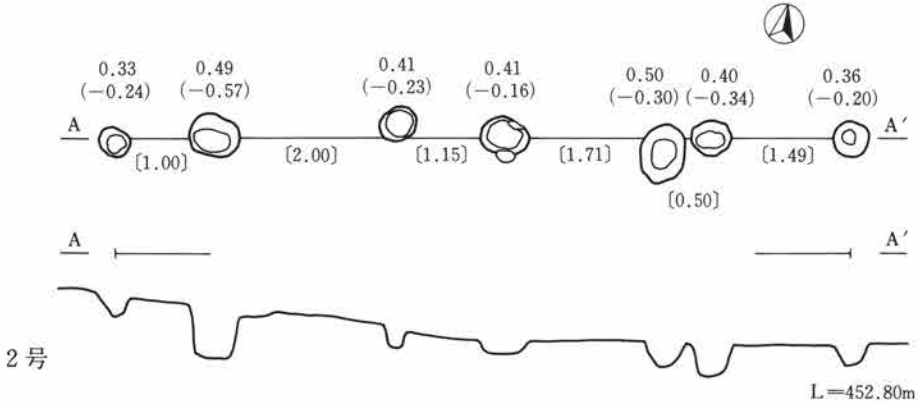
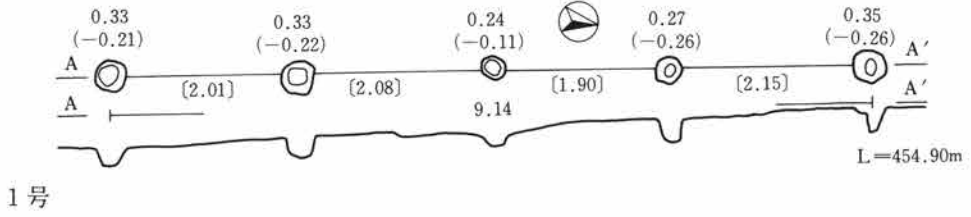
1号



2号



第150图 D区1・2号掘立柱建物跡



第151図 D区1~4号柱列

0 1 : 80 4 m

独で存在するところから、建物に伴う屋敷区画を示す柵列と考えられる。

D区2号柱列 (第151図)

2P～S-26グリットで東西方向に位置し、3号、4号と接するだけでなく、ともに2号掘立柱建物跡を切って重複している。方位はN-82°-Eを示し、1号とは直交に近い。柱穴の規模、間隔が少し不揃いで、地形勾配に直交するためか深さも一定しない。東へ伸びると考えられる。

D区3号柱列 (第151図)

2S-24～27グリットで南北方向に位置し、南端で4号と交差している。方位はほぼ南北に近い。は円形を基調とし、規模も一定している。北への伸びが考えられるが、柱間からすると東へ広がる建物になる可能性もある。

D区4号柱列 (第151図)

2S24～26グリットで南北方向に位置している。柱穴は円形を基調とし、3号と同様に東へ広がる建物になる可能性もある。方位はN-110°-Wを示す。

E区1号柱列 (第153図)

3K～L-20グリットで東西方向に位置し、1号掘立柱建物の南梁寄りを切って重複する。方位はN-105°-Eを示す。柱穴は円形を基調とし、規模と間隔の点で一定している。

E区2号柱列 (第153図)

3K～N-20グリットで東西方向に位置し、東端は平安時代の1号住居跡を切っている。方位はN-92°-Eを示し、3号と直交、4号、5号と平行する位置にある。柱穴は円形を基調としている。

E区3号柱列 (第153図)

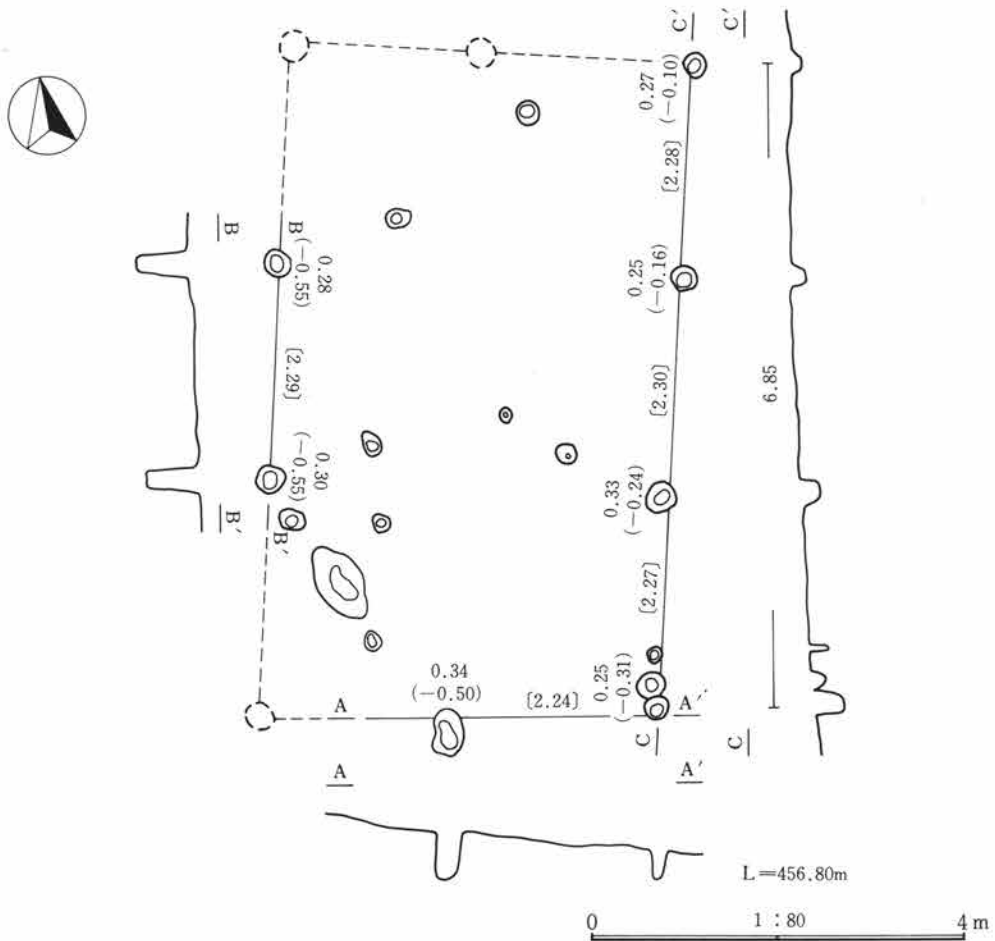
3O-20～22グリットで南北方向に単独で位置している。方位はN-9°-Eを示す。周囲には約15のピットがあり、南に伸びて2号、4号、5号と「L」字形に接続すると考えられる。

E区4号柱列 (第153図)

3K～N-17グリットで東西方向に位置し、5号柱列と約1mの間隔をもって平行している。方位はN-85°-Eを示す。緩斜面から平坦部に移る変換点にあり、5号とは柱穴の規模と間隔とが近似し、建物に対応して南の区画を示す柵列であろう。5号との新旧関係は不明である。

E区5号柱列 (第153図)

3K～N-17グリットで4号の南に位置する。方位はN-84°-Eを示す。柱穴は4号に近似するが一段深い。また、西端の柱穴では直径約15cmの柱痕が樹立して残っていた。



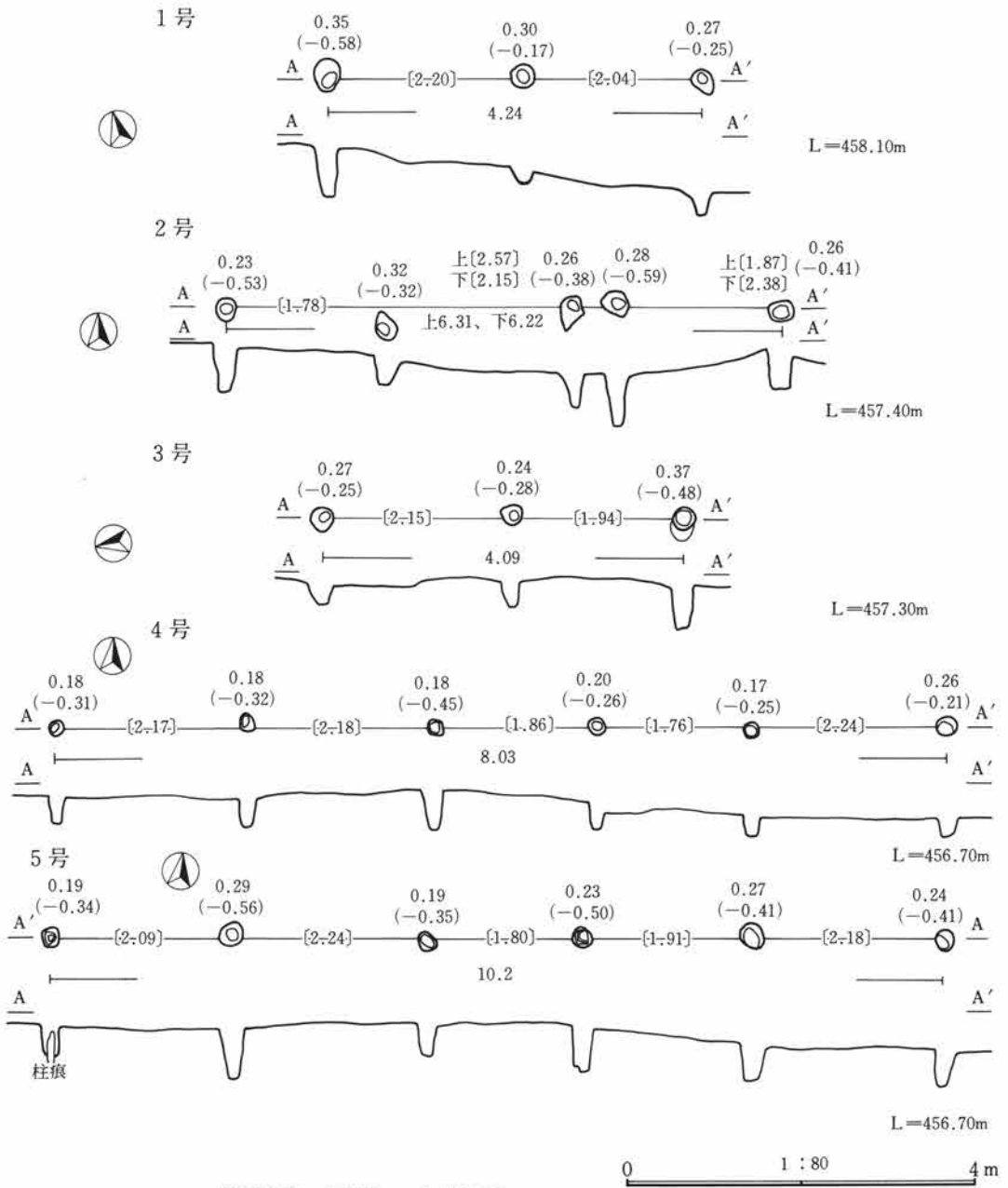
第152図 E区1号掘立柱建物跡

E区1号掘立柱建物跡 (第152図、第11表)

3 K~M-20~23グリットに位置し、南東隅で2号柱列が重複する。南北の棟方向で、方位は東桁行でN-15°-Eを示す。構造は、桁間4間、梁間2間で台形状の歪みを持っている。南西隅は調査区域外にあるが、現状での規模は桁行6.85m、梁行4.30m、面積29.5m²である。柱穴は円形を基調とするが、緩斜面に占地するためか、規模、深さの点で不揃いである。また、内部にも大小のピットが約10あり、束柱かと思われるが判然としない。5本の柱列とは、方向と占地関係の点で一定の範囲を示すと思われる。

第11表 深沢遺跡E区掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	棟方向	主軸方向	梁間	桁間	面積	備考
1号	3 K-20~23 3 L-20~23	南北棟	N-15°-E	4間	2間	29.5m ²	一部は未調査。



第153図 E区1～5号柱列

③ 井 戸

D区1号井戸 (第114図)

2M24グリットに位置する。素掘り円形の井戸である。1号掘立柱建物跡の北西隅から西へ3m、1号柱列との中間にある。上面径は86×80cm、下端径は62×54cmの隅丸方形、断面は円筒形に近く、深さは107cmと浅いが、隣接する縄文土坑の倍近い数値を持ち、地山である山石を多く含んだ黄褐色土に達している。遺物は、混入した縄文土器の破片約60片がある。遺構の時期は、建物、柱列と同じ近世で、建物の西にあって湧水を抜く効果も合わせて意図したものであろう。

④ A～E区のグリット出土の弥生時代～近世の遺物

中・近世の遺物は、A～E区の各区から少量が出土している。内訳では、最も多いのが陶磁器、軟質土器、焼締土器等で314点がある。砥石17点、銭貨6点、鎌や鉄釘等の鉄製品が約10点、鉄滓5点、羽口1点、土人形3点、石版2点がある。以上は、掘立柱建物を始めとする遺構と直接に結びつくものではないが、遺構の年代上の位置付けと相互の関連性、ひいては隣接する洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、藪田遺跡等との係わりを示すものと考えられる。

陶磁器は、年代、産地の点で幅を持ち、日常的な器種を殆どとする点で、遺跡が中世以降、断続的に集落が形成されたことを示している。凡その年代観では、中世、近世、近世後半～現代のものに三大別される。出土量は近世後半～現代のものが最も多く、大勢を占めている。

中世のものには、青磁の碗や常滑の大甕が少量あり、第155図に示したNo.725、727、728が代表例である。No.726は、瀬戸・美濃系の鉄釉天目碗で、このほかにNo.729～733の焼締陶器、軟質陶器が13～16世紀代の年代観としてある。

近世のものには、17～18世紀代の伊万里系、唐津系、京焼系、瀬戸系等の陶磁器がある。No.734は17世紀代の伯載か伊万里系、No.735は17世紀後半～18世紀前半の伊万里系の徳利、No.736は18世紀前半の唐津系、陶器染付碗、No.737は18世紀前代の京焼系、陶器碗、No.738は18世紀後半の伊万里系の藁麦猪口、No.739は18世紀代の伊万里系の碗、No.740は17世紀後半～18世紀前半の美濃系、灰釉・緑釉陶器の皿で菊の印花文が見込みにあり、No.741は19世紀前半頃と思われるが産地不明の灯明皿で鉄釉を施す。No.742は18世紀代の美濃系の摺鉢で鉄釉を施す。

石製品は、No.783～786の砥石4点を代表例として図示した。石材は、砂岩、流紋岩、粘板岩の3つの種類があり、中では流紋岩が13点と最も多く、砥沢産のものも含んでいる。No.783は、唯一の砂岩製で5面の砥面から転移させて使用したことが窺える。砥面は粗い。No.784は、砥沢産の流紋岩で砥沢産と限定できないが石質としては大勢を占める。No.785は、粘板岩製で産地不明、類例が2点ある。No.786は、流紋岩製で産地不明である。No.784～786は砥面が滑らかである。

No.787は、唯一の羽口である。端部を欠損した破片で、現存長9.2cm、丸みのある四角形をなす。先端部は平坦で少し斜めになっている。

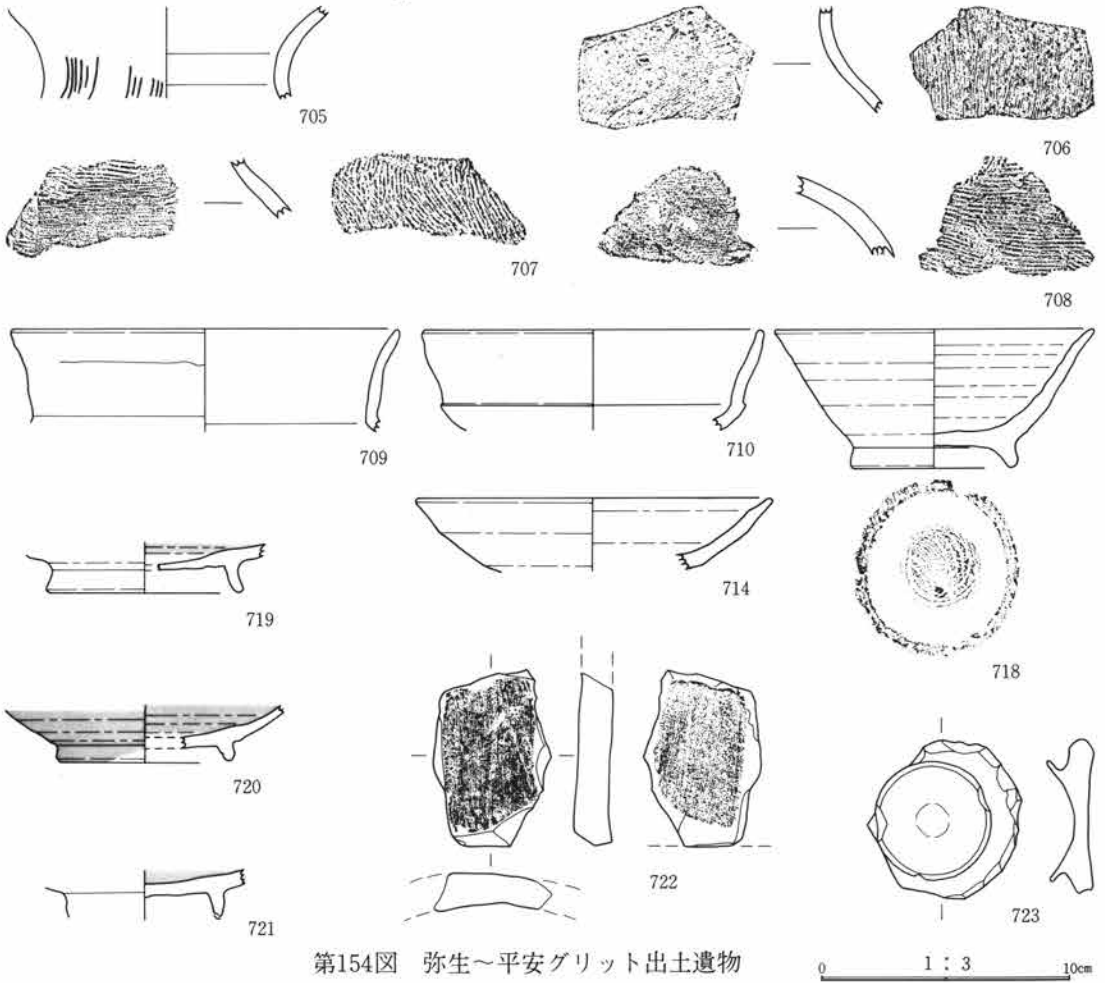
金属製品は、No.775～777の寛永通宝3点、物指し1点、煙管（雁首）1点、筆入れ1点、鐔1点を図示した。

物指しは、現存長4.4cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、真鍮製、両端部は折り曲げた様な状態で折損している。目盛りは、表裏で一様ではなく、図中の左が4mm間隔、右が3mmと微差がある。

煙管は、銅製、火皿は直径1.5×1.2cmの円形、高さ0.7cmで台形状をなす。首部は、長さ2.6cm、径1.5cmで直線的である。羅宇との接合部寄りには長さ2cmの部分に刻線が密に施される。

No.780の筆入れは、真鍮製、完存で長さ14.5cm、断面は楕円形で1.3×0.9cmである。

No.781は鑄鉄製で極めて小さな鐔である。耳部には鑄出しの合せ目が残る。意匠は波千鳥を主とし、平耳が残され背面は素文である。櫃穴は、表・裏差し用に透されるが再調整がなされていない。同様に茎穴も未調整である。従って本資料は、本差し用の鐔とは認め難く、雛拵の一部か、あるいは玩具



第154図 弥生～平安グリット出土遺物

0 1 : 3 10cm

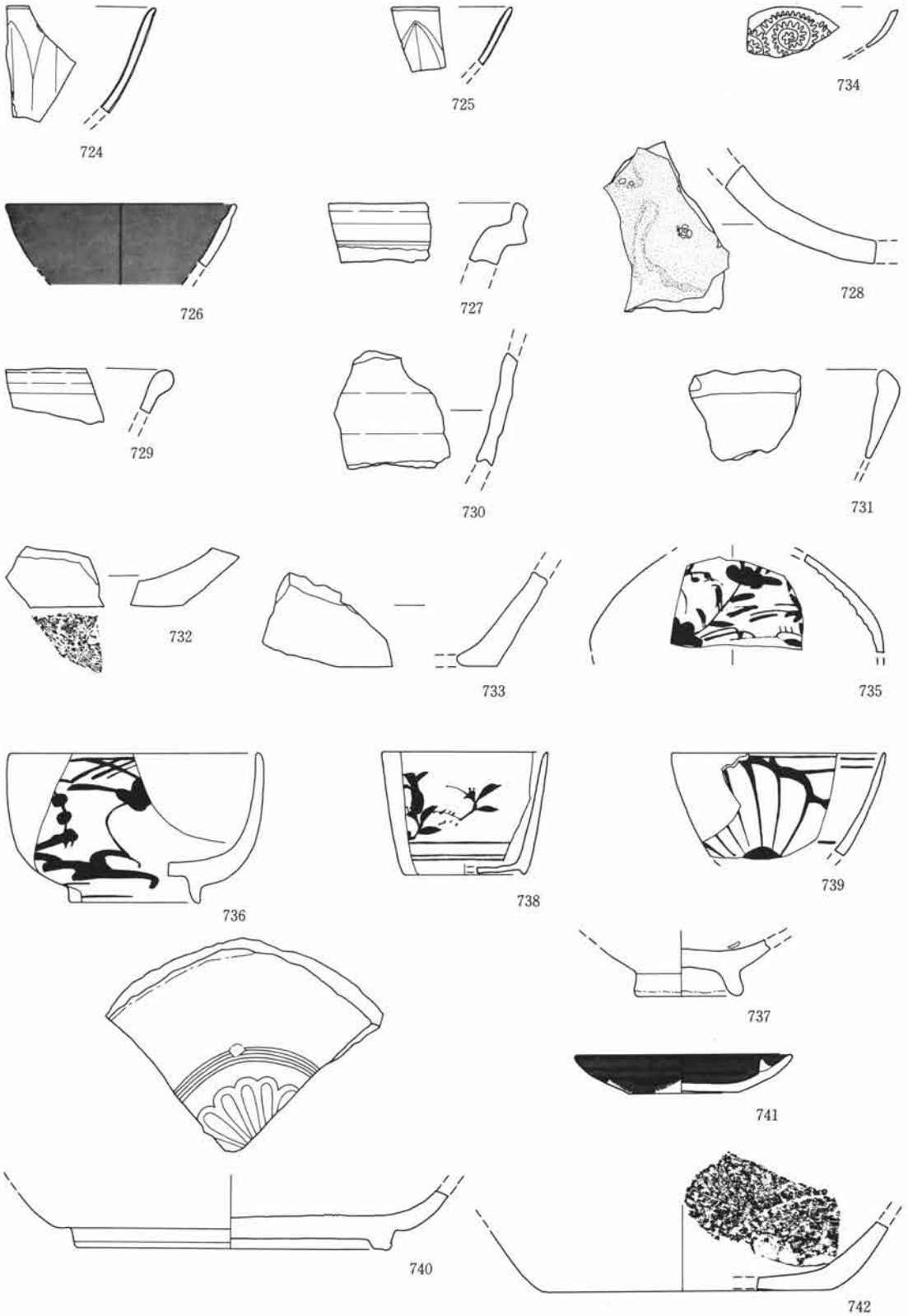
か。

第154図は、中・近世と同様にA～E区までのグリットから出土した遺物を集成したもので、弥生時代、古墳時代、平安時代に属す。これらは、平安時代のものを除いて遺構と結びつくものではないが、少数出土例であるが調査区に隣接した地区に何らかの遺構が存在することを示すものであろう。そして、本遺跡を象徴する縄文後期の配石や土坑の後をうけて、平安時代までの年代上の間隙を埋める稀少価値を持った存在として位置付けられる。特に、No. 710の鬼高期の杯は赤谷川以北の利根川右岸に於いて初出の例としても過言ではない。

No. 705～708は、弥生時代後期樽式の甕の口縁部や胴部の破片である。胴部の表裏には、横位・縦位の櫛描文が施されている。南0.5kmにある藪田遺跡では該期の住居跡1軒が調査されており、本遺跡でも小規模の集落形成時期があったものと推定される。

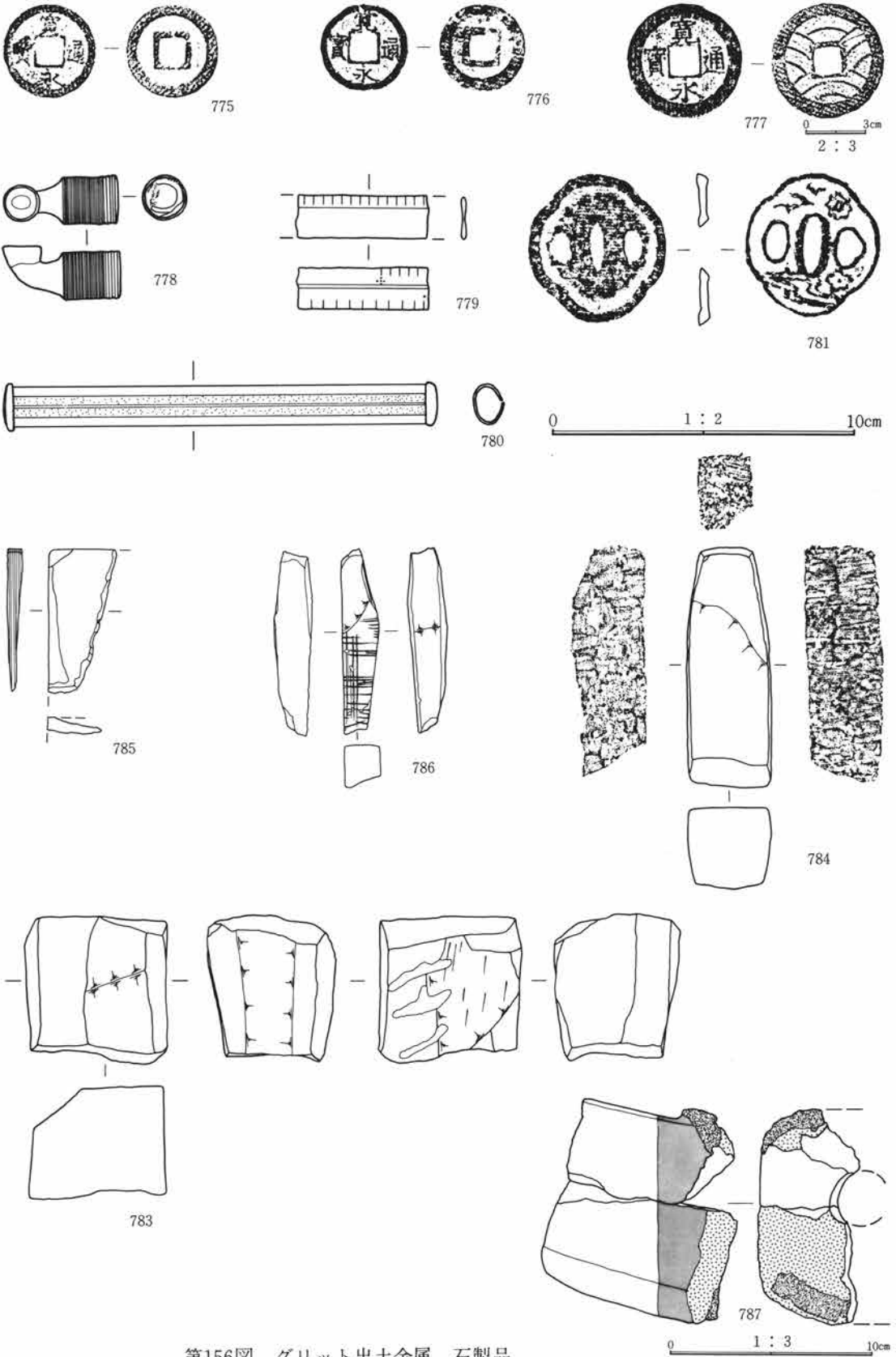
No. 709、718～723は、E区1号、2号住居跡と同じ9世紀後半～10世紀代の遺物である。No. 719～721、723は灰釉陶器、723については縁辺を故意に打ち欠いて円形に仕上げた土器からの転用品である。No. 722は、唯一の布目瓦である。

5. 近世の遺構と遺物



第155図 グリット出土陶磁器

0 1 : 3 10cm



第156図 グリット出土金属、石製品

6 ま と め

① 深沢遺跡周辺の縄文時代遺跡

深沢遺跡は群馬県北部山間部中央の南流する利根川と東流する支流の赤谷川の合流点の北西約2kmの利根川右岸上位段丘面に立地している。この合流点を起点として周囲4km四方は地形的に3分割され、それぞれ独自の歴史性を持つ地域圏を構成する。

合流点の東で利根川の左岸地域は東西約2km、南北約4kmの地域で東を三峰山麓によって画されている。合流点の南西で利根川・赤谷川の右岸地域は東西約2km、南北約2kmで西を前山山麓によって画され通称「名胡桃平」と呼ばれている。合流点の北西で利根川の右岸、赤谷川の左岸地域は東西約2km、南北約2kmで西を大峰山麓によって画されている。

この3地域で旧石器時代の遺跡が確認されているのは利根川東岸地域だけで、この地域は縄文時代では早期～前期の小集落があり、弥生時代では八束脛の洞穴遺跡（中期前半）があり、古墳時代では師・馬庭に古墳群が形成され、古代においては「長野牧」が設置されたとされる地域である。

合流点の南西地域は縄文時代の前期～中期の小集落が6遺跡で確認されており、弥生時代は後期の小集落が4遺跡あり、古墳時代では中期～後期の遺跡があり塚原古墳群が形成され、律令期の郡名が残る唯一の地域である。

合流点の北西地域は縄文時代全般にわたる遺跡が確認されており、弥生時代では中期～後期の小遺跡がある。古墳時代は前期～後期の遺物は確認されているが住居の確認はされておらず、古墳群も形成されていない。古代においては県北地域由一の窯業生産地帯となり6遺跡7支群の窯跡が確認されている。

深沢遺跡は合流点の北西地域に位置しており、この地域では草創期から晩期にいたる縄文時代全般にわたる遺跡が点在している。

草創期の遺跡としては都遺跡があり黒色頁岩と黒曜石製の2点の有舌尖頭器が出土している。また、藪田遺跡では局部磨製石斧が1点出土しており、他に当地域では有舌尖頭器や局部磨製石斧が2点出土している。

早期前半の遺跡は確認されていないが、後半の遺跡としては本遺跡の北にある前田原・前中原の2遺跡があり、本遺跡でも少量の遺物が出土している。前中原遺跡遺跡では南関東系の土器とともに東北系の土器が多く伴出している。

前期の遺跡としては前中原遺跡があり、初頭～中葉の住居跡が4軒確認されている。他に3遺跡で土器片が出土しており、小集落が点在する傾向にある。

中期の遺跡としては梨の木平遺跡で中期末の柄鏡形敷石住居跡が1軒確認されており、小集落が予想されている。また、本遺跡は中期全般にわたる土器が多量に出土している。

後期の遺跡としては本遺跡だけで初頭から中葉の遺構と遺物があり、深沢遺跡は当地域における中期～後期の拠点集落である。

晩期は希薄となるが、本遺跡でも少量の土器片が出土し、段丘崖下の下位面にある矢瀬遺跡では後期後半～晩期前半の土器が採集されており、本遺跡に続く遺跡である。

② 各区の出土遺物について

深沢遺跡は縄文中期初頭～後期中葉を主体としており、後期初頭はやや希薄となる。これらの遺物はA～D区よりほとんど出土している。

A区の土器は中期10,975点、後期その他が45点、B区の土器は中期3,122点、後期588点。C区の土器は中期4,121点、後期6,764点。D区の土器は中期9,850点、後期10,131点である。E区を含めた土器総量は45,827点で、完形は極めて少なくほとんどが小破片である。

中期の土器はA・B区を主体としており、確認はされていないが深沢遺跡のある上位段丘面での集落分布を反映したものと考えられる。中期の土器は南関東系の土器を基盤としているが、各時期の土器に東北系や北陸系・中部山岳系の土器が伴出しており、系統の混在した土器もある。これら異系統の土器が多時期にわたり混在する傾向は前中原遺跡の早期後半に東北系（槻ノ木式）の土器が伴出する例や三後沢・大原Ⅱ・善上等の前期前半の土器に有尾式が伴出する例等があり、本遺跡の後期の土器も含め、遺跡の位置が県北部山間地帯にあり関東から東北・北陸・中部へのひとつのルートに位置しており、平野部とは異なる独自の文化圏を縄文時代各期にわたり所有していたことを窺わせるものである。

後期の土器は遺構の分布傾向を反映しC・D区を主体としている。特殊遺物としては注口土器片がC区で2点、D区で12点、手捏土器がA区で3点、C区で6点、D区で5点。蓋はD区で2点が出土した。また、土偶はA区で2点、B区で1点、C区で6点、D区で4点が出土しており、すべて打ち欠かれた破片での出土である。また、中・後期の土製円盤はA区25点、B区6点、C区17点、D区30点の計78点が出土しており、一部には挟り込みが刻まれており12点の石錘の出土も合わせて、段丘崖下を流れる利根川での生業活動を窺わせるものである。

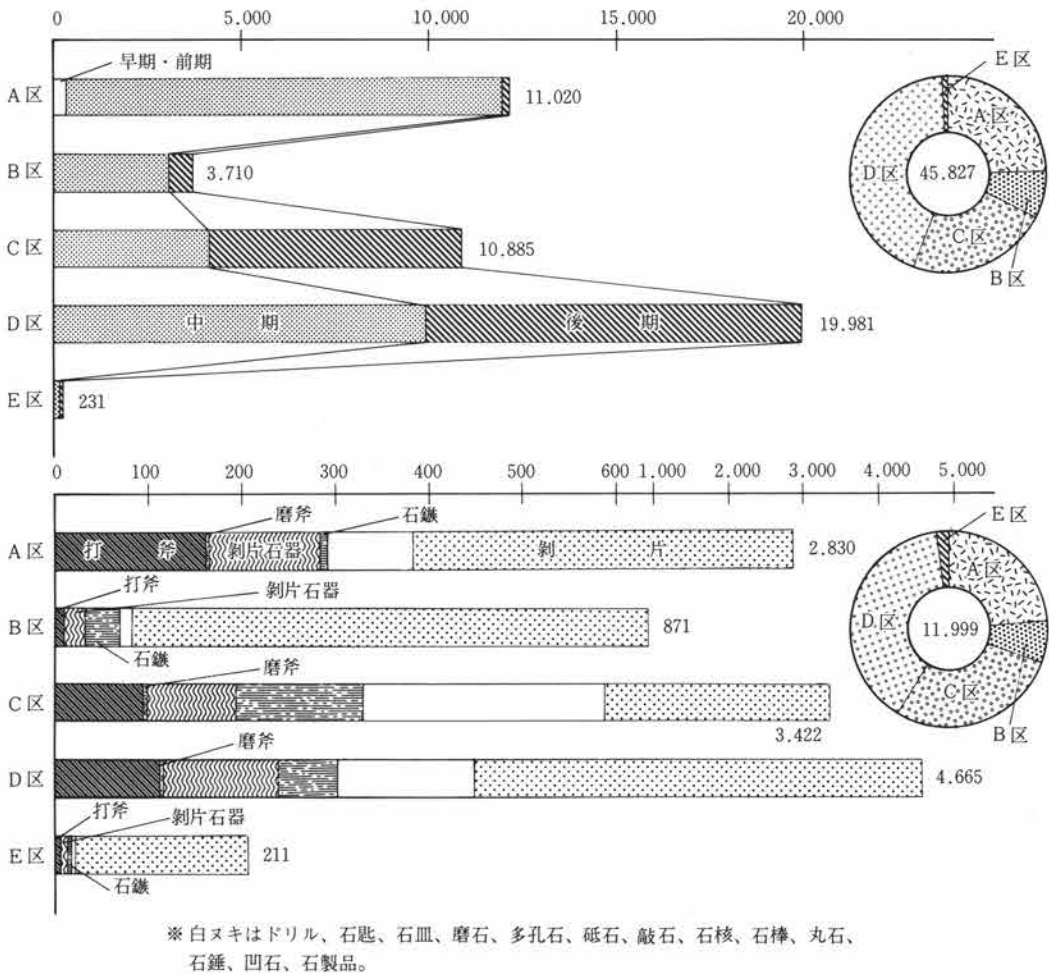
石器は各区より11,999点が出土したが、内、剥片が90%近くを占めている。出土量はA・C・D区が圧倒的に多く、製品の組成は各区の調査面積や調査の精粗の影響もあり断定的ではないが、A・B・D区は同様の傾向を示しC区は配石遺構より出土した石器を反映し若干組成が他区と異なっている。

打製石斧は一般的な短冊形、撓形、分銅形に分けられ、広鋏状をなすものもある。打製石斧は長さにより大・中・小に分けられ、さらに身の厚さや基部・刃部の形状、屈曲の度合により多様な器種を構成している。出土傾向としては短冊型打製石斧はA区が圧倒的に多く、逆に撓形や分銅形打製石斧はC・D区に多い。磨製石斧は大・小の定形のものが各区より8点が出土しただけである。

剥片石器は側面に付けた刃部の数により分けたが、一部の石器を除き定形化したものや剥片取りに一定の方向性はない。出土傾向はA区がやや多く次にD・C区でB区は少ない。礫器は22点が出土したがC区から10点が出土している。

石鏃は三角形を呈するもの、ハート形をなす無茎のもの、先端部が三角形をなし逆刺を作出する有茎のものがあり、253点が出土した。有茎の石鏃は小型で粗雑な作りのものが多く、また、C・D区より出土した三角形を呈する大型で粗雑な作りの石鏃は特徴的である。出土傾向は調査の精粗もあるが、C区の配石遺構が圧倒的に多くしかも大型配石に集中する傾向にある。

石錐は45点が出土したが「T」字状をなすものや抓み部が三角形をなす定形化したものが多いが剥



第157図 各区の時期別土器量比と器種別石器量比

片をそのまま利用したものもある。出土傾向はC・D区に多い。石匙は10点が出土したが縦形は少なく横形が多い。また、配石遺構に副葬された精巧な作りのものもある。

石皿は定形のもの13点があるが周縁部や裏面が多孔石状をなすものがほとんどで、すべてが破片で出土した。また、偏平な河原石をそのまま用いたものが40点と多くひとつの特徴となっている。これらの石皿の中には配石の壁材として用いられたり、土坑の上部に標識状に置かれたものもある。出土傾向としてはC区が多い。

磨石は形状により円形・楕円形・長楕円形に分かれ大きさにより大・中・小に分けられる。ほとんどが側面に打痕を持ち、大型の中には丸石と思われるものもある。出土傾向はA・C区が多い。

凹石も磨石と同様の形状に分かれるが大きさは中型だけである。表裏に2孔1対の孔を有する傾向にある。出土傾向はC区がやや多い。

敲石は15点が出土したが長楕円形を呈する硬質の河原石をそのまま用いている。石核は55点が出土したが、ほとんどが不定形で多方向からの打撃が加えられている。石鏃やドリル等の小型石器の母岩と考えられる。

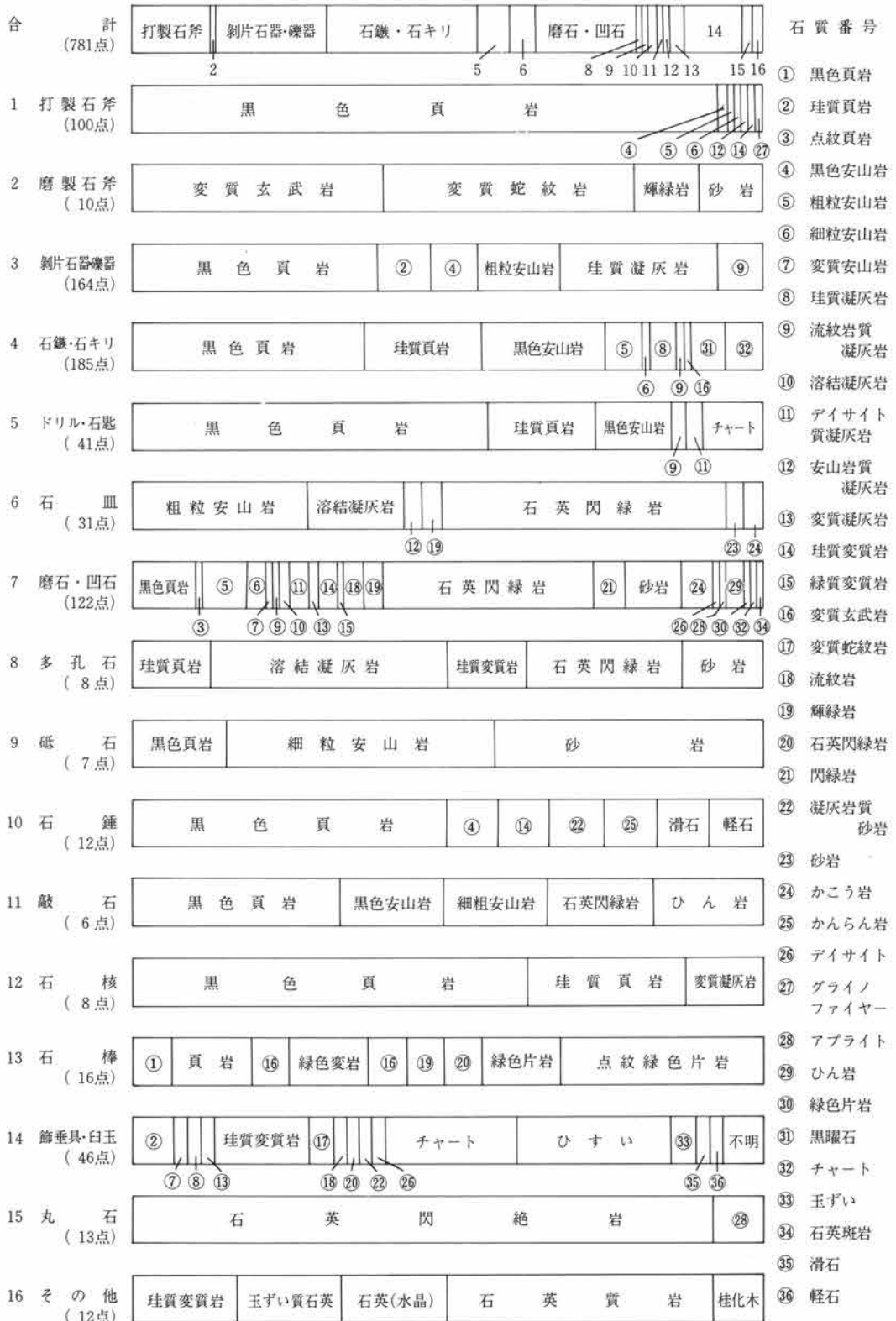
第13表 石質集計表(1)

石 器 種 質	打 製 石 斧				磨 製 石 斧	剥 片 石 器	礫 器	石 鏃				石 ヤリ	ドリル	石 匙	小 計
	短 冊	撿 形	分 銅	不 明				三 角	ハ ー ト	有 茎	不 明				
黒色頁岩	43	31	18	1		126	5	9	13	39	5	1	19	4	314
珪質頁岩						14		3	14	16	2		6	1	56
点紋頁岩															
黒色安山岩	1	1				12		14	15	7	1		5		56
粗粒安山岩	1					2			11						14
細粒安山岩	1										2				3
変質安山岩															
珪質凝灰岩						4			2	5	1				12
流紋凝灰岩						1		1	1		1			1	5
溶結凝灰岩(大峰・三峰)															
デイサイト質凝灰岩														1	1
安山岩質凝灰岩		1													1
変質凝灰岩														1	1
珪質変質岩			1												1
緑質変質岩						4									6
変質玄武岩						4			2						4
変質蛇紋岩															
流輝緑岩						1									1
石英閃緑岩															
閃緑岩質砂岩															
凝灰岩質砂岩						1									1
砂岩															
かかん岩															
かかん岩															
デイサイト	1														1
グライノファイヤート															
アブライト															
ひん片岩															
緑色片岩															
点紋緑色片岩								2	7	1					10
黒曜石								1	2	8			2	2	15
子ひすい															
玉すい質石英(水晶)															
石英斑岩															
石英質															
石滑石															
軽石															
桂木															
不化															
計	47	33	19	1	10	159	5	30	67	76	12	1	32	9	501

石質集計表(2)

器 種	石 皿	磨 石	凹 石	多 孔 石	砥 石	石 錘	敲 石	石 核	石 棒	飾 垂 具	白 玉	丸 石	そ の 他	小 計	合 計
黒色頁岩		12	1		1	6	2	5	1					28	342
珪質頁岩				1				2		3				6	62
点紋頁岩		1							2					1	1
黒色安山岩	8	3	6			1	1							2	58
粗粒安山岩		3	1		3		1		1					18	32
細粒安山岩		3												8	11
変質安山岩		1								1				2	2
珪質凝灰岩										1				1	13
流紋凝灰岩		1												1	6
溶結凝灰岩(大峰・三峰)	5	2		3										10	10
デイサイト凝灰岩		3												3	4
安山岩凝灰岩	1							1		1				1	2
変質凝灰岩		2							1					4	4
珪質変質岩		3		1		1				6	1		2	14	15
緑質変質岩			1						2					3	3
変質玄武岩									1					1	7
流紋蛇紋岩		3									2			2	6
輝緑岩	1	1	2							1				4	4
石英閃緑岩	14	32	12	2			1		1	1		12		75	75
閃緑岩		5	1											6	6
凝灰岩質砂岩						1				1				2	2
砂岩	1	10	1	1	3									16	17
かかん岩		4	3											7	7
デイサイト		1				1								1	1
グライノファイト										1				2	2
アブライト		1										1		2	2
ひん片岩		2	1				1							4	4
緑色片岩			1						2					3	3
点紋緑色片岩									5					5	5
黒曜石		1								9				10	25
チヤース											11			11	11
玉すず											2			2	2
玉すず													2	2	2
石英(水晶)		1												2	2
石英斑岩	1	1												2	2
石英質岩													5	5	5
滑石						1					1			2	2
軽石						1								1	1
桂木													1	1	1
不										3				3	3
計	31	92	30	8	7	12	6	8	16	28	17	13	12	280	781

(註) 打製石斧の広楯(黒色頁岩)2ヶは挽形に含む。



(註) 打製石斧の広楕(黒色頁岩)2ヶは撓形に含む。

第158図 石質グラフ

多孔石や丸石といった祭祀遺物や小玉等の飾垂具は圧倒的にC区の配石遺構から出土しており、多孔石や丸石は配石の一部を構成し、飾垂具類は配石に副葬されていた。また、C区配石遺構には石英質岩や石英結晶・桂化木が持ち込まれており、配石の一部を構成するものもある。

石器の石質は日常利器のほとんどが直近の利根川・赤谷川水系の礫を用いており、石棒や飾垂具に他地方から搬入された礫を多く用いている。打製石斧を中心に剥片石器や礫器・石鏃・石錐等の打製製品はほとんどが黒色頁岩や桂質頁岩・黒色安山岩を用いており、石鏃や石匙の一部にチャートや黒曜石が用いられている。石皿・磨石・凹石は石英閃緑岩が多用（配石遺構に用いられた多くの河原石も同様である。）され、一部に砂岩が用いられている。大峰・三峰山麓より産する溶結凝灰岩は多孔石に多用され、石皿・磨石・凹石にも一部利用されている。石棒に多用される緑色片岩は秩父山系の産であり、飾垂具に多用されたひすいや玉ずいも移入であるが、一部用いられた蛇紋岩や緑色変質岩は当地域の産である。また、円形や楕円形を呈し偏平で小型の自然石を用いた飾垂具は凹穴や鐘乳洞で形成されたものと思われる。

③ 各区の遺構について

A区の住居跡と包含層

1号住居跡は痩せ尾根状台地の先端部に位置し、一度改築を行っており6本の主柱穴を持ちやや楕円形を呈し時期は加曾利E2式の新しい段階に比定され、形状・規模からも同時期の一般的な竪穴住居跡である。

出土した遺物は少ないが土器片や石器・剥片が床面から多く出土した。また、炉の上部の覆土中より丸石が1点出土したが、深沢遺跡では配石遺構において配石の一部として多用されており、多くの丸石が出土している。また、D区溝状遺構でも丸石が1点、他の土器片や石器片とともに出土しており、本住居跡の丸石も機能が終了した後、埋没過程にある住居跡へ廃棄されたものと考えられる。

A区の埋没谷には中期全般にわたる多量の遺物が包含されていたが、周辺の表面採集の結果からも1号住居跡のある台地やB区を載せる台地の上位段丘面の下位に集落が予想され、利根川・赤谷川合流点の北西地域における拠点集落である。

B区の土坑群

B区の土坑は、A区とC区の間東西方向に伸びる屋根筋で36基が確認された。全体はD区土坑群と環状の対をなすと推定され、B区は南辺中程に位置する。その範囲は長さ25m、幅15mである。

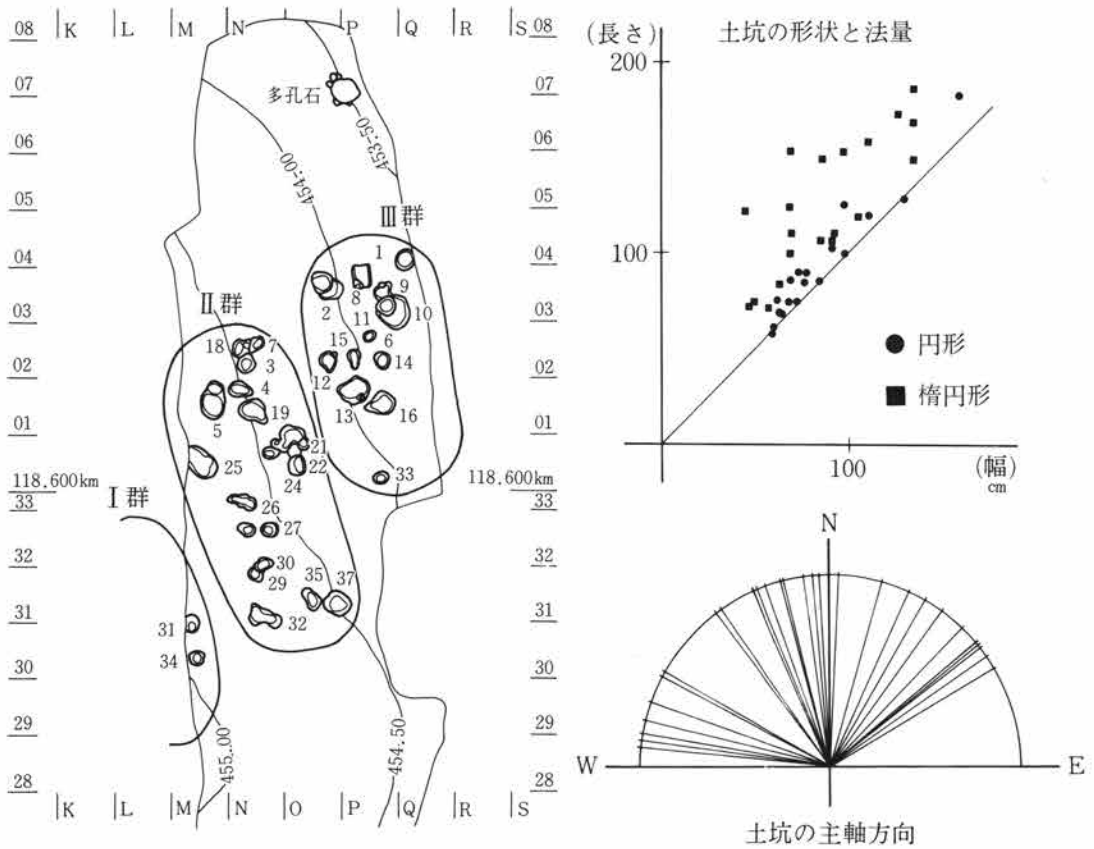
全体は等高線を基軸にして3群に分類をした（第159図）。

I群 現状の範囲で標高455m付近の最高所に位置する。31号、34号の円形土坑2基がある。

II群 全貌が判明した一群で標高454.50m前後に位置する。3～5号、7号、17～30号、32号、35～37号の円形8基、楕円形14基の合計22基がある。

III群 東に広がりを持ち、標高453.50～454m前後に位置する。1～2号、6号、8～16号、33号の円形7基、楕円形5基の合計12基がある。

形状は、円形基調のものと楕円形基調のもの（第3表）がある。各群では両者が混在し、必ずしも時期区分の基準たり得ないが、覆土の特徴と少数の重複例からすると楕円形のものが等高線に直交か



第159図 B区土坑

ら平行へと推移していくのがわかる。

遺物は、完形乃至近い状態の土器が殆どなくD区と対称的で、代って石鎌が13基から26点と高い頻度で出土した。2号の石皿や15号と27号の河原石は標示物か抱き石であろうか。

時期は中期の土器が圧倒的に多いが、下限を基準とすると後期後半の加曾利B式前後といえる。

D区の土坑群

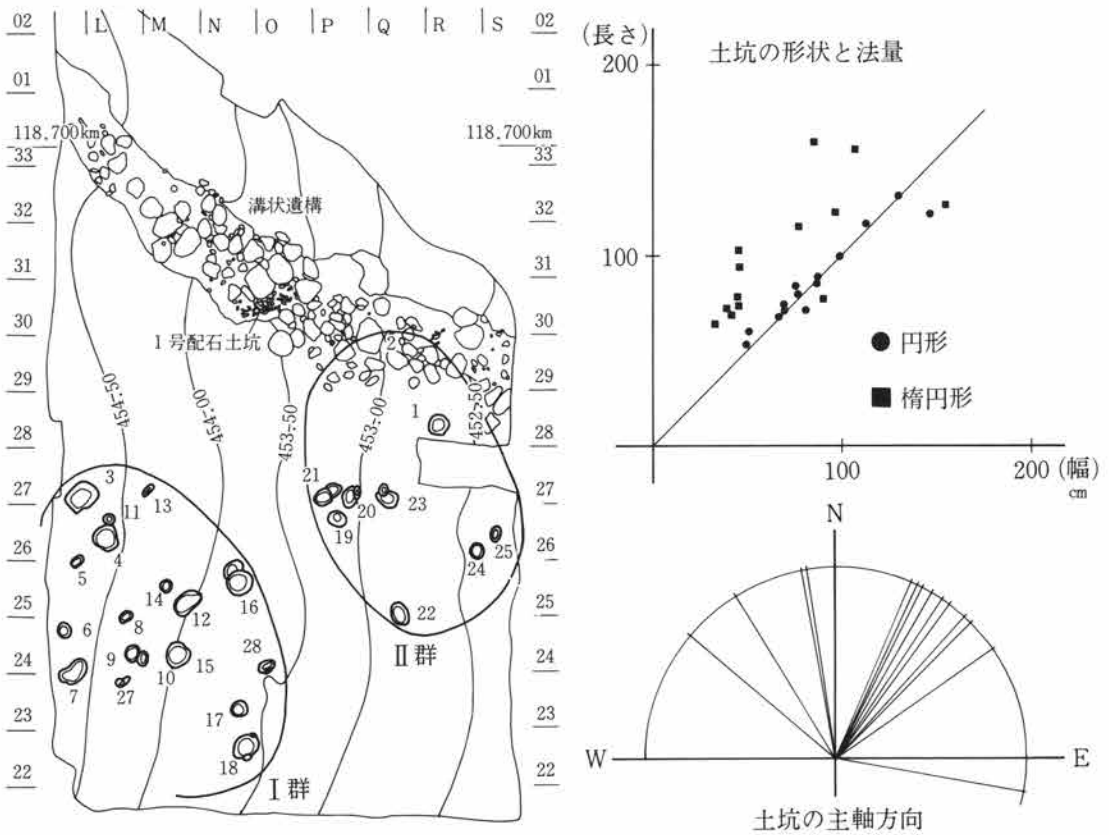
D区の土坑は、C区と同じ尾根筋でも、溝状遺構にむかった北側緩斜面で27基が確認された。全体では、C区の配石を中心にしてB区と環状の一部を形成すると推定されるが、B区が谷地をもってC区との自然境界をなすのに対して、D区は同一地形上にある。D区での遺構の分布は、北端を溝状遺構までとし、東西に、現地形及びC区との関係からは西へ密に広がるのが推定される。

全体をB区同様に、等高線を基軸にして2群に分類をした(第160図)。

I群 全体は等高線に斜交して分布する一群で、北西へさらに広がる。標高453.50~454.50m付近にあり、3号~18号、27号、28号の円形9基、楕円形が9基の合計18基がある。

II群 標高452.50~453m付近に位置し、1号、2号、19~25号の円形のみ9基からなる。北端の2号、中間の1号、19~21号、23号、南の22号、24号、25号の小群を形成する可能性もある。

形状は、B区同様に円形基調と楕円形基調のものがあり、楕円形から円形への推移、楕円形の中でも等高線に対して北を意識した斜交から平行への動きも似たものがある。配石を伴う円形の例は、



第160図 D区土坑

素掘り土坑の中にあってC区との関連で過渡的にか、例外的に作られたものか。

遺物は、19号の鉢や2号の深鉢例の様に単体での土器が特徴的で、B区の石鉢の様に卓越した器種はない。時期は、後期堀之内Ⅱ式～加曾利B2式頃である。

④ C区配石遺構について

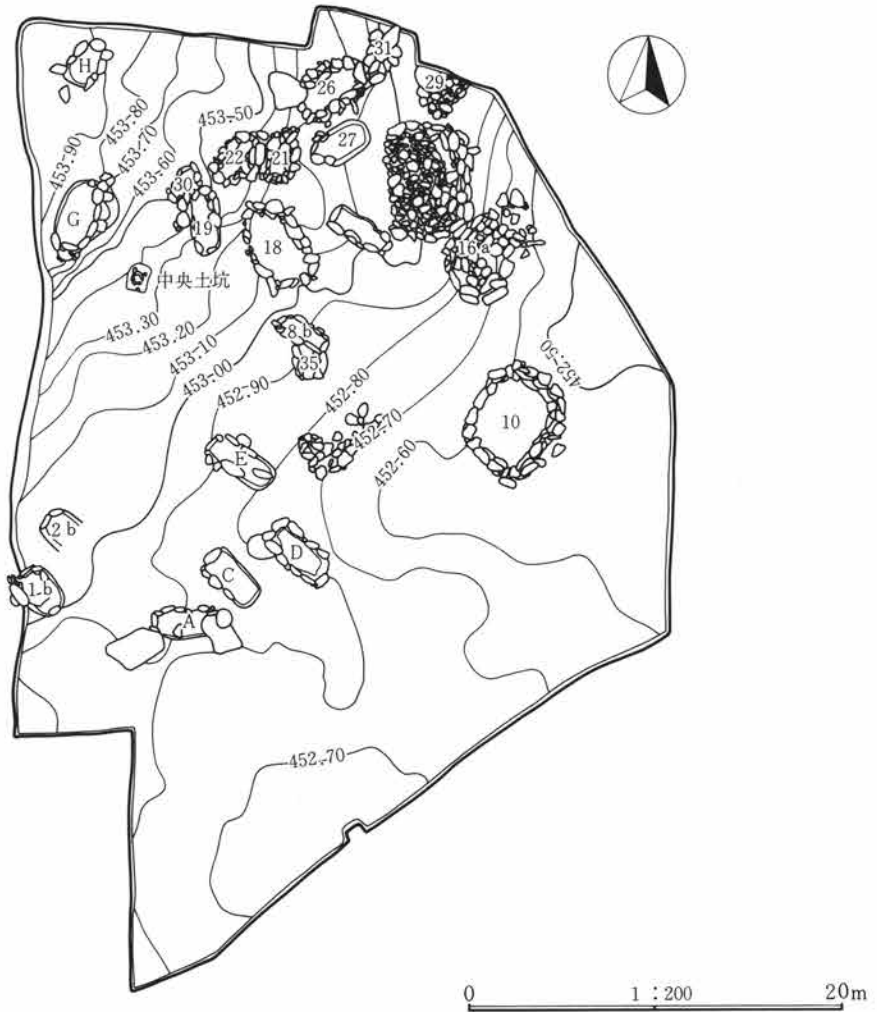
配石遺構は利根川右岸上位段丘面の中位にあり、東方へ緩やかに下る東西約80m、南北約100mのローム台地の南東緩傾斜面で南西方向へ湾入する浅い埋没谷に面している。配石遺構や南北の土坑群は東西に小段丘崖があり、埋没谷が湾入し南北に波状をなす狭小な限定された地形の上に立地している。

配石遺構は東西18m、南北20mで中央部に配石のない空間を持つやや楕円形をした環状を呈しており、東と北へさらに2mほど延び西へ等高線に沿ってさらに大きく広がることが予想される。

配石遺構は石棺状・中型・大型・列石・集石等61基の配石の集合体であり、個々の配石は時間差を持って構築されており、確認された形状は最終段階の様相を現わしている。

しかし、時間差を持って構築された配石は初源段階から最終段階まで、中央部の空間に入り込むことなく継続し環状の型態を保持し続ける。深沢遺跡配石遺構は諸例に見られる伝統的意識である同心円的発想のもとに構築されている。

配石中央部には東端に小土坑1基があるだけで、他に遺構もなく遺物も土器片や石器片が少量出土



第161図 C区石棺状配石及び中型配石全体図

ただで焼土や炭化物もなかった。中央土坑は規模が小さく人間を葬るには無理があり、3個体の特殊な土器の出土からみて、何らかの儀礼に伴い土器を埋納したものと考えられ、配石中央部において何らかの儀礼行為を行ったことを窺わせる。また、中央部は列石によって画されている。

配石遺構の各部に立って見ると何らの指標となる対象物を眺望することはできない。西や北は大峰山麓によって遠望を遮断され、東も利根川（直接河床を見ることはできない。）を挟んで三峰山麓の平坦な山体によって遠望が遮断される。唯一、眺望が開けるのは南であり段丘崖線上に沼田を中心とした盆地状の地形が広がり中央を利根川が南流し、はるかに赤城山（標高1828m）の山並が眺望できる。配石遺構に方向性があるとすれば、楕円形を呈する配石遺構の長軸に直交する南への方向性が考えられる。

各配石は完形の土器を持っておらず、このことがひとつの特徴となっている。従って、配石から出土する土器は破片のみで混入の可能性を含んでいるが、出土する土器は若干、前後の型式を含んでいるが主体は加曾利B1式～加曾利B3式である。個々の配石の時期は限定できないが配石遺構全体の時間幅は示していると考えられる。配石遺構の面する埋没谷は中期後半の埋甕があり対岸には多孔石



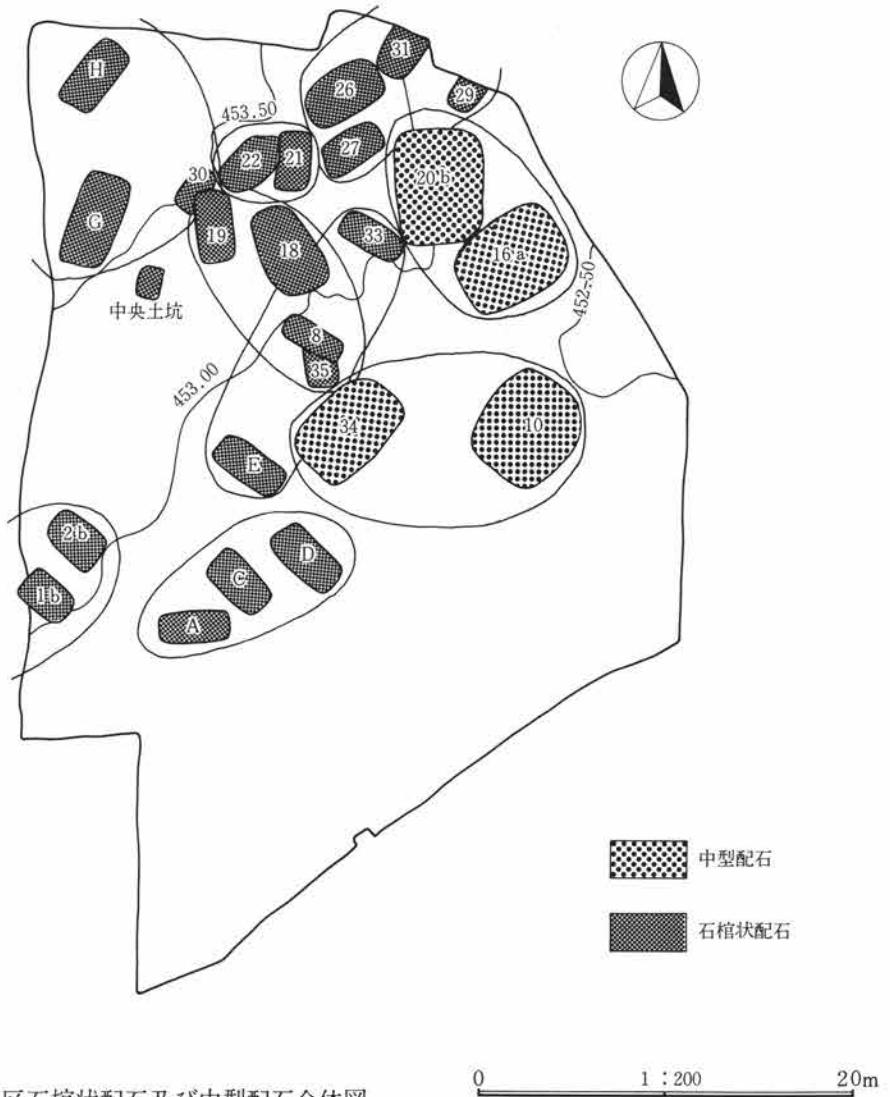
第162図 C区大型配石・列石・立石・集石全体図

も存在しており、中期段階より特定な場として設定されていた可能性がある。

配石は形状・規模により石棺状・中型・大型・列石・集石状に大きく分けられ、配石の手法によりさらに細分される。

石棺状配石は20基ありいずれも底面の敷石はなく、配石の手法により3種類に分けられる。a類 周壁に沿って河原石を巡らす配石で2 b・8 b・27・28・30・33・35・A・C・D・H・G (2重に巡らしている。)号で11基ある。b類 周壁に沿って河原石を巡らした上に縁石を載せる配石で1 b・18・19・26・31・E号の6基である。c類 b類の配石の周囲に円形に周石で囲う配石で21・22号の2基だけで22号は蓋石がある。石棺状配石は規模差があるが配石遺構全体に分布し、長軸方向は中央部より放射状に分布する傾向があり、概ね7群に分かれ石棺状配石同志の重複関係もあり、a類からc類への変遷が想定される。

中型配石は10・16 a・20 b・34号の4基で長軸が約3 mとほぼ同一規模で東縁だけに分布している。10・16 a・34号はほぼ同一の長軸方向を持ち、20 b号だけが方向を異にしている。また、10号だけは底面に敷石がない。16 a号と20 b号は時期差があり20 b号が新しい。中型配石は石棺状配石と重

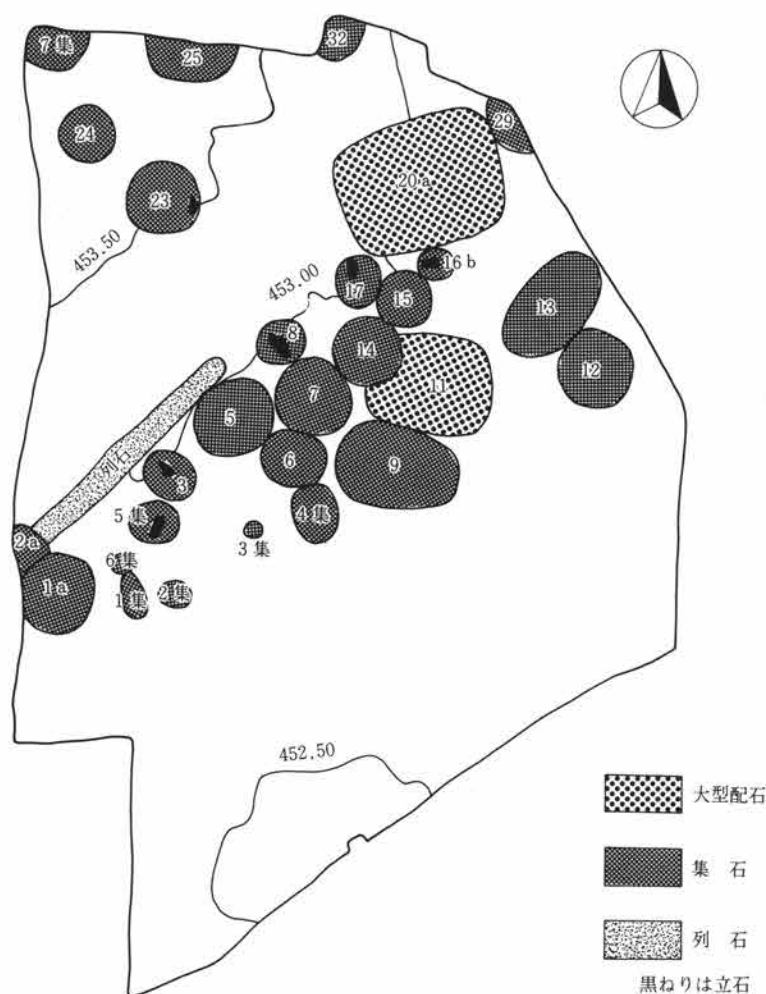


第163図 C区石棺状配石及び中型配石全体図

複するものがなく、大型配石や集石状配石によって切られている。また、16 a号と20 b号との関係から1時期は2基であった可能性が強い。

大型配石は11号と20 a号の2基で長軸約3.5m前後の隅丸方形を呈し、東縁の相対する位置にあり本配石遺構の特徴的な配石である。20 a号は20 a号を改築して構築しており、11号も10号を切っている。また、20 a号は2基の石棺状配石を切っており石棺状配石より後出の傾向を有し、集石状配石の多くとは（14号配石は明確ではないが11号配石に載る可能性がある。）と平存関係にある。

列石は中央部と南縁部を画する状態で構築されており、石棺状配石（2 b号）を切り集石状配石の一部（2 a号）によって切られている。しかし、集石状配石の多くとは（3・5・6・8 b号）併存するものであり、特に立石を有する配石と平行関係にある。

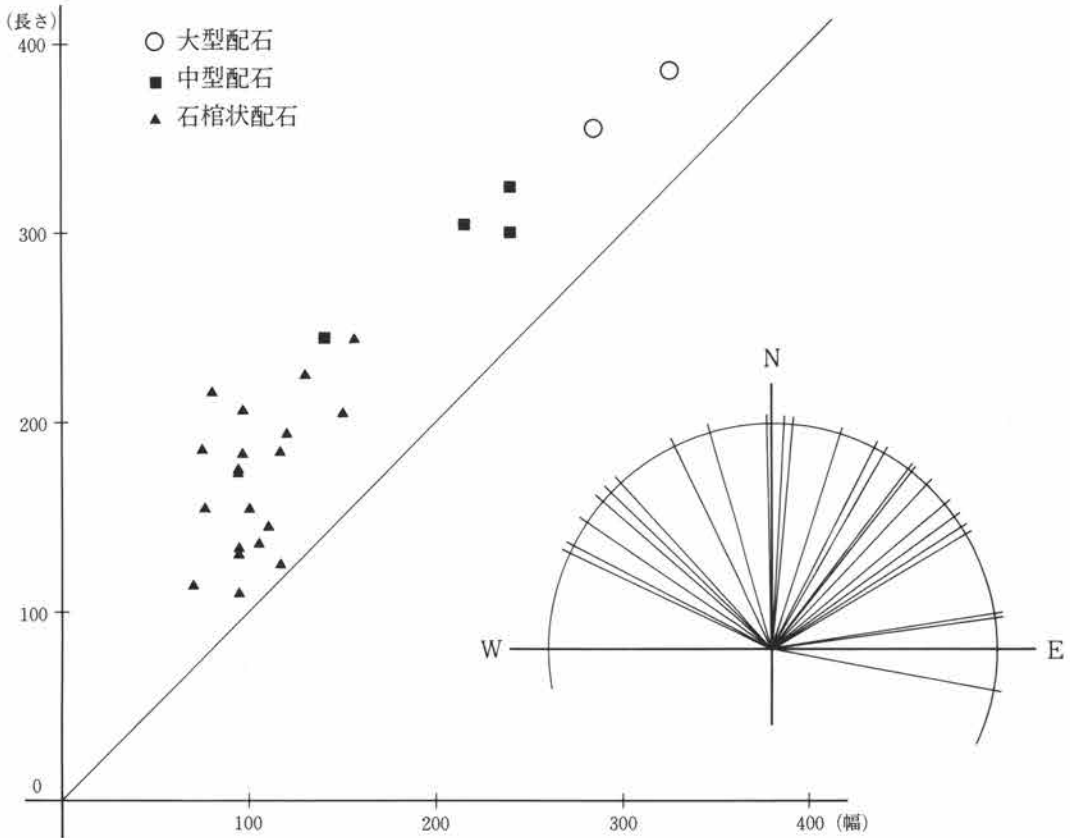


第164図 C区大型配石・列石・立石・集石全体図

0 1 : 200 20m

集石状配石は28基あり他に小集石7基がある。集石状配石は形態により大きく3つに分けられる。
 a類 立石を有する配石で3・8 a・16 b・17・23号（6号配石や5号集石も可能性はある。）の5基があり、中央部を取り囲むように位置している。b類 環状をなす配石で1 a・2 a・12号の3基があり南縁から東縁に分布している。c類 積石状をなす配石で5・6・7・9・13・14・15・24・25・29・32号の13基がある。本類の中には形態の明確でないものも含まれるが、配石遺構全体に分布し、石棺状配石や中型配石を切る例があり、大型配石とともに後出的である。

次に各遺構の特殊遺物の出土状態であるが、石棒や石皿は配石の用材として用いられており配石の一部を構成するものではない。配石の一部を構成するものとしては丸石と多孔石であり2 a・3・7・15・17・23・27・28号があり中央部周辺の集石状配石に多い。多孔石は6・29号にあり丸石を用



第165図 C区配石(石棺状・大型配石)規模と方向

いる配石の外周に位置している。また、中央部に接した8b号の石英質岩の配石は特異である。

副葬品としては各種の飾垂具があるが大型配石の2基に集中しており、大型配石は他に土偶や石鏃が多出している。大型配石はともに30本と31本のほぼ同数(混入も含まれていると考えられるが。)の石鏃が出土しており大きな特徴となっている。中型配石や大型配石は副葬品と思われる遺物が多く集団墓的性格を有していると考えられる。また、各配石からは日常利器も多く出土しておりこの点も特徴である。

以上のような特徴を持つ各配石は重複関係により次のような変遷をたどると考えられる。配石遺構は初源段階から最終段階まで中央部の空間を意識し環状を構成している。配石遺構は大きく2時期に分けられる。

第Ⅰ期は石棺状配石と中型配石のみで構成され、石棺状配石はほぼ7群に分かれ2~4基の小集団に分割される。中型配石は東縁部に位置し1時期2基で1度位置を変えており、大型配石へと変化して行く。

第Ⅱ期は列石が築かれ中央部周囲に立石群が配され、次に外周の積石群へと移って行く。同時に大型配石が築かれ併存し、一部積石状配石が残存する。また、Ⅰ期からⅡ期への過渡期として21・22号

配石のような石棺を中心に配し周石を持つ型態の配石が存在したと考えられる。

以上のような変遷をたどる深沢遺跡配石遺構は立地状件が異なっているがB・D区の土坑群と一体のものとして、墓域の中核をなし周囲に土坑群を巡らしていたものと考えられる。

土坑群と配石遺構の共通点としてはともに一定の位置に群構成をなすこと、石鏃を多出すること、土偶を共有すること等がある。異なる点としては最大のもは配石遺構が墓域の中核にあり石を用いてることと土坑群はその外周部を構成すること、土坑群は完形の土器を有し配石遺構は有さないこと、配石は丸石・多孔石を一構成物とし、土坑群は石を用いたとしても石皿や偏平な河原石を抱石や指標物としていること等である。

この配石遺構の同差は土偶の共有や石棒の出土に意味が見い出せない所から性別による差ではない。また、配石には子供用と考えられるものがあり年齢差によることでもない。飾垂具の出土は配石が多いがすなわち階層の差とは速断できず、逆に注口付双口土器といった特殊な土器がD区の土坑より出土しており逆に否定的と考えざるをえない。

残る要因としては当地域の特色である系統の異なる土器の混在（本報告ではそこまでの分析にいたらなかったが。）があげられる。配石遺構と土坑群に一定の位置で葬られた小単位集団は共同体内での出自の差を表わしている可能性があるが今後の課題としたい。

⑤ 近世の掘立柱建物跡について

近世の遺構は、B、D、Eの各区から掘立柱建物11棟、9本の柱列、溝1条、井戸1基が確認された。これらは、個々に存在したのではなく、各区に於いて柱列で区画した中に配置されたもので、各々の調査区毎に一軒単位の屋敷跡とすることができる。建物が同一の規模や棟方向で一定範囲に複数が重複する点で、数世代を経た継続性のあるものとする。

B区では、既存の民家の建物配置と近い状態で大小8棟が確認され、南面する大型建物（母屋か）に対して「コ」の字型に小規模の納屋らしい建物が付設されている。D区もこれに近いが井戸を持つ点で特徴がある。D区の柵列を一層顕著にしたのがE区である。ここでは、高台部分に南北に建物を設けて西に母屋等の広がりを持つが、緩斜面の東と南に「L」型の柵列がめぐり境界としている。

建物の個有の特徴では、該期の月夜野地区の遺跡報告例^註と合致する点が指摘される。規模では、母屋様の大型を除いて2間×1間が一様に採用されており、棟方向では東西棟が主要なものに、南北棟が付設されるものに多い。工法の点では、一様に掘立柱式で、占地の都合か一部に地山の石を巧みに礎石として代用しているものがある。柱痕径は5寸角程で、季節風を考慮してか北西を主とする隅のものが深い傾向にある。年代観は、グリット等で出土した陶磁器類からすると18世紀以降で、西の上位段丘面を越後へと向う清水街道に面した点在する屋並みが推定される。

註 深沢遺跡周辺の中世～近世の建物は、「深沢」の南にある藪田、洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各遺跡で確認されている。利根川の崖端には明応7年（1498）築城の小川城跡があり、二の丸の一部が調査されている。藪田東を含めた藪田遺跡は「小川城の創立・推移に直結した、小川衆の有力地侍の居宅か屋敷」と推定され、洞Ⅲ遺跡も同様とされている。この地域では、中世は小川城を核として、近世以降は三国街道、清水街道を軸として麓集落が展開されている。（文献は第Ⅲ章参照）

利根郡月夜野町深沢遺跡出土の骨類について

宮崎重雄（群馬県立前橋第二高等学校）

深沢遺跡の縄文時代後期の20号と21号の配石遺構から骨の細片が多数出土した。頭蓋骨片、指骨の末節骨などの形状から人骨であることは明らかである。亀裂や歪みの生じているものが多く、灰白色の細片になっていて、焼骨としての特徴を十分に備えている。馬場ほか（1986）によれば、骨に亀裂や歪みが生じ、灰白色になるのは800℃の熱が加わった場合である。また、本遺跡では焼成を受けた歯根の破片は出土しているが、歯冠部は見当たらない。これは熱のために歯冠部が崩壊して失われたためと考えられる。平野（1935）によれば、歯冠部のエナメルは538℃に達すると、95%の例で崩壊する。したがって、本遺跡の骨は、少なくとも、538℃から800℃の熱が加わったと推定される。

オープンサイトであるにもかかわらず、本遺跡で骨類が残っていたのは、骨が焼けていたことに主因があると考えられる。

20号配石遺構からは、1592片の骨片が出土している。そのなかには、内後頭隆起を含む後頭骨1片、大動脈溝のある冠状縫合線を含む頭頂骨1片、前頭稜を含む前頭骨1片、縫合線の見られる頭蓋骨3片、その他の頭蓋骨4片、歯根1片、腓骨2片、第5指末節骨1片、四肢骨8片などが検出された。このように、同定できる部位が少ないが、1個体分の人骨に由来しているとみてまず間違いない。骨の遺存率が少ないことや遺構の状態から実際は複数個体分と考える方が自然である。

骨片の大きさは最大でも43mm×27mmで、ほとんどが5mm前後である。

保存状態が悪いため詳しいことは分らないが、縫合線のように、脳頭蓋の厚さ、歯根の根管の閉鎖状況などから成人であることは明らかである。性別は、判定に必要な部位を欠いているため不明である。

21号配石遺構からは、9片の細片が出土している。20号配石遺構に比べると極端に骨の遺物が少ない理由についてはわからない。大きい破片でも9mmどまりである。骨の長軸方向にそって細かいすじが見られるものもあるので、人骨とみてさしつかえない。判定に必要な部位を欠いているため、年齢、性別は不明である。

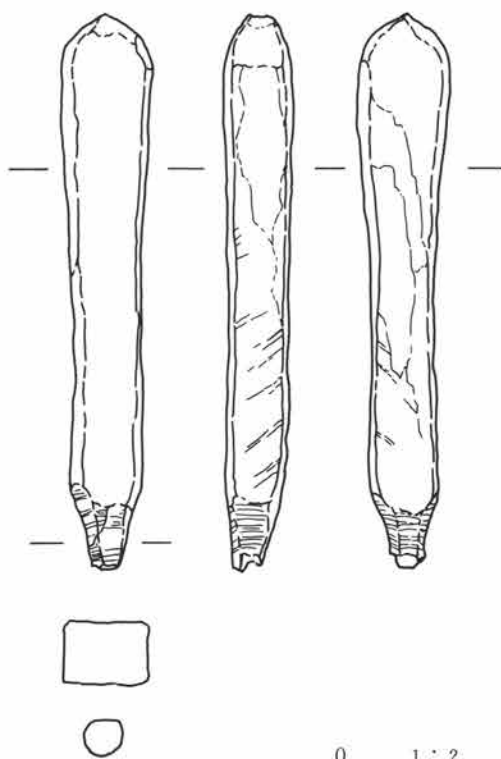
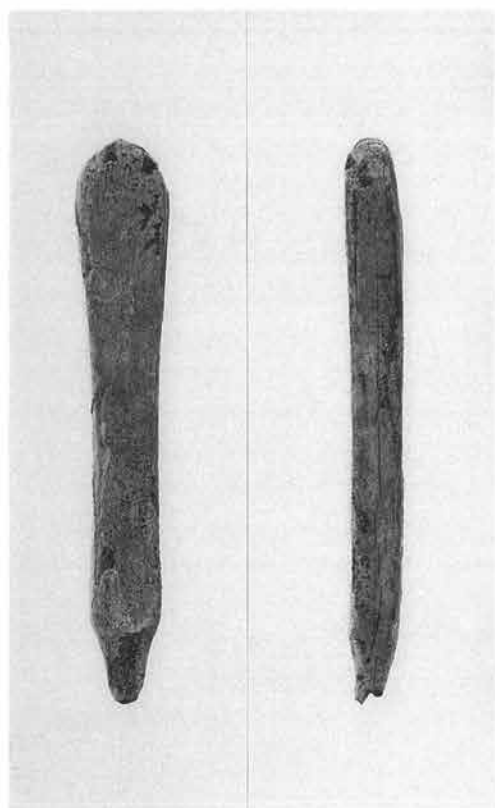
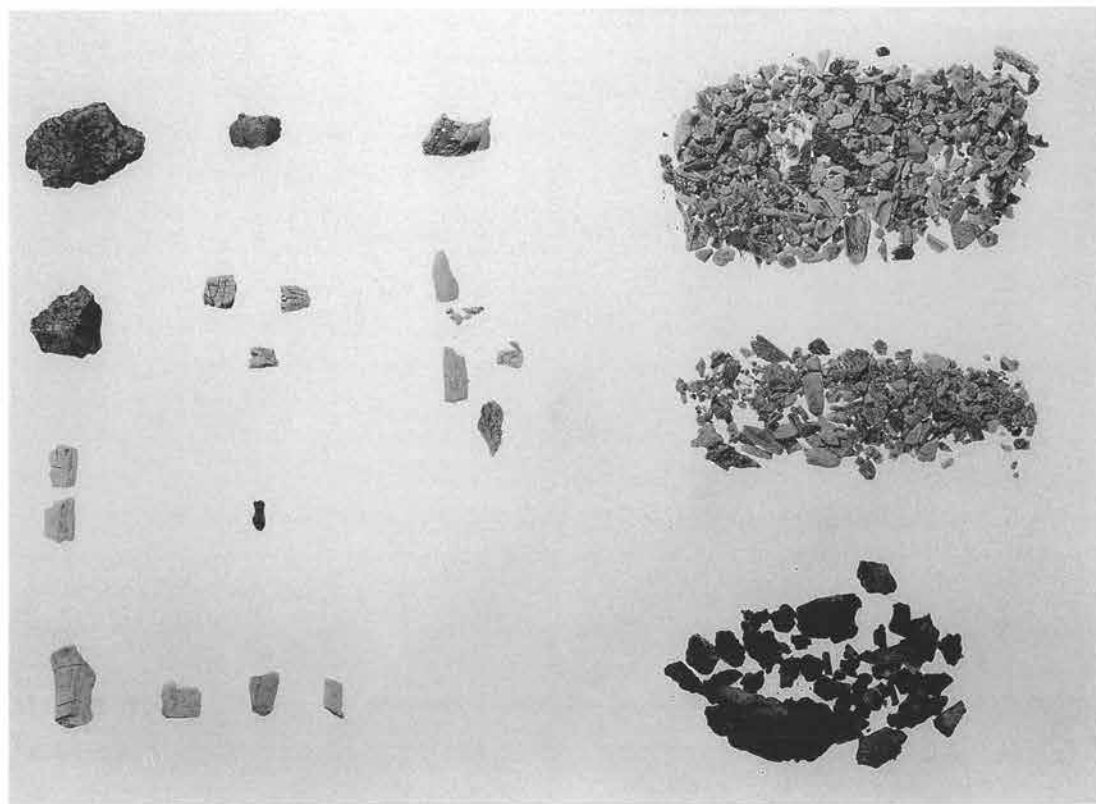
錐状骨角器

長さ73.2mm、厚さ7.2mm、最大幅12.5mm、中央最小幅9.4mmの厚い板状の骨角器で、先端は錐状に尖っている。どの面も磨いてあるので、どの動物のどの部位を利用しているのかの判定は困難である。

引用文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治（1986）、根古屋遺跡出土の人骨・動物骨『霊山根古屋遺跡の研究』、霊山根古屋遺跡調査団、pp 93～106

平野賢二（1935）、歯牙の熱処理に対する研究（第一編）人類歯牙の熱処理に就いて、口腔病雑誌、9、pp 375～393



深沢遺跡配石遺構出土焼骨と骨角器

第 V 章 前田原遺跡

1 調査の方法と経過

① 調査の方法

前田原遺跡の位置する地点は当初トンネルによる通過計画であり、事前の分布調査からも対象外となっていたが、急拠、工事計画が変更となり埋蔵文化財の調査対象地点として浮かび上がってきた。

事前の分布調査ではほとんど遺物の散布は見られなかったが、窯跡が近くにあることや地形が平坦化されていること等により試掘を行なうことで遺構・遺物の有無を判断する所から出発した。

調査範囲は東西55m、南北110mで大峰山へ登る林道を挟んで西半が畑地、東半が水田となっていた。調査は従来の上越新幹線関係の基本方針に従い、3×3mグリットを基本とし1区1遺跡として、上越新幹線工事用センター杭（N-3°-W）を基準に平行する基軸線をアルファベット（A～S）で直交する基軸線を算用数字（01～37）で表わし、南西隅をグリットの基点とした。

予備調査は調査全区域に東西3本、南北4本の幅2mのトレンチを設定して2グリットおきに6mずつを調査した。東西列は11・21・31ラインで、南北列はE・I・M・Qのラインである。本調査は遺構・遺物が集中して確認された調査区北半を重機により表土を掘削し、ローム面で遺構の確認と調査を実施した。

遺構名称は種類ごとに通し番号とし、実測図は「1/20作図・平板測量を原則とした。撮影には6×9版プロニーサイズとし35mm版を使用し、モノクロとカラースライドの撮影を行なった。

② 調査の経過

昭和53年度における上越新幹線関係月夜野地区の埋蔵文化財調査は職員2名、調査員1名の体制で、町民の方々の協力のもとに緊急調査の本遺跡と藪田遺跡の6～8区、洞I・II遺跡の宅地移転跡地を対象として実施した。

事前準備終了後、前田原遺跡の予備調査は昭和53年4月17日より4月末日を目途に実施した。調査方針に従い、トレンチを設定し人力によりローム面まで下げ遺構・遺物の確認を行なった。

ほぼ10日を経た段階で、林道より東の水田部にはほとんど遺構・遺物が存在しないこと。林道の西のうち南半はE-11グリットにおいて縄文時代早期後半の遺物がまとまって出土した他は、ほとんど遺構・遺物が確認されなかったこと、遺構・遺物は調査区北半に集中し平安時代と近世の遺構が推定されることが判明し、協議の結果、本調査を5月の1ヶ月とし調査区北半についてのみ行なうこととなった。

5月初旬の連休期間中は重機による表土掘削と遺構確認を実施し、掘立柱建物の柱穴や土坑・溝、竪穴住居跡等を確認、連休明け後、各遺構の調査を実施して行った。

調査は土坑・溝・掘立柱建物・竪穴住居跡の順で実施して行ったが、同時に藪田遺跡北半の6～8区の表土掘削も実施し調査を2分して行って行った。調査の結果、真沢窯跡に近接した平安時代の竪穴住居跡1軒、近世の掘立柱建物跡4棟、溝2条、土坑4基を確認し、5月31日に調査を終了し、次の藪田遺跡の調査へと入って行った。

2 遺跡の概要

前田原遺跡は上越新幹線上毛高原駅の北約1.5kmの大峰山東南麓末端の丘陵に西接して位置し、南は東西に走る丘陵を挟んで深沢遺跡（J S 79）があり、北には真沢を挟んで前中原遺跡（J S 80、上越新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第1集）がある。また、丘陵の北端で本遺跡の北西100mには真沢窯跡があり、真沢の対岸には水沼窯跡がある。

遺跡地は大峰山東南麓末端の丘陵の湾入部にあたり、標高は463～456mの傾斜地で利根川右岸の上位段丘面に東接している。遺跡地には南北に大峰山へ通じる林道が横断しており、東半は水田で西半は畑地となっており、調査範囲はこの林道を挟んで東西60m、南北110mである。

遺構は丘陵に接した調査区北西部に集中し、平安時代の排水溝を有する竪穴住居跡1軒、近世の掘立柱建物4棟（1号掘立柱建物跡は主屋2間×4間で北庇を有し排水溝が西に併設されている。他の3棟は歪みがあり完全にまとまるものではないが、建物の存在を積極的に示したものである。）、溝2条（建物群の上位傾斜地にあり宅地への山水の滲透を防ぐための排水溝と考えられる。）、土坑4基が確認された。

遺物としては縄文時代早期後半の土器片と石器類が少量出土し、平安時代の遺物は住居跡から出土した。近世の遺物は陶磁器の小破片がわずかに出土しただけである。

前田原遺跡は丘陵に接した狭小な地形に立地し、縄文時代においてはキャンプ地として、平安時代・近世においても単独的居住がなされていた小遺跡と考えられる。

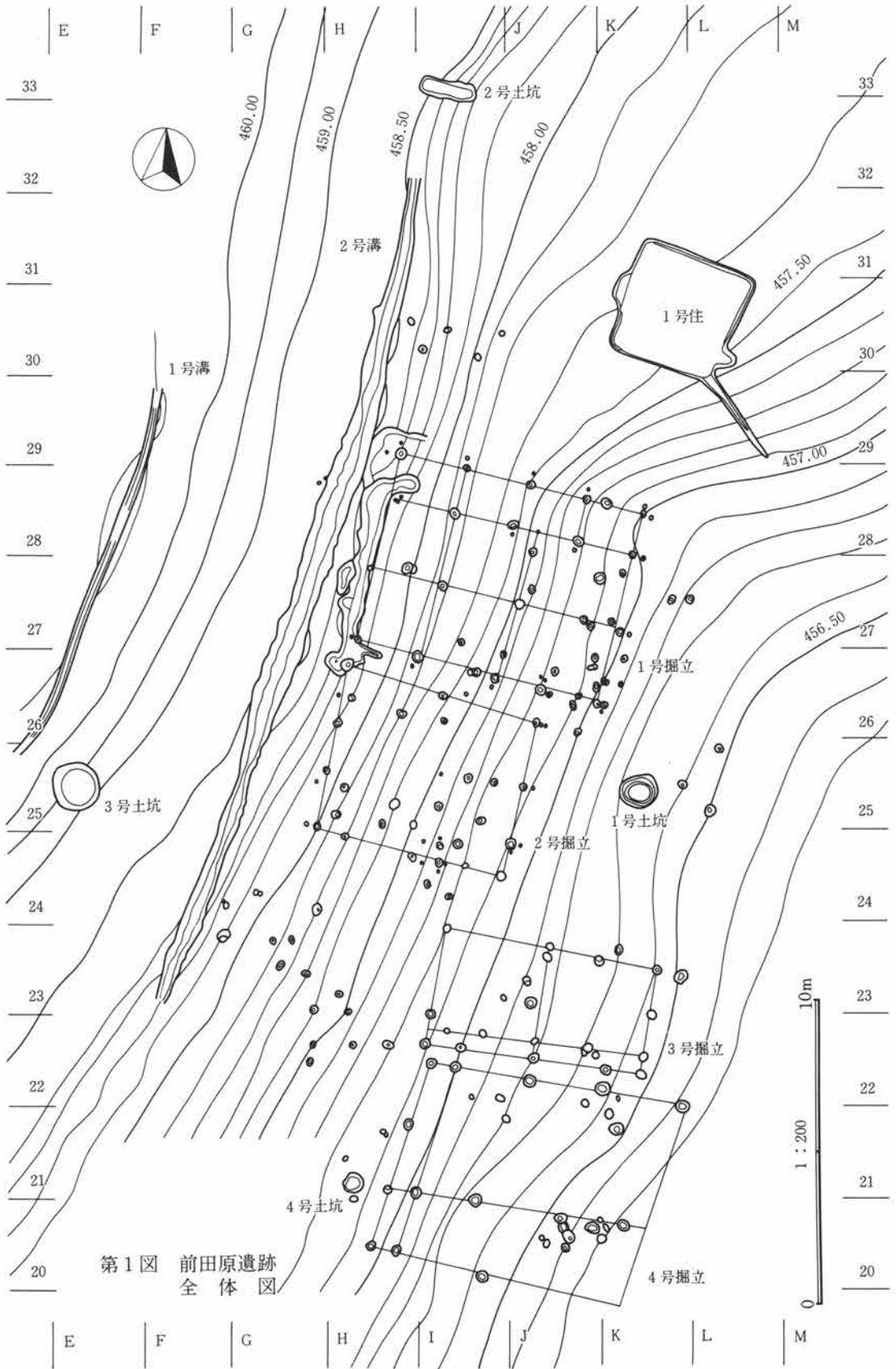
3 基本土層

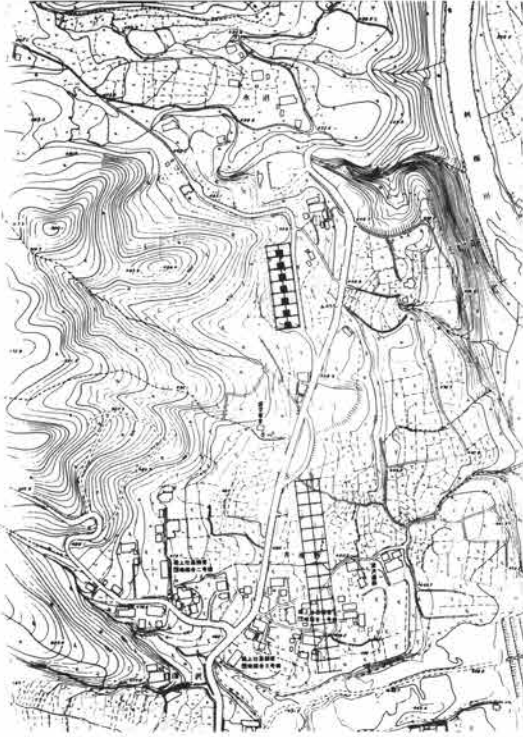
前田原遺跡は大峰山東南麓末端の丘陵の山体が西方へ緩やかに湾入した傾斜地にあり、調査区西半は畑地となっており、南・北・西の各隅は丘陵の屋根に向かって立ち上がっている。中央部は椀底状の地形で東方へ緩やかに下っている。林道を挟んだ調査区東半は階段状の水田地帯となっており東方へ下って行く。本遺跡の基本土層は以下の通りである。

- | | | |
|-----|------|--------------------------------------|
| 第Ⅰ層 | 耕作土 | （暗褐色を呈しやや砂質で、小礫を多く含む。） |
| 第Ⅱ層 | 黒色土 | （粘性が弱く軟質な土層で、小礫を若干含む。） |
| 第Ⅲ層 | 暗褐色土 | （粘性が強く、小礫をやや多く含む。） |
| 第Ⅳ層 | 暗褐色土 | （粘性が強く小礫を多く含み、硬く締っている。1号住居跡の確認面である。） |
| 第Ⅴ層 | 褐色土 | （粘性が強く大小の礫を多く含み、硬く締っている。） |
| 第Ⅵ層 | ローム層 | （黄褐色を呈し粘性に富み、大小の礫を含む。） |

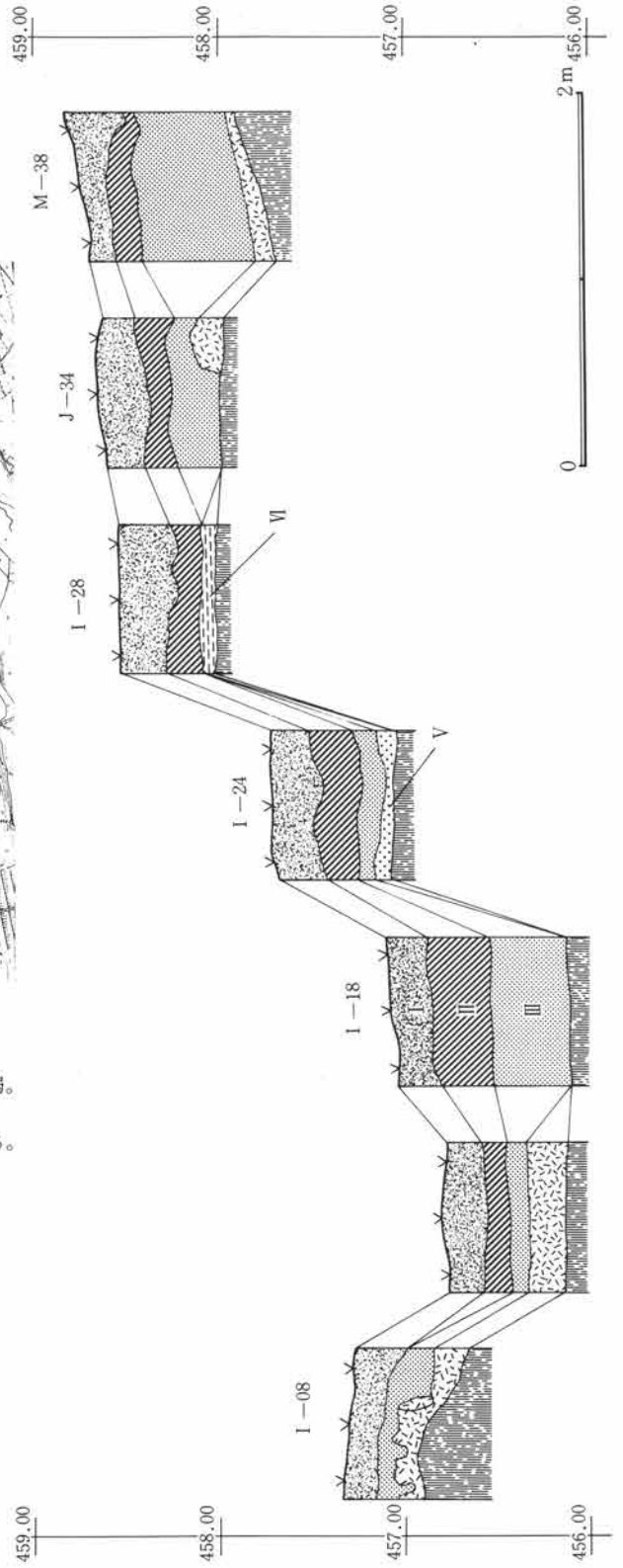
調査区西半の各隅では第Ⅱ～Ⅴ層が薄くなり、第Ⅳ層の上に直接第Ⅰ層が載る傾向にある。また、調査区東半は水田耕作により第Ⅱ・Ⅲ層が削平され、第Ⅰ層下に鉄分の沈殿層が見られる。

2. 遺跡の概要





- I 暗褐色土 耕作土
- II 黒色土 小礫を若干含む。粘性に乏しく軟弱。
- III 暗褐色土 小礫やや多く粘性に富む。
- IV 暗褐色土 全体に小礫を含み硬くしまっている。
- V 褐色土 ローム漸移土、礫多く硬い。
- VI ローム 礫を含む黄褐色土

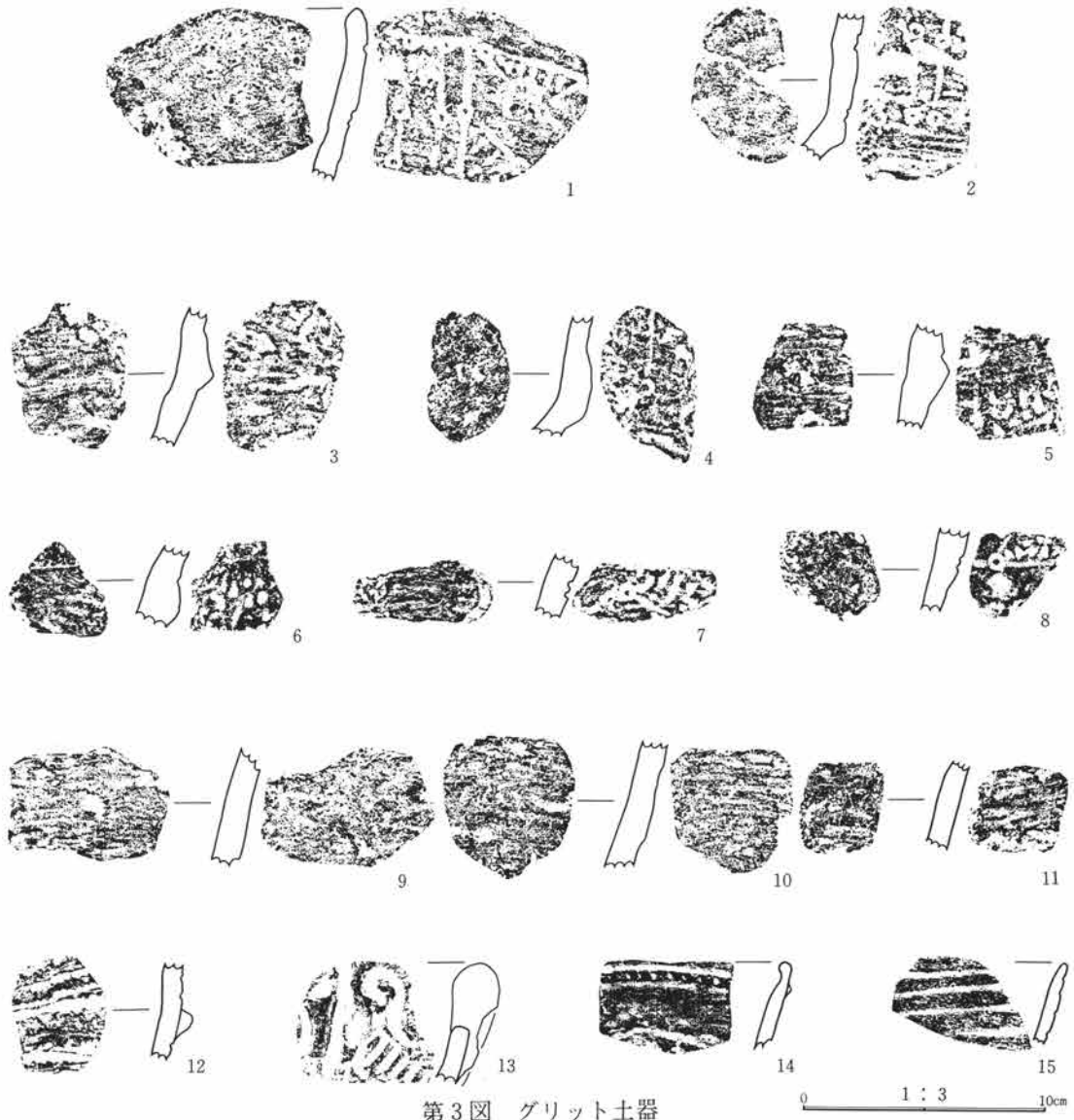


第2図 基本土層

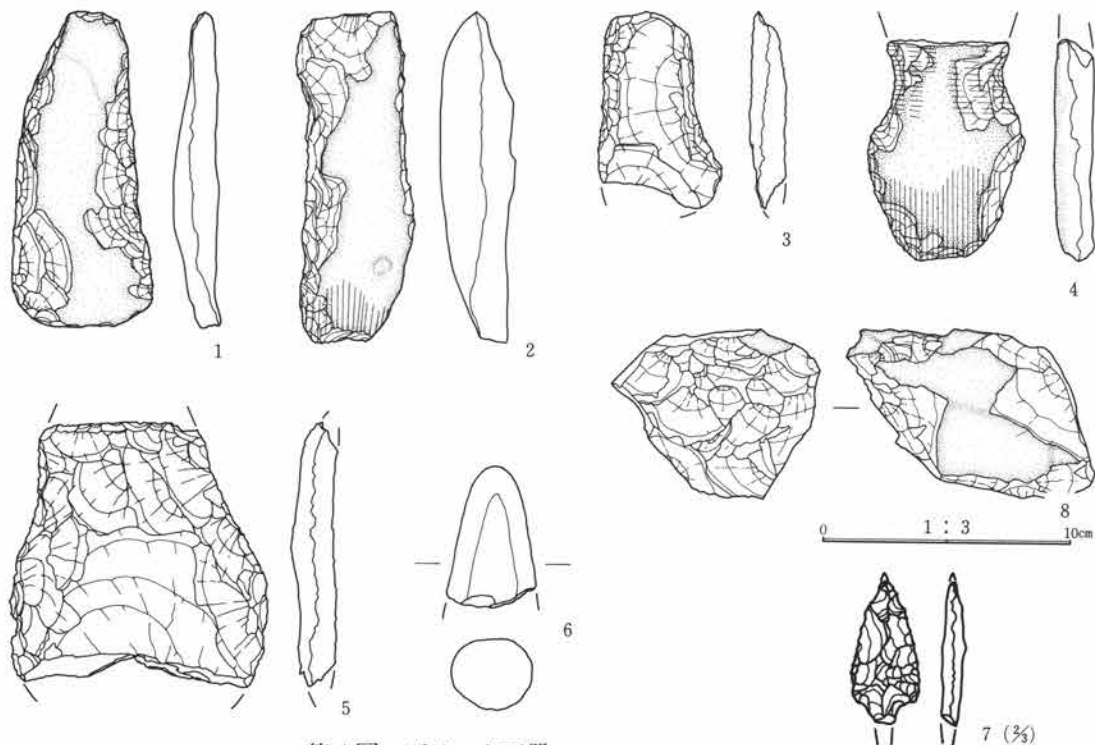
4 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡では縄文時代の明確な遺構は確認できなかったが、第3図の1～11はE-11グリットでローム面より露頭する2石の山石の傍よりまとまって出土しており、近くには焼土の散布も見られ、キャンプ地的な様相を示す場所が確認された。

第3図の1～11は口縁部～胴部の破片で表裏に条痕を施し同一個体と思われる。口縁部は波状をなし外面に円竹管と沈線により文様を構成し、頸部は屈曲し胴部は条痕だけである。早期後半に比定される。12は中期中葉の胴部破片で隆線の下にペン先状の刺突を有す。13は中期後半の波状口縁の突起部の破片で隆帯と波線により文様が施されている。14・15は後期中葉の深鉢形土器の口縁部片で、14は口縁直下に細紐が1条巡り、15は平行する沈線が4条巡っている。12～15は石器類とともに各グリットに散乱して出土した。



第3図 グリット土器



第4図 グリット石器

1～5は打製石斧である。1・2はともに自然面を残し短冊形を呈し、やや彎曲している。3は刃部が欠損しているが、変形の撓形石斧と思われる。4は器体中央部で破損している。刃部は使用による磨耗が顕著に認められる。また、挾入部には着柄によると思われる磨耗が認められる。5は両端部が欠損し、撓形に近い形状を呈している。さらに、器体中央の破損部には再調整加工が認められる。6は乳棒状の磨製石斧の基部破片である。7は凸基有茎石鏃であり、基部の一部が欠損している。8は珪質頁岩製の石核である。

第1表 前田原遺跡石器観察表

番号	種類	出土位置	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	石質
1	打製石斧(短冊形)	前田原 31ラインⅡ	完形	15.5	5.6	1.8	119.9	黒色頁岩
2	〃 (〃)	〃 E14-Ⅱ	〃	13.2	4.7	3.0	211.1	〃
3	〃 (不明)	〃	刃部欠損	7.8	4.9	1.5	60.9	〃
4	〃 (分銅形)	〃	基部欠損	8.7	6.3	1.6	114.7	〃
5	〃 (撓形)	〃	基部刃部欠	10.5	10.3	1.9	224.3	〃
6	磨製石斧	〃 C16-17Ⅱ	基部欠損	5.7	3.5	2.8	72.4	輝緑岩
7	石鏃(有茎形)	〃 2号溝	先端尾部欠	2.8	1.4	0.5	1.8	珪質頁岩
8	石核	〃 〃		6.7	8.3	10.0	526.7	〃

5 平安時代の遺構と遺物

1号住居跡（第5・6図、図版4. 5）

前田原遺跡では本住居跡1軒だけが確認されただけである。住居は調査北寄りのL-30グリットに位置している。確認面は暗褐色土中で床面はローム層中に構築していた。また、覆土中央上部が攪乱を受けていた。

平面形は隅丸方形を呈し、西壁中央が42cm半円形に張り出していた。また、南東隅より3.30mにわたって「V」字状に掘られた溝が併設され、基部にロームブロックを詰めていた。規模は東西軸3.76m、南北軸3.88mで東西軸の方位はN-115°-Eである。

周壁の高さは東壁40cm、西壁35cm、南壁32cm、北壁45cmを計りほぼ直に掘り込まれている。床面は平坦で軟弱であったが、全面を約10cmほど張り床している。また、カマド前の床面には焼土と炭化物が流れ出していた。

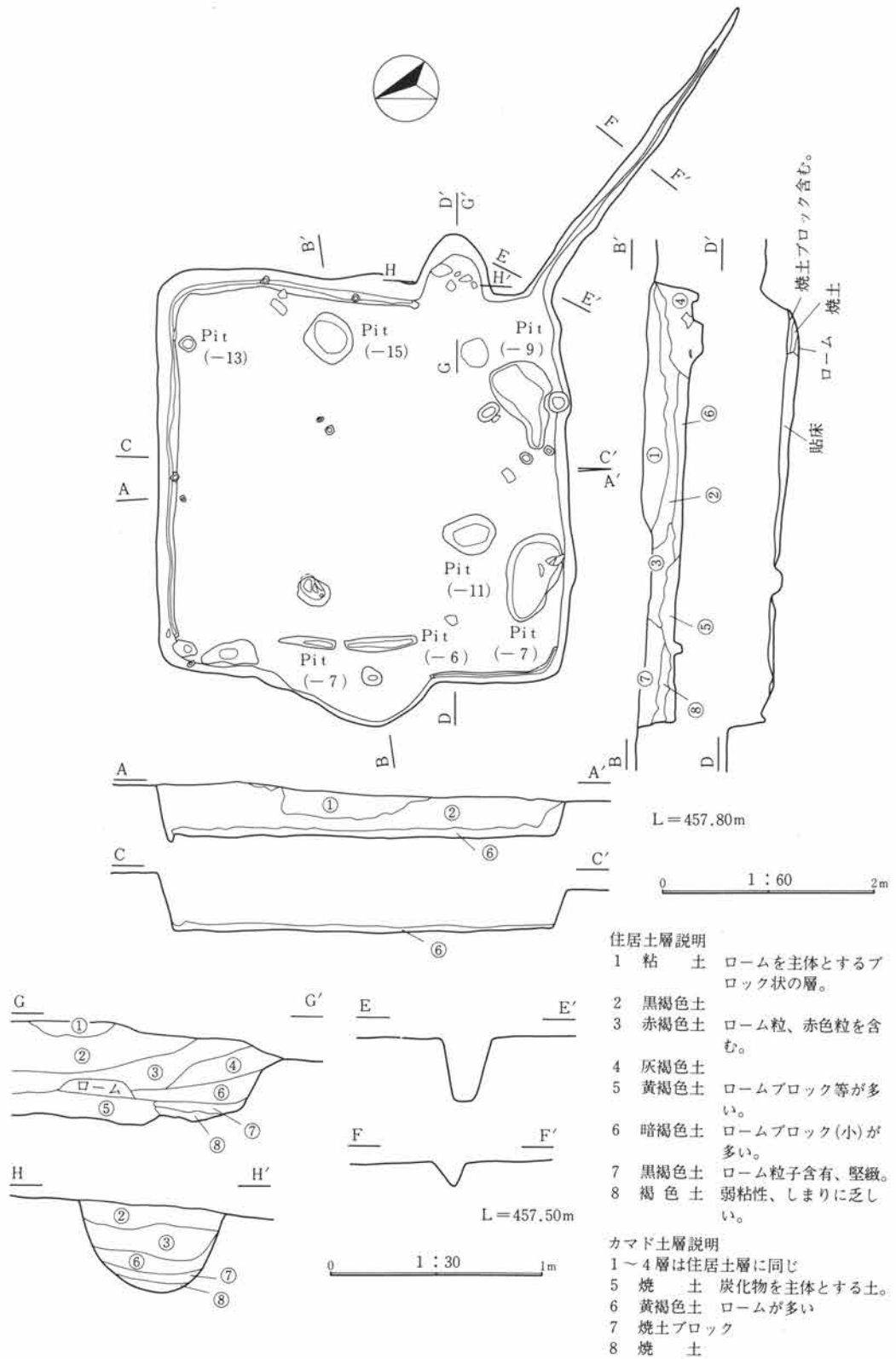
周溝は南壁と南東隅を除く他の壁に沿って確認された。西壁中央部を除き他の部分は幅平均6cm、深さ平均8cmで「V」字状の断面形を呈していた。西壁中央は壁線よりも30cm内側に入り込んでおり、幅10~15cm、深さ8cmで「V」字状の断面形を呈しほぼ中央で途切れていた。床面や周溝には径8~18cmの浅いピットが12本確認されたが明確な柱穴ではなかった。

カマドは東壁の南東隅寄りに位置し、焚き口幅65cm、奥行62cmで半円形に壁外に突出していた。周壁は急角度で立ち上がり、底面には小礫が敷かれていた。また、底面・周壁とも良く焼けていた。

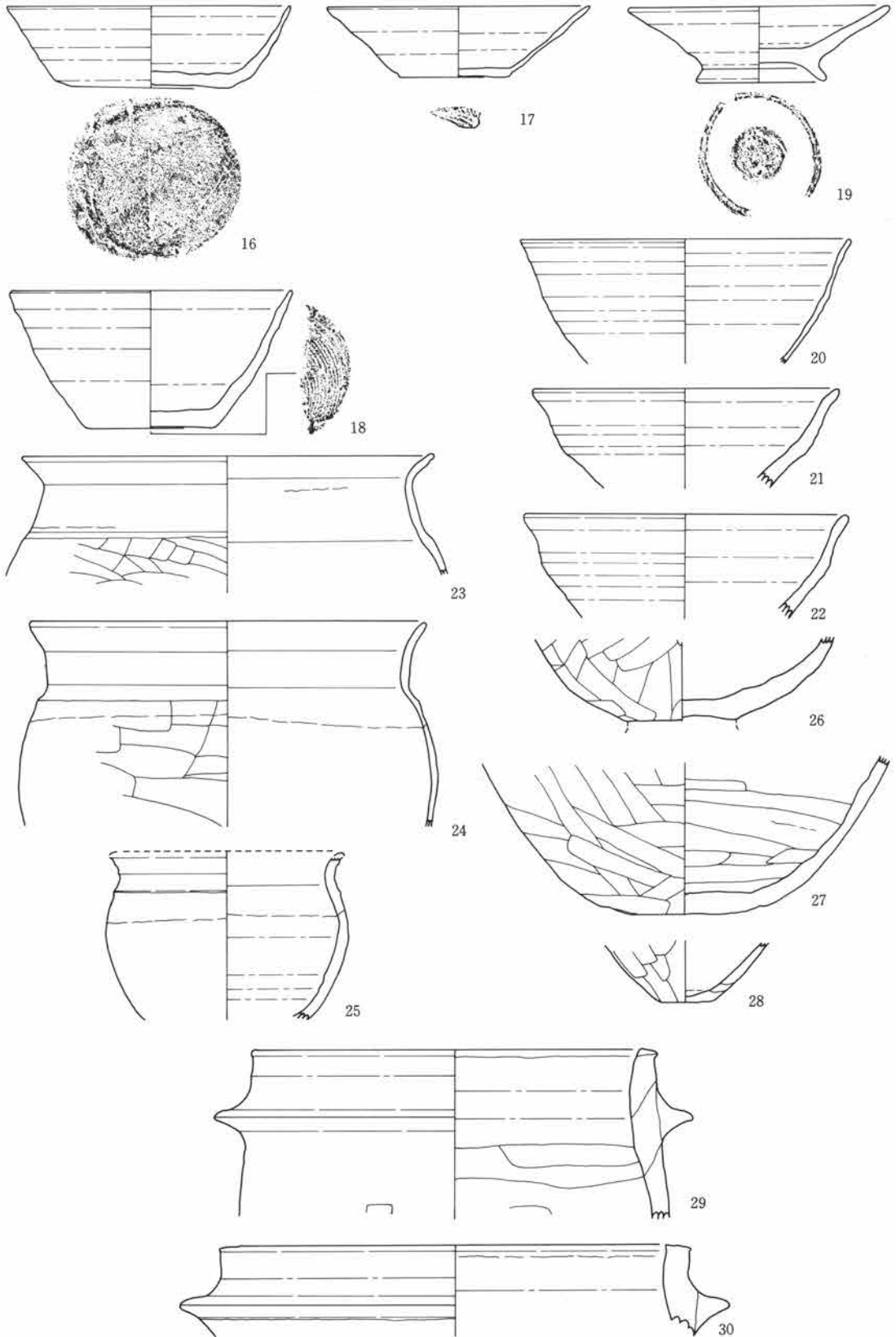
住居跡には4基の不整楕円形をなす落ち込みが確認されたが、この内、南壁に接して相対する位置にある2基の落ち込みは貯蔵穴の可能性があり、東壁中央に寄った1基と南壁中央に寄った1基は床面下の落ち込みの可能性がある。

遺物は須恵器の椀・羽釜の破片や土師器の甕の破片が中央部から南東隅にかけて出土した。第6図17は須恵器杯のほぼ完形で体部~口縁部が直線的に開き比較的小さい底部を有している。18は須恵器杯の1/3が残存する破片で体部~口縁部が直線的に開き、深みがある。19は須恵器の小型椀で体部が直線的に大きく開き口縁部がやや肥厚する。底部には外向する高台が付く。20~22は須恵器の椀か杯で、20は体部がやや膨らみを持って立ち上がり口縁部が外反する。21・22は体部が膨らみを持って立ち上がり口縁部は肥厚し外反する。23・24は「コ」の字口縁の退化した土師器甕の口縁部片である。25は口縁端部と胴部下半を欠損する小型甕で胴部上半に張りを持ち口頸部は丸みを持って外反する。26・27は羽釜の底部破片で外面は斜め方向のヘラグズリが施されている。26は脚部羽釜と考えられる。28は土師器の甕の底部破片である。29・30は羽釜の口縁部破片で口縁部は直立し端部は平坦である。直下に断面三角形の凸帯が巡っている。須恵器の杯や椀、羽釜には白色鉱物粒子を多量に含み、砂粒や小石も含む。また、焼成はほとんど酸化状態となっており、月夜野古窯跡群の北半の特徴を備えており、時期は10世紀前半と考えられる。

また第6図の16は2号溝より出土したほぼ完形の須恵器の杯で、体部~口縁部はやや膨らみを持って立ち上がり、口径に比し底径が比較的大きく浅い。9世紀前半に比定される。



第5図 1号住居跡



第6図 1号住居跡遺物図

0 1 : 3 10cm

6 近世の遺構

前田原遺跡からは、近世の遺構として溝状遺構、3条、土坑、4基、掘立柱建物跡、4棟が確認された(第1図)。その遺構内容は、これまでに月夜野地区で調査された洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡や隣接する深沢遺跡等と同様なもので、大型の掘立柱建物跡を中心とした一軒の屋敷跡である。

遺跡全体は、大峰山系の山裾に寄ってひらけた狭い平坦地に位置するが、西から東へむかう傾斜に対して一部を整地して上記の遺構を関連するものとして作っている。その様子は、平坦地のほぼ中央に母屋と推定される大型の1号掘立柱建物跡があり、西には建物に付設される雨落溝だけでなく、傾斜が急に転ずる付近には等高線に平行する1号、2号の2条の溝が建物と平行して設けられている。なお、南には2号～4号までの3棟の建物跡が確認されているが、棟方向、規模の点で付属建物なのか、時期を異にするのかは不明とせざるを得ない。時期は、建物を始めとして各遺構とも、直接に年代を示す遺構がないが、隣接する遺構との比較からすると近世でも後期以降であろう。また、建物については、隣接し合うものの直接に重複するものがないことからすると、長期に及ぶものではないだろう。

① 掘立柱建物跡

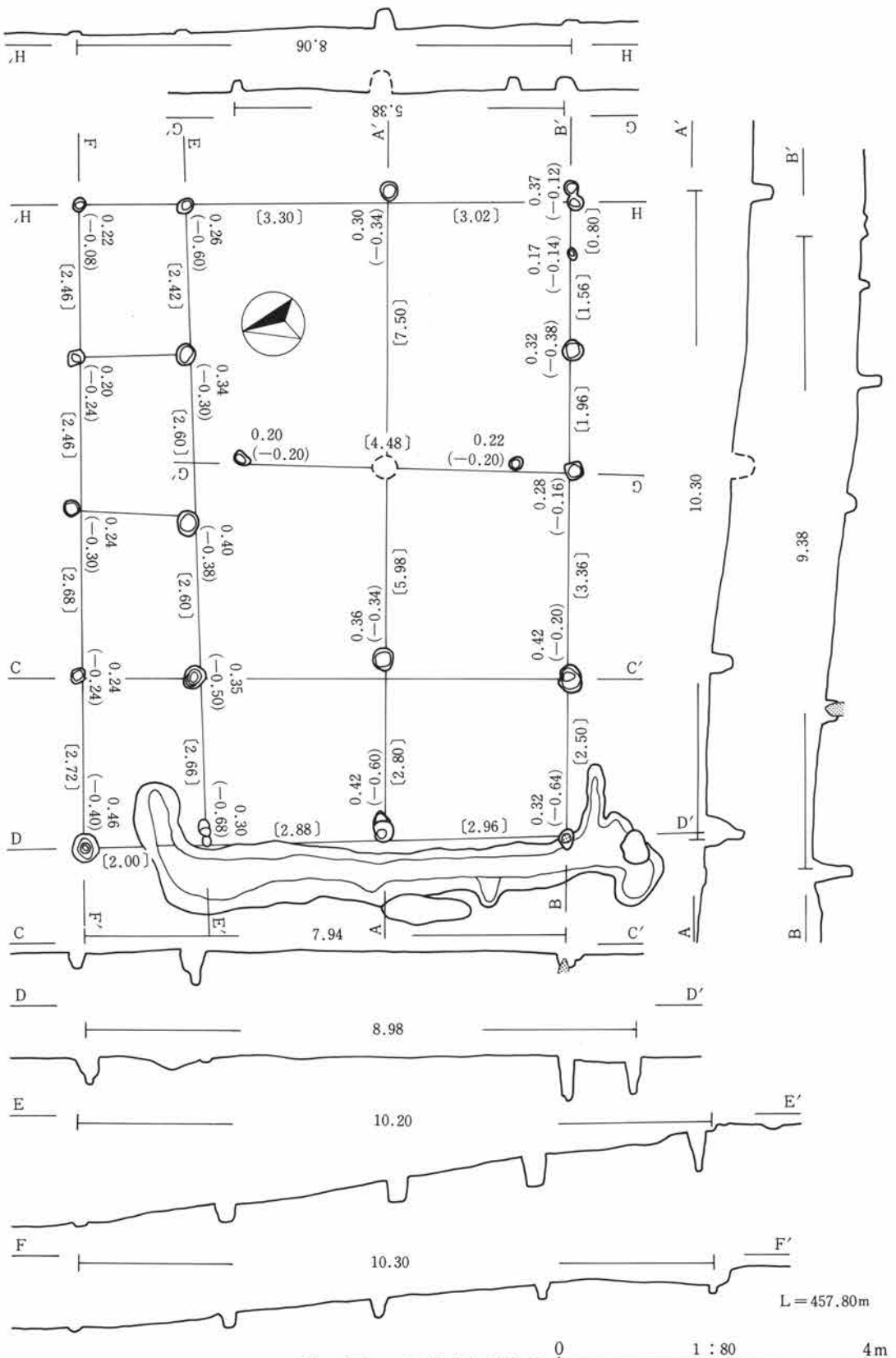
1号掘立柱建物跡(第7図、第2表)

H～K-27～29グリットにあって、南2mには棟方向をほぼ同じくして2号が位置する。棟方向は、N-101°-Eで、等高線にはほぼ直交する東西線である。構造は、2間×4間で北側に1間幅の庇がつけられている。西2間×2間を「田」の字型、東2間を土間の間取りと考えられる。西側に設けられた雨落溝は、上幅約1m、深さ約20cmで棟の西側を「コ」の字状にめぐっている。規模は、棟部分が10.3×6.32m、庇を合せると梁行で最大8.06mを測る。面積は83㎡と大型である。

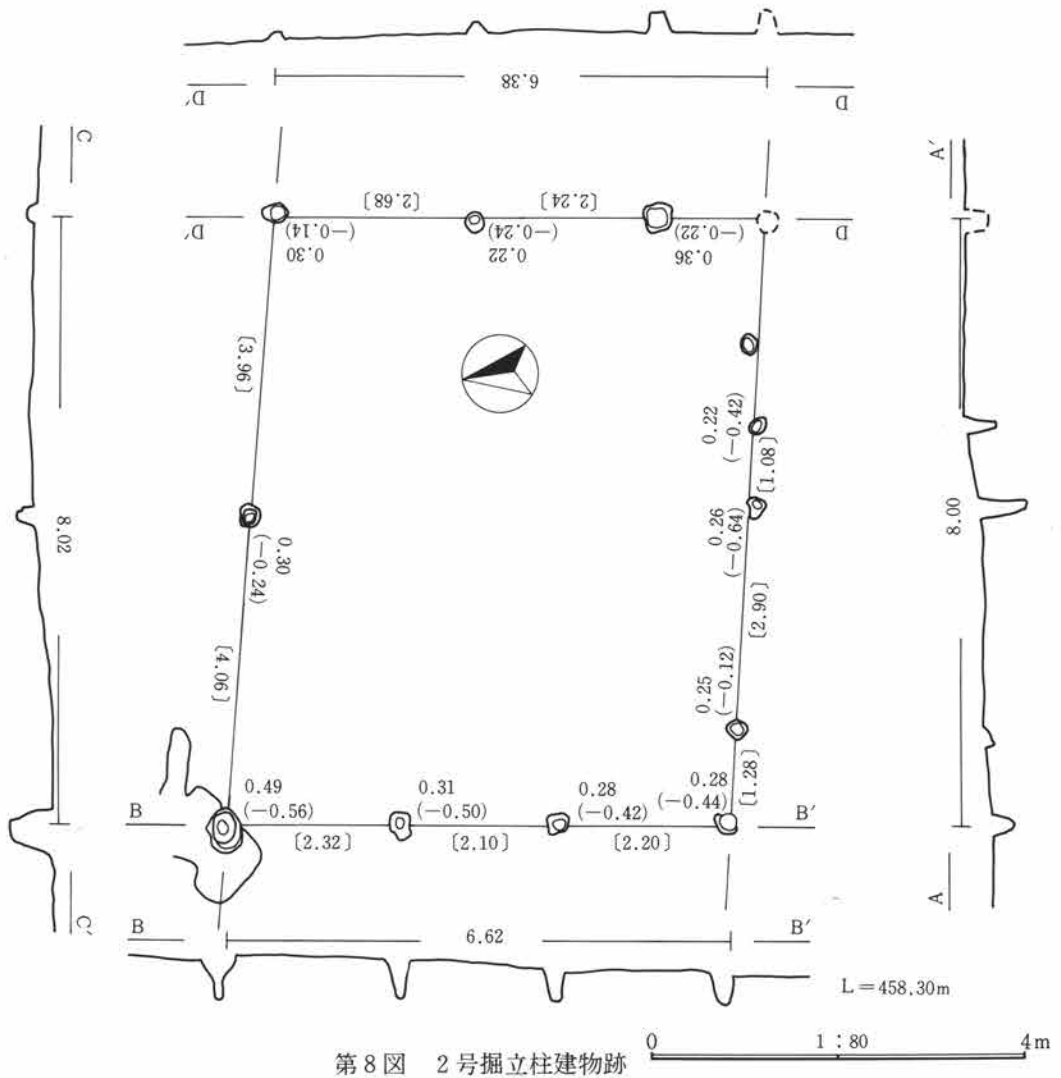
柱穴は、直径30～40cmの円形ものが殆どで、深さは勾配に合わせて一定レベルを保つ様にしてあり東が浅く、西で60cmを越す深いものがある。山石を利用した例はあるが、礎石を用いず、角礫を含むロームを掘り抜いた掘立柱形式である。

第2表 前田原遺跡掘立柱建物一覧表

番号	位置	棟方向	主軸方向	梁間	桁間	面積	備考
1号	3H-27-29 3K-26-28	東西棟	N-101°-E	4間	× 2間 10.3 × 8.06	83.0㎡	北側に庇がつく。西側に「コ」の字にめぐる雨落溝が付設される。
2号	3H-24-26 3J-24-26	東西棟	N-102°-E	2間	× 3間 8.0 × 6.38	51.0㎡	
3号	3I-22-23 3K-22-23	東西棟	N-100°-E	4間	× 2間 8.86 × 4.60	40.8㎡	南側に間口半間程の庇がつく。
4号	3H-20-21 3K-19-22	東西棟	N-99°-E	3間	× 1間 9.38 × 5.30	50.0㎡	西側に間口1m程の庇がつく。



第7図 1号掘立柱建物跡



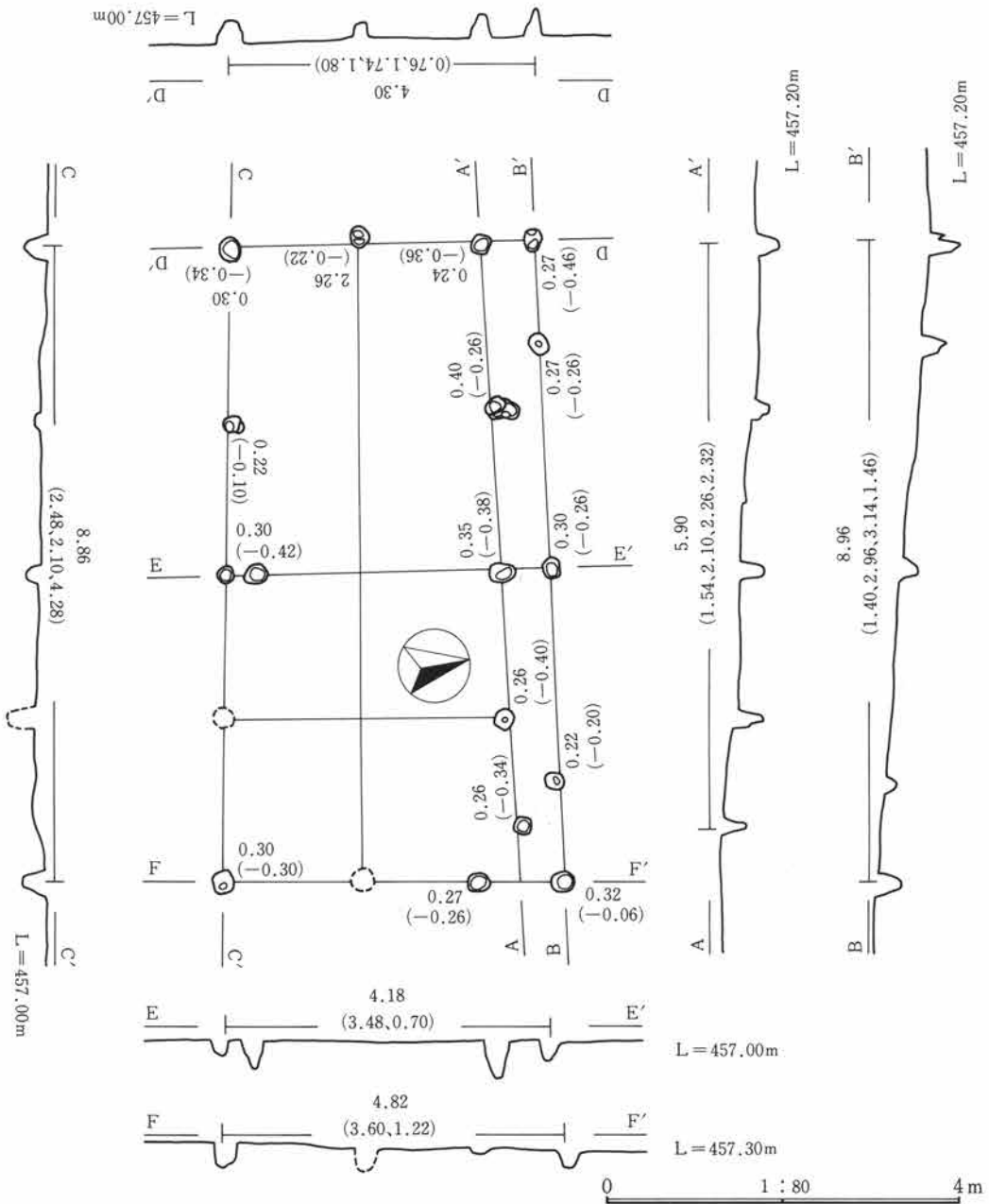
第8図 2号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡 (第8図、第2表)

G~J-24~26グリットに位置する。1号とは棟方向を同じくし、雨落溝の南端を共有するなど1号と関連する建物であろうか。棟方向は、等高線にはほぼ直交する東西棟でN-102°-Eを示す。構造は、桁間2間×梁間3間で歪んでいる。規模は桁行8m、梁行6.38mで面積は51m²である。柱穴は、直径30cm前後のものが多く、底面は地山の黄褐色土に達しているが深さは一定しない。なお、内部には、直線の列となるピットが15箇所あるが建物との関係は不明である。

3号掘立柱建物跡 (第9図、第2表)

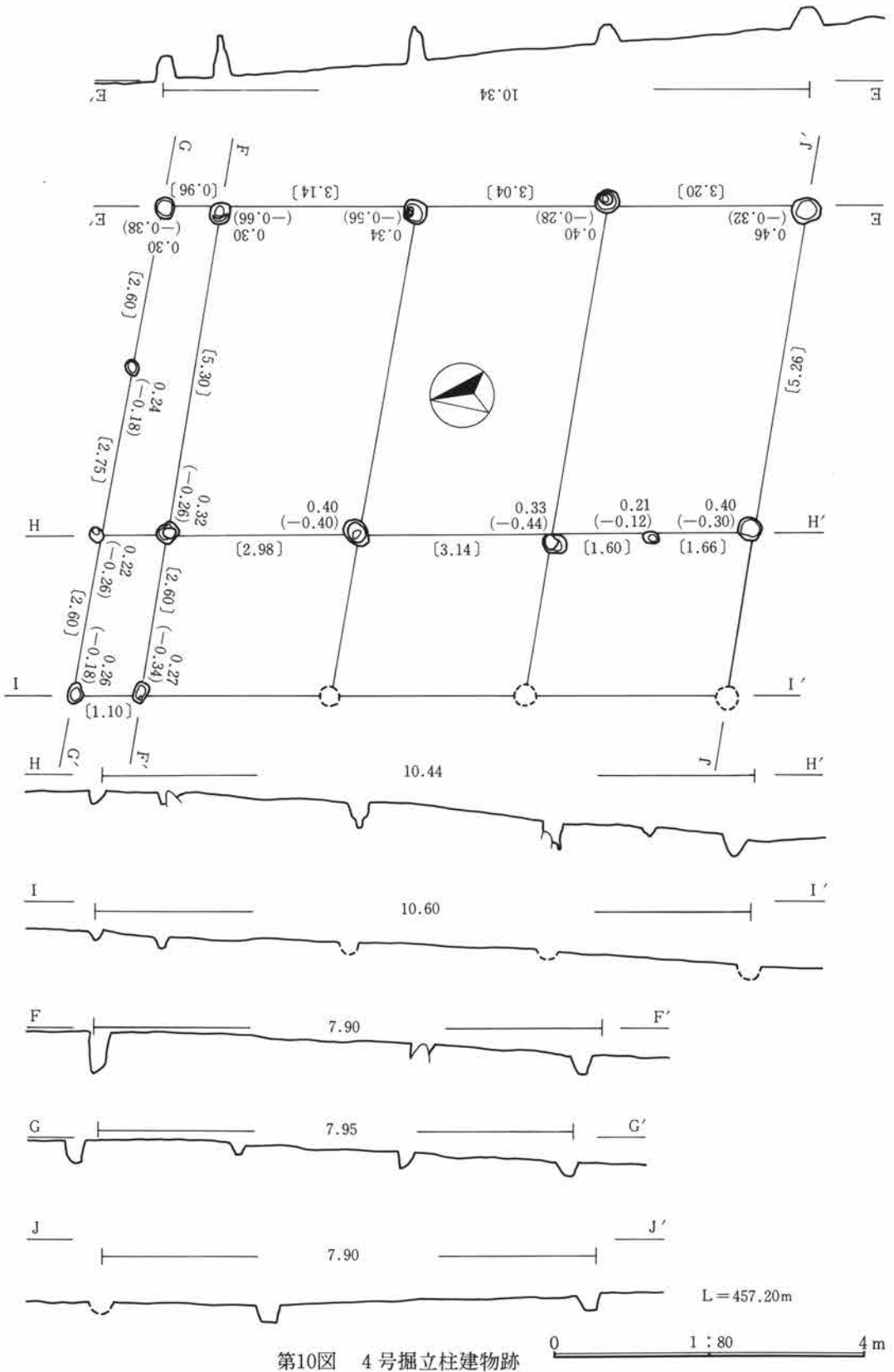
I~K-22~23グリットにあり、4号と棟方向を同じくして隣接する。棟方向は、東西線で方位はN-100°-Eである。構造は、桁間4間、梁間2間で南側に間口約70cmの庇がつく。規模は、桁行で8.86m、梁行で4.60m、面積40.8m²である。



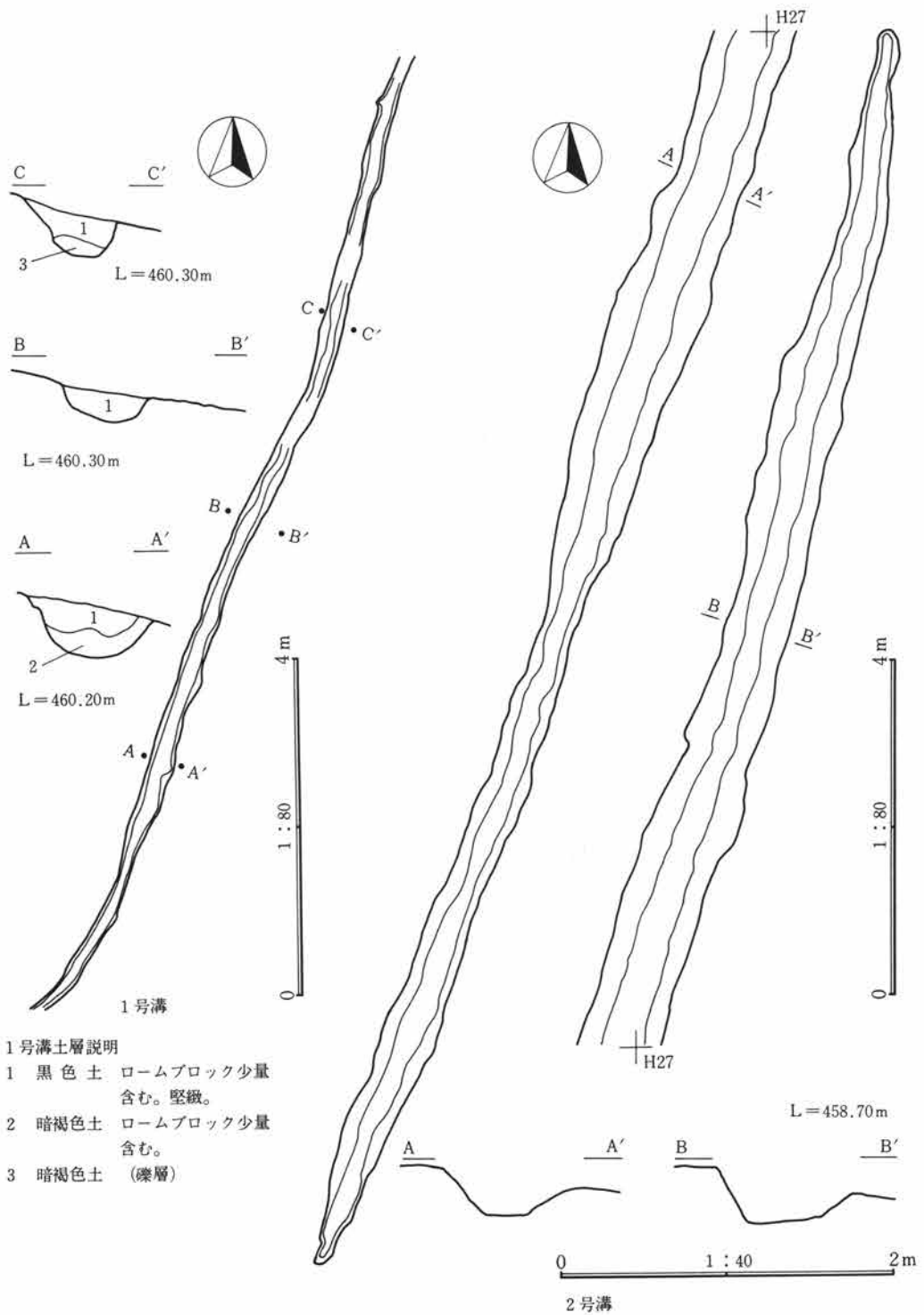
第9図 3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡 (第10図、第2表)

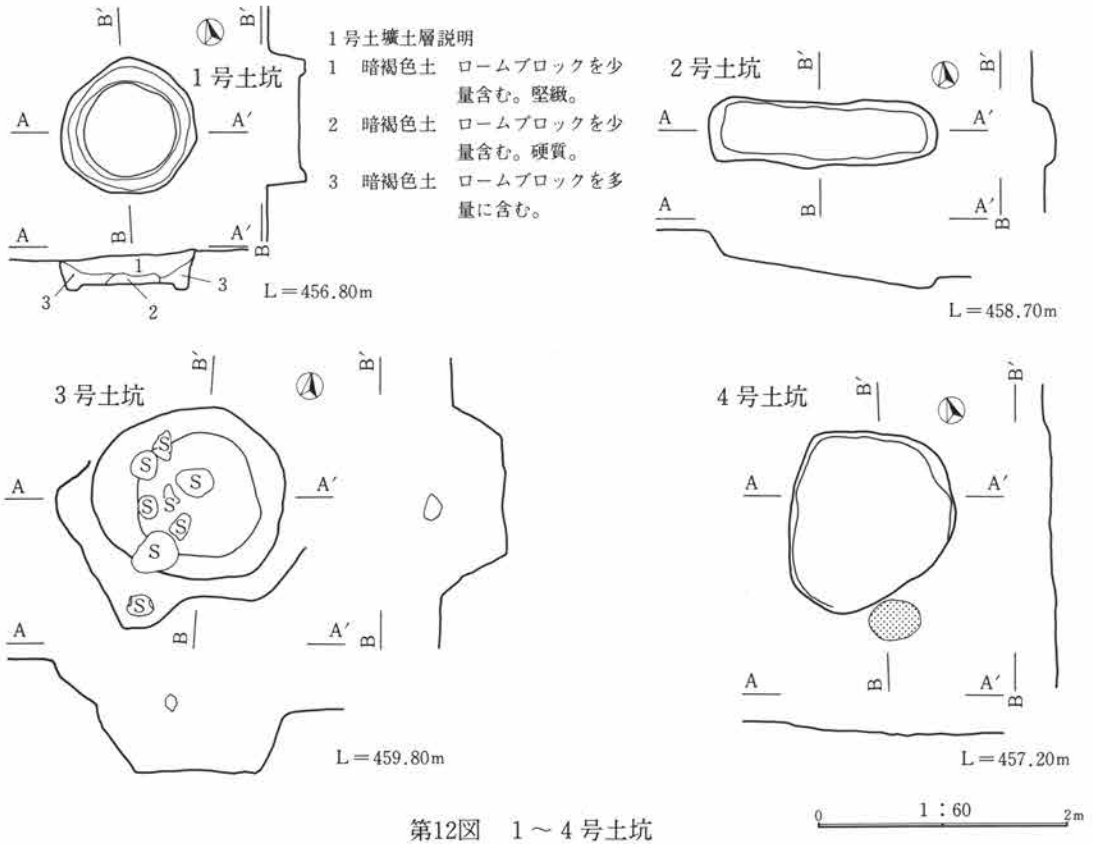
H~K-19~22グリットにあって、棟方向をほぼ同じくして相接する程の位置にある。棟方向は、東西棟でN-99°-Eである。構造は、桁間3間、梁間2間としたが東及び南へ広がる余地が十分にある。西側には、間口約1m弱の庇が全面に付けられている。規模は、棟が桁行9.38m、梁行5.30mで庇を加えた桁行は10.34~10.44mで歪みを持っている。柱穴は、直径34~38cm前後の円形を呈している。柱痕径は約15cmである。



第10図 4号掘立柱建物跡



第11図 1号・2号溝遺構図



第12図 1～4号土坑

② 土坑

1号土坑 (第12図)

K25グリットにあり、1号掘立柱建物に付属する桶を埋設した「廁」と考えられる。掘り方は、径107×108cm、深さ25cmで、底面は平坦で中央部は径74cmで一段高く、桶の内径を示している。覆土は、3枚の暗褐色土が充填していたが、掘り方と桶との間には裏込めと桶の補強を兼ねて黄褐色粘土がめぐっていた。類例は、同じ月夜野地区にある洞Ⅰ遺跡の1号～3号土坑を始めとして数例があるが、いずれも同様な構築方法を取り、井戸にも類例がある。出土遺物なし。

2号土坑 (第12図)

I32～33グリットにあり、2号溝の北端延長線上で等高線に直交した位置である。形状は、183×50cmの長方形で、主軸方向は北辺でN-83°-Wを示している。出土遺物なし。

3号土坑 (第12図)

E25グリットに位置する。形状は150×140cmの東西に長い円形を呈し、底面は平坦で深さ46cmである。確認面近くには、10～20cm大の河原石が投げこまれ底面まで粘質土が充填されていた。桶の痕跡はないが、1号土坑と同様な性格のものであろう。

4号土坑（第12図）

H21グリットにあり、4号掘立柱建物の西側近くに位置する。145×132cmの不整形円形を呈しているが、基底面近くまで削平を受けており推定では方形を呈するものと思われる。南辺の近くに接する様に30～40cmの円形の範囲で焼土がある。性格は不明で出土遺物はない。

③ 溝

溝は、地形の勾配に沿う状態で南北に走行する2条と、1号掘立柱建物の雨落溝として付設された1条がある。性格は、勾配が急に転ずる位置にあること、建物との位置関係から、屋敷内への雨水、湧水等の浸透を防ぐ排水を目的に、区画境界を兼ねて階段式に設けられたものであろう。

1号溝（第11図）

D～F-25～29グリットにまたがり、標高460.20mの等高線を前後して平行する位置にある。屋敷区画内とすると、建物からは約9m離れた一段高い占地である。南北両端は、勾配の中で不明瞭になるが約12mの長さがある。平均幅25cm、深さ10cmで、両端のレベル差は殆どなく、底面は多少の凸凹が目立つ程度である。覆土は、黒色土と暗褐色土の2層があり、底面は礫が多い暗褐色土に達している。時期を決定する遺物の出土はない。

2号溝（第11図）

F～I-23～32グリットにまたがり、標高458.50～458.30mにかけての等高線とほぼ前後するかの様にある。1号溝、建物とは平行する位置関係にあり、南北で約38mが確認されている。両端は、勾配の中で先細り気味に消えていき、両端のレベル差は20cmがある。規模は、南端に近いF26グリットで上幅60cm、深さ14cm、中央のG26グリットで上幅105cm、深さ35cmを測る。1号掘立柱建物の西梁側とは心芯で210cmを測る。また、雨落溝との底面レベルでは約20cm高い。出土遺物はない。

7 小 結

前田原遺跡は確認された縄文時代・平安時代・近世の各時代の遺構とも、限定された地形に制約され短期間のかつ単独的な遺構だけである。

縄文時代早期後半の遺構・遺物は沢を挟んで北の前中原遺跡で同時期の遺物が出土し炉穴も4基確認されており、関連が目される所である。また、平安時代の竪穴住居跡は直接結び付ける証拠を欠くが位置的・時期的に真沢・水沼窯跡と関連があると考えられる。近世の1号掘立柱建物は小規模ながら庇を有する建物であり、当地域で確認された多くの掘立柱建物の中でも特異な存在である。また、1号掘立柱建物跡を中心とした宅地は3重の排水構造を有しており、平安時代の竪穴住居跡にも排水施設があり、時代を隔てるものの山合いに居住する人々の住いに対する共通の意識を見出すことができる。最後に、あわただしい発掘調査において協力を願った月夜野町の方々、同教育委員会の方々に対し、文末ではあるが感謝の意を表わす次第である。

深 沢 遺 跡



深沢・前田原遺跡の調査前の航空写真（昭和49年撮影、約1/4,000）



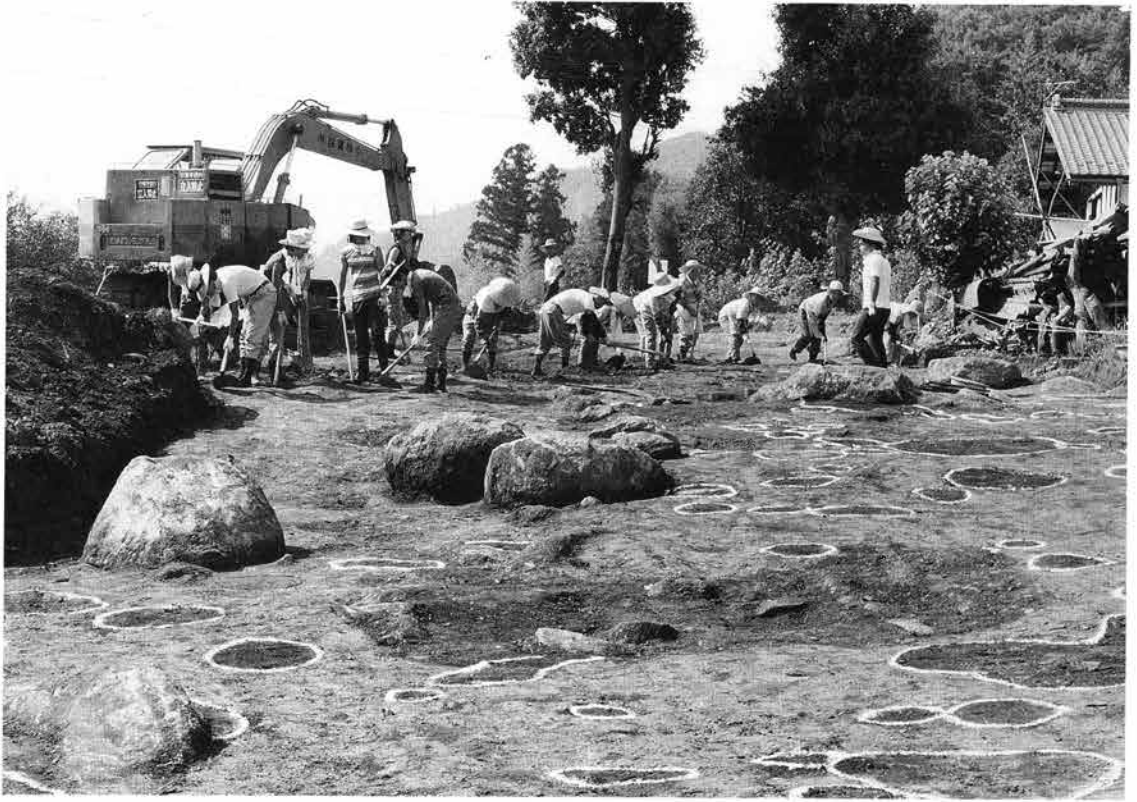
深沢遺跡の地形（航空写真、約1/2,000）



1 予備調査時の状況 (D区、北西より)



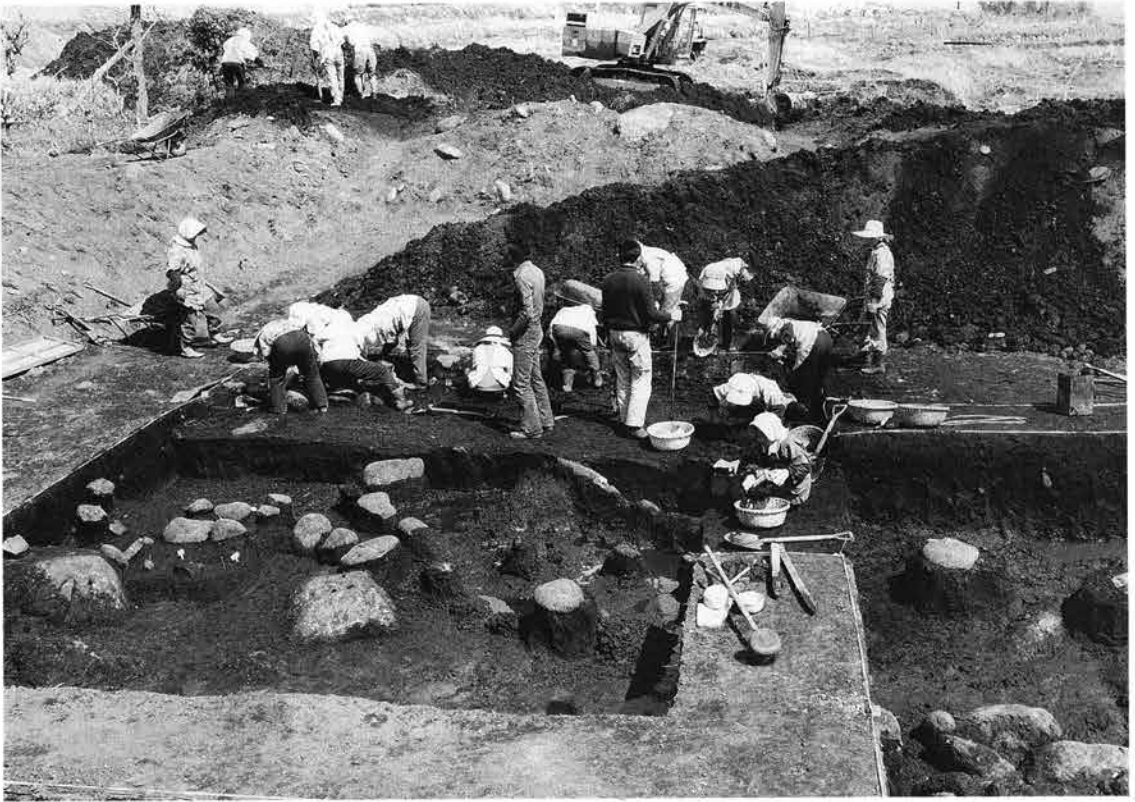
2 本調査開始時の状況 (C区、南西より)



1 発掘作業風景 (1) (B区、北より)



2 発掘作業風景 (2) (C区、南西より)



1 発掘作業風景 (3) (C区、南より)



2 発掘作業風景 (4) (C区、西より)



1 A区全景 (北より)



2 A区グリッド設定状況 (北東より)



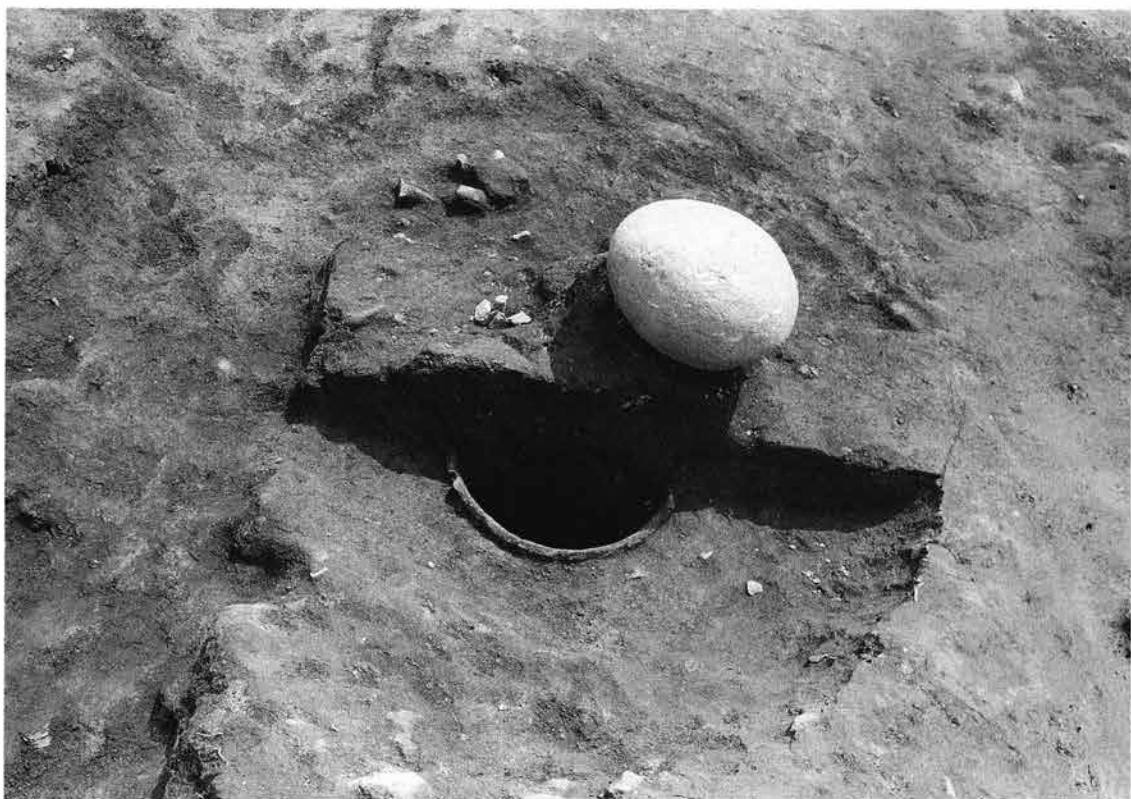
1 A区グリット土層断面(1)(1区0-16グリット西壁、東より)



2 A区グリット土層断面(2)(1区0-12グリット西壁、東より)



1 A区1号住居跡全景（東より）



2 A区1号住居跡の炉の検出状態（上部に丸石が載る。南より）



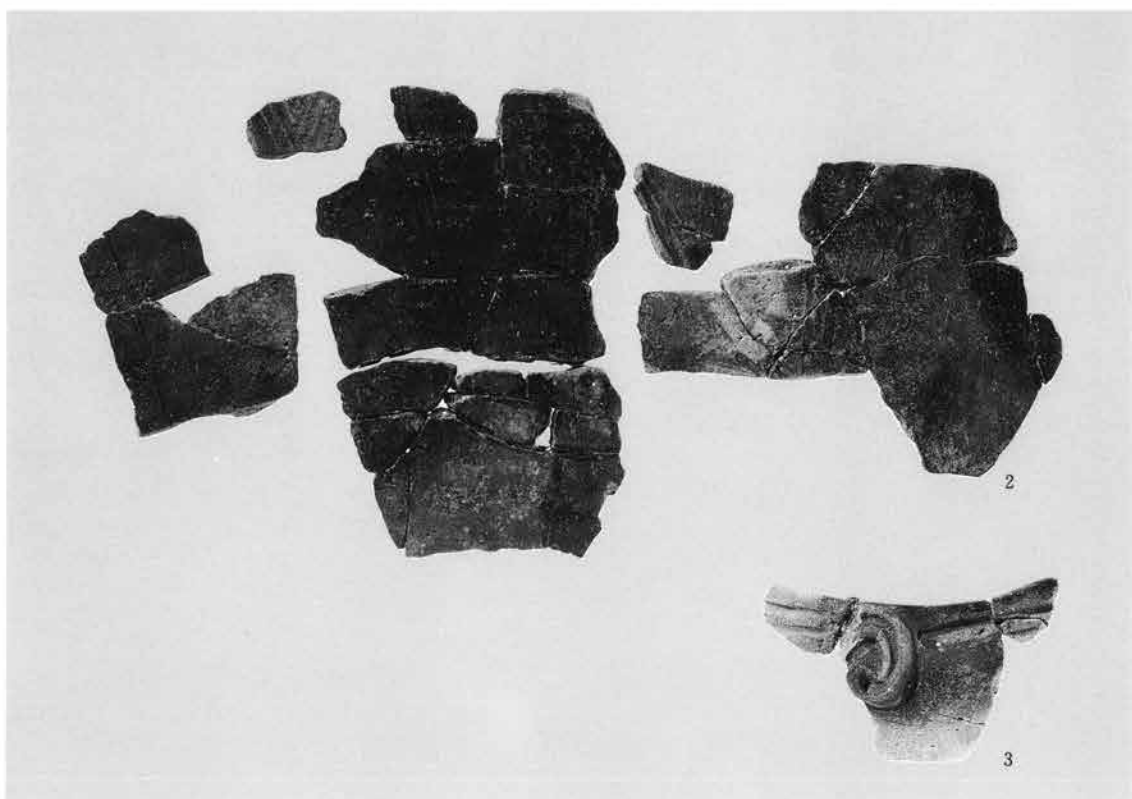
1 A区1号住居跡遺物出土状態(1)(東より)



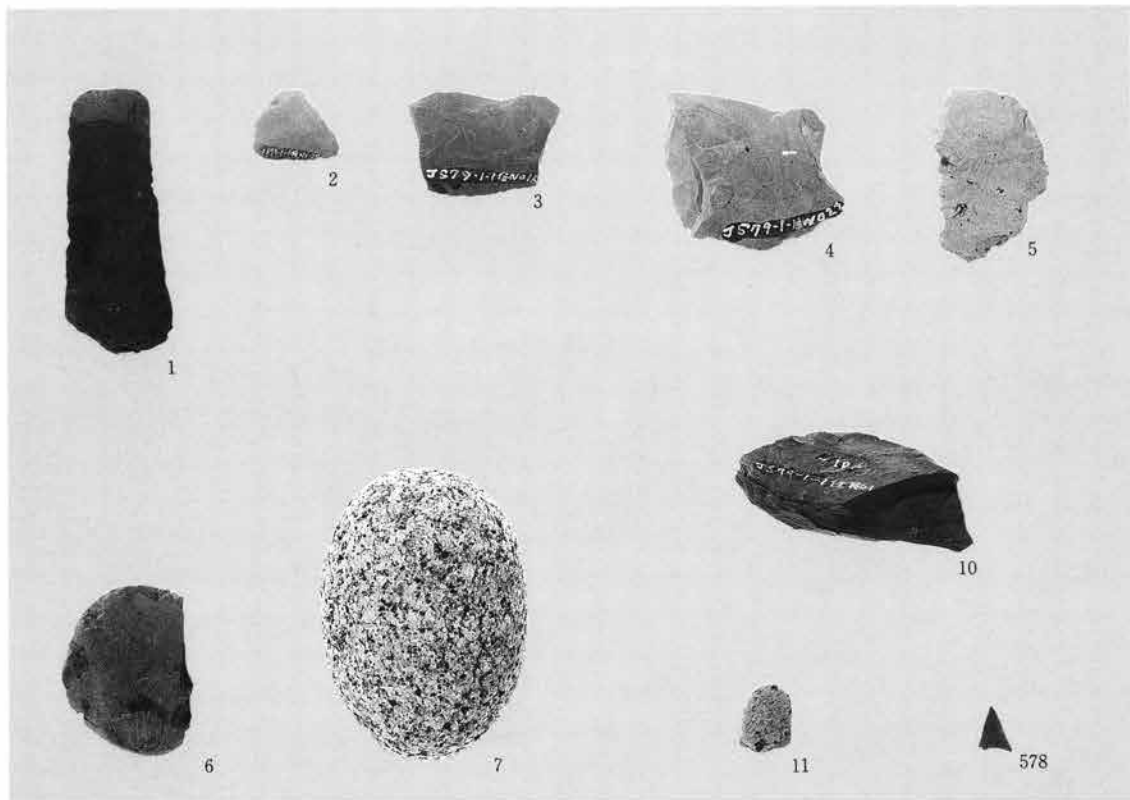
2 A区1号住居跡遺物出土状態(2)(北東より)



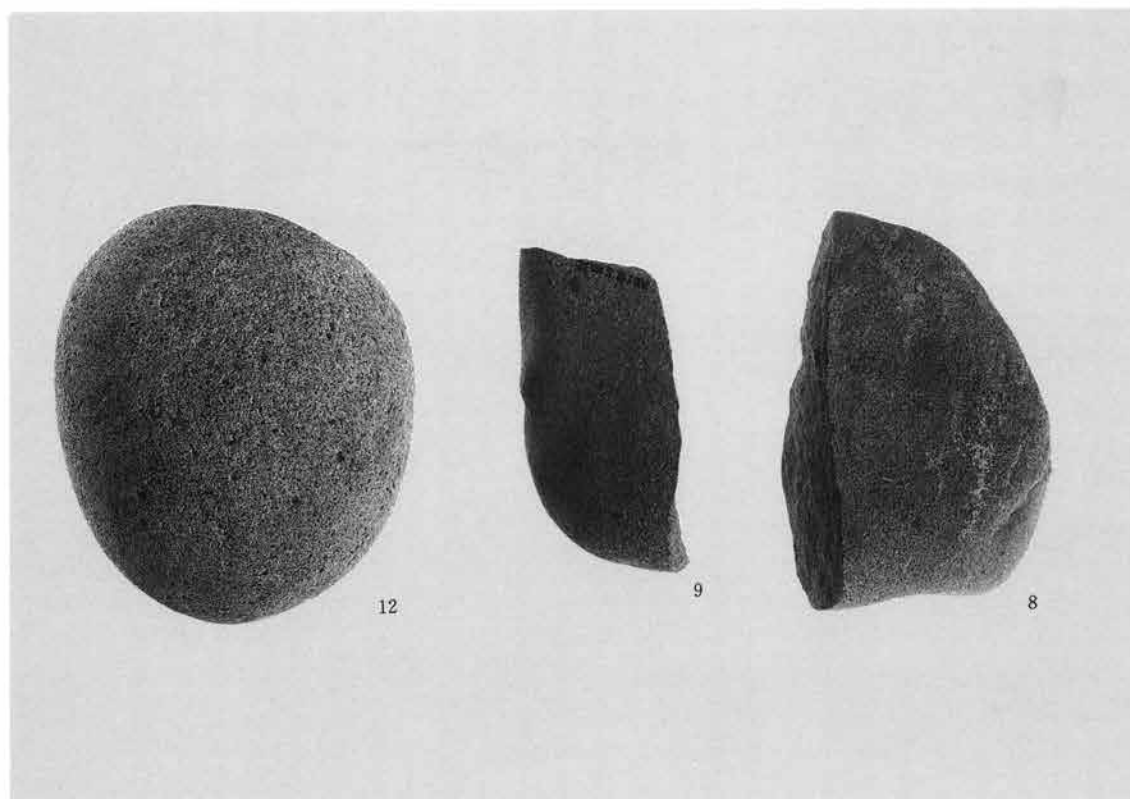
1 A区1号住居跡出土土器(1)



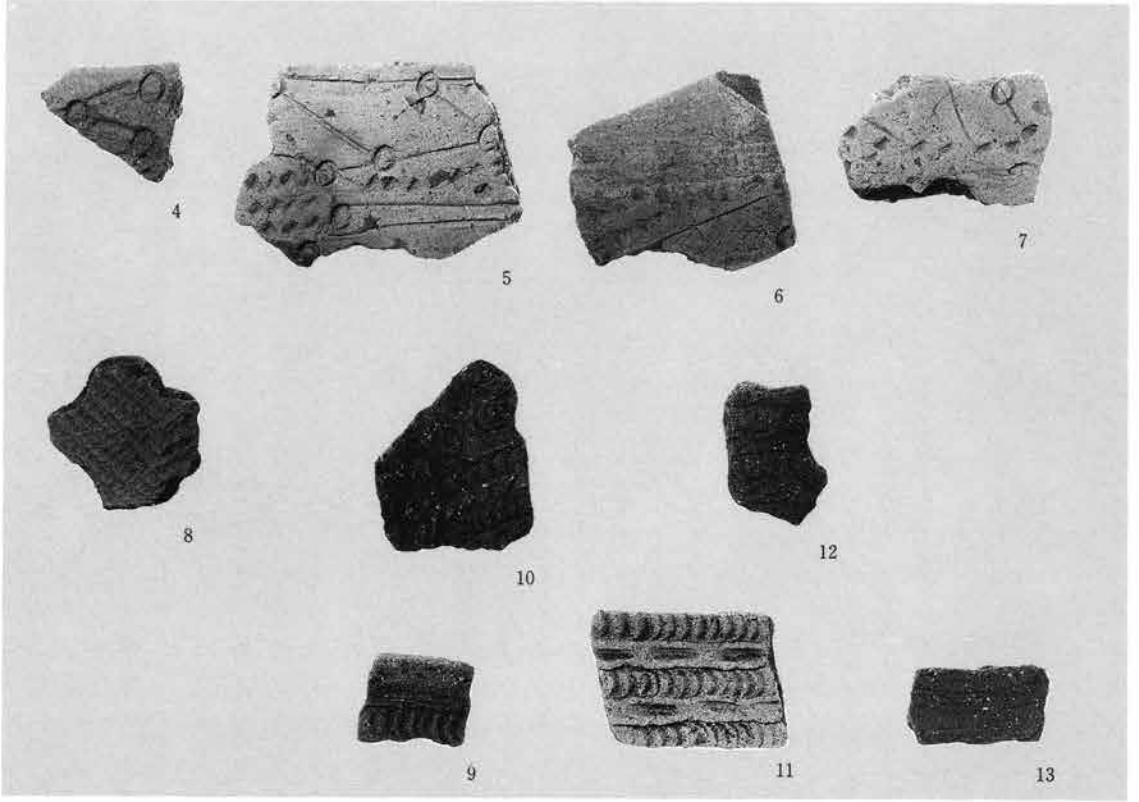
2 A区1号住居跡出土土器(2)



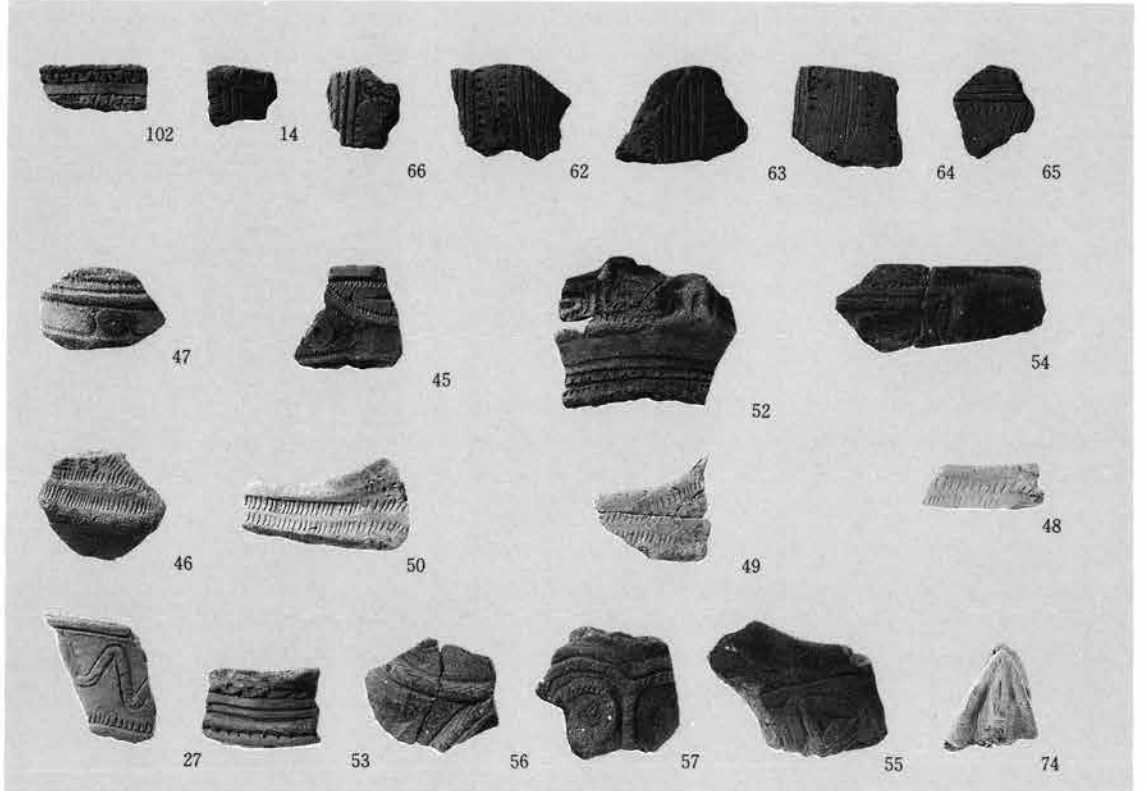
1 A区1号住居跡出土石器(1)



2 A区1号住居跡出土石器(2)



1 A区グリット出土土器 (1)

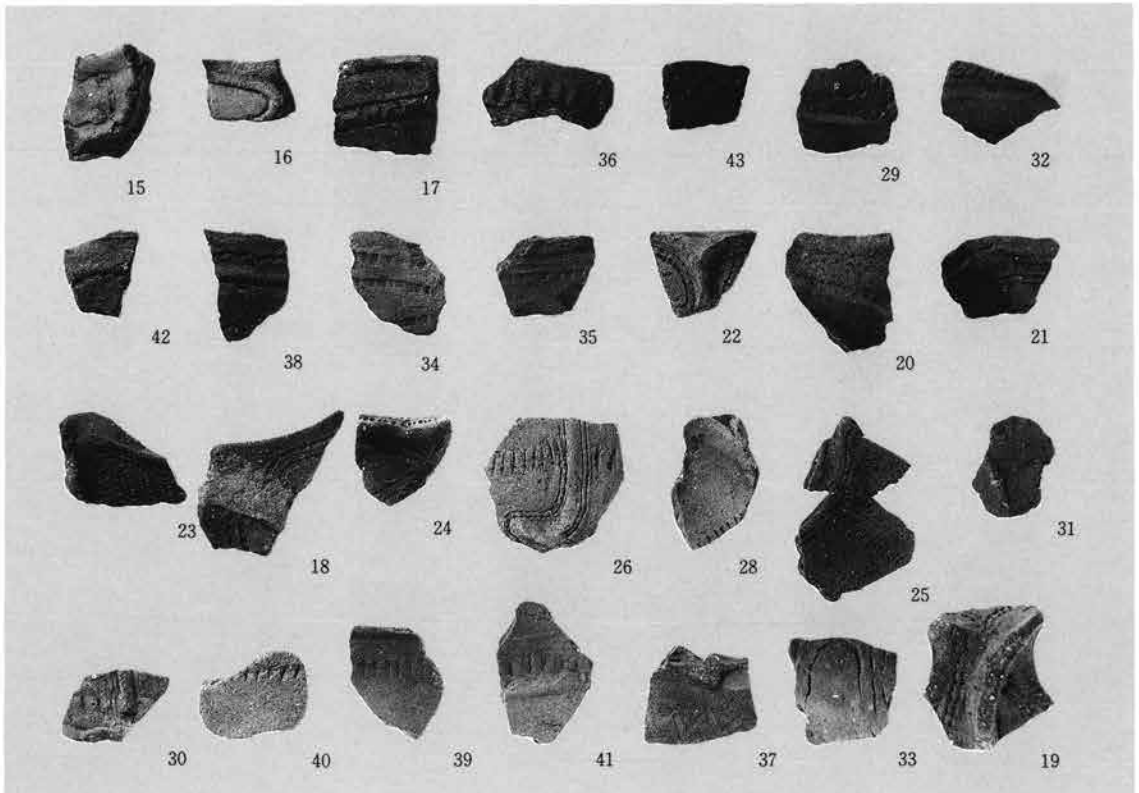


2 A区グリット出土土器 (2)

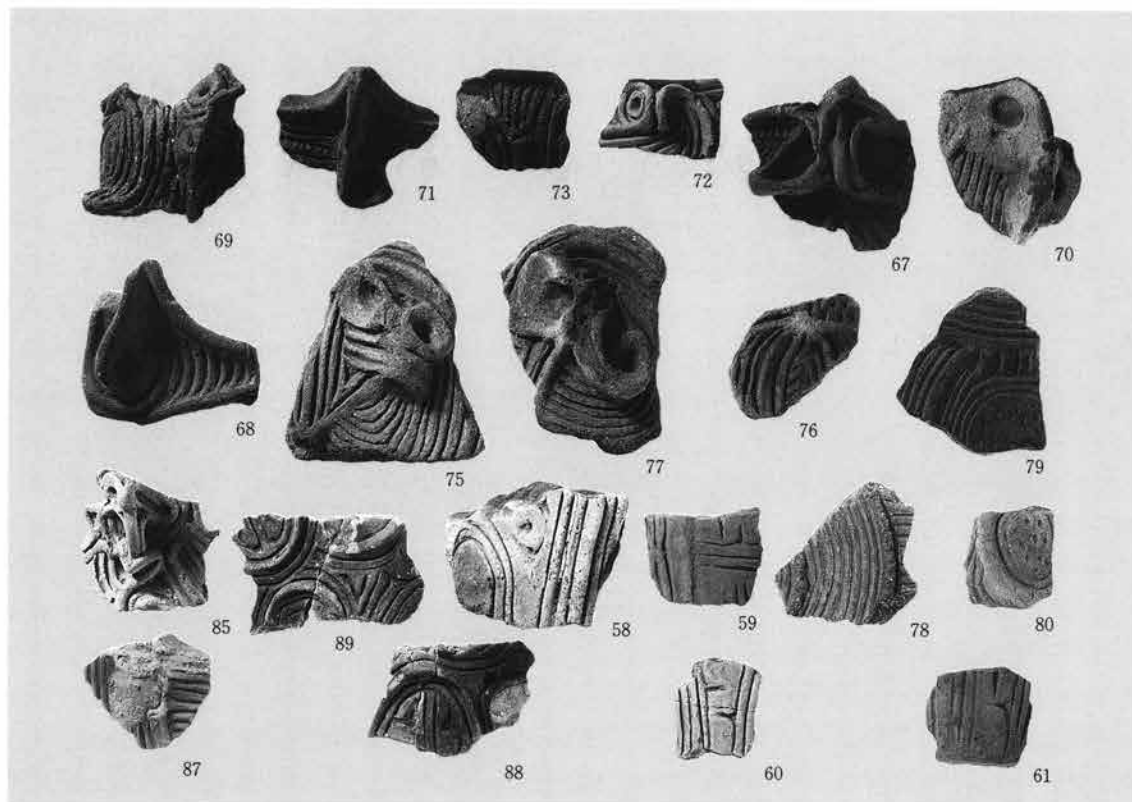


44

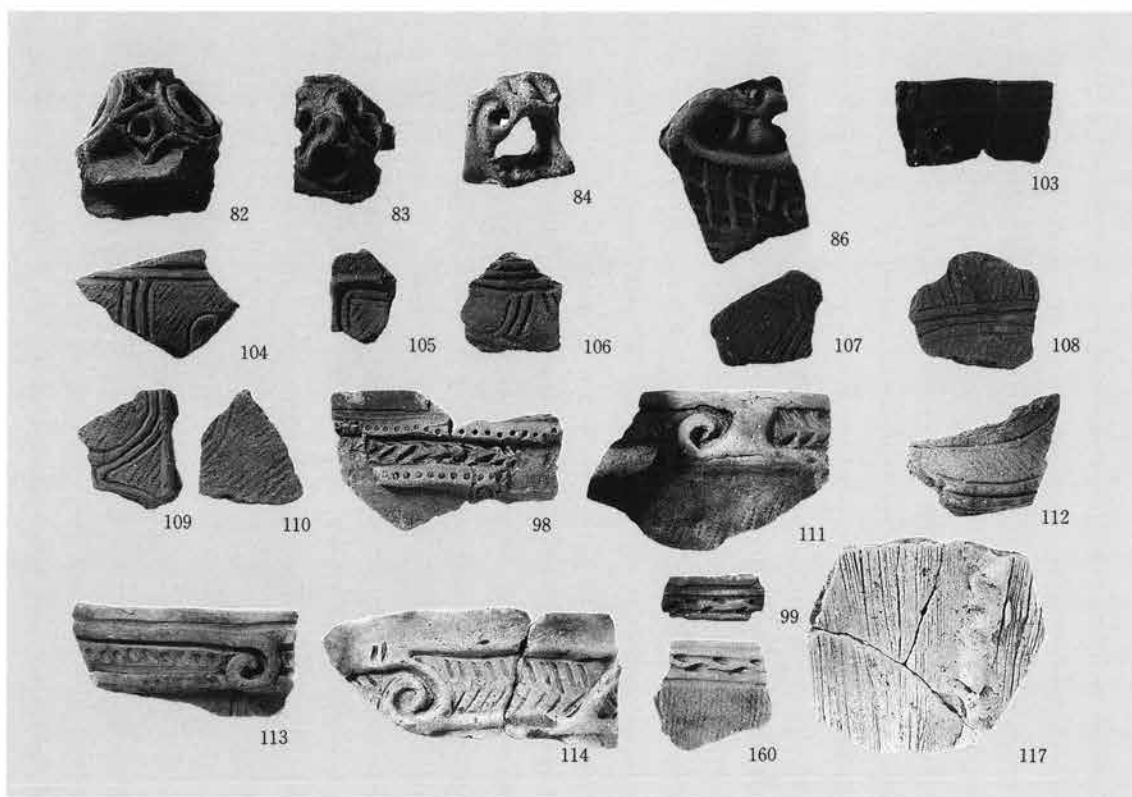
1 A区グリット出土土器 (3)



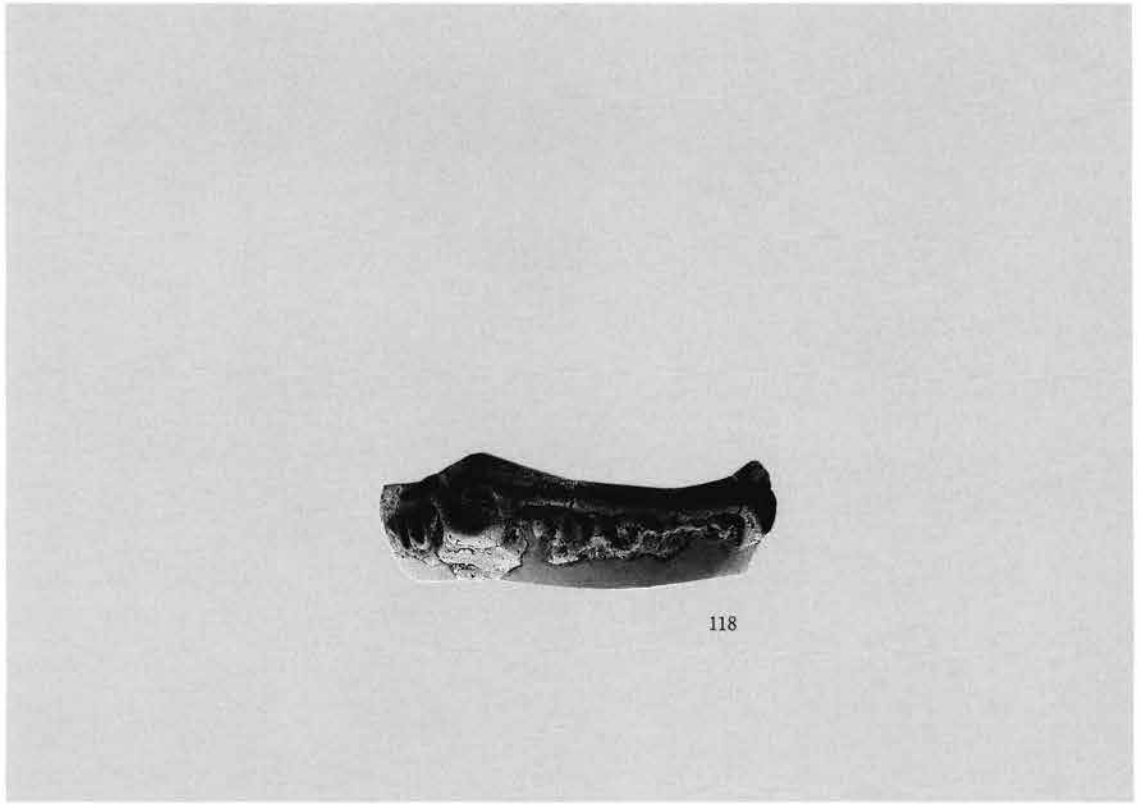
2 A区グリット出土土器 (4)



1 A区グリット出土土器 (5)

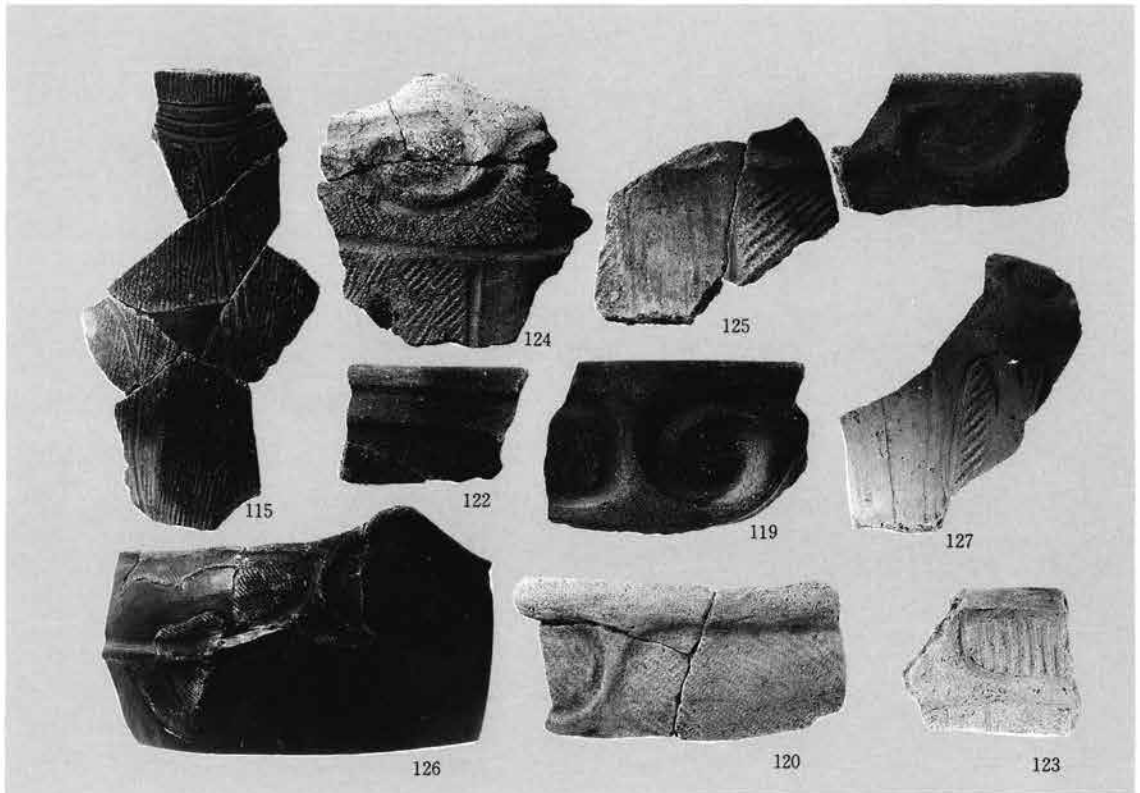


2 A区グリット出土土器 (6)

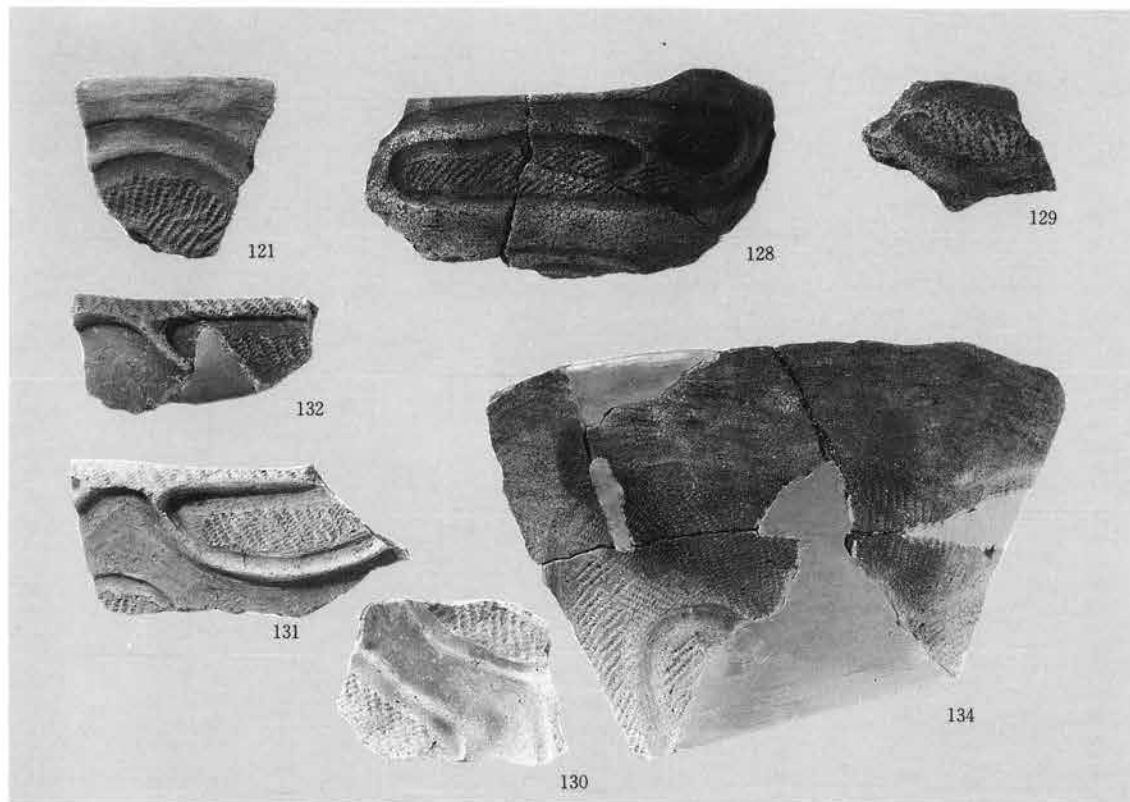


118

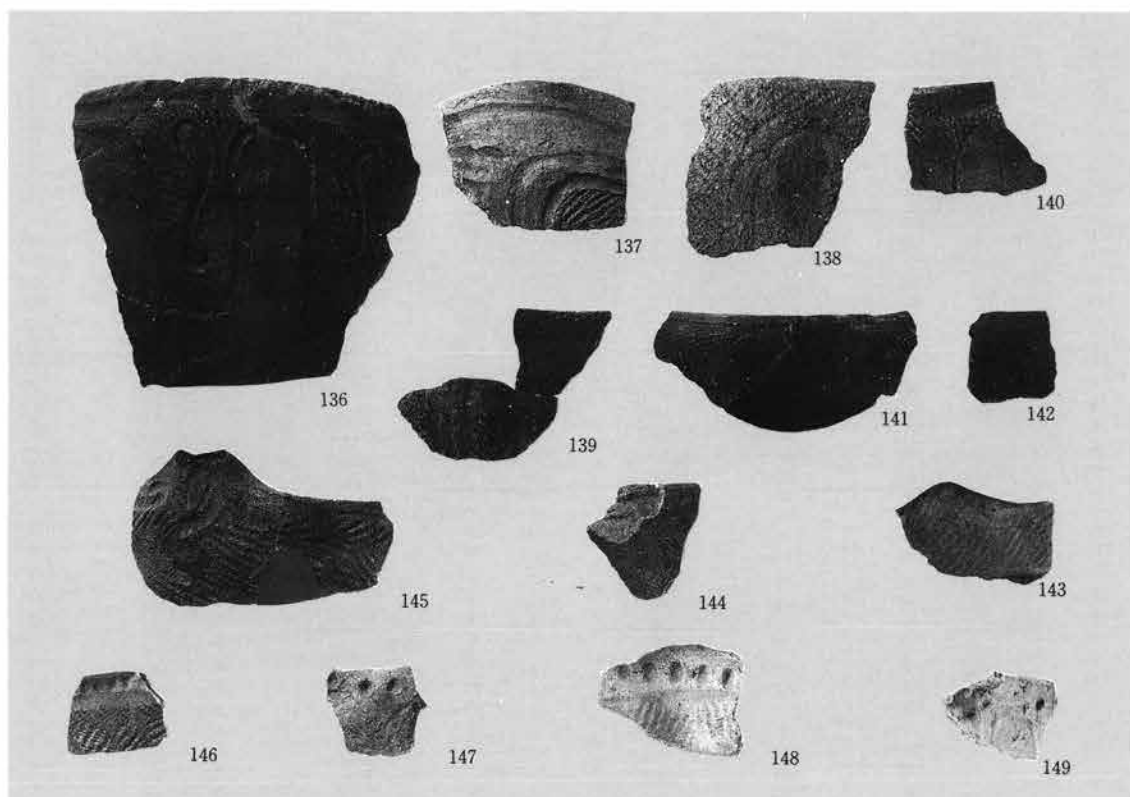
1 A区グリット出土土器(7)



2 A区グリット出土土器(8)



1 A区グリット出土土器 (9)

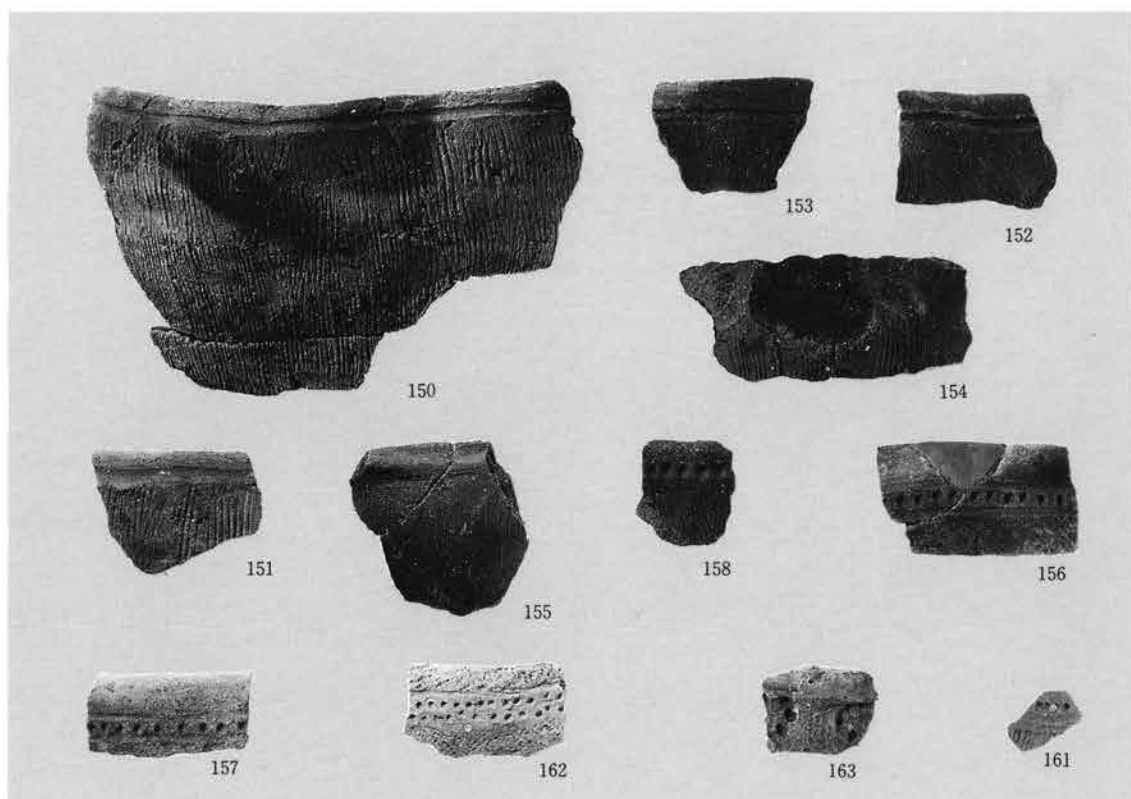


2 A区グリット出土土器 (10)

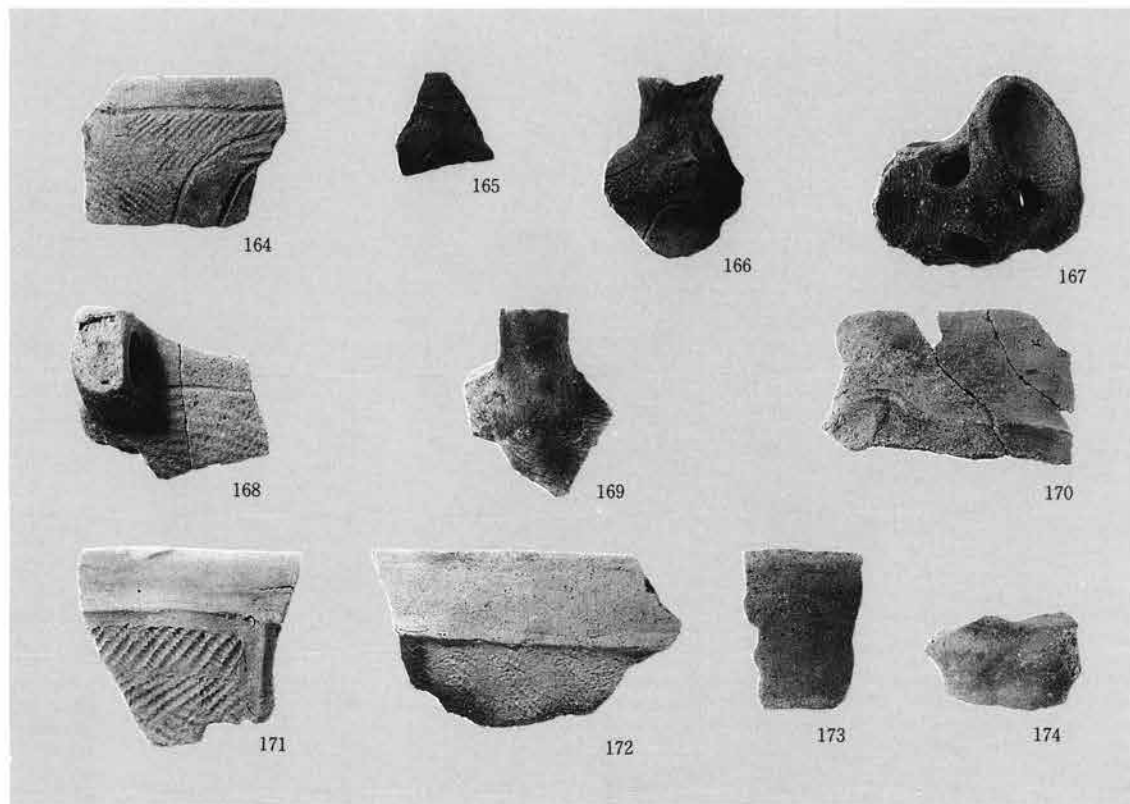


135

1 A区グリット出土土器 (11)



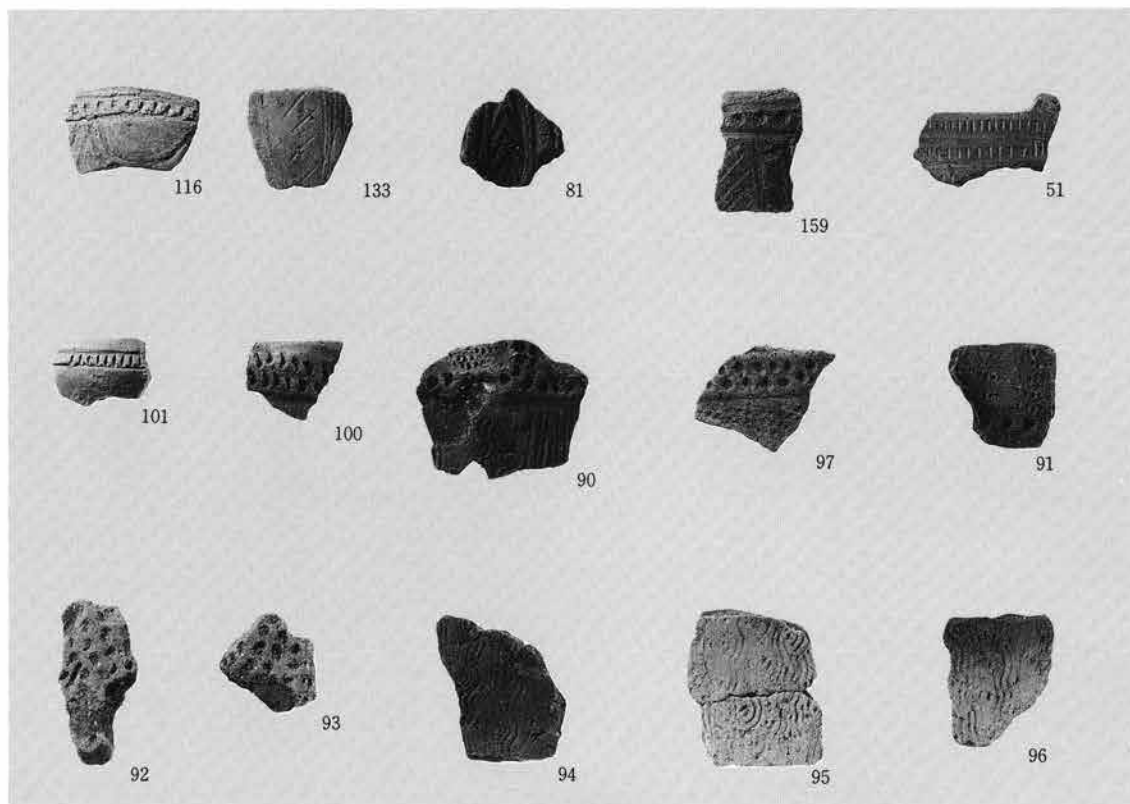
2 A区グリット出土土器 (12)



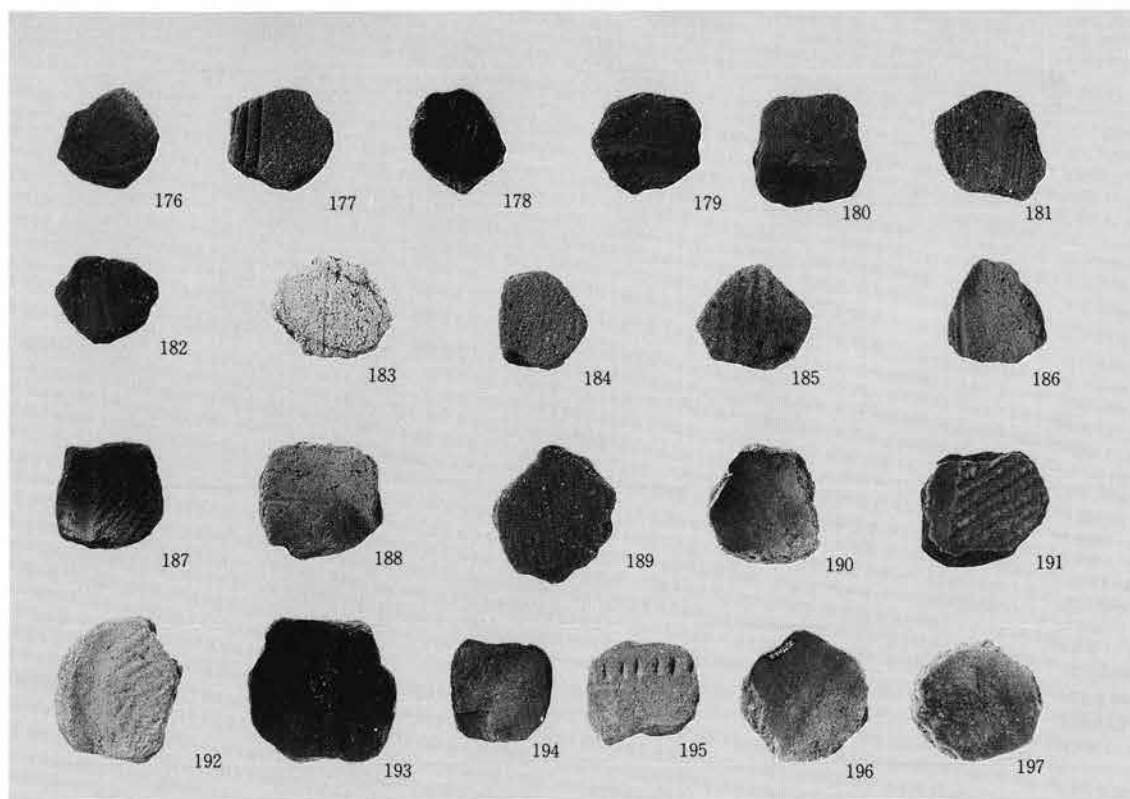
1 A区グリット出土土器 (13)



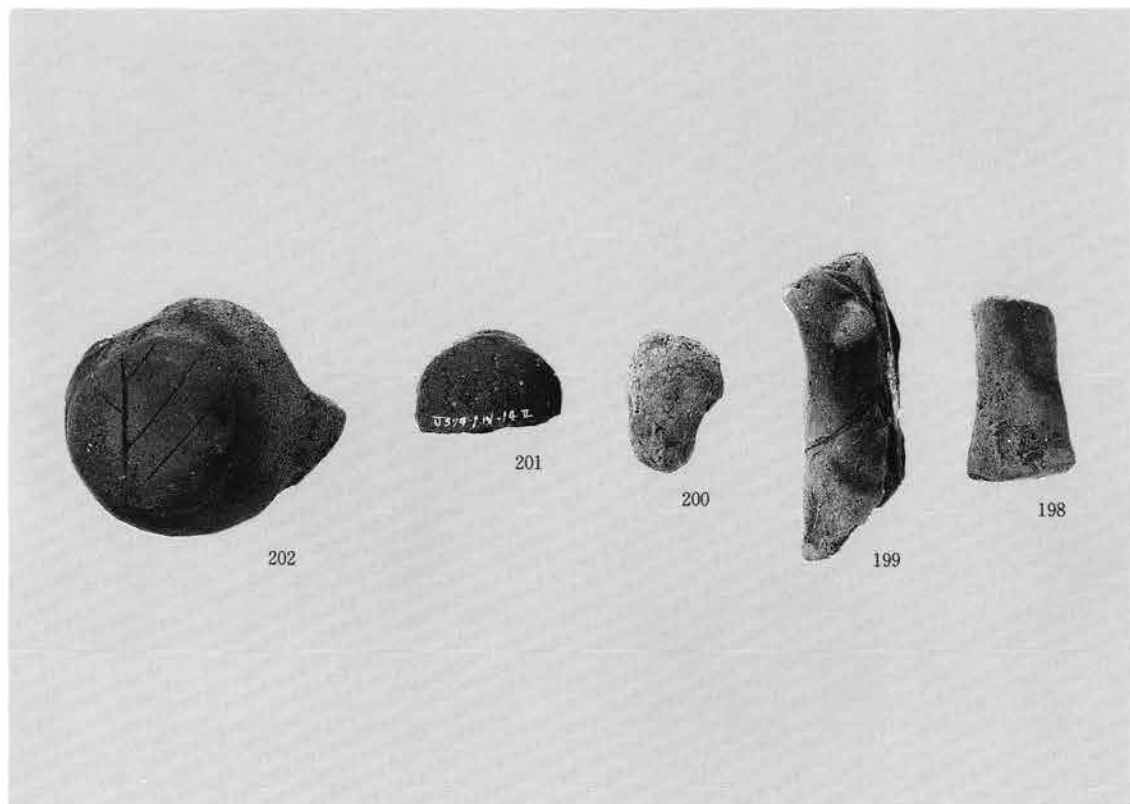
2 A区グリット出土土器 (14)



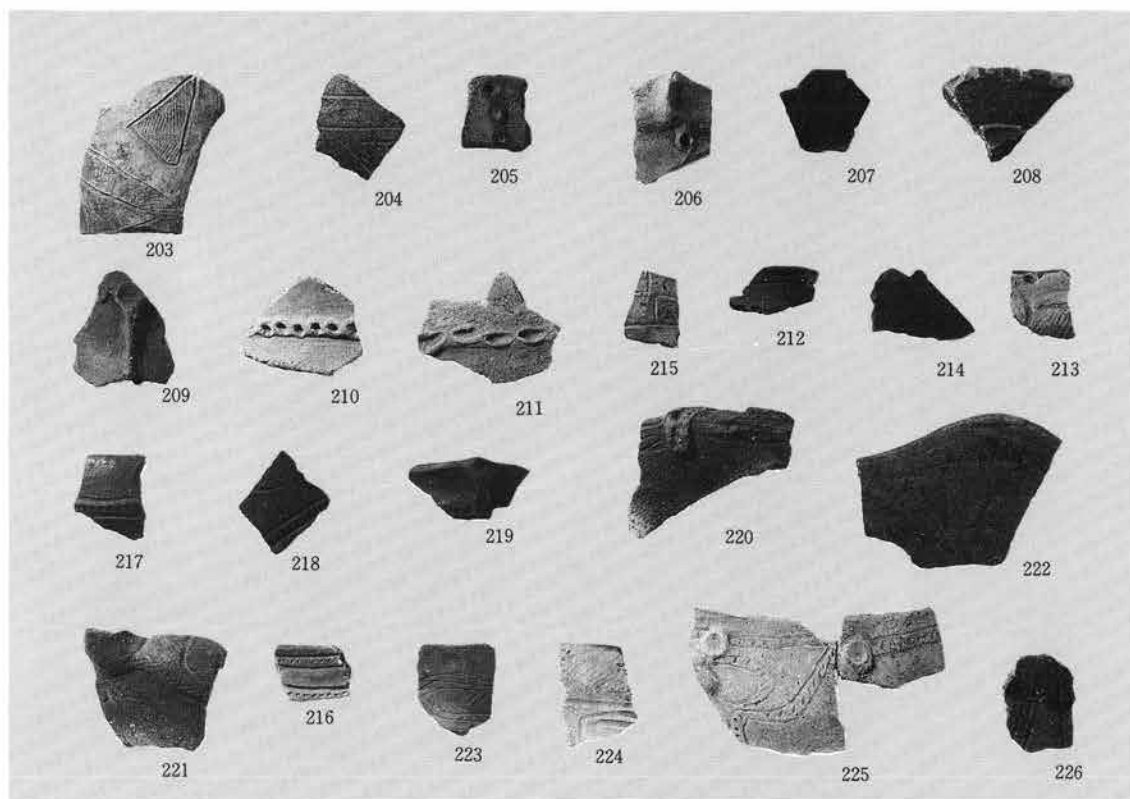
1 A区グリット出土土器 (15)



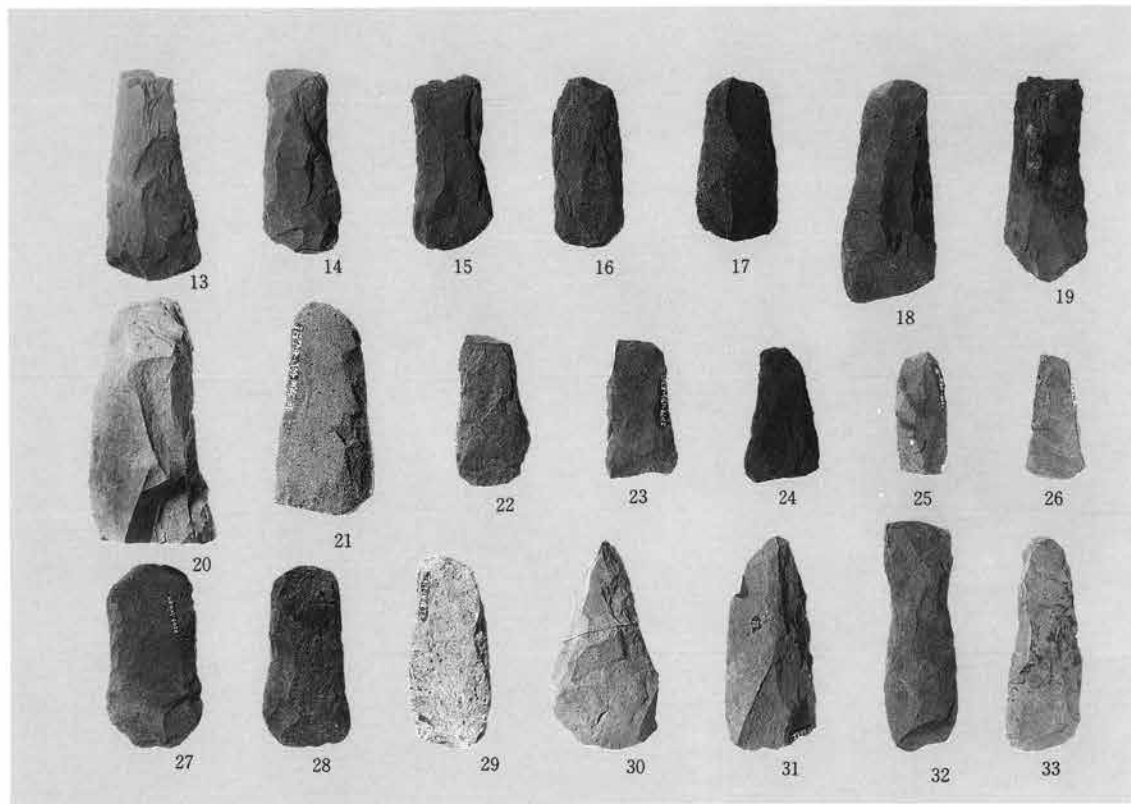
2 A区グリット出土土製品



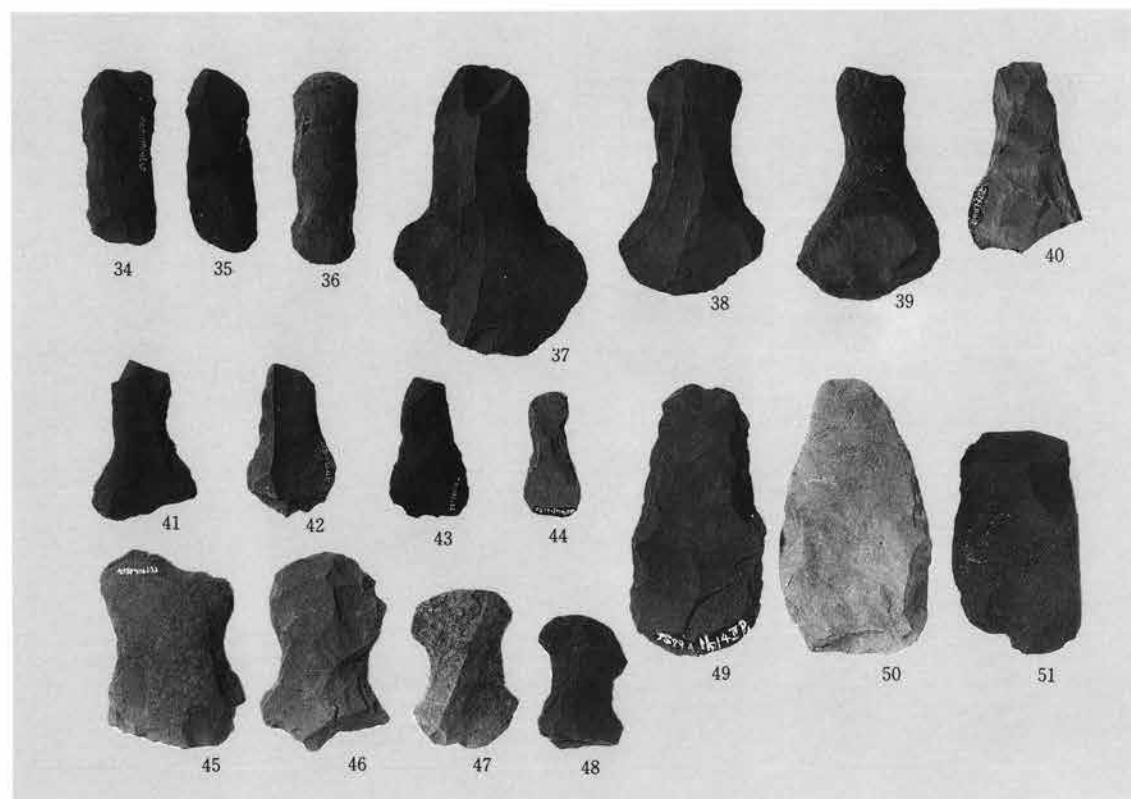
1 A区グリット出土土器と土製品



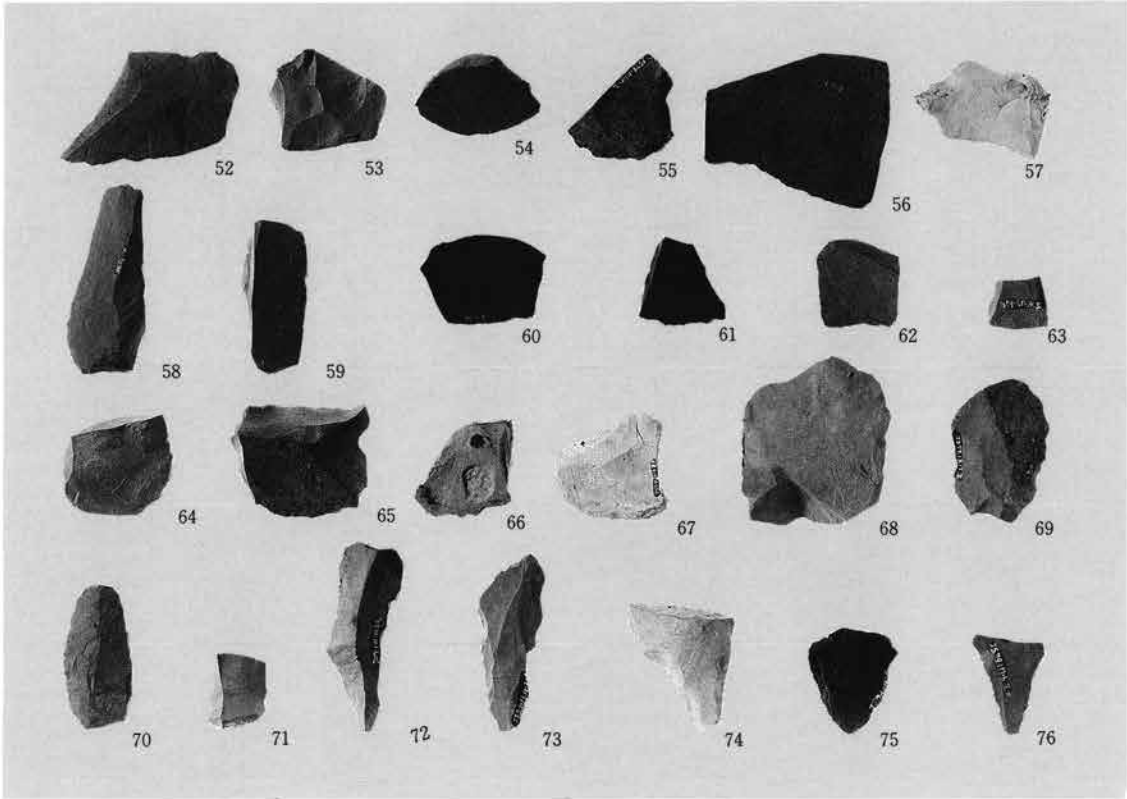
2 A区グリット出土土器 (16)



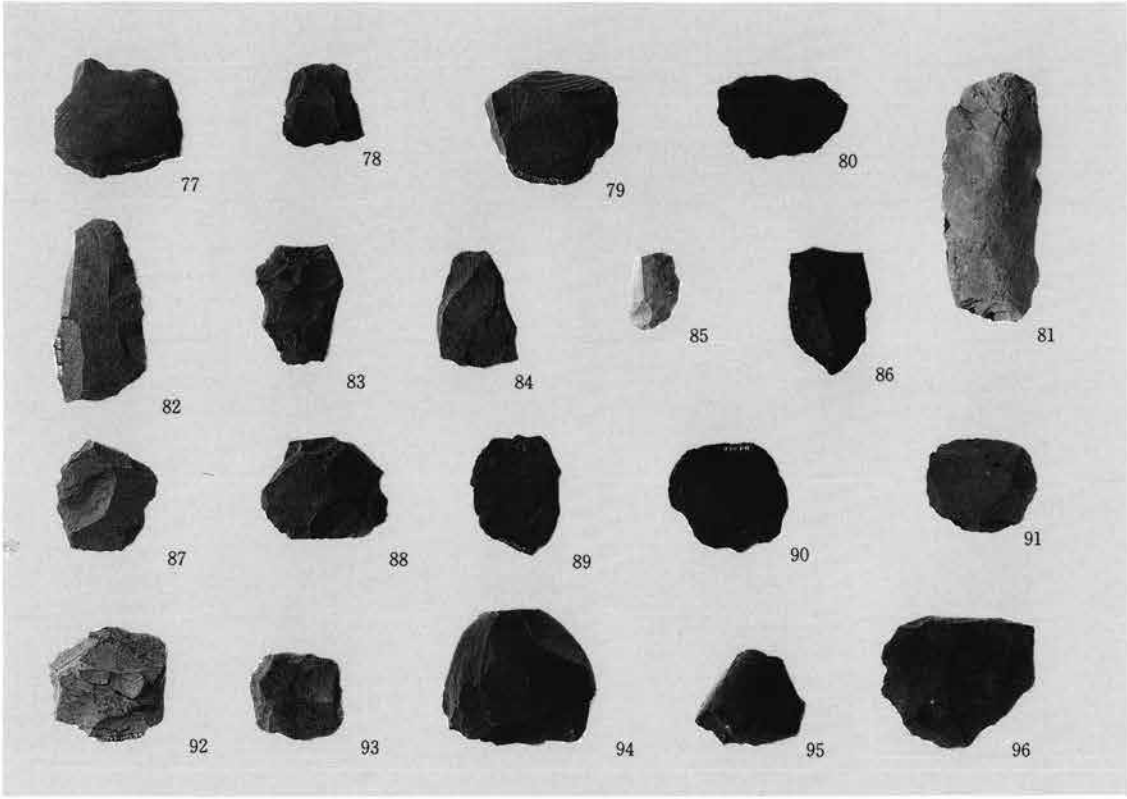
1 A区グリット出土石器 (1)



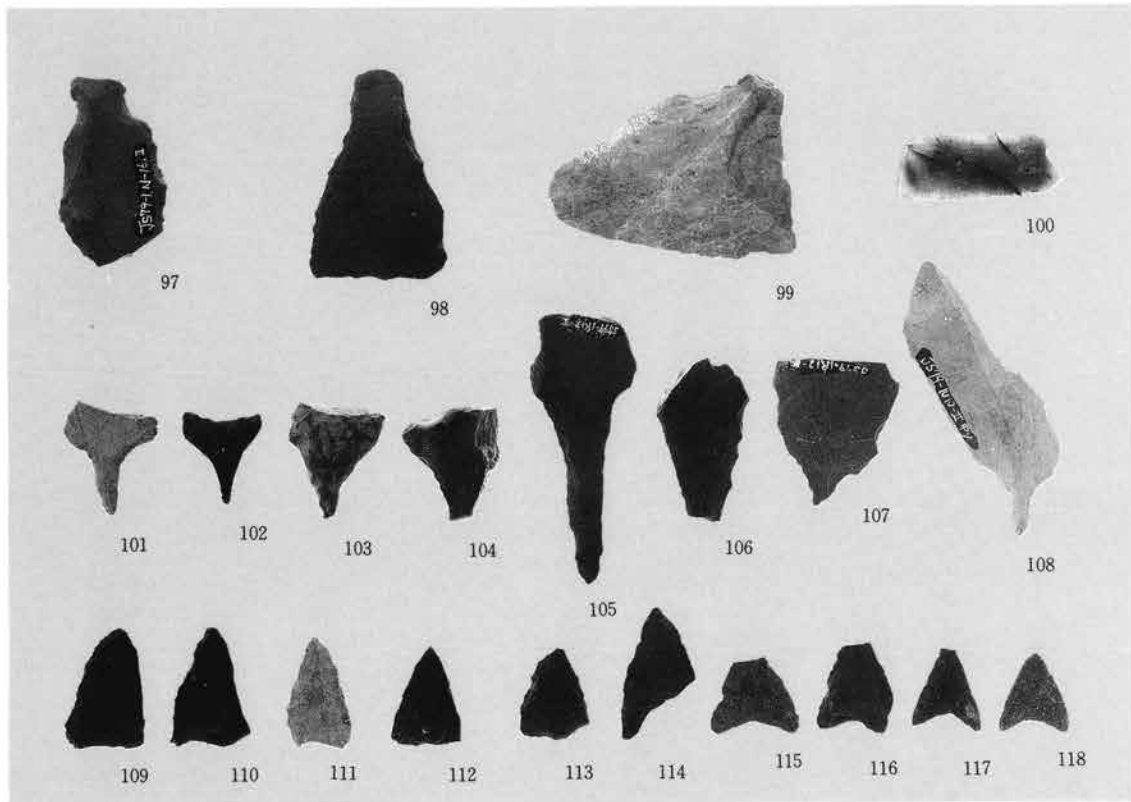
2 A区グリット出土石器 (2)



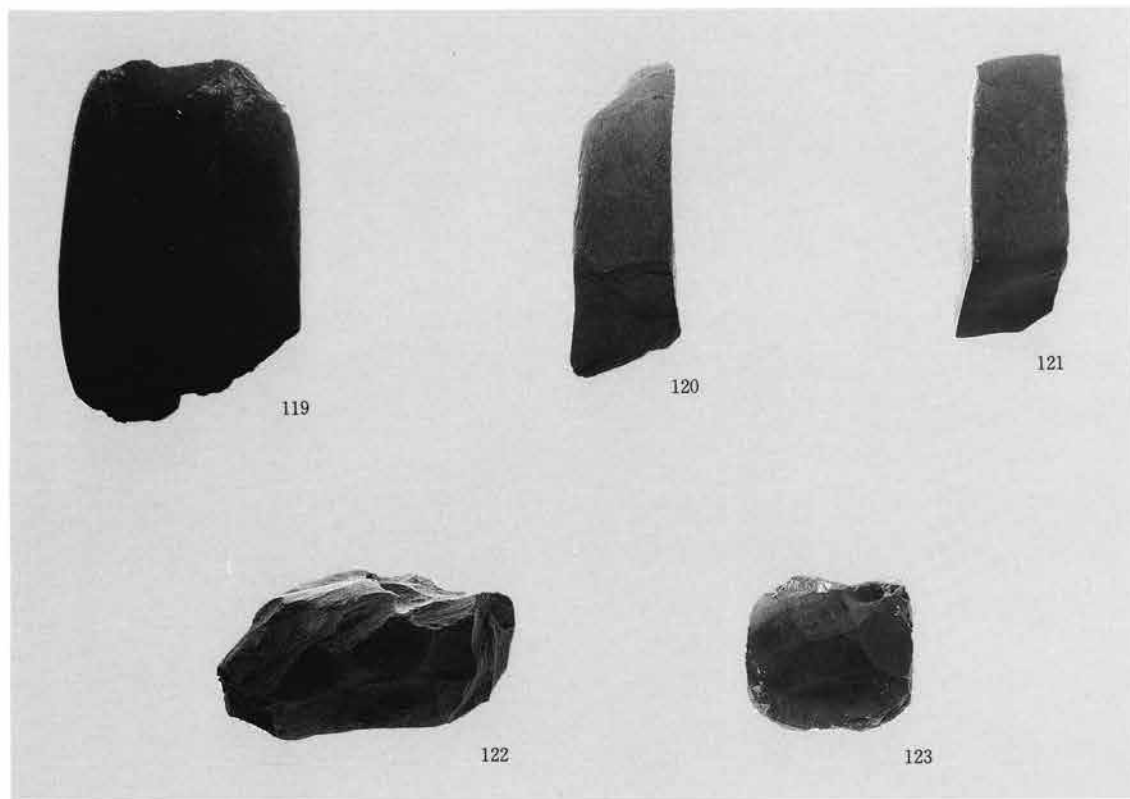
1 A区グリット出土石器 (3)



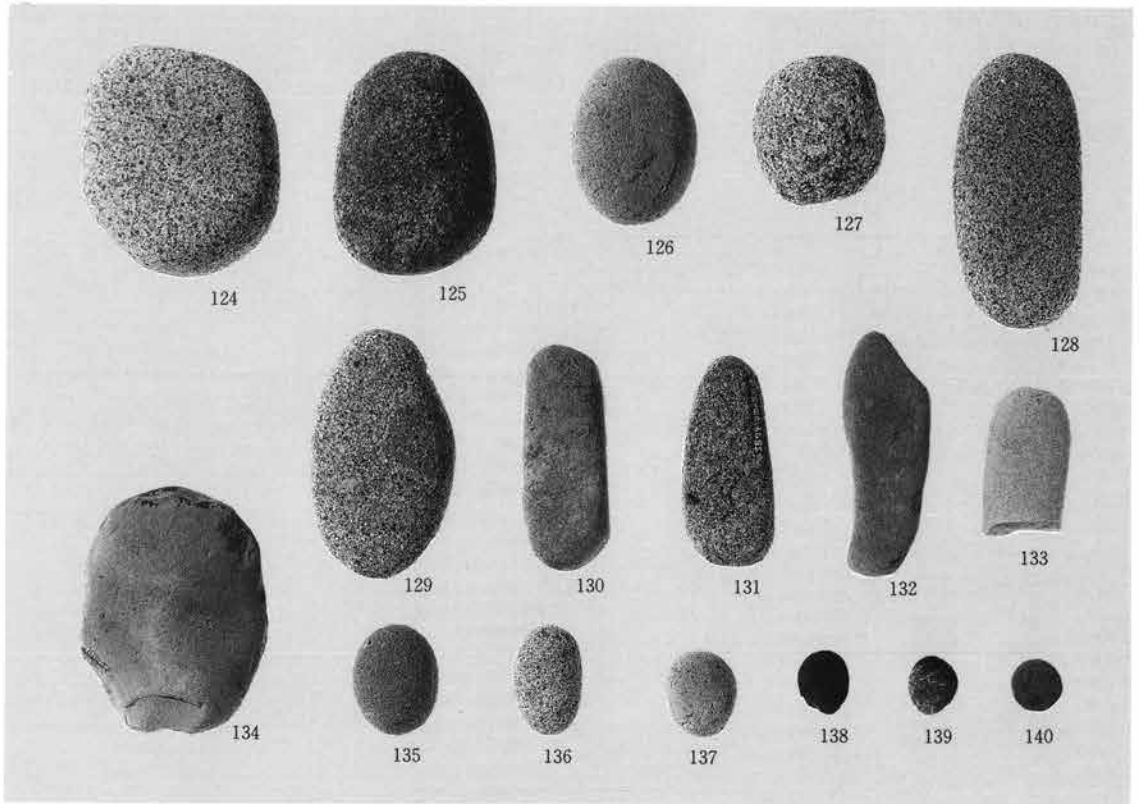
2 A区グリット出土石器 (4)



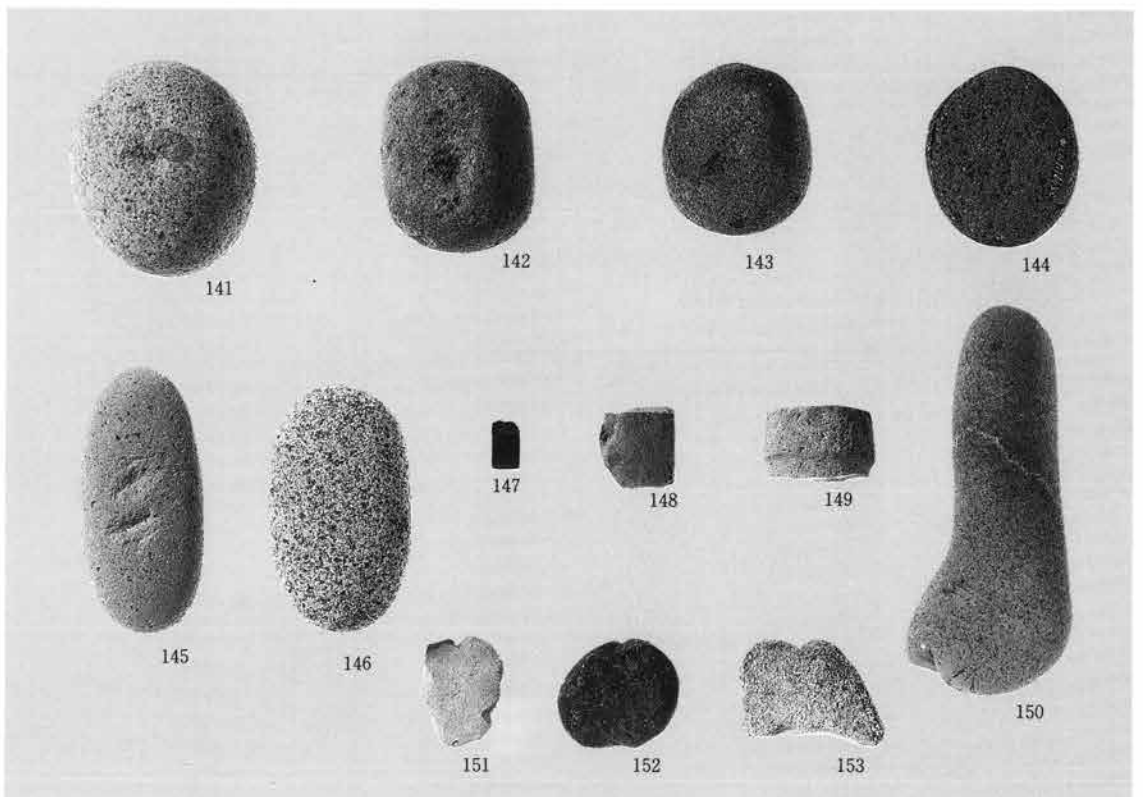
1 A区グリット出土石器 (5)



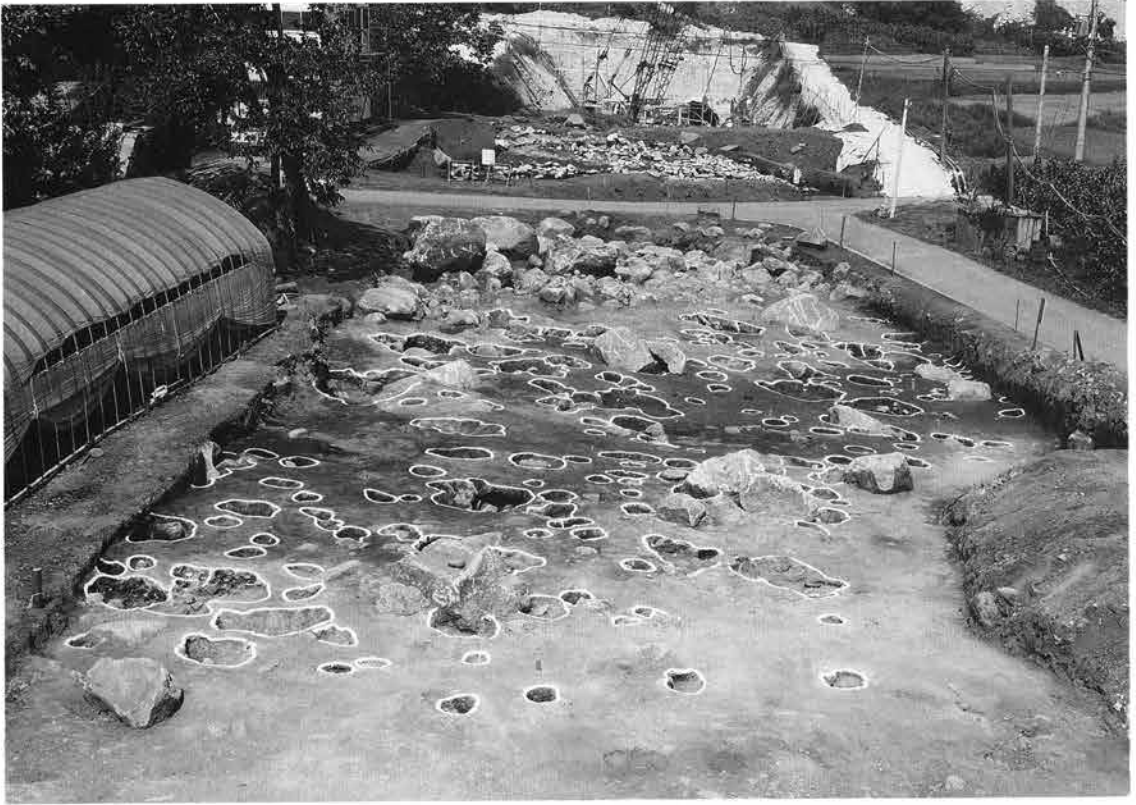
2 A区グリット出土石器 (6)



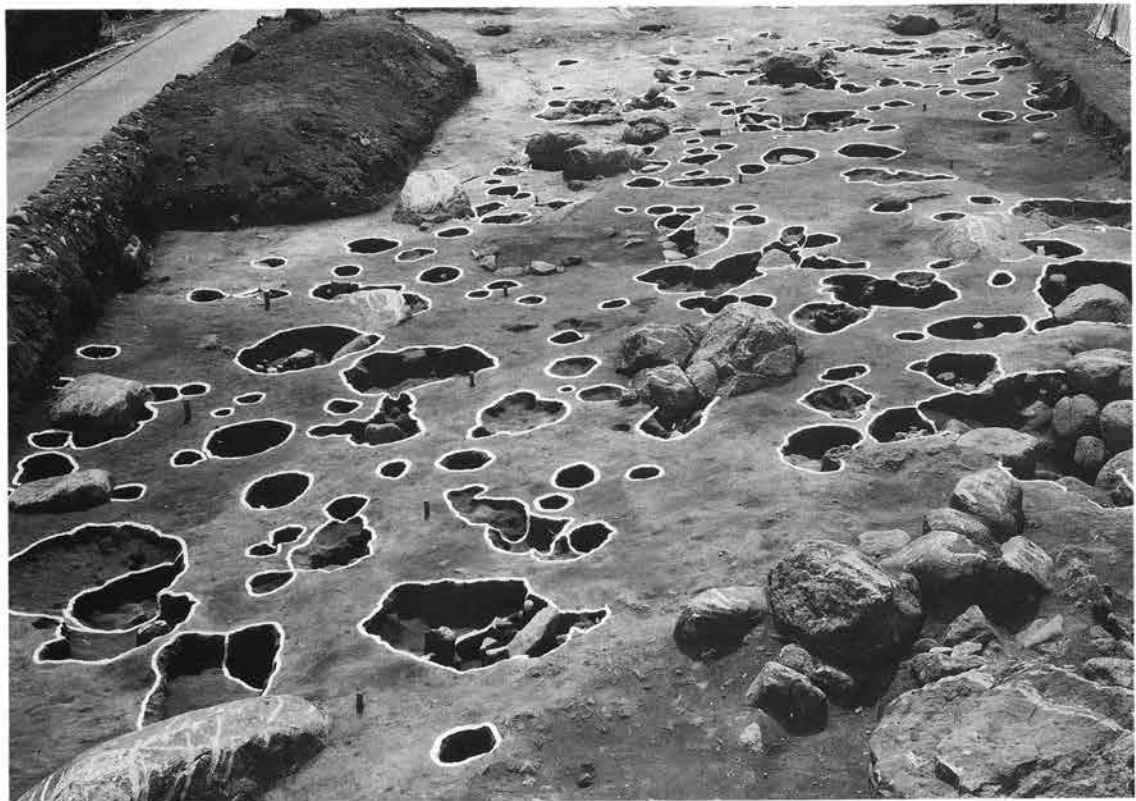
1 A区グリット出土石器 (7)



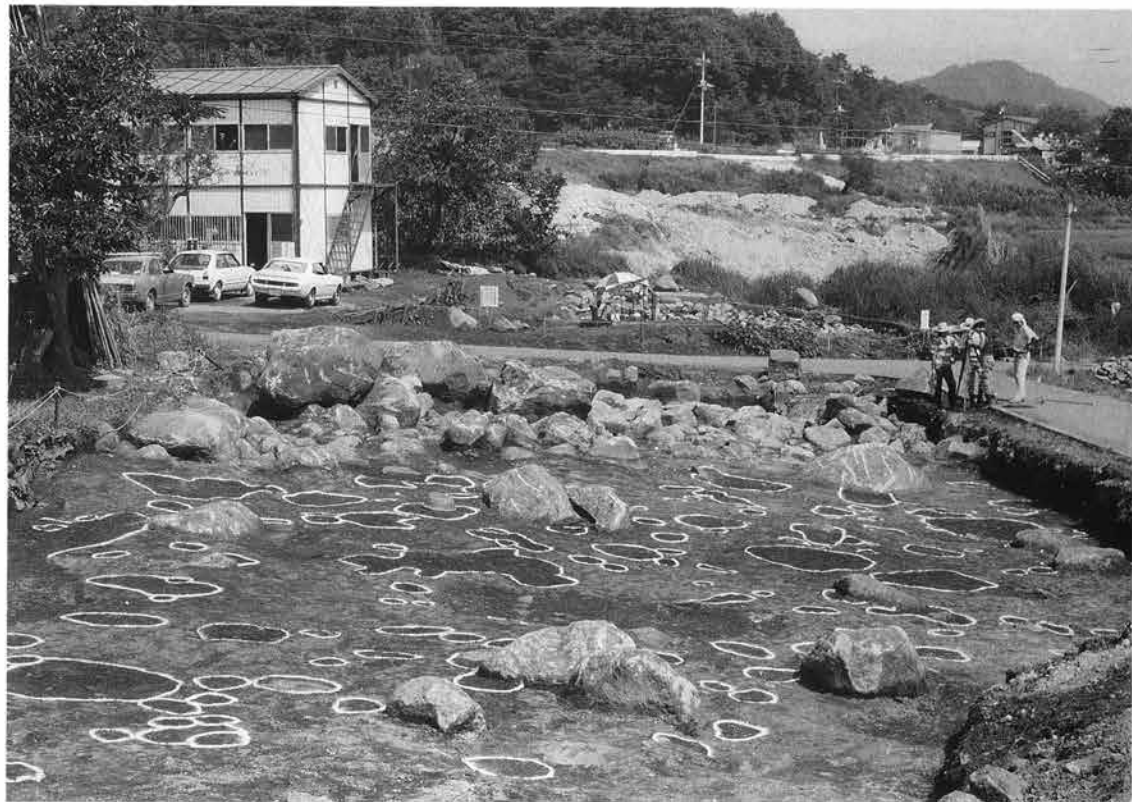
2 A区グリット出土石器 (8)



1 B区全景 (南より)



2 B区全景 (北より)



1 B区遺構確認状態とB区北面傾斜面の山石の転石（南より）



2 B区北面傾斜面にある多孔石（北東より）

1 B区4号土坑
(東より)



2 B区5号土坑
(東より)



3 B区10号土坑
(東より)





1 B区13号土坑
(南より)

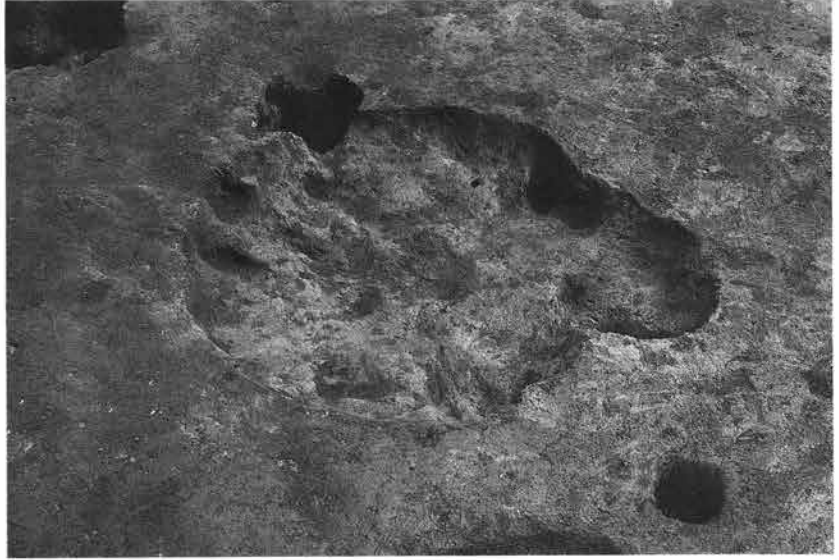


2 B区14号土坑
(南より)



3 B区16・17号土坑
(北より)

1 B区18号土坑
(西より)



2 B区19号土坑
(南より)



3 B区20号土坑
(南より)





1 B区22号土坑
(南より)



2 B区23号土坑
(南より)



3 B区27号土坑
(西より)

1 B区32号土坑
(北より)

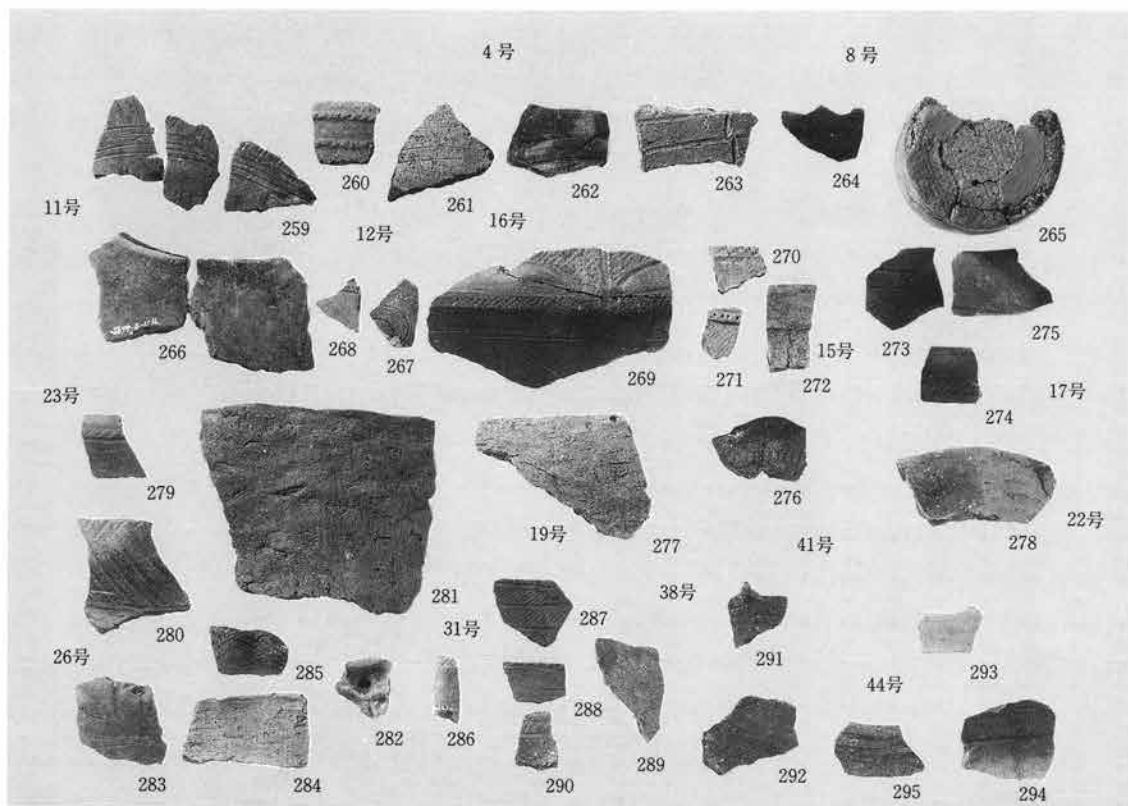


2 B区35号土坑
(北より)

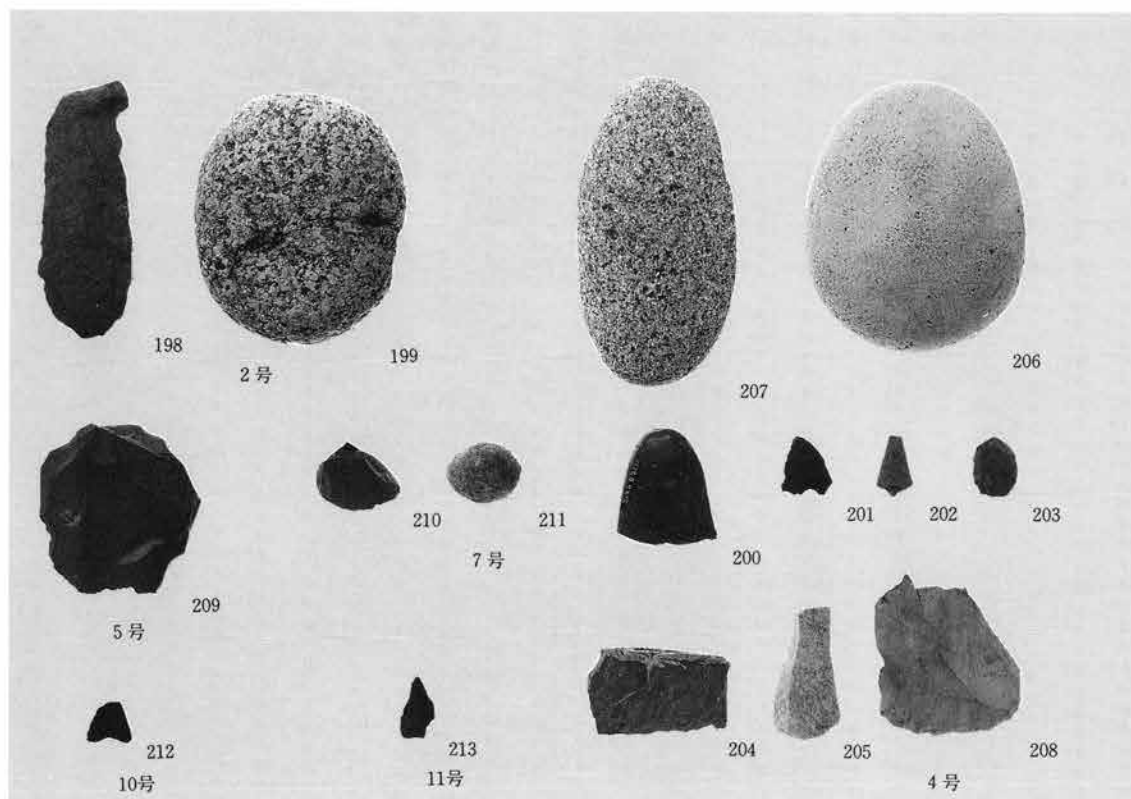


3 B区43号土坑
(東より)

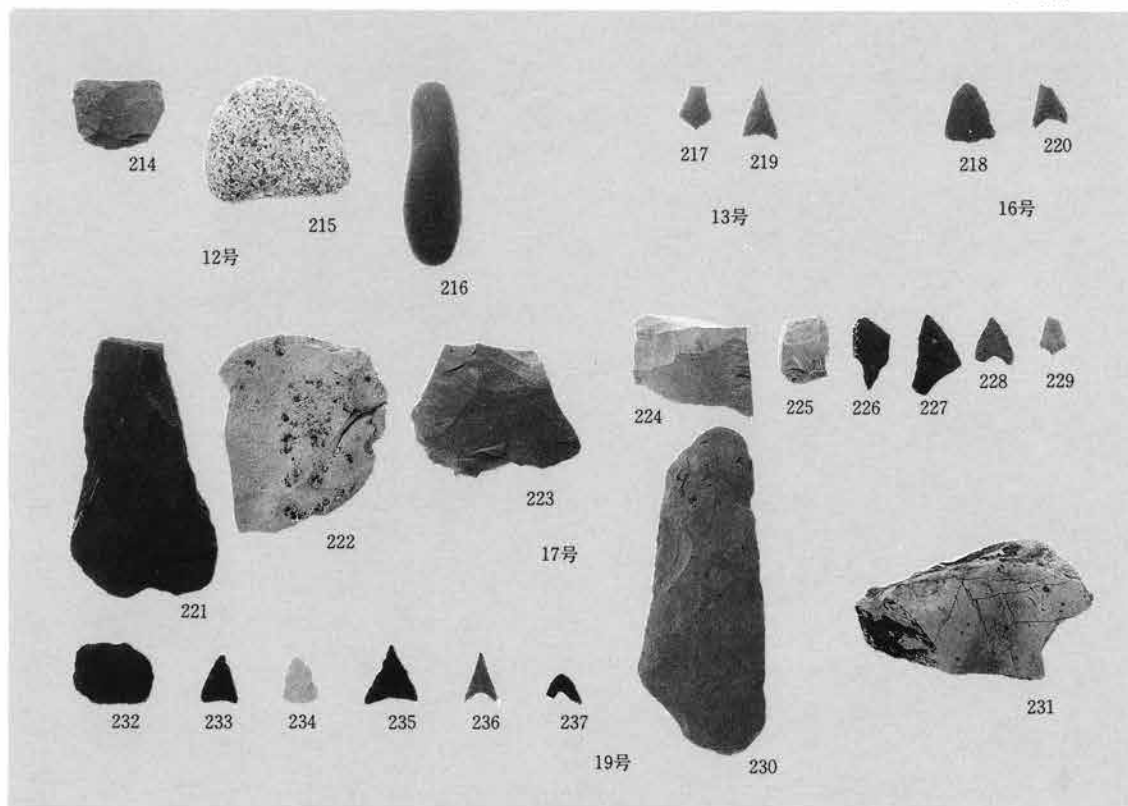




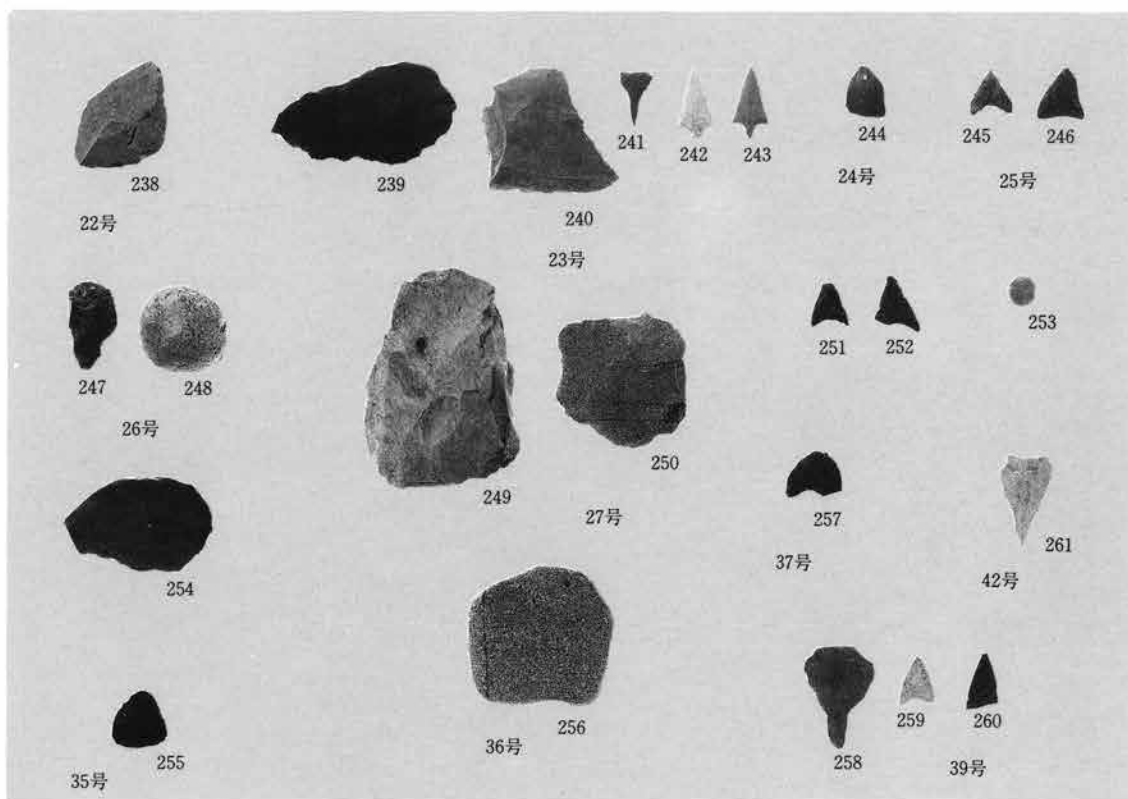
1 B区土坑出土土器



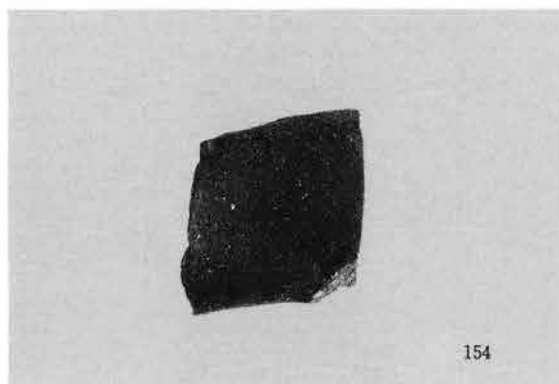
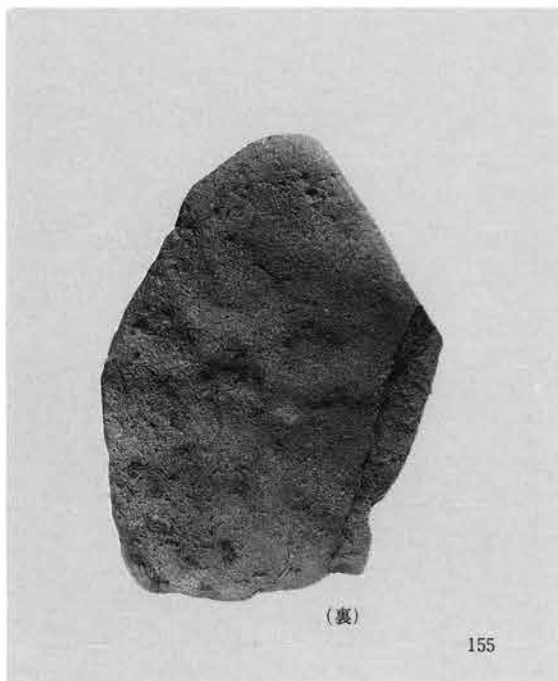
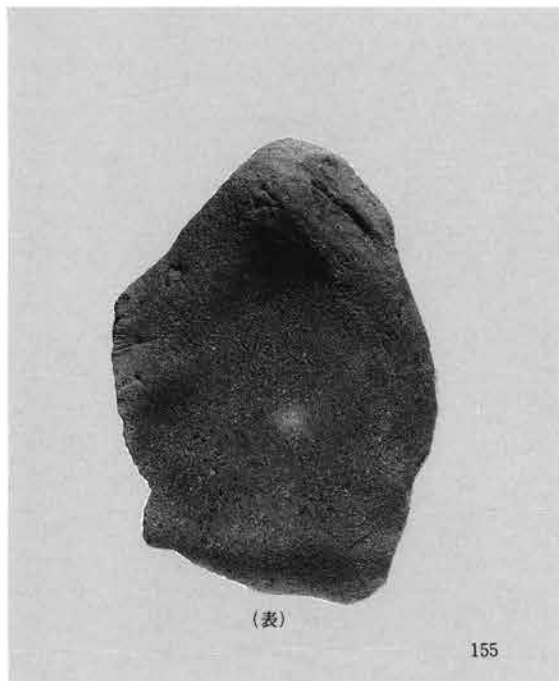
2 B区土坑出土石器(1)



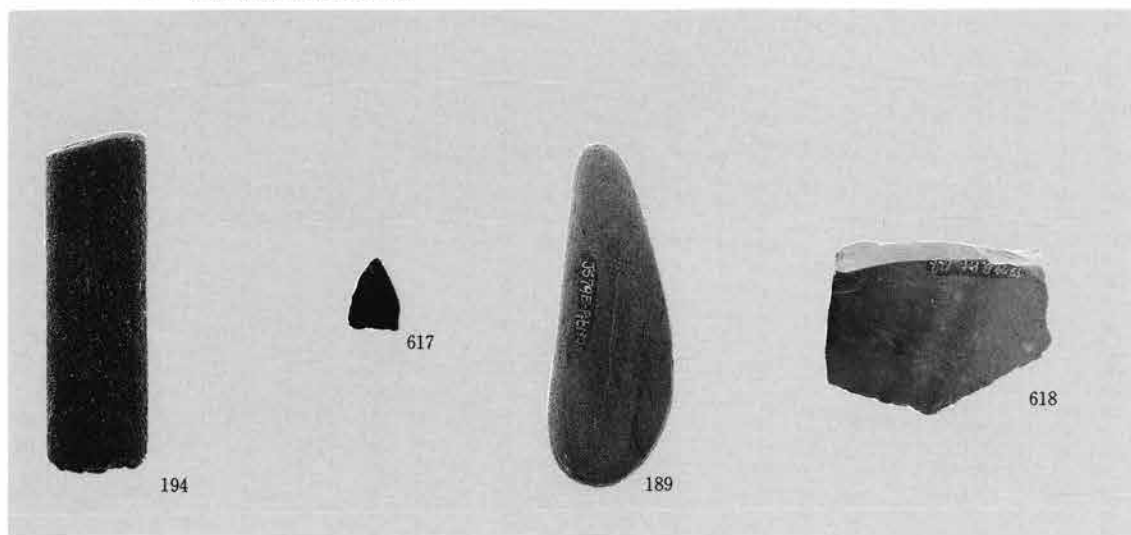
1 B区土坑出土石器 (2)



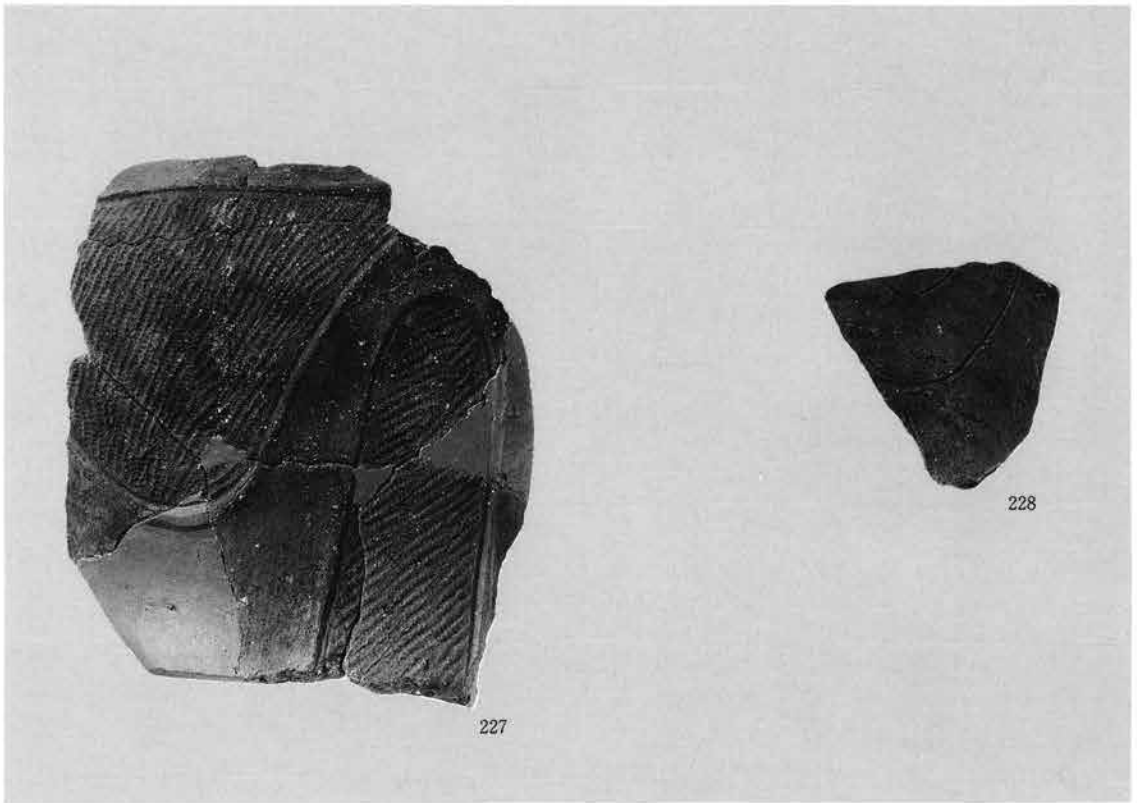
2 B区土坑出土石器 (3)



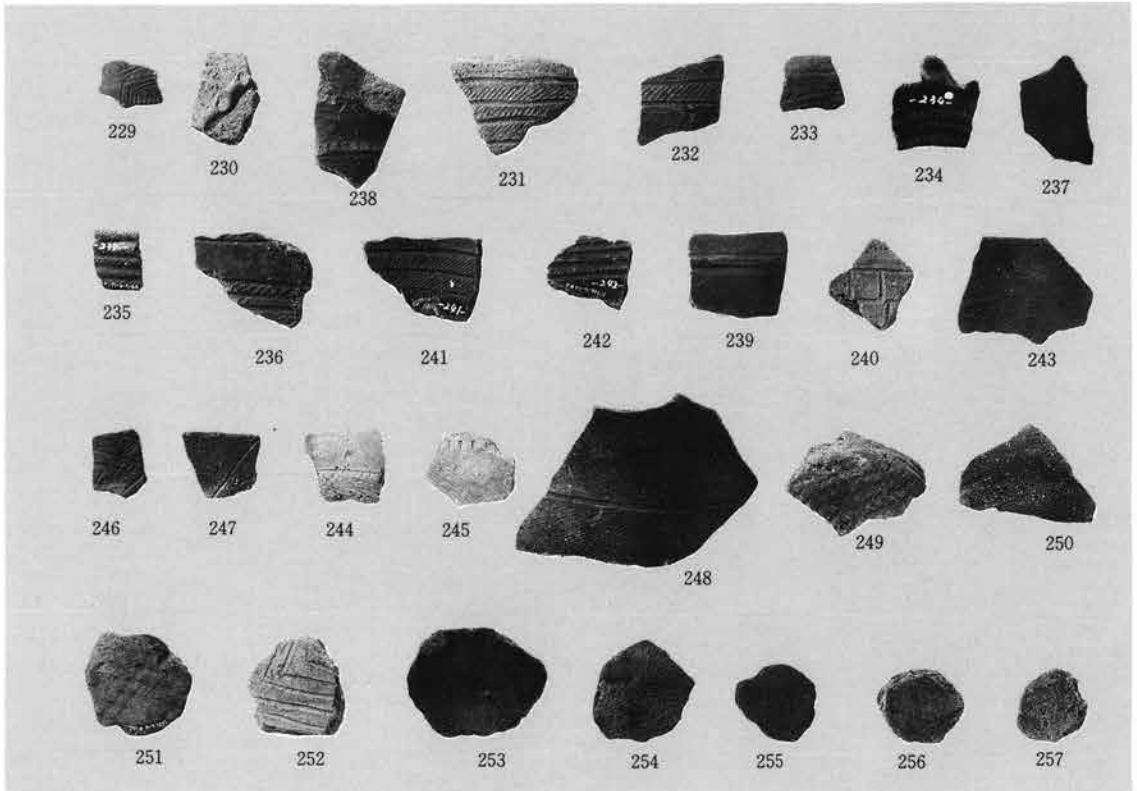
1 B区土坑出土石器(4)



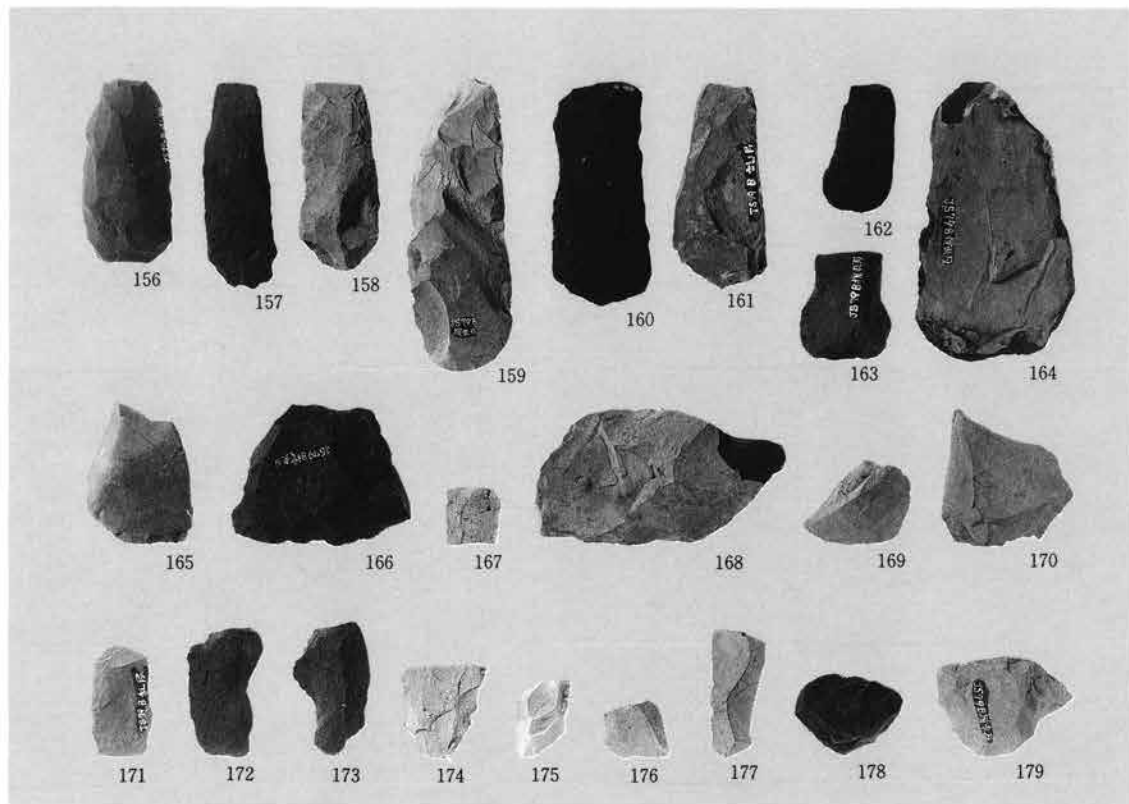
2 B区柱穴出土石器



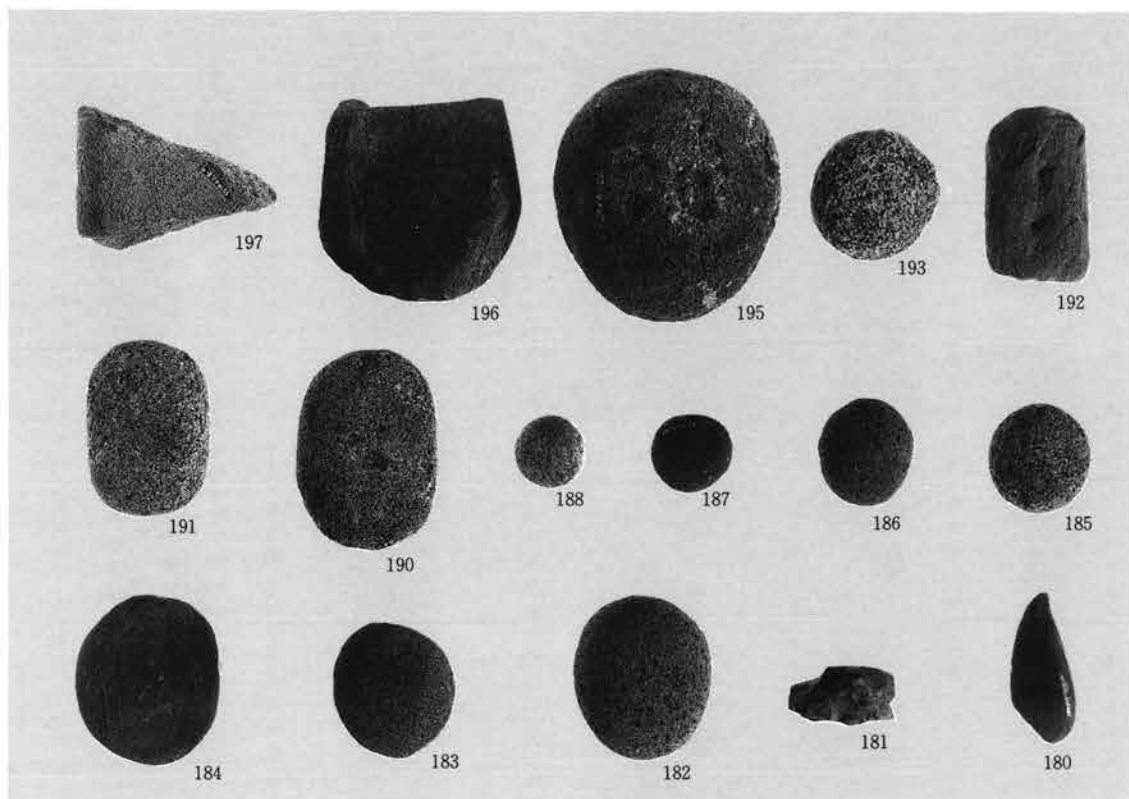
1 B区グリット出土土器 (1)



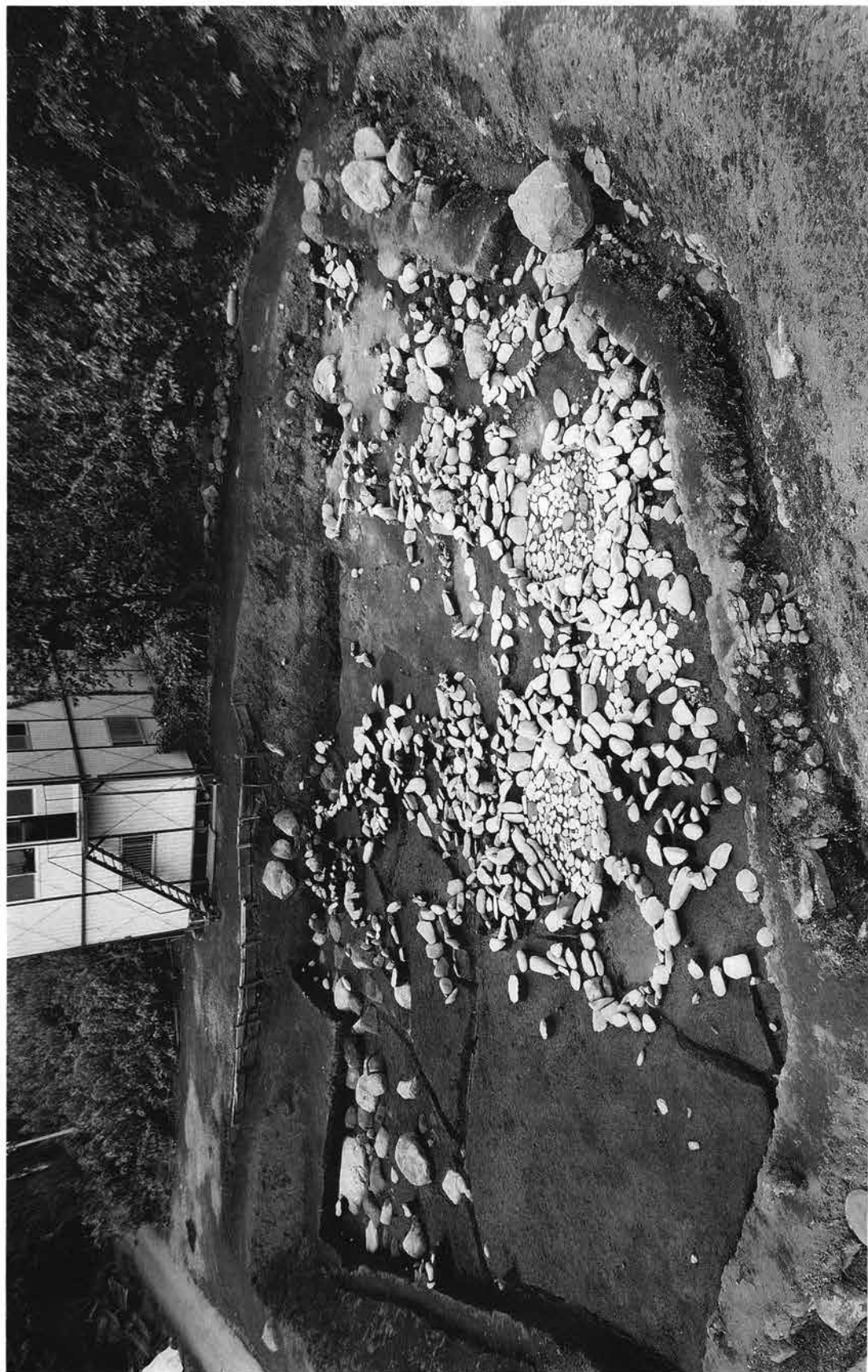
2 B区グリット出土土器 (2)



1 B区グリット出土石器(1)



2 B区グリット出土石器(2)



C区配石遺構全景(東より)



1 C区配石遺構 (南より)



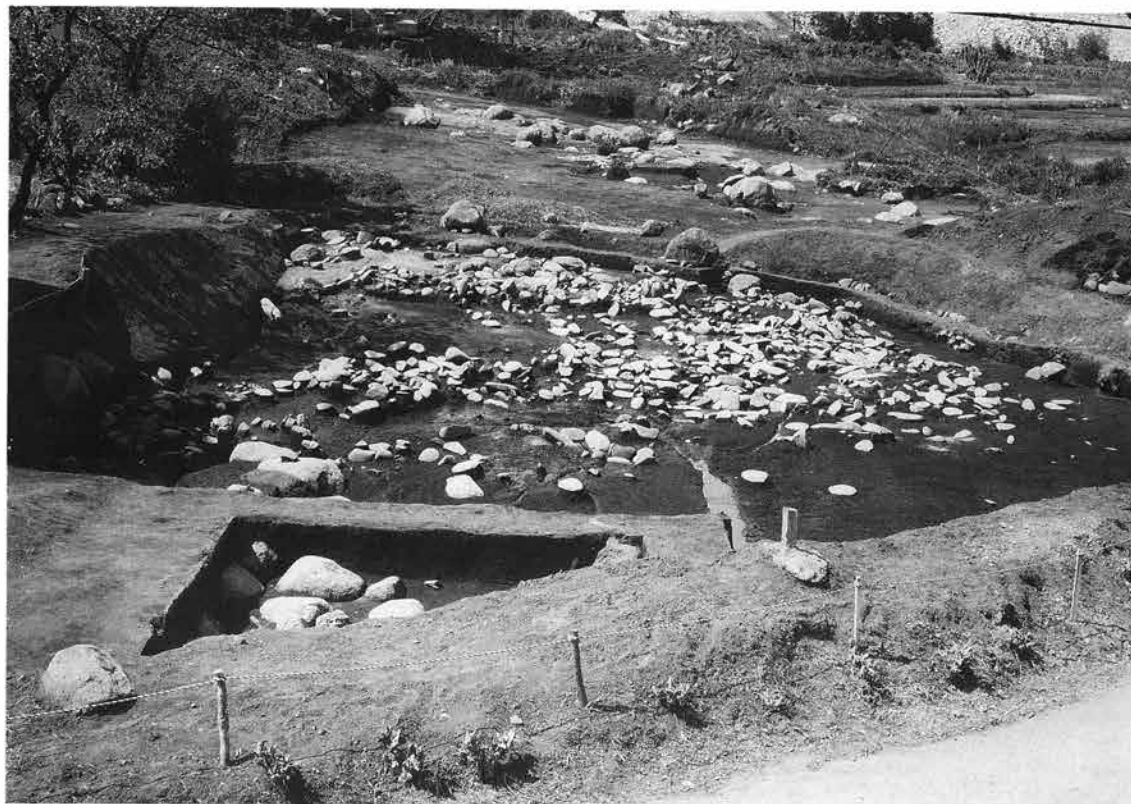
2 C区配石遺構 (南西より)



1 C区配石遺構東縁部の大型配石（東より）



1 C区配石遺構南縁部（南東より）



1 C区配石遺構確認面（南より）



2 C区配石遺構確認面（東より）



1 C区配石遺構（南西より）



2 C区配石遺構中央部と中央土坑（西より）



1 C区配石遺構中央土坑の土器出土状態（東より）



2 C区配石遺構下部より出土した1号埋甕（南より）



1 C区20号配石 (南東より)



2 C区8b号配石 (北西より)



1 C区18号配石 (南東より)



2 C区19号配石 (南より)



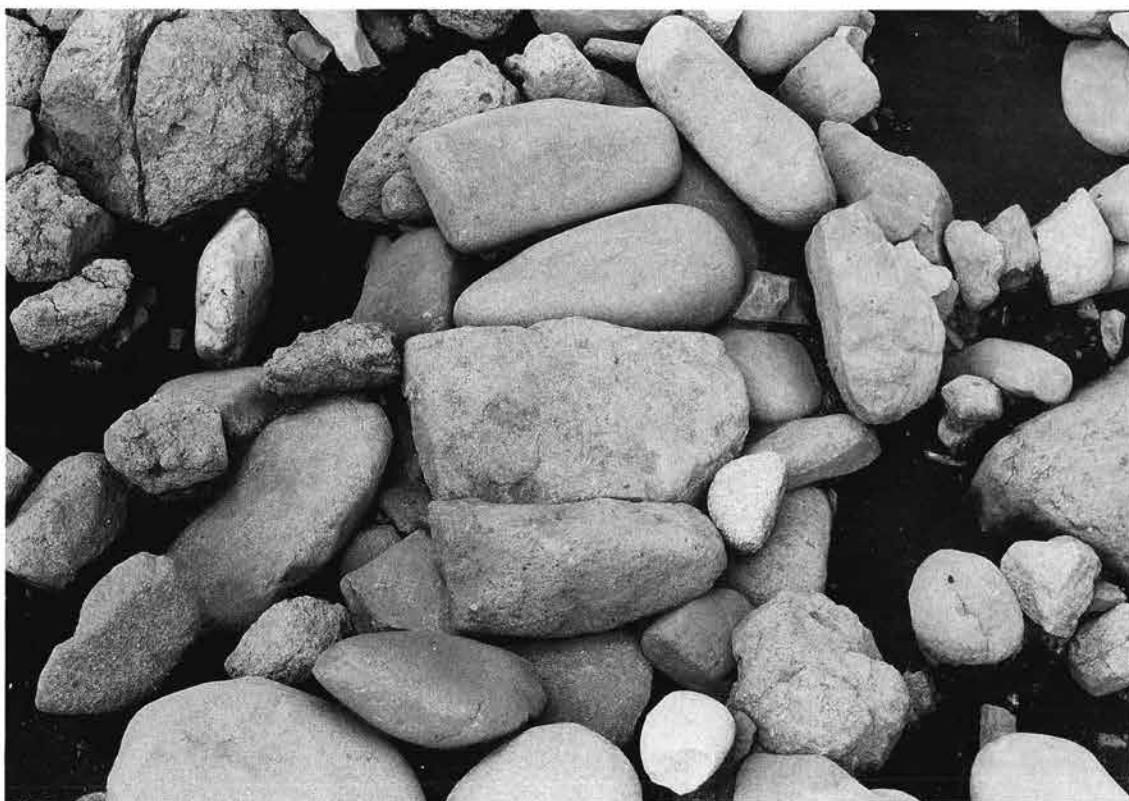
1 C区21号配石 (南より)



2 C区22号配石確認面 (南より)



1 C区21・22号配石（南西より）



2 C区22号配石の蓋石の状態（南西より）



1 C区26号配石 (南西より)



2 C区27号配石 (北東より)



1 C区28号配石
(北より)



2 C区30号配石
(南西より)



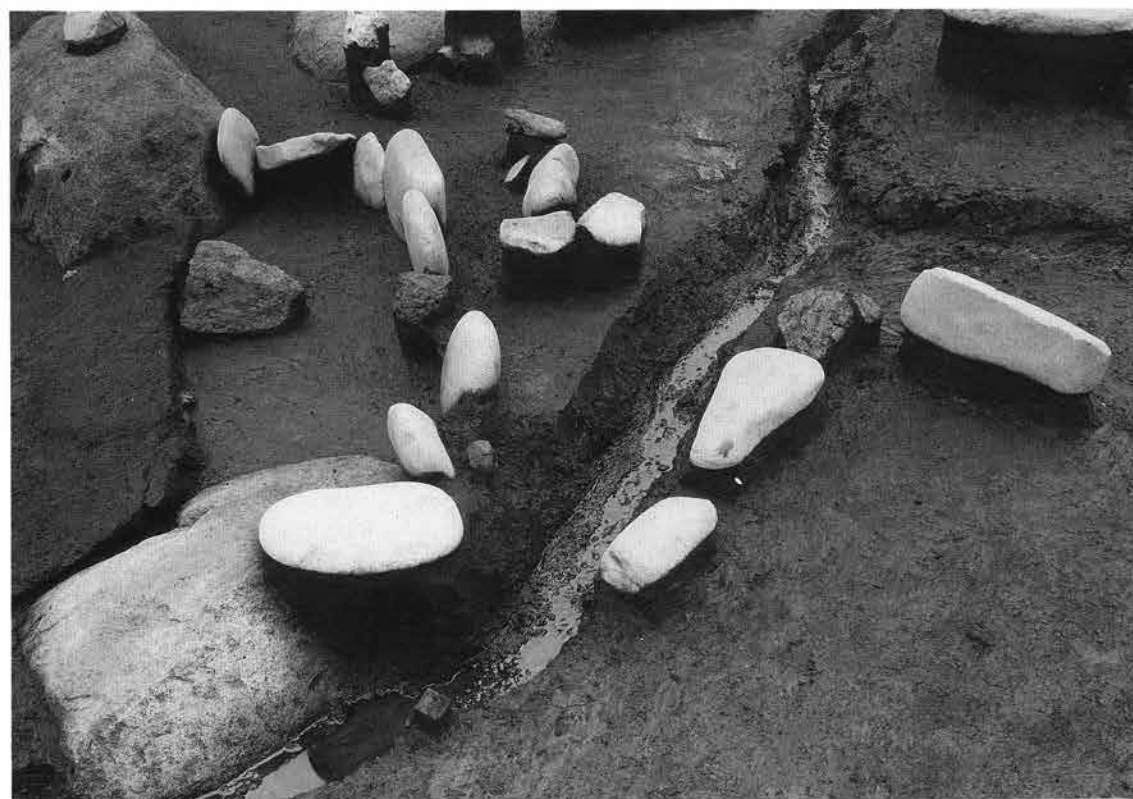
1 C区31号配石 (東より)



2 C区20号配石に切られた33号配石 (南東より)



1 C区35号配石（南東より）



2 C区A（左）・C（右）号配石（南東より）



1 C区D号配石 (南東より)



2 C区E号配石 (南東より)



1 C区G号配石（北東より）



2 C区H号配石（南西より）



1 C区10号配石（南西より）



2 C区10号配石確認状態（北東より）



1 C区16a号配石（北東より）



2 C区16a号配石確認状態（北東より）



1 C区11号配石 (南より)



2 C区11号配石確認状態 (北東より)



1 C区20a号配石（北より）



2 C区20a号配石（西より）



1 C区20a号配石上面確認状態（南より）



2 C区20a配石石棒出土状態（東より）



1 C区20a・b号配石床面の再構築状態（北より）



2 C区20a・b号配石周壁の再構築状態（東より）



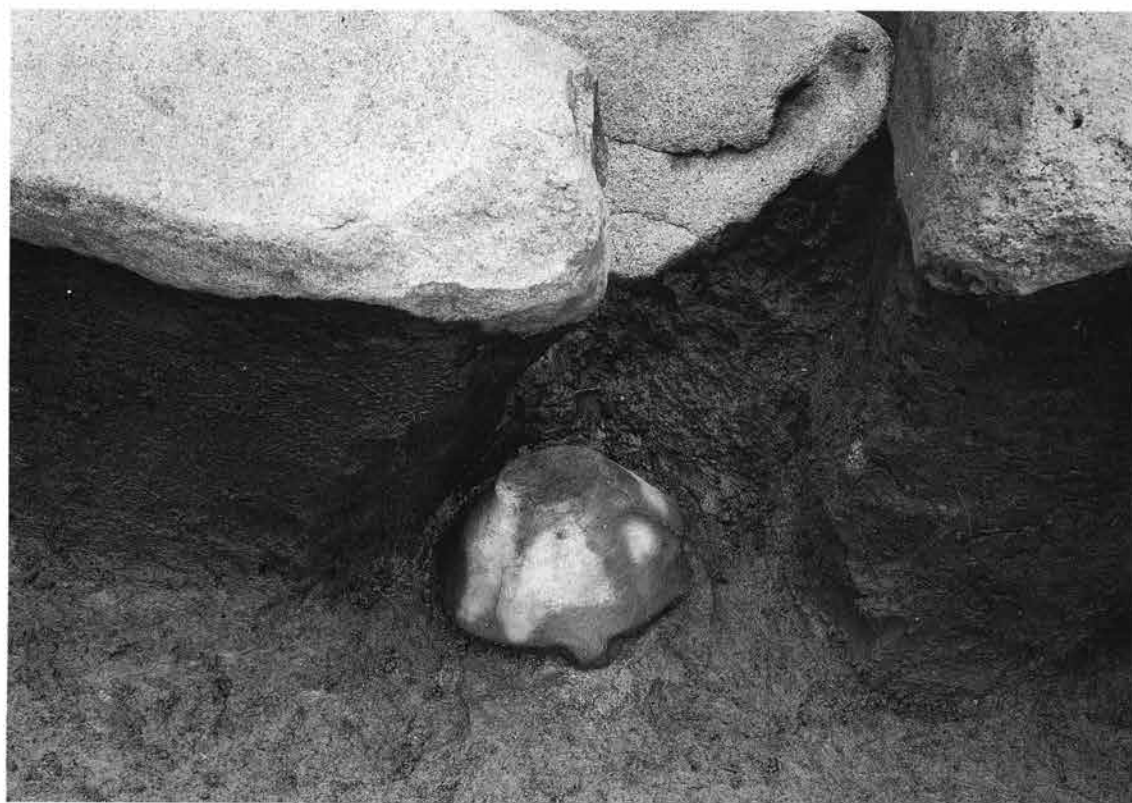
1 C区1a号配石（南より）



2 列石（北東より）



1 C区3号配石(東より)



2 C区5号集石下遺物出土状態(北東より)



1 C区6・7号配石（南より）



2 C区8a号配石（北西より）



1 C区9号配石 (西より)



2 C区12号配石 (南より)



1 C区13号配石 (東より)



2 C区15・16b・17号配石 (東より)



1 C区23号配石 (南より)



2 C区34号配石 (南西より)

(正面)



433

(侧面)



433

(上面)



433



434

(正面)



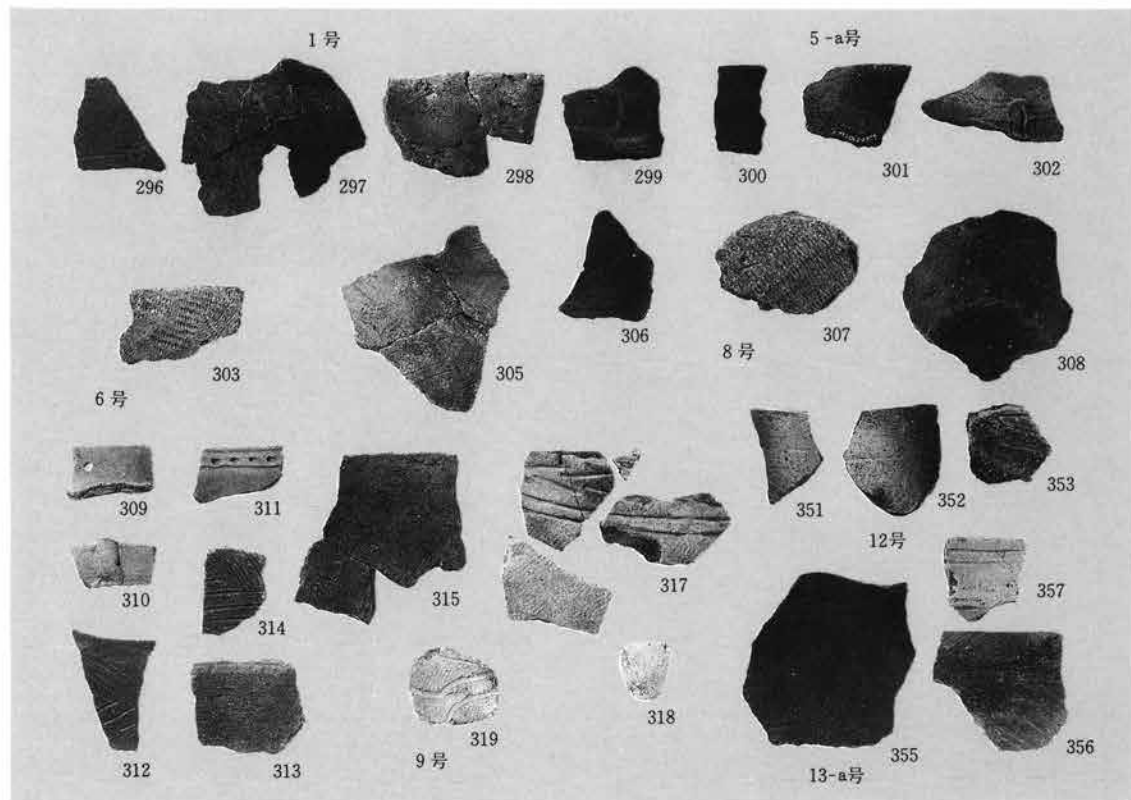
435

(上面)

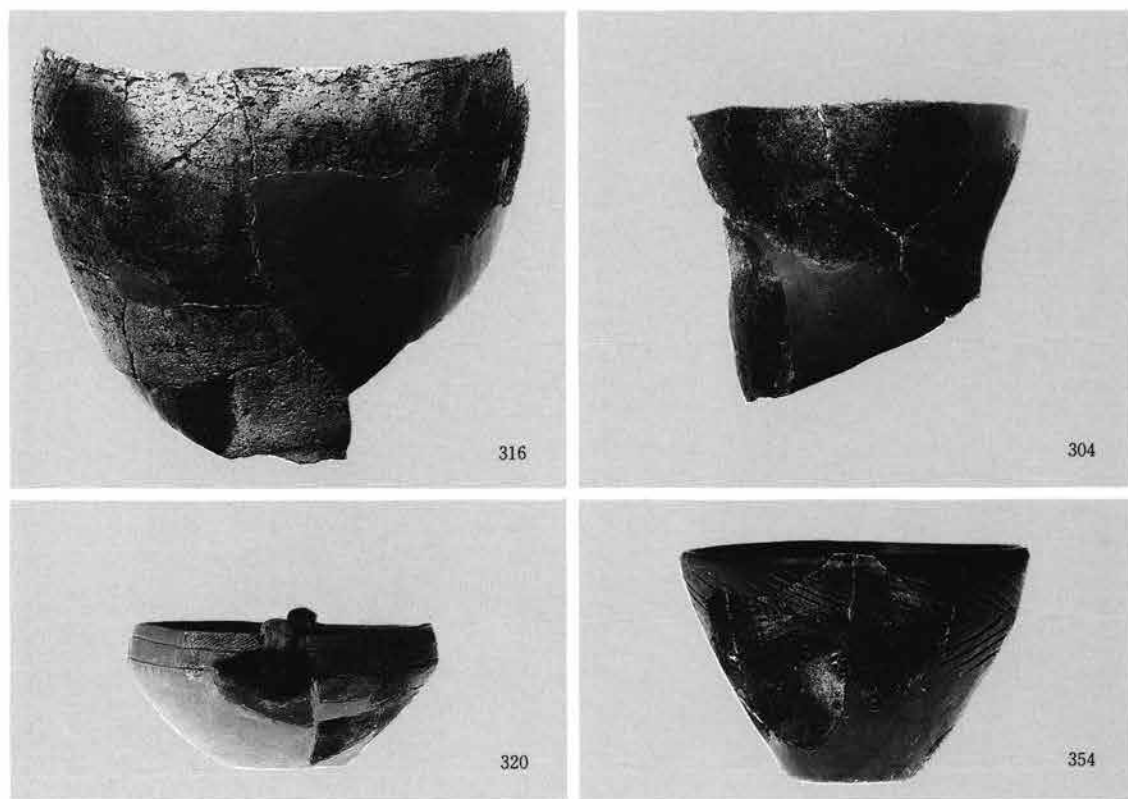


435

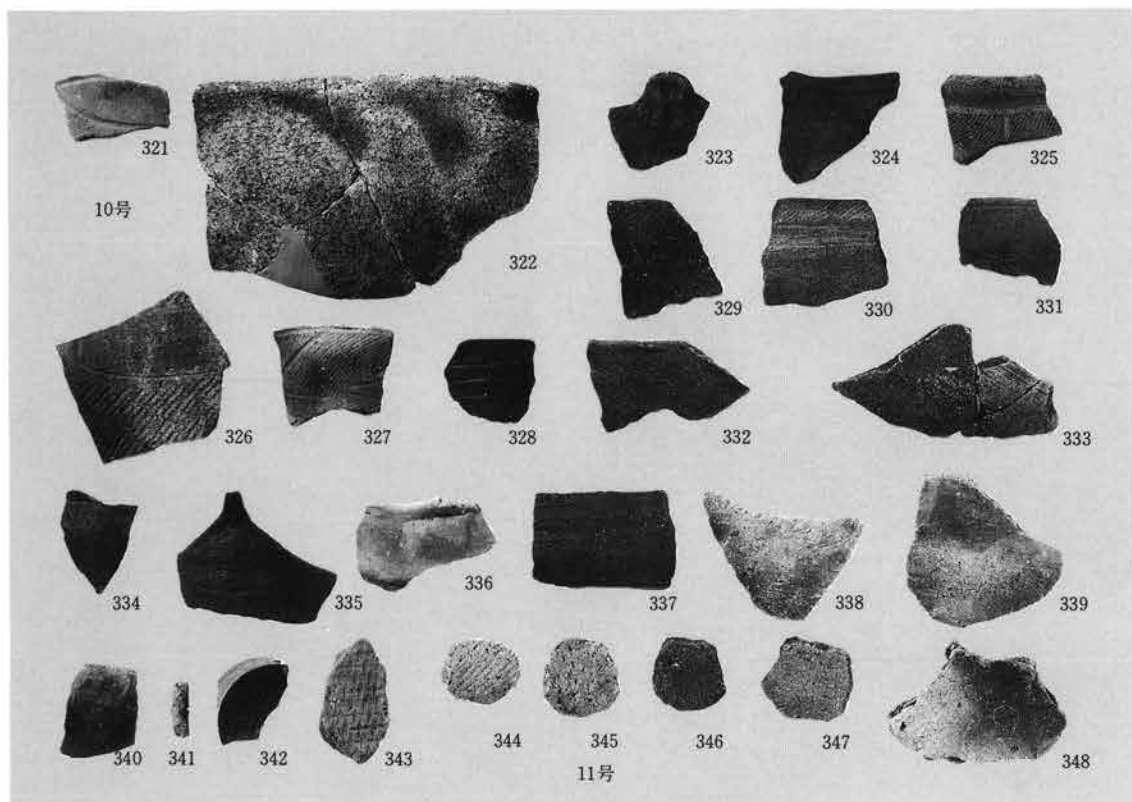
1 C区配石遺構中央土坑出土土器



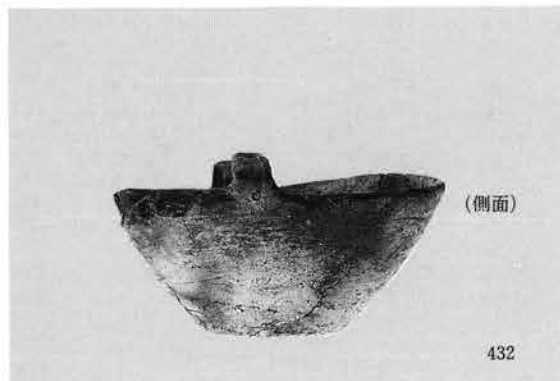
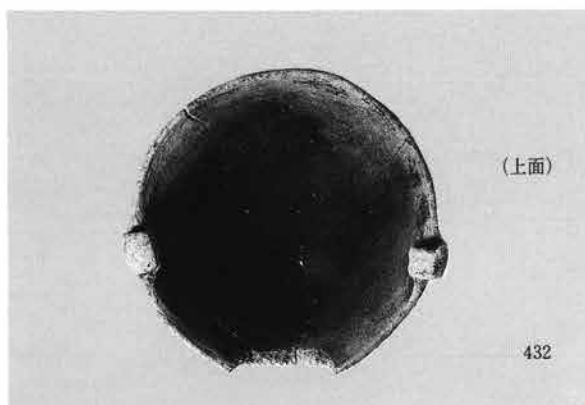
1 C区配石遺構出土土器(1)



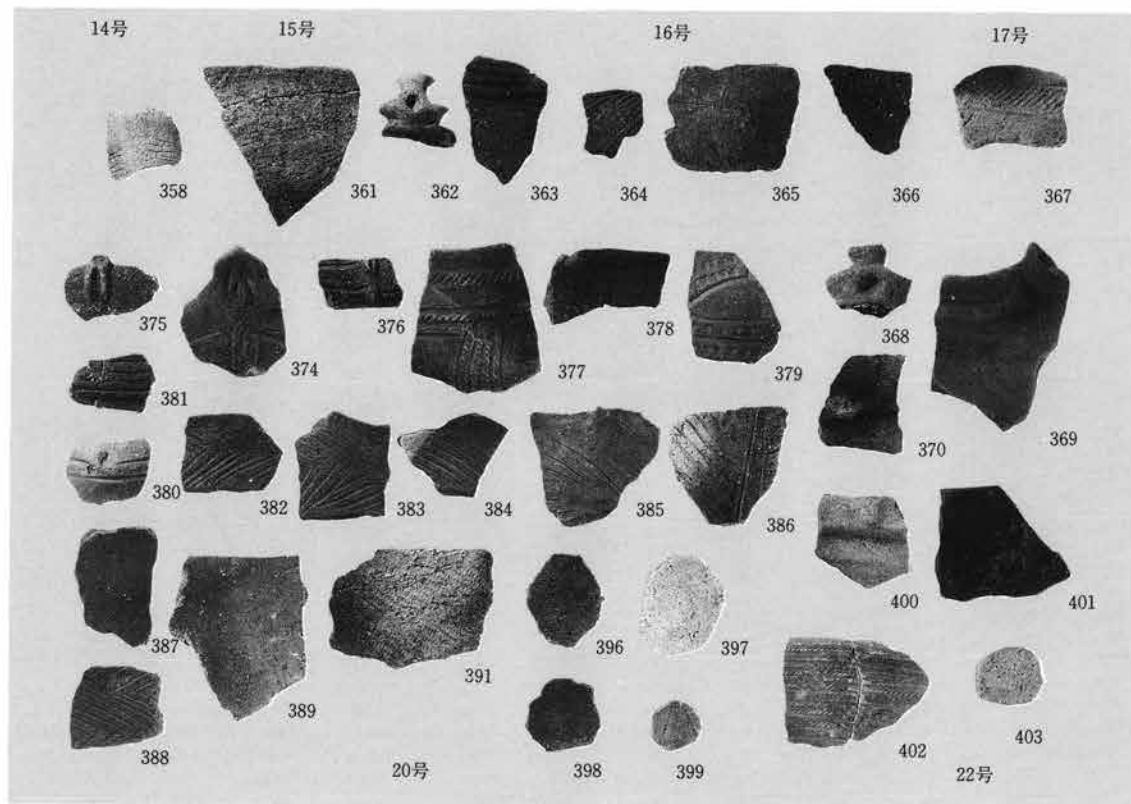
2 C区配石遺構出土土器(2)



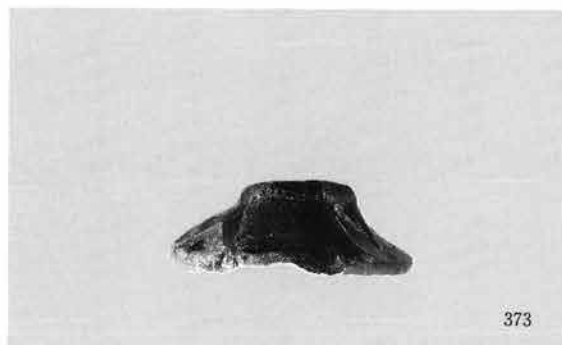
1 C区配石遺構出土土器 (3)



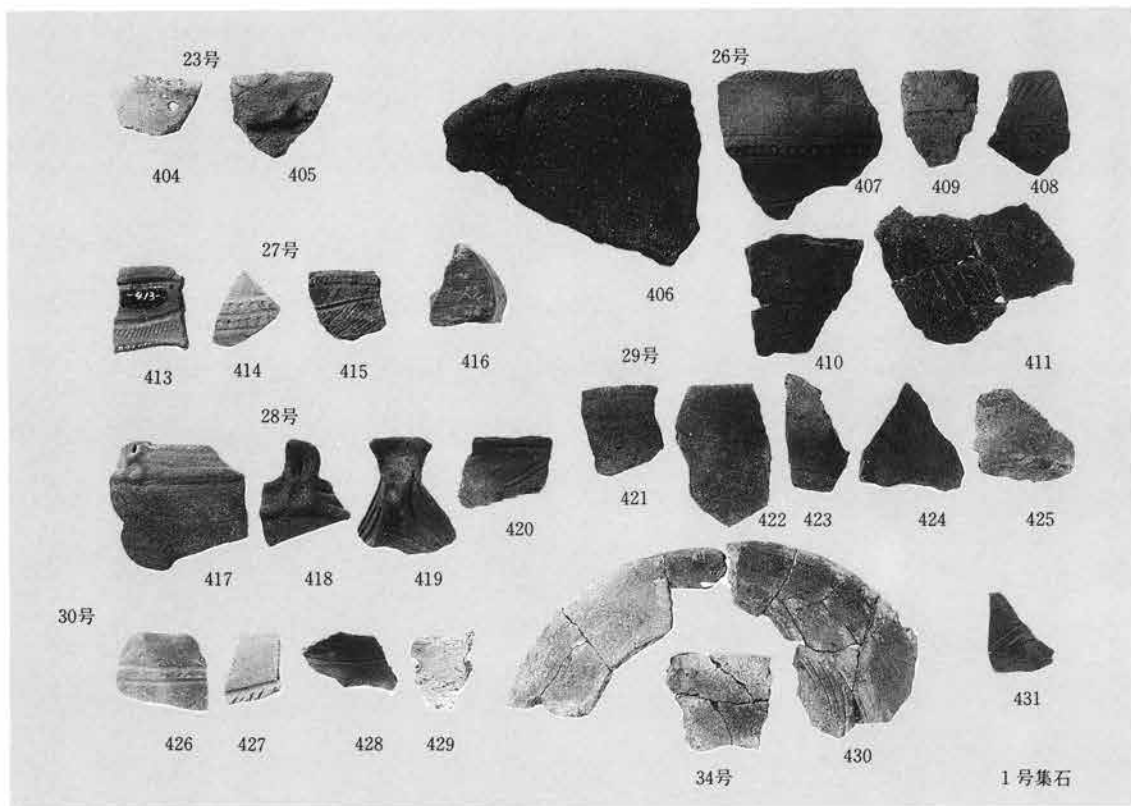
2 C区配石遺構出土土器 (4)



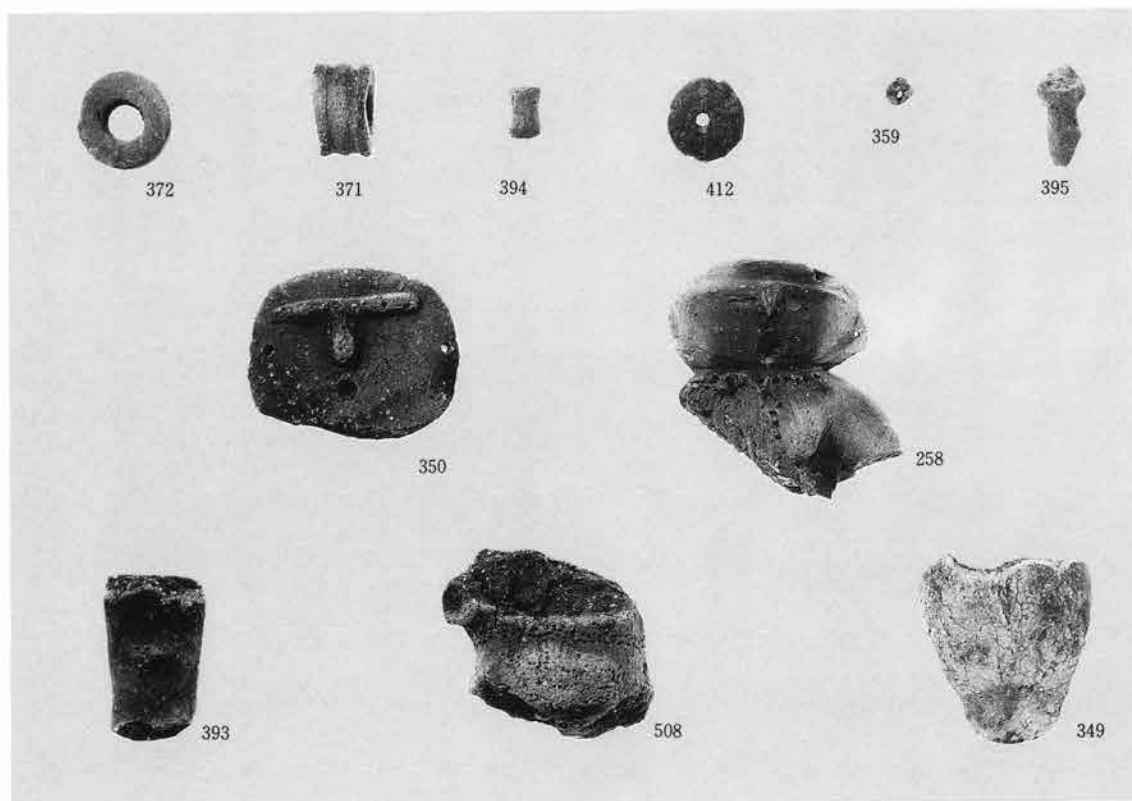
1 C区配石遗构出土土器 (5)



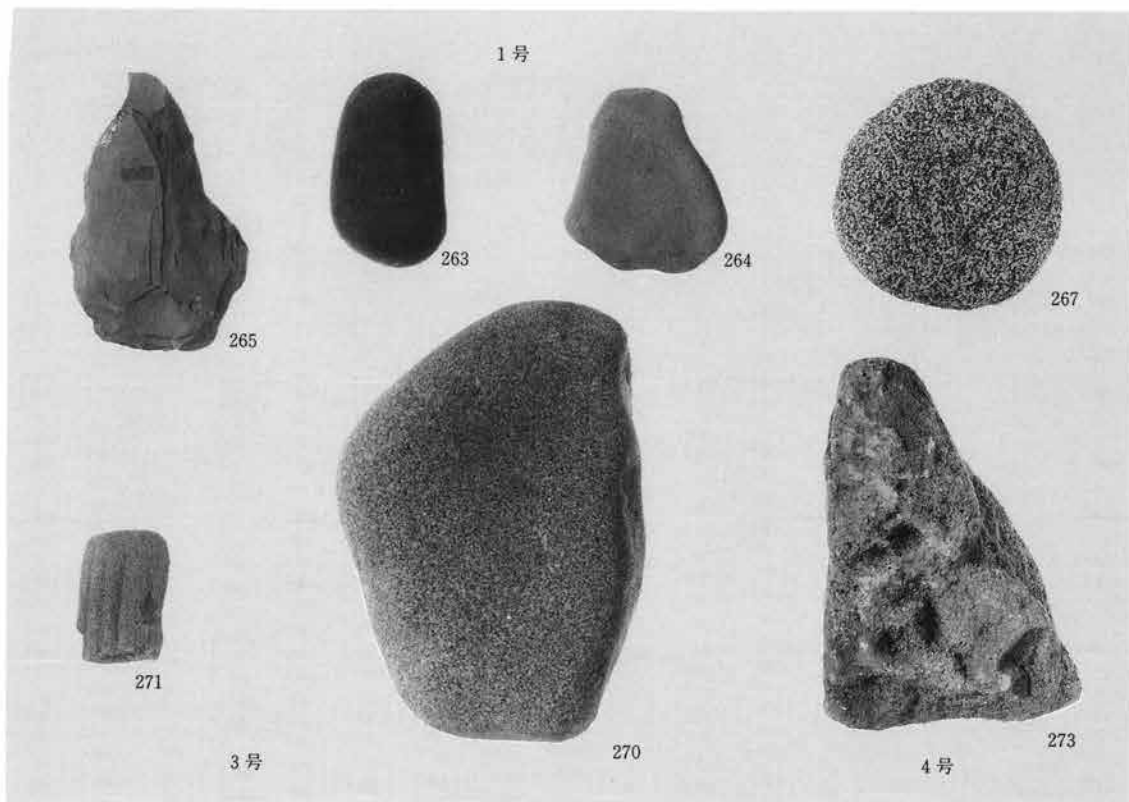
2 C区配石遗构出土土器 (6)



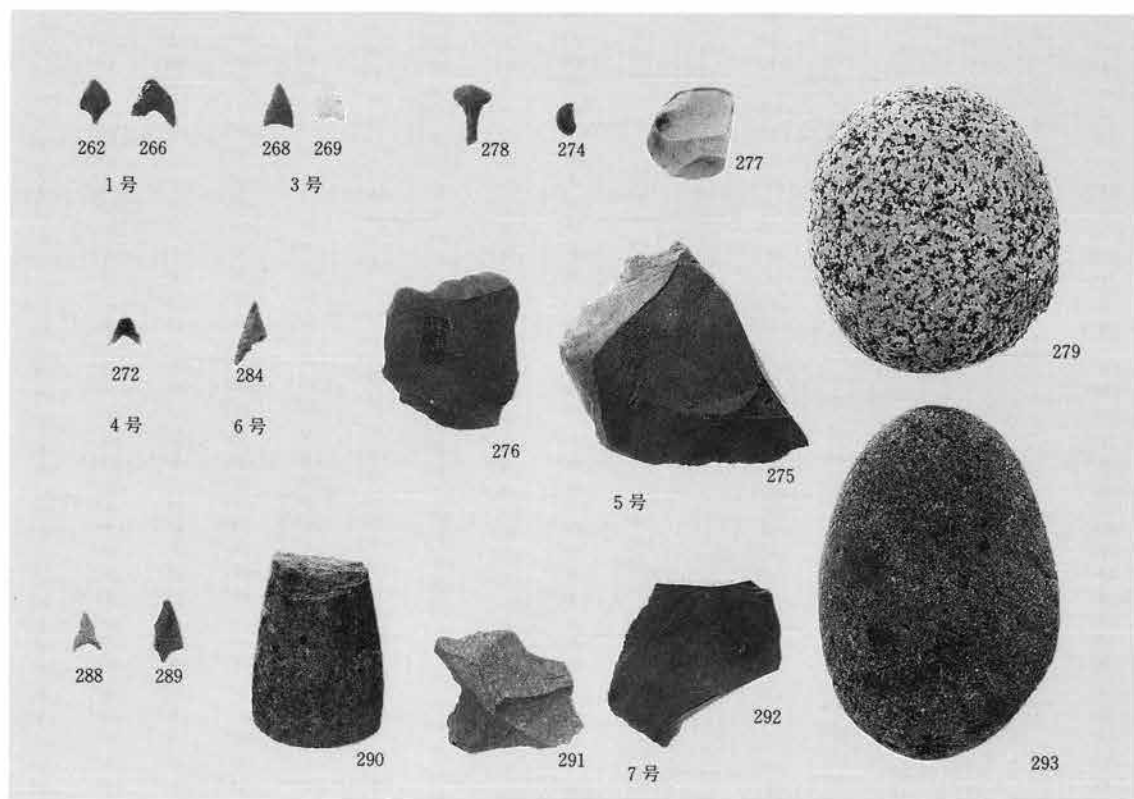
1 C区配石遺構出土土器 (7)



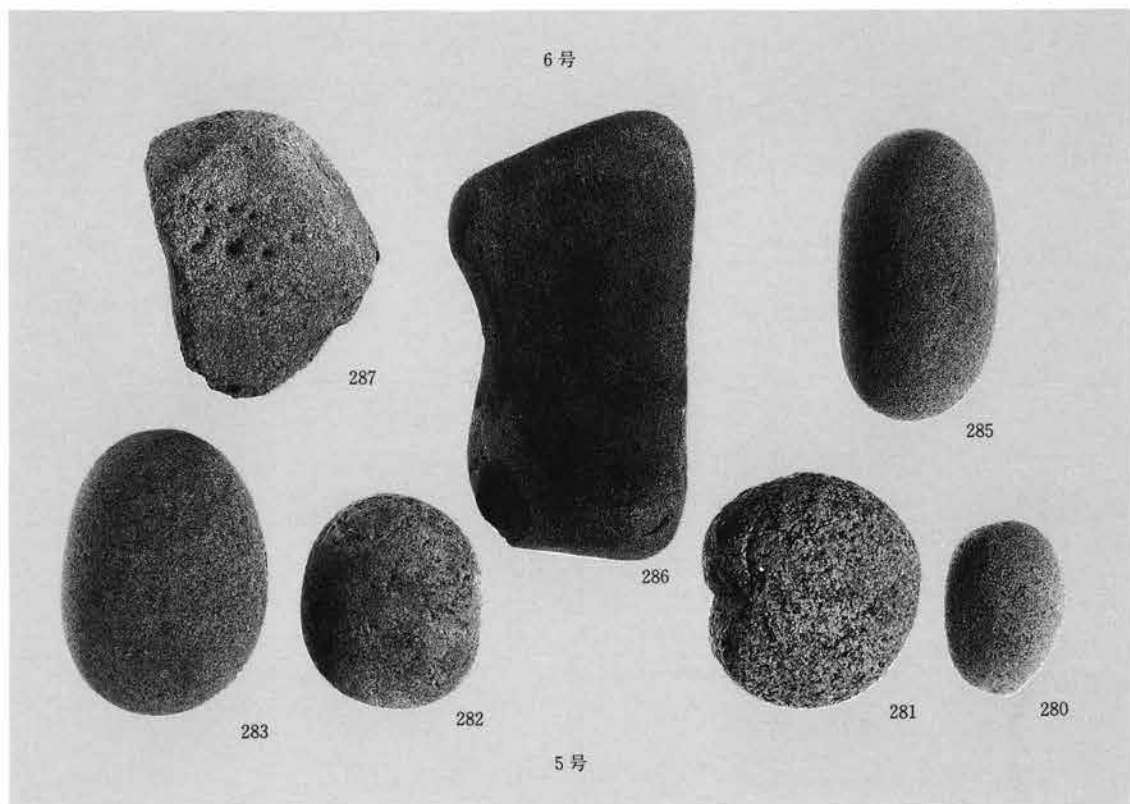
2 C区配石遺構出土土製品



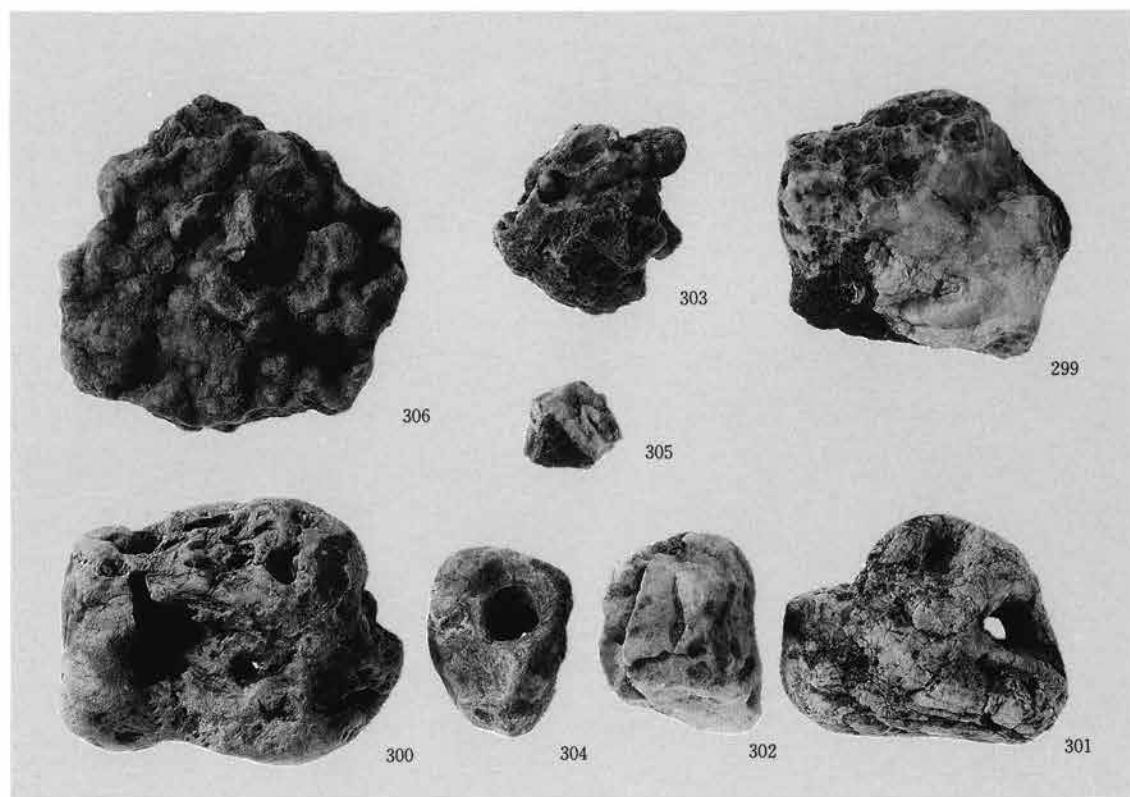
1 C区配石遺構出土石器 (1)



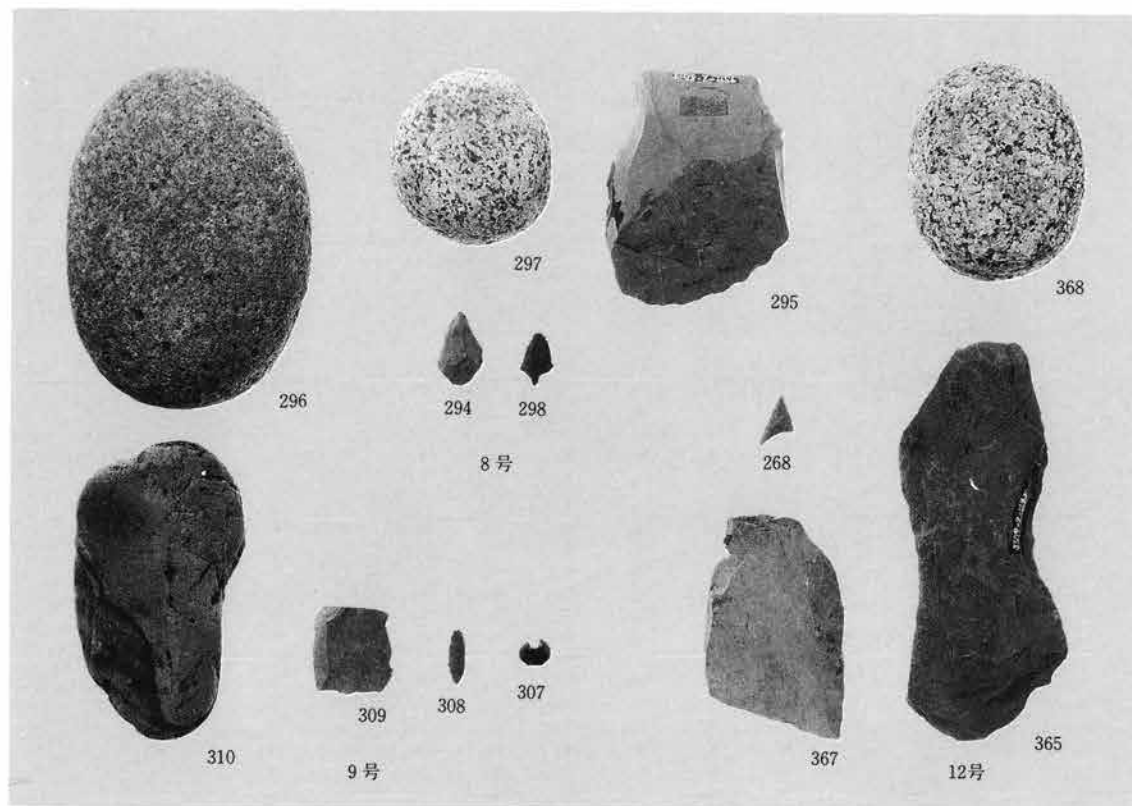
2 C区配石遺構出土石器 (2)



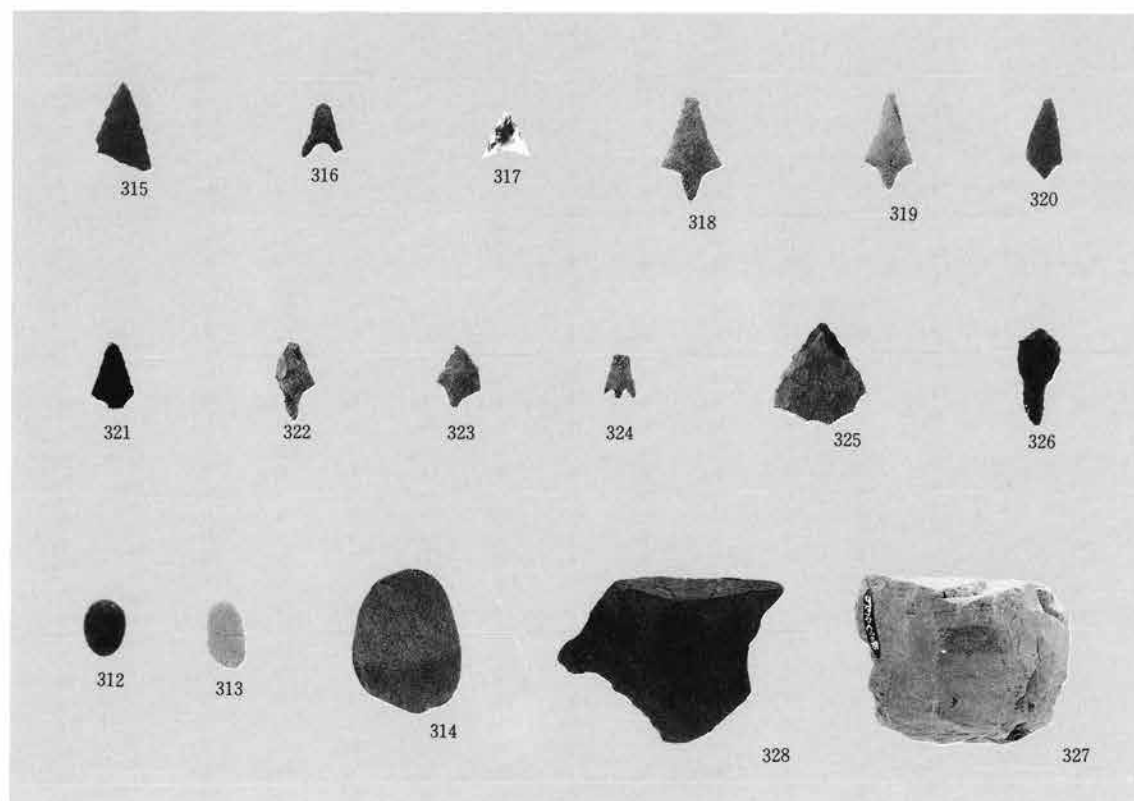
1 C区配石遺構出土石器(3)



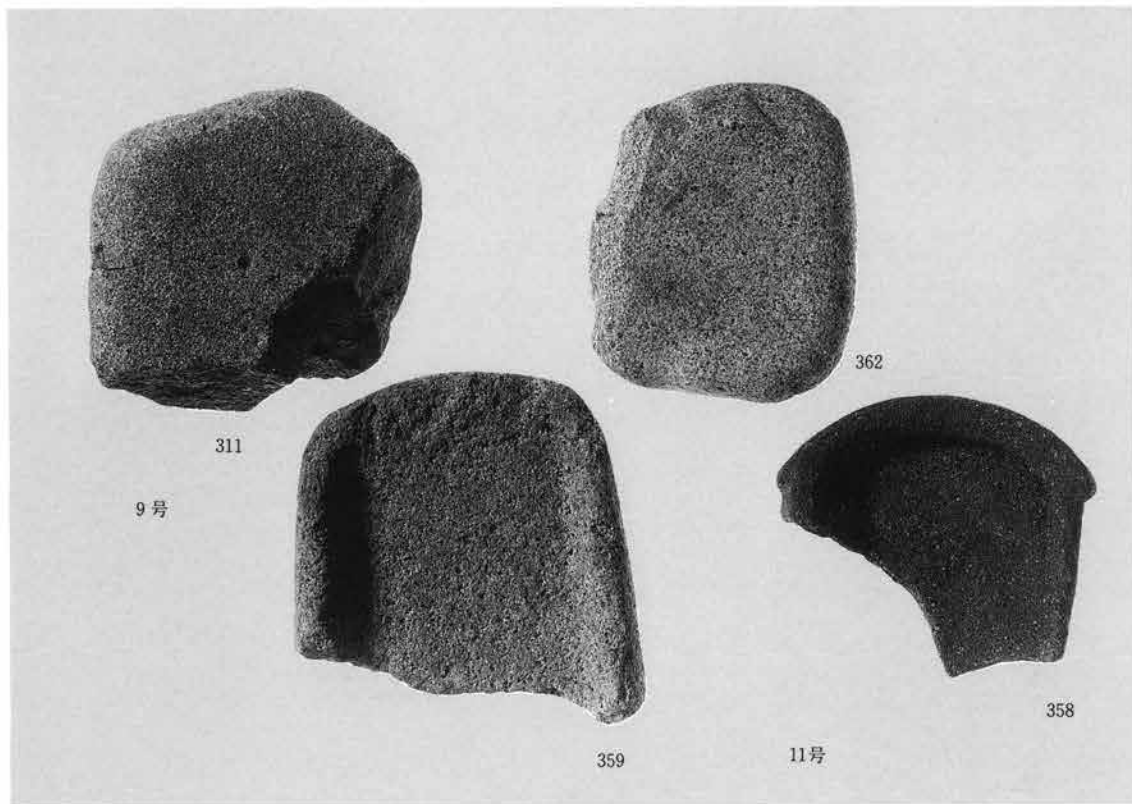
2 C区8号配石に使用された石英質岩



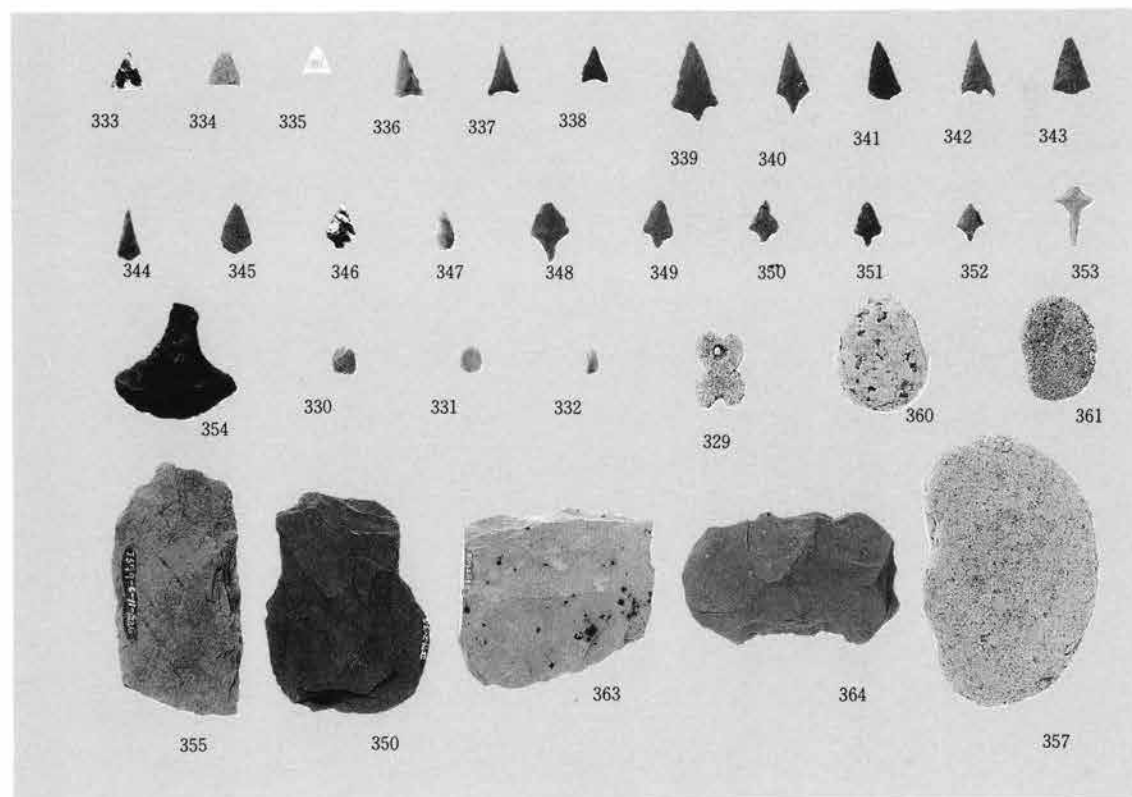
1 C区配石遗構出土石器(4)



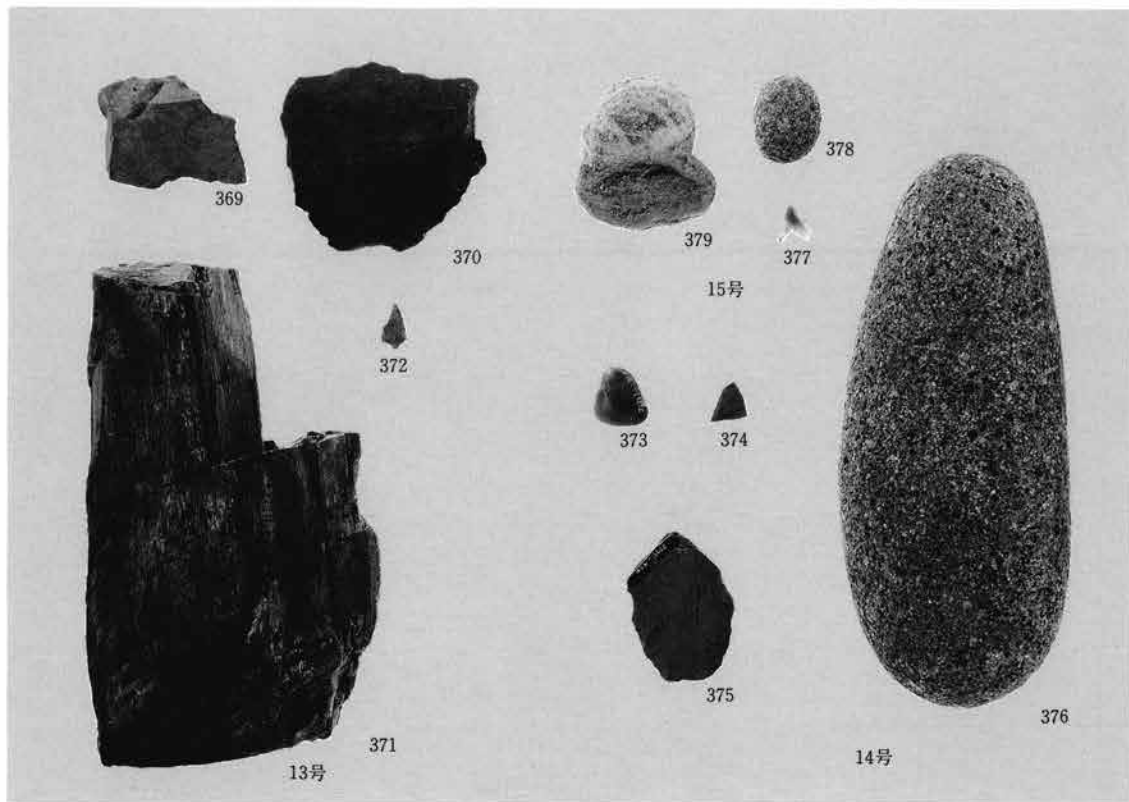
2 C区配石遗構出土石器(5)



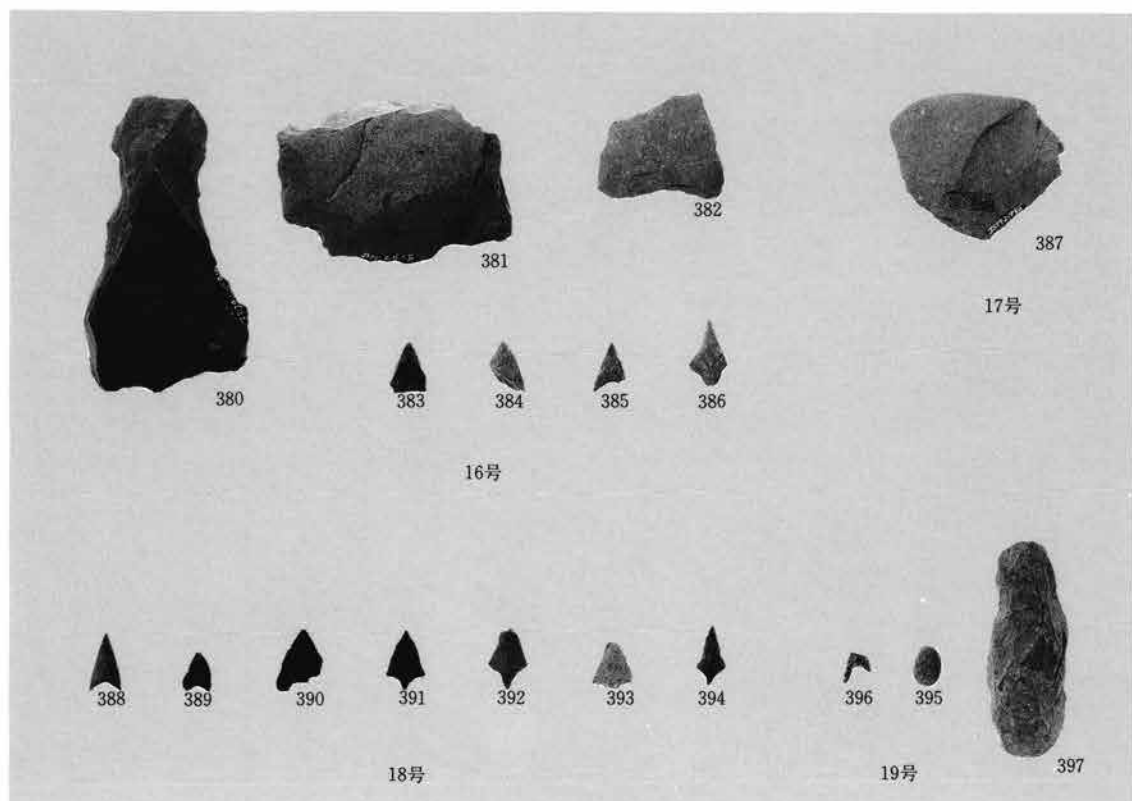
1 C区配石遺構出土石器(6)



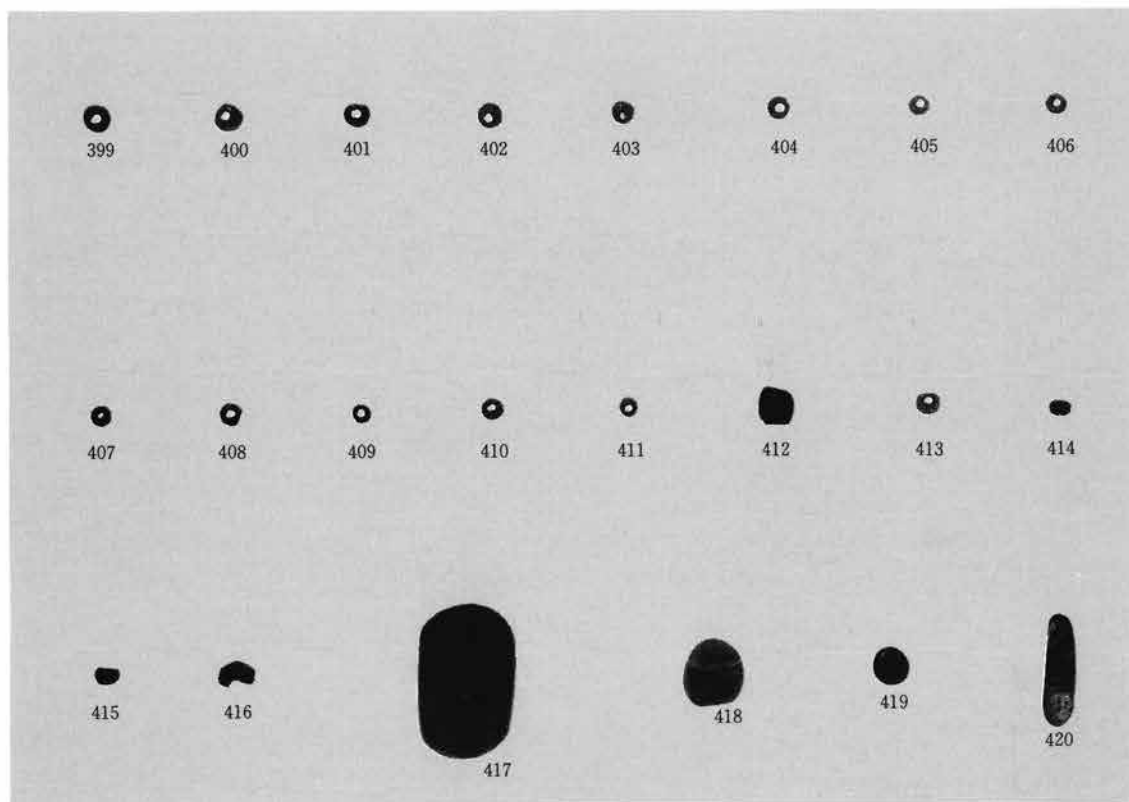
2 C区配石遺構出土石器(7)



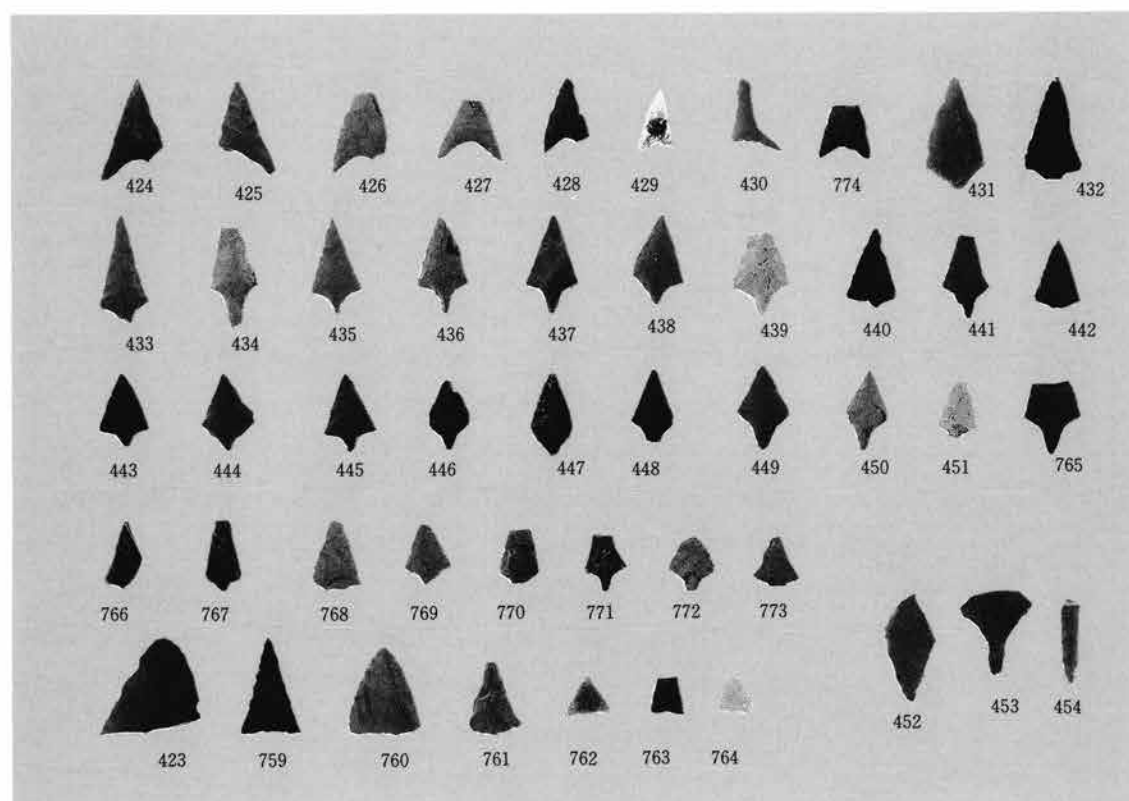
1 C区配石遺構出土石器(8)



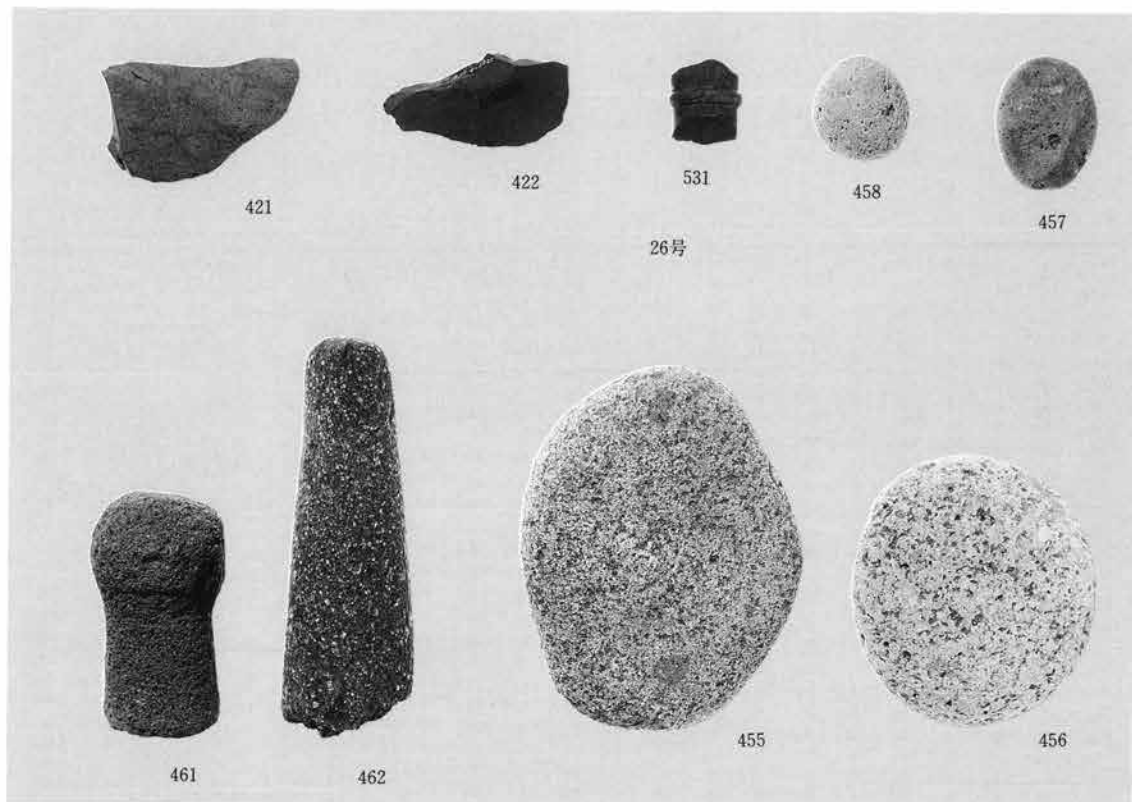
2 C区配石遺構出土石器(9)



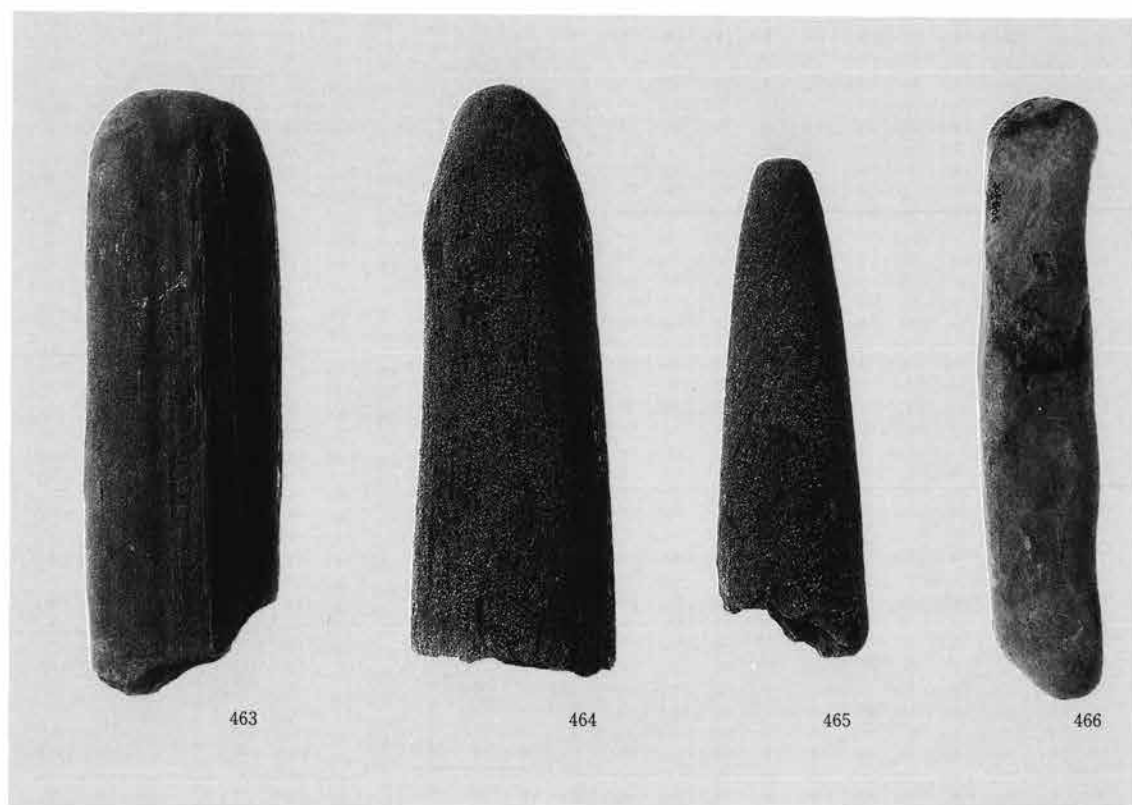
1 C区配石遗构出土石器 (10)



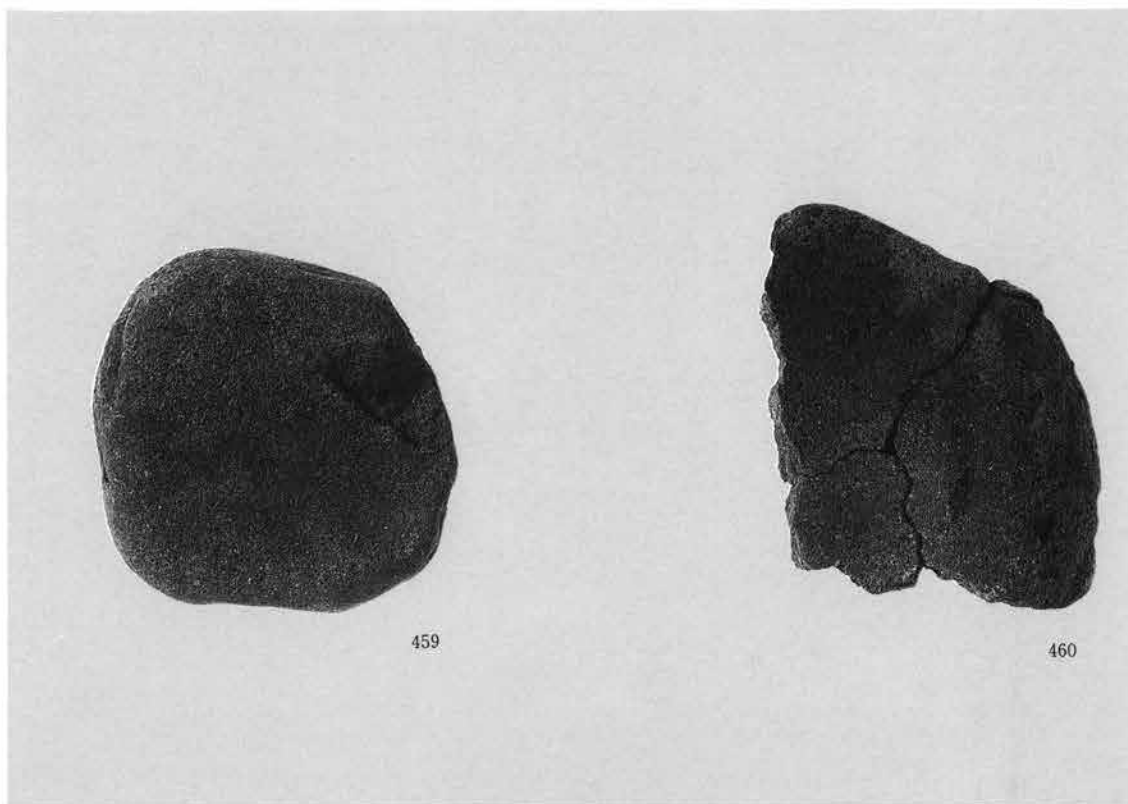
2 C区配石遗构出土石器 (11)



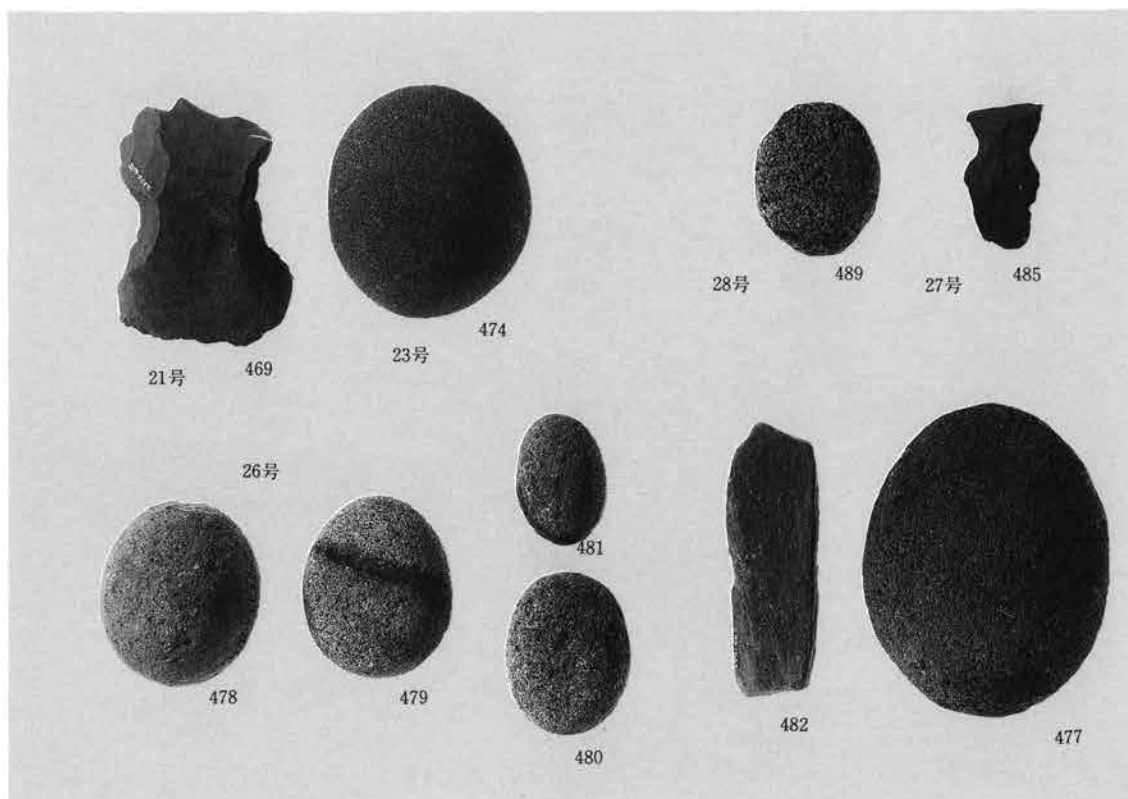
1 C区配石遺構出土石器 (12)



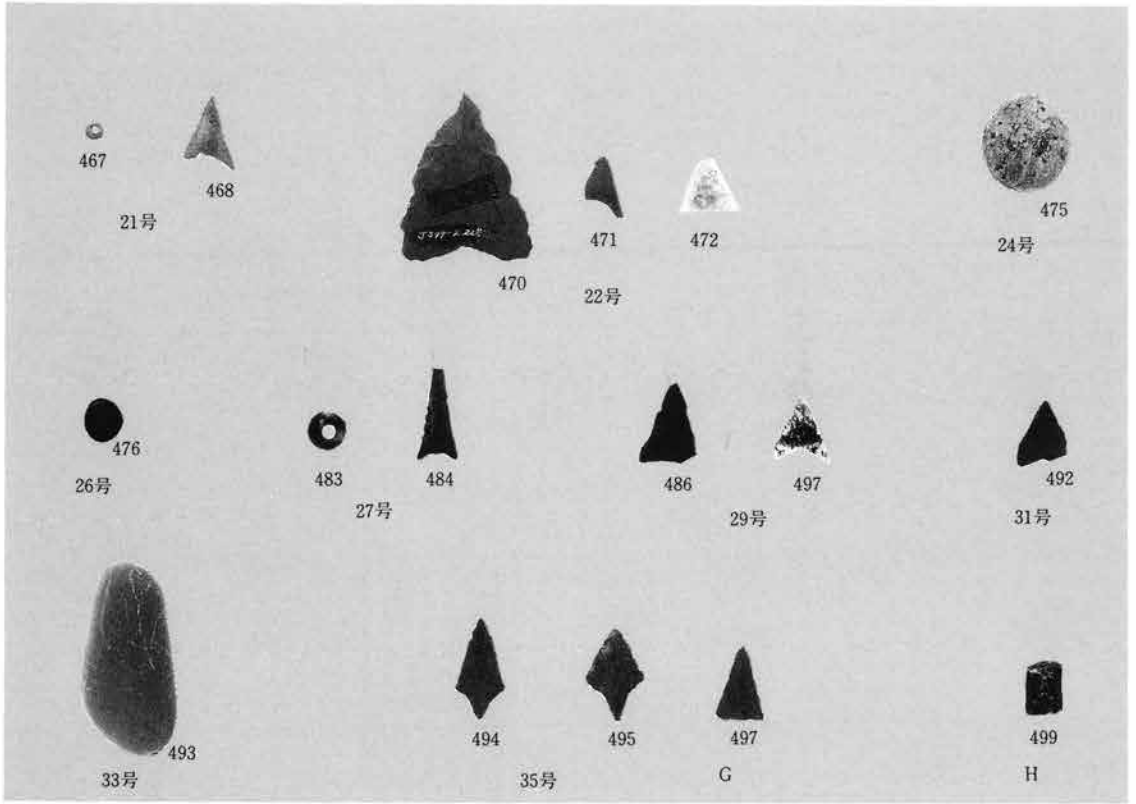
2 C区配石遺構出土石器 (13)



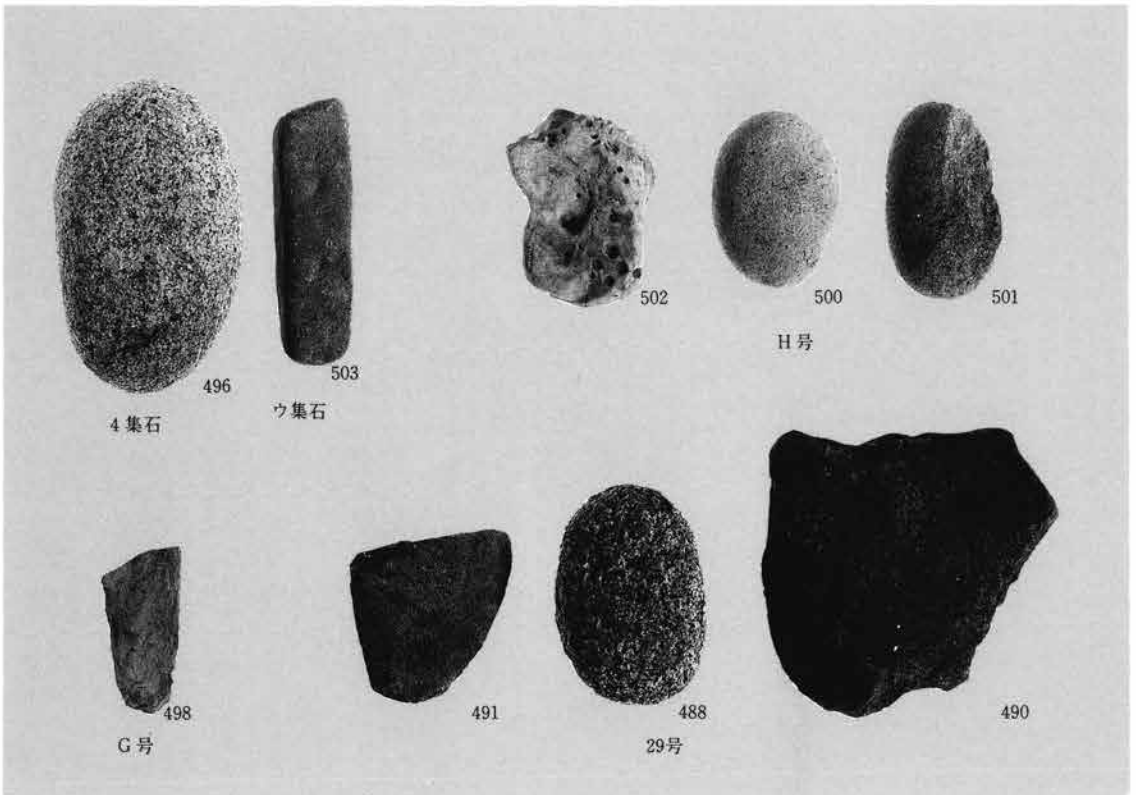
1 C区配石遺構出土石器 (14)



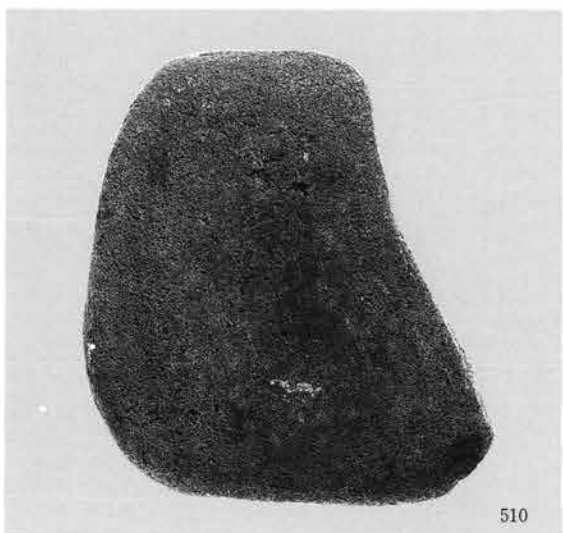
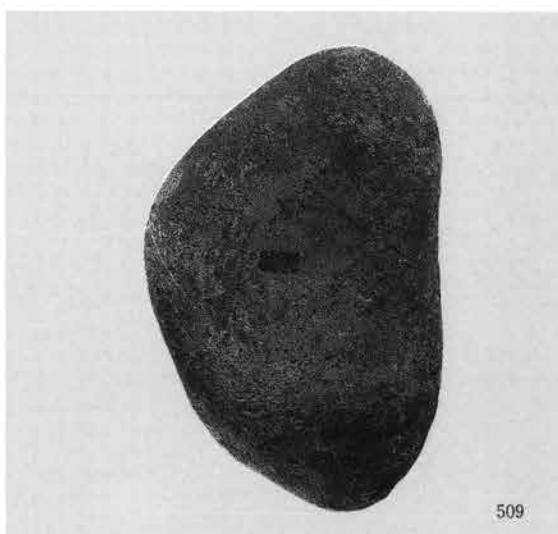
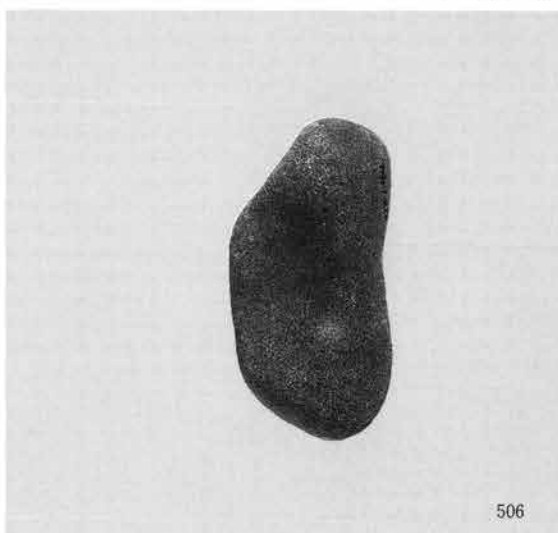
2 C区配石遺構出土石器 (15)



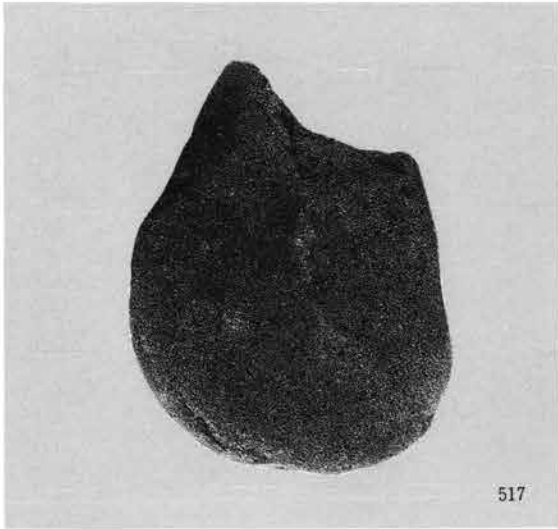
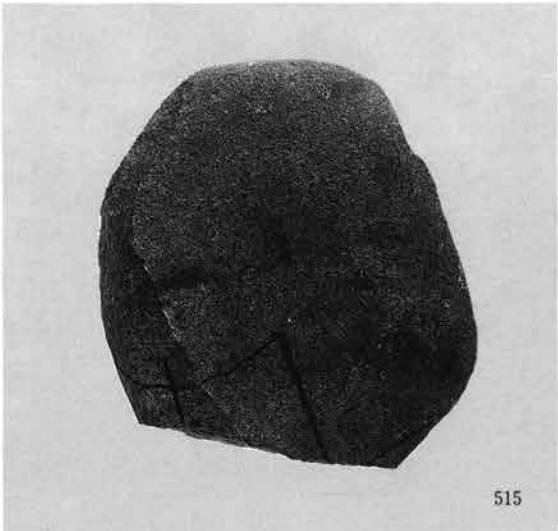
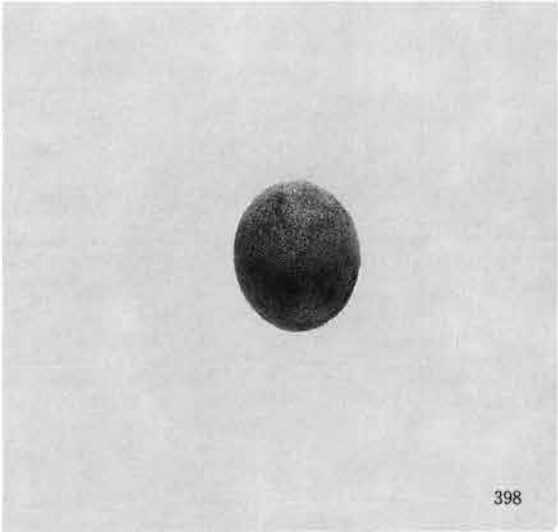
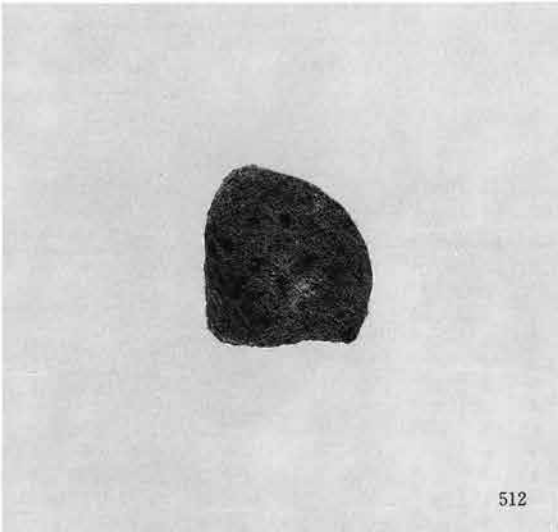
1 C区配石遺構出土石器 (16)



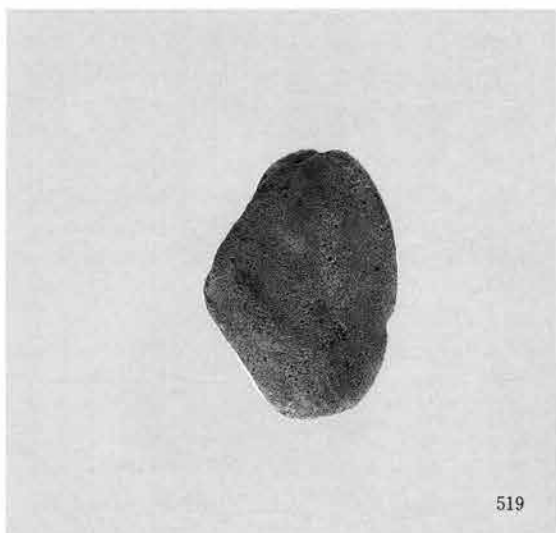
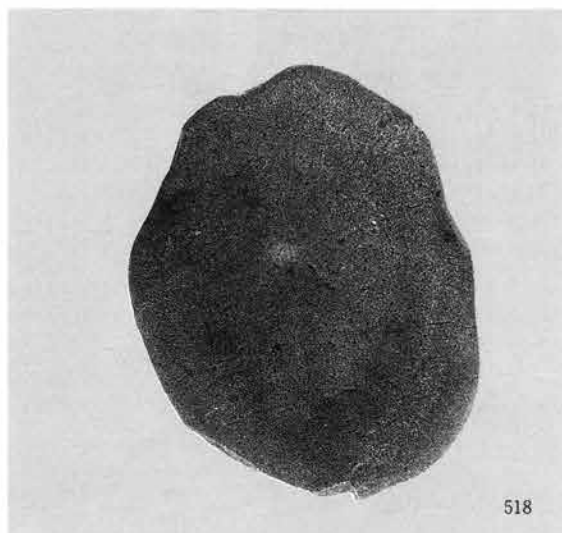
2 C区配石遺構出土石器 (17)



C区配石遺構出土石器 (18)



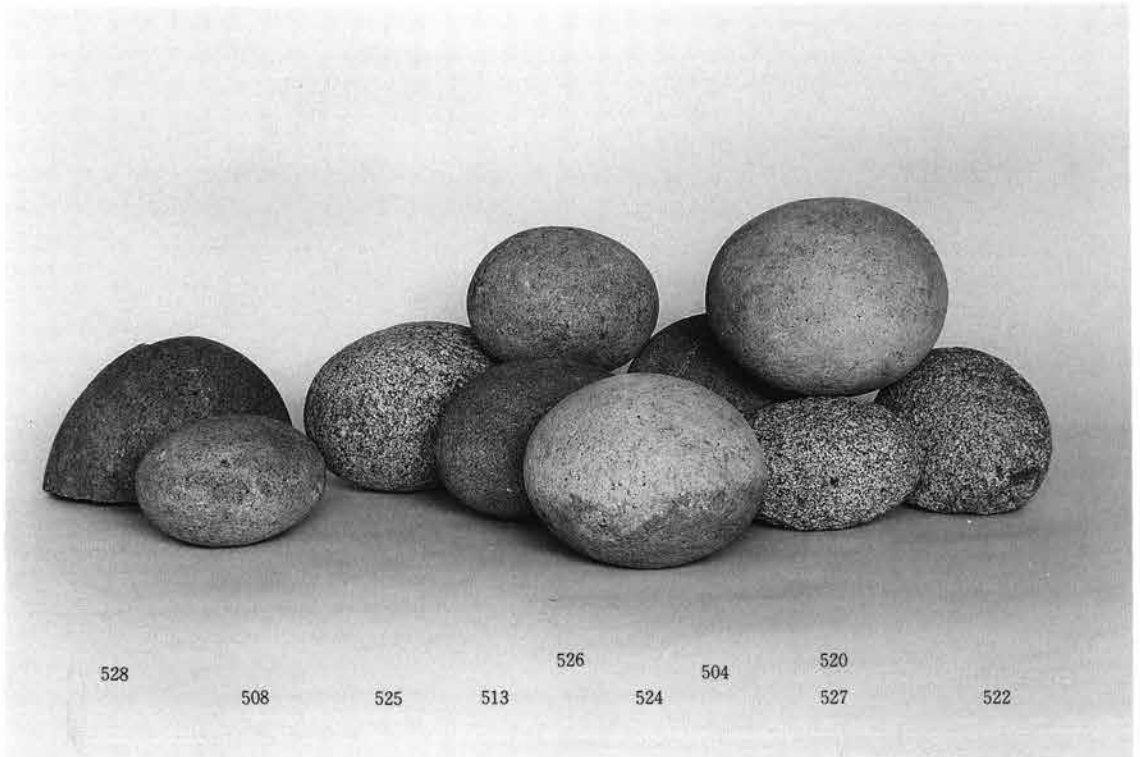
C区配石遺構出土石器 (19)



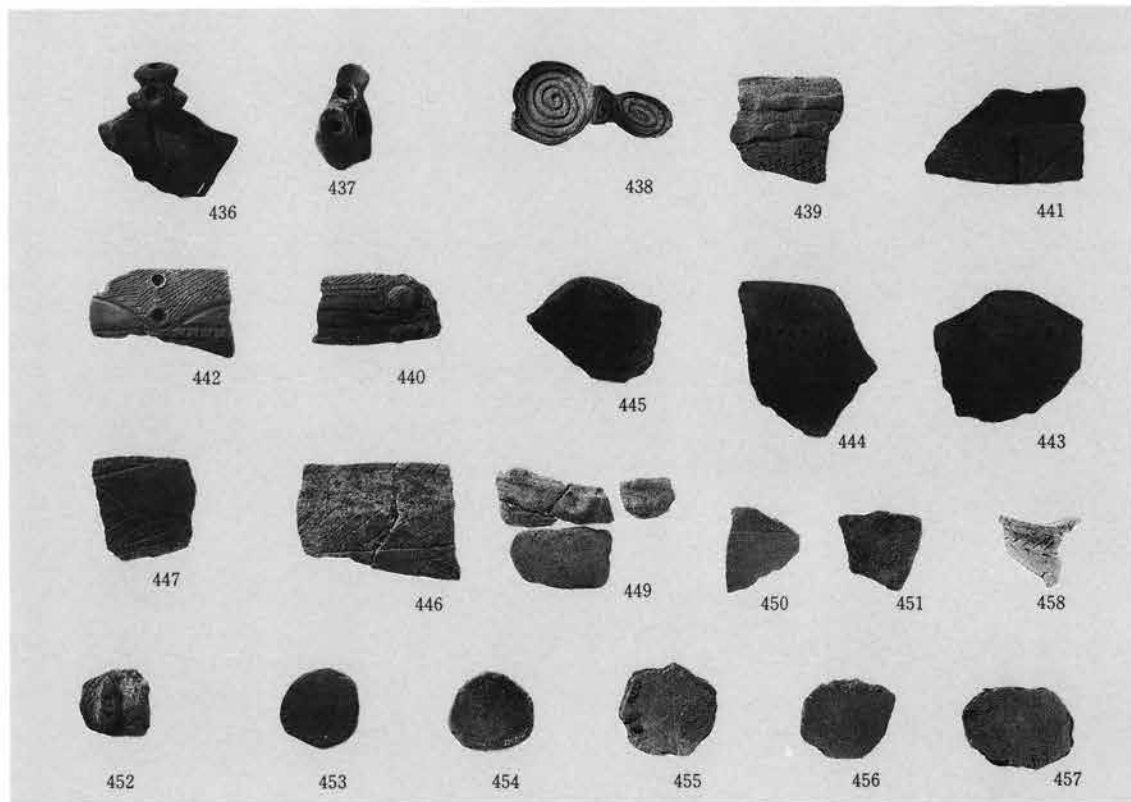
C区配石遺構出土石器 (20)



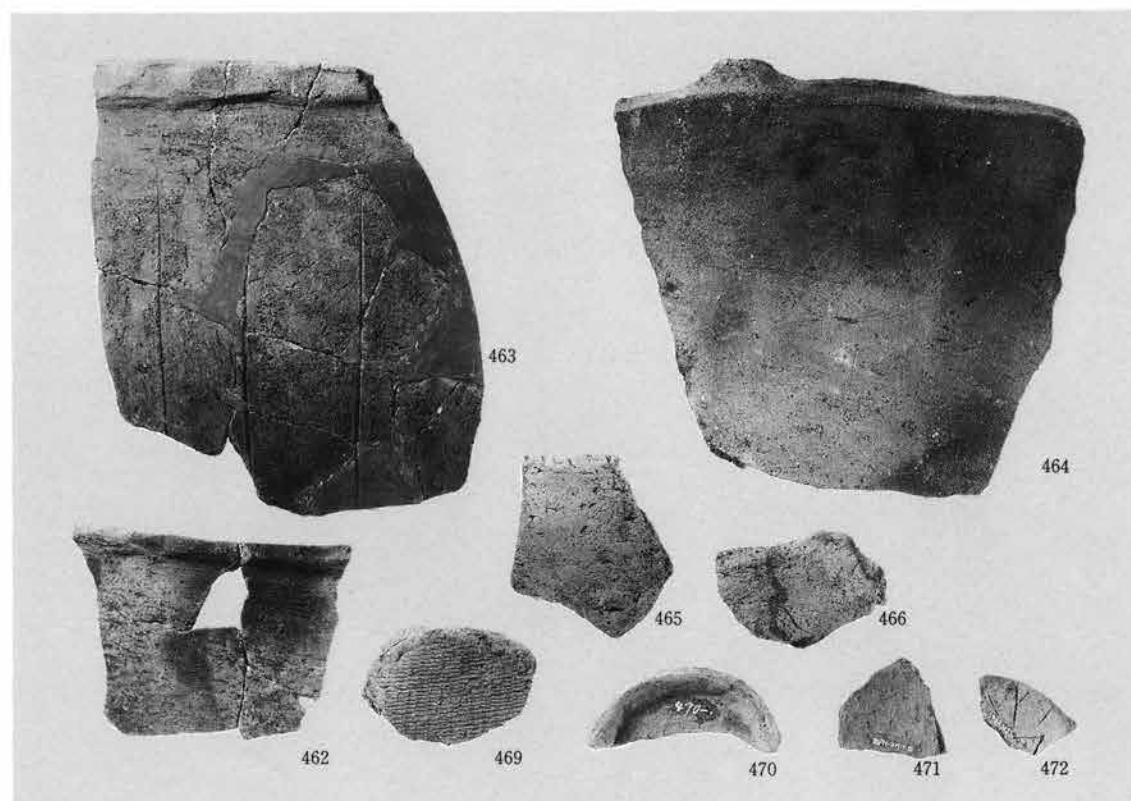
1 C区配石遺構出土石器 (21)



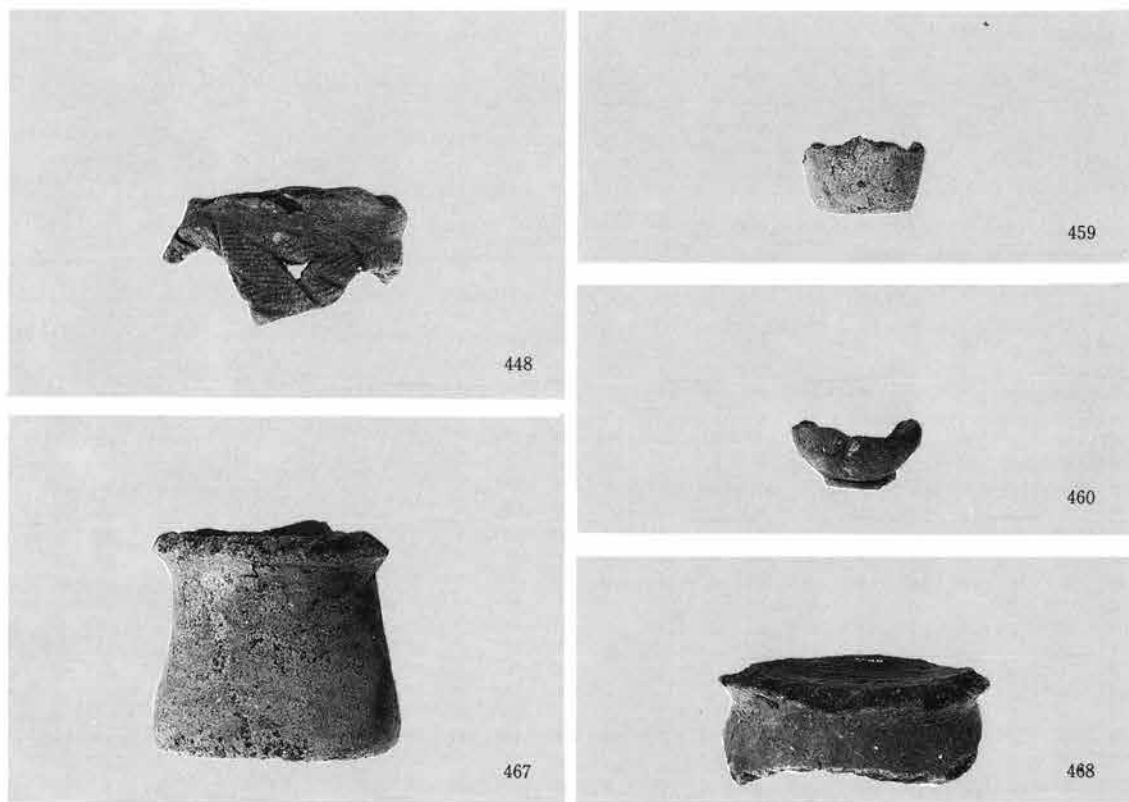
2 C区配石遺構出土石器 (22)



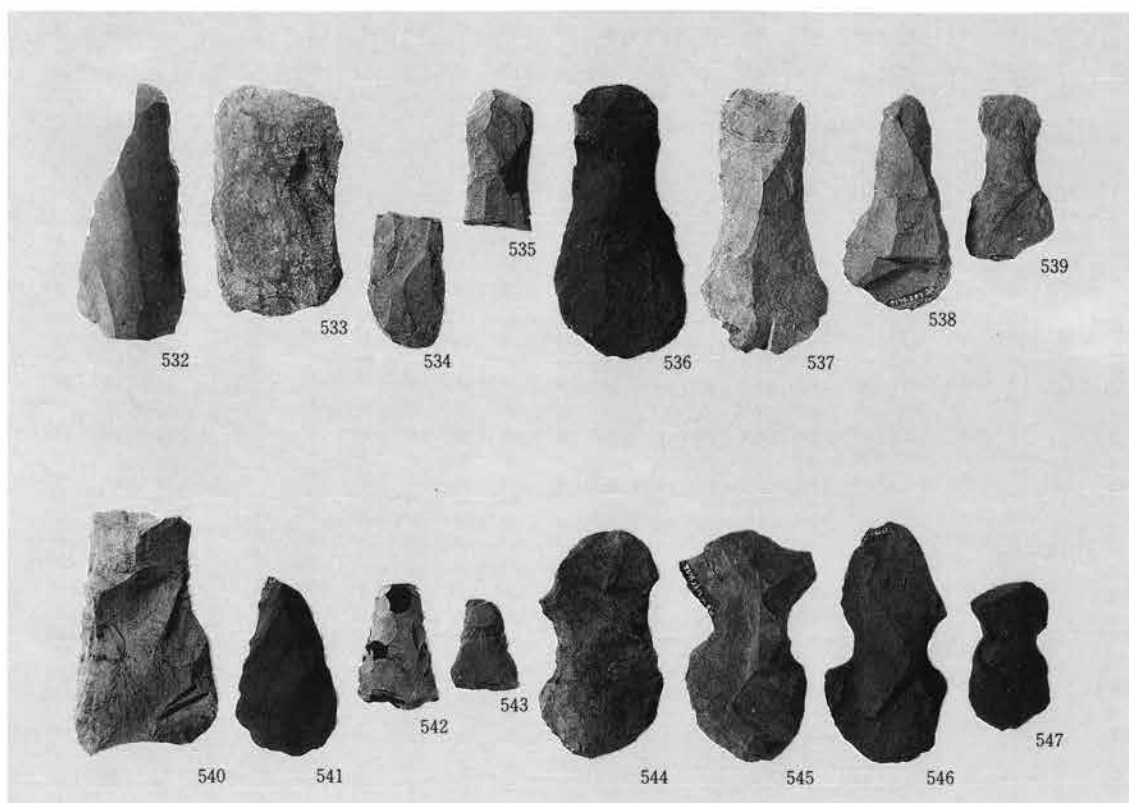
1 C区グリット出土土器 (1)



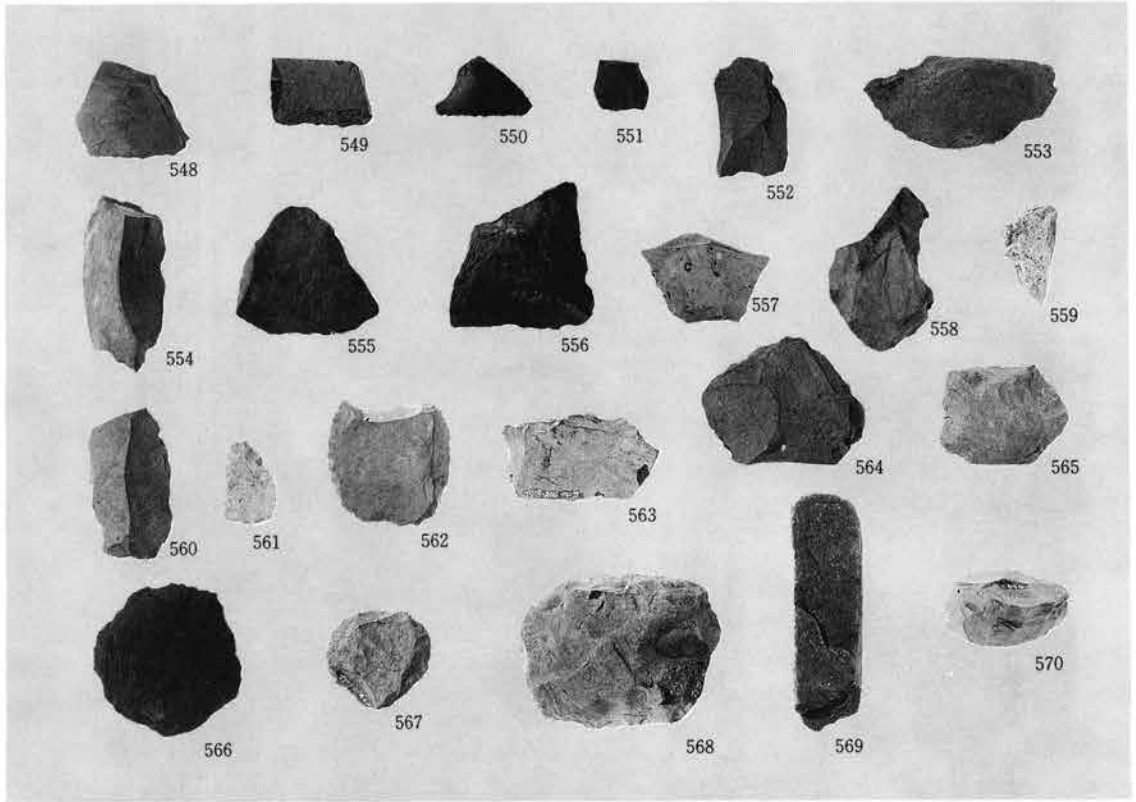
2 C区グリット出土土器 (2)



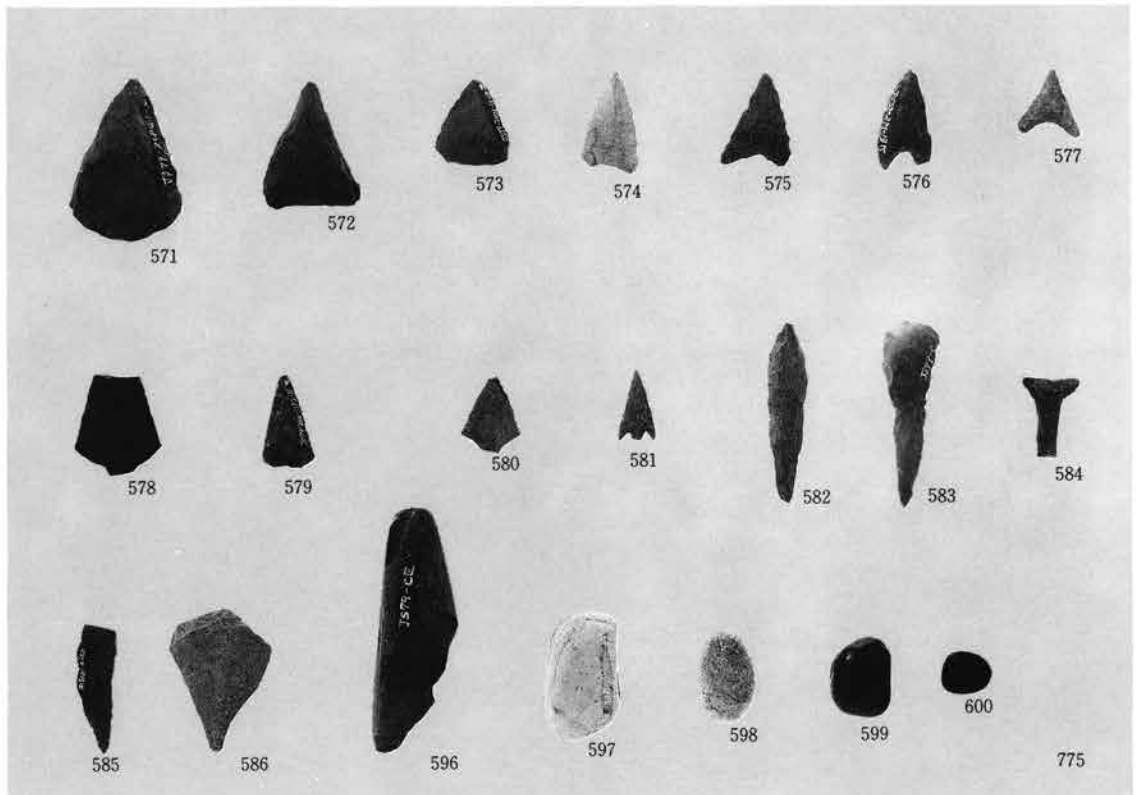
1 C区グリット出土土器 (3)



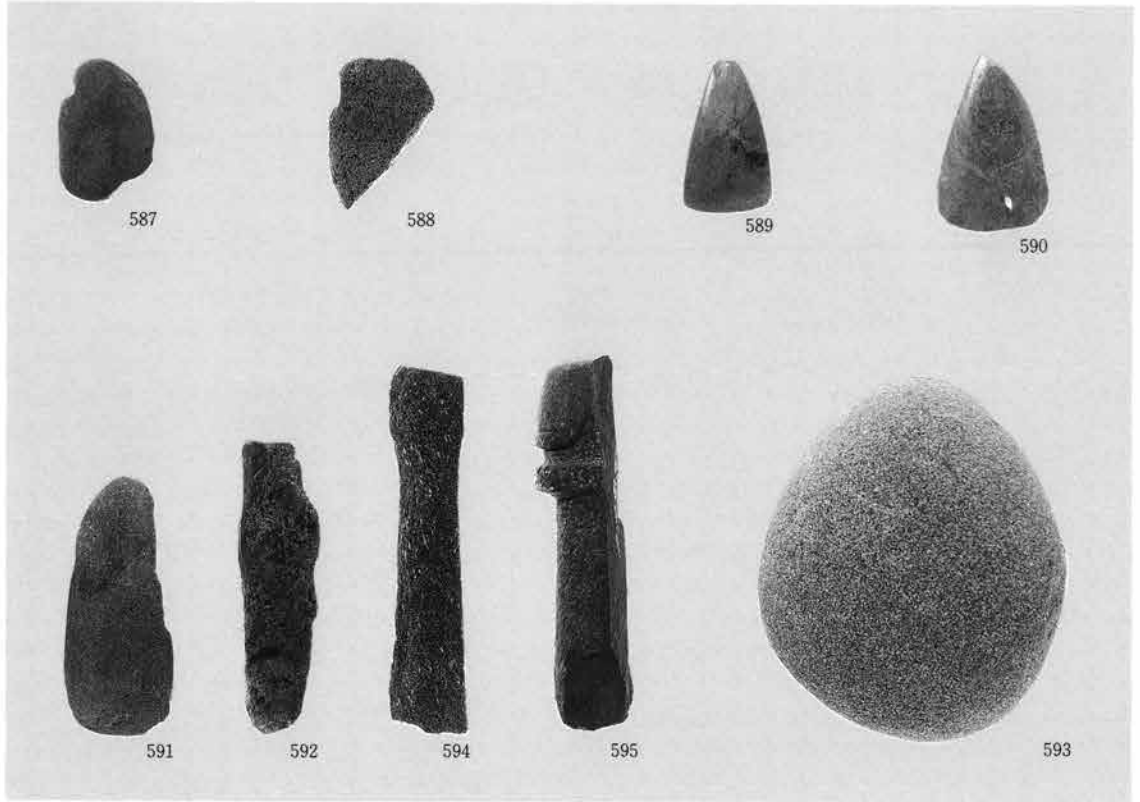
2 C区グリット出土石器 (1)



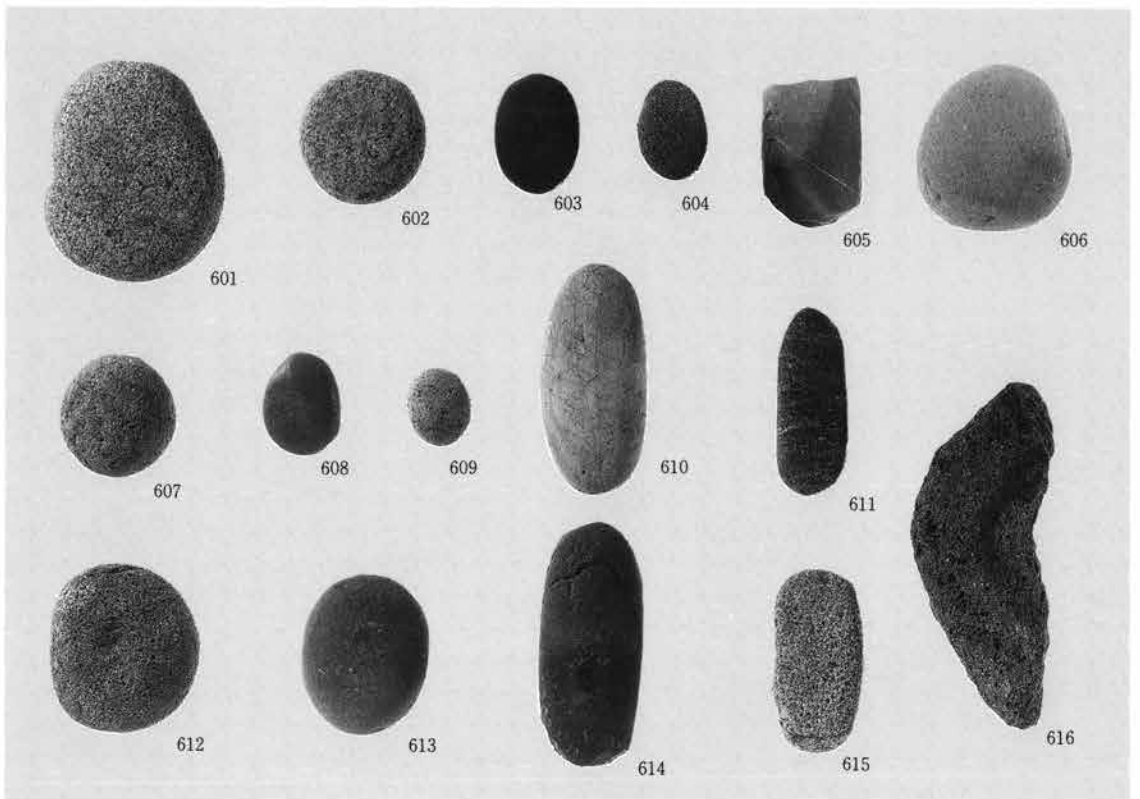
1 C区グリット出土石器 (2)



2 C区グリット出土石器 (3)



1 C区グリット出土石器(4)



2 C区グリット出土石器(5)



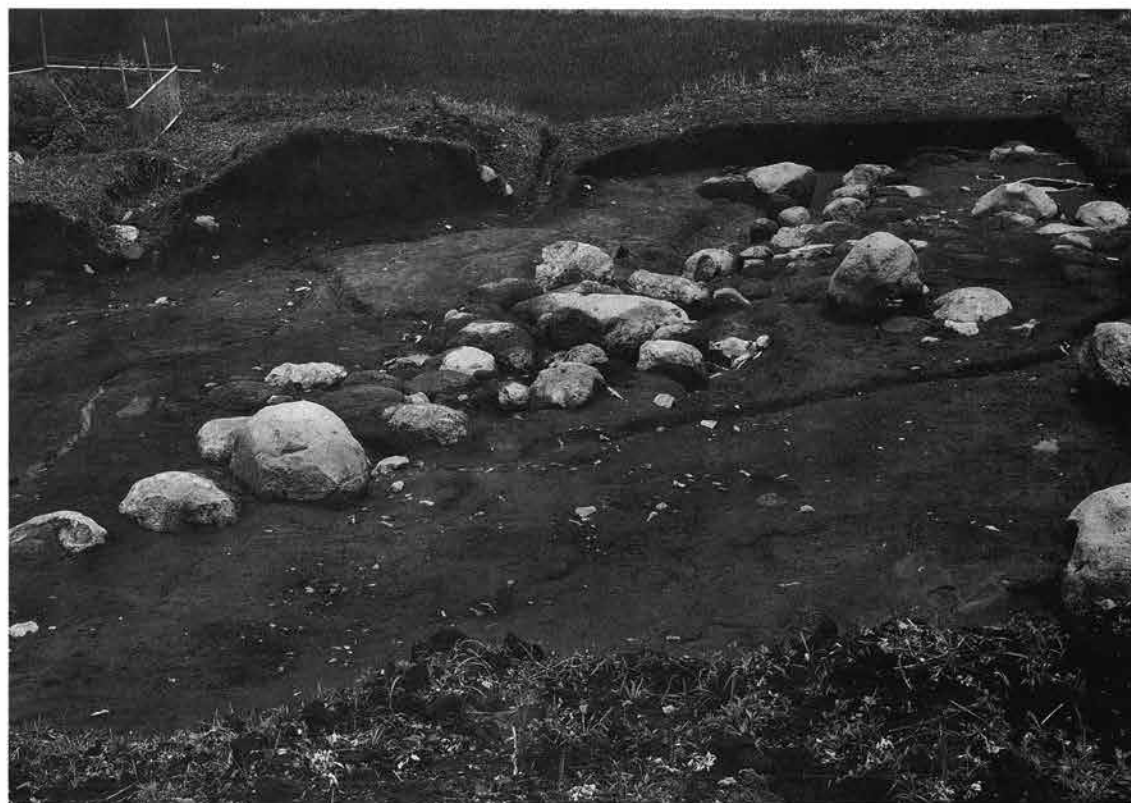
1 D区全景 (南より)



2 D区全景 (西より)



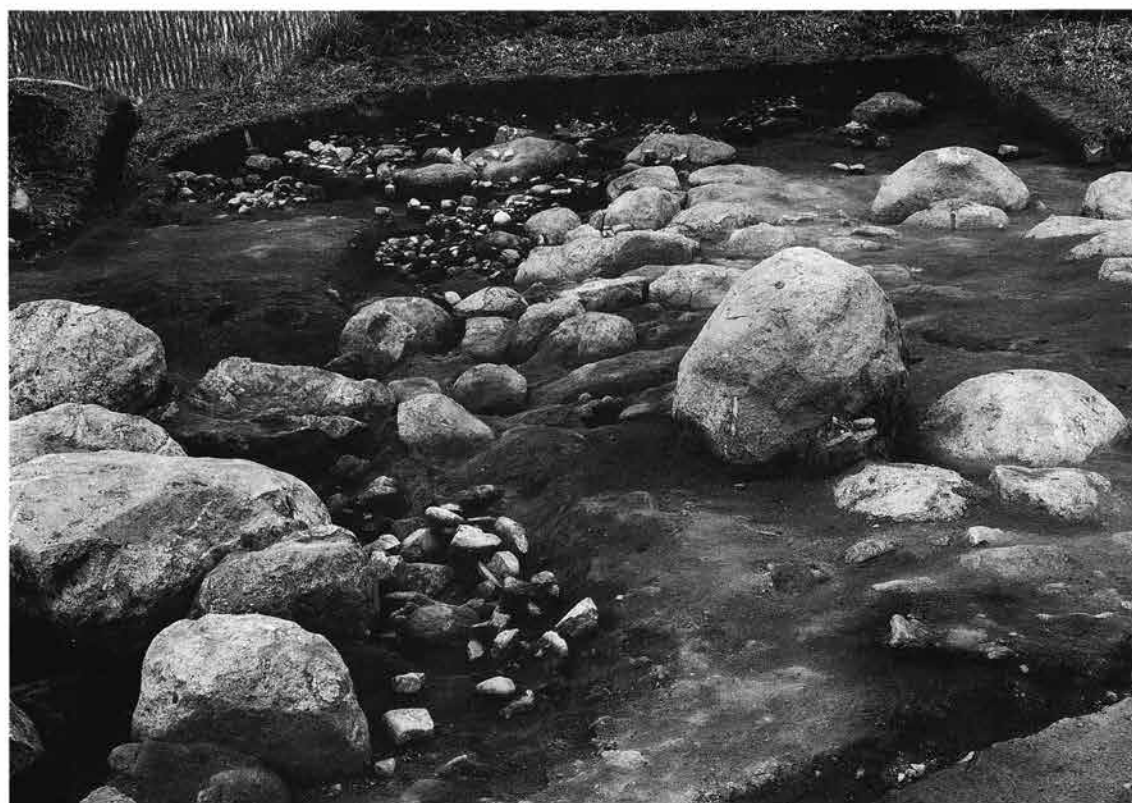
1 D区溝状遺構（東より）



2 D区溝状遺構（西より）



1 D区溝状遺構遺物出土状態 (1) (東より)



2 D区溝状遺構遺物出土状態 (2) (西より)



1 D区溝状遺構遺物出土状態 (3) (南より)



2 D区溝状遺構遺物出土状態 (4) (南より)



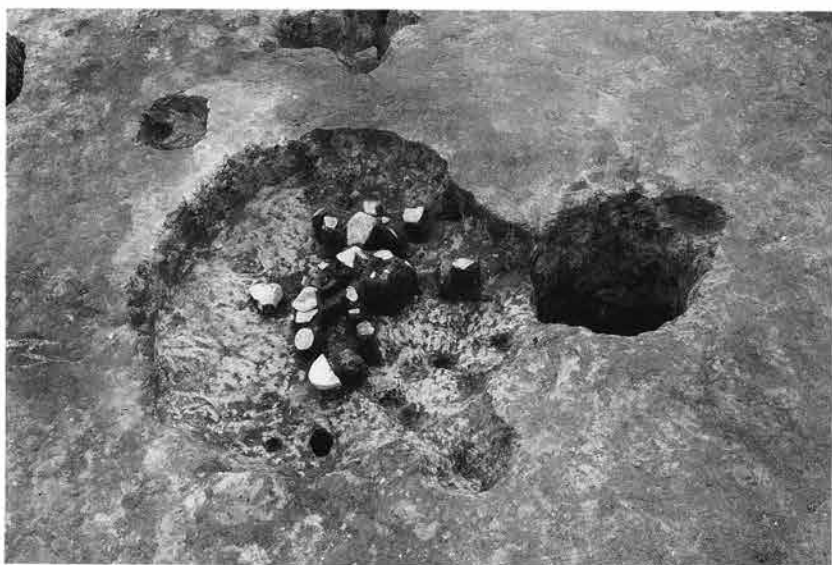
1 D区1号配石土坑（東より）



2 D区2号土坑（東より）



1 D区1号土坑
(東より)



2 D区4・11号土坑
(北より)



3 D区5号土坑
(南西より)

1 D区6号土坑
(北より)



2 D区7号土坑
(南西より)

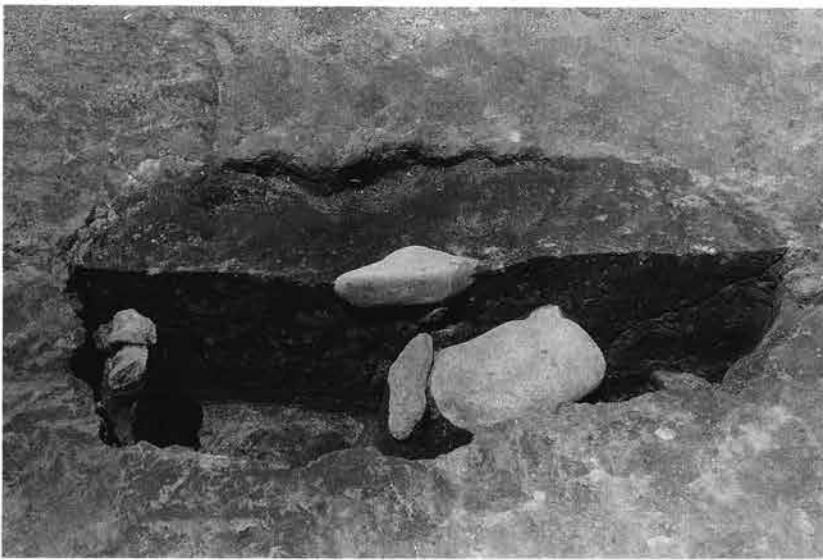


3 D区8号土坑
(南西より)





1 D区9・10号土坑
(南より)



2 D区12号土坑土層
断面 (南東より)



3 D区13号土坑
(北東より)

1 D区15号土坑
(南より)



2 D区16号土坑
(南より)

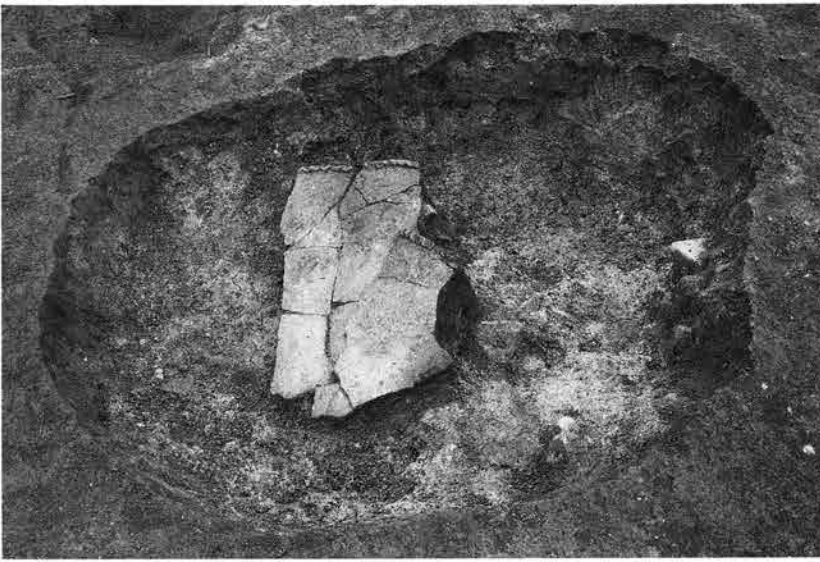


2 D区16号土坑注口付
双口土器出土状態
(北西より)





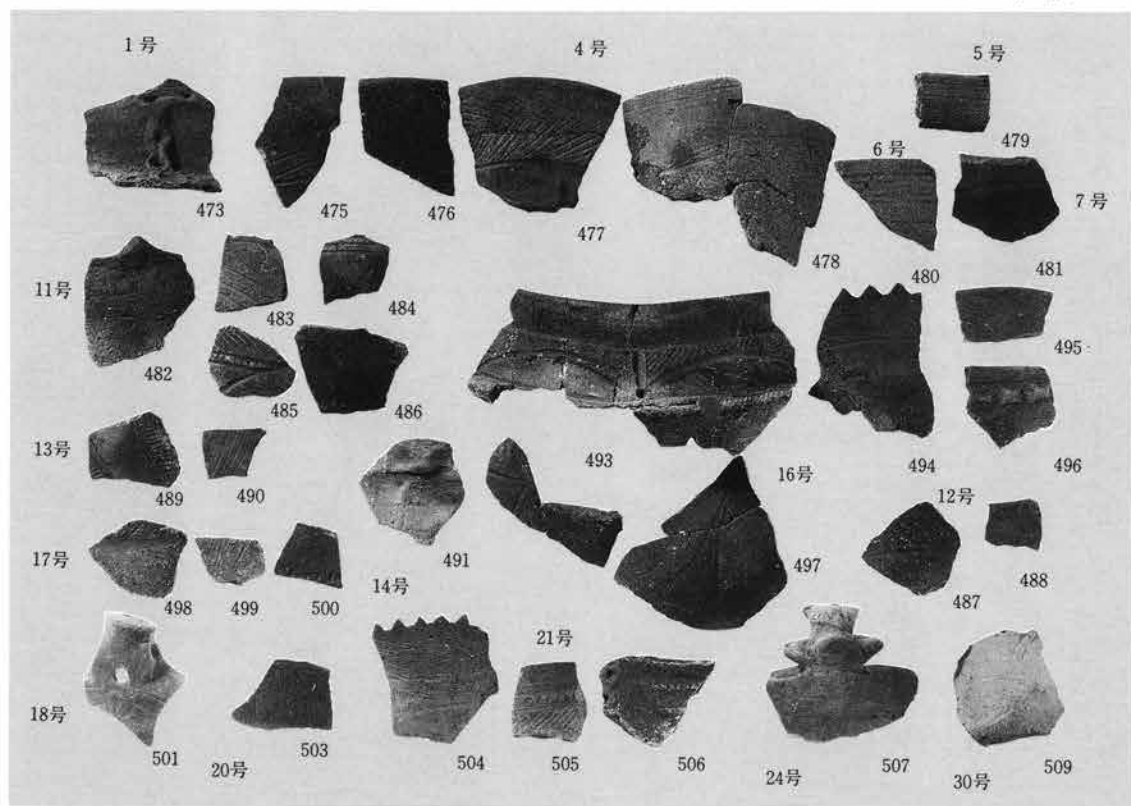
1 D区18号土坑
(南西より)



2 D区19号土坑
(西より)



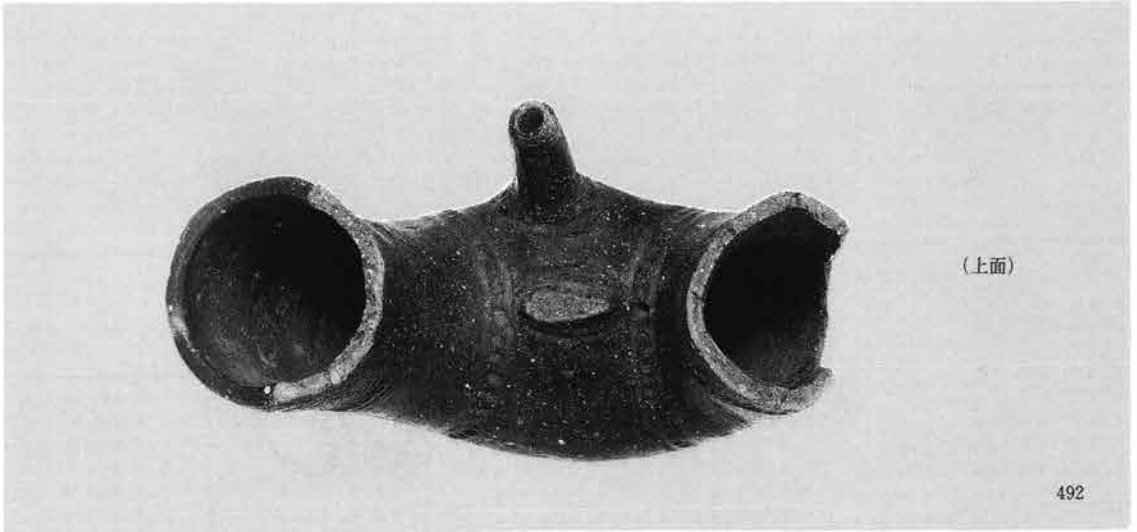
3 D区25号土坑
(南西より)



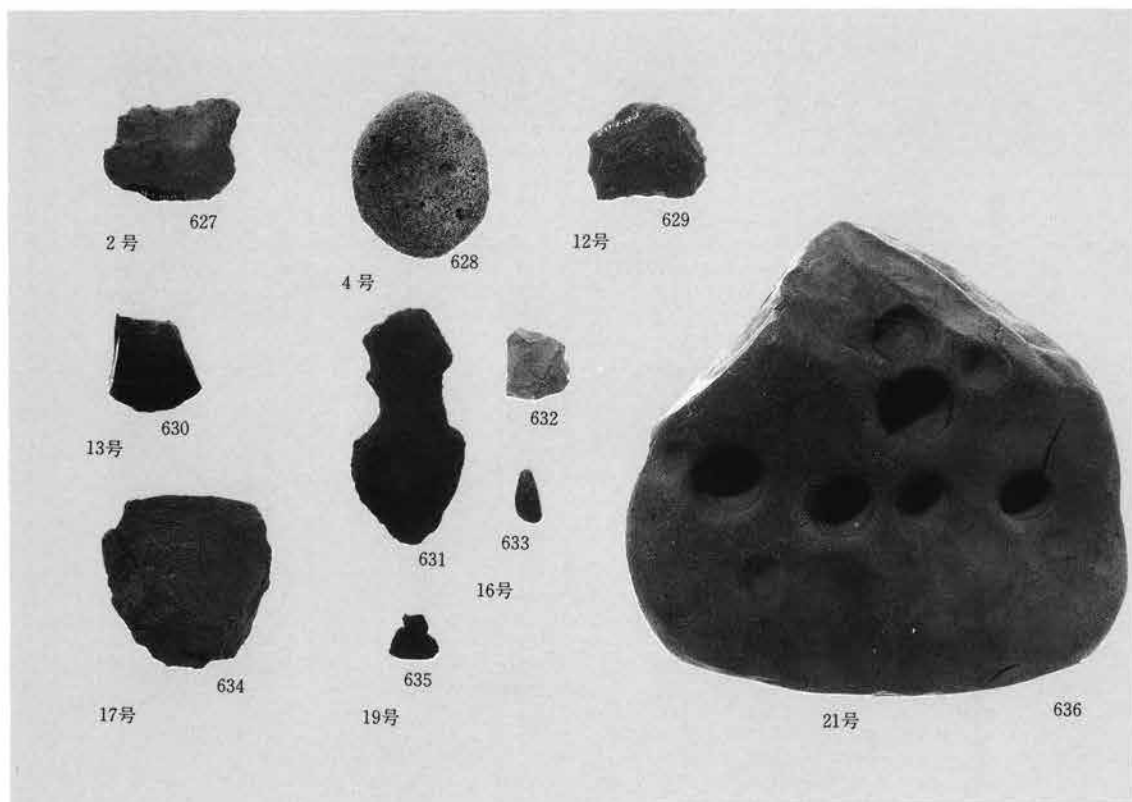
1 D区土坑出土土器 (1)



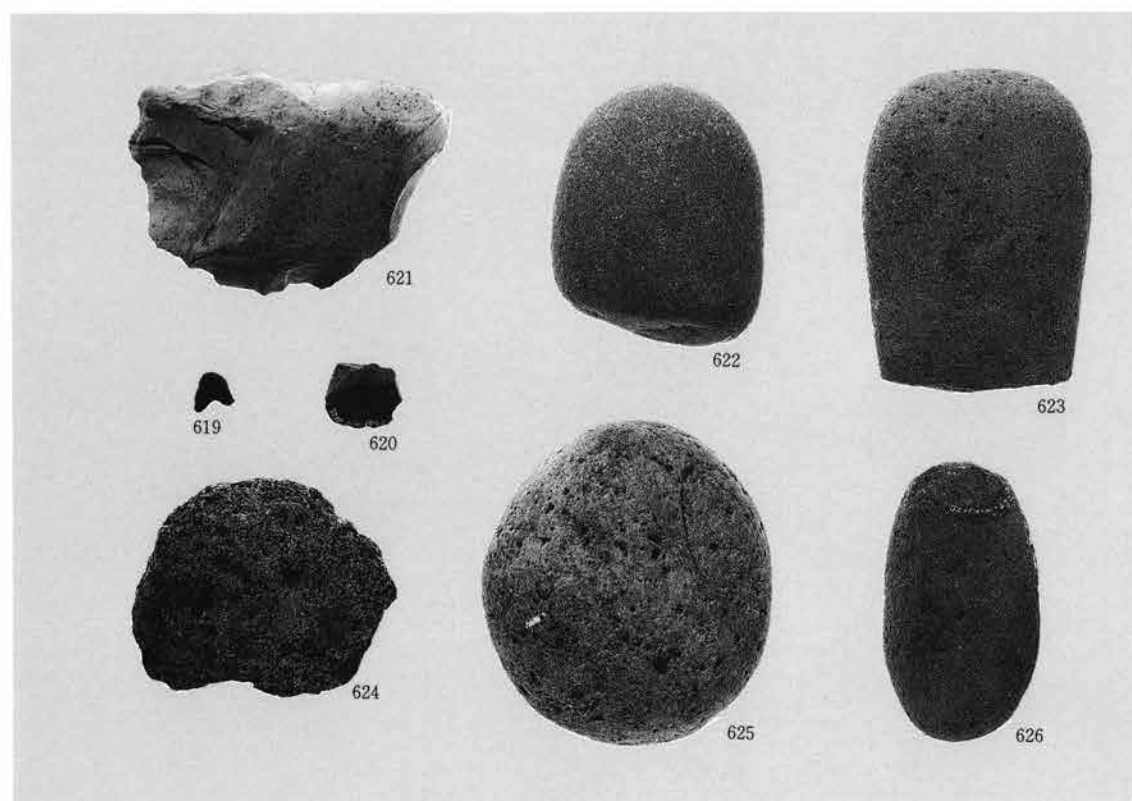
2 D区土坑出土土器 (2)



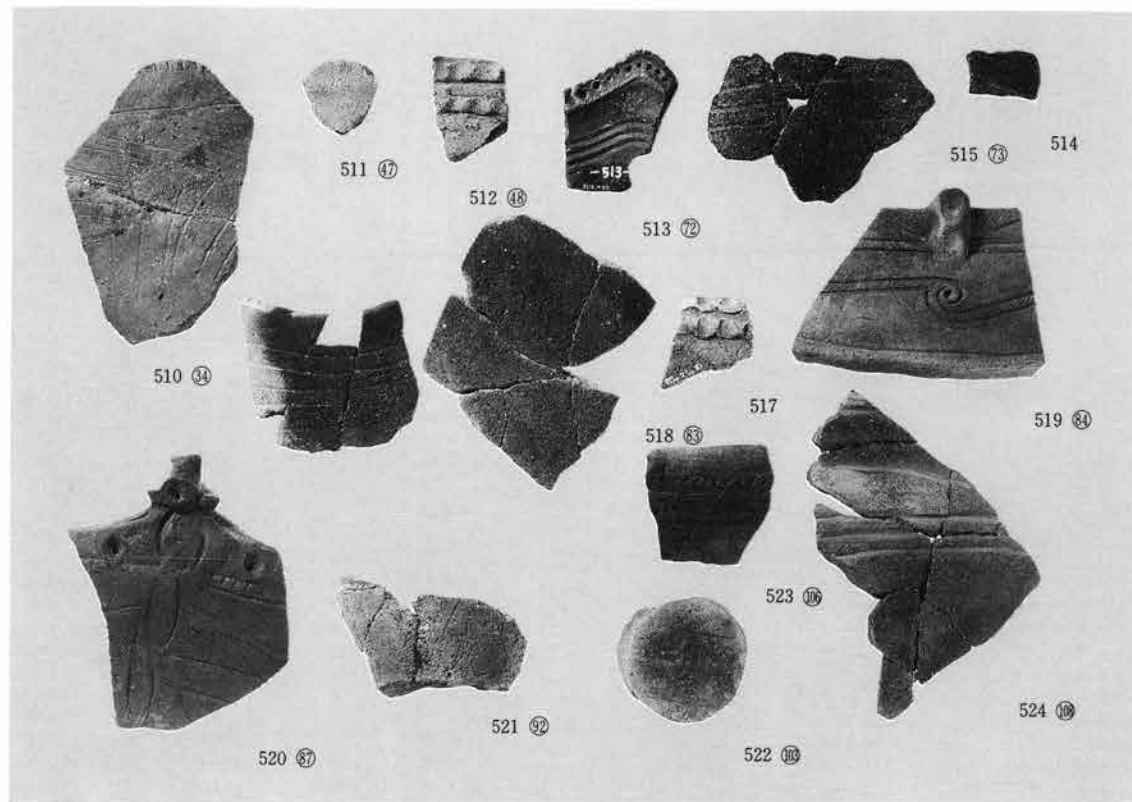
D区16号土坑出土の注口付双口土器



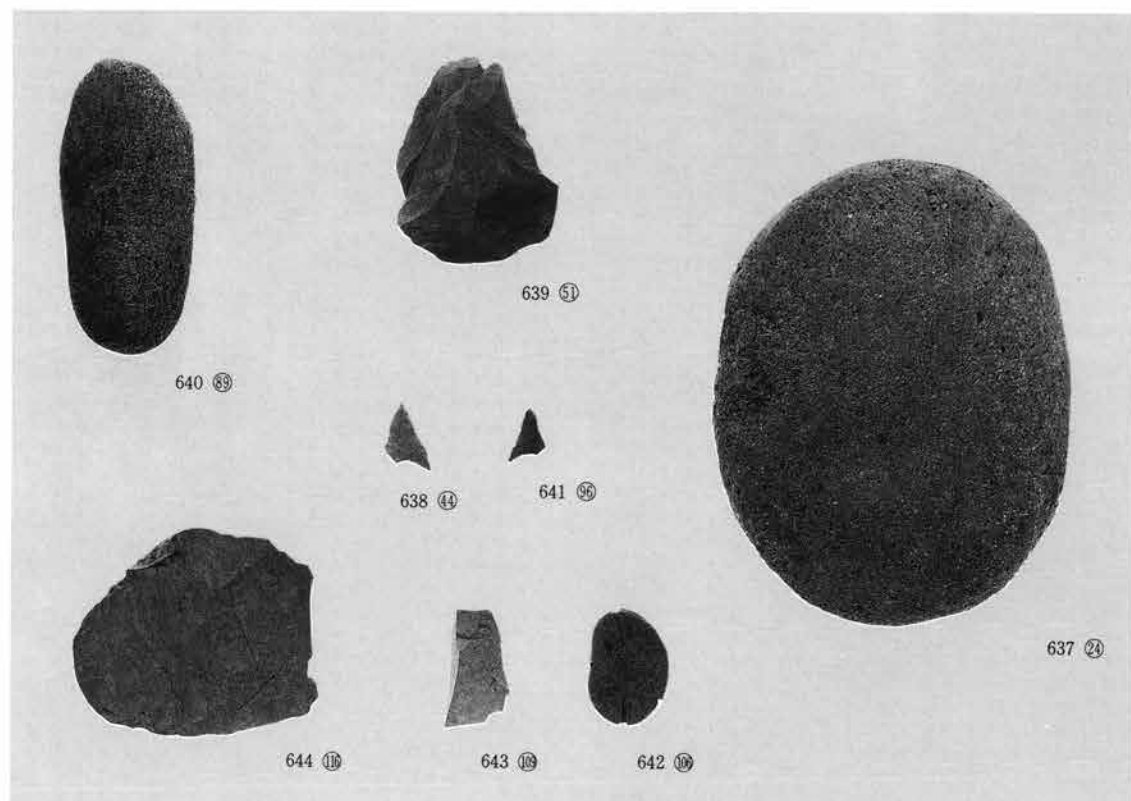
1 D区土坑出土石器(1)



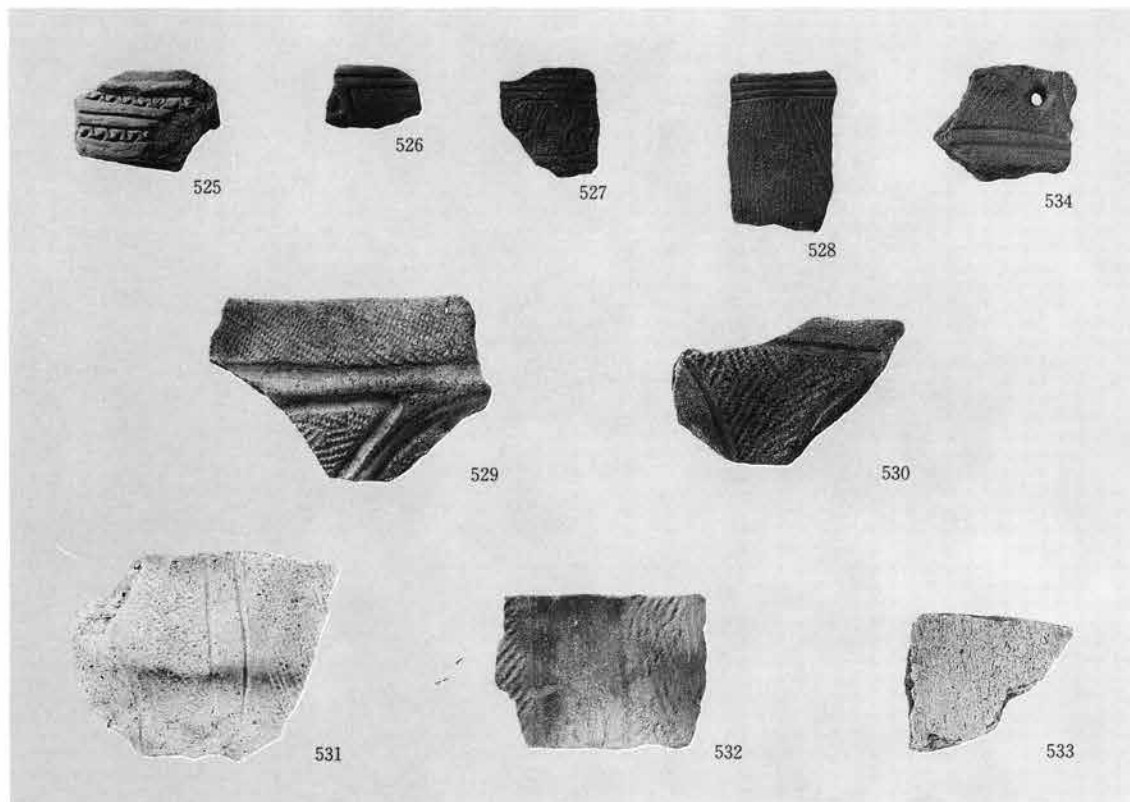
2 D区1号配石土坑出土石器



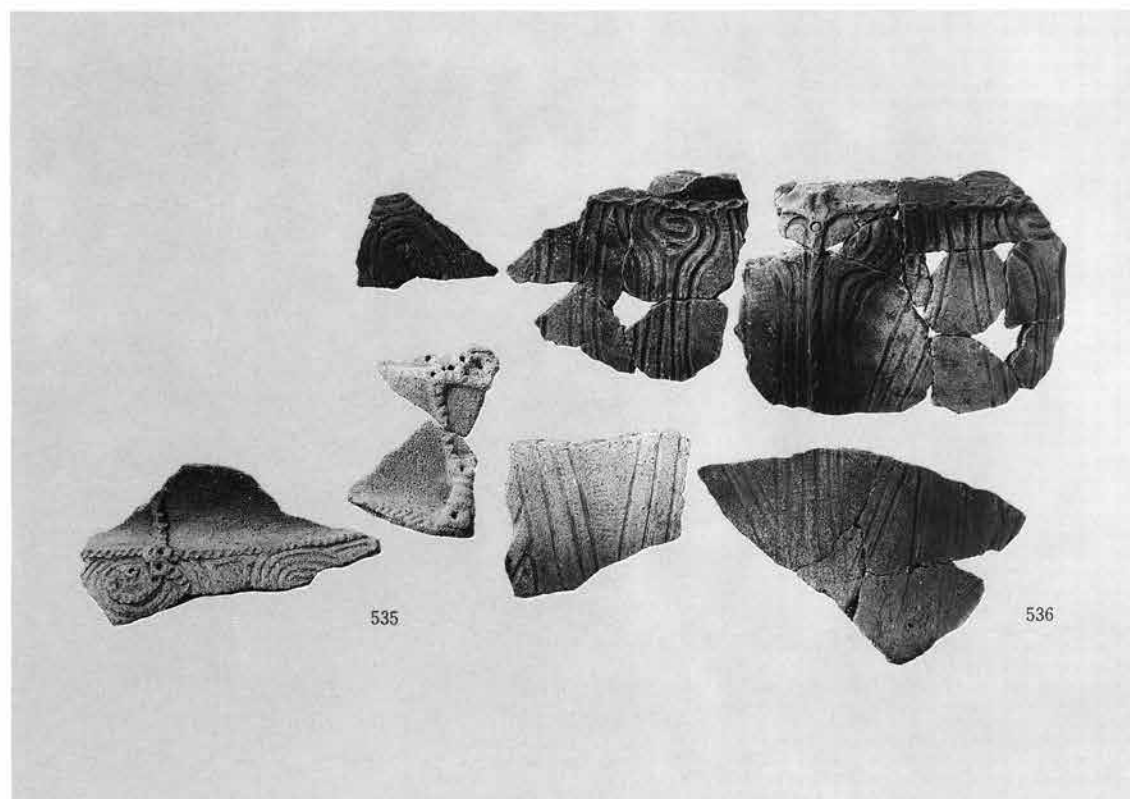
1 D区柱穴出土土器



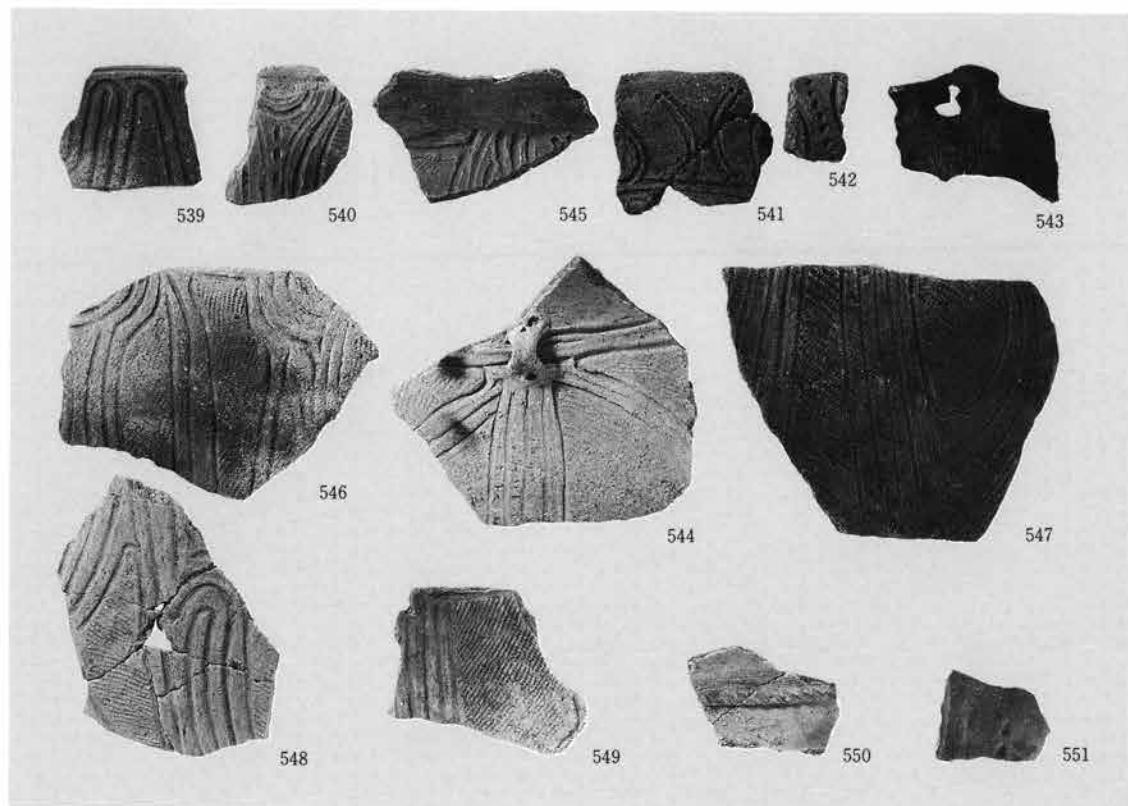
2 D区柱穴出土石器



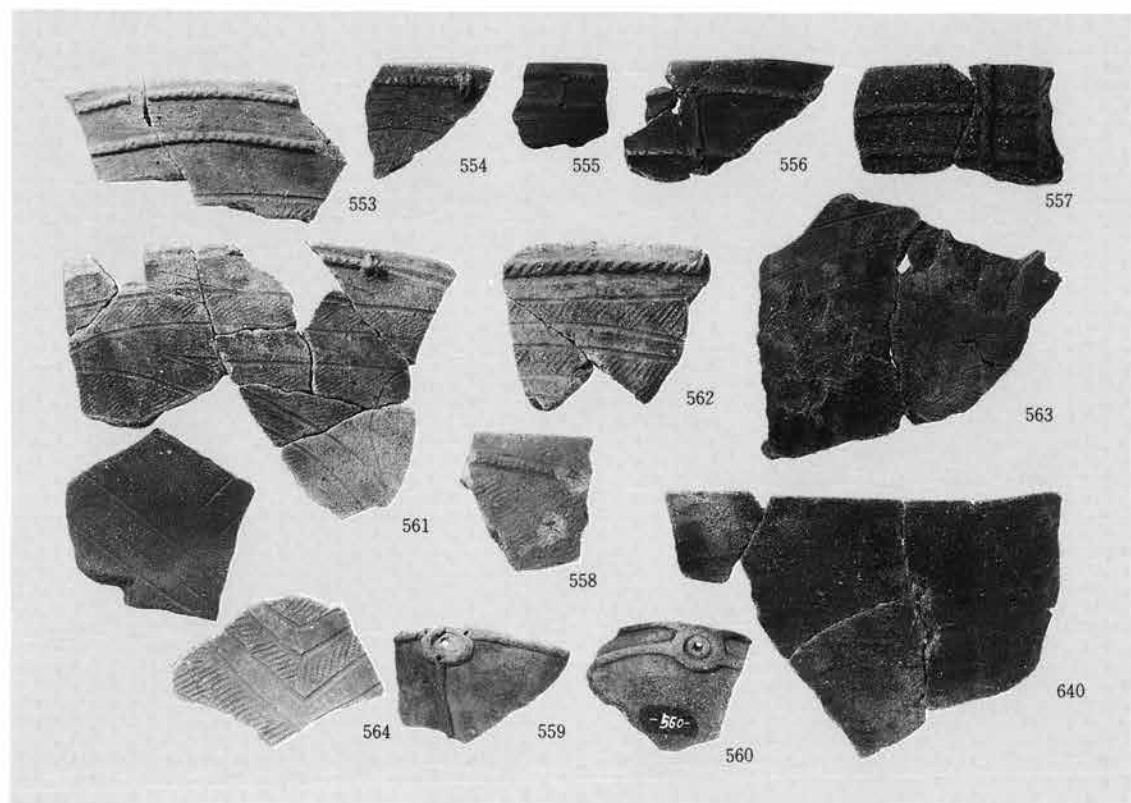
1 D区グリット出土土器 (1)



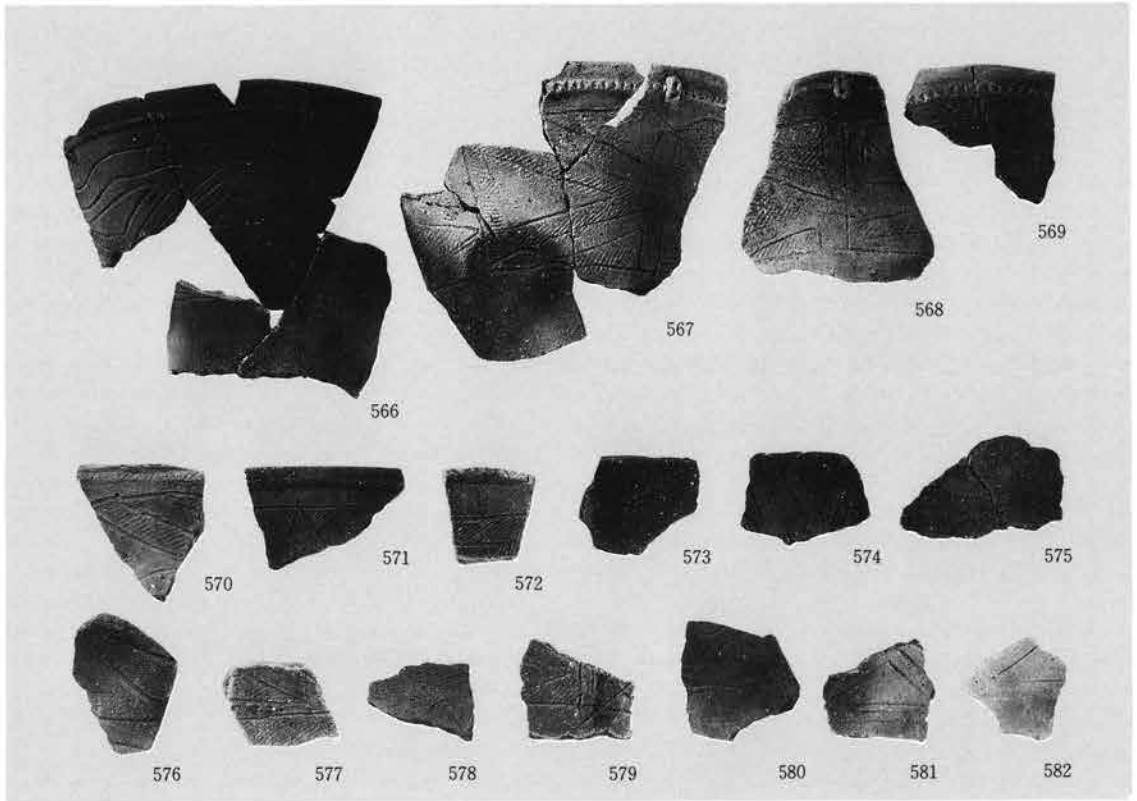
2 D区グリット出土土器 (2)



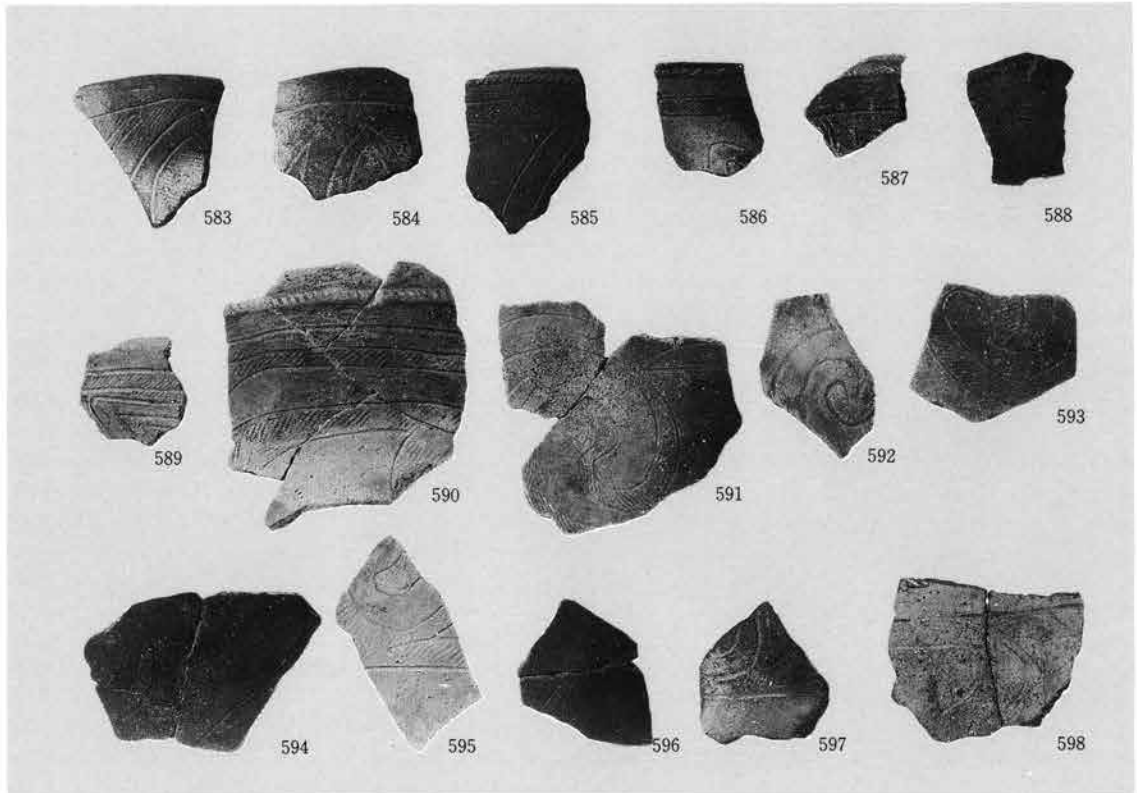
1 D区グリット出土土器 (3)



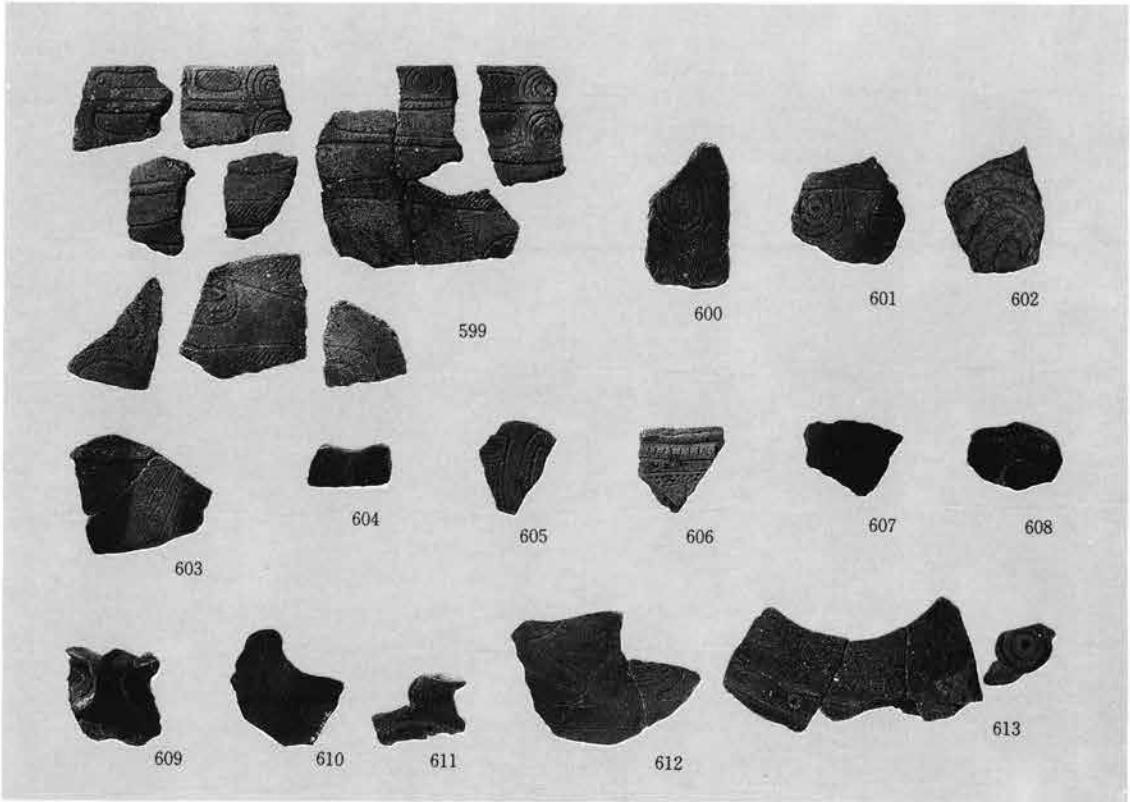
2 D区グリット出土土器 (4)



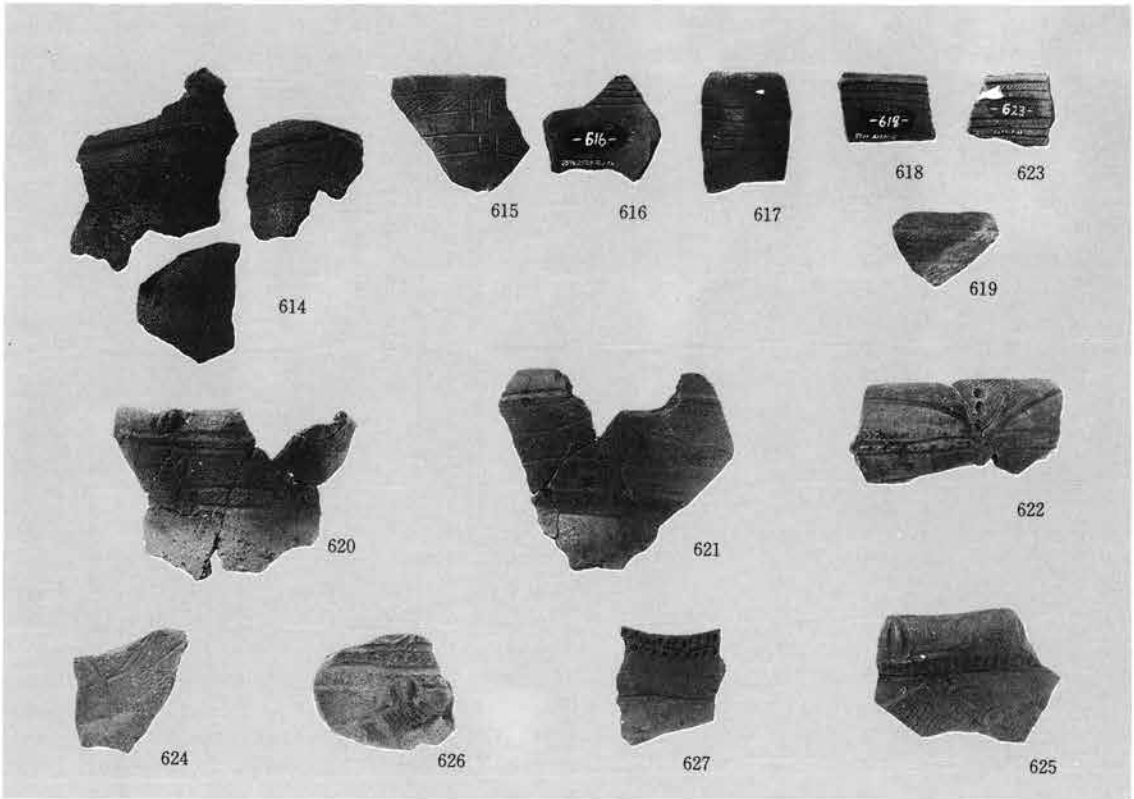
1 D区グリット出土土器 (5)



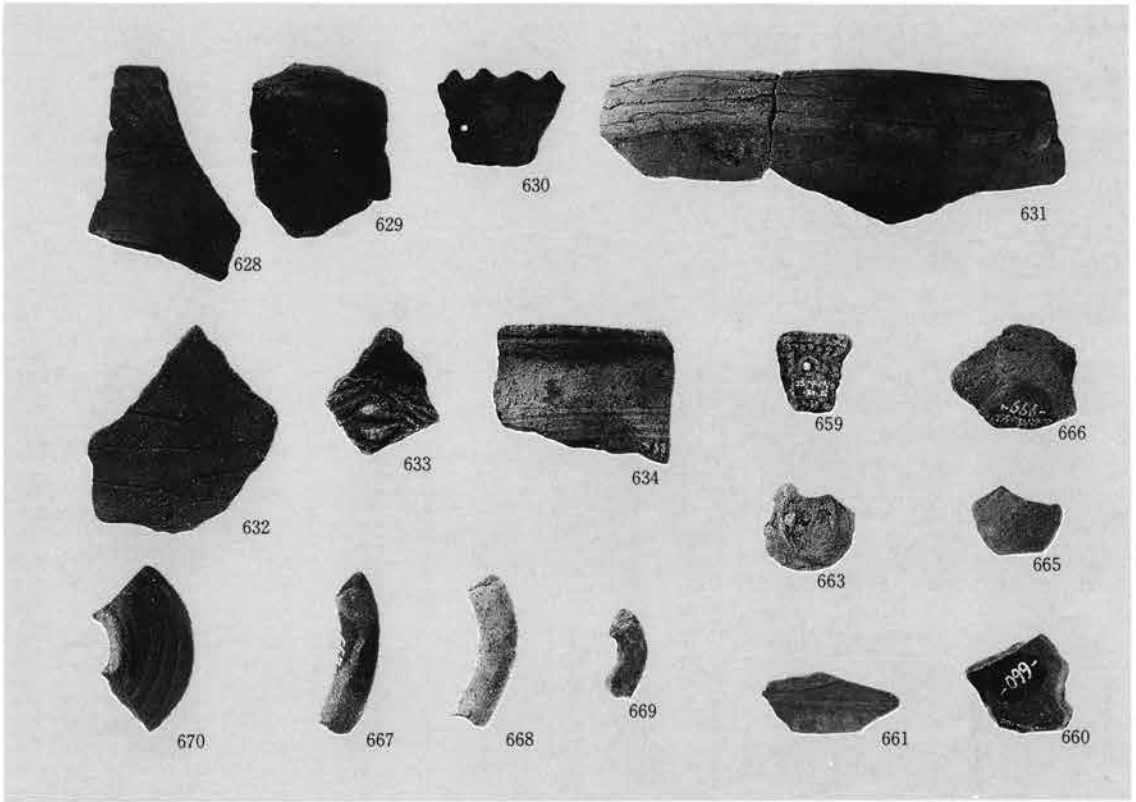
2 D区グリット出土土器 (6)



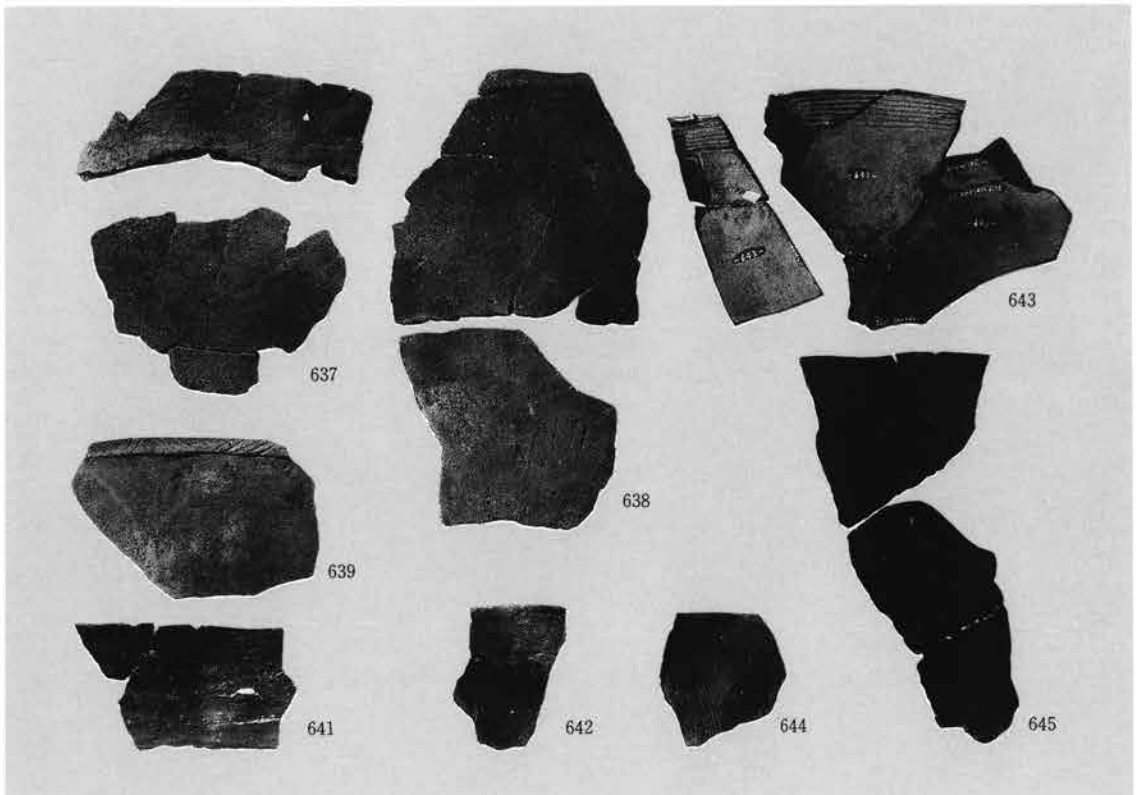
1 D区グリット出土土器 (7)



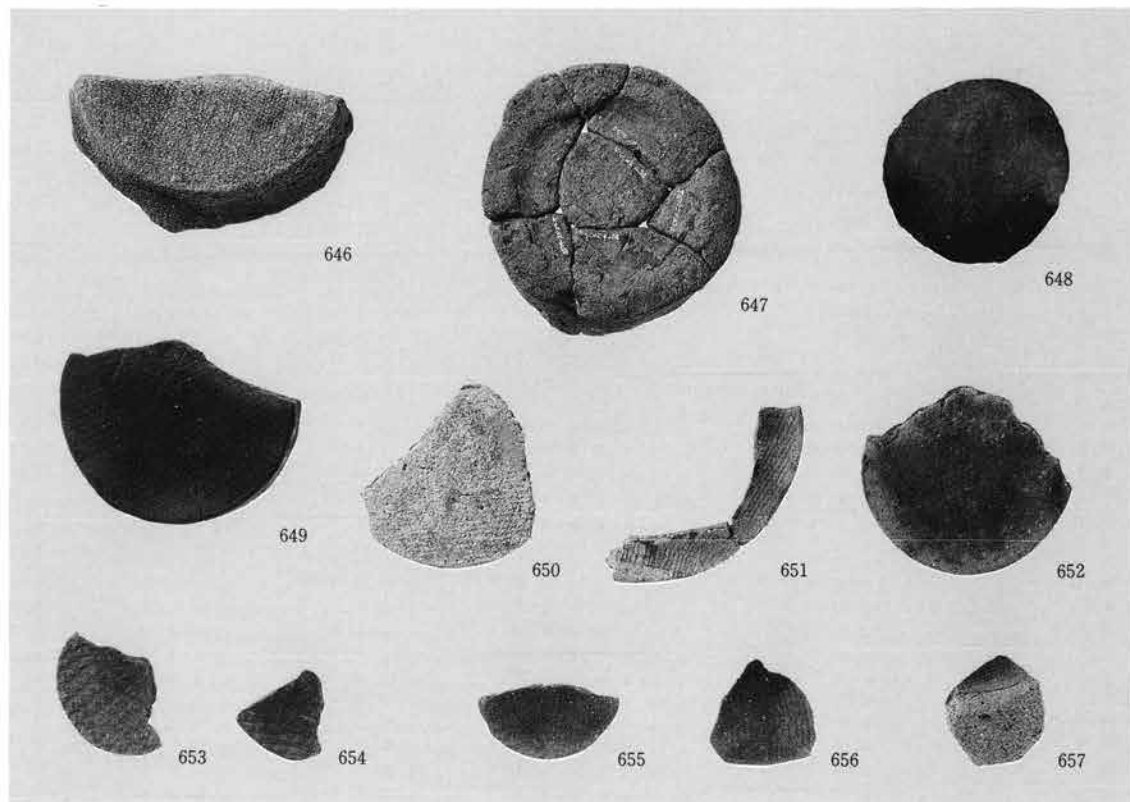
2 D区グリット出土土器 (8)



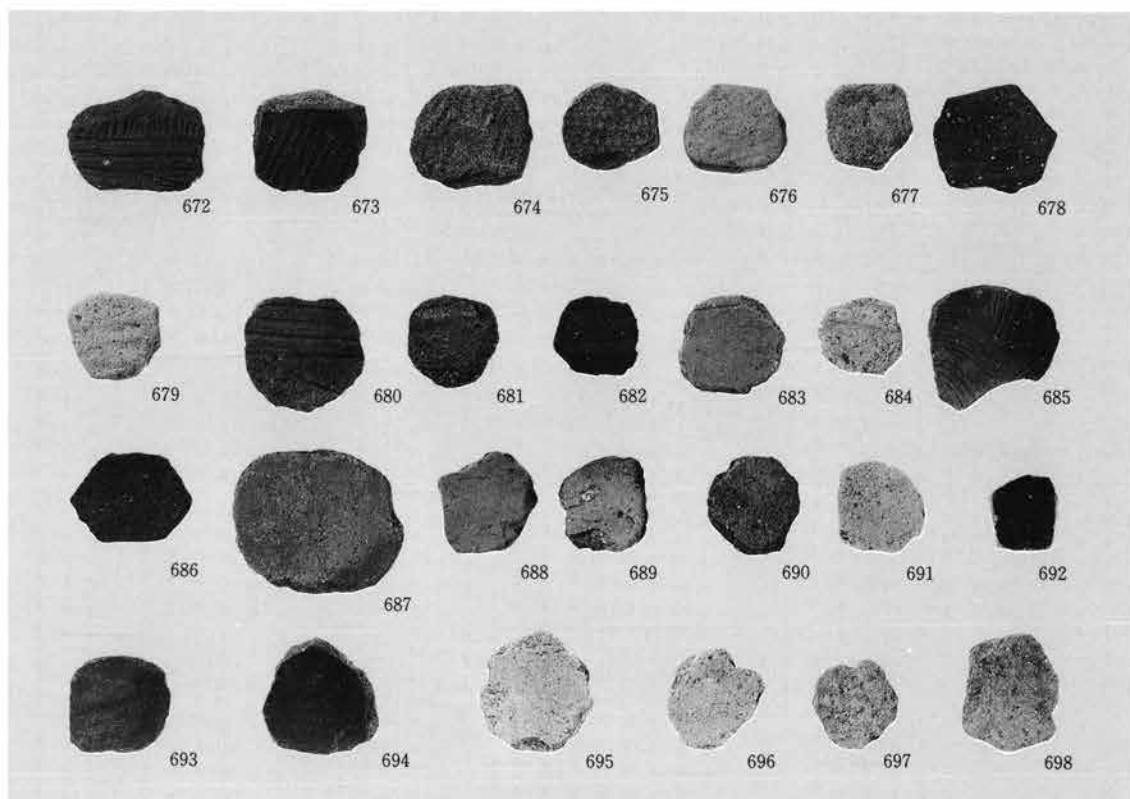
1. D区グリット出土土器 (9)



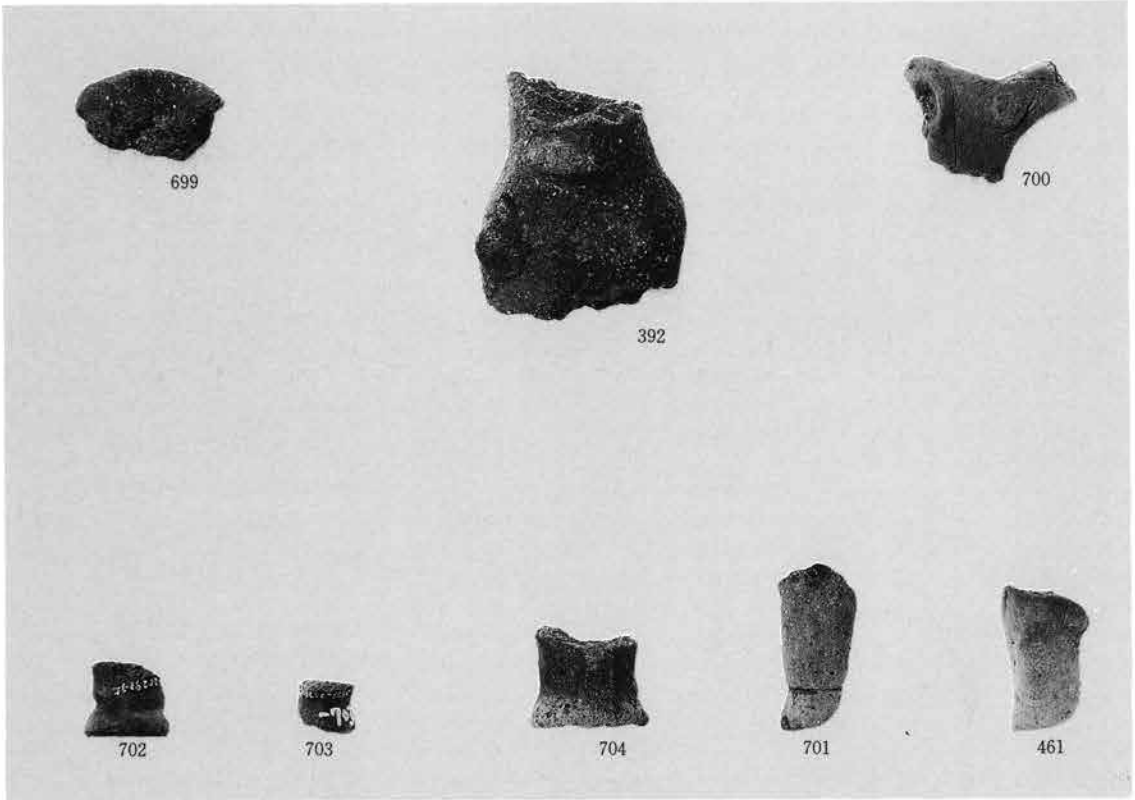
2. D区グリット出土土器 (10)



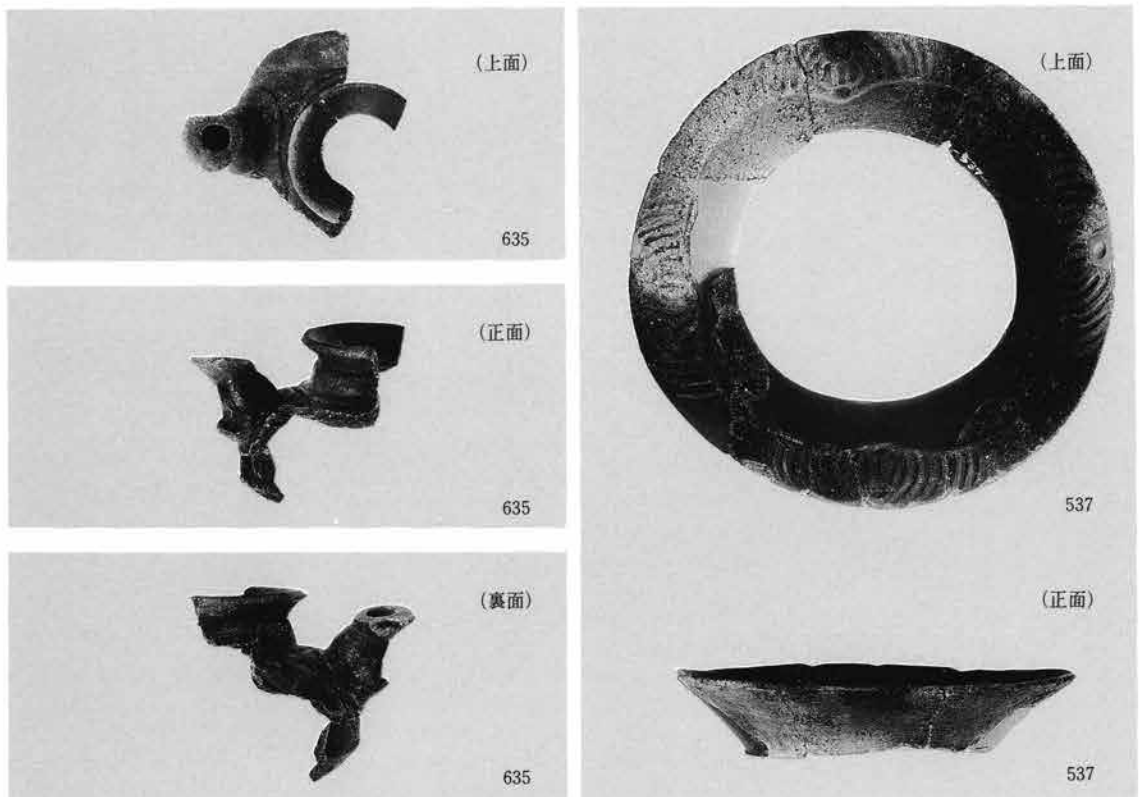
1 D区グリット出土土器 (II)



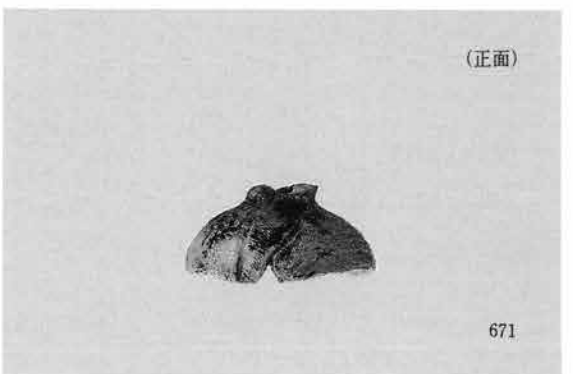
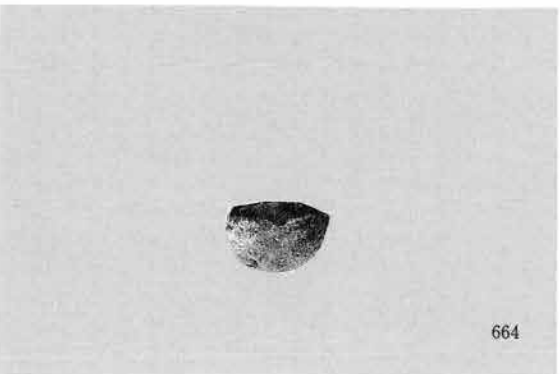
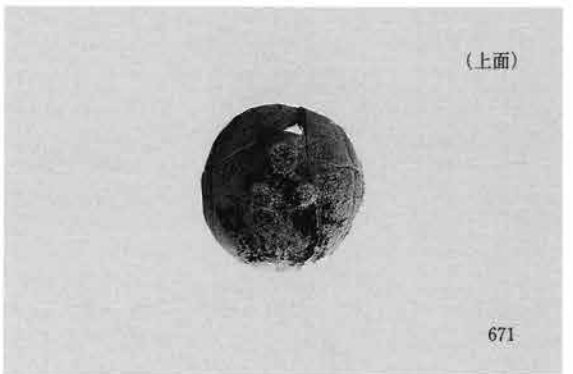
2 D区グリット出土土製品 (I)



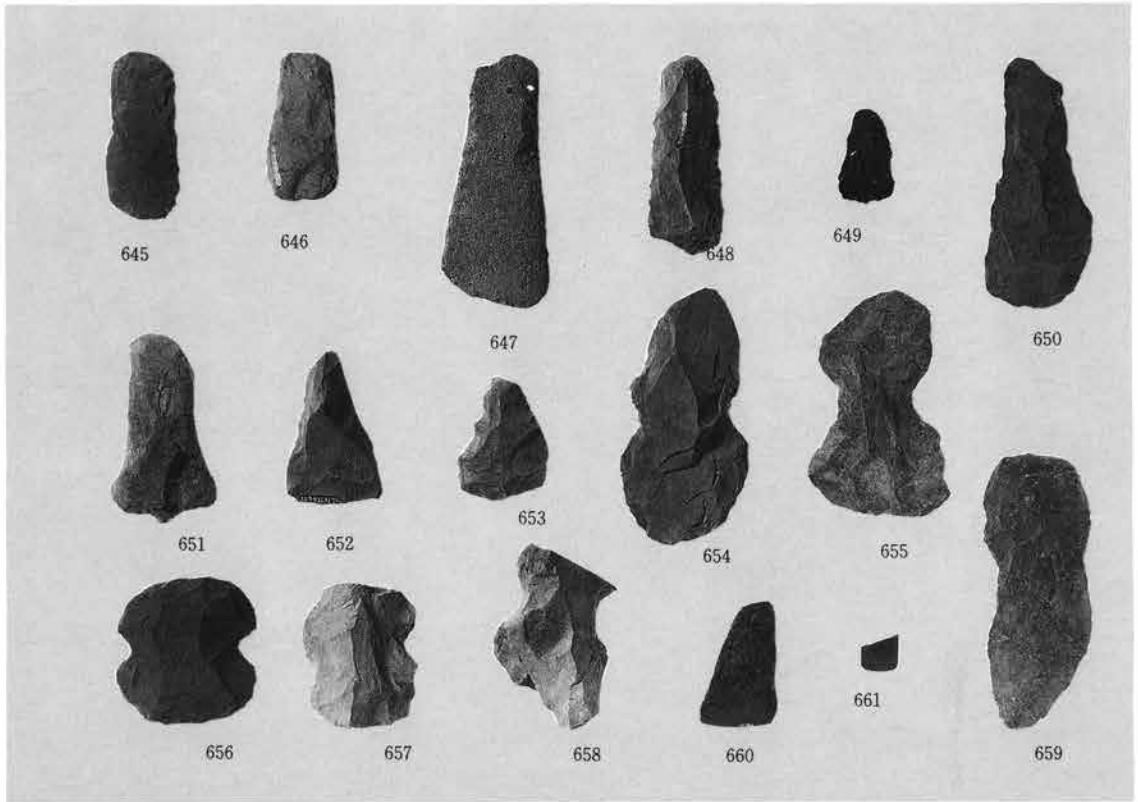
1 D区グリット出土土製品 (2)



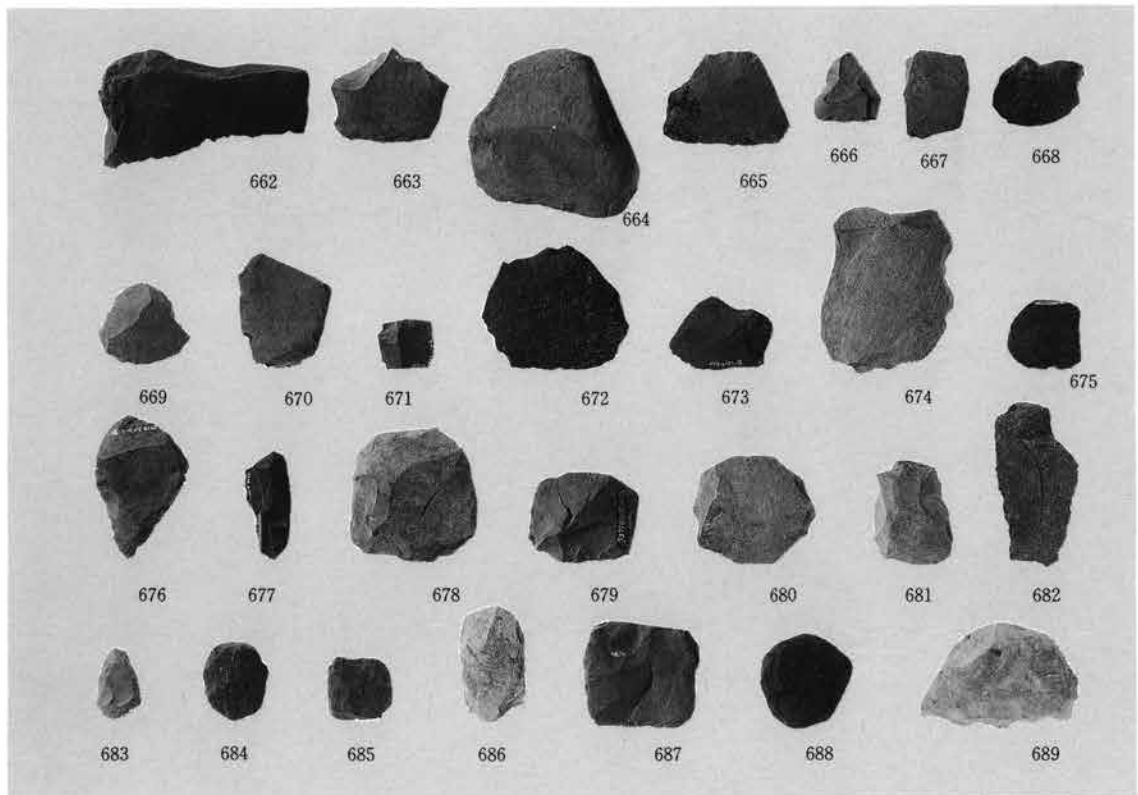
2 D区グリット出土土器 (12)



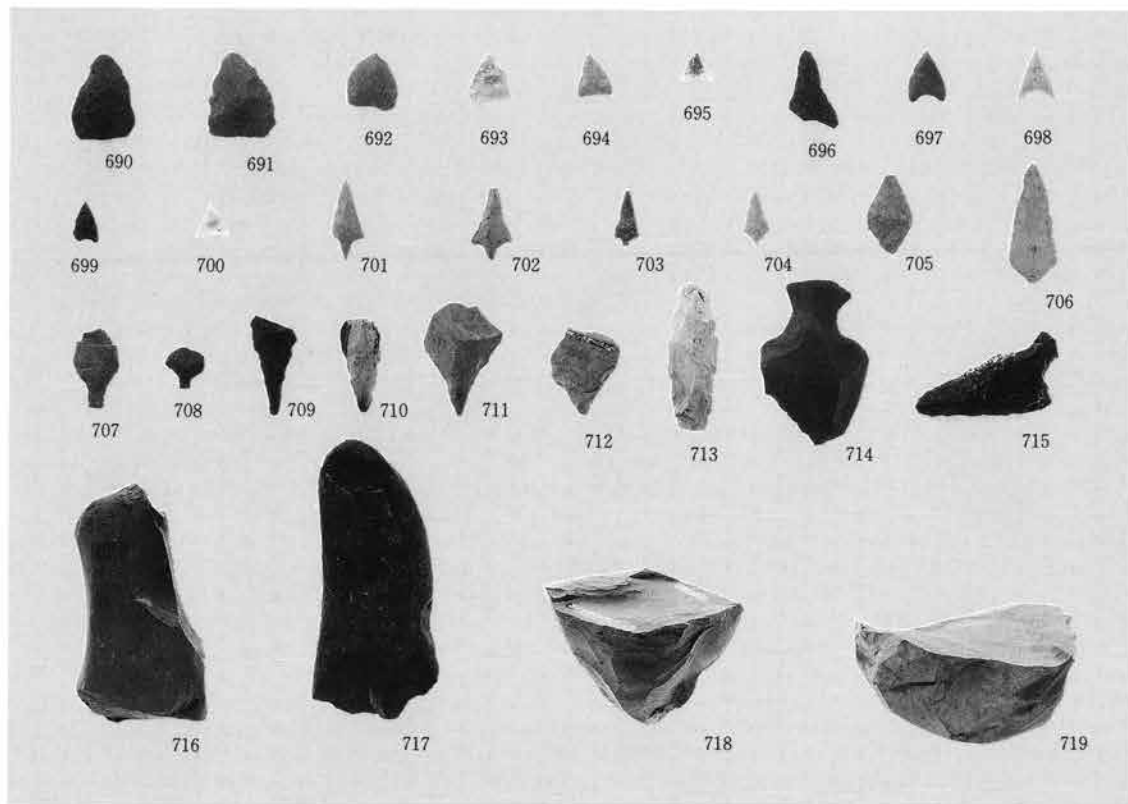
D区グリット出土土器 (13)



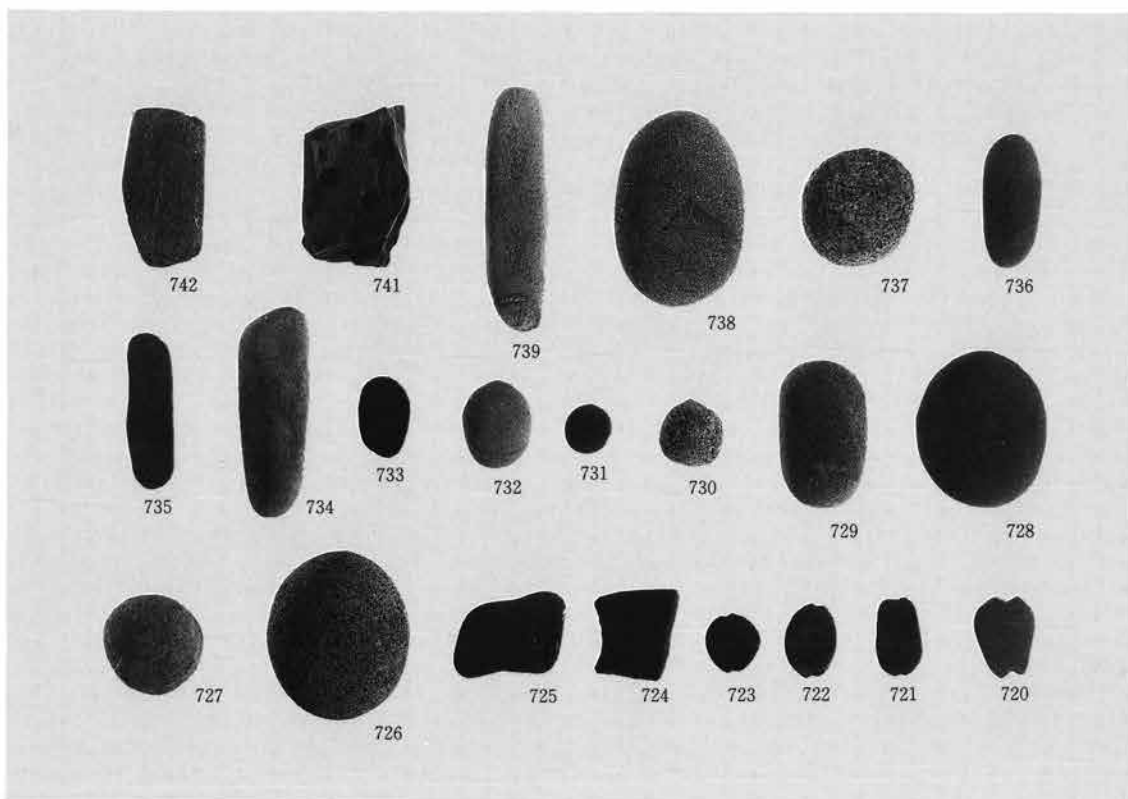
1 D区グリット出土石器 (1)



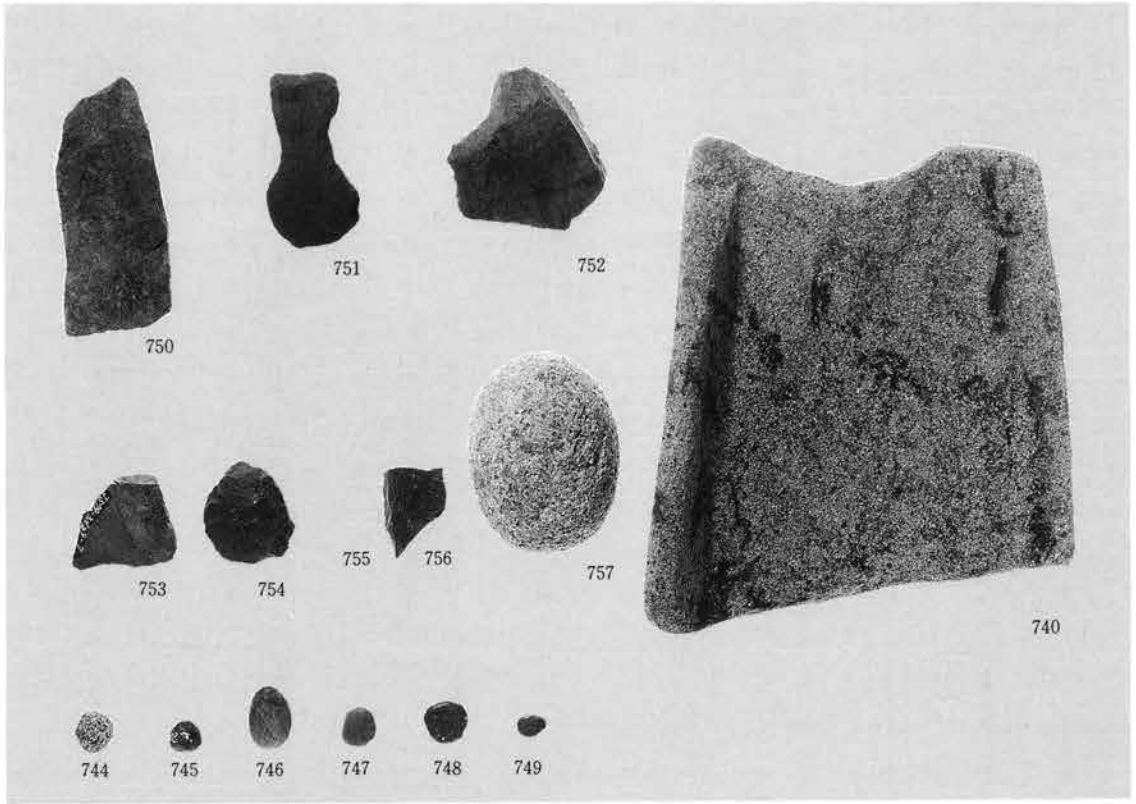
2 D区グリット出土石器 (2)



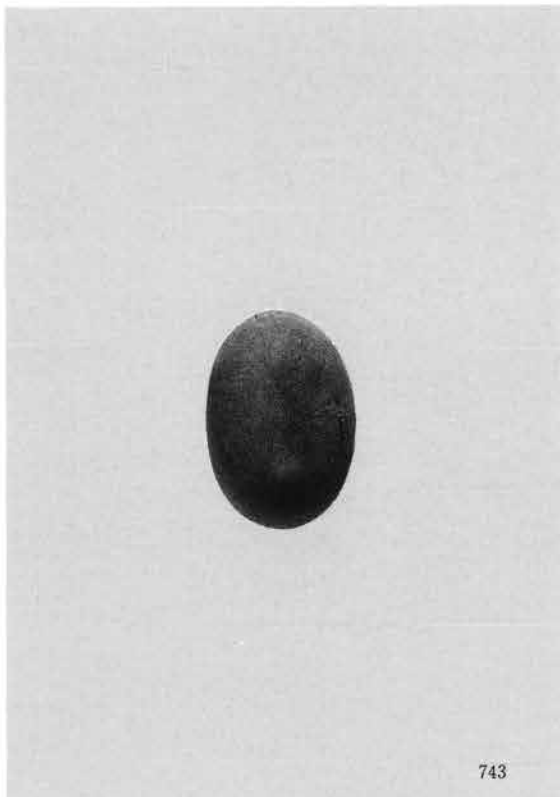
1 D区グリット出土石器 (3)



2 D区グリット出土石器 (4)



1 D区グリット出土石器 (5)



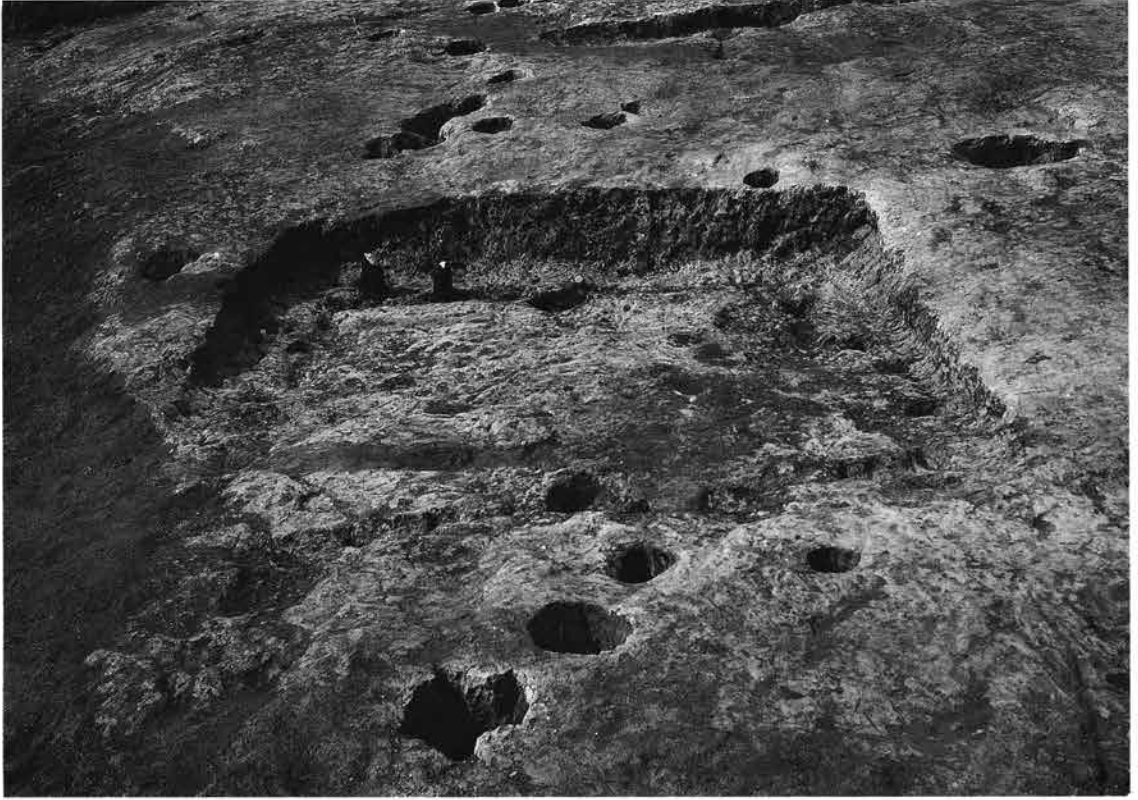
2 D区グリット出土石器 (6)



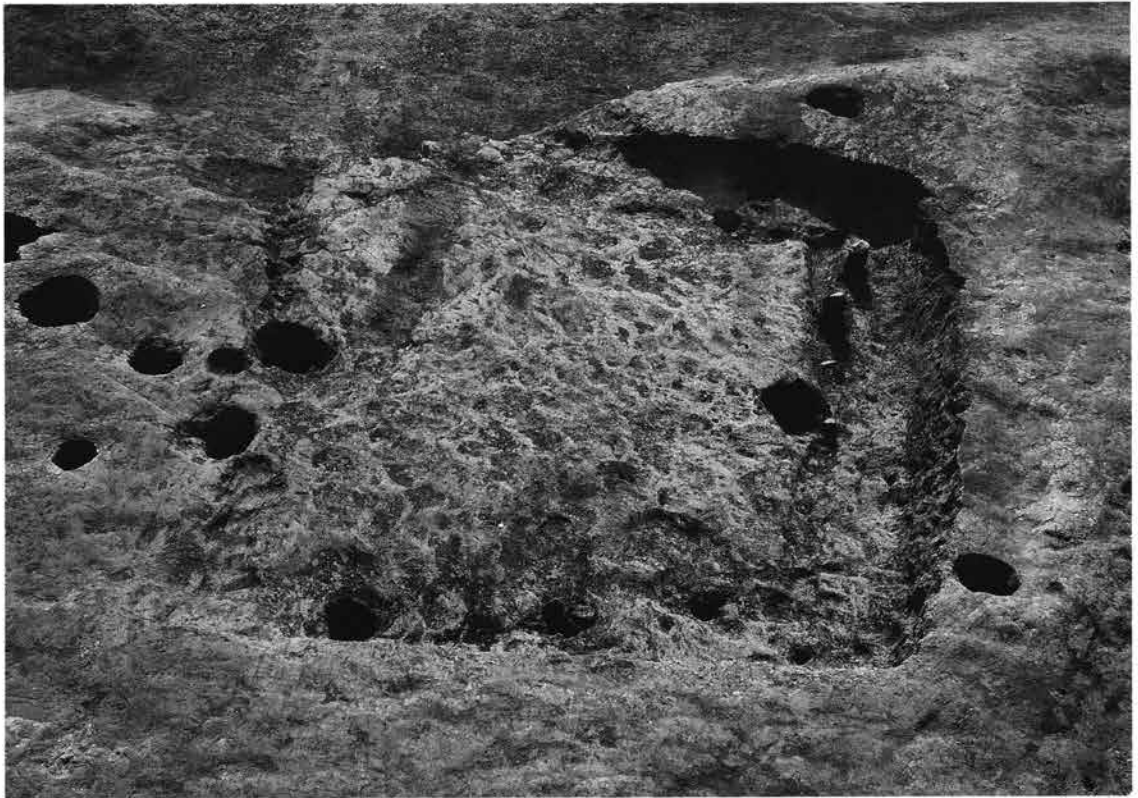
1 E区全景 (西より)



2 E区全景 (南東より)



1 E区1号住居跡(東より)



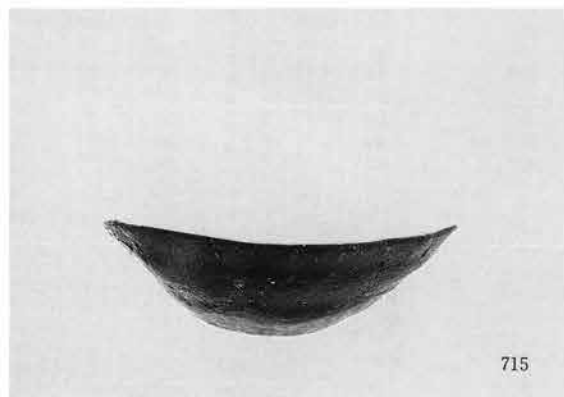
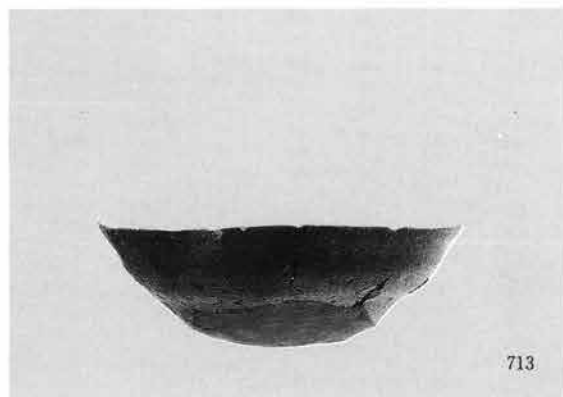
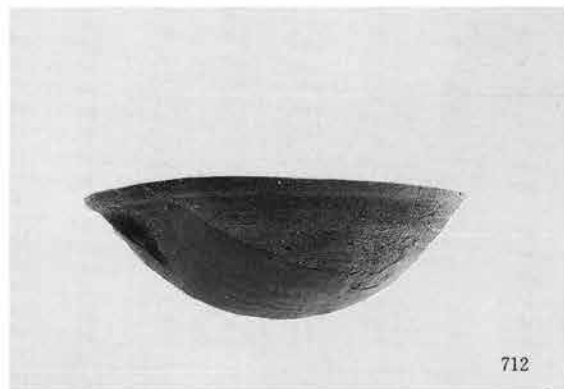
2 E区1号住居跡(北より)



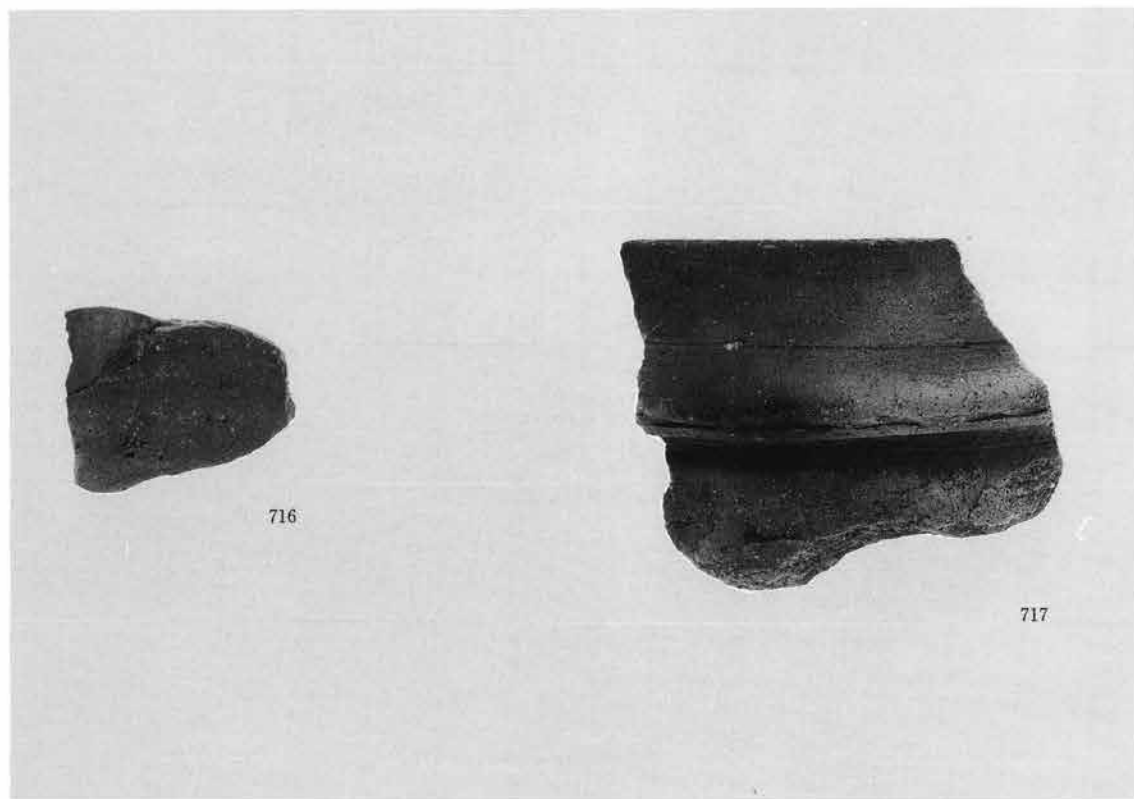
1 E区2号住居跡(北より)



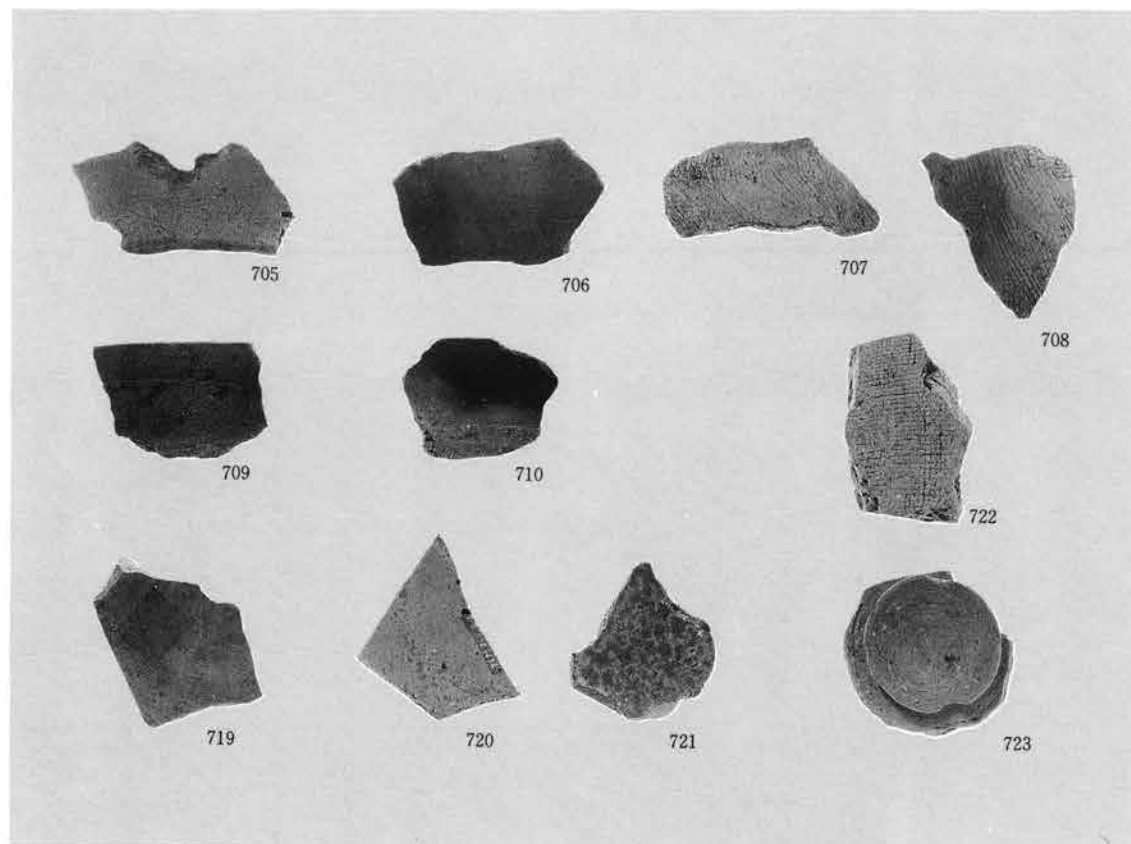
2 E区2号住居跡床面下落ち込み遺物出土状態(北より)



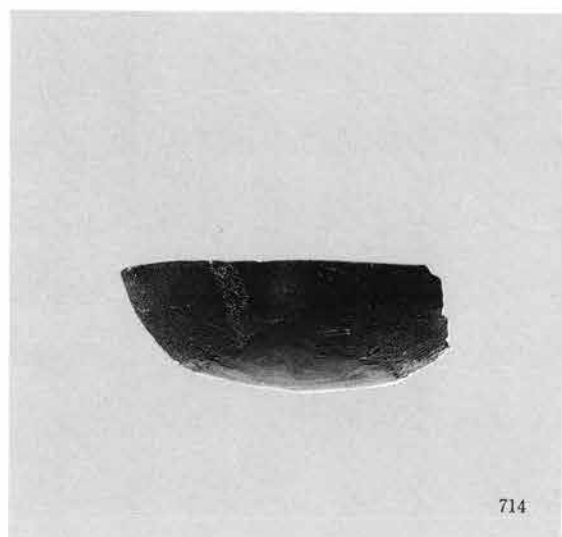
1 E区2号住居跡出土土器(1)



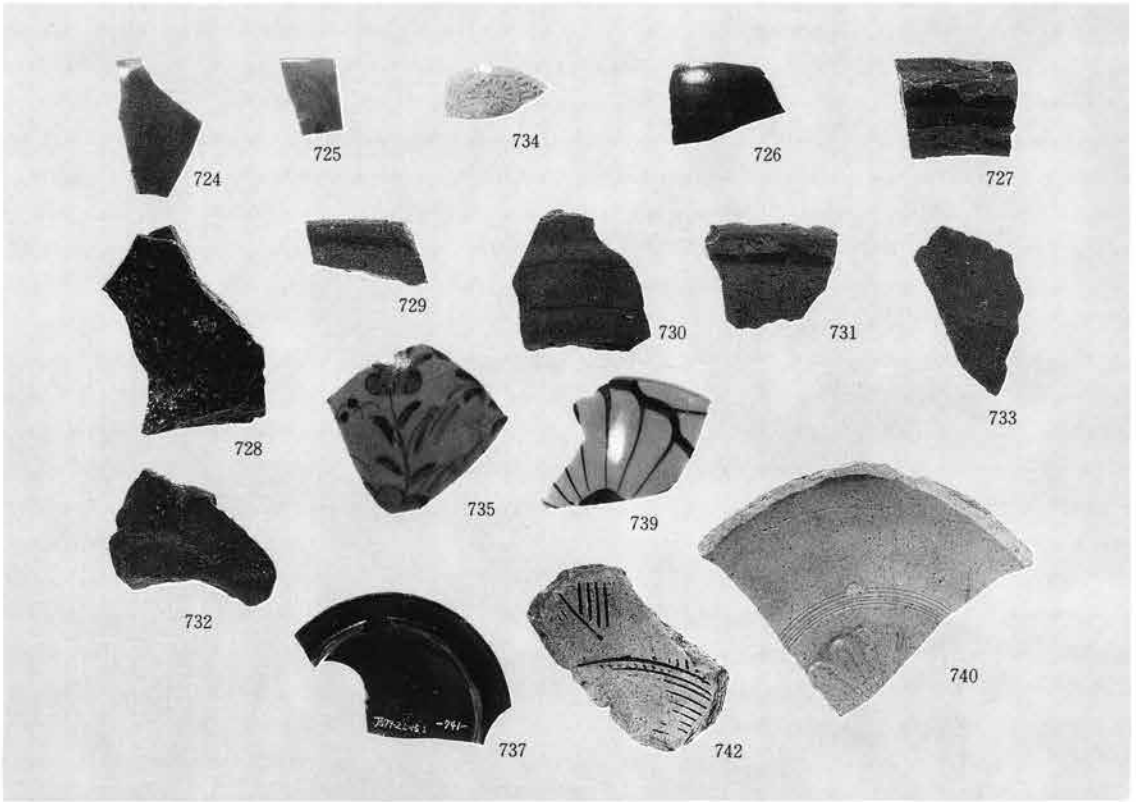
2 E区2号住居跡出土土器(2)



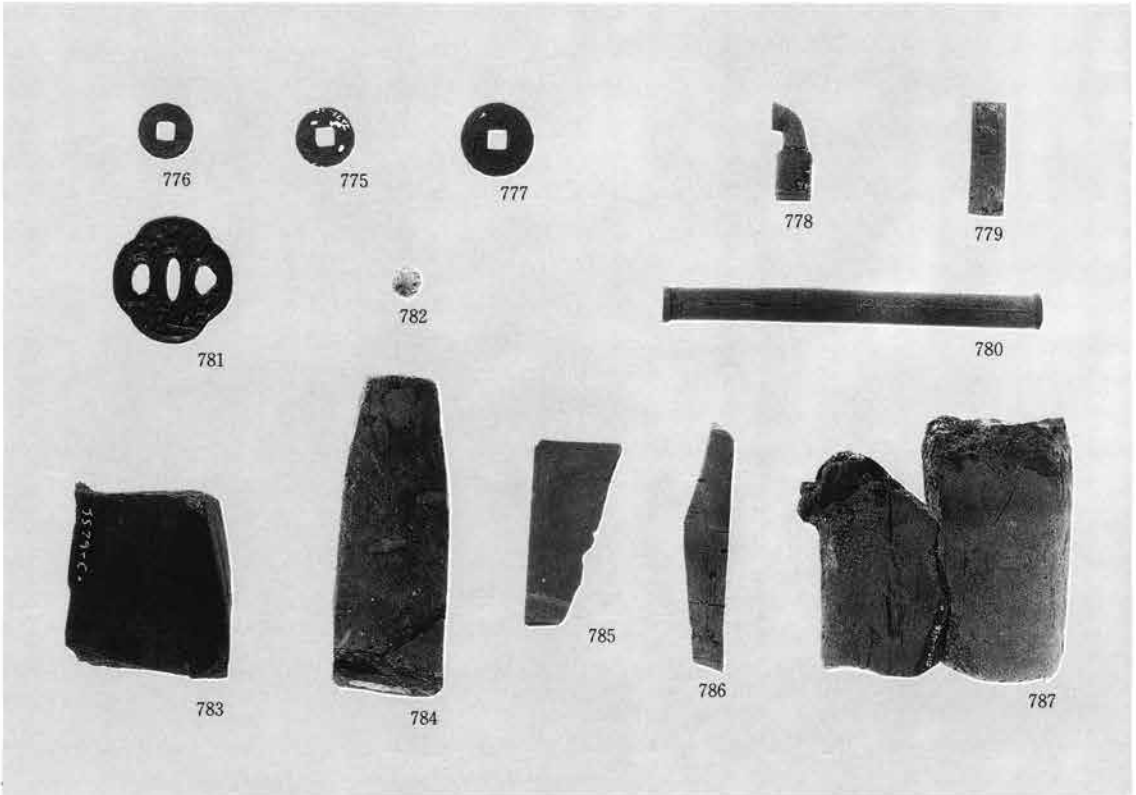
1 深沢遺跡グリット出土の弥生～平安時代の遺物 (1)



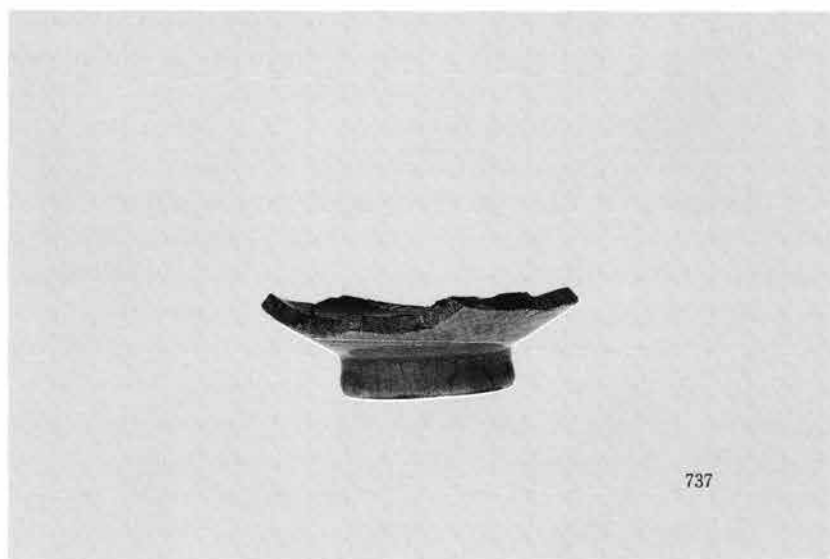
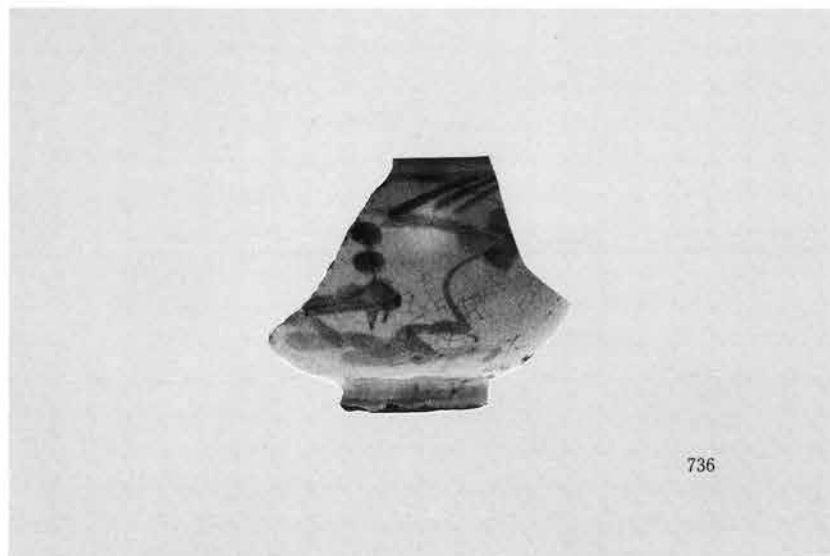
2 深沢遺跡グリット出土の弥生～平安時代の遺物 (2)



1 深沢遺跡グリット出土の陶磁器 (1)



2 深沢遺跡グリット出土の各種の遺物

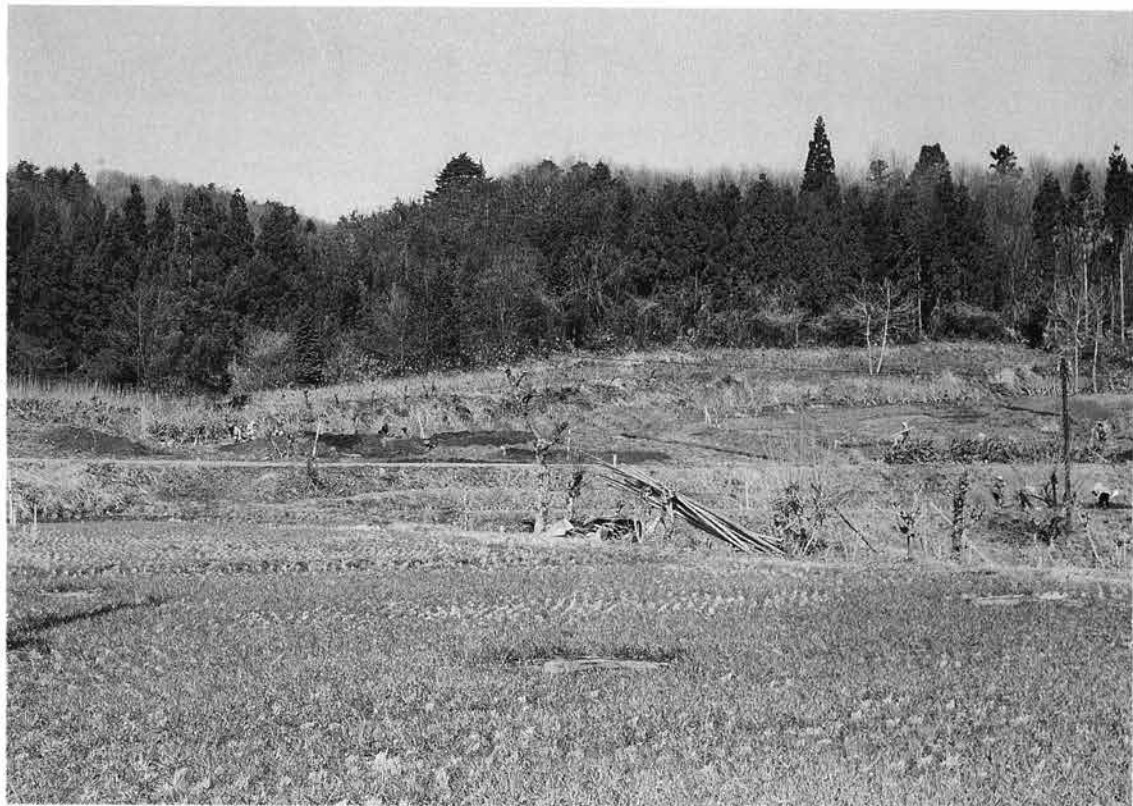


深沢遺跡グリット出土
の陶磁器 (2)

前田原遺跡



前田原遺跡の地形（航空写真、約1/2,000）



1 予備調査時の前田原遺跡（東より）



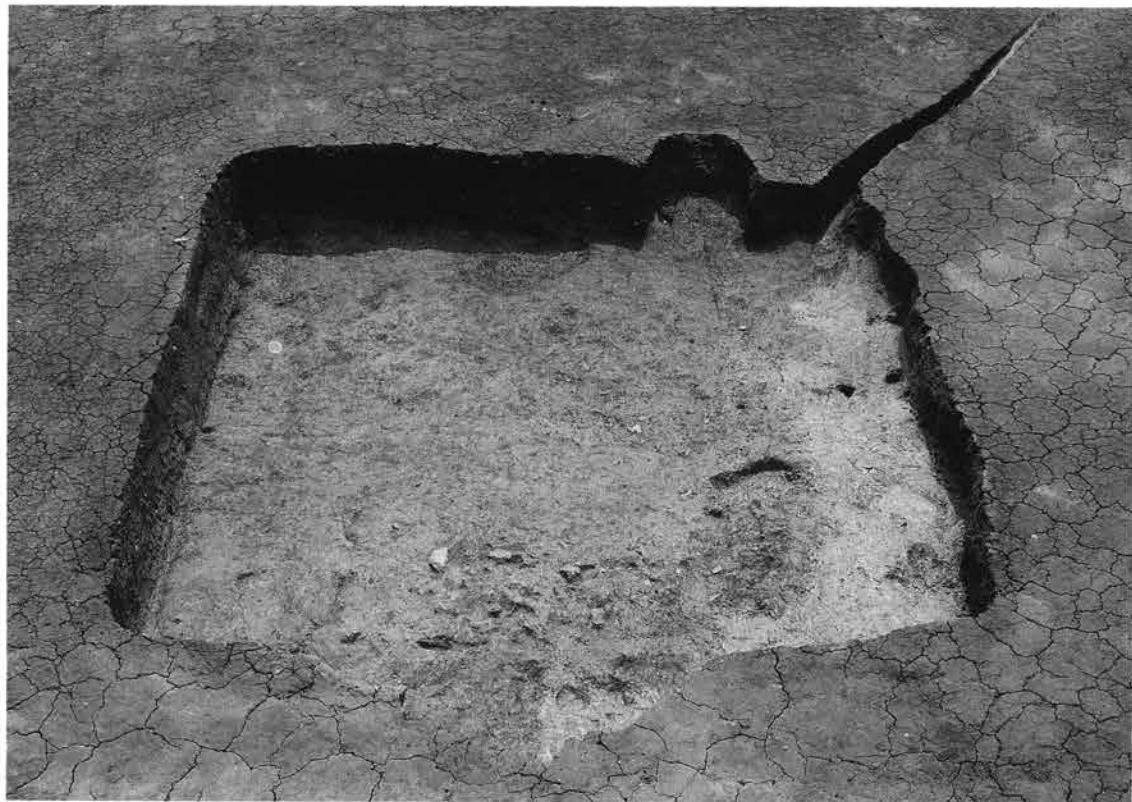
2 前田原遺跡全景（北より）



1 予備調査風景（北西より）



2 発掘作業風景（南東より）



1 1号住居跡（西より）



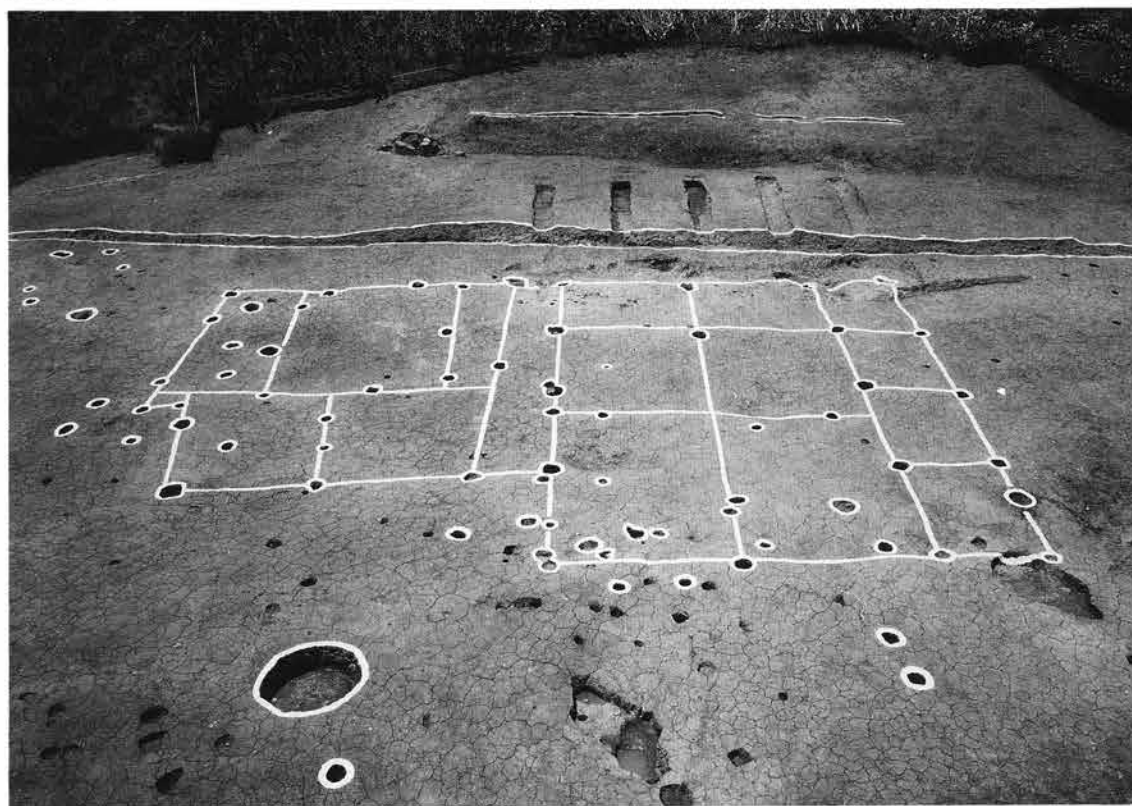
2 1号住居跡土層断面（西より）



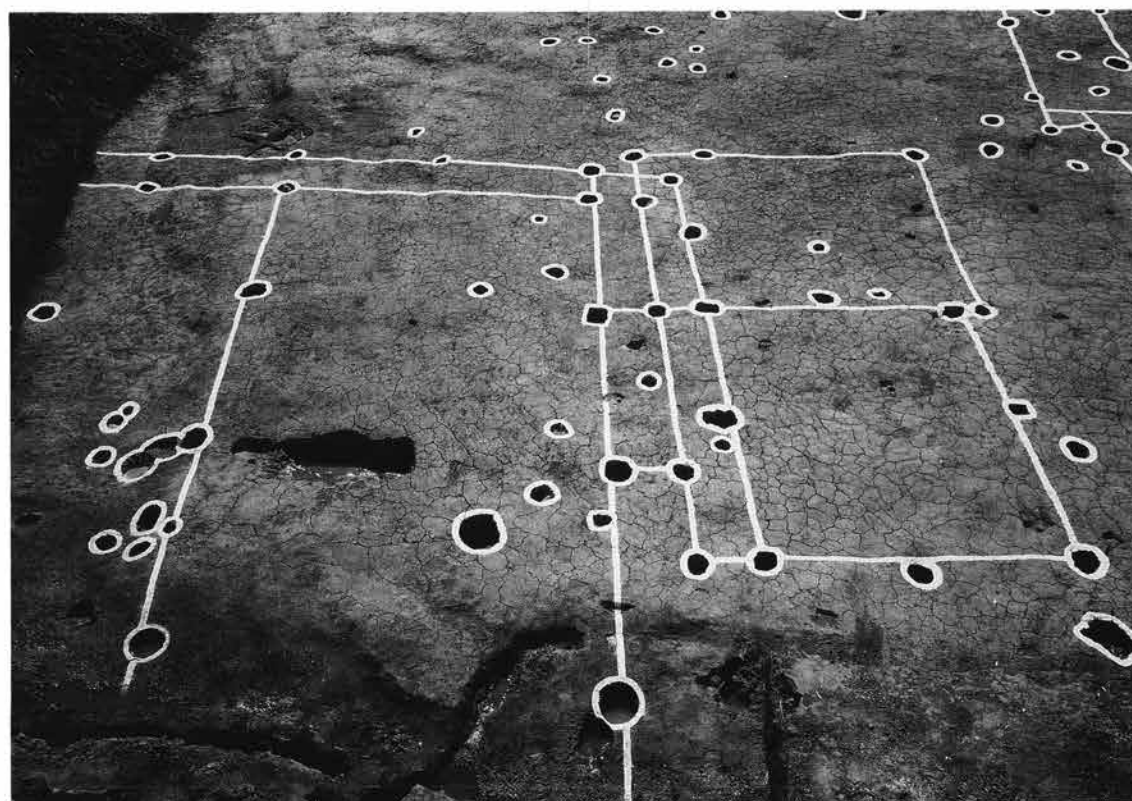
1 1号住居跡遺物出土状態（西より）



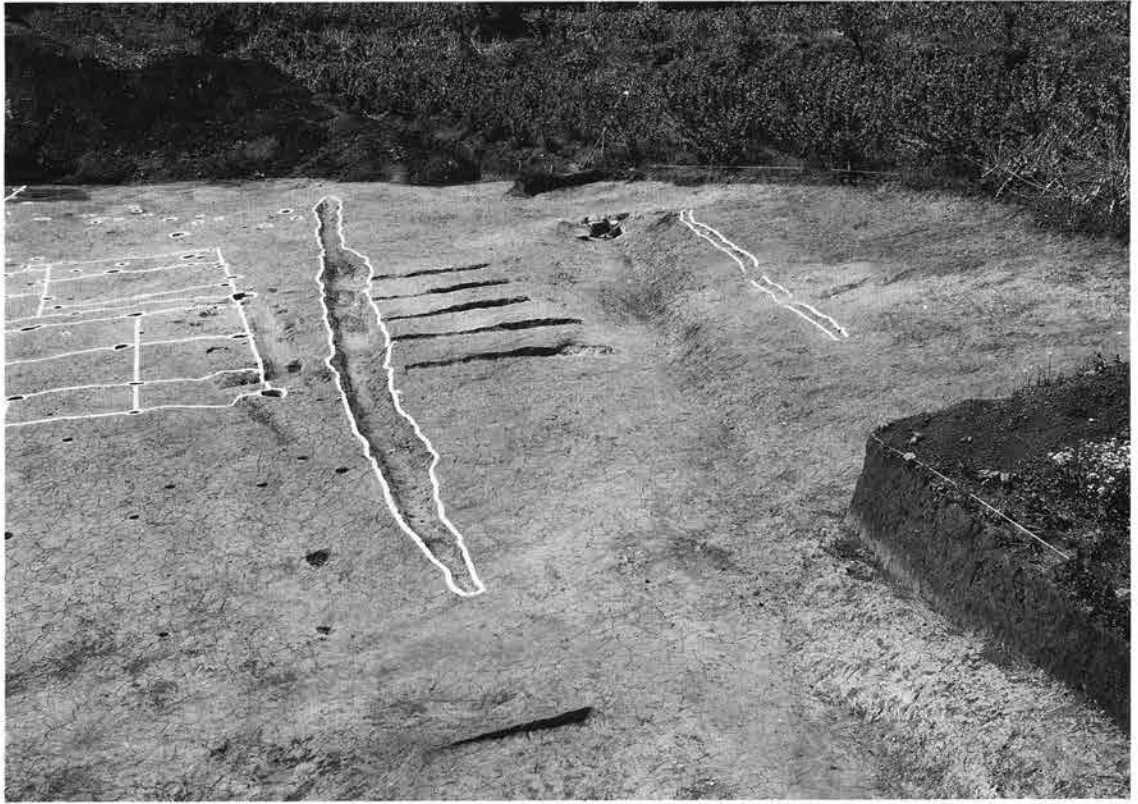
2 1号住居跡のカマドと排水溝（西より）



1 1・2号掘立柱建物（東より）



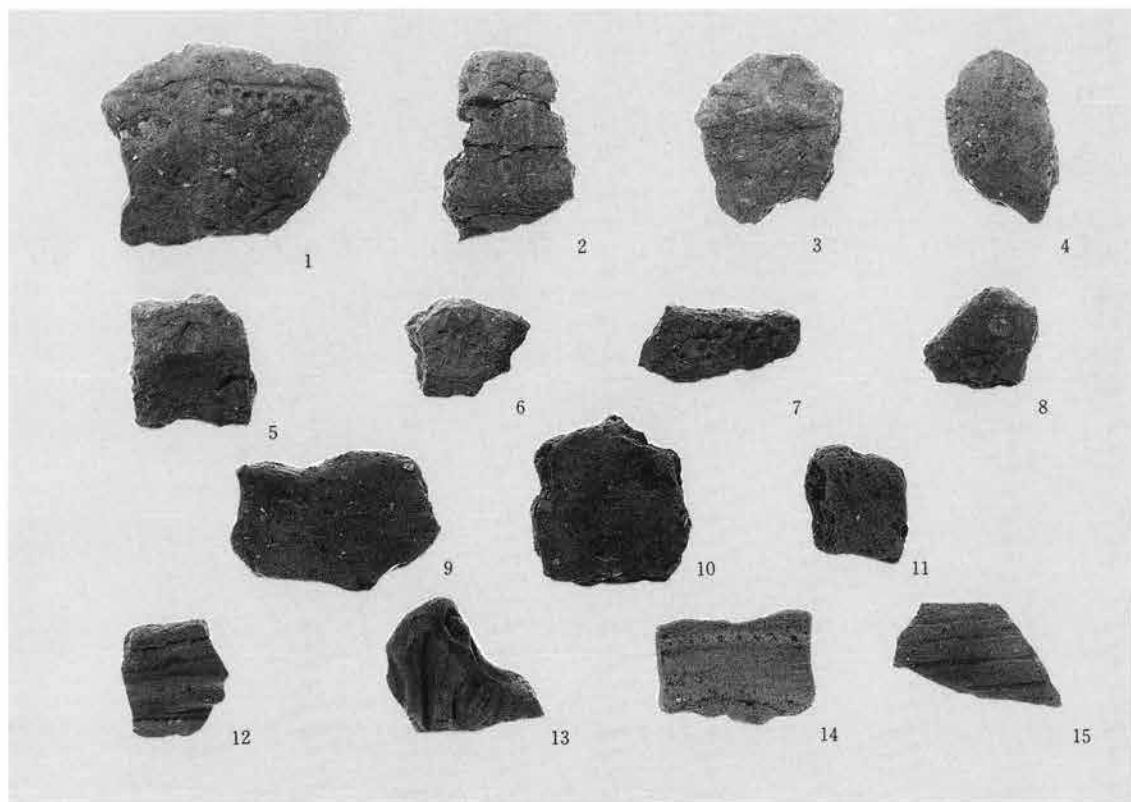
2 3・4号掘立柱建物（東より）



1 1(右)・2(左)号溝(北より)



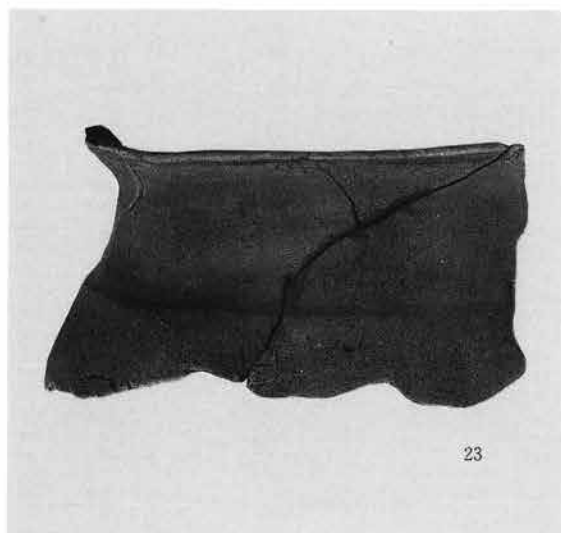
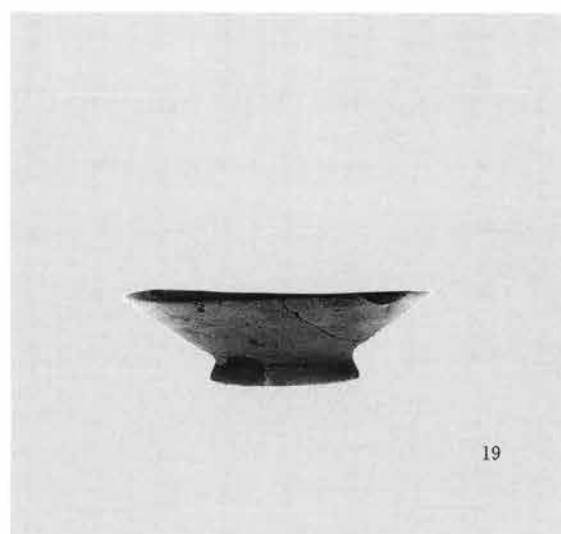
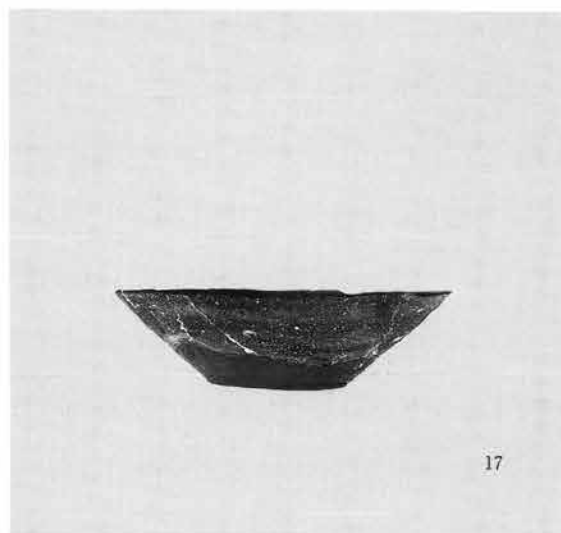
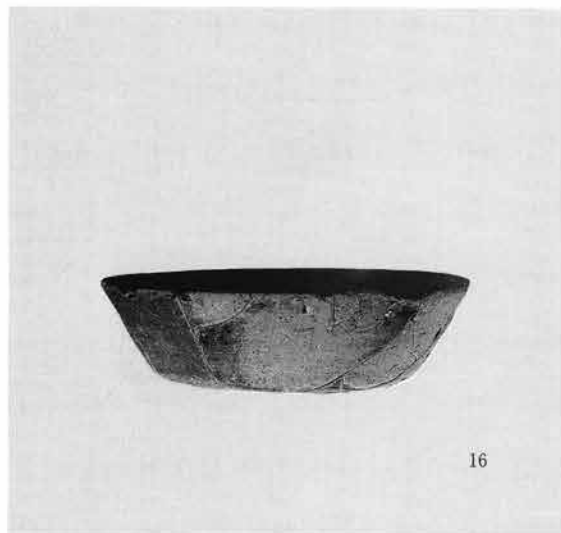
2 1号土坑(東より)



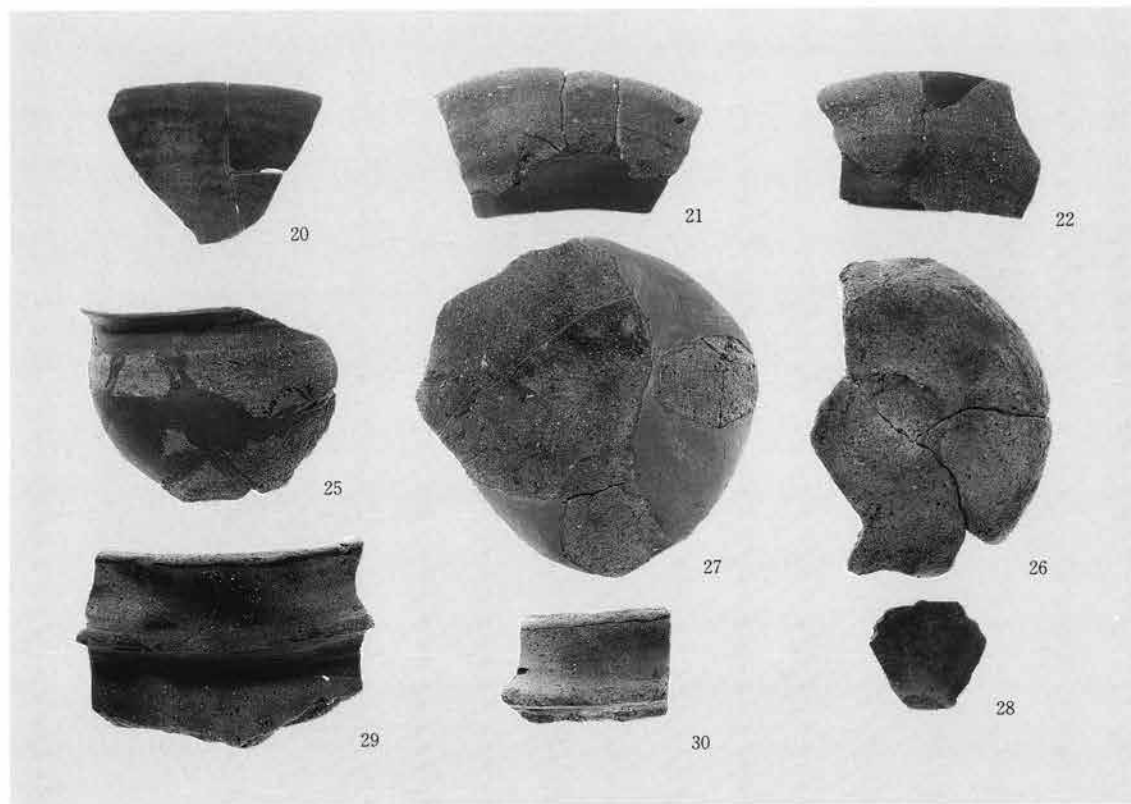
1 グリット出土の縄文土器



2 グリット出土の石器



1号住居跡出土土器(1)



1 1号住居跡出土土器(2)



2 調査中の前田原遺跡

深沢遺跡 前田原遺跡

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第10集—

印刷 昭和63年3月25日

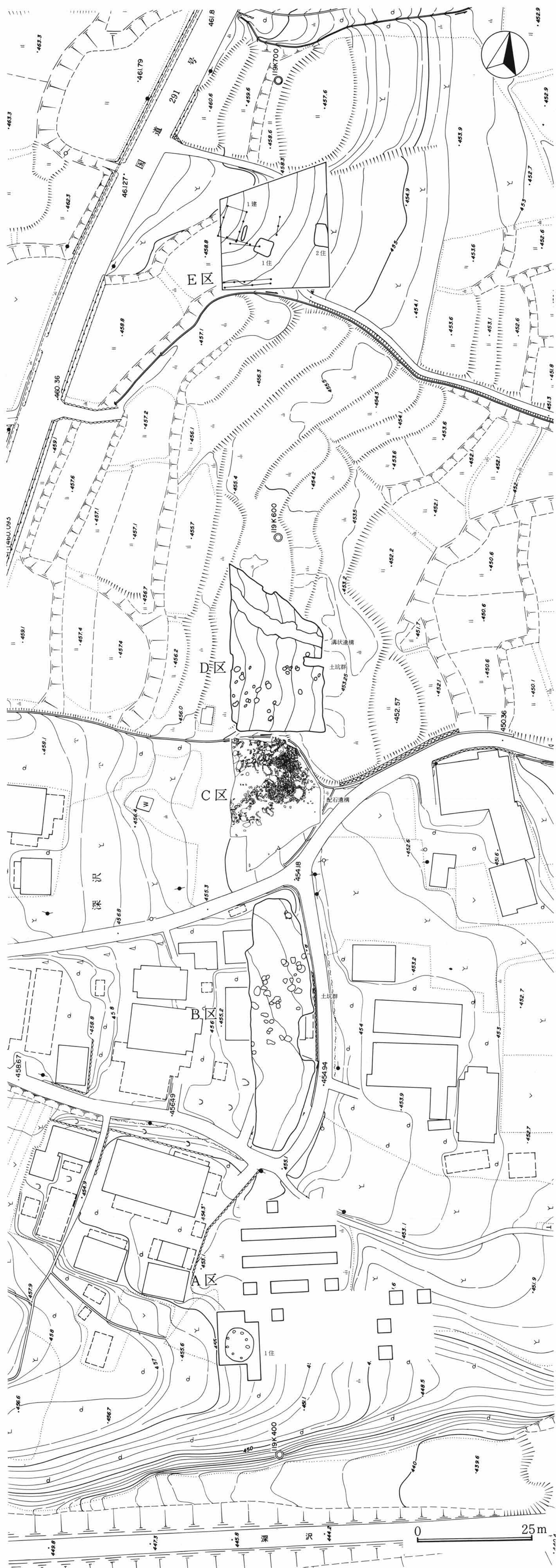
発行 昭和63年3月30日

編集・発行

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

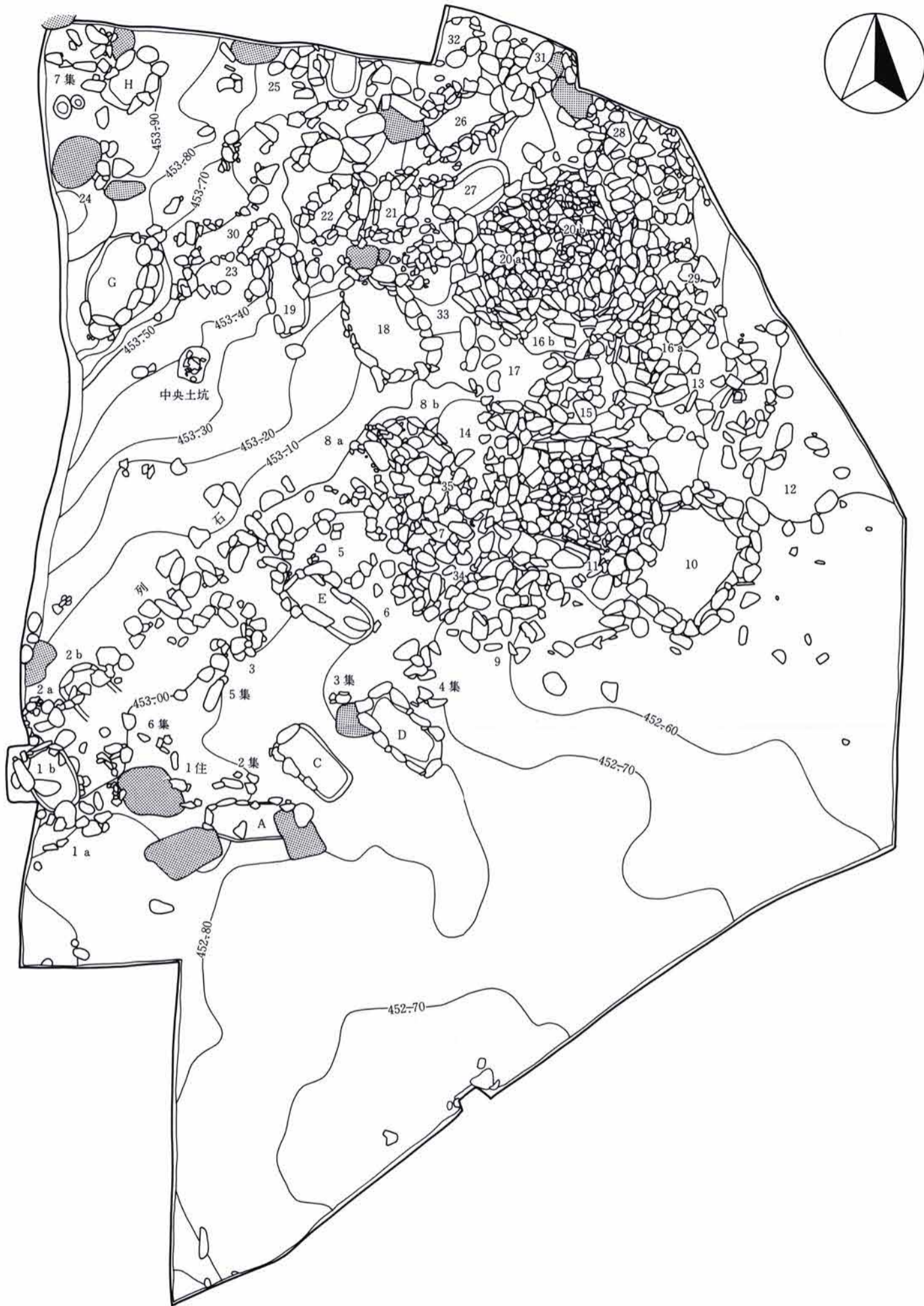
印刷

株式会社 前橋印刷所



付図1 深沢遺跡全体図 (1/500)

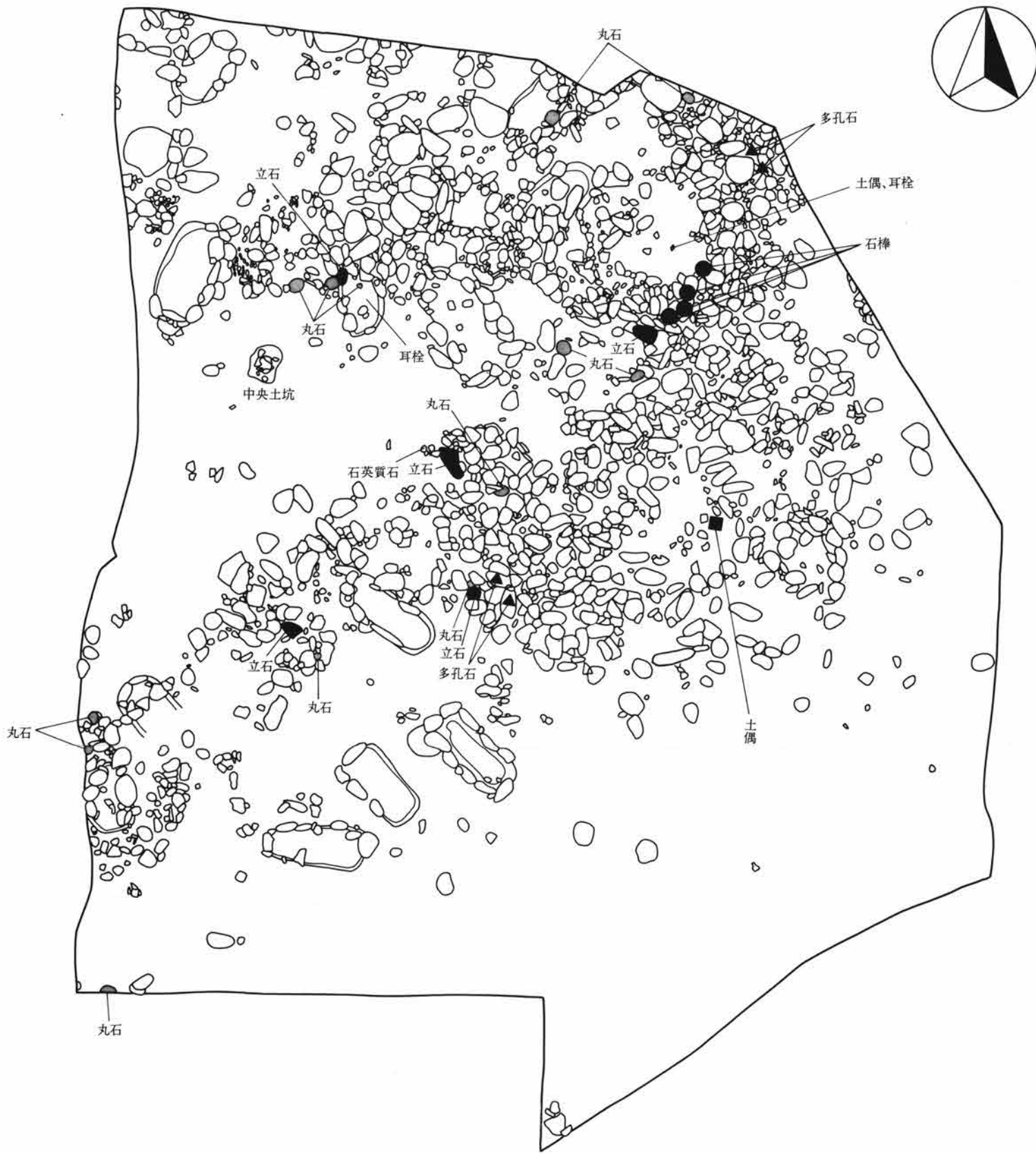
01-310	群
14	埋
(7)	文



01-310	群埋文
14	
(7)	

0 1 : 100 5m

付図3 深沢遺跡C区配石遺構全体図 (1/100)



01-310	群埋文
14	
(9)	

0 1:100 5m

付図4 深沢遺跡C区配石遺構特殊遺物分布図 (1/100)